

加賀藩史料

第拾編

自寛政元年
至寛政拾貳年



加賀藩史料第十編

寛政元年

正月朔日。前田治脩病むを以て登營賀正を廢す。

〔政隣記〕

正月朔日快天長閑也。就御風氣御登城御斷、御太刀前田土佐守殿を以献上。從御家中年頭御禮追而可被爲請旨、昨晩被仰出有之。御例之通於御居間書院、鶴之庖丁御料理頭長谷川宇左衞門勤之。津田修理出座、御客衆へ如例年二汁五菜一つ燒鯛等之御料理出。竹之間御出入之者曁坊主衆等にも同斷例年之通。

二日、快天御客衆へ一汁五菜等、御出入人如昨日。但御客衆に昨日者塗木具、今日より塗膳。

三日快天、御客衆等御料理如昨日。

御出入之者は尤昨日も塗膳也。

正月七日。徳川家齊、前田治脩に放鷹によりて獲たる雁を贈る。

〔政隣記〕

正月七日上使御使番向坂藤十郎殿を以、御拳之雁御拜領。御使番久能吉太夫・勝尾吉左衞門、御玄關敷付へ出向受取之、御大書院に飾之。上使御出之節、御門外へ聞番三人、御門下ゟ者年寄中・御家老中、御白洲へ頭分八人、鋪付へ御取持長谷川太郎兵衞殿等御出。御前鏡板ゟ御出迎、御大書院へ御誘引、御熨斗木地三方出之。上意御拜聽、御鳥頂戴之。御取持衆御相伴に而御餠菓子・御吸物・御酒、御重肴は御前御持參、御茶受後御菓子等段々出之。御給仕御表小將。畢而御請相濟、御退出。其節御送等最前之通。但階上列居御前後共御用人・御番頭・御横目・御大小將、御刀取中村織人勤之。八時前相濟、追付爲御禮御登城、御老中ゟも可被遊御勤處、少々御風氣御再感に付、御名代佐竹壹岐守殿ゟ御賴之事。

一、右御拳之鳥は、七ヶ年目に御拜領之御例に候得共、今般者公儀御代替に付早く御拜領也。

正月七日。江戸の町人萬屋理兵衞、前田治脩の登城途上に訴狀を呈せんとす。

〔政隣記〕

正月七日御登城、御供自分。但南御門前ゟ、市ヶ谷八幡前萬屋理兵衞与申町人訴訟狀持參有之。御先供御歩山田伴右衞門押留、御歩横目ゟ引渡、且御通行之節、御駕籠に向訴訟之趣聲高に再往申達候得共、伴右衞門押留有之に付、御駕籠近くは寄不申候。

右理兵衞は、最前御邸內へ入、詰人諸色用承候者之由也。且御步橫目より、御作事方御門へ廻り可申候、ヶ樣之趣夫々取唹候役人有之段申含に付、則御作事御門へ訴狀持參、御取揚有之。土佐守殿等御席取捌に付、其譯委曲不知。

正月十一日。前田治脩諸士の年頭拜賀を受く。

〔政隣記〕

正月十一日四時過於御居間書院、前田土佐守・津田修理長袴着用、獨禮被爲請、畢而同四之間において頭分幷嫡子、御緣頰に土佐守次男前田內匠助座付、一統御禮被爲請。奏者御小將頭多田逸角。一先被爲入、重而御出、最前御用に而相殘候頭分幷御表小將・御大小將・御馬廻等より與力迄、四之間より蔦之間へ懸列座、一統御禮被爲請。奏者御步頭河地才記。一先被爲入、重而御出、御用に而相殘候御表小將・御大小將等一統御禮被爲請、奏者大組頭久世平助。

但、後藤・本阿彌・御手役者等も、蔦之間に着座御禮申上。此並者例年御通懸り之御禮に候得共、當春者御通り懸り之御序無御座候に付如斯に候事。

右相濟、聞番組頭並村田甚右衞門せがれ政之助初而御目見被爲請。

正月十四日。前田治脩、水戶藩中屋敷の火災に出馬す。

〔政隣記〕

正月十四日曉七時前、根津裏門通出火与南御櫓近板打、一番火消別所三平、二番馬淵嘉右衛門、御人數召連押出候處、御隣水戸様御中邸より出火、六十間計之御長屋四十間計一面に燒立、火勢盛に候處、鳶之者等相働、二十間計以御人數防留。右に付一・四之手御備建、御舘へも各罷出、七半時頃鎭火、鎭鐘打各退散。且右に付爲御巡見、奥之口より御出馬、谷小屋邊に暫御馬被爲建、火御覽。夫より御居宅へ暫被爲入、追付御歸殿。但御供之御大小將岸忠兵衛、インコ坂に而轉び、肩に御馬障り、且轉び候節面部摺疼、今日御番見合之事。

正月十五日。大聖寺侯前田利考幼年なるを以て名代を登營せしめ家督相續を謝す。

〔政隣記〕

正月十五日、勇之助様今日以御名代御家督之御禮就被仰上候、此方様にも御家老野口兵部を以御太刀・金馬代被上之。

正月十八日。大聖寺侯前田利考本鄕邸を訪ふ。

〔政隣記〕

正月十八日九時頃、勇之助樣初而御出、御定席へ河地才記中の口より御誘引仕、御茶等出之、御小將頭并御近習頭松原庄右衞門罷出、御口上承之。就御幼年、御口上書御渡之。達御聽、庄右衞門御居間書院へ御誘引仕、御對顏、御熨斗三方出之。追付御定席へ御復座、土佐守・修理被召出御意有之、無程御退出。重而御定席へ御立戾、御禮之御口上御近習頭へ被仰述、無程御歸。

但、最前御出之節并御退出之節も、土佐守・修理御定席前之御廊下長園爐裏之間境、御杉戶之內に御出向等仕、就御幼少御刀持御大小將者、中之口階上迄罷出、將又携候人々迄熨斗目・上下着用。

一郡は能美

正月。能美郡に鹿、群を爲して山を出づ。

[燕臺風光]

一、寛政元年の春正月、一夜に雪三・四尺積りけるに、此ときに山々より鹿を追出し、一郡群りて是を狩る。竿を持て突留め、或は鼠とりの類にて突き伏せ、或は湖水へ追入、海に追詰め、鹿は四角八方より追立られ、途を失ひて散亂し、軒に隱れ家に入てたゝき殺さるゝも多し。日暮方に至ては鹿もつかれ果て、兒女も手取にす。他國・大聖寺御領と云合さずして皆鹿なり。其數幾千といふ數を知らず。往來小道へも鹿死骸にて踏所なし。是より後暫くは畑をあらさず、稻を喰ふと云ふ沙汰を久しく不聞。去ながら姿娩しく聲の哀れを愛する風客は、殺さる

この改元は正月廿五日に行はれしなり

天明八年九月十日の條參照

ゝ時なきさけぶを聞かば哀情しきりならん。

二月三日。江戸に於いて改元の事を告げらる。

〔政隣記〕

二月三日寛政与改元に付惣登城、御前少々就御風氣に、御登城御斷。但於金澤、今月十五日本多安房守殿・長大隅守殿より御觸有之。

二月六日。徳川家齊、前田治脩に鶴を贈る。

〔政隣記〕

二月六日、上使御使番朝比奈彌太郎殿を以御鷹之鶴御拜領。御作法前々之通。今日も就御風氣御名代前田信濃守殿へ御頼、上意御拜聽。御請等・御老中御勤も御同人御勤之事。

二月十日。去年沖辰右衞門を毆打死に至らしめし石川郡粟ヶ崎の村民を吟味し禁牢等に處す。

〔政隣記〕

二月十日、去年九月十日沖辰右衞門を粟ヶ崎村方之者共手込にいたし致打擲候風聞有之候條、辰右衞門家來幷村方之者共召出遂吟味候樣、御用番玄蕃助殿より改方御用野村次郎兵衞へ就

被仰渡候　今日夫々召出吟味之處、村方之者共辰右衛門を致打擲候趣及白狀候に付、禁牢等申付、四月七日公事場へ引渡候處、追々令牢死、頭振善七一人寛政二年九月二十七日於居在所斬罪之上梟首被仰付。

附　記

付札、多田逸角に

高崎平左衛門 御小將組 御右筆也

右去年九月十日沖辰右衛門儀、石川郡粟ヶ崎村に村方之者共与及口論打擲に合候由風聞有之候に付、辰右衛門頭江守平馬等より一類共手前樣子相尋候處、且而相手取候儀等無之旨申聞候に付、右平左衛門等連名之紙面取立置候段、平馬先達而申聞候。然處右村方之者共、幷辰右衛門家來伊藤彌太夫等手前、野村次郎兵衛に申渡、於改方逐吟味候處、相手取候者共有之躰に相聞え候。依之其節之樣子、平左衛門手前被相尋、口上書取立可指出候事。

去年九月十日沖辰右衛門儀、於石川郡粟ヶ崎村に村方之者共与及口論打擲に合候由風聞有之候に付、沖辰右衛門頭江守平馬等より、一類共手前樣子相尋候處、且而相手取候儀等無之旨申達候に付、私共連名之紙面取立置候段、平馬先達而申上候。然處右村方之者共、幷辰右衛門家來伊藤彌太夫等手前、野村次郎兵衛等へ被仰渡、於改方被逐御吟味候處、相手取候者共

有之躰に相聞候旨。依而其節之樣子私手前相尋、口上書御取立御指出可被成旨、御用番前田大炊殿被仰渡候段被仰談、奉得其意候。去年九月十五日質兒安井左太夫方より以紙面、沖辰右衛門儀御禮申上候處、一類共人少に候間、私儀茂罷越可申段申越候に付、罷越樣子承り候處、辰右衛門儀九月十日栗ヶ崎へ殺生に罷越、於彼地同夜煩出、翌十一日歸宅仕候。其節醫師段々遂僉議候處、石浦仙良療養に而、藥劑者補中益氣湯に人參三分加用申候。ころび候躰に而、面体等に少々すりむき所も有之候に付、尙更今井元昌申談候處、元昌申聞候者、外療之療治者無之旨申聞候。其外醫師中へ段々呼寄遂詮議候處、何れ茂卒中風之症与申聞候。右辰右衛門煩出之樣子幷療養之趣、小森貞右衛門・安井左太夫申聞、相頭武田喜左衛門御禮受に被罷越候內病死仕候。御禮相濟候已後、右元昌・仙良被呼出、病氣之樣子委曲被相尋候。翌十六日江守平馬より遺骸其儘可指置旨、後刻見廻可申段申來候。則平馬・喜左衛門辰右衛門宅へ被罷越、世上不輕風聞有之に付、猶更遺骸見請可申旨に而被致見分候。平馬等被申聞候者、一類共存付之趣も無之哉、將又辰右衛門召連候若黨伊藤彌太夫幷栗ヶ崎村に而辰右衛門宿主相川屋又助、右兩人共委曲相糺可申段被申、彌太夫儀者平馬等直に被呼出、辰右衛門煩出之樣子委被相尋候。又助手前は私共尙更遂僉議候處、兩人手前疑敷儀無之に付、彌太夫・又助口書取立、幷私共連判之紙面平馬方ゟ指出申候。猶更又助妻子も呼出詮議仕候處、且而

疑敷儀も承不申段申聞候に付、其段口書取立置申候。其上役人共も呼寄、其日其夜於同所口論ヶ間敷儀も承不申哉、且疑敷儀も無之哉与嚴重詮議仕候得共、少も疑敷筋相聞不申候段申聞、則口書取立置申候。此外私儀承請申趣等、可申上儀無御座候。辰右衛門儀者實兄安井左太夫妻弟に御座候、以上。

酉三月二十九日　高崎平左衛門　判

多田逸角殿

堀平馬殿

壽光院は前田重教の後室

二月十六日。前田治脩、壽光院夫人等を招請し能を催す。

〔政隣記〕

二月十六日、御表へ年頭初而壽光院様并祐仙院様・松壽院様御招請。依之於御敷舞臺御能被仰付、御歩並以上見物も被仰付。且御出入御旗本衆之内佐野六右衛門殿・佐野六十郎殿・東成幸次郎殿・井戸佐次馬殿、右御能有之段及御聞、御頼に而御出、御家中見物所之前に腰屛風建、其内に而御見物。於御定席御勝手座敷、御料理・御菓子・御湯漬追々出之候事。

二月廿二日。盗賊改方奉行四民の風俗取締の手續に關して稟議す。

［御觸書并申上留］

一、四民風俗之儀に付、段々被仰出儀御座候得共、御家中之人々實義に相守不申躰にも相聞申候故、猶更相考候所、頭・支配之人々より被仰渡之趣、一通申渡候迄に而、實義存付相教申儀無御座候故、承知仕候儘に而、相守相改申者相見え不申候。依之聞役之者を以承糺、夫々相咎可申哉、其品々書記奉窺候。

一、衣服之儀、男子は大抵素服にも相用申候へ共、女子之衣類近年次第に華美に相成、色々無用之費を成、或内輪に而参會・祝事等御座候節、妻子下女に至迄美服着用仕、別而當時下女等之着服分限を越、主・下之分も無之族に罷成申候。且又御徒以下足輕等之妻子迄も、甚不相應之衣類着用仕、町方之妻子等着服も武士之衣類同樣に着用仕候事。

一、参會之節或祝事等、一類之外迄も勝手に入、ごぜ・座頭・琴三味線を爲引、酒宴仕候行儀作法甚妄に相成、或出入之町人等入込、新曲与名付、京方之三味線を以人心を妄申儀、風俗之悪き第一与被存候事。

一、年若成人々妾を召置申儀、近年甚増長仕、一季居之女子迄も其風に押移、悉奢り申、少給銀に而は難召置、其上月に三・四日之下宿に御座候所、當時は十日・十五日程も下宿仕、惣躰之風儀本公を麁畧に存、所々に居定不申、數軒相勤を宜事に存罷在申候。此儀者先年より

平均はならしにて慣はしの義

御禁制に而、出會宿仕者抱女御座候へば能州等へ被遣候故、近年は皆々主人取仕、又は抱女之分ゟ緣邊を以便り人之趣に相成申候。依而十日・十五日下宿仕候与相聞申候。此者共花美之衣類を常々着用仕候に付、歷々之妻子迄も是を見習、皆賣婦之風俗に相成申候。當時武士之妻子之風俗に而は無御座候。御年寄中を初廣式之風俗、猶以右之通に相聞、第一風俗之妄与被存候事。

一、諸士勝手難澁仕儀は、古今同樣に御座候得共、近年は如町人利欲增長仕、常々細碎に相成、少勝手宜者は利潤を得申候了簡に而、義を失、町人之仕業仕者有之躰に相聞申候。其上難澁之者は、町人等へ勝手仕送を賴申候故、其町人等心易出入仕馳走仕候に付、右躰之下女を召置又は相雇遊與仕候。其賣女抔琴・三味線を引、或歌・淨瑠璃等を覺居申故、猶增長仕、町人出入之者妄之風俗に相成申候。心付申者も金銀調達之道にさへあれ、其分に仕候人々茂御座候躰に相聞申候。惣而町人等相交候故、武士之行儀崩、於町家も武家之風俗移、商之作法を忘奢侈に相成、双方共風俗之妄に相成申与被存候事。

一、年若之人々幷子弟之風俗次第に不宜、第一武藝相嗜申者無御座候。幼少より利欲之事而已見習聞習候而、利欲之儀不存者は踈き生得之樣に申成、利に賢き者は利口者与申平均候より、風俗惡相成申候。諸藝に而も肯名聞迄に相成、早く上手に成候樣に覺え、口を利候迄に

最は紀らい假字

而、實に修行仕者無御座候。中年以上之人々ハ、學文又ハ軍學等修行仕、經濟之學も心掛可申所、利口迄ニ而古人之跡をも學不申、御制法之禮式、諸場・諸役所之古格を取失、指懸候利口迄に相暮申候故、御用に相立申者少御座候。此儀に心付、朝暮心掛候者も御座候得共、世話やき与名付相嫌申族多、頭・奉行之人々別而心掛無御座候故、心懸之人々は自然与隱れ罷在申躰に御座候。是皆相嫌申風俗より事起、行儀作法妄成を好、利口に辯舌を以人々に馴合申者を引立申風俗、甚之邪儀与被存候。且又諸稽古所當時如形出座無御座候。若き輩之人々空癖故、自ら遊興に移り申与被存候事。

一、子弟之人々諸稽古仕候所、其師匠仕者何も心得悪敷、行儀作法茂無御座候。勝負而已に而、其藝之善悪に無構、免一等を習を教申躰。第一金銀に依而未熟之者も習を得申候。依而名聞迄に執行仕來候間、師たる者共其手前相糺、練不練に依而其位を糺候樣御座有度儀に被存候。師迄之教に而、自ら諸事に移り、子弟之風俗心懸宜可相成与被存候事。

一、博奕之儀者、輕者共は何程御制禁御座候而も、根を裁申儀は無覺束品に御座候。歷々之面々に而茂、正月中は博奕に似寄候品之慰に以前よりも有之候。然所近年は常々取扱、歷々之中にも御座候而、別而碁・將棊等過分に金銀を懸物に仕躰に御座候、第一町家に時行申候事。

一、風俗之儀は懦弱に流安、正道之行儀作法には難移御座候。第一人持・諸頭之面々、行儀を正し作法猥に無之、參會有之候而文武之道其筋を聞習、年齢之者に付合、御先代より之禮式御作法、并諸役所之勤方其職掌を糺論し、律令も學文を心掛候者、自然与風俗宜相成可申与被存候。生得之利口迄に者正道も所ね者移り不申儀与乍恐被存候。

右品々相糺、着服等之儀者夫々相咎、其外之儀は善惡承合、可奉申上儀候与被存候。

右奉窺候間、被仰出之上相糺可奉達御聽候、以上。

戌二月廿三日　　高畠五郎兵衛　判

二月。十村等定免開及び毛附高に關する諮問に答申す。

〔三百二條舊記〕

新開所三ヶ年目御撿地之上、御圖面に被仰付候後定免開に相成、十村帳入に奉願、御聞届に候得は、古田同樣打銀等諸役相勤申候。寶曆八年定免開に被仰付候分、同九年十村帳入に相成候、其後之分は、十村帳御書入に相成不申樣覺申候。安永九年定免に御聞届之處に、いまだ十村帳に御書入無之候得共、安永年中迄之分者打銀等諸役相勤申候。此内に者、十村帳入被仰付候而も不指支處々も可有之与奉存候。其後天明五年新田裁許被仰渡定免に被仰付候内、請高場所并川筋等不定之所々、其節格別之御詮議に而、諸役等之儀は相勤不申共、先御

定免に仕候樣被仰渡候。此分は諸役相勤不申候。都而十村帳入に相成候而者、古田同樣諸役相勤申候に付、川筋等不定之開は年々增減も有之、御給人付に相成候而者混雜仕候趣も御座候故、旁以御開免同樣新開方之取調に仕、損毛等有之節は、御見分等相願申候得ば、旱物見分等之節見分被仰付候。

一、毛附高新開處、少々ならで毛付不仕所々、數十年請込置開不申趣。元來請高場所之儀は、外新開所与違全田畑に相成不申、無地・川原等に而御座候得共、他村之もの抔見込願仕候得者、其段附、水源等場所は用水筋古田に相障り、且領之内他村より入込候得者、却而古田之害に相成申樣之儀も貪着不仕候に付、請込置、古田指障りに相成不申所々迄開申候。

其段附本のまゝ脱文あるべし

一、請高場所開詰候得ば、百姓潤色勿論之儀に御座候得共、古田に障り、或先年請込候處に、入川等に而當時草村も無之、川原に相成申所々も多御座候。

一、潟開請高之儀も、ごみ溜り等之地、當時瀰込に而水底に相成、開兼申所々に御座候。

右定免開并毛附高場所、御尋之所書上申候、以上。

酉　二　月

三月朔日。前田治脩、先に德川家齊より贈られたる鶴等を調理饗應す。

〔政隣記〕

三月朔日、去年七月御拜領之雲雀當正月御拜領之御拳之雁、前月御拜領之鶴御披に付、前田信濃守殿幷御出入御旗本衆四十三人御招、御小書院幷御勝手座敷に而御饗應。右御取持衆七人には、御小書院溜に而御饗應。幷御城坊主衆二十人被爲召、平生之溜に而御料理被下之。御拜領之御鳥三種には、於御小書院御前にも被遊御頂戴候。御上客信濃守樣与は御盃事も被爲遊、御臺引も御持參被遊候筈之處、御斷に而御出無之に付、其御儀無御座候。右之外御客衆には、御臺引御取持衆(前田安房守殿等七人也。)御持參、數之御土器之上、御取肴も御取持衆御持參。尤三席御出被遊御挨拶。坊主溜にも、御通懸に御襖戸明之御會釋被遊候。且又御取持衆御七人には、別段御餠菓子・御吸物・御酒・御重肴出之。

但、御客衆之内御斷十三人有之候事。

〔政隣記〕

三月四日。金澤城中に於いて火氣に注意すべきことを令す。

三月四日於金澤、左之通御用番被仰聞候旨、御横目廻狀出。

付札、御横目江

御城中所々御番所等火之元之儀、去春被仰出候趣も有之、嚴重相心得候樣可申渡旨、其節頭・支配へ申渡置候。尤人々無油斷相守候得共、彌嚴重相心得候樣夫々可申渡置旨、諸頭幷諸役

所役人中へ向寄可被申談候事。

三月四日

三月七日。秋田侯佐竹義和本鄕邸を訪ふ。

〔政隣記〕

三月七日、佐竹右京大夫樣今日始而御年賀旁御出。於御小書院鰭之御吸物に而御盃事被遊、御刀被進之。同方より御持參之御太刀馬代、組頭披露之御取持衆指出。右畢而二汁六菜之御料理、御相伴佐野六右衛門殿に而出之。御引菜は御持參被遊。夫より後御菓子迄段々相濟、御退出也。御取持は倉橋三左衛門殿・長田甚左衛門殿・右六右衛門殿之事。

三月七日。前田治脩先に重教の女藤姬を子養せんと請ひたるを許さる。

〔政隣記〕

三月八日、先達而藤姬樣御儀御養女に被遊度旨之御願書御指出置之所、昨七日御用番宅に聞番被召呼、御願之通被仰出候段被仰渡候に付、爲御禮今朝五時御供揃に而御老中方御廻勤、同月十一日頭分已上布上下着用、御席へ罷出候樣被仰渡候段、御橫目中申聞に付、四五人宛申談罷出候處、左之通土佐守殿御演述に付恐悅申述退出。

藤姬樣御儀御養女に被遊度段御願之通被仰出、難有御仕合被思召候。此段何もへ可申聞旨御

意に候。

三月十三日。前田治脩就封の暇を受く。

〔政隣記〕

三月十三日、上使御老中松平伊豆守殿を以、御國許へ之御暇被蒙仰、如御例卷物三十・白銀百枚御拜領。從御臺樣も、御使御廣式御用人夏目攝津守殿を以、卷物等御拜受被爲遊候。然所御前御風氣に而、御鼻液多被爲出候に付、御名代建部內匠殿へ御賴、上意御拜聽等被爲成候。尤如御例上使へ二汁六菜御料理、御相伴御名代內匠頭殿に而御饗應有之。御使攝津守殿へ者御重菓子等出、御相伴御取持之酒依清右衛門殿、其外都而御作法前々之通に付留略。

〔政隣記〕

三月十四日、御老中方御連名之以御奉書、明十五日御登城御暇之御禮可被仰上旨、且御家來兩人可被召連旨も申來。仍而明朝六時御供揃に而御登城、御下り御用番之御老中(外御老中方並若御年寄方者ニ御風氣に付御名代を以御勤之旨、)御勤可被遊旨被仰出。然所夜中四時過、御風氣に付明十五日御登城御斷被遊候段仰出、依之一統不及平詰旨、御横目中より申談有之候事。

三月十五日。服飾玩具等の華美を禁ずる幕令を頒たる。

〔政隣記〕

大目付江

覺

一、不益に手間懸り候高直之菓子類、向後可致無用候。是迄拵來候とも相止可申事。

一、火事羽織・頭巾結構之品可致無用、幷町方火事場まとひ錫箔之外用間敷事。

一、能裝束甚結構成も相見得候間、向後輕く可致候。幷女之着類も大造之織物・縫物無用に可致事。

一、はま弓・菖蒲甲刀・羽子板之類、金銀かな物幷箔用申間敷事。

一、雛幷もてあそび人形之類八寸以上可爲無用候。右以下之外者、麁抹之金入緞子類之裝束には不苦候事。

一、雛道具梨子地者勿論、蒔繪に而も紋所之外無用之事。

一、櫛・笄・髮指等金には決而不相成候。銀・鼈甲も大造に無之は不苦候。幷目立候飾り、細工入組高直之品、賣買堅停止之事。

一、きせる其外もてあそび同前之品、金銀遣ひ申間敷、幷蒔繪等結構に致間敷事。

右之條々急度可相守候。惣而奢たる品拵申間敷旨、元祿・享保年中觸之趣、猶又此度改而右之通被仰出候。尤只今迄商人仕入候分者、當年限りに致賣買、來戌年よりは書面之通賣買可

爲停止候。停止之品自今若誂候者有之候ば、奉行所へ相伺可受指圖旨、町方へも相觸候條、可被得其意候。

酉　三　月

右之趣向々に可相達候。松平越中守殿御渡候御書付寫一通相達之候條、被得其意、答之儀は牧野大隅守方へ可被申聞候、以上。

三月十五日　　大　目　付

御名殿留守居中

三月廿一日。金澤に於いて先に前田治脩が藤姫を養女とする許可を得たるを告ぐ。

〔政隣記〕

三月二十一日於金澤、一昨日御用番大炊殿より一役連名之依御廻文、今朝五時頭分以上布上下着用登城、御帳に付。其後於御之御間御年寄衆等御列座、左之通御用番安房守殿御演述。

但、大炊殿に一昨日切御用番也。

藤姫様御儀、中將様御養子に被成度段御願之處、御願之通被仰出候。此段可申聞旨御意に候事。

右御弘之趣、當座に恐悦可申上候。年寄中等宅ゟ者罷越に不及候。幼少病氣等登城無之人々は向寄より傳達、今明日中爲恐悦御用番宅ゟ使者可指出候。且又今日御弘之趣、組・支配之人々ゟ茂承知有之樣、寄々可申聞旨被仰出候段、御横目中申談候事。

三月廿二日。會津侯保科容頌の孫金之助本鄉邸を訪ふ。

〔政隣記〕

三月廿二日、金之助樣（肥後守樣御嫡孫）今月十五日初而御目見就被仰上候、今日御見廻懸り之趣に而、五半時御供揃、四時頃御出、於御小書院御對顏、御持參之御太刀馬代、御小將頭松原元右衛門披露、鱚之御吸物に而御盃事被遊。畢而御取持長田甚左衛門殿御相伴に而、一汁六菜御料理・御酒・御吸物・御肴、御茶請・後御菓子迄段々相濟、御庭ゟ御出御見物、高山之御亭に御休、御干菓子・御茶上之。御小書院へ御歸座之上、あん懸團子・御酒・御吸物・御後肴、御菓子出之。七時頃御退出。御取持衆倉橋三右衛門殿等四人。

但從此方樣御刀被進之。

三月廿七日。廣島侯淺野重晟父子本鄉邸を訪ふ。

〔政隣記〕

三月廿七日、安藝守樣・右京大夫樣御父子御同伴、四時過御出。於御小書院、御取持倉橋三左衞門殿・佐野六右衞門殿御相伴に而、二汁六菜之御料理等相濟、御庭へ御出御見物。夫より於御馬場、御客馬御覽。於御馬見所早々御饗應、御小書院へ御復座之上、諸葛幹・伯圓席繪御覽、素仕舞・一調一管・語、夫より御囃子小鼓・亂相濟。御後段幷御夜食等品々御饗應之上御退出。

但右御客馬之節、御大小將宮崎藏人へも乘馬被仰付。

四月十一日。宗門改帳提出の期限を恪守し、且つその記載を嚴密にすべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

四月十一日於金澤、左之宗門奉行紙面寫を以、御用番安房守殿御觸出

御家中並御領國中等より、每歲四月宗門相改指出候帳面、近年延引に相成候儀も有之、其分人々是方不宜躰に而、寺號相違仕、或文字も自分に大躰に調出候樣子に而、役所帳面与甚相違之分も有之、宗門所にて大方混雜仕候。畢竟寺證文人々手前へ取請候儀延引等に而、日限相延、無是非先及承候寺號を調出候儀も有之哉。左樣に御座候而者、第一御締相立不申候條、右之族無之樣一統夫々被仰渡候樣に与奉存候。且又寺庵より指出候寺證文之內にも、所附等

其の分は其外等、

相違之分も有之、入院之後又は役僧交代之節等、前々之調方与相違仕候哉与奉存候。尤寺證文之儀者、御緘之第一に御座候間、在々等より輕き奉公人等、緣借旦那相頼候而も、其人々之旦那寺より證紙面無之候分は、彌相對に而寺證文差出不申樣寺庵へ申渡有之樣、寺社奉行へも被仰渡候樣に与奉存候、以上。

酉二月二十日

武田喜右衛門
神尾伊兵衛
津田林左衛門
不破和平　各判

本多安房守樣
長大隅守樣

四月十五日。前田治脩柳營に上り就封の辭見す。

〔政隣記〕

四月十五日、頃日之依御奉書、今朝六時之御供揃に而、同時過御登城之處、於御黑書院御暇之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御鷹二・御馬二御拜領。幷前田土佐守・津田修理御目見、卷物三卷宛拜領被仰付。右に付爲御禮、御老中方・若御年寄衆御廻勤、幷土佐守・修理等自分

三品とは長柄・弓・筒をいふ二品は長柄を除く

々御禮廻勤之事。

右之趣於御席、重畳難有被思召候段御意之趣、土佐守殿御演述、頭分以上五・六人宛罷出承之、於竹之間御帳に付、恐悦申上候事。

〔續德川實紀〕

四月十五日、月次拜賀例のごとし。松平加賀守治脩就封の暇たまふ。

四月十六日。前田治脩江戸を發し歸國の途に上る。

〔政隣記〕

四月十六日九時御供揃に付、同刻頃御殿へ相揃、夫々御小將中揃之儀も御横目所へ相届之候處、七時前三品（但坂本驛迄は二品に候也。）押出候様被仰出、七半時頃御發駕、御下邸御立寄、夜九時前頃浦和驛御着。

十七日六半時御供揃に而、五時御發駕。御中休前記之通に付此末記略。大宮・上尾・吹上御小休、七時頃熊谷御着。

一、明日六時不遲御供揃、深谷・本庄・倉ヶ野御小休与被仰出。

十八日六時過御發駕。七半時過板ヶ鼻御着。

但自分昔より定騎馬當番に付、例之通からす川に而御召船爲見分御先へ進。尤由比も同斷。

於川端御召船宜御座候得共、御先勢いまだ舟に乘不申に付、暫御猶豫之儀申上候處、暫有之御先勢越濟候段由比申上、御船に被召候に付、尤自分御同船仕、且川端へ可進にて御後ゟ近罷越候節、被爲召候に付御側へ罷出候處、竹腰山城守殿御嫡右衞門殿御通懸り之處、御行列に付扣被罷在候。依之御尋之趣有之、御請申上、相伺候上御表小將千羽昌太夫へ御使申談候。委曲は事永く、其上御表小將与御步与之一件等に付、委記略す。

一、明日六時不遲御供揃、松井田・こゐ石・脊懸御小休与被仰出、且越中東岩瀨にても御宿可被遊旨、今夜被仰出有之。

十九日快天、風起則夜。五時前御發駕、七時過追分驛御着、明朝六半時御供揃、海野御小休与被仰出。

廿日曉天より雨、晝より霽陰則夜。五時前御發駕、八半時頃上田ゟ御着、明曉八半時頃不遲御供揃、榊・下戸倉・矢代・新町御小休与被仰出。

廿一日快天則夜。六時前御發駕、暮頃牟禮御着。

一、於榊邊巡見上使へ御出合に可成哉之儀に付、御會釋之儀横濱善左衞門を以相伺、御横目并御步小頭ゟ申談候。一件事永等に付記略。

一、丹波嶋御中休御宿於柳澤瀨左衞門方、同人所持之三才鹿毛馬御覽、御馬乘役齋藤久之助

に乘馬被仰付、御覽之上御用無之段被仰出。同所に而眞田彈正大弼殿より御使者を以、挽拔蕎麥粉一箱・鷄卵一箱御進上有之。自分御返答申述。但右御受納也。取次は御旅館取次御小將也。明朝六時不遲御供揃、御小休は柏原・關山・荒井与被仰出。

廿二日快天朗夜。六半時頃御發駕、暮頃高田御着。明日六時不遲御供揃、御小休長濱・遠崎・鬼伏与被仰出。

廿三日快天之處、晝より陰、夜懸雨降。六半時頃御發駕、暮六時過糸魚川御着。明朝御供揃五時、御小休雅樂与被仰出。

廿四日雨天晝より霽、快天朗夜。自分其外御先拔之人々、姬川舟橋迄向候處、高水に而船渡不申に付立歸、糸魚川に逗留。且段々御詮議有之候へ共、御渡船難被爲成旨に而御逗留。明日五時御供揃、雅樂御小休与被仰出。

廿五日快天朗夜。五時頃御發駕、七時頃境へ御着。但姬川少々高水、駒返・不親知波穩靜至極。今夜御飛脚出候に付、東・北本兼同役中へ御用狀出之。

明日六時御供揃、御小休泊・浦山・三日市与被仰出、且先達而於板ヶ鼻驛東岩瀨に御增泊被仰出候得共、右御止めに相成、左之通与被仰出。

廿六日魚津。廿七日高岡。廿八日津幡。廿九日金澤御着。

一、御旅中ニ而鳥被遊御見懸候得ハ、御行列ハ行成ニ而、少々脇道へ被爲寄御鐵炮可被爲打旨、今晩被仰出。右ニ付脇道へ被爲入候節、御先立三十人頭相勤候筈之處、吉田忠太夫壹人役、其上老人ニ付、御步小頭より三十人頭兼帶可申渡旨被仰出候段、土佐守殿被仰渡候ニ付、御步小頭三人ニ伊藤・自分連名之以判形紙面申渡。猶更勤方吉田忠太夫可承合旨も申談候處、段々申聞之趣有之ニ付、御次へ出、御步小頭御先立抔仕付不申者共之儀ニ候間、不身躰等之儀可有御座候、此段兼而被聞召届置候樣仕度段、勝尾吉左衛門を以申上候處、被遊御聞届候段被仰出候事。

但、御步小頭御供所御先ニ罷在候而ハ、俄ニ御先立御用之節、彼是指支候趣有之ニ付、三十人頭御供ニ不罷出候節ハ、御駕跡ニ御供爲仕、御先ハ欠成ニ仕置可申哉与、是又勝尾を以相伺候處、伺之通与被仰出候ニ付、其段も竹内十郎兵衛等ゟ申渡、并御駕跡ニ御供仕候節ハ、草履取も御駕籠廻り之面々与草履取与一集ニ打立候樣申談。右兩樣等之趣、夫々御横目中ゟも相届置候事。

廿六日薄暑朗夜。六半時頃御發駕、七時過魚津ゟ御着。

但、朝之内御鐵炮ニ而鳥御たゝ被遊候得共、御打留無之、晝後鷺一・鴫一被遊御打留候事。

明朝七半時御供揃、二橋・下村・小杉御小休。但當所魚津也より滑川、夫より加茂川橋御越、

市之口村・小出村・西水橋御小休、夫より御鷹野道通東岩瀬御中休。夫より往還通り下村御小休ゟ小白石村より高木村不湖御廻り、夫より小橋御小休、往還通り高岡御着御泊与被仰出候。右東岩瀬御泊相止候段、且御鷹野御道書、御行列奉行等より廻状到來に付、本役幷兼役支配中へ觸出候事。

今日川網被仰付、御覽有之。

四月廿七日快天朗夜。六時前御發駕、夜九時前高岡御着、明朝六時御供揃等之儀被仰出。但御小休所福岡・倶利迦羅。

今日千原崎川へ多田逸角・由比陸太夫等、水橋川へ伊藤甚左衛門・湯原友之丞等罷出。

今日終日御行成御鐵炮、且前記之通御廻り道被遊。其節野間御供御表小將御番頭窪田左平幷配膳役不殘、野間裝束に而御供被召連、御表小將は御廻り道へは御供不被召連候。御鷹御奉に而鶴一つ、御鐵炮に而鶴・鷺・鴎・鴨一つ宛、かいすて二つ御打留有之。幷配膳中村才兵衛等ゟ被御付打留候かいすて六つ有之。東岩瀬於御中休、鯛引網被仰付、御覽有之。

廿八日快天朗夜。六時過瑞龍寺へ御參詣。同役御供伊藤、右より一先御旅館ゟ御歸、追付御發駕、七時過津幡へ御着。明日五半時御供揃に而御發駕、森下御小休与被仰出。將又御用無之人々は、今晩より勝手次第發足可致旨も、從御道中奉行

何之通ニ被仰出候段、旅宿觸有之

四月十七日。巡見上使筑紫從太郎等金澤に着す。

〔三壺御記〕

四月十七日、巡見上使（[illegible]）御使番筑紫從太郎・御大小將組大久保長十郎・御書院番堀八郎左衞門金澤に至る。

縮武公御留、二月廿五日江戶御出立、上方より御廻り、四月十七日金澤泊りに相成、能登・越中御廻り、五月八日境御越之、越後に御移り、御領國中御廻り相濟候旨、五月廿四日江戶にて御用番へ御屆。

四月廿四日。早打使人に貸渡したる金子の返濟方法を改む。

〔政隣記〕

四月二十四日左之趣御算用場より於金澤觸出。

早打御使人江御貸渡金、是迄返上無之分并是迄二十ヶ年賦上納仕來候分共、今年より三十ヶ年賦を以可取立旨。且又御使之樣子により、當り之外不時御貸渡之分者、百石に付二拾目宛之圖りを以今年より可取立旨。將又他國當御使早打御使共、都而是以後旅行年は上納御用捨、翌年より可取立旨、前田土佐守殿被仰渡候條、來月二十日を限り、當り借用・不時借用共夫

々別紙に可書出候事。

四月廿五日。犀川橋より上流に於ける漁撈を禁止す。

〔政隣記〕

四月二十五日於金澤左之趣御用番より御觸有之。

才川橋より上、内川共、當四月朔日より御留川に被仰付候條、御家中は勿論、川請負人たり共、惣而於右御留川之内に川殺生御停止之旨被仰出候段、若年寄中申談。

但、才川橋より下幷淺野川には、不依誰々御貪着無之事。

四月廿七日。金澤淺野穢多町に火を失す。

〔政隣記〕

四月二十七日夜五時頃、金澤淺野穢多町出火、六十軒計燒失。四時過鎭火之事。

四月廿九日。前田治脩金澤城に着す。

〔政隣記〕

四月二十九日快天朗夜。四時頃御發駕、森下に而御猶豫、八時前御着城。定騎馬御近習御使番勝尾吉左衛門抔に本役騎馬、御大小將横目由比陸太夫前々之通河北御門外より御駕脇に歩

御供仕、夫より御殿へ上り、御席へ出御用番安房守殿へ恐悦申述。且御歩方並御細工者支配夫々引渡、退出歸宅之事。

二十九日御着之上、少々御風氣に付、野田御廟參等御延引被仰出。

二十九日御着之刻、三之御丸へ人持・頭分等前々罷出候役柄之人人、橋爪ゟ年寄中、敷付へ御近習頭・御表小將、鐘板ゟ御城代安房守殿并奧村河内守殿・御家老中・若年寄中罷出。御城代等ゟ御會釋有之。敎千代樣階下迄御出迎、御會釋有之。御先立若年寄横山又五郎。階上ゟ者御近邊之人々各罷出。將又御大小將御番頭・御横目・御大小將列居。

四月二十九日、御歸國爲御禮江戶表へ被指出候御使、人持組多賀帶刀御目見被仰付候後、於御年寄中席紗綾二卷・御羽織一被下之、披露御大小將永原治九郎勤之。畢而發出之事。

二十九日如前々、御着後於御式臺、人持・頭分爲恐悅御帳に付退出。御供之頭分以上は、旅裝束之儘御席ゟ出、御用番ゟ恐悅申述退出之事。

五月十六日。前田齊廣等石川郡宮腰及び粟ヶ崎に遊ぶ。

〔政隣記〕

五月十六日六時過御供揃に而、宮腰・粟ヶ崎ゟ爲御行步、藤姫樣・億萬千殿御同道被爲入。御

大小將より成田長太夫・宮崎儀太郎・前田作治郎御供に而、御菓子・御賄等被下之。

五月廿九日。金澤安江木町に火災あり。

〔政隣記〕

五月廿九日曉七半時過、安江木町白尾屋邊町家十軒餘燒失、六半時頃鎮火。御年寄中等各登城。

五月廿九日。前田治脩寶圓寺及び天德院等に參詣す。

〔政隣記〕

五月二十九日六半時御供揃に而、五時前御出、寶圓寺・天德院、夫より野田泰雲院樣御廟に御參詣、四半時前御歸城。

六月朔日。前田治脩金澤郊外大豆田口に放鷹を行ふ。

〔政隣記〕

六月朔日出仕之面々、於御之御間一統御目見、御意有之。於檜垣之御間役儀之御禮等被爲請、且九半時御供揃に而、八時前御出、大豆田口御放鷹、犀川上之船場邊に而鮎御釣被遊、暮頃御還城、但御鷹に而鶴三、御鐵炮に而鷺・鴉十、御竿に而鮎十六、御獲物有之。

六月二日。前田治脩石川郡粟ヶ崎に放鷹を行ふ。

〔政隣記〕

六月二日六半時御供揃に而、五時前御出、粟ヶ崎・宮腰筋終日御鷹。御休所粟ヶ崎於御旅屋、一統御賄被下之、暮頃宮腰より御還城。御獲物鶴六つ、御鐵炮に而鷺・鴉數多有之。

六月四日。前田治脩金澤小立野口に放鷹す。

〔政隣記〕

六月四日五半時御供揃に而八時御出、龜坂筋御放鷹、幷御鐵炮に而鴉一御打留。御竿に而鮎二つ被爲釣。

六月五日。前田治脩金澤城三ノ丸稽古場に於いて射手の士の技を觀る。

〔政隣記〕

六月五日八半時御供揃に而、同刻過三之御丸於稽古場、御射手中的御覽十度、矢數二十本充也。毛利伊平太十三本、堤源太左衛門十二本中り、其外者二・三本より十本宛之中より姉崎五左衛門は一本も不中。

六月六日。前田治脩犀川に至りて鱒を漁す。

[政隣記]

六月六日九時御供揃に而、八時前御出、七つ屋筋御放鷹子昨日被仰出候處、今日俄に才川上ゟ可被爲入旨被仰出、則於同所御放網に而鱒一本、御鐵炮に而鴉一羽御獲物有之。

六月七日。前田治脩金澤七ッ屋口に放鷹す。

[政隣記]

六月七日九時御供揃に而、同半時頃御出、七ッ屋口ゟ御放鷹。鷂三つ・雉子二・よしごい一・水雞一御獲物有之。

六月七日。本鄕邸内なる前田齊敬の居館上棟式を行ひ、之を新御居宅と稱せしむ。

[三壽御譜]

六月七日今度江戸於上邸御普請被仰付、數千代君御居宅御上棟御祝有之。新御居宅と唱可申旨被仰出あり。

六月十日。前田治脩金澤城三ノ丸に於いて異風組の士の射擊を觀る。

[政隣記]

六月十日八半時御供揃に而七時過御出、三之御丸御巽風中鐵炮御覽、十放宛二十人也。

六月十二日。前田治脩如來寺及び寶圓寺等に參詣す。

〔政隣記〕

六月十二日六半時御供揃に而、同刻過御出、如來寺・寶圓寺、夫より野田泰雲院樣御廟に御參詣、四時過御歸殿。敎千代樣にも五時御供揃に而寶圓寺へ御參詣。

六月十三日。前田治脩金澤七ッ屋口に放鷹す。

〔政隣記〕

六月十三日九時御供揃に而、八時前御出、七ッ屋口御放鷹。御獲物鶴・鷺・鴨十五有之。

六月二十日。金澤に於いて本鄕邸内なる前田齊敬の居館を新御居宅と稱すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

六月廿日、左之通御用番山城殿被仰聞候旨等、御横目廻狀出。

今度於江戸表、御上屋敷御普請被仰付候敎千代樣御座所、新御居宅与唱候樣被仰出。

六月廿一日。前田治脩石川郡宮腰に放鷹す。

〔政隣記〕

六月二十一日八半時頃御出、宮腰口御放鷹、夜五時頃御還城。

　但、御供揃八時也。

六月廿五日。前田治脩石川郡宮腰に放鷹す。

〔政隣記〕

六月二十五日八時御供揃に而、同半時御出、宮腰筋御放鷹、中山主計方に而御休、夜五半時過御還城。

六月廿八日。前田治脩の養女、高松侯の世子松平頼儀と縁組することを許さる。

〔三守御記〕

五月十八日、藤姫君御縁組御願書付御先手倉橋三左衛門を以て御用番へ被指出、六月廿八日御願之通御名代出雲守様御登城之上被仰出、御禮之御使者御大小將御番頭庄田要人被指出。

（松平雄丸後讃岐守頼儀君へ御縁組なり。）

是月は大盡なり

六月晦日。江戸小石川の火災に加賀御抱の鳶之者死傷す。

〔政隣記〕

六月晦日朝六時過、江戸小石川傳通院前より出火、富坂小笠原總次郎殿邸迄燒失、四時鎭火。右之節御抱鳶之者之内勝次郎・權太郎烈敷働、屋根より落候處、頭之上へ石落打破り、勝次郎は同日晝死去。權太郎は存命に候得共、本復難計旨、閏六月四日出同十五日金澤着之便に申來。但勝次郎死骸取片付料鳥目三貫文、且代人被召抱候儀火消役御大小將より御家老衆に願有之儀候處、格別之趣を以御聞屆有之。右鳥目被下之、代人召抱之儀割場へ御申渡有之候段も申來。

附、權太郎は本復之事。

六月。前田治脩放鷹の際といへども百姓の農業に從ふべきことを諭す。

〔異本三壽御譜〕

附札、加州御郡奉行に

御鷹野等御出之節、御目通不憚農業仕候樣每度被仰出有之所、未不行屆者共も在之樣御見請被成候。畢竟御上を恐、心外に相扣候族も在之べく与被思召候。農業出情之躰を直々御覽被成候得者、何程歟御喜悦被成候事に候間、此處を難有存、少しも相泥申間敷候。百姓共出情等之樣子は、尤其筋により御聽に御達候事に候得共、直々其躰御見請被成候得者、百姓共も

本望たるべき事に候。如此段々譯て被仰出在之上、心得違農業相扣候て者、甚不應思召事に候條、右思召を百姓共に猶更よく／＼可申含旨、十村共へ可申渡事。

六　月

閏六月五日。犀川・淺野川の水漲溢す。

〔政隣記〕

閏六月五日晝より雨川等洪水、犀川大橋桁等流、中程五・六間計橋切れ、藤棚邊小家流失。右邊其外河原町等寶久寺町等都而川近之家家ゟ溢水込入、下之方に而者御郡地へも水切れ込候躰。同日夜御使番中・御横目中追々登城、夜中故委曲之不能見分旨等言上。淺野川も洪水、一頬に小橋之上へも水乘候得共、無程減水、大橋・小橋共無別條。母衣町等川際家へ者水付候旨、是又右御役人等より言上有之。但天明三年之洪水よりは大に候得共、橋へ大木等懸り少き故悉くは不流失、且防方も宜に付溢水も少也与云々。水勢盛之節者、常水に一丈餘之高水与云々。

〔老翁雜記〕

一、寛政元年酉閏六月五日夜前より大雨、晝九半時より滿水、才川大橋々杭損じ、同日七半時重而高水彌損、尤晝より往來留る。同七日大雨、晝時大橋落る。寶久寺河原川除切れ、家

十三軒流。同時一番張出切れ込、笠舞領もやぶく、其外所々川除切れ込、同九日朝より舟渡往來相成。

閏六月七日、淺野川・犀川又暴溢し犀川大橋流失す。

〔政隣記〕

閏六月七日朝六時過より兩川高水に付、御使番・御横目等追々登城言上有之。且被仰出を以、所々へ爲見分度々御使番被遣之。淺野川は一先減水之處、晝頃又々出水に候得共、無程減水、所々へ切レ込、大橋・小橋共損無之。犀川は一昨日より出水者少し方に候得共、損所多、大橋も流失、暨所々へ切レ込、寶久寺邊家數七軒流失、川向乞食小屋邊も不殘流失之躰に候得共、通路無之に付委曲不知。（附、右小屋過半流失、且蛤坂横岸七八間藪等崩る。）川上張出し三ヶ所共流失、併御田地損所無之、八半時頃より段々減水。七半時頃川場へ出候御役人引取、直に登城、右等之趣言上有之。將又淺野川近之馬場・堀川筋等へも水溢込候得共、床之上へ上り候家稀也。惣躰天明三年之洪水ニは少に而、水勢も弱く、損所不多与云々。

〔政隣記〕

閏六月十二日、今度之洪水越中富山は莫大之水損に候得共、御領者左程之御損毛無之、小松邊能美郡者御損田夥敷有之。且諸國之内分而京・大坂筋与都而上方者洪水多し与云々。將又

洪水に付怪說色々雖有之、多分虛談之躰に付不記之。

閏六月八日。前田治脩の養女藤姬の緣組許可せられたりとの報金澤に達す。

〔政隣記〕

閏六月八日讃岐守樣御嫡雄丸樣ゟ藤姬樣御緣組、御願之通前月二十八日被仰出候段、今日從江戶早飛脚到來。依之前月四日記に有之通、右御禮江戶表に被指出候御使、御大小將御番頭庄田要人へ被仰付候段、御用番玄蕃助殿被仰渡。發足之儀當十一日ゟ御用人中申談有之。同十日蒲閒十一日可爲發足旨御用番被仰渡、則於御席御紋付御羽織一・白銀五枚・御目錄拜領被仰付。

附、右二品之拜領被仰渡、五ヶ日之內發足に付而也。是御定之趣前記に有。

庄田七月十四日金澤に歸着也。但同月四日江戶發出。

〔政隣記〕

閏六月十三日、御用番依御廻文、物頭以上布上下着用、五時登城之處、藤姬樣御儀、松平雄丸樣ゟ御緣組御願之通被仰出候御弘有之。但、前例之通、當番之御番頭幷御大小將中、右登城之人々退出迄布上下着用。

閏六月八日。御射手板倉善助等弓料を給せらる。

〔御裏雑記〕

板倉善助等弓料被下候條、御射手裁許より紙面出、近例之振を以伺之處、段々御尋有之に付、寛永より正徳之頃迄は中り等之善悪に無御貪着、多分跡目被仰付候節一緒に被下候處、其後享保之初頃迄暫御延引、同十一年段々御僉議有之被下筈之處、其年江戸御入用つかへ又御延引、同十九年に至り御射手・御異風共料知被下、其節何れも家業抽情に入中りも宜、依之被下候段被仰渡候。夫より以後は右之振に相成、支配人より願候へば御僉議之上被下候。今般善助等的御覧之處、抽宜とは不被思召旨御意候間、此度御延引、御異風迄可被下哉。然し役懸烈敷勤、内稽古入情之由支配人紙面候間、其所を以可被下哉之旨、閏六月三日伺之處、役儀烈敷勤候處御褒美に候はゞ、拜領物被仰付方可然、今更正徳之頃迄之通に立戻り候時は、一統不被下候而は成間敷候。左様に而は有之間敷、然ば中り等不宜候半而は料知被下候譯相立不申と思召候。併中り之儀不被仰渡、弓料被下候例も候哉之旨等御意に付、打返僉議之上、安永七年御射手小頭富田庄太夫、同組諸事指引等宜敷和熟仕候。當時痛所有之、弓稽古懈怠候へども、元來心懸宜、弓具等相應に嗜申候。前々小頭役勤候者、都而弓料御座候者被仰付候へども、庄太夫は弓料無御座候間被下候様仕度旨、支配人願弓料被下候。并御射手矢嶋作

左衞門・松原杢右衞門も、支配人依願弓料被下候。其節家藝情に入、射術宜敷段被仰渡、中り之儀には無御座候。且又御異風小頭奥田五兵衞、御鐵炮奉行數年精に入相勤、家藝も丈夫に付、異風料被下候樣仕度旨、幷御異風今村吉兵衞・今村治右衞門、酒井流中嶋小兵衞弟子に而鐵炮相極、其上御用方も精に入勤候付、異風料被下候樣仕度旨、支配人相願被下候。右准例に御座候。且何も烈敷勤候内、入情に候へば被下に而可有御座哉与、閏六月六日申上候處、例も有之上は、此度坂倉善助等四人弓料可遣之早々可被申渡与、翌日以御加筆被仰出申渡、左之通同月八日伺、伺之通被仰出。古澤又右衞門はしらべ漏、跡より申上候故五人也。

弓料
一、五拾石　　坂倉善助

善助儀、家藝心懸宜敷、及老年候處今以弓術專修行仕、其上教千代樣御稽古御用も被仰付、彼是烈敷相勤候。依之如此弓料被下之。

以下四人略す

閏六月十九日、辰巳用水の取締に關して令す。

〔坂井氏覺書〕

覺

一、辰巳上水江筋へごみ芥相捨申間敷事。

一、穢鋪品洗流申間敷事。

一、猥に水汲取申間敷事。

但、火事之節は格別之事。

右辰巳上水江筋前々之御締方御座候所、心得違之者ニ有之、ごみ芥等捨、其外猥成趣有之体御座候、前々之通急度相心得候様、御家中末々幷寺社門前町・近在百姓等迄一統被仰渡御座候様仕度奉存候、以上。

酉閏六月十一日

金森猪之助

阿部昌左衛門

村　八郎左衛門

本多玄蕃助様

別紙御普請奉行出候付、写指越之候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江茂相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

閏六月十九日

本多玄蕃助

遠田三郎太夫殿

武田喜左衛門殿

中村九兵衛殿

閏六月廿七日。前田治脩金澤の郊外大豆田口等に放鷹す。

〔政隣記〕

閏六月廿七日俄に被仰出、八半時之御供揃に而七時過御出、大豆田筋御放鷹、犀川舟橋より千日町野間御廻り、十一屋村より暮頃御還城。

七月九日。江戸に於いて先に火災の際消防に盡力せる諸士に賞賜す。

〔政隣記〕

七月九日於江戸、左之通火消役御大小將等に拜領物被仰付。

今年六月晦日上屋指町出火之節、御人數を以所々消留相働候段、達御聽、依之左之通拜領被仰付候旨、於御用所御用人演述、御目錄渡之。并御人數に被下候覺書も同斷渡之。

晒布二疋宛御目錄

林 與八郎

不破忠三郎

中川丹次郎

遠田誠广

金百疋宛

足輕小頭六人

白銀十兩宛　足輕三十八人
白銀五兩宛　鳶小頭二人
壹貫三百文宛　鳶之者三十一人
五百文宛　小者六十五人

右火事之節致怪我相果候鳶勝五郎老母江、御不便に被思召候旨被仰出を以、金小判三兩被下之。

七月十八日。諸士の公然ならざる緣組願の件に關して令す。

〔政隣記〕

七月十八日左之通御用番大炊殿被仰渡候趣、定番頭御用番津田平兵衛例之通廻狀有之。

不押立緣組願之儀にハ、小身者抔老母或ハ幼少之子共等有之、家内縮方も不行屆与申樣成儀に而至而無據趣有之處、再緣且再々緣之儀にも候故相願候儀者格別に候。然所子細無之而再緣抔に候得者、押立不申緣組相願候儀不苦樣にも相心得候人々も有之躰に而、近年度々右願有之、畢竟自由ヶ間敷儀に相聞え候。以來者至而無據趣ハ格別、一通り再緣等之願等者不承屆候事。

七月廿六日。前田治脩金澤郊外大豆田口に放鷹す。

〔政隣記〕

七月二十六日八半時御出、大豆田筋御放鷹。

七月廿九日。參覲の際供奉したる諸士の通馬增賃銀返納方を令す。

〔政隣記〕

七月二十九日、御參勤御往來御供人通馬增賃銀、天明六年より同八年迄打込、寛政元年より二十ヶ年譜被仰渡候に付、銀高年賦當り、當八月二日より二十六日迄之內每歲上納候樣、會所奉行廻狀有之。

七月。前田治脩、老臣等の諫言を上らんことを求む。

〔袖裏雜記〕

家中之諸士風俗次第に惡敷成行候躰、畢竟風俗之根本は上たる者の行跡に在之事に候間、先以拙者身の行ひ、國政諸事大小によらす不宜儀、又は各存寄被申儀者、聊も無遠慮被申聞候樣偏賴入候。尤自分心付候儀者、隨分可相愼覺悟勿論に候へとも、生質不肖に候間不行屆事而已に而、道にしたがひ、各の心に相背事恐入候。如此之存念候間、政事を始、身上儲或遊興惰弱等、其外都而小事たりとも不宜筋之儀は、何事によらす各見及聞およひ申さる所、虛實に不拘、時日を不移、機嫌をはからはす、面議に成とも封物を以成とも、何れにも白地に可

被申聞候。若亦各諫言を承候迄にて打過候はゞ、同樣の儀にても幾度も被示聞候樣、此段は譯而仰存候間、能々聞入置可給候。如斯申入候上にも、各斟酌之氣味少に而も有之候而は、我等之不幸は不及申、各も私に可相成候間、自分以後急度了簡を極可被申候。如右申達候こて、各へ靠我儘に振廻候我等心底は聊以無之事。

寛政元己酉七月

八月四日。前田治脩金澤郊外大豆田口に放鷹す。

〔政隣記〕

八月四日八時御供揃にて、同半時頃御出、大豆田口御放鷹、御獲物御近邊に被仰付、鐵炮に而打留鴨一羽。

この後放鷹を行ふこと屢なるも今之を省略に附す

八月廿三日。金澤野町にて與力松宮作助の弟小太郎、人の爲に傷けらる。

〔政隣記〕

八月二十三日夜、與力松宮作助弟小太郎野町町端を通候處、何者共不知頭より頬耳之邊迄刀を以疵付逃去。併薄手故無難に歸宅、爲檢使御大小將橫目小原惣左衛門・寺西彌大夫罷越。

八月廿五日。能州郡奉行奧村左太夫等、巡見使に對する處置を謬るを以

て指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕

八月十四日左之通。

今度巡見上使能州御通り之節、不念之趣有之候に付指扣相伺。依之今日より先自分指扣。

能州御郡奉行

奥村左太夫

金森珍二郎

改作奉行

坂井小平

右之通に候處、同月二十五日左太夫・珍二郎者役儀被指除、小平者役儀其儘に而、三人共指扣被仰付。

御寺相圖は天德院の近火を報ずるもの

九月四日　金澤小立野上野出町に火災あり。

〔政隣記〕

九月四日、小立野出町越中屋仁右衛門家より出火、二十軒計燒失、七時過鎮火。御寺相圖之太鼓に付各登城。

九月六日。前田齊廣等金澤觀音院に詣づ。

〔政隣記〕

九月六日、卯辰觀音院江藤姫樣・龜萬千殿御同道御參詣。

九月七日。町奉行松尾縫殿逼塞を命ぜらる。

〔政隣記〕

九月七日、左之通御用番大隅守殿於御宅、横山山城殿御立會、御大小將横目小原惣左衛門・由比陸太夫指引を以、大隅守殿被仰渡。

町奉行　松尾縫殿

御手前儀勤方等不心得之趣有之、甚不應思召儀有之候に付、役儀被指除、自分知九百石之内三百石御減少、知行高六百石に被仰付、逼塞被仰付候旨被仰出候事。

町同心　池守庄太夫

役儀被指除、組外並に被指加、逼塞被仰付候段、町奉行九里幸左衛門於宅申渡。

九月十七日。本年より諸士知行米の內借知としたる額の三分一を減ずべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

九月十七日、昨日御用番大隅守殿より御用之儀有之候條、今十七日五半時頃可致登城旨、一役頭役等連名之依御廻文、人持頭分并支配有之平侍登城之處、一役等宛御呼立、檜垣之御間二之間に御年寄中等御列座、大隅守殿左之趣御演述。

累年御勝手御難澁に付、御家中諸士知行米之内百石に十五石宛御借知被仰付置、一統困窮之段誠に御心外至極、御心労被成候。依之何卒御借知之分全可被返下思召に被為在候得共、當時ニても御逼迫至極之御勝手振に候故、中々其所へ者至り不申候。乍然今度格別之思召を以、當年より御借知米之内三の一宛一統被返下候。此段可申渡旨被仰出候。

右之趣被得其意、組・支配之面々に可被申渡候。且又組等之内裁許有之人々者、其支配江も相達候様可被申聞候事。

己酉九月

今般御借知米之内被返下候旨被仰出候趣、以別紙申渡候通に候。右被仰出候通、御勝手向御逼迫至極之處、格別之思召を以御借知米之内被返下候段、何茂難有儀に候。然上者不及申候得共、組・支配有之面々者別に心得も可有之儀、行跡不正面者組・支配之裁許行屆不申儀に候條、前々より被仰出之趣、急度可被相守候事。

右兩通之寫筆頭へ迄大隅守殿御渡之、相退候處左之覺書大隅守殿御渡、夫々可申談旨被仰聞候由に而、御横目中申談。

今日申渡候被仰出之趣に付、右上下に改、爲御禮人持頭分今明日中御用番宅江相勤可申候。幼少・病氣・在江戶等之人々江者、同役又ハ筆頭代判人より可有傳達候。右人々御禮、名代人御用番宅へ相勤可申事。

一、組・支配之人々御禮者、其頭等宅へ相勤、頭・支配人より御用番へ以紙面可申聞候事。

一、與力江者其寄親より可申渡候。御禮も寄親迄罷出可申事。

但、自分御禮に罷出候節、與力之儀も一所に可申述候事。

右之通夫々可被申談候事。

九月十七日

右大隅守殿被仰渡方、年寄衆御組之人持物頭一組宛、御用番御支配等之分一役幷類役宛、且御近習金谷共向之人持頭分江ハ、御表向被仰渡相濟候上被仰渡。將又支配有之平士江者、於御席夫々被仰渡候事。

十八日昨日被仰出之趣、諸組共今日・明日江懸組支配人宅江呼立夫々申渡有之。

九月十九日。紫野芳春院則通和尚、入寺御禮の爲金澤城に上る。

〔政隣記〕
九月十九日、業野芳春院則通和尚入院爲御禮出府、今日登城。於檜垣之御間御目見、十帖一卷獻上之。役僧も二人共壹人宛御目見。和尚出世未相濟候に付、御料理不被下之。御茶たばこ盆迄新番給仕。下乘は石川御門之外也。翌廿日旅宿へ御大小將平岡次郎市御使に而、白銀十枚・綾三卷被遣之。役僧字首座へは、白銀三枚宛被下之。右爲御禮同日登城。

九月廿二日。前田治脩、年寄加判たる者の勤務に關して諭す。

〔御親翰抜書〕
九月廿二日八時前何茂御前へ被爲召候段、玉川孫源太を以て被仰出、御居間書院に而御前へ罷出候處、左之御親翰被渡下、御請連名に而指上候樣御意、御請申上退去。

其方中事、年寄中用向加判申付置候事に候得者、仕置方僉議之趣各不殘心底可被申出儀に候。無左而は加判之詮も無之事に候。勿論可爲其心得とは存候得共、自然と相混候も可有之哉と猶更申聞候。尤年寄中よりも無隔意各へ及示談候樣、此度申聞置候條、猶以遠慮之意味聊も有之間敷候。たとひ年寄中より示談無之趣に而も、心付之品は無遲滯遂而可申出候。如此申聞候上は、各別的之氣味有之候而は可爲不覺悟候條、急度可相心得事。

己酉九月

右御請澤田折之助を以上之。

右之時之御家老今枝内記・本多頼母・前田圖書・大音帶刀・篠原織部・伊藤内膳。

九月廿四日。平岡次郎市先に城内の作法を誤りたるを以て指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕

九月廿四日、左之通被仰出候段、御用番村井又兵衞殿就被仰渡候、河地才記於宅、松原元右衞門幷御番頭伊藤甚左衞門立會、才記申渡之。

平岡次郎市

右次郎市儀、去廿日紫野芳春院旅宿ゟ之御使相相勤候に付、御城へ罷出候刻、石川御門通三之御丸之内、若黨兩人召連候儀不指支段、家來若黨より及答通り過、其段次郎市へ申聞候に付、早速若黨一人御門外ゟ差出候。御使相勤候節に、若黨兩人召連候而も不苦儀与相心得罷在、御定も有之儀を、家來若黨了簡を以御番人ゟ相答候儀、不屆之趣重々不念至極迷惑不存候旨、紙面指出し、御手前添書を以被上之候。三之御丸等御番人よりも、夫々及斷、委曲達御聽候處、急而御使相勤候節には、若黨兩人召連候而も不苦儀与存罷在候族、不心得之至に候。其上御番人より相咎候處、家來了簡を以不差支旨及答通り過候儀、常々家來申付方不行屆故

与、別而不埒之至思召候。依之次郎市儀急度指扣被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

九月廿四日

附、右次郎市儀十二月十一日御宥免被成候段仰出候旨、御城代本多安房守殿被仰渡、頭才記於宅甚左衛門立會申渡之。

九月廿五日。借知三分一減額に付その實行手續等を令す。

［御觸並御返書留］

別紙之通可被得其意候、以上。

九月二十五日　　長　大隅守

御　名殿

御　相　組殿

今般御借知三ヶ一被返下候に付、知行高百石に付拾五石宛之內、町藏入拾石之內五石宛、其入所村々に而都而半通相返候條、自分切手を以賣拂候儀勝手次第に候。今年之儀は指懸り候儀は是迄之通候條、來年に至り百石に拾石宛之御借知、五石者御藏入、五石者町藏入村附帳取立候條、來年二月限當場ゟ夫々帳面可被指出候事。

一、知行高百石より內之人々者、皆堂形入に候間、此度被返下候三ヶ一之分人々手前ゟ相納、

三の二之分者只今迄之通堂形御藏ゑ相納候様、給人より百姓ゑ可申渡事。

一、去年十月以後跡目幷御加増新知被下人々、今年より御借知帳面相改指出候分者、百石に拾石宛之内五石は御藏入、五石者町藏入に而帳面取立候條、此分は早速帳面可被指出候。且又百石より内之人々は、御用捨之三ヶ一引、殘三之二之分御借知帳可被指出候事。

但、先達而百石に拾五石宛之帳面被指出候分は、早速調替可被指出候事。

一、當七月より九月迄之内死去之人々者、半收納被下候付、御借知も半收納當り、只今迄之通り百石に拾五石宛取立候。尤跡目之御沙汰有之候はゞ、其節遂指引可申候事。

但、三ヶ一被返下候段被仰渡候以後死去之人々者、尤百石に拾石宛取立候事。

一、御切米御扶持方被下候人々者、御借知米當春三の二取立候間、當暮者尤取立候におよび不申候。併三の二より過上置候分は、追而當場印之切手を以相返可申事。

一、逼塞・遠慮等被仰付置候人々ゟ、此度被返下候御沙汰無之候條、逼塞等之人々名前有無之儀、早速相調紙面可被指出候事。

九月　　御算用場

九月、請米檢査又は渡物取調の爲御算用者及び郡方足輕の出張することを廢止す。

〔御郡典〕

什札、能州御郡奉行に

近年御詰米爲改諸郡に御算用者相廻、暨御郡方洩物爲改足輕相廻候得共、右御算用者を始相廻候儀、先可被指止旨被仰出、其段御算用場奉行に申渡候。依之に御詰米之儀者、御詰米奉行等精誠遂吟味可申候。且諸郡洩物之儀者、其所々奉行・支配人心懸嚴重相糺候得者、御縮方可相立筈之儀に候。以來者一統尚更締密相心得、遂詮議候樣可被申渡旨被仰出候條、被得其意、嚴重可被相心得候事。

酉　九　月

近年爲御縮方、御郡方に御算用者等被相廻候得共、今般御詮議之上先可被指止之旨被仰出候段、別紙御覺書御用番大隅守殿等御渡に付、寫相越候條被得其意、都而御縮方等之儀、役人共無遺失相守候樣可申渡候。洩物御縮方之儀兼々より被仰出候趣、其時々嚴重申渡置候處、心得違之者も有之躰、不届至極。全躰役人共も容易に相心得候躰に候條、是以後猶更締密心懸、尤其所々役人共晝夜無油斷縣廻、少に而も疑敷躰見聞候はゞ、速に可申斷候。別而浦方之儀は不審儀に候條、其所々面々に相考、尚更格別に御縮方可被成筋存付候はゞ、無泥可申聞候。萬一洩物等之儀於有之には、當人は不及申に、其所之役人可爲越度候。御縮方も相立、

譯而役人等も不被相廻候得者、畢竟村方失墜等も相懸不申、古來定法之所ゟ立歸御締方いたし候儀に黍被御渡候間、此段能々奉存付、諸事御締方行屆候樣可被心得候。仍而別紙寫相越之候、以上。

酉　九　月　　　　能州御郡奉行兼帶　水原五左衛門

御　郡　廻　井上勘右衛門

能州四郡十村中

九月。郡方に於いて御鷹役・御餌指等不正の行爲ある時は之を申告すべきことを命ず。

〔御郡典〕

付札、能州御郡奉行ゟ

爲御用御郡方ゟ罷越候御鷹方之者共之內、心得違之者有之、百姓及難儀に候筋有之旨、村方之者共申由風聞有之候。右御鷹役等於御郡方に、奢ヶ間敷儀有之、在家之者共難儀仕候樣成儀有之候はゞ、拙者共迄可被申聞旨、安永六年各先同役ゟ申添置候處、其後何等之儀茂不被申聞候間、指而相替る儀無之与存候へども、右樣風說も有之候に付、猶更申談候條、御鷹役幷御餌指共之內、於先々若心得違之者有之候はゞ、名前等被相糺候て、時々內分を以可被申

聞候事。

御鷹方之儀に付、別紙之通被仰渡候條、夫々不相洩樣可申渡候、以上。

酉九月　　　　　能州御郡奉行兼帶　水原五左衛門

　　　　　　　　　　御郡廻り　井上勘右衛門

能州四郡十村中

十月七日。岡田太郎右衛門等に儉約方主付を命ず。

〔每日帳書拔〕

寛政元年十月七日

岡田太郎右衛門
井上勘助
芝山十郎左衛門
槻尾甚助
青木與右衛門

今般以前之通御儉約方主付就被仰付候、右御用被仰付候條、御入用方等之儀緖密可被遂僉議候。併諸向より申出候趣理不盡に押付候樣成貌有之、先々不心服成儀有之候而には、却而御儉

約之筋相立不申候間、其所得与勘辨候而被取捌、勿論品により時々河內守等へ可被相達候。且又御次廻・御廣式向等之儀に付、內々心付之趣も有之樣成儀者、其品河內守等へ可被申聞候。樣子により横濱善左衛門等へも被申聞可然候。

一、右御用之品により、御前に被召出被申上儀も可有之候。都而諸向之儀、正路に委敷僉議可有之候。

但、江戶表之儀者、來年御在府より御儉約方役所可被仰付候。

右之通可申渡候以後、後刻御前へ被召出之旨も申聞候。

十月廿二日。金澤に於いて諸士に前田齊敬の來春出府を許されたることを告ぐ。

〔政隣記〕

十月廿二日、物頭已上布上下着用登城候處、如前々被仰渡に而、左之通御弘有之。

敎千代樣、來四・五月頃御出府之儀御伺書被指出候處、當月十一日御伺之通被仰出、忝御仕合被思召候。此段何も可申聞旨御意に候。

十月廿四日。金澤城尾坂口門前に上書を遺棄せしものあり。

〔政隣記〕

十月二十四日朝、尾坂口御門に餘程大成帳面認込候躰之一封張有之、上書前田大炊殿、天德院裏封日印有之。右御番人より御横目所へ指出之、當番前田甚八郎より相伺候處、其儘に而可差上旨被仰出則上之。且又公事場前目安箱之內へも上書上る。天德院与有之二封を入有之与云々。

十月。諸郡若年の十村等にその事務に精通すべきことを告ぐ。

〔岡部舊記〕

諸郡之內、別而年若成十村中勤方不委、等閑に相心得居候人々茂有之躰に候。隨分御用透には、勤馴候功者へ立入、勤向之詮議無油斷可相心得候。其方中勤方平日不吟味に而は、末々勢子之入方等諸事取治不行屆、下々も不信服之儀有之候。左候得ば役筋會得之儀甚肝要之事に候　自分呼出勤方之品相尋候條、其旨兼而可相心得候事。

酉十月　　改作奉行

諸郡

十月。御扶持人十村選定の手續に關して御算用場奉行より稟議す。

〔改作年中行事〕

御扶持人とは御扶持人十村の略場達は御算用地より上申の意

寛政元年御扶持人撰方之儀に付場達之趣。

諸郡御扶持人十村之儀者、別而人柄も宜、第一實義を以御郡方之様子相考、私共に内意も申聞、立毛見立之節には他郡に召連免合入札等爲致、私共取圖り之根に仕候儀。其外何品によらず、一郡に渡り御用相勤候儀。御扶持人十村不宜候半而は、組々離々相成、別而凶年抔人氣之不靜節、取治出來兼ケ様之趣、平十村与者格別之役筋に御座候。然處御先代様より代々御扶持被下置候百姓、十村役被仰付候得者、右御扶持高を持込、直に御扶持人十村に相願申儀、且又其子孫御扶持人十村可相勤程之人柄に無御座候而も、父祖之勤功を以跡組十村役相願候得者、前段之趣に而直に御扶持人十村に罷成候儀、是迄之振合御座候。依之おのづから不相應之者共御扶持人十村に罷成、御用に相立兼候。且又右御扶持人十村之子孫等、平十村は相應可相勤人柄に候得共、前段之通直に御扶持人十村に相成候儀をいとひ、子孫之者を不奉願、他より引越十村等相願候様之儀も是迄有之候得共、左候而者父祖之勤功も空敷罷成、當時相勤居申者共之進に茂相成不申、子孫之者共も迷惑可仕儀。旁以是迄与は格合相違仕候へども、以來は家に附候御扶持高は別段之儀に仕置、平十村は相應可相勤人柄之者に候者、先十村に相成、追而功者に茂罷成、御扶持人十村に奉願候節は、右家に附候御扶持高は別段に仕、定之通御扶持高拾五石別に被下之、御扶持人十村被仰付候様仕度奉存候。乍然御扶持

人十村可相勤人柄見立候者に候者、尤直に御扶持人十村に相願可申と奉存候。是又前段之通り、家に附候御扶持高は別段に仕、定之通り御扶持高拾五石別に被下置候樣に仕度奉存候。右之通に仕候得者父祖之勤功も捨り不申、當時相勤居申者共之進にも罷成、第一不相應之御扶持人出來不仕可然樣に奉存候間、以來は右之通被仰付候樣仕度奉存候。

一、御扶持人百姓に而無御座者之内に茂、父跡等十村役に相願候へば、必無組・御扶持人等に前々より相願來候家筋之者共有之候。是亦前段同樣之趣に御座候間、以來者先平十村に相願、追而猶更人柄も見定役筋功者に罷成候はゞ、御扶持人十村に可相願与奉存候。右之者どもも御扶持高之儀には、前々何町何反或は何拾石与高相極居申趣に而、御扶持人被仰付候得者、代々右之通被下來候間、此儀は以來も前々之高奉願度奉存候。

右御扶持人願方之儀、前々之振合今般相改候儀不容易儀に付、打返詮議仕候へども、是迄之振合に而者、前段之趣に而おのづから不相應之者共御扶持人罷成、取治行屆兼、御郡方一統之不信用に罷成可申儀。大切之儀に付、無據私ども詮議之趣御達申候間、猶更御詮議之上、否被仰渡候樣仕度御座候、已上。

酉十月　　杉野多助

笠間九兵衛

一、右場違後翌年五月、達候趣ニ不容易趣に候間、猶更外に詮議方ニ有之間敷哉之旨被仰聞候に付、打返相考候得共、別段存寄無之候間、何分前段之通に相成様にと申達有之候事。

一、右之後同月二十八日、場違之趣ニ、十村役申付方之儀ハ御同存に御座候得共、御扶持人に被仰付候節、二重に御扶持高被下候儀不容易儀に候間、以来御扶持被下候平百姓より十村申付候刻ニ、器量を見計直に御扶持人十村役可相勤、人柄之者ハ右家に付居候御扶持高を持込御扶持人十村に申付、或ハ平十村役可相勤人柄之者ハ、家に附居申御扶持高ハ別段に致置、役儀ハ平十村に申附、追而勤功、御扶持人十村役可相勤罷成候はゞ、其節名目ヲ改、御扶持人十村に申付候ニて、私共詮議同様之趣に而、御扶持高二重に被下候儀無御座可然旨。別紙各様詮議之趣承知仕候云々、段々得失ヲ申述、何れ初ニ達候通りに有之様に与場違有之事。

一、右之通之所、其後いかゞ相決候哉留等不見當候得共、粗相しらべ候所、其已前ハ代々御扶持之者十村役に成候時ニ、必直に御扶持人十村に成居候七・五斗之儀にて也。家筋之もの、寛政之度より最初ハ平十村に相成居候、御扶持高頂戴之儀也。將又反別等に而被下候御扶持高之ものに而、世々初より御扶持人十村に成居候家筋之者茂、寛政之度よりは最初平十村に成ものも有之候。御扶持高

之事は、達方通りに成候もの不見當、無之体に候。左候得者前段之趣は、都而達通り与有之候所、右に當るものは御扶持人に願候儀無之故か、又は御扶持高之事は達通り不成や難考候。何れ其後文化にも、右樣之的例之者は無之候事。

一、文政に御仕法有之、名目等も御改め、天保十年復元之趣に而御潤色有之、當時之處は都而本文之通に候事。

但、尤代々初めより御扶持人十村に成などゝ申儀は無之、御扶持高与役儀与は別之形に候事。

十一月四日。前田治脩、四民の風俗を正す爲に老臣及び執筆の行狀を愼むべきことを諭す。

〔袖裏雜記〕

十一月四日安房守・大隅守・河内守・山城・大炊・玄蕃助御前に被召、左之御親翰兩通被渡下、猶御意もこれあり。(御意之趣要に書す。)

卷日之上、年寄中に

今度於公儀、御代々之思食を被爲繼被仰出之趣、追而御下知之品各にも承知之通に候。尤其御沙汰無之とても、忽に可存樣は無之事に候へ共、右沙汰有之上は猶以國政相勵可申儀、至

我等之可爲御奉公存候。當家は諸侯之見習にも相成候段は、跡々より老中噂之趣も有之事候間、別而油斷難成儀に候。然處國中四民之風俗次第に懦弱に相成、諸士は文武之心懸薄く、町・在は商賣農業を懈り、各職分をわすれ、從先代被仰出之趣をも令違失、彼是妄成族に候。依之嚴重可相糺候へども、畢竟風俗は其上たる者之行跡不正故、ケ様に成行候与存候。先以年寄中は重職之儀、正直を基として身分內外相愼、文武を勵み、子弟之成立等是亦從先代被仰出之趣都而嚴重に心懸、一統之手本に相成候樣可心得儀肝要之事に候。勿論組中指引方等、暨面々之家中之取捌、常々油斷有間敷候。風俗之儀に付而、跡々より每度申出趣有之處、其砌は暫相愼候樣にも候へども、人氣輕薄に而無程又々立かへり候。加之其已前よりも惡事深く成行候躰に候。右人氣輕薄之中も、前段に申ごとく、其上たる者心得不宜故に候。然處元來年寄中不心得之品々共有之に付、彌風俗惡敷相成候与存候へども、態与一々は不申出候。今般公儀之思食を重んじ、熟慮之上如此申出候上は、各互に相勵み、以來年月を經候とも此度申出候趣令違失無之樣にと存候。無左候而は、我等如何樣に存候とも不事整儀候條、此段會得可被致候。如斯申出候上、若不愼等之族も候はゞ、急度存寄有之候間、兼而其覺悟尤に候事。

寛政元己酉十一月

執筆は年寄中席の書記ないふ

各席執筆役は政務重き品々筆記、および諸役人取次をいたし候事に而候處に、是迄執筆共之内にも心得違候者は、各僉議之品又は諸役人懸合之節も、自分之了簡を申出候族も有之躰相聞候。先例しらべ等之儀に付而、各へ心を付候事などは可有之儀にも候へど、私之了簡を介助言之事は、身分を打忘れ、一向有之間敷儀に候。向來執筆役之者共、右助言等之心得違有之候はゞ、急度相咎可被申候。其上にも不相愼候はゞ、早々指除可被申候。是迄執筆役不心得之者共有之故、自然与各にも執筆共之了簡を借用ひ被申候などゝ世評有之、政務之大きなる害に相成、畢竟各職威もかろく成行候基に候條、能々被示合、右躰不宜振合は嚴重に改め、席邊之樣子表向より目を付替候程に可被致候。諸役人とも多分は各直懸合有之、尤に候。左候へば役人共性質等も相知、且聞違等之儀も無之、旁以可然存候事。

己酉十一月

十一月廿九日。廻方足輕小島新左衛門等賊を捕へんとして傷けらる。

〔政隣記〕

十一月廿九日朝五半時頃、堀川片原町越中屋五兵衛方納屋二階之内に忍居候賊を、盗賊改方野村次郎兵衛手合、廻方足輕小嶋新左衛門・米山佐左衛門・淺田德右衛門・森田直右衛門召捕に向、最初新左衛門儀召捕懸り候處、右賊拔刀を携有之、二階階子之高橫に有之新左衛門面躰へ疵

付、佐左衛門ゟも同斷申付、其所へ德右衛門・直右衛門飛懸り、無異儀召捕之。

右等之趣、役頭次郎兵衛方へ及注進候處、次郎兵衛了簡之趣、御用先之事にハ候得共、新左衛門儀程深手之旨に付、右四人共右場所引取候儀猶豫申渡置、御用番本多玄蕃助殿へ相達候處、疵付之者改方切に而之取計者不相成旨被仰渡候に付、於役先疵を負候間、改方切に而相濟候儀勿論之事故、重而其段玄蕃助殿へ相達候得共、御聞屆無之に付、公事場檢使を可乞旨、公事場奉行御用番品川主殿へ申達。依之檢使宿者、右邊惠光寺へ町役人を以申談置候處、翌朔日朝六半時頃、檢使與力村田三郎右衛門・中村團助罷越、遂見分口上書取受、新左衛門儀は療治中身當支配人割場奉行へ指預、佐左衛門儀ハ不及貪著旨申談。右檢使二日曉天に相濟、何も夫々引取、且檢使乞之儀割場へも申達有之、割場奉行里見孫太夫、割場御横目水野七右衛門、檢使宿へ爲立會相詰有之。且召捕候右賊ハ、先年退轉之定番御歩舍弟に而、當時御算用者瓜生平助養子に成居申、五左衛門与申者に而、（右瓜生平助同日廿九日令出奔等云々。）年二十二歲。此者檢使所ゟも直に公事場へ引取之、於公事場追而吟味有之候處、今月廿八日夜安江木町藏屋何某与申兩替屋に、宵より忍入、金銀を盗可申与心懸候處、家内之案内を不知候故、おのづから致躊躇候內、早曉近く、往來人も多く、家内之者共も起出候而逃出候事も難成に付、火打取出し火を放ち、火事之騷に可逃出与存候處、怪喚きこて家内騷出し、被見咎候に付、無是非部戸

をはね揚、一騰に逃候處、其家より螺を懸、盜人逃すなと云呼り候故、近邊之町家も騒立、同樣に呼り候に付、升形惣構之川通り逃延、家根傳ひに前記之越中屋納屋へ忍込候旨等云々。

但前記之小嶋新左衛門は、荒町に居宅有之、米林佐左衛門・淺田德右衛門も堀川邊に居宅有之に付、承之其儘罷越、大勢捕に向候者共与申談、森田直右衛門も其内罷越捕懸り候得共、兎角右賊家根等之下り登り自由を得候而逃廻り、其上刄を持有之に付容易に難捕、大勢出候者共ゟ申談遠巻にして慕ひ歩行、兎角不逃樣に致し有之、其内屋根より追下し、上より石等打付候得ば、右越中屋納屋へ入候に付、其儘前記之通新左衛門等附入候處、疵被爲負（新左衛門は頭に被疵被、佐左衛門は眉間を被切候。）候得共、漸に召捕之。

附、野村次郎兵衛取携、不出來至極与世評區々也。

一、前記之通檢使を請候樣、御用番被仰渡候得共、新左衛門は深手に付宅へ爲引置、佐左衛門は淺手に付其場に措置之、且新左衛門儀從公事場割場預に候得共、役先御用に而手疵を負候者之事に候間、勤番人附居候事に御用捨御座候樣仕度段、十二月三日御用番前田大炊殿ゟ、野村次郎兵衛以紙面御達申候得共、御聞屆無之、翌年正月十三日新左衛門儀公事場へ召出、替品無之由に而預之儀指宥申渡有之。附、新左衛門疵平癒之段、公事場へ割場奉行より屆有之に付、本文之通呼出有之候事。

十一月。犀川大橋の架設に從事する外作事奉行、頭巾を被りたることを取調べらる。

〔御横目方密役記〕

一、寛政元年十一月犀川橋掛直被仰付、外作事奉行兩人野村與右衛門・毛利猪右衛門被仰渡、御大工兩人、同役よりは一人宛くりかへ、朝六時より暮頃迄相詰候。同廿六日御横目所ゟ橋掛り之同役一人罷出候樣申來候に付、當時主付申者は無之候へ共、松田又右衛門度々罷越候に付、則罷出候處、頃日犀川橋於御普請所、外作事奉行頭巾かぶり候由。前々其例も有之候哉と被相尋候に付、前々之例は覺不申候へ共、川之儀至而寒風烈敷、俄に雪などふり候時は、有合候へば頭巾或は手拭などかぶり申儀も有之候段相達候。遠所等之儀は如何と被尋候に付、又右衛門遠所御用等に未罷越不申候故、不案内候間、同役申談可罷出旨申入、則久保文左衛門申談罷出候處、右尋に付、於遠所隨分かぶり申段相答申候。此儀は丈左衛門心得違、遠所にても奉行等はかぶり不申、其以後同役よりも與右衛門ゟ申入候而、かぶり不申候事。

十二月七日。四民の風俗に關して令す。

〔政隣記〕

十二月六日御用番大炊殿より、同役幷敎千代樣附御大小將御番頭栢植儀太夫・北村三郎左衞門連名之御廻狀を以、御用之儀有之候條、明七日五半時常服に而可致登城旨被仰談候事。

但、頭分以上不殘幷支配有之平士も右同樣御呼出之事。

七日、昨日大炊殿依御廻文、頭分以上幷支配有之定役之人々各登城之所、於檜垣之御間御年寄中等御列座、一役宛御呼立、左之通御用番被仰渡、御書立等三通御渡。

但、御年寄中御組之人持・物頭者、一組切最初に御呼立、且平士之分者夫々畢而於御席被仰渡。

四民之風俗次第に惰弱に相成、一統難澁は申立ながら奢侈は倍甚敷、諸士は文武之心懸薄く、町・在者商賣農業を慢り、各職分を忘れ不似合所行有之躰に付、可相糺与存候所、今度於公儀御代々之思召を被爲繼、格別被仰出之品有之、且儉約等之儀段々被仰渡候。因玆今般年寄中初へ申出趣有之候。殊に諸士は三民之上にたる者に候處、不覺悟之輩は常々不法之族も有之躰承候。如斯に而者先代にも如被仰出、雖爲普代舊功之家筋、不得已加嚴制候樣可相成儀者心外之至に候。乍然當時可相糺不法之者も、先不及貪着候條、自今速に相改、從先代被仰出之趣萬端嚴重に可相心得候。猶儉約等之儀に付而委細は、年寄中より申聞候事。

己酉十二月

四民風俗之儀に付、今般御書立を以被仰出候通に候。治世百年にも不及内に、諸士武儀を相勵之心懸有之、萬端質素にして武役にも全相整候故、町・在とも夫に准じ商賣農業を相勵實儀有之、おのつからに萬物通用宜敷、諸品も下直に候處、元祿年中以來漸風俗奢侈に移り、實儀薄く、物每繁多瑣細に罷成、諸品年々高直段々難澁に付、御儉約等之被仰出有之候。寶曆九年御類燒已前迄者、御勝手之御難澁いまだ當時程に者無之候所、御類燒以後莫大之御物入に而、次第々々に御難澁深く、四民之風俗も彌懦弱に相成、從御先代被仰出之趣をも違失仕、殊に女色淫亂等彼是妄成族增長、其上近年御借知有之諸士別而難澁故、町・在とも又夫に准じ候躰に有御借知を以御勝手御取續被成候得共、是以全き御足りに相成不申候。乍然御家中諸士も、右之通勝手困窮之躰御心苦被成、段々御僉議之上、御難澁之内を被引欠、當年より御借知之內三ヶ一宛被返下候。誠に少分之儀に候得者、少祿之人々者別而勝手之爲にも相成申間敷与被思召候得共、右之通之御勝手據故外に被成方も無之、御心外之御事に候。右三ヶ一被返下、彌御勝手御運び方六ヶ敷候に付、猶又御儉約可被仰付候。御家中之人々も士之實義を存付、武役之外者省略可仕候。從前々儉約之儀被仰出、近くは安永五年にも申渡候處、表向者儉約之名目を立候而、內證は不都合之躰。且其砌者暫相慎候樣に候得共、全相守得不申、又々立歸候段不實之至に候。畢竟衣食住之初、節儉を以要用を達し、作法正敷可仕儀可爲本意候。

假令ヶ條書等を以申渡候而も、日用萬品に付其節儉を失ひ、或は親屬等に對し參會等不得已品に而も、儉約与申立不筋之儀有之、或は身分々々之利をのみ事と仕、吝嗇を以儉約与存候族は不心得之事に候。此等之所一統存辨、四民各職分を相勵、無用之費を省き、無內外遂儉約、從御先代被仰出之趣萬端急度相守可申事。

己酉十二月

四民風俗等之儀に付、今般御書立を以被仰出候に付相渡之候條、可奉得其意候。殊更拙者共よりも、猶更委細可申渡旨被仰出候に付、別紙覺書一通相渡之候。段々思召之趣被爲在、右之通被仰出候上は、已來不愼等之族有之候而者、御用捨之御沙汰有御座間敷候條、被仰出之通萬端嚴重相心得可申事。

右之趣被得其意、組・支配之人々に急度可被申渡候。組等之內裁許有之人々者、其支配にも申渡候樣、是又可被申聞候事。

己酉十二月

右相濟、脇之御間於橫廊下披見、御橫目中申讀有之則左之通。

付札、御橫目に

今日人持中を初一統申渡候趣に付御請之儀、年寄中一組切物頭迄連名、月番之宛所に而可指

出候。且又幼少・病氣・在江戸等之人々者、同役又者筆頭或者代判人より、御書立等之趣相達可申候。猶又御請之儀、在江戸等之人々者別紙を以指出可申候。幼少に而判形等も難成人々之儀は、代判人より是又別紙を以御請可指出候。諸組頭等之分も右之趣に相心得、組・支配之人々御請之儀者、其頭々に取立、其趣右御請に書載可申候。右之趣夫々可被申渡候事。

十二月七日

御請左之通執筆を以御達申候事。

今般四民風俗之儀に付、御書立を以被仰渡之趣奉畏候。段々結構に被仰出、難有仕合奉存候。右御請上之申候、以上。

己酉十二月　　同役連名判

前田大炊殿

十二月九日。諸役人依怙贔屓の擧動あることを戒む。

〔政隣記〕

十二月九日諸役人中へ於御席別而嚴重之被仰渡有之。下役人依怙贔負賄賂之沙汰有之躰、自今於有之は曲事可被仰付旨被仰出之趣、御用番大炊殿夫々へ被仰渡。

十二月廿八日。賭博及び之に類する遊戯の制禁を令す。

〔政隣記〕

十二月二十八日左之通御用番大炊殿より御觸有之。

かけの諸勝負は御制禁に候處、近年町・在之者共右樣之勝負事に携、不埒成爲躰に候、此等之儀に付今度町奉行等へ申渡候趣有之候。御家中召仕候輕き者共之内にも、不愼之者は右樣之出會に相交り、小身之人々抔は畢竟子弟成立にも相障候躰。將又正月は、勝手向等に而小兒抔之遊び事与名付、博奕に似寄候慰事有之、不苦儀之樣に存候族も有之候躰に相聞候。假令遊び事に候共、かけ物仕勝負を以慰与いたし候儀者御停止之事に候條、其主人々々より堅御制禁可仕候。右之通被得其意、組・支配之人々江可被申聞候。組等之内裁許有之面々は、其支配江も相達候樣可被申渡、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十二月二十八日

十二月廿八日。諸役人等の近習御用横濱善左衞門に對し公務を内談することを戒む。

〔政隣記〕

十二月二十八日、左之通御用番大炊殿御渡之旨等、定番頭津田平兵衞より廻狀有之。

諸頭・諸役人へ可申聞趣。

横濱善左衛門等席勤方は、都而品重き內用等執次仕事に而、政事に預り、或諸役人へ對し了簡を演、又は申付も無之品を私与して僉議など仕儀に而者無之事に候處、近年勤方不心得之品々有之、且諸頭等之內にも心得違之者に、善左衛門等へ用向懸合候節、其役筋に而無之事も申出候樣成儀有之。或役筋に而も、善左衛門等へ及內談候上、達聽候儀に而者候得共、內分承置候樣致度抔与、雜談同樣之儀有之、當時に而者流例之樣に相成候躰及承候。因茲今般善左衛門等心得之儀、段々申渡趣有之候條、向來諸頭等も役筋用向寬事之外、內談ヶ間敷儀抔仕間敷候事。

己酉十二月

付札、定番頭へ

別紙御書立寫一通相渡之候條、奉得其意、諸頭・諸役人へ可被申談候事。

己酉十二月

十二月廿八日。近親間に於いては服忌の關係なきものといへども互に緣組をなすことを禁ず。

「政隣記」

十二月廿八日左之通廻狀有之。

付札、定番頭へ

其身他家へ養子に參り、親類之內養・實之伯叔父・姑・姉妹、右相互に服忌無之共、其身よりは身近き事に候間、右親類与相互に緣組相願候儀は相扣可申旨被仰出候。

右之趣被爲其意、組・支配之人々に可被申渡候。且又組等之內裁許有之面々者、其支配へも申渡候樣可被申談候事。

酉十二月

十二月。諸郡寺社の濫に屋敷替を出願するを禁ず。

〔三百二條舊記〕

一、三州御郡地に致居住候寺社、川筋等に而屋舖地缺損に相成候樣成節、無據屋敷替相願候儀尤可有之候得共、近年かへし地或所々向寄之善惡等申立、猥に屋舖替願出候族も有之候。土地之儀は於改作方甚品重儀、容易に替地等聞届有之候而者、御締方に指障之儀不及申候得共、末々百姓共無辨、一概に致歸依候寺社中之申分に從ひ、後難之儀も不顧願出候。寺社中最初內談におよび候節より、指支無之段申答候与被存候。前段之通り土地之儀者大切之儀に付、以來者土地好惡等申立、猥りに屋敷替願出候儀有之候共、聞届無之樣有之度段、夫々御

達中候所、可爲其通旨御年寄衆仰渡候條、得其意、一統百姓共に可申渡置候事。

酉十二月　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

〆

寛政二年

正月朔日。前田治脩金澤城に於いて年頭の賀を受く。

〔政隣記〕

元日登城。一番御禮人六半時揃、二番御禮人五半時揃、頭分以上六半時より五時前迄に追々登城、於御表式臺御帳に付。且四時頃於檜垣之御間年寄中・御家老役・若年寄中獨禮被爲請、近年之通諸大夫衆も長袴に而御禮、右相濟九つ時過柳之御間に御着座、人持・頭分獨禮被爲請。右献上之御太刀等披露御奏者番、引役御大小將替々勤之。夫より於御居間書院幷松之間、御近習之平侍一統禮被爲請。鶴之庖丁御料理頭勤之、御覽、右御吸物等御祝。重而七時前柳之御間に御着座、病等有之獨禮難申上人持・頭分・御大小將上列座、六組御大小將幷御用番支配・御射手・御異風・新番小頭　三十人頭・新番・御醫師・坊主頭列座、一統座付之御禮被爲請。

正月二日。前田治脩年頭の賀を受け、同夜病むを以て松囃子の式に臨席を廢す。

〔政隣記〕

正月二日、御禮人揃刻限昨日之通に而、四時頃柳之御間に御出、昨日御用に付御禮不申上人持・頭分、一番座御禮人上に列し御禮、御大小將等・御馬廻組御禮被爲請。九時前重而御出、二番座御馬廻組御禮被爲請。

同日御持病之就御痛積、明三日御寺御參詣、年頭御禮被爲請候儀御延引被仰出。

同夜就御松囃子に、御例之通各登城。御座敷等御規式之通夫々相整候得共、御出御遲滞之處、夜五時過於柳之御間御流頂戴可仕人々に、御用番安房守殿左之通就御演述各退出。

今晩御表に被遊御出、前々之通御規式可被仰付候處、御前御痛邪、其上御寒熱強く、第一御腰痛に而御歩行被遊御難儀候に付、今晩御表に不被遊御出候。依之一統御流頂戴不被仰付候。

此段何も被可申聞旨被仰出候。

正月四日。前田治脩病むを以て年頭の賀を受けざるも、弓初・打初・乘馬初の儀を行はしむ。

〔政隣記〕

正月四日御所勞未御宜に付、今日御禮不被爲請段昨日被仰出。御弓初・御打初・御乘馬初は御例之通有之。且御弓初之節御前御出無御座に付、御奏者番等伺公に不及筈之處、右御規式始り前儀に請合切可致列居旨、御用番被仰聞、組頭・新番頭・御歩頭常服に而請合候に付、俄に熨斗目に着改、御大小將御番頭・御横目者右御規式に付熨斗目着用罷在候事。

但、御先手中等御門堅・前々之通有之。

右御射手裁許御異風裁許・御射手・御異風・御馬乘役・御馬醫并御仲間・小頭等へ、夫々御例之通拜領物被仰付、右御馬醫以上於御臺所被下物も御例之通。

正月五日。前田治脩の疱瘡に罹れることを發表す。

〔政隣記〕

正月五日左之通於御横目處披見、尤御用番被仰聞候旨申談有之。

付札、御横目に

中將樣頃日御熱被爲在候處、御疱瘡に被爲成候間、伺事等不指急品は都而指扣可申候。右之趣無急度、夫々向寄に可被申談候事。

早打に貸渡す定額は七十兩なり。本文誤にあらざるか。

右に付三日以來之年頭御禮都而御延引、尙更可被仰出旨被仰出候段、御用番被仰聞候由御横目廻狀出。

但、夜前より御疱瘡に相極り、今日より御出痘。依之江戸表之早打御使、御近習御奧小將御番頭廣瀨武太夫に被仰渡。依而金小判九十兩御貸渡、白銀五枚·御紋付御羽織拜領、御内々白銀三十枚·御道服被下之、今夜發出之事。

附、右武太夫十一日朝四時江戸參着、御使相勤候處、從壽光院樣白銀五枚、從祐仙院樣金千疋、從松壽院樣ゟ金千疋被下之。同日夕江戸發、指急歩に而罷歸候樣、先達而於金澤被仰渡有之に付、十八日夜五時頃歸着之事。

包紙上書

各急速先々可被相廻候。　本多安房守

中將樣頃日御熱被爲在候候處、御疱瘡に被爲成御順痘に被成御座候。依之明六日四時より九時迄之内に登城、御順痘之恐悅猶更可被相伺御機嫌候。病氣等之人々者、御用番宅迄以使者可被申越候、以上。

正月五日　本多安房守

津田權平殿　但同役五人連名

六日、昨日御用番安房守殿依御廻文、人持・頭分布上下着用登城、於表御式臺御帳に付退出。

一、御近習内藤宗安御藥上之、診者御醫師中并陪臣醫・町醫之中に茂世上に相用候者共ぇ被仰付、且御肩發中分よりは少く、御飯も御相應に被召上、御順痘に而今朝より御水膿之御催に被爲在、將又就御疱瘡、昨夜より御年寄中・御家老中毎夜二三人宛被相詰、暮頃より御出席五時過御退出候事。

正月十六日。前田治脩の疱瘡癒えたるを以て酒湯に浴す。

〔政隣記〕

正月十三日、左之通御近習御用部屋勤志村五郎左衛門被相渡候由に而、御横目所披見申談有之。

付札、御横目中ぇ

當十六日御酒湯爲御祝儀、表向詰合切御奏者番并頭分・御歩並迄、赤飯・御酒・御吸物頂戴被仰付候間、此段前日夫々可有御申談事。

但、御祝頂戴之人々、頭分熨斗目、平士以下服紗小袖・上下之事。

一、頂戴之御禮御臺所奉行ぇ可申述事。

一、人數之儀早速御臺所奉行へ可有御書出事。

一、年寄中・御家老中・若年寄には御近習頭より申達候事。

一、御近習廻り等之人々、別紙に記候分は御膳奉行より申談候事。

正　月

〔政隣記〕

正月十六日、前記十三日に有之通、今日御酒湯被爲曳候に付、御歩並以上當番之人々、頭分は熨斗目、平士等者服紗小袖・布上下終日着用罷在、御祝左之通詰合之人々頂戴之、御禮は御臺所奉行に申述。

御赤飯　小皿　胡麻鹽　御吸物　鴨・しいたけ　御酒
　　　　小皿　切　鯣　　　　　いてう大根

御取肴　頭分以上は卷鯣、平士以下は切鯣。

右年寄衆・御家老衆・若年寄衆は、於常席坊主給事に而頂戴之。其外は於御臺處席分出來、其所々に而頂戴之。且御近邊向御杉戸之内勤仕之人々者、非番・當番一統頂戴之。且御匙内藤宗安、相見大庭阜元、并診被仰付御醫師中、御次御杉戸之内に而頂戴、尤白銀御目錄夫々拜領被仰付。左末に記之。御醫師之外にも左之通拜領物被仰付、御看病仕候者には、追而別段重而拜領物被仰付候等由也。

縮緬三巻宛　年寄中。

紗綾二巻宛　御家老役等、在江戸津田修理ゑも被下之。

御紋付上下二具・白銀五枚宛　横濱善左衛門・志村五郎左衛門。但善左衛門舊臘より煩、役引に候得共御祝儀故被下之。

生絹二疋宛　奥取次初惣御近習頭。

夫々に應拜領物　配膳役幷御居間方。

右之外御勝手奉行・奥御納戸奉行・御近習番幷町同心、代合詰切候に付、染物二反宛拜領被仰付。

御匙内藤宗安ゑ御紋付御羽織白銀三拾枚。

御疱中詰切御醫師ゑは白銀拾五枚宛。

折々相詰候御醫師ゑは白銀拾枚宛。

一兩度診被仰付候御醫師ゑは白銀三枚宛。

右之通拜領被仰付。且診被仰付候本多安房守醫師原田玄昌、奥村河内守醫師嶋玄隆、前田大炊醫師松原柏庵、町醫師櫻井全安・津田道順ゑも、於柳之御間御廊下白銀二枚宛拜領、御用人御目録渡之。但、御赤飯等頂戴不被仰付候事。

併以病氣に而難被罷出面々は其段名之下に可被書記候、以上。
中將樣御疱瘡段々御順快被成御座、今日御酒湯被爲引候。依之爲御祝詞布上下着用、明後十八日四時より九時迄之内可有登城候。幼少・病氣等之人々者、御用番迄以使者可被申越候、以上。

正月十六日　　本多安房守

津田權平殿　但同役五人連名

正月十七日。德川家齊が前田治脩の病狀を問はしめたる奉書金澤に着す。

〔政隣記〕

正月十七日、御疱瘡御尋之宿次御奉書、當十二日渡、暮頃江戶發、今日暮頃到來。依之御小將頭堀平馬江右御禮之御使被仰渡、當二十一日可致發出旨も被仰渡。但御發駕之御樣子次第直に相詰可申儀も可有之、此儀は否追而被仰渡旨、御用番被仰聞。將又江戶表江御問合之趣有之、早飛脚遲着に付平馬發足相延、今月二十四日發、御使相勤、二月二十日江戶發、三月二日金澤江歸着之事。

附、御疱之御屆十二日朝有之候處、同日夕方御奉書相渡り候事。

正月十八日。頭分以上の士登城して前田治脩の痘瘡癒えたることを祝す。

〔政隣記〕

正月十八日、一昨日御用番安房守殿依御廻文、今日四時より九時迄之内頭分以上登城、御酒湯被爲引候御祝儀御礼に付、退出之事。

但、當番御大小將中布上下着用御式臺列居之事。

正月二十日。人持組三田村内匠の家來川村嘉兵衛殺さる。

〔政隣記〕

正月二十日夜九半時過、本之新保御家老役前田圖書殿門前に而、人持組三田村内匠家來用人享年三十歳川村嘉兵衛与、人持組松平潤之助家來家老林和衛守か‥享年二十歳宇兵衛与及及傷、嘉兵衛被切殺、宇兵衛ゝ薄手負候處、其場より直に主人潤之助屋敷に罷越屆候而、宅に罷歸、且日上間違之趣共有之、亂心に相成候事。

正月廿五日。徳川家齊使を遣はして前田治脩の疱瘡平癒を祝せしむ。

〔政隣記〕

正月廿五日於江戸、御上邸に上使御奏者番水野壹岐守殿を以、今度御疱瘡御酒湯被爲濟候爲御祝儀、御卷物白縮緬五・干鯛一箱・御樽一荷、如御前例御拜領。上意御拜聽御名代出雲守様。從御臺様ゝ同日以奉文、干鯛一箱・御樽一荷御拜受之段早飛脚、二月三日來着告來。右上使

等之爲御禮被指出御使、組外御番頭久田平右衞門ゟ被仰渡、同月七日發。三月四日江戶發、同十五日歸。

正月廿六日。家族に痘瘡患者ある者の登城に關して告ぐ。

〔政隣記〕

正月廿六日、左之通御用番被仰聞候旨等、御横目廻狀出。

中將樣御疱瘡被爲濟候に付、家內痘病有之候而も、二之御丸ゟ罷在候儀不指支儀与存罷在候人々も有之体に候。天明二年九月九日御觸出之趣に、敎千代樣御疱瘡不被爲濟に付而之儀に付、右寫を以心得違之樣向寄に可被申談候事。

正月。百姓の自ら役儀を望み町人等に奔走を請託することを禁ず。

〔司農典〕

三州百姓之內、十村以下之祝儀を望候歟、惣而自分之儀に付、御城下町家之者等ゟ向寄、御郡奉行幷拙者共之內へ通達之儀相賴輩有之。右被賴候者はうけがひ置候族も有之躰。右申込置候儀、百姓中之內賄に撰に預り、十村等に相成候得者、兼而うけがひ置候者之働之樣存、過分附物を贈候人々も有之躰相聞候。都而申込之儀は前々申渡、急度制置候處、其儀致忘失沙汰之限に候。畢竟十村役等相願可申与存候者も有之躰相聞候得ば、都而指省之、以來も右

大女院喪ノ告
靖門院ノ
今月ニ正月

樣之者之儀は、拙者共急度目を付候事に候。此譯人々致會得候はゞ、無益金銀を費申込等いたし候者は必無之筈に候之條、以來急度致會得、右之族無之樣夫々可申渡候。自今若不心得之者有之、申込等に致奔走候躰相聞候はゞ、急度可申付候。尤其方中之儀者、心得違無之樣相心得、子弟之者共にも可申聞候事。

戌正月　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

二月四日、大女院崩御の報金澤に達す。

〔政隣記〕

大女院樣今月廿九日崩御之段、二月四日金澤ゐ告來、普請は今日一日、諸殺生・鳴物等者明後六日迄三日遠慮之旨、御用番長大隅守殿御觸出。

二月十一日　前田治脩諸士に、德川家齊より先に病狀見舞の爲に物を贈られたることを告ぐ。

〔政隣記〕

二月十一日、一昨日御用番大隅守殿依御廻文、人持・頭分登城、御帳に付、於柳之御間列座之處、御年寄中等御列座、左之通御用番御演述。依之爲恐悅、各御月番御宅ゐ參出、幼少・病

氣等に而登城無之人々は、御用番御宅に使者可被差出段被仰渡候由、例之通を以御横目中申談有之。但今日・明後日之内御用番御宅に參出之事。

今度御疱瘡に付、先達而宿次以御奉書御懇之被爲蒙上意、御酒湯相濟候爲御祝儀、前月廿五日上使御奏者番水野壹岐守殿を以、御卷物・御樽肴被成御拜領、重疊辱御仕合思召候。右之趣可申聞旨被仰出候。

俊姫ハ前田利考ノ叔母

二月十七日。前田治脩、大聖寺侯前田利考の病を問ふ爲使者を江戸に發せしむ。

〔政隣記〕

二月十七日、勇之助樣御疱瘡之段申來に付、江戸表被爲御見廻早打御使、御大小將不破直記に被仰渡、今日七半時頃從御城發出、御例之通白銀五枚拜領、御目録御用番御渡、御定之金七十兩御貸渡。且從俊姫樣も御書御傳附。于時越中千原崎川洪水に付富山に廻り、二十三日辰上刻江戸御館へ參着、即刻御用人伴源太兵衛申談に而、聞番菊池九右衛門同道、勇之助樣御邸に御使勤之。御進物紅紗綾五端・串海鼠一箱・御目録、從俊姫樣紅羽二重三疋・干鱈一箱・御目録爲持罷越。御容躰茂相伺候處、昨二十二日御酒湯も相濟、御肥立之旨、御家老野口兵部を以御返答。且遠路大儀に思召候段、同人を以御意有之、一汁二菜之御料理等被下之。丹

後嶋三反拜領。（立戻自分御禮申上。）夫より御上邸に歸、同日發江戸、廿九日四時過金澤歸着、直に登城之處、御小將頭詰合無之に付、當番御大小將御番頭庄田要人誘引、御次并御席に出御返答書指上之。但最初に御用所に御使書等持參相濟、歸宅之事。尤歸も早打、且又御近習頭古市左衞門を以、少日間取候段就御尋に、途中雨天、其上道中人足遲滯に而日間取候旨、同人を以直記より申上候事。

二月十八日、馬廻組篠井次郎左衞門等出合宿に參會したるを以て處罰せらる。

〔政隣記〕

二月十八日不愼之儀有之、先急度指扣罷在候樣被仰出。

今井甚兵衞組御馬廻

篠井次郎左衞門

山田林左衞門組御馬廻

山田半左衞門

由田組

澤田順九郎

今井組

長谷川八三右衞門

右之通今日被仰付置候處、四月朔日山田半左衞門・澤田順九郎宅江、頭中川四郎左衞門、（二月二十七日山田林左衞門役儀御免除、代被仰付。）幷爲立會相頭武田喜左衞門罷越、篠井次郎左衞門・長谷川彌三右衞門宅ヘ、頭今井甚兵衞幷爲立會御用番渡邊主馬罷越、御尋之趣可相尋旨御用番本多玄蕃助殿依被仰聞、右人々晝頃より罷越、夜九時過相濟退出。然處同月十八日左之通被仰出候段、御用番玄蕃助殿頭々江御覺書を以就被仰渡候、前頭々於宅夫々申渡之。

付札、今井甚兵衞江

篠井次郎左衞門

右次郎左衞門儀、去年十二月朔日夜長谷川彌三右衞門等申談、觀音町能登屋助右衞門方江罷越、近邊江罷在候女共申遣咄合罷在候處、次郎左衞門召仕候下女いろ罷越、彼是申分有之由に付、樣子相尋候處口上書指出候。女色等參會之儀者、前々より嚴重之被仰出も有之候處、右之族前後不都合之趣、不埒千萬沙汰之限に被思召候。仍之御知行被召放候旨被仰出候。

長谷川彌三右衞門

右彌三右衞門儀、去年十二月朔日夜篠井次郎左衞門等申談、觀音町能登屋助右衞門方江罷越、

近邊に罷在候女共申遣呼合罷在候處、次郎左衛門召仕候下女いろ罷越、彼是申分有之由に付、樣子相尋候處口上書指出候。女色參會之儀は、前々より嚴重被仰出も有之處、右之族不屆千萬沙汰之限に被思召候。仍之閉門被仰付候旨被仰出候。

付札、中川四郎左衛門ゟ

山田半左衛門
澤田順九郎

右兩人閉門被仰付候。御書立長谷川彌三右衛門同斷に付略之。

右今井・中川兩宅ゟ爲立合渡邊主馬出座。但次郎左衛門等四人共一類同道に而呼出有之。

附、右十二月朔日夜次郎左衛門等銘々近邊之女共を呼參會有之候處、夜半之頃次郎左衛門召仕候下女いろ罷越、申分之上種々亂行至極之爲躰共有之に付、今年二月七日盜賊改方御用高畠五郎兵衛宅ゟ、右助右衛門幷出會候女共不殘召出詮議之上、いろは親舘屋八兵衛へ指預、同十六日より主人次郎左衛門ゟ指預、助右衛門は同日より禁牢、女共は組合等ゟ指預、いろ之外、女共は三月二日預之儀指宥有之。助右衛門は五月十五日指宥、出牢申付有之。將又助右衛門隣家多賀邊角家來八十嶋文平急度指扣申渡。尤主人ゟも屆有之。小松屋與十郎追込。向家田尻屋五兵衛は、病中に候申分等之儀不存旨故宥免。夫々二月十六日申渡有之。文平等

も五月十五日夫々指宥有之、右一件落着之事。

附、次郎左衛門御知行被召放候以後は、いろ儀重而親八兵衛に指預、是又五月十五日指宥有之候事。

二月廿二日。前田治脩、使を遣はして先に徳川家齊の病を問ひたるを謝せしむ。

〔續德川實紀〕

二月廿二日、松平加賀守治脩病を尋問せられしにより、使して謝せらる。献りものは一種一荷なり。

二月廿六日。前田治脩、當分諸士より借知を繼續するを以て益儉約を旨とすべきことを告ぐ。

〔袖裏雜記〕

二月廿六日安房守御居間に被召、被渡下候御親翰寫左之通。

勝手難澁候へども、格別之存念を以、去年借知之内三ヶ一充返遣候故、繕圖り方不足多相成、當時家中より借知も當分難返遣。依之一統兼而其覺悟いたし、幾重にも遂儉約勤仕取續候儀

肝要之旨等、此度一統ゟ申出通に候。各にも右之趣不申出候とても、油斷は有之間敷候へども、家々において家格ど申に而無之事に而も、流例之樣に成來、且亦同席ニ互に振合も可有之候得は、一人立候而ニ難改品も候半与存候。若左樣之儀に被泥候而は、一統之儉約にも相障も可申候。先達而も申ごとく、各には衆人之目當に仕儀候條、是迄段々儉約も可有之候へども、今般は尚更格別に被申談、衣食住を初精誠遂儉約尤に存候。此段爲念存付通申聞候。參會之儀は兼而も申候通、一向有之間敷儀には無之候へども、いたし方によつて甚風俗之害に相成候。各にはかやうの事、別而其心得可有之事に候。以來一通り慶事等にて一類共などへ參會之砌、先は日の内に相仕廻可然候。しかし在國中短日之節などは、彼是時刻も移り可申候へば、夜中五時頃退出可然候。勿論公私に付而急速之用事有之節は格別に候。此段は瑣細之儀ながら、風俗の一端にも候間、心付候通申聞候。猶更此等に准じ被申談、相極置可然品々も可有之候。兎角儉約は其程合六ヶ敷物に候。餘り窮屈成も却而破れ之基に候條、此處能々可被示合事。

二月。儉約奉行にその事務の遂行に關して告ぐ。

［御更雜記］

御儉約奉行ゟ

御儉約方僉議之儀、於御儉約所は委敷しらべ等も出來仕間敷に付、各奇日毎に檜垣之御間二之間橫ゐ出座、諸役所等御儉約之儀萬端綿密に相しらべ、逐僉議可申候。心付候儀は、御政務方ゐ拘り候事にても河內守等へ可申達候。品により御直にも可申上候。將又河內守等も御用之透次第罷出、及僉議可申候。

一、御算用場奉行も、御儉約方兼帶之儀候間、僉議之品可申談候。

右之趣可申渡旨被仰出候條、可被得其意候。尤御算用場奉行ゐも分而申渡候事。

二　月

御算用場奉行ゐ

御儉約方僉議之儀、於御儉約所――に付、奇日毎に――逐僉議可申旨被仰出、御儉約奉行ゐ申渡候。各にも右奉行申談、心付候儀は、御政務方之儀に候とも、御儉約之筋に可相成儀は、河內守等へ可申達候。品により――可申上候。將又御勝手御運方之樣子も、時々御儉約奉行ゐ可申談候。

右之趣可申渡旨被仰出候條、可被得其意候事。

二　月

御算用場奉行ゐ

御儉約方僉議之儀に付被仰出候趣、別紙を以申渡候條、御勝手方之人々も御儉約之筋心付候儀ニ、何品に候共無泥申出候樣可被申渡候事。

二　月　　　　　　　　　　　　太田彌兵衛

　　　　　　　　　　　　　　　寺田作右衛門

各儀御儉約方しらへ御用兼帶被仰付候事。

二　月

二月、使者として江戸に赴く者の、聞番足輕に金品を贈與することを禁ず。

〔袖裏雜記〕

定番頭へ

江戸表へ御使に罷越候人々、聞番方足輕共へ、金銀等爲土產相贈候儀類例之樣に成來候段相聞得候。御用方に付而は右樣之贈物一向有之間敷儀候處、不心得之事候。自今嚴重指止候樣可申渡段被仰出候條、可被得其意候。尤聞番等よりは役先之者へ申渡、萬一心得違相贈候儀有之候而も、堅相斷不致受納樣に申渡候事。

右之趣一統可被申談候事。

聞番江

江戸表江――各役先足輕共へ金銀等相贈申儀、流例之樣相成來候段相聞得候。御用方に付右等之贈物は、一向有之間敷候。依之自今嚴重指止候樣被仰出候付、今般申渡候。末々是迄振合与致相違候所を以、御用方不もこをり之儀有之候而は不輕儀候條、兼而其段役先之者共江可被申渡置候。將又萬一心得違相贈候儀有之候共、堅相斷不致受納樣に、是又嚴重可被申渡候事。

御用人江爲承知、聞番江申渡候寫を以申達。

二月、高價の雛人形を販賣することを禁ず。

〔袖裏雜記〕

寺社奉行・町奉行・御郡奉行江

近年雛之時節、猥に大人形又は巧成雛之類取扱候而、高料に致商賣候躰相聞候。元來雛之儀は甚費成品に候條、都而手籠巧成高料之雛之類致商賣候儀、嚴重指止候樣、右商賣人江可被申渡候。密々致商賣候儀於相顯は、急度相咎可申事。

庚戌二月

御家中一統に觸左之通。

於町方、近年大鑓等致商賣候儀に付、別紙之通町奉行等に申渡候付、寫相越候。勿論御當地に不限、京都等へも右樣之類申遣候儀、堅無用之事。

右之通ニ被得其意——

右之趣可被得其意候、以上。

二月　　大隅守

三月朔日。變死人等の檢使として出張する與力に饗應することを禁ず。

〔政隣記〕

變死人等有之砌、公事場より爲檢使與力共罷越候に付、於先々彼是費有之躰相聞候に付、今般公事場奉行に申渡趣有之候條、以來馳走ヶ間敷儀仕間敷候事。

右御用番山城殿御渡之旨等、定番頭池田積平廻狀有之。三月朔日

三月二日。郡方に出張する諸役人の行爲を戒む。

〔政隣記〕

三月九日、今月二日左之通御用番山城殿被仰聞候由等、御横目廻狀出、今日到來に付記之。

付札、御横目に

就御用御郡方に罷出候諸役人等之內、心得違候者は無用之酒肴等を誂、或私用之品をも御用之品与相混し、暫に而可相濟御用儀も日延罷在、或は宿驛は相省村方に致止宿、或家來抔之內不心得之者には於先々商用等之取組、或食事・舖物等をも宜敷品を好候樣成儀共有之、彼是御郡方之者共迷惑仕儀有之段相聞え候。以來右等之族無之樣急度相心得、從者にも嚴重可申渡候。右之通夫々可被申談候事。

戊 三 月

三月七日。金澤城二ノ丸殿中に於いて自害する者あり。

〔政隣記〕

三月七日朝五半時、上御臺所御橫目同心伊藤吉兵衛与申者、同所於詰所自害相果候に付、當番御大小將橫目小原惣右衛門、御臺所奉行土師淸吉・堀部五左衛門遂內見言上、重而夕七時過當番御大小將橫目今村三郎太夫見分。是に付御出之處有之、再見分云々。尤淸吉等も見分相濟候上、死骸讓紙に包み板戶に載せ、御臺所壁を拔き組頭溜り前空地に出し、夫より繩取廊下通新口へ持出、橋爪御門者右之方小口より、石川御門に而者左之方小口より持出之。附、右小口左小口之儀は、平日往來無之小口也。

右一件取噯に、都而御臺所奉行御城代懸合也。御橫目は見分迄に而、外に取噯之趣は無之。

但、自害所邊板敷取替、鹽水に而掃除等夜五時過相濟。附、元祿六年上御臺所小者溜に而自害、右以來於二之御丸變死無之由云云。

三月十五日。米價の下落に伴ひ諸物價を低廉にすべき幕令を傳ふ。

〔政隣記〕

大目付ゑ

近年諸色高直に而一統難儀之事に候。右は去る卯の年不作より打續米直段高直に候故、米穀を以造り出候類は勿論之儀、其外諸色共に米穀を元として相場相立候事に候得者、諸色米直段に准じ高下有之儀は無餘儀事に候處、未の年より追々作方宜、去年・去々年米直段も格別下直に成候得共、諸色之直段者其儘に而不引下げ致商賣、又は其品により出來不出來に從ひ直段之高下も可有之品等、出來方宜節も其儘直段不引下類、畢竟多分之利德を心懸候故之儀に而不埒之事に候。都而諸色仕出候共元直段よりして下直に相成、問屋・中買夫々商賣方も一賣等之不埒無之、相應之利德を以賣捌候事に候得者、一躰互に此心得無之而は、米價に准じ格別引下げ候事も不相成道理に候。一統に引下げ致賣買候得者、所得も同樣に當り、一統之潤に相成候儀に候間、商賣方之者共此儀厚く相心得可申候。依之其出來方も相應成品は、去る卯の年より米價高直最上之節之相場を引當、夫より米價引下げ候に隨ひ、諸色之直段も

今月は三月

引下げ候様、仕入元を始問屋・中買等夫々商賣方之者共に急度可申付候。右之通申付候上にも猶不埒之趣候者、其筋々令詮議曲事に可申付候。此趣國々所々へも相觸候間、諸色仕入元直段等引下げ不申、或堅〆等之不埒相聞得候者、其手寄商人共より、仲間之事たりとも可訴出候。尤訴出候者難儀に不相成様に致遣し、其品により可有賞美も候。不訴出其儘打捨置候者、是又可爲曲事候。

戌二月

右之通町々幷遠國諸奉行所在々迄も嚴重に申渡候間、私領之分其領主より一統敎諭を加へ、國産等元値段引下げ方、其外諸色賣買不埒之儀無之ため、別に懸り役人等申付爲取扱候程に可申付候。右之儀に付而者、町奉行・御勘定奉行等より懸合候品も可有之候。尤此上元直段等不引下げ趣も相聞候者、其領主之制令不爲嚴重沙汰にも至り可申候間、精々厚く可被申付候。

右之趣萬石以上、幷老中支配之面々可被相觸候、以上。

二月

右之趣町奉行九里幸左衞門・小寺武兵衞等にも被仰渡有之。且右公儀觸今月十五日本多安房守殿・長大隅守殿より御觸出有之、御家中一統に夫々頭等より觸出。

〔政隣記〕

付札、寺社奉行・御算用場奉行・町奉行ゟ

諸物價高貴に付從公儀被仰渡之趣就有之候、段々御僉議被仰付候。右高貴に相成候子細品々可有之候得共、食物等日用之品高貴に相成候者、用候人々多き故自然与直段引立候与相聞え候間、都而野菜・魚鳥等高貴之品ハ買求申間敷候。左候得者人々儉約にも相成、賣出候品も夫ニ准じおのづから下直に可相成儀に候條、此段急度可被申渡候事。

戌　三　月

三月十五日、自今三ケ年間の儉約を命ず。

〔御觸幷御返書之留〕

今般御儉約之儀段々被仰出候。依而今年より三ケ年間萬端御省略被仰付候。此段夫々可申渡置旨被仰出候事。

右之通被得其意、組・支配之面々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之人々は、其支配ゟも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月十五日　　横山山城

三月二十日。前田治脩、庶民に分限を守らしむると共に祭禮等の慰安を與ふべきことを諭す。

〔前々御親翰幷覚之品々留〕

盗賊改方へ

一、町・在之者共分限不相應之儀等有之故、追々申出候趣有之候條、此上不埒之族も候はゞ、無油斷相心得、手先之者へも申渡、嚴重に相糺可申候。將亦農工商共、分限を守り職分相勤候上者、年中遊逅之祭禮等者賑敷可仕事に候。此儀に付此度申出候趣も有之候間、右等之儀をも相糺候而者背本意候條、此處勘辨可仕事。

庚戌　三月

右寛政二年庚戌三月二十日高畠五郎兵衛へ、被爲召候節御直に御渡被遊候事。

三月廿二日。能美郡赤瀬村に火災あり。

〔政隣記〕

三月廿二日曉、上口之方大火、越前國火災与申候處、加州能美郡之内赤瀬村火災に而、大家六十軒計有之候處悉皆燒失与云々。小松筋に而余程出入之由。

三月廿五日。郡方の者の身分不相應なる着服を用ふるを禁ず。

〔袖玉雜記〕

盜賊改方より紙面を以申聞候趣有之に付、入御覽、左之通可申渡哉之旨三月廿五日伺、伺之通被仰出。

三州御郡奉行ゟ各通。

近年御郡方之者、衣食住分を越、諸事御定法を失、違亂以之外猥成族、增長之躰不埒之事に付、急度申渡候樣被仰出、去年十二月御算用場奉行迄申渡候通候。右被仰出にも有之通、百姓ㇾ町人之風俗を見習、身分不相應成着服等を相用候段不埒之事候。今般盜賊改方ゟ、百姓男女共不相應成着服等致候者於見咎は、其品々取揚、着用人之儀は急度縮申付、名前申聞候樣申渡候條、此段夫々可被申渡候。然上は百姓不相應之着服等相貯置、無用之儀に候條、取拂可申候。密々相貯置、自然賊等に出合及斷候はゞ、急度相咎可申候。若又賊に出合相斷申儀隱置、右賊被召捕於相顯は可爲曲事。

三月廿八日。奧村主水の配流を免す。

〔政隣記〕

三月廿八日左之通奧村左京ゟ被仰渡。

本月二十日の條參照

配流被仰付置候處、御免被仰出候條、迎人可指遣候。

奥村主水

右に付今晩迎人能州嶋へ爲致發足候處、四月朔日暮頃歸着有之。奥村河內守殿森下迄迎に被出、奥村左京初子息方何も津幡・高松邊迄迎に被出候由。

三月十五日の條參照

三月。米穀と均衡を得しむる爲諸物價を低下する方法を講ぜしむ。

〔袖裏雜記〕

左之通可申渡哉之旨、段々添紙面を以伺候處、伺之通被仰出。太郎右衛門は御算用場奉行、和平は御倹約奉行也。

岡田太郎右衛門

不破和平

當時諸色直段高貴に而、米直段与引合不申候付、今般從公儀以御書付被仰渡候趣有之候故、御領國產物等を初、諸物價下直に相成候樣、段々御僉議可被仰付候。依之各儀右主付被仰付候條、町奉行等へ被申談、綿密可被遂僉議候。存寄之趣等有之候はゞ、無泥拙者共迄可被申聞候事。

戌三月

四月四日、物價高直なるを以て諸士に銀子貸附を許すことを令す。

〔政隣記〕

四月四日、被仰談候御用有之候條、四時可有登城旨、諸頭・御用番等幷支配有之御役人、御用番等一人宛、御用番玄蕃助殿より昨日依御紙面、各罷出候處、於御席左之兩通御渡之。

諸物價高貴、其上町方不調達に而、御家中之人々當時勝手取續甚難澁至極之躰被聞召候。依之當七月迄爲取續、別紙割方之通當分銀子御貸渡被成候。先達而より段々被仰渡候通、御勝手御運方甚御難澁至極に候得共、格別之思召を以右之通被仰付候。返上之儀者、當七月・十月・來年七月与三度に、一ヶ月百目に付五朱宛之加利足、急度返上可仕候。若返上遲滯仕候者御咎可被仰付候。

但、御切米等被下候人々者、當十一月・來年三月・十一月三度に急度返上、御步並以上には本支之通五朱之利足、足輕・小者は可爲無利足候。

一、當時勝手取續相應に仕候者には、御貸渡被成間敷候間、頭・支配人より人別に名前可書出候。

一、頭分之内にも、當時必至与指支取續難仕人々之者、別紙割方之通御貸付可被成候。返上之儀、勿論前段之通に候。

右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組·支配之面々に可被申渡候。組等之內裁許有之人々は、其支配にも相達候樣被申渡、尤同役中可有傳達候事。

戌　四　月

御知行之分。

一、自分知七十石迄都而七拾日當り。

一、同七十石以上百石迄百日當り。

一、同百石以上五百石迄、百石百日之圖りを以はした知行迄も右割合。譬ば四百三十石には四百三十日御貸渡之圖り。

一、五百石以上者都而五百日。

御扶持方之分。

一、五人扶持より九人扶持迄六十日宛。

一、十人扶持より拾四人扶持迄七拾日宛。

一、十五人扶持より十九人扶持迄八十日宛。

一、二十人扶持より二十九人扶持迄百日宛。

一、三十人扶持百五十日宛。

一、百人扶持五百石之振を以五百目。

御切米之分。

一、俵数三十俵迄五十目宛。

一、同三十俵以上七十目宛。

但、新番者百目之圖り。

一、足輕之分都而一人三十目。

一、坊主三十目。

一、小者二十目。

右御貸付方之儀者、委曲御算用場行に申渡置候條、直に承合可申事。以上。

右に付組・支配之人々、翌八日頭等宅々に呼立申渡有之。

四月四日、魚鳥及び野菜の賣買に就いて令す。

〔政隣記〕

四月四日、左之通御用番玄蕃助御同狀出。

覺

一、魚鳥賣買當座銀に可仕事。

一、野菜者月拂に可仕事。

右之通最前被仰出、其後不及其後沙汰旨重而被仰出候。今般物價之儀段々御詮議被仰付候條、以來右之通に可相心得旨被仰出候事。

〔料理方定書〕

附札、町奉行へ

覺

一、魚鳥當町等振賣仕候分、當座限り賣渡、懸方仕儀不相成事に先年御定有之候。

一、野菜に月拂に可仕候事。

右之通最前被仰出、其後不及其沙汰之旨重而被仰出。今般物價之儀段々御詮議就被仰付候、以來右之通可相心得旨被仰出、御家中へ申觸候條、町方之者へ急度可被申渡候事。

戌四月

四月八日。諸奉行出勤の時刻を規定に從ひて勵行すべきことを命ず。

〔政隣記〕

四月八日左之通御用番玄蕃助殿御廻狀出。

佳節・朔望等出仕を初、諸奉行人等役所へ罷出候刻限跡々より御定有之處、近年漫りに相成

候條、自今無遲滯罷在候樣可申渡旨被仰出候事。

四月十日。家中の人々賣女躰の者を妾とすることの禁止に關して議す。

〔袖裏雜記〕

左之通可申渡哉与四月十日伺。其被仰出不見當。

御家中之人々賣女躰之者召置、妾に仕儀近年多有之躰。且群集之場所其外爲遊興、忍候而町家等に罷越候段相聞候。不埒千萬に候。嚴重御糺可被成候へども、先御猶豫被成候。以來急度相心得可申事。

右之通可申渡旨被仰出候條——

組頭等に

近來賣女躰之者妾に仕候者多有之候故、出生之子共惡疾傳染仕、武役全難相勤者も有之躰、不所存之事に候。自今右躰之女召仕候段相知候はゞ、嚴重相糺、品により可被達御內聽候。

此段可申渡旨被仰出候事。

四月十五日。年寄中等去年藩の免除したる借知三分の一を重ねて差出したるを以て之を別立貯蓄せしむ。

〔御朱印御書立其外被仰渡之品々記〕

一、左之通御書立、御親翰之振にて御狀箱御封印御指札に而、於御次岡田太郎右衛門に御渡、勘兵衛宅へ持參に付、申談御請相認、太郎右衛門重而持參指上候事。御內意、留に記置候事。家中より借知之內三ヶ一宛、去年返遣候處、年寄中者右三ヶ一分當年より重而指出。此分存寄之趣有之候間、別立にいたし每歲急度除置可申候事。

寛政二庚戌四月十五日

御算用場奉行中

前文と日附を異にす

四月二十日。訴筩を廢す。

〔政隣記〕

四月廿日訴筩取除候樣今日被仰出候段、御用番玄蕃助殿御橫目に被仰渡、則取除有之。

〔歲々略曆〕

五月廿四日公事場前目安箱相止。天明五巳年より六ヶ年の間也。

四月廿一日。前田治脩、參覲を延期すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

四月廿一日、御疱瘡後御肥立兼被遊候に付、御發駕暫御延引之內濕暑に向、當時の御樣子に

而者、暑中遠路之御旅行被遊兼候に付、被遂御保養、八・九月迄之内に御参府被遊度、尤御全快被成候は早速御發駕被遊度旨、以御乘札御用番へ被仰達候に付、今日より宿割方役所へ可指出旨。

敦千代樣宿割方役所も御同樣に付、兩宿割中當分御番人。

敦千代樣にも御随ひ、九・十月迄及御出府之儀、是又御届有之。

右等之趣本多頼母殿より御道中奉行へ被仰聞候に付、右之通に候事。但御供人旅粧用意整候上に付、會所銀半分當も御貸渡之旨も被仰渡有之候事。

四月廿一日。諸役所の冗員を淘汰すべきことを命ず。

〔政隣記〕

四月廿一日左之通於御横目所披見申談有之。

御横目へ

諸役所より、先役懸り之人々等近年次第に人多に相成、左樣之處より不時之御費も有之躰に候間、役所々々において締密遂詮議、減方之儀早速可書出候事。

右之通諸役人へ寄々被申談、組・支配等有之面々者、其支配之内役懸之人々へも申聞候様、諸頭等へ可被申談候事。

四月廿三日。津田平十郎銀子を盗み出奔す。

〔政隣記〕

四月廿三日、定番頭津田平兵衛四男平十郎儀、十六歳、前髮有之。今日銀一貫五百目盗取、平兵衛家來小者一人召連出奔。依之所々へ追人遣候所、於越前府中召捕、二十五日朝連歸。

但、右銀子は今般之御貸銀宇兵衛組中借用之分、昨廿二日十貫目計受取置候處、其内右銀高取迯与云々。

四月廿四日。諸士の中知行を召放されたるものゝ住所に付令す。

〔政隣記〕

四月廿四日御用番玄蕃助殿御渡之由に而、定番頭御用番津田宇兵衛より廻狀出。

付札、定番頭へ。

諸士之内御改易知行被召放候者には、一類共方へたより同居相愼可罷在處、名代を立御家中之人々之家買求め、又は借受致居住者有之体相聞候條、自今一類之者方へ爲致同居、相愼罷在候樣可仕旨被仰出之趣、天明六年正月申渡置通に候。當時御家中之人々、勝手難澁借家等仕居候者も有之躰に候得者、全右之通難相守儀も可有之候條、若同居之儀指支候品も有之候者、其段頭・支配人へ相達可申事。

有之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内最早有之面々者、其支配配へも相達候様可被申聞候事。

有之趣一統可被申談候事。

戌　四　月

四月廿六日。御馬廻頭等儉約の勵行に就いて覺書を作製す。

〔政隣記〕

四月廿五日、御馬廻頭一統於御居間書院御前江被召出、御意之趣有之候處、翌廿六日番頭武田喜右衛門宅江不時ニ寄合、申談之覺書調之、達御内慮与云々。右覺書左之通。

三ヶ年之間嚴敷御儉約被仰付、年寄衆ニも儉約之筋有之躰ニ付、同役諸事省略等之申談、

一、同役寄合一汁二菜、内一菜ハあへ物・しめ物之内膳付ニ用ひ、始而之同役有之時ハ、其同役迄ハ燒物出ニ可申候。年頭ニハ一統ニ随分輕き小肴類之燒物出可申、尤燒物ハ二菜之内之事。

但、酒之内吸物一ツ出し、尤酒ハ三篇之事。同寄合ニハ一汁一菜、此一菜を膳付ニ用ひ、酒之内鹽辛類之外出申間敷、内寄合ニハ餅出し候儀差止候事。

一、自分一通りニも參會、親類縁者之外ハ只今迄とも無之候得ども、彌其外ニも有間敷、是又一汁

一菜、祝事之節は一汁二菜に限り可申、燒物も右二菜之內たるべき事。

但、酒之內豬口・吸物一種宛指出、其外肴等品々指出候儀は指止候事。

一、於奥向酒宴等相止可申事。

但、吉事之節一類緣者に、奥向に而祝候節も、長じ不申樣可有之事。

一、出入之者抔常々賄、酒等爲給候者有之候者、相止可申候。

但、無據儀に而食事乞候はゞ格別、且又尤病用等は格別之事。

一、稽古事之參會、相互に燒飯に而も可致持參候。師匠には湯漬等輕く出し候儀各別之事。

一、平常之菜飯も減じ有之儀に候得共、彌費之筋無之樣に心懸可然事。

一、音信贈答、親子・兄弟・伯父・叔母・甥姪・從弟幷緣者祝事之節、干肴・錫之類取遣可申、右續無之人々之儀は指止可申事。

一、出入之者共抔より進物等指止させ可申、尤此方よりもとらせ申間敷候事。

一、奥向出會之節、土産之品、錫一折之外指止可申候。品により年頭抔には、輕く赤飯に而も指遣可申事。

但、家來共より土産之品、雙方申談有之間敷事。

一、衣類は上分絹・紬、家來は家內に而茂惣而綿衣之事。

但、女向之内針師供に出候節も、絹・紬より宜品爲用申間敷、右品たりとも目立候模様等ニ無用可然事。尤下女之分は堅く綿衣たるべき事。

一、家事男向、先は只今迄綿衣着用候得共、猶更申付可然候。羽織抔には宜品着用之者も適有之儀故、如斯之儀綿密可申渡事。

但、於部屋等作法能萬端質素に罷在候樣堅く可申付、近年別而風俗不宜に付、隨分柔弱無之樣可申付事。

一、年頭之祝事家々之風儀有之候得共、致省略候而不指支品は、可成程は指止可申事。

但、年頭奥向ゟ女使を初、口祝之爲取物有之候得共、差止可申事。

一、節句祝之品、猶以至而輕く、上分迄に致し可申事。

一、上下供召連候儀は、年頭或押立候節は格別、五節句抔差留可然、乍然此儀は人々存寄次第之事。

一、長柄傘快晴之節は指止可申、雨天に而長柄傘用申節は、笠籠止申儀も可有之事。

一、他國等往來之節、音物抔互に差止可申事。

但、親子兄弟等、至而輕き品取遣候儀は格別之事。附、見立待受に罷越候儀も、緣有之者之外は差止可申事。

一、作善事、或婚儀等之節はなむけ抔、惣而音信贈答前之ヶ條に從ひ可申事。

四月

四月廿六日。諸士より謝恩の爲にする献上物及び禮錢に就いて令す。

〔政隣記〕

四月廿六日、左之通被仰出候段御用番玄蕃助殿御廻狀出。

跡目・新知・御加增・御役儀被仰付候節、只今迄夫々御定之献上物幷御禮錢指上候分、今年より三ヶ年之間、都而年頭御禮申上候節之通献上可仕事。

一、婚禮相整候爲御禮献上之御肴代は、右年限中指止可申事。

四月。物價騰貴するを以て諸士に當分貸付銀を許す。

〔御朱印御書立其外被仰渡之品々記〕

諸物價高貴、其上町方不調達に而諸士・町方共甚難澁に付、此度當分貸付銀等申付候。右銀子外に出方も無之に付、別立銀子之内を以て相渡候。勝手運方之儀に付、先達而其方共より段々申聞候趣茂有之候得共、右は格別之存寄を以申付候條、得其意、此儀不相泥、運方質儉約之儀等人情可相勤事。

但、別立銀子渡方に不足はゞ、外銀子与當分振替可申事。

右御書立四月御居間書院に而岡田太郎右衛門に御渡被成候。

四月。年寄中等省略方に關する內規を作る。

〔留帳〕

寛政二庚戌年より三ヶ年厳敷御省略に付、年寄中等にも左之ケ條書を以被致省略候由、江戸に申來り別紙之寫也。

覺

一、祝事等之節は三ヶ年之間一汁二菜・吸物一、肴は指止。膳後は或は菓子類抔、在合之品たり共二・三種限り、其外は出申間敷候事。

一、祝事に付音物等進物、父母は格別、其外は兄弟たり共皆々指止可申候事。

一、常之樹木之品等、身近き親類に贈り候は格別之事。

一、妻・娘等里方に參り候節、年頭には錫一折・菓子類一種持參、幼少者に輕き手遊類輕品は格別、其外堅可差止候事。

一、十村・町人等より獻上之品、皆々爲止、遣物も指止可申事。

但、行步先抔にて獻上物も如何樣申候共、無味に爲止可申事。

一、平常之食事、朝は汁・菜之内一つ、晝は汁一菜、晩食一菜之事。但、老人・幼少者並病氣之節は格別之事。
一、召仕候女房、絹・紬より宜敷品着用爲仕間敷候。外より參り候女、美服着用、銀笄など用ひ候者は、臺所役人ゟ申付置、相返可申事。
一、召仕候老女等を初、都而出入仕候女共ゟ、進物獻上物皆々指止可申事。
一、勝手方用申付候町人等ゟ、年中指定り扶持等遣置候分、取上可申。若又左候而は甚難儀仕候者等ゟは、金銀をとらせ可申事。
一、勝手方用事申付置候家來抔ゟ遣物、當年より三ヶ年之間指止可申事。
一、京・大阪等より、文武等に付而要用之品之外は、なり限り取寄申間敷候。
右箇條之外、平常日用之品々萬端右に准じ省畧ヶ條之内にして、相減候儀は人々心得次第之事。

戌　四　月

四月。盜賊改方の足輕にして手疵を受け盜賊を取逃したるものは検使を受くべきことを告ぐ。

〔公事場御定書寫〕

附札、公事場奉行へ

各手先足輕盜賊等捕遣候節、若及物を携手向候而、手延迄蒙る萬一捕迯候節、如御法齡使之儀可申渡候。若捕候上には不及椧使候。

右之通可申渡旨被仰出候條、可被得其意候事。

寛政二年庚戌四月

越中　庄田兵庫

加州　高畠五郎兵衛　各通

能州　淺井源右衛門

五月朔日、平士の頭分を命ぜられ又は頭分轉役の際祝宴を盛にするを戒む。

〔政隣記〕

付札、定番頭へ。但今月朔日於日付之事。

平士より頭分被仰付、又は頭分之内轉役被仰付候節、親類等相招祝候事に有之間敷事に而者無之。然に當時多くは勝手甚困窮之躰に候得者、猶省略等之樣可有之儀に候處、近年は一向に近付に而無之頭分之人々にも祝に參候樣紙面指遣、大抵其人數相應之食事相認置候儀、流

例之樣に成來り候由被聞召候。然ば平常之參會等も右等に准じ候与思召候。如斯に而は支配之人々、何となく左樣之風儀に相成可申候條、向後相止候樣無急度可申談旨、拙者共迄御噂に候事。

五　月

五月二日。前田治脩石川郡粟ヶ崎附近に放鷹す。

〔政隣記〕

五月二日九時御供揃に而、同半時過御出、粟ヶ崎邊御歩行、暮頃御歸。御獲物鶉・雀十、よしごい・鴨十三羽、御拳幷御打留、幷御次鐵炮等之事。

但、外に鶴二御次鐵炮に打留有之。

五月十九日。江戸詰人に規定の外扶持方代を增給することなかるべきを告ぐ。

〔政隣記〕

五月十九日御用番大炊殿左之通御覺書御渡被成候旨等、定番頭御用番池田綾平廻狀有之。

付札、定番頭江

今年より三ヶ年之間御省略之儀就被仰出候、江戸表詰人、指定り候御扶持方代之外、米價高直等ニ付願之趣有之候共、増扶持方代相渡候儀者有之間敷候。自・他とも今般被仰出之趣に付而者、人々遂儉約勤仕不指支樣相心得居可申儀。就中詰中ハ別而其覺悟仕、御內輪は勿論、御公界向にても着服等飾品を用、小屋幕等無用之費を省萬端精誠省略可仕候。衣服等見苦敷儀ハ御貪着不被成候。

一、御歸國御供人、未二ヶ月分御扶持方代多分相渡事候に付、一統前方より心掛りに致置候躰、此儀ハ難及其沙汰に候。

一、江戸詰之人々、諸色屋を始拂方等不明之人々有之、銀主より公訴、無據會所引請等申渡、於御當地右上納申渡候得者、彼是願之筋等有之候。自今右樣之不埒無之、御難題に不相成樣相心得可申候。

右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之內甚許有之面々ハ、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

戌　五　月

五月十九日。前田治脩、年寄中の從者の擧動に就いて注意を促す。

〔袖裏雜記〕

五月十九日左之御親翰御渡、猶御親翰之趣御意。且又途中抔にて供廻り之者共、何廉かさつに無之樣心得可然旨御意。將又御意には、各家內に當時三味線一向に不相用樣被聞召候。秦雲院樣より被仰出候儀は、爾与御覺不被遊候へ共、娘等稽古無用との被仰出共不聞召候。三味線者不宜と被仰出に候か。何れにも稽古之儀は無用とは被仰出候はず、各示談之上之儀と思召候。吉田等有之節者、勝手向に而者何方にても琴・三味線相用候儀と思召候間、用ひ無之而、秦雲院樣思召と致相違候而は不可然思召候間、座頭・盲女或側之女抔に爲彈候儀は、差支不申事と思召候間、尙又示談之上宜程に可相心得旨御意。

年寄中へ

風俗僭上に相成、且各家來等三品之人々に對し不作法之儀等有之趣、先達而組頭より各迄差出候書面之內に有之候。組頭には右之通申候へども、元來諸頭等各分限を忘れ、各へ對候而も緩怠成體。其上各職可心得儀を常に油斷仕、組之人々などに見ゆるなどあれ、僭上之風俗をまゝ見きゝ申候樣に成來候与存候故、右等之趣今般組頭へ直に申聞、以來萬端急度相心得候樣申渡候。乍然畢竟僭上之基に、上たる者之心得によつて、自然と導候樣に可相心得儀候故、組頭へ如申聞候間、各職分を勵み分限を守候へば、僭上之風俗者可相止儀に候。將亦各家中之人

々之內、心得違候者に、主人之職威をかり不法之族も有之躰粗承候。か樣の品之內には、各心外成批評により預り候儀可有之と存候間、猶又是等之事者申談、夫々被申渡可然候。此段爲心得申聞候事。

戌　五　月

被成下御親翰奉頂戴候。――奉畏候。私共家來共之儀、御昵近之面々に對し、不作法之族等無之樣、兼々申渡置候へ共、今程被仰出之趣を以申談、猶更急度可申渡置与奉存候。御親翰奉返上之候、以上。

五月廿二日　　安房守初六人　判

五月。百姓等の賣物を運搬する際途上にて町人の押買するものを戒む。

〔上田舊記〕

山方并在所より、百姓・頭振等金澤町并遠所宿方等に賣物致持參候得者、町方より商人共右道筋に出向、押買等不法之族有之躰、當國御郡奉行申聞候條、自今右等之爲躰無之樣嚴重可被申渡候。此上にも押買等いたし候者有之、於見咎は御郡奉行手前に而召捕、夫々引渡申度段申聞候に付承屆、且盜賊改方に茂申渡置候條可得其意事。

寛政二年五月

町歩は町夫

六月二日。金澤大衆免に火災あり。

〔政隣記〕

六月三日夕七時過、大衆免町森下屋權七家より出火、二十五軒燒失、同半時鎭火。右火事之節大組頭桑島莊左衞門組付與力山本平左衞門、町歩田根屋德右衞門跡火防候砌泥水懸候處、上春日町能登屋德兵衞前に而右德右衞門を切殺し、平左衞門儀於其場所不及届にも直に宅へ歸、黃昏至与云々。依之暫は切殺候者不相知候處、夜五時過に至以手紙夫々に及届に、頭桑嶋にも翌四日朝及案內。

右之通に候處、同月八日朝右山本平左衞門於自宅自害相果、爲檢使御大小將橫目由比陸太夫・前田權佐、同日夕方罷越。

六月四日。金澤泉町福正寺屋仁太郎孝行を以て賞せらる。

〔袖裏雜記〕

泉町福正寺屋多助二男仁太郎孝心之樣子、町奉行へ御尋被遊候處、委細調上候付被渡之、格別孝心者候間、厚く被下方可被仰付遂僉議可申上旨被仰出に付、先例的當にては無之候へども、能州生神村久右衞門儀篤實孝心に而、神妙之擧動有之、近村迄風俗宜敷相成候付、最初安永三年九月一生三人扶持被下、家永代諸役御免被仰付、生神村幷隣村肝煎等に鳥目等被下

二升はふたますと讀む

候。重而天明五年十二月十村並に被仰付。越中高岡一番新町石瀬屋六兵衛儀、母狂氣同樣之者之處、孝行尋常に無之擧動數多有之候付、安永十年三月三人扶持被下候。礪波郡福光村伊左衛門養子太三郎儀、伊左衛門禁牢之節、代牢願方に付段々眞實之趣有之、且常々孝心之儀共有之候付、天明四年十二月一生壹人扶持被下候。元祿十三年八月礪波郡興法寺村肝煎長右衛門二升取扱、被召捕禁牢被仰付置候處、せがれ七三郎父長右衛門へ孝行之趣共有之、則其段達御聽候處、凡下には絕而有之間敷孝行之族に候。因玆爲御褒美金拾兩、幷七三郎一生貳人扶持被下之、其上父長右衛門罪不輕者に候へども、七三郎へ對し御免被成、則七三郎へ御預に相成候。今般仁太郎儀、幼少者には別而奇特成儀。是迄町家に例者無之候へども、右七三郎振を以爲目拾貫文被下、且一生二人扶持被下可然哉与六月朔日伺、伺之通三日に被仰出、申渡左之通調入御覽、是亦伺之通被仰出、明四日可申渡旨申上。

町奉行に

泉町　福正寺屋多助二男

仁太郎

右仁太郎孝心之趣委曲被聞召、幼少者に者希有之振廻神妙之至に被思召候。依之爲御褒美、鳥目拾貫文被下之候。且又右孝心之趣に付、仁太郎一生貳人扶持被下之候條、此段可被申渡候事。

〔加能越良民傳〕

金澤泉野町福正寺屋仁太郎、幼少にして至孝を以て稱せらる。其始末は曾て牧文水なる人、孝鑑といへる小冊子を撰じて世に行へる故に、詳かなる事は彼書に譲りて其略を記す。仁太郎が父を多助と云。家代々工匠を業とす。多助常に父母に事へて違ふ事なし。然れども性酒を好みて、動もすれば量なきのいましめを犯す。其母是をうれへて、或日誡めて曰く、汝酒を好んで甚だ度なし。其如く成り行けば、到底は必ず病を生ぜん。我が憂とするは、只汝が病まれん事のみなりと云ひければ、是より多助酒を斷ちて再び不飲とぞ。天明三年七月大雨洪水して、城下なる犀川の大橋流れ落つ。此時多助此橋を請負ひして修造しけるに、寛政元年六月復洪水ありて彼橋流落れちしかば、舊に依て多助復是を修造しけるに、其事半にして、御存知の筋ありて御理會の上、同十一月三日多助獄に下りぬ。かくありければ、父母妻子の歎き語るに言葉なし。とりわけ仁太郎大に是を悲み、母に申しけるは、ケ樣に父禁獄に逢ひ給ふ上は、家業なくして祖父母の不自由に逢ひ給んもなげかはしく候へば、何方へなり共奉公致し、少々の給銀を取受に進ませ度しと申しけれども、幼少なるものゝ事なれば、達て母是をゆるさずそれより人の許へ雇はれて行きて、たばこをのすといふ業をなして、毎日

少しの賃錢を取りて母にあたへけり。漸々其年も過ぎて、あら玉の年かへれども、父の事いふかなしく、獄屋の艱難もおもひやられて、仁太郎は食常に減じて、衣ふすまをかさねず。一日を過すも一年の如くに覺えけるが、父又獄屋にて浮腫の病に染みける事を傳へ聞きていとど悲しく、何卒代獄を願ひ度しと祖母に語りければ、祖母打歎きて、汝幼ければ獄屋も住まふべきものと思ふこそわきまへなけれ。汝がごときは、彼中に入りなば一日過さるべきにあらずと答へしを、左樣の處に父はいかゞして暮し給ふぞ。御物語故悲しくこそ覺え候へとて、ひたすらに代獄の事を望み求めぬれど祖母又曰く、汝が兄は多病にして、我が力となるべきにあらず。老の賴みは只汝なれば、先づ暫く待つべしと泣き止めけるが、是も默止がたくてさゞえけしが、明くる二月多助罪定まりて公事場の獄屋に移され、後水腫おもくなりしと傳へ聞きしかば、其翌日仁太郎疾く起きて出でしが、久しくしてしぞね貝といふものを取り歸り、是は水腫に用ひて能しといふ人のはなしを聞き候まゝ、取りに行きし也。是を煮て父へ進らせ度しと云ひければ、母も其心の切なるを感じけり。又或夕暮に散る花を見て涙をうるほして居けるを、母あやしみ、汝いかに落花を詠むるぞと云ひければ、父の御身の上もおもひやられて悲しく候と答へける。此時仁太郎十二歲なれば、尋常の幼童を以て是をいはゞ何のこゝろもなき頃なれど、斯く花鳥の色にも香にも父を忘れざるは、孝子の心常に父母に有る

が故なり。世の膝下に有りながら父母を忘るゝ者は、是において恥づべきものなり。仁太郎又日毎にあたりぢかき磐田の神に詣で、父の全快を祈りけれども、猶日々に重く成り行くよし聞えしかば、今は前後を顧るにも及ばず、代獄を願はんとて組合の人々へ告げ語れば皆々共志を感じ、終に一紙の訴狀を認めて是を街吏に達す。

乍恐申上候。

一、私父多助儀、犀川橋御普請請負相勤候處、御疑敷趣御座候而、御吟味之上禁獄被仰付置候處、多助儀頃日大病相煩罷在候旨承、甚以心勞仕罷在候處、極老之兩親猶更相歎、此節は氣配相滯罷在候。彼是難見捨置奉存候。就夫恐多奉存候得共、何卒御憐愍を以、可相成儀に御座候はゞ、多助儀於宅療仕、本復爲致度奉存候間、私儀多助爲代牢舍被爲仰付被下候樣、乍憚奉願候。御慈悲を以て被爲開召上、此段公事場御奉行へ被爲仰達、願之通被爲仰付下候はゞ、忝奉存候。

斯のごとく相認め、寬政二年六月二十二日街吏に達しければ、卽ち老中の席へ指出され、仍て直に御聽に達しければ、大きに感じ思召、幼年の孝心類ひ稀なるを以て、代獄に及ばせず、多助出牢いたすべき旨命じさせ給ひ、則此趣街吏より仁太郎へ申渡されければ、仁太郎悅び眉に溢れて、手の舞ひ足の踏む處を知らず。早速駕を用意して、獄屋の門まで迎に行きける

六月廿二日とするは誤なるべし

が、家より出づる時母に錢少し給へと申しければ、母何心なく與へけり。多助獄屋の門より出づる時氣色甚だ衰へて見えけるが、かゝる事を兼て思ひまうけゝるにや、先づ手を取りて勞り慰め、袂より彼錢を出して、何にても御好の食事あらば買ひ調へて進ずべきと云ひけるとかや。其意を用ふること天然に出づる事皆斯のごとし。斯くて多助家に歸りて見え、仁太郎を近付け申しけるに、汝が孝心によりて再び父母に見ゆる事を得たり。死すと云ふとも悔いる事なしと、淚を流して悦びけるが、次第に病重く成り行き、賴すくなく成りし時、亦仁太郎を近附け、天命限り有れば死は惜むにたらず。只父母に先立つ事を恨むのみ。汝能く勤めて我が父母に事へよと云ひ置きて終に死しぬ。樹靜ならんと欲すれども風是を動かし、子養はんとすれども親止らず。可傷可悲。君上彼孝を感じさせ給ひ、一生御扶持米を給ふべきよし命じさせ給ふ。其餘街吏長・街正より平生の知るべに至るまで悉く金錢酒肴贈り、其行を賞揚しけり。斯く人擧げて善を擧げ義に進む事、孝感人を動かすと云ふ歟。抑亦邦家德化民におよぶが故なるべし。

六月十一日、大組頭久世平助流刑を命ぜらる。

〔御預人之記〕

久世平助、五百石大組頭。寛政二年三月廿日前日被仰渡。多賀逸角直房五千石、内千四百石與力知、六百石同心知。江御預。同

舊宅とは當主死亡の後跡目相續を命ぜらるゝに至る期間をいふ

年六月十一日五ヶ山之內流刑被仰渡、未配所に赴かざる內、逸角儀及病氣大切、同年七月廿八日公事場へ御引揚入牢、後赴配所。平助儀、村上彌三郎幷樋口權三郎の妻と取組、印章を似せ候、是にも不限、家作申付候大工等に對し不法の趣有之。彼是以て如此被仰付。此前迚も得と實否不相分、樋口・村上の兩人共遠慮之內、同年十月十八日病死。然處同四年六月九日平生の舊宅に通り可相心得旨被仰渡。右之兩人共同日の病死は、何ぞ樣子も有之体也。

六月廿七日。婚姻以後に於いて聟養子の死亡したる場合には再び聟養子緣組を出願し得ざることを令す。

〔袖裏雜記〕

聟養子兩度之例有無。

一、寛政二年四月、林玄左衛門聟養子病死に付、重而右娘へ聟養子奉願度旨申聞候段、頭より紙面出候處、重而聟養子と申儀者難成儀与遂僉議、其段六月廿七日頭へ申聞、紙面返之。

一、寶暦九己卯九月、田中平丞養女へ聟養子願之通被仰出、未引取內病死に付、重而右養女に聟養子願書付出。

一、同十三癸未六月、吉田元榮儀、嫡女へ聟養子御步に被召出罷在、未婚儀不仕內病死仕候付、重而右嫡女へ聟養子奉願旨書付出る。

一、安永八己亥十一月、福田孫兵衛娘へ聟養子願之通被仰出、未引取内病死に付、重而娘へ聟養子願書付出。

右之通未引取内病死、重而聟養子願候例者有之候へ共、引取嫁娶之上、重而聟養子願候例者無之。

是月に大雪なり

六月晦日。前田治脩、戰功ある先祖を有し現に亡家せる者を錄上せしむ。

〔御實雜記〕

六月晦左之御親翰御渡。

從跡々諸士令亡家候者數多有之、譜代之面々次第に人少に成行候段、不及是非、乍併嘆敷事に候。其内にも幼少知行三ヶ一之内に而病死、或者身不屆之趣等、品々樣子之差も有之候。其内年限も相立、先祖之戰功等申立新知に召出度兼而内存之處、今度於公儀金森出雲守方・本多長門方子孫被召出、亡家再興被仰付、御尤之儀与存候。依之右亡家之内、先祖戰功有之人々撰擧可被申越候。將亦輕き人々暨町・在之內にも、各別之家筋にて、當時衰微仕者も可有之候條、此等之分も不相洩樣遂僉議、可被申聞事。

庚戌六月

七月朔日。前田治脩參覲出發の期を來月朔日と定む。

〔政隣記〕
七月朔日、御參勤御發駕御日限來月朔日に今日被仰出。今日八時御供揃、同刻前御出、犀川上に御川狩、六時頃御歸。御獲物投網・飛網等鱗三十八、曁御てづからに而鱗三、御投網に而同一つ有之。

七月三日。非人小屋の制を改良する爲永原大學にその主任を命ず。

〔袖裏雜記〕
六月晦日御代筆御書立を以被仰出之趣有之に付、七月朔日左之通調伺候處、同月三日伺之通可申渡旨御意。

永原大學

松雲院樣非人小屋被仰付置候者、鰥寡孤獨窮民之爲と思召候處、其以來漸々御主意と違、當時にては、甚不埒之品共有之躰及聞召候。依之御救方之儀、段々御僉議可被成候間、御手前主付被仰付、一通り之儀は是迄之通、同役中幷町奉行月々替々主付可相勤候。此段可申渡旨被仰出者事。

庚戌七月

御算用奉行・町奉行へ　各一通。

非人小屋御救方之儀、段々御僉議可被成候間、此度永原大學主付被仰付候。一通り之儀者是迄之通、各并町奉行・算用場奉行月々替々主付可相勤候。此段可申渡旨被仰出、大學へも申渡候條、可被得其意候事。

庚戌七月

七月三日　前田治脩命じて諸士の善行あるものを上申せしむ。

〔政隣記〕

七月四日、昨三日御馬廻御番頭神尾伊兵衛、於御居間書院御前へ被爲召、御書立一通御直に御渡、同役并支配有之諸頭等へ傳達、御請者一役連名に而指上候樣被仰渡候に付、今日夫々傳達有之。右御書立左之通。

馬廻頭へ

諸士之内神妙之行跡有歟、又は不覺悟之族異見不致承引候者、假令被仰出無之共、其善惡言上仕度可存儀、頭々本意に思召候。左樣無之候得者、有志者はおのづからおこたり、不行儀之者は逐年增長可仕旨、松雲院殿御代被仰出も有之候。然處當時組・支配之人々之內、惡事は品により言上申越候得共、善事は甚稀候。自今以後衆に抽善行有之者は勿論、無左共或勤仕に付而心懸宜候歟、或内輪縮方正敷歟、或武藝抔を勵候歟、いづれ一事たり共善事に志有

之体於見聞者、其段先可申聞候。不行跡之者は異見之品其心得肝要候。且其時宜により無泥可申越候。是等之儀油斷仕、若外より達聽候はゞ、頭・支配人手前相糺儀も可有之事。

右之趣相心得、頭・支配人ゟ不相洩樣其方共より申聞、請之儀は一役連名之紙面を以可申越旨も、夫々可申談候事。

庚戌七月

附、翌年二月被仰出左之通。

諸士之内一事たりとも善事に志有之躰於見聞に、其段先可申聞旨、去年委曲申渡置候處、いづれよりも未申聞段不審に候。數多之人內一向無之与申は有之間敷儀に候得者、彼是斟酌仕申出兼候哉与存候。縱に不見屆風聞にもとも、無泥申聞尤に候。依之重而此段申聞候條、諸頭等へも右之趣向寄に可申談善事承り候はゞ早々可申越候、以上。

馬廻頭中

「御書雜記」

右之御書立七月三日被渡、夫々可申渡旨御意。

自今以後、町在之者共之内衆に抽候善行有之、相違無之躰其奉行人等於見聞仕者、夫々速に可相達候。若外より達御聽候儀有之候はゞ、奉行人等可爲油斷候條、御穿鑿被仰付儀も可

有之候。此段急度可申渡旨被仰出候事。

庚戌七月

七月四日。前田齊敬江戸に出府すべき期を定む。

〔政隣記〕

七月四日、数千代樣御發駕來月十六日与今日被仰出。

七月六日。前田治脩、皇子降誕を奉賀する爲使者を發せしむ。

〔政隣記〕

六月二日、皇子御降誕に付御祝儀被指上候御使、御先手物頭並園多太夫ゟ被仰渡、七月六日發足上京。

六月二日は使者を命じたる日に係る。

七月八日。前田治脩命じて諸場諸役所の法規を集錄し上らしむ。

〔政隣記〕

七月十九日左之通被仰渡候段等、去八日之日付に而定番頭池田靜平より廻文出。

定番頭ゟ

諸場・諸役所ゟ前々より被仰出候御條目等、後例に可相成品々、不相洩樣相しらべ、帳面に

調、夫々諸役人より直に横濱善左衛門等迄相達指上可申事。

但、帳面は中折紙に而、長七寸五分幅五寸八分致御帳可申候。

右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之通一統可被申談候事。

戌七月

右は尤役懸之人々迄へ頭々等より觸出。且右帳面封じ物に而、横濱善左衛門等へ相達上之候樣重而被仰出候段、同月廿四日御用番被仰渡候旨、重而池田讀平より廻狀有之。

七月九日。盜賊改方奉行彫工澤阜忠平の行狀を密偵上申す。

〔御親翰幷言上留〕

一、御細工人澤阜忠平儀、就被仰渡承合候處、酒を給放埒之儀は相違無御座候由。人集仕博奕宿等仕候哉与相尋申候處、其儀は無御座候得共、酒を給、物賣抔輕き者共へ申度儘を申入、近邊輕き者共も右等之躰に付甚惡み申、何事に而も有之候者少之儀も可申立与申合候躰に御座候。忠平放埒至極之由に御座候得共、於職分は衆人に秀申旨沙汰仕候。

右之趣奉達御聽候、以上。

戌七月九日　高畠五郎兵衛　判

七月十八日、脇田哲兀郎、青木左仲減知逼塞を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

段々御僉議之上申渡左之通、七月十八日伺、伺之通被仰出。左仲ハ養母に不義有之旨。哲兀郎ニ右養母に不義有之旨被聞召付而也。左仲に永く逼塞被仰付趣也。

付札、河地才記に

松原元右衛門組
脇田哲兀郎

哲兀郎儀、不愼之趣有之段被聞召候。去年以來別而愼方之儀嚴重被仰出候處、不屆至極に被思召候。依之知行高七百石之内貳百石御減少五百石に被仰付、御大小將組被指除、組外に被加之、逼塞被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

戌　七　月

付札、堀平馬に

青　木　左　仲

左仲儀思召有之に付、知行高二百五十石之内百五拾石御減少、百石に被仰付、御大小將組被

指除、組外に被加之、逼塞被仰付候旨、被仰出候條、此段可被申渡候事。

戌七月

右に付、左仲實父御大小將組御右筆高崎平左衞門、指扣可申哉之旨、紙面指出候處、其儀に不及段被仰出。

七月廿一日。前田治脩犀川々上に漁撈す。

〔政隣記〕

七月廿一日八半時御供揃に而、同刻頃御出、犀川川上へ御川狩、暮過御歸。御獲物は御てづからに而鰷一つ、御次廻りに而鰷五つ出之。

七月廿二日。江戸詰の諸士の服裝等を簡易にすべきことを諭す。

〔政隣記〕

七月廿二日左之通當御參勤御供御家老本多頼母殿御申渡有之。

江戸表御式臺を初御表向、都而綿衣等麁服可致着用候。御見廻懸り之御客等者、御給事たりとも綿衣等御貪着無之候間、勝手次第着用可仕候。御内輪相勤候人々は尤麁服可致着用候事。

但、前廉より相知候御客之節御給事、幷御供・御使等之儀は、絹類可致着用候。

一、江戸詰中於御貸長屋無益之參會無用之事。

一、餞別幷土産物堅く無用之旨前々被仰出候得共、今以相止不申躰に候間、自今以後堅く相互に差止可申事。

一、足輕以下者御門外たりとも共綿衣着用、刀・脇指拵金銀相用申儀には可爲無用候事。

一、御家中家來若黨等衣類、不相應之族無之樣、主人々々より嚴重に可申付事。

右之大綱前々被仰出候得共、今年より三ヶ年之內嚴敷御省略被仰付候間、急度相心得候樣猶又可申渡旨被仰付出候條、被得其意、組・支配之人々にも可被申談候事。

七月廿七日。前田治脩家老等にその上申の事理明白なるべきことを諭す。

〔御親翰拔書〕

家老中に

持弓足輕褒美遣物之儀に付、先日以來不審申聞候處、答之紙面前後不分明之事に候。惣而僉議之仕樣等疏略与存候。算用合之儀などは、其方中會得も有之間敷、是は定而算用者執筆內用勤候者へ被申付与存候。左候はゞ左樣の儀白地に申越候へば能可相分處、何とやらん不明白趣共に候。自今箇樣之品／＼僉議、委細等不包申聞尤に候。此段爲心得申聞置候事。

庚戌七月廿七日

七月廿七日。高崎平左衞門等、去々年九月沖辰右衞門の死去したる際調

査料漏なるを以て譴責せらる。

〔政隣記〕

七月廿七日左之通御用番山城殿被仰渡、則頭多田逸角於宅申渡。

付札、多田逸角江

高崎平左衛門

沖辰右衛門儀去々年九月死去仕候節、病氣之躰不一通江守平馬等より再往相尋、身當頭よりも相尋候處、粟ヶ崎村相河屋又助手前、幷辰右衛門行歩先江召連候家來等相糺候處、疑敷筋無之、平左衛門儀も存寄無之趣口上書指出候。然處右に付、粟ヶ崎村疑敷者共於公事場遂吟味候處、同村善七与申者辰右衛門を致打擲旨申顯候。最初病体等怪敷、且不輕風說も承知仕候上者、存寄可有之候處、其儀無之段不心得之儀に候。併先此度者御宥免被遊候。以來之儀萬端急度相心得候樣可申渡旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

戌七月

右平左衛門之外、安井左太夫・三浦重右衛門・西村吉右衛門・明石源太夫・櫻井金兵衛・小森貞右衛門江被仰出之趣、大同小異大躰右同斷に付略す。皆々頭々於宅申渡有之。

沖辰右衛門一件取晦之儀に付、江守平馬今日以御書立御叱、以來之儀武田喜右衛門急度相

心得候樣被仰出之趣、今日於御席御用番山城殿被仰渡。

七月、能美郡に於ける藩有林の養殖方法を定む。

〔能美郡舊記〕

能美郡所々御林仕立申儀、各主附被仰渡候に付、御林仕立申仕方之覺

一、御林之内雜木建置申儀、堅相成不申、伐採可申事。

但、如斯申渡候上、雜木有之分者取上、伐採入札拂に可申付事。

一、御林之内有之宮・三昧今般相極候通堀切置、尤本年中一度宛掘可申事。

一、御林之内其村々之三昧松木之分者、伐採候節此方に相斷、見分受可申事。

但、惣而三昧・堀切之内に納可申、無由緣仕廣申間敷事。

一、向本折村御林之内濱田三昧有之。右三昧地者拜領地与申押等無之、借地与申ていに候間、松木自分に相願伐取候儀相成不申、御林同事に候事。

一、惣而御林ヶ所多所者、何御林〳〵与小名を付置、繪圖仕、當時松木大小有高員數相しらべ、帳面に仕立指出、増減時々相改可被申事。

一、苗松植付、何程々々与目錄を以相斷、尤根付不申分、又々相しらべ及斷可被申事。

一、御林之内鳥殺生等、茸狩其他遊山等之人々、御林内に而火を焚申樣之族、堅相咎可被申

候。尤此段御算用場に相達候事。

一、惣而御林仕立之儀、相渡候ヶ條書之通相心得可被申事。

右之通夫々堅信用有之、村々役人幷頭振下々迄、毎度心得違無之樣嚴重可被申渡候、以上。

寛政二年七月　　沖津平丞　印

右御用主付　中田淺右衞門　印

御用番　西澤傳兵衞　印

今江村　庄　藏殿

若杉村　八郎兵衞殿

寺井村　孫　三　郎殿

七月。町・在の奉行に庶民中善行ある者を上申すべきことを命ず。

〔岡部舊記〕

自今以後町・在之者共之內、衆に抽候善行相違無之躰其奉行人等於見聞仕者、夫々速に可相達候。若外より達御聽候儀有之候にて、奉行人等可爲油斷候條、御穿鑿被仰付候儀茂可有之候。此段急度可申渡旨被仰渡候事。

庚戌七月

今般御書立を以、別紙之通被仰出候旨、御用番本多玄蕃助殿被仰渡候。誠に以難有被仰出に候。衆に抽候善行有之、相違無之躰於見聞者、速に可申上候。自今別而可相心得事に候。各別紙之趣本畏、組々之内右躰之者有之候はゞ、早速可申聞候、以上。

庚戌七月　　栂　喜左衛門

寺嶋五郎兵衛

能州四郡御扶持人十村中

八月朔日。前田治脩風俗の粛正を慢らざるべきことを家老等に諭す。

〔御親翰拜寫〕

八月朔日

一、今朝御發駕前、何茂御前に被召出、左之御書立被渡下。

家老中に

四民風俗之儀に付、去年段々申出候側、其方中心得之儀申聞候處、其以來會得有之、内輪暮方等質素之躰令喜悅候。猶更留守中も無油斷可相心得候。各者重職之儀に候へば、萬端心懸肝要之事に候。委細は先達而申出候故令省略候事。

七月

八月朔日。前田治脩金澤を發して參覲の途に上る。

〔政隣記〕

八月朔日、御見立揃曉七時過に而、六時過御供揃、五時過大御式臺より御馬に而御發駕。御供御家老本多頼母殿、御道中奉行御行列裁許相兼、御小將頭堀平馬御步御用人遠藤兩右衛門、御大小將御番頭神保儀左衛門、同御横目今村三郎太夫・前田權佐、御筒押物頭幷聞番長瀬五郎左衛門、御弓押御持筒頭和田權五郎、御長柄鑓押御大小將阿部波江、其外御近習御用部屋横濱善左衛門、御近習頭生駒傳七郎等。教千代樣御式臺階下迄御送。勇之助樣御使者清水八郎左衛門、實檢之御間入口少此方に扣罷在、披露御奏者番御使者之趣唱之。御取寄衆等都而前々之通御送被申上候事。

　但、御發駕後御見立に罷出候頭分以上御席に罷出、御用番に恐悅申述退出。

附記、五日朝境より之御飛脚來着、御道筋御左右御廻に、御鐵炮に而鷺一・山雉一・鶴一・鶉一御打留。且十二日御日割之通御着府之段、同日立御飛脚廿二日來着告來。

八月十二日。金澤に强震あり。

〔政隣記〕

八月十二日五時御供揃に而、寶圓寺へ教千代樣御參詣。今晩五半時過餘程之强地震。

八月十三日。前田治脩江戸に着す。

〔三守御譜〕

八月十三日江戸御着。同日老中御廻勤。同十七日上使松平伊豆守。九月朔日御禮被仰上、此時御供本多頼母。

八月十六日。前田齊敬江戸に向ひ金澤を發す。

〔政隣記〕

八月十六日敎千代樣四半時御供揃に而、八時頃御發駕。御供奥村河内守殿、御近習御用人持組織田主稅・前田左衛門等御附之、諸頭等御大小將御旅館取次羽田傳左衛門等、正月晦日記之通。會所奉行加人堀八郎左衛門割場奉行、御先三品に御筒押松田治右衛門之御廣式附物頭並、御弓押河野彌次郎御身附物頭並、御長柄押に野村順九郎御大小將。御袋之方御一宿下りに而江戸表へ被罷越、今夜森下泊。敎千代樣今夜津幡御泊、但山之下親不知・駒返り等高波に而御通行難被成、境に五ヶ日御逗留之處、一日御追込に而九月六日御着府之段、同月十四日江戸より御飛脚を以申來。

八月廿六日。前田齊敬の金澤を發したる報江戸に達す。

〔毎日帳之内書抜〕

八月廿六日

一、數千代樣益御機嫌能、當十六日未上刻御發駕被遊候段、同日發足中飛脚今夕到着、御用番大隅守より申來。河内守より茂津幡驛御着被遊、何之御指障も不被爲在旨等傳附申越候に付、卽刻來狀以善左衛門入御覽、壽光院樣初申上候樣御附之頭々迄申達、淡路守樣・勇之助樣達御聽候樣御家老等迄申遣候事。

八月。村方の者竊盜に罹りたる時、從來盜賊改方に屆出たるを改め十村に屆出づべきことゝす。

〔能美郡舊記〕

能美・石川・河北郡之內、村方之者共被盜物有之、書付を以相斷候節、被盜主拙者共幷盜賊改方に罷出、相斷候振合に候。就夫遠方之者共罷出候節、御當地等に而止宿抔致候躰に而、自然雜用失費相懸り、甚及迷惑候段致入察。依而自今以後、能美郡者不及申、石川・河北郡共、御城下より五里より遠方之村々之分は、十村共手前に而書付迄を以早速及斷可申候。然上者猶更以來に於十村共手前に、能々相糺、疑敷躰在之候にば、其趣奧書に記可及斷候。且又被盜人手前樣子に寄、改方より相尋品在之節者、前々之通改方より直ぐに十村に申渡筈に候事。

右之趣、今般拙者共手前幷盜賊改方詮議之上、右之通相極候條得其意、五里以上遠方之村々

江此段申渡、尤唯今迄之通、少分之品たりとも被盗物在之節には、有躰早速其様子等相斷候様、夫々嚴重可申渡候、以上。

戌　八　月

水原五左衞門　印

恒川七兵衞　印

能美郡十村中

九月朔日、御作事所の規程を改正す。

〔御横目方密役記〕

寛政二年九月朔日より、御作事所御仕法改被仰出候掟帳之寫。

一、今般御作事諸役所之儀、御先規を相守、材木并諸品目次入拂締方相記、諸算用早速相極候樣御改に付、御用取捌方夫々帳面相記渡置候。帳面寫取候儀、堅停止之段申渡置候事。

一、御作事所御徒横目之儀は、謙德院樣御代寛延三年十二月、初而定番御徒橋本丈右衞門・齋藤又六・高村次右衞門・北村喜右衞門被仰付、四人にて相勤候事。

一、御作事所御徒横目定役一人宛江戶江被遣、於彼地表方御歩横目一人相加り、兩人にて相勤候事。

一、寶曆九年より、御作事所御徒横目江戶江被遣候儀御指止之事。

一、最前に御徒横目、御勝手方式日には、右御席に罷出候事。

一、寛延三年十二月被仰渡之六ヶ條之趣、新役之人々にも申談可有之候事。

一、荒物所諸色御買上物、直段引合のため、御算用所幷御横目足輕直段聞合之儀申渡置候事。

一、諸色御買上物、品により奉行人・御大工頭・御壁塗幷棟梁等僉議之上、御買上物可仕旨、荒物所へ申渡置候間、役所々々此段相心得、荒物所より申達候はゞ見分可仕旨、役所々々に申渡置候事。

一、諸品直段せり立、都而御不益に相成候儀等無之樣、急度可相心得旨、荒物所に申渡置候事。

一、諸品直段之樣子、下賤之者賣買仕候而は、品違申儀可有之候。其程不相當候而は、後年規矩立兼候端に相成儀可有之候旨、荒物所に申渡置候事。

一、諸品諸色所にて御買上仕候節、御大工等遂僉議候而、御徒横目見通之所に而御買上可仕候。場所を引離れ候而取扱之節は、御大工・御横目足輕相見を以取捌仕候樣、荒物所へ申渡置候事。

一、三つ切板類或は釘類等、數多御買上之節は、御米圖俵等之格を以相改、目廻り等吟味可

仕段、荒物所へ申渡置候事。

一、諸役所ゟ受取候品、先達而圖り帳出來之節、品物之分〆口、人數之分〆口、如此〆口相立置候樣申渡置候事。

一、諸品請取物、先達而圖り帳高之通、指紙面草案之通相調、圖帳〆口に場印割印を受、荒物所へ指遣置、草案之通品物通帳を以可受取段、申渡置候事。

一、圖り帳無之分、指掛り候受取物、指紙面に其趣相調、御作事所ゟ委細御入用之趣相屆、僉議之上指紙面場印を請、荒物所へ遣置、品物通帳を以可受取旨、夫々申渡置置候事。

一、惣而諸職人等受取方、圖り高指紙面草案之通相調、圖り帳〆口に場印割印を受、圖り所へ遣置候上、日次諸職人等受取方にあへ可受取事。

但、圖り帳高に過不足有之候はゞ、此段も指紙面を指出、夫々可相達段申渡候事。

一、先達而圖り方無之、諸職人受取方之儀は、其段御作事所ゟ相達、僉議相濟候上場印受、圖り所ゟ遣置、諸職人等受取可申候段、申渡置候事。

一、諸職人等受取方、諸品受取方共、指掛り候御用に而、指紙面場印を受候儀指支候節は、先假指紙面を以、夫々相屆置可受取候。翌日御作事所ゟ委曲相達、定之通本指紙面と取替可申旨、申渡置候事。

一、是以後諸事御算用帳、御算用場ゟ不指出、諸御入用諸色所一方に而取縮いたし、一ヶ月切に本渦指引相立、御算用所において當り相済、夫々場印相調候上、御勝手方ゟ御達申筈に候條、役所々々此段可相心得旨、申渡置候事。

一、所々御修覆方之儀、先達而圖り帳之通、後日に御不益之筋有之候はゞ、猶更御修覆に取掛候節、圖り立候役人手前可遂僉議候。然共再僉議之通に而は、御入用過分に相及候故、先達而之圖り僉議相分り候はゞ、御作事所幷其先御修覆所之役人ゟも可相屆旨、申渡置候事。

但、御修覆所出來方、御手入無之候而も其分に有之候を、御修覆を加、或は今少し此所を御手入可仕儀渡し置候等の風評有之。若未熟之儀於有之は、手懸之御大工幷棟梁越度に可相成趣、申渡置候事。

一、諸色扱或は算用當り等之御用に付、棟梁不足之節、何れの役所棟梁に而も御用透之方へ申遣、爲手傳或は見分物等爲仕可申旨、夫々申渡置候事。

一、御用方相勤候町人、御作事奉行・場附御横目之外、年頭・暑寒不及勤候段、夫々申渡置候事。

一、諸棟梁等御作事奉行・場附御横目之外、年頭・暑寒不及勤、若心得違相勤候はゞ可相糺段、申渡置候事。

但、御大工頭之儀は、職頭に候間、棟梁諸職人年頭迄相勤候筈之事。

一、御大工頭之儀は、諸職人常々爲致出入、人品・職業撰方可有之候へ共、取組に相成候風評有之候はゞ、品により御糺可有之段、申渡置候事。

一、御大工・御壁塗之方へ、御作事所御用相勤候者、職人之内弟子等之出入仕儀不指支事に候へ共、御用方取組出入風聞於有之は、急度御咎も可有之候間、常々年若之人々追々御取立等有之候節は、其に可申含候。若申談於相洩は、御大工頭可爲越度旨、申渡置候事。

一、御扶持方大工并諸棟梁共、御用透之日に奉行人・裁許人見計、八時頃より可相返候。尤其段御徒横目にも届置候樣申渡置候事。

一、遠所御用に指出候荷物認之節、其手々々の御大工棟梁取捌、御徒横目足輕相見を以認、荷物目形・駄數相極候而、始終奉行人見屆之印章受置可申候。認方之品々員數屆紙面、御作事所に指出置可申候　認用之品々、遠所御用中勘録之内を以御買上に可仕候。於遠所相認候節も、右同樣之趣に夫々申渡置候事。

一、嘉節場相止有之内、當日之服に而見廻り候儀は不指支候。併直に相詰御用取捌候はゞ、御作事所定之服に而可相詰候事。

一、遠所御用諸職人增歩相渡候儀勿論、地方平日御普請之增步相渡候節も、御徒横目并御横

目足輕始終見通、御横目役之者にも増歩相渡候儀可相屆旨、夫々申渡置候事。
一、諸役所小遣、御作事定小遣に打込召仕申筈候條、供使之御用は留書所へ可申談候事。
一、今般御作事所内諸役所定建棟梁等、人數相定候條、増方一圓難相成、右人高を以御用相辨候樣、申渡置候事。
一、諸役所幷諸方御普請所棟梁之分、御扶持方大工定役棟梁を以致人配、其上定役棟梁等餘り人有之、指懸り候御用無之時は、圖り所へ指出、品々御用爲相勤申筈之事。
一、諸奉行人若僉議悉熟し兼候儀有之節、不吟味之人配に相成候はゞ、御大工頭越度に可相成段、申渡置候事。
一、内作事方・外作事方・寺社方等、前々其向之御用相勤候者、只今迄之勤所之外には難掛渡等於有之は、圖り所僉議未熟に可相當候條、諸役所相勤候御大工幷棟梁等、兼々可有示合之段、申渡置候事。
一、急御用有之、諸職人・日用等可相返刻限に至り、指留仕事申付候刻は、夕一度一人に二合五勺充、三十八人一升之圖を以、味噌・菜・つかね飯可被下、翌曉にも相及程に候はゞ、夜半一度可被下段、申渡置候事。
一、前段賄受取方は、假指紙面を以、荒物所より受取可申候。尤翌日に至、本指紙面定之通

可指出旨、申渡候事。

一、定掛棟梁・肝煎等不參仕候はゞ、手先々々より圖り所ゟ斷に可及旨申渡置候間、圖り所より其段御徒横目ゟも相屆申筈に候條、諸役所見廻之節人しらべ可有其心得事。

一、諸役所御道具帳面認、場印受置可申事。

一、御用方未熟之儀無之樣、當々心掛、同役申達可仕段、夫々申渡置候事。

一、作料銀上中下相極置候。大工共其業に不相當者、其儘に受取置候はゞ、其手々々之御大工等越度可申渡候。且破損修理、毎年九月中相仕廻候樣、夫々申渡置候事。

但、諸手合一時に相成不申樣、成限繰合仕候樣申渡置候間、是等之手配に而不指支ヶ所之內普請等は、右定之月を越候儀は格別之段、申渡置候事。

一、料紙員數相定り、御算用所より相渡申筈之事。

一、四月朔日より七月晦迄、晝飯後諸職人半時休、前々之通に申渡置候事。

一、諸丁場六半時頃細工に取掛不申者は、其丁場棟梁之迷惑に可申付、無謂朝六半時に相後れ候職人は可相返段、申渡置候事。

一、地松挽板類、是以後上中下と三段に位付相渡申筈之事。

一、役所定建棟梁、此度相定候人數之內不參仕者有之日、御用不欠樣に於相辨は、定式之人

數之通作料可相渡段申渡置候間、其心得可有之事。

一、諸職人幷日用、夕七時後召仕候はゞ、夜九時迄一時二歩、夜九時後は一時に三歩、及曉候はゞ一夜一人五分至可被下、曉七時より召仕候はゞ二步可被下段、申渡置候事。

右御作事方御用御仕法就被仰付候、諸役所ゟ御締方等掟帳相渡候趣等、帳面に記相渡候。猶追而諸役所ゟ申渡候節は、品により此追加に可相記者也。

寛政二年八月　　御作事所

九月朔日。前田治脩登營して參覲の禮を行ふ。

〔續德川實紀〕

九月朔日、月次拜賀例のごとし。松平加賀守治脩參覲す。

九月三日。前田齊敬の緣組を許可せらる。

〔御年譜〕

一、九月三日世子御緣組御願通被爲蒙仰。

九月四日。前田齊廣等石川郡宮腰・粟ヶ崎に行步す。

〔政隣記〕

九月四日曉七半時御供揃に而、宮腰幷粟ヶ崎ゟ爲御行歩、藤姫樣・龜萬千殿御同道御出。

九月六日、前田齊敬江戸に着す。

〔毎日帳之内書抜〕

九月六日

一、敬千代樣午後刻御機嫌能御着、賴母・修理幷寺川弁右衞門罷出居候處に而御意有之、御先立織田主税相勤、御溜ゟ被爲入、御口上以善左衞門等內被仰上、御居間書院において中將樣御對顏可被遊候事。

但、御熨斗三方御表小將持出之。

一、右相濟、御溜へ被爲入候。熨斗目・御麻上下御着用、重而於御居間御對顏被遊、夫より御奥に被爲入、壽光院樣・蓮仙院樣ゟ御對顏被成候事。

一、右相濟、御前御同座御居間書院二之間に而、前田安房守殿・齋藤長八郎殿・佐野六右衞門殿・曾根孫兵衞殿・能勢市兵衞殿・曲直瀨養安院・佐野六郎右衞門殿ゟ御對顏。御入之節御城坊主衆御目通相濟、御溜ゟ被爲入、八半時過中之口二枚開より御本宅御廣式ゟ被爲入、壽光院樣ゟ御對顏等之御禮被仰上。夫より直に新御居宅ゟ御行列之儘に而被爲入、御式臺階上に俊姫樣・龜萬千殿御附使者大村金左衞門罷出る。

九月十五日。金澤に於いて諸士に前田治脩參覲後の動靜と、前田齊敬の縁組を許されたることを告ぐ。

〔政隣記〕

九月十五日、一昨日安房守殿より一役等連名之依御廻文、今朝五時人持頭分登城御帳に付、例月出仕之面々柳之御間列居、御年寄衆等被謁。其節今度就御參勤、前月廿七日上使松平伊豆守殿を以被蒙上意、同廿九日御老中方御連名之依御奉書、當月朔日御登城、於御黑書院御參府之御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、本多賴母・津田修理御目見被仰付候旨之御弘、御用番安房守殿御演述。畢而一先御退之上、頭分以上列居、重而御年寄衆等御出、左之通御用番御演述。

数千代樣御縁組之儀、紀伊宰相樣御伯母女樣与被仰合度旨御願被遊候處、當四日御登城可被成旨、前日御老中方御連名之御奉書到來、則御登城被遊候候處、御願之通被仰出、難有御仕合被思召候。此段可申聞旨被仰出候事。

右畢而柳之御間於横廊下、爲御祝詞今明日中年寄中等御宅に可致廻勤旨、御用番御渡之覺書を以御横目中申談有之。附右御縁組御願書、八月廿八日前田信濃守殿を以御用番御老中に御指出之事。且左之覺書に御用番御渡之旨、御横目中申談之事。

付札、御横目に

敎千代様御袋之方、自今御家中之人々青操院殿与唱候様被仰出候條、此段一統可被申談候事。

附、右上使等之御弘には御代替二・三度迄は頭分以上へ有之。其節は御用番御宅迄に爲恐悦相勤、其後は出仕以上迄に御弘當座之恐悦に而相濟。將又御緣組御弘之恐悦勤、元文二年六月十五日又左衛門様御事勝丸様御緣組御弘之節には、御年寄衆御宅迄へ廻勤也。此度も右之御例に可有御座候處、御僉議之趣有之候哉、加判之御家中にも廻勤之儀前記之通に候事。

十月廿九日。江戸に於いて前田治脩及び齊敬を兩殿様と稱すべきことを命ず。

〔政隣記〕

十月、向後中將様・敎千代様を御兩殿様与奉唱候様、今月廿九日於江戸被仰渡。

十一月朔日。前田齊敬吉例によりてその名を改む。

〔政隣記〕

十一月、今月朔日於江戸敎千代様御名、御吉例に付勝丸様与御改、重而御代々之御名に付犬

千代丸様与被稱、且又翌二日又左衞門樣与被稱候段、同日御席ゟ頭分以上四五人宛御呼立、右之趣可申聞旨被仰出候段、本多賴母殿被申渡各拜聽迄。

但、何も常服に而罷出、御帳幷恐悅勤も無之候事。

〔政隣記〕

付札、定番頭ゟ

又左衞門樣御名乘字利博樣与奉稱候。御家中之人々實名、御名乘字同字有之候ば相改可申候。文字は違候而も唱同事に候者、唱替可申事。

戌十一月

右御用番御渡之旨等、定番頭池田融平より十一月廿八日之日附廻狀有之。

十一月七日。中石川の鷹場に於ける眞菰苅取の禁を勵行せしむ。

中石川は犀川淺野川の中間

〔政隣記〕

中石川於御鷹場眞菰等苅取候儀不相成趣、御郡方ゟは每度申渡置、御縮方相立有之候得共、御家中幷町方へ從前々相觸不申候故、稼人躰之者抔心得違有之候。右之趣末々心得違無之樣に与、若年寄衆紙面之寫を以、御用番安房守殿より今月七日御觸出有之候事。

十一月十五日。前田齊敬初めて德川家齊に謁す。

今月は十一月

〔政隣記〕

十一月七日前田信濃守等御越、於御大書院又左衛門様御目見之御習仕、同十四日御奏者番板倉肥前守殿・松平能登守殿御越、於御同間御目見御習禮。

但、肥前守殿等へ、於御小書院溜、御餅菓子・御吸物・御酒等被出之。

〔三壽御譜〕

十一月七日、又左衛門様御目見御願被遊候趣、御用番松平伊豆守へ被仰達置候處、同十四日老中連名之奉書到來。翌十五日公御同道にて御登城。公御同道にて御登城可被成旨申來。

〔毎日帳之内書抜〕

十一月十五日

一、又左衛門様七半時過御殿ゟ御出、中將様御對顔被遊、六打直に御同道に而御登城被遊、御下ニも諏訪部文九郎殿ゟ御立寄、御老中方・若年寄衆御廻勤、八時過御歸殿之事。

但、又左衛門様にハ中之口より御出、河内守等御玄關・階上ゟ罷出、頭分以上蔦之間御廊下通に並居御見立申上、中將様にハ奥之口より御出被遊候事。

一、右相濟、河内守・賴母追付御貸長屋ゟ罷歸、熨斗目・布上下に改、四時過致出席候事。

一、今日御白書院において又左衛門様御目見被仰上、中將様にも御禮被仰上、重而御兩殿様

被爲召御懇之被蒙上意、諸事御先例之通御首尾能被爲濟候段申來候旨、五郎左衞門九時申聞候事。

一、又左衞門樣御禮相濟、引次に河内守・賴母御前へ可被爲召旨、兼而被仰出有之候事。

一、八半時過又左衞門樣御裝束御改被遊宜旨、主税申聞候に付、御居間書院宜敷以五郎左衞門申上候處、追付御出、又左衞門樣御禮被仰上、御太刀賴母披露、御熨斗御手自被進、御刀も被進候事。

一、右相濟、河内守・賴母御前へ被召出、今日は又左衞門樣初而御目見、御首尾能被仰上、中將樣にも御禮被仰上、重而御兩殿樣被爲召、御懇之上意被爲蒙仰、難有被思召候。此段頭分以上へ可申聞候。又左衞門樣御目見被仰上候節、御進退殊之外御宜御座候段、板倉肥前守殿御申聞、御安氣被遊候段等御意に付、御首尾能相濟恐悦之至奉存候。御意之趣金澤へ申遣、於御當地にも頭分以上へ可申聞旨河内守申上退出。

一、右に付河内守・賴母、以孤源太御祝詞申上候處、以傳七郎御意有之候事。

一、御弘之趣相調、此通可爲申聞哉之旨、以五郎左衞門入御覽候處、此通にて被仰出候事。

一、御弘之趣申聞候條、御表向頭分四・五人充、各指引に而席へ可被指出候。今日有合不申面々に明日可申聞候。且又御近習之人々并又左衞門樣御附之頭分以上へ茂、各より御横目へ

可被申談旨、今村三郎太夫ゟ申渡候處、則指出候に付、左之通申聞、筆頭々々ゟ覺一枚充見計相渡す。

但、御近習之人々等は、御横目指引無之重而席ゟ罷出、恐悦申聞候事。

又左衞門樣今日初而御目見、御首尾能被仰上、中將樣に茂御禮被仰上、重而御兩殿樣被爲召、御懇之被蒙上意、別而難有被思召候。此段何茂ゟ可申聞旨御意候。

一、今日爲御祝詞、頭分御帳に付候樣可申談旨、組頭・御横目一集に相扣申渡之。

一、河內守・賴母儀退出、御本宅・新御居宅ゟ罷出、壽光院樣・祐仙院樣・又左衞門樣ゟ御祝詞申上、松壽院樣・勇之助樣ゟは御用多に付、以紙面申上候事。

〔續德川實紀〕

十一月十五日、松平加賀守治脩養子又左衞門・內藤新三郎政編・松平玄蕃頭忠福子乙五郎忠顯はじめて見えたてまつり云々。

十一月、諸役人用談の爲、年寄中席執筆の私宅を訪ふを禁ず。

〔政隣記〕

十二月廿五日。

年寄中ゟ

諸役人爲用談、各席相勤候執筆共宅々ゟ罷越候儀、流例之樣成來候躰に候。以來右宅々ゟ罷

越用事中合候儀相止可申候。右之通可被申渡候。於江戸表右執筆共居小屋へ爲用談罷越候も同斷に候條、是又可被申渡候。將又家老方執筆も右に准じ可申事。

庚戌十一月

右御書立寫御用番大隅守殿御渡、奉得其意、諸頭・諸役人に可申談旨被仰聞候段等、今月十九日定番頭津田平兵衞より廻狀。

十二月朔日。本鄕邸内貸小屋の厩より出火す。

〔政隣記〕

十二月朔日曉八時頃、在江戸御上邸詰御大小將横目前田權佐御貸小屋厩より出火燃拔け、南御櫓前々之通撞与違板打、一番火消喜多岡善左衞門、二番火消田邊善太夫罷出、御人數を以爲防之、三方之壁等相殘鎭候上、善左衞門儀一番御人數召連、新口二枚開より押出、茶屋町建場迄罷越候處、御役人太田内記殿御出に付、火事所不相知候間引取候旨御屆申達、同御門より歸入、善左衞門・善太夫御次に罷出、横濱善左衞門を以委曲言上有之。且御小將頭河地才記・同御番頭神保儀左衞門者、權佐方に罷越防方指引等いたし、鎭候上御殿に出、權佐儀も鎭候上御次に出言上有之。右に付權佐先自分に指扣之儀、才記より伺之上申渡之。

〔政隣記〕

十二月廿五日夕方、左之通奥村河内守殿被仰候段、才記於御小屋儀右衛門立會申渡之。

付札、河地才記ゟ

前田權佐

右役儀之節心得不行屆品有之候に付、遠慮被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

十二月

右に付一之手御横目代、御大小將より神子田五郎介・田邊善太夫・入見吉左衛門繰々相勤候樣、河地才記伺之上申渡。

一、右火災早速鎮候儀等に付、公邊ゟ之御屆無之、且又右厩より權作持馬牽出し遅滯に付、條程皮肉等燒爛れ、色々療治致候得共不宜、同月廿七日斃候事。

一、御中邸詰御大小將横目今村三郎太夫、同三日より御上邸へ引越候に付、右代御中邸假御横目御用に付、入見吉左衛門伺之上才記より申渡、同日引越候事。

同月廿七日前田權佐家來共再御吟味之上、馬捕彌兵衛不埒之趣有之、禁牢被仰付。其外家來共御貪着無之。但先達而右家來共御吟味有之。

同廿九日左之通被仰渡、則才記於御小屋申渡之。

付札、河地才記ゟ

前田権佐

右遠慮被仰付置候得共、最早御免許被成候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

十二月朔日、加藤半右衛門、贋銀の嫌疑を以て親族預を命ぜらる。

〔政隣記〕

十二月朔日左之通。

定番御馬廻池田磯平支配、江守助左衛門・中村八郎兵衛組、領百十石、長町俗名だらが町

加藤半右衛門　七十三歳

養子　同　□

父子共不締無之様一類に被仰渡、則磯平等三人半右衛門宅に罷越申渡之。

右翌年二月三日右宅に、頭三人共罷越遂吟味候處、數年來似せ銀致し候趣申顯。翌四日於公事場御吟味之處、委曲白狀におよび、同日より牢揚屋に被入置。且養子者右一件一向不存旨申に付、是迄之通一類に御預置。

十二月二日、前田治脩、齊敬と共に盛岡侯邸に赴き琉球人の行列を見る。

〔政隣記〕

付札、岡田太郎右衛門に

琉球人見物之儀望之者は、勝手次第見物に可罷越旨被仰出候。尤作法能目立不申樣、相心得可申候。歸國之節は遠方之儀にも候間、夜中より罷出候儀も勝手次第に候。此段御手前より順達可有之候事。

右河内守殿より太郎左衞門江御渡、同人より以廻狀傳達有之候事。

一、右琉球人爲御見物、十二月二日曉七時不遲御供揃に而、慶次郎樣江南部御邸外櫻田中將樣・又左衞門樣御同道被爲入、晝九時頃御歸館。

但、御供人江も見物被仰付候。

十二月五日曉七半時御供揃に而、右爲御見物祐仙院樣、芝新橋松坂屋小路岩本太兵衞方江被爲入。

十二月六日。能美郡粟生渡船の船賃に關して答申す。

〔能美郡舊記〕

先頃御紙面を以被仰渡候、粟生船渡場之儀は、旅人之ためと被仰付置、渡守共御給銀茂被下候處、船賃之儀者取請申間敷筈に候所、近來旅人より船賃貪取申儀茂在之候段及御聞、沙汰之限に被思召、急度可申渡置候樣被仰渡、奉得其意、則粟生村役人中幷船渡守共手前嚴重詮議仕候處、旅人より船賃貪取申儀者無御座候得共、水高等之節者、旅人より志候而、五錢・三錢

宛差置候得者、買請申儀者御座候得共、渡守共より強而船賃取り申儀は無御座候。且又諸方商人よりは、其分限に應、少々之船賃は古來より受取來申候。此儀は延寶二年粟生船渡御高札之表に、侍・奉公人に船賃取申間敷事。商人たりといふとも、其身に不應船賃取申間敷事と御座候。依而少々之船賃者取請來り候得共、旅人等よりは志船賃之外、彼是強而取請申儀者曾而無御座旨申聞候。且又先頃馬借共駄賃之儀書上候帳面之内に、粟生船賃一駄に付六文宛と書上申儀者、如何之趣に候哉与御尋被成候に付、段々詮議仕候處、大判荷物・かせ八講・小間物・太物・綿・木綿類等數駄付通申儀、一二駄宛船越可仕候所、三四駄宛も附渡申儀も御座候に付、水高にも向候節、渡場之儀者不及申、小俣川等に而も、渡守共指添手傳等仕申儀御座候に付、問屋口錢と一集に取請、問屋方より六文宛渡守共へ相渡申候。此儀は古來より振合之由申聞候。猶更御締方之儀嚴重申渡置候間、御斷申上候、以上。

戌十二月　寺井村　孫三郎

恒川七兵衛殿

水原五左衛門殿

右寛政二年十二月六日御場へ上る。

十二月廿一日。永原大學等來年三月以降一ケ年間に於ける藩の財政豫算

を上申す。

〔寛政三年より同四年三月まで御入用大綱圖〕

來春より之御勝手御はこび方之樣子、御入用大綱圖紙面相添、御勝手方笠間九兵衞より指出候に付、遂詮議候處、來春於大坂御調達過分至極之儀。御廻米高如近年屆八萬石位候はで者差當り春中御調達も相調申間敷に付、御廻米高多被爲登度儀に候得共、御米出方無御座段、當八月御達申置候處、格別御詮議之上、先達而被仰付置候御中屋鋪御普請御手當米等、御廻米等に立込候樣に被仰渡置候。依之當御收納米幷諸返上米等、未御米圖しらべ出來不仕候得共、私共相考心圖仕候處、定式渡り方等引殘候而拾四萬石餘可有御座、其內江戶廻り屆六千石、大坂屆拾萬石、幷運賃米引殘一萬二千石餘、此分大坂之樣子次第追積又は地拂に被仰付候而、江戶御入用に相立候圖に仕候處、大坂初米直段下直故、別紙之通莫大之御不足、若米直段宜相成御廻米平均五拾目計に相成候得者、可也に可被辨候得共、只今彼表有米等之樣子に而者、中々左樣之價には相成間敷、來年に至り次第に引下げ、圖りよりは下直に相成儀も可有御座与被存候。然者當年之御圖り方過分之御不足に御座候處、江戶表諸事御省略、暨御調達之內前御返濟御座候程に相成候得共、來年之儀は當年よりも彌增之御差支、御逼迫至極之場へ至り可申与奉存候。左候得者御不足高埋合可申樣無御座候。且又今度下行賣兼候分御召米、幷此

節爲通用町御召米共、都合一萬千三百石餘之代銀は、來春中御入用御手當に相成有之候。當月諸方御土藏上納銀之內假切手を以受取、右御召米代に相渡候圖りに付、右一萬千五百石餘之分追而御拂に仕、御當地御入用に可相立候。如此仕候得者御米拂切に相成可申、尤利立御貯用米は有之候得共、此分は誠に別段之儀、其外に來々年迄可越御請米一向無御座候。御手薄至極之儀に御座候。且又地・他とも段々御省略御嚴重に御詮議有之候御樣子に而、此上御詮議も有御座間敷候得共、打返種々遂詮議申候處、差當り候而來年中之御不足御埋方等、御はこび御取續之道存辨申儀無御座候間、先來秋迄之處御入用に拘り候儀者、無御據分ゝ成限御差延御座候樣被遊度奉存候。尤前段之通是迄重々御詮議之上、猶更無味に被指押候而者、一統不信服之所ゟも至り可申哉与奉存候間、先達而三ヶ年御省略被仰渡置候得共、尚更來秋迄暫之間、重々何に不依御入用方之儀或は御繰延被成候段、寄々を以被仰渡も有之樣に仕度儀に奉存候。

一、先年御備米之儀、別紙九兵衛等紙面之通、先年は大坂先納御備入、幷御國方に而も分限之者共も有之、御かし銀幷御調達等隨分出來仕躰に候得共、當時に而者分限之者も無之、其上本吉右酒屋四郎兵衛等も近年次第に手弱に相成候樣子に付、不時に過分御調達等差上得申間敷候間、當時に而は是非右御備相立不申而は難相成、私共於御役前誠に要用之儀に御座候。

當年之儀に指當り來春迄之御はこび方むしき御差支之族故、引欠御廻米等に立込申儀に御座候。乍然前條之通御難澁至極之御運び方に候得共、來年とても以後とても指懸り之御逼迫に而、莵年御備別立可仕手段無御座候。當惑仕儀に御座候。右等之趣尙更幾重にも御詮議御座候樣に仕度存候。則九兵衞等差出候別紙兩通御達之申候、以上。

戌十二月廿一日

永原大學
江守平馬
佐藤勘兵衞

奧村河內守樣
横山山城守樣
前田大炊守樣
前田圖書守樣

來年中御國方幷三都御入用大綱圖御達申候。當年者又左衞門樣御出府等に而、來春迄之御入用過分至極に御座候處、兼而之御圖与御入用方減等に付、本吉幷大坂迄に而御調達を以被相辨、且來春御廻米も近例よりは多可被爲整に付、春中御歸國迄之御入用大坂に而御調達可相調候得共、來年中御入用幷右御返濟打重り甚御難澁至極。依而格別御僉議之上、御中屋舖御

普請御手當米去年・今年兩年分共、暨荒年御備米別立之御仕法當一昨被指止、來春御廻米等に被仰付、江戸表等御入用に御立可被成段被仰渡。依之大坂御廻米高未御治定は無御座候得共、先屆高拾萬石之圖に相立申候。直段附之儀は、此節之大坂相場よりは餘程下直に圖置申候。此儀者當年諸國共作躰宜、西國米等多相登り候躰に而、當月朔日大坂濱方有米、去年よりは又々相增、大數百七拾五萬俵之由、彼表同役共より申越候。來春に至北國米等相登り候者彌夥敷米高に相成、價も彌賤敷可相成、其上御米之内損米等も餘程出來可仕候。旁以御米直段、別紙之圖、平均石三拾五匁之處も無覺束程に奉存候。

一、御國方御入用、去午の冬格別被仰渡有之哉、翌未い年は諸向御平常方年中之御入用高少御座候。其後御入用高相增申候。當時格別御僉議御省略御座候間、來年は右未の年よりも尚更御入用可相減哉与奉存候得共、先未の年御平常方迄之御入用高を以相立置候。

一、江戸表御入用、去酉年御平常方迄之御入用高を以相立置申候之處、莫大之及御不足高申候。江戸并御國方共、御定式同事之無御據不時御入用も可有御座儀、左候得者彌御不足高相增申儀に御座候。別紙三千貫目餘之御不足いかゞ可被仰付哉。兼而も御達申候通、聊以私共存辨申儀無御座候。幾重共御詮議御座候樣仕度奉存候。

一、每々御達置申儀に候得共、御入用方に比候而者御取箇御不足に付、先年より荒年之御備

米無御座御様子に而、凶作に當り一時に御差支御手段盡申場へ至候与奉存候。依之御家中より御借知之内を以毎年四萬石宛、右御手當に被成置度段愚存之趣、去申年御達申候。同年より共御國に御座候處、來年御入用方等御辨方無御座に付、無御據今年被指止候而、尙更相考申候之處、先年与違當時に而は、凶年に當り尙以御手段無御座儀与奉存候。右御備之儀、御勝手御はこび方之根元大切之御儀に奉存候間、已後之儀尙更御詮議御座候樣に仕度奉存候。右御はこび方之様子御達申候。私共於御役前聊覺悟無御座段甚恐入奉存候得共、何分存辨申儀無御座候。御取頻御僉議被下候樣仕度奉存候、以上。

十二月

笠間九兵衛
立川金丞
齋藤彌右衛門
村松金太夫
在大坂 深谷孫八
同 安田六平
杉野多助殿

永原大學様

岡田太郎右衛門様
佐藤勘兵衛様
江守平馬様

亥三月より子三月迄三部御入用大綱圖

一、七百三十五貫目計　戌十月於大坂御調達高、亥年御廻米代を以御返済可有之分。

一、六十五貫目計　右御利足。

一、七百五十九貫二百目計　亥三月分御入用中勘帳之面。

一、二百三十七貫目計　御歸國御入用。

一、千百貫目計　亥四月より子三月迄御留守中御入用中勘圖。

但、去酉四月より戌三月迄不時御入用之外、御平常方御入用月々本勘帳を以相圖候事。

一、三百二十貫目計　又左衛門様御附人々等年中御扶持方代。

一、百貫目　御同人様御仕切御入用。

一、十貫目計　同年中御厩御入用。

一、三十貫目計　同御献上御進物御入用、但何程計御入用御座候哉未相知候得共、先如此相圖申候。

一、三百二十貫目計　子の春御参勤御入用。

一、千　貫　目　計　京・大坂御入用。

一、七　十　貫　目　計　亥三月より同五月迄之御入用御調達銀利足渡。

〆六千七百四十六貫二百目

此方に

三千四百三十貫目計　大坂御廻米十萬石之内御合力米等渡、引殘九萬八千石計御拂代銀、右三十五匁替之圖、但海上無難之圖。

七　十　貫　目　計　江戸御廻米六千石之内、御借金方幷御扶持方米等渡、引殘二千石計代、石右同。

四　百　貫　目　計　地拂米一萬二千五百石餘代。

七　十　二　貫　目　計　當戌の年江戸御有米之内、當十一月御拂千五百石代。

〆三千九百七十二貫目計

指引〆

二千七百七十四貫二百目計御不足

内

千七百十三貫二百目計　亥七月比より十二月比迄之御不足に相當り申候。
千六十一貫目計　子正月より三月御參勤御用迄之御不足に相當り申候。

〆

金澤御入用圖

一、三千百八十貫目餘　年中定式但天明七年御入用高。
一、百五十貫目　御次に上納。
一、十貫目　御城方へ返納。
一、十貫目計　今年當り堂形米二百石代。
一、二百五十貫目　本吉に御返濟。
一、八貫七百五十目　右利足。
〆三千六百八貫七百五十目

此方に

二千六百貫目計　當十二月より來十一月迄諸方上り、但年中三千貫目計に候得共、當十二月上り之內假切手を以四百貫目計受取、此度之御召米代等に可相渡に付、殘高如此。

三百五十貫目計　當十一月渡下行之内千三百五十石餘、并十二月町御召米共一
　萬千三百五十石計御拂代銀。
二百四十貫目計　諸手合渡り米之内、現銀延御拂米大凡圖八千石代。
〆三千百九十貫目計
指引〆
四百十八貫七百五十目計御不足
地・他御不足高
合三千百九十二貫九百五十目計
右三都并金澤向御入用大綱圖如此御座候事。

戌十二月

十二月廿五日。賭の諸勝負に關する制禁を勵行せしむ。

〔政隣記〕
十二月廿五日左之通御用番大隅守殿御廻狀出。
かけい諸勝負御制禁等之趣、去暮被仰出候通に候。猶更一統遺失無之樣可申渡旨被仰出候旨等、去年十二月廿八日同斷に付爰に略す。

正月朔日。馬廻組頭列伊崎所左衛門登城の禮を缺き自分差扣を行ふ。

〔政隣記〕

元日陰、折々微雪寒威烈。頭分以上五時より熨斗目・半袴着用登城御帳に付、於柳之御間列居、年寄衆等謁、四半時退出。但最前小松定番御馬廻御番頭當時無役頭列伊崎所左衛門、今朝登城不仕、御斷にも不及候に付、先自分指扣之處、不及指扣に候段被仰出候旨、二月御用番本多玄蕃助殿被仰渡。

年頭御作法東・北共前々御例之通に候事。

正月八日。前田治脩、前大聖寺侯前田利精に密使を派遣す。

〔政隣記〕

正月八日、備後守樣御居所へ、御使御奥小將御番頭河内山久太夫、副御使御奥小將横目堀田折之助を以、御内々に被仰進趣有之。尤御口上之趣御人拂に而直々申上之。

本年五月廿一日今照前大聖寺侯前田備後守利精は當時金澤に籠居中にあり

正月十七日。光格天皇の新内裏遷幸を祝する爲前田治脩使者として前田式部を出發せしむ。

天皇の新内裏還幸は寛政二年十一月廿二日に行はれたり

〔政隣記〕

十一月廿八日、人持組前田式部え、今般主上還幸爲御祝儀、京都え被指登御使者被仰付、翌年正月十六日於御席拜領物御羽織一・紗綾二卷、翌十七日發足、二月廿五日歸。

正月十九日。前田齊敬禮服着用の習禮を行ふ。

〔政隣記〕

正月十八日、前田信濃守殿・前田安房守殿御出、并爲御取持御城坊主大須玄喜・利倉善佐參上。御大書院に御屛風圍出來。又左衞門樣御禮服御習禮之御示合有之。翌十九日晝後、右爲御習禮御奏者番板倉肥前守殿・松平右京亮殿・松平能登守殿御出、於御書院溜に御餠菓子・御吸物・御肴等出、御習禮相濟。七時過御退出。爲御取持右に記信濃守殿等も御越、御餠菓子等御料理も出候事。

正月廿三日。德川家齊、前田治脩に鶴を贈る。

〔政隣記〕

正月廿三日上使御使番朝比奈彌太郎殿を以、御鷹鶴御拜領。鏡板迄御兩殿樣御出向等都而御作法御前例之通。且上使御料理御盃事も就御斷に、御餠菓子等出候事。

正月廿七日。前田治脩盜賊改方奉行に命じ賭碁を行ふものを調査せしむ。

〔御親翰幷言上留〕

一、諸士を初碁・將棊發行、其内かけ物も仕哉に相聞え候。承糺樣子可及言上候、以上。

正月廿七日　　　　　　高畠五郎兵衞　判

二月十三日

一、前月廿七日御親翰被成下、當十日到來仕、謹而奉拜戴候。御家中諸士之人々を初碁・將棊發行、其内かけ物も仕哉に被聞召候、承糺樣子可奉言上旨被仰渡之趣奉畏候。

追而承合趣可奉得御内聽候。

一、御筆之物幷御封目御印御封じ紙奉返上之候、以上。

亥二月十三日

二月廿八日

一、先達而被仰渡置候、碁・將棊かけ物に仕候儀承しらべ、左に奉申上候。

定番御徒　山崎孫九郎

今町碁打　善助

同町柳橋屋　甚左衞門

同町尾山屋　伊右衛門

袋町油屋　半左衛門

堤町戌亥屋　仲助

同町中屋　彦右衛門

奥村監物家來　加藤半右衛門

番職次郎方同居人當時浪人者　田邊口左衛門

油上屋　次郎右衛門

八百屋　善助

能州中居村　又次郎

河北郡十村御所村長次郎預り組手代鹽屋　庄助

四丁木町　圓長寺

堀川　知覺寺

右何茂かけ碁仕、其内山崎孫九郎・碁打善助・鹽屋庄助儀、過分之かけ勝負仕、碁一番金百疋より以下は無御座、夫より以上は金小判何兩与申に至り、其上孫九郎儀は、御家中幷陪臣等にも銀子、貸方仕、銀百目に付三ヶ月二匁五分計より七・八匁計迄之高利を、先利与申、貸付

之利足高を最初に引落受取、貸方仕儀相違無御座候。其外隱質取受候沙汰も有之候へ共、當時に此儀無御座候躰に相聞申候。孫九郎外之者共儀はかけ碁仕迄に而御座候。

右之趣奉得御内聽候、以上。

亥二月廿八日　　高畠五郎兵衛　判

正月。前田治脩、家老及び若年寄に公用文書の起草は之を自からすべきことを諭す。

〔御親翰拜寫〕

家老中・若年寄中へ

都而各より僉議之紙面、段々兎角分も兼、且紛敷、不審申出候而も不詳、再往尋候上漸譯立申儀間多、先例等尋候而も一々巨細に無之、僉議麁略成事共も有之、其時に申聞候得共全く仕舍得無之躰。畢竟是迄執筆任せに候故、ケ様之趣と存候條、自今用之紙面下書等、先は各自筆に而相しらべ尤に候。殊に内記・修理は年若之儀爲更心得も可有之事。

亥　正　月

正月。村肝煎推薦の方法に關し諸郡に意見を徵す。

〔司農典〕

村肝煎之儀、於一村に不輕役前之儀故、先年より右願方御定も有之、唯今迄其通に候得共、御定之御趣意者、持高多者之内實躰に而於一村に取治働有之者を相撰、村中納得を以可相願儀に候處、近年其形者乍有之、右御趣意を取失、村中之者共押易者を相願候様相成躰に候。右之通御定も有之候得共、其方中了簡有之候はゞ遂詮議、小紙を以可申聞候。尤諸郡風俗之違も有之儀に候間、郡々異同之了簡も有之候はゞ、一郡切可申聞候事。

亥　正　月　　　　改　作　奉　行

諸郡御扶持人・十村中

正月。能登口郡極貧五十九ヶ村の仕立を命じたるを以て勸農の法を諭す。

〔司農典〕

今般口郡難澁村之内極貧村五拾九ヶ村、幷後山分等御仕立被仰付候。被仰出之趣等、先達而申渡置候通に候。口郡之内、改作之御法を始、跡々より被仰出之品、次には時々申渡置候品々、致違失候者も有之、百姓に不似合行狀共有之躰に而、自然与惡敷風俗惣躰へ押移り申様子に候。其内にも御厚恩不忘、其分限を相守、農業入情仕、神妙成心立之者茂有之躰に候得共、左様之宜敷人柄之者をば可見習之處、却而忘嫌様成行、御收納歩入以下萬端不行儀に相

心得候者も有之躰相聞候に付、兼而は急度可相糺与存候處、去秋以來歩入等、極貧村々も御收納方大切之儀を得心仕候故に候哉、實意を盡し候樣子に而、皆濟方も相進み候に付、是迄之儀者先づ不及穿鑿に候。然共勝れ而不埒甚敷者之儀者、追而加詮議申儀も可有之候。

一、御扶持人幷十村之儀者、其組裁許被仰付置、重き役前組親之儀に候得者、組村々之者も急度可致尊敬儀勿論に候。然處末々に至り心得違いたし、其方中に對し驕慢之心意氣之者も有之樣子相聞、沙汰之限に候。自然右聞之通、裁許之十村・御扶持人を驕慢致し候樣之者は、御上を不奉恐徒者に候間、少しも構不申、早速可及斷に候。只今迄之樣子相考候處、其方中かくまひ過候に付心得違之者出來、風俗を亂候樣被存候。以來之心得可有之候。且亦其方中、組惣樣之者組子之儀に候得者、常々心を付、少に而も能心立善行之者は猶以愛し、兼而も被仰出候通、能候者は早速可申聞候。心得不宜者は、時々異見介抱可有之事、不及申候儀に候。若又其方中等裁許之面々者、組下に對し不計心得違有之、組下より理合雖申解、一概之了簡に而、裁許廻り口御扶持人共下情於不聞入に者、如御定其品に寄、御郡奉行與拙者共へ可相斷、御定与違手越之仕方於有之に者、御大法之通不依理非に可被行曲事に、此御條目之儀者、御郡奉行中春秋廻り之節申渡有之儀に候得共、其方中村廻度々、小百姓・頭振迄も無違失樣、重々申渡可爲會得候事。

方品本の儘

頭振多本の儘

一、村肝煎之儀者、一村之指引役前之儀、都而村中頭振迄も萬事不愼之族無之樣、農業一途に爲相心得、其所々可爲稼方品可致入情、不似合之所業無之樣申付、別而近年度々被仰出候衣服・食物・家居奢侈無之、質素之風俗に立歸候樣組合頭申談、晝夜心を付能々申諭可致指引。町人杯他之風俗を見習可申儀に而者無之候。惣而頭振多共稼儲を業与すへき者は、職人商人之上にる儀者何も承知之通に候共、毎度被仰出奢侈を被禁御趣意は、農民を賤しめ候儀に而は無之、都而心之奢より段々借上に相成、日々事々物々に付悉く費有之に付、第一作仕入方麁末に相成、氣候宜天災無之年柄も作物取劣御收納をも不足仕族難澁に迫り、先祖より持傳候御高をも段々切讓り、畢竟困窮に至り、妻子をも養育不得仕、甚之不孝不慈之品々致出來儀、其方中眼前間有之儀、是等之所御不便に被思召候に付、度々被仰出候儀与奉恐察候。是迄之所其方中敎諭も不行屆、於村々に肝煎等會得不仕、申談方等閑に相成候故に候。此上にも若農業相怠り、不相應之奢侈有之者共之儀は、早速可申斷。隱置、外より相知候はゞ、本人幷村々肝煎者勿論、其方中急度相咎可申候。

一、元來農民者商人与は違、先づ律義質朴成方故、其村々肝煎之善惡に隨ひ一村之者共善にも惡にも移り變候。既に生神村久右衞門勝而孝心成者故、自ら一村心立宜敷近村迄も風俗宜敷、且亦新川郡鉢村六郎右衞門貞實奇特之者故、一村之者共右六郎右衞門心意氣に順隨いた

上、神妙之趣有之に付、委曲達御聽、去年爲御褒美右肝煎六郎右衞門を始一村に結構至極に被仰付候儀、何茂承知之通に候。其外平日心立宜敷、役筋能會得仕、入情相勤候肝煎有之村方は、一村農業出精いたし、難澁行直り、都而之風俗も宜敷儀者、諸郡所々に有之儀に候。如此之趣に候得者、所業不宜、風俗惡敷、農事怠り、時々之手入方等手後いたし、作物取劣も、無詮一村難澁深く相成候村方者、第一肝煎心得不宜、勤方疎略等閑故に候。前條之趣能々致會得候樣可申渡候。

一、惣而村々變地等出來之節者、同組村々相互助合、或者一郡中加勢等を以助合申儀、前々より諸郡同樣之儀に候處、口兩郡之儀者右之容躰不相聞、如何之事に候哉。同組村或者御郡一躰之意味無之、ヶ樣之儀も風俗不宜故与被存候。以來之儀其方中右心得可有之、隨分爲助合候樣兼而村々に可申渡置候。

右其郡村々肝煎等心得不宜に付、御郡之內行儀風俗等惡敷儀共有之樣子、其方中敎諭方幷取締方等不行屆故に候。今般御仁惠を以極貧村數十ヶ村御仕立結構就被仰付候に、爲後々其方中幷村々肝煎心得方等其要用申渡候。組々村々に申渡可爲致會得候。本文之通此上不埒之族於有之に者、本人者勿論村々役人共急度御咎、品に寄可被行御嚴刑にも、暨其方中可爲越度候。組村々一統へ申渡、請書取立置、尤其方中請書可指出候、以上。

齋藤小左衛門
岡田才記
笠間九兵衛
立川金之丞
白江金十郎
前田源六郎
加藤左次馬
杉野多助　煩
九津見甚兵衛　煩
上木忠兵衛　煩

二月朔日。諸士の先祖由緒附帳を來四月中に提出すべきことを命ず。

能州口郡御扶持人・十村中

〔政隣記〕
二月四日、年寄中席に指出置候先祖由緒一類附帳年月を經候間、此度增減相改、當四月中迄に可指出候。帳面口張等に不及候旨等、御用番玄蕃助殿、當月朔日被仰聞候段等、定番頭池

田讀平廻狀有之。

二月十日。前田治脩系圖帳を幕府に上る。

〔三守御譜〕

寛政三辛亥年二月十日、御系圖帳一册幷御代々之内碑銘著述幷格別之御行狀等被書出候品無御座旨之御屆書一通、御代々御實名かな付一通、大目付桑原伊豫守へ聞番坂野忠兵衛を以て御屆あり。是寛政元年十一月廿八日大目付桑原伊豫守呼立、今般諸家系譜取調御用松平越中守申渡覺書被相渡、綱紀樣御代より以後調可申旨。且其家々代々之内碑銘等有之分等調可指出旨被申聞。依て本文御指出あり。然所同四年二月十日、今度御指出御系譜より以前之御代御兩方樣之分、此度書繼取調理候樣、松平越中守申聞候旨桑原伊豫守申聞、同□年□月御差出あり。此一件別記あり。

二月十一日。前田齊敬棚營に登り元服して佐渡守と稱す。

〔毎日帳之内書拔〕

二月十一日

一、又左衞門樣六時前御殿に御出、中將樣御對顏被遊、六時過御同道御登城被遊、中之口に賴母初頭分以上罷出候儀、去年御目見之節之通に候事。

一字拜領は前名の溥を齊廣と改めたるなり

一、御登城被遊、追付賴母一先罷歸候事。

一、河内守・賴母四時過重而致出席候事。

一、又左衛門樣今日於御前御元服被仰出、御一字御拜領、被任少將、御腰物御拜領被遊、御名佐渡守樣与御改被遊、御盃御頂戴。中將樣にも御禮被仰上、萬端御先例之通御首尾能被爲濟候旨、御附使罷歸申聞候段、五郎右衛門席に罷出申聞候事。

一、御南殿樣御同道御城御下に、御老中方・若年寄衆御廻勤、九時過御歸殿被遊候事。

〔每日帳之内書拔〕

二月十一日

一、左之御書付等拜見可仕旨被仰出、以五郎左衛門就被仰渡下候。拜見畢而以同人返上仕候事。

但、寫金澤年寄中にも遣。

卷口之上

松平加賀守に

松平又左衛門

御一字被下候御作法書爲心得指越候。名は佐渡守与可被改候。右之節長袴着用可被致候。加

賀守儀茂長袴着用尤候。日限之儀は追而可相達候。

御黒書院

松平又左衛門

御緣頰に而御目見、小さ刀之儘御下段御敷居之内御右之方着座。此時御字之折紙老中可相渡候間、罷出頂戴、御次間に被持退、此節上意之趣老中申達之。其後以進物御緣頰に而御禮、御次間に退座、進物引之、重而御下段御敷居之内御右之方着座、御盃御前に被召上、其御盃御銚子に而被下之、御下段中央に御酌扣在之時御次に退、小さ刀取之、罷出頂戴、御肴被下之、復座加有之。此時御道具可被下候間、頂戴而道具持之御次間に退、被下候道具を着候而罷出、御緣頰に而御禮、御次間にたゝ候而道具を置く。小さ刀帶之罷出、一獻加御盃を持退座、御銚子入。此節獻上之御刀出る。出座老中言上之、又最前之席に着座、老中御挨拶言上之御禮いたされ退去。

松平加賀守

以進物御緣頰に而御禮、老中御挨拶言上之、退座進物引之。重而

加賀守

又左衛門

一同に出座、御右之方着座、上意有之、老中御取合申上退去。

〔續藩待雜記〕

一、寛政三年亥二月十一日又左衛門樣御登城被遊、巳の刻御黒書院公方樣出御に而御上段御出座、又左衛門樣御元服被仰付、御一字御拜領、正四位下少將に被任、佐渡守齊敬公と奉稱。御獻上物作り御太刀・黄金五枚・卷物十・御馬裸背一匹・御刀一腰豐後國實行代金十五枚、御盃等御頂戴、御刀一腰備前眞利代金三十枚御拜領、御禮被仰上御退座。加賀守樣より作り御太刀・白銀二十枚・綿三十把御獻上、御元服之御禮被仰上、夕八時御下城被遊候事。

〔續德川實紀〕

二月十一日臨時朝會あり。松平加賀守治脩が養子又左衛門首服を加へられ、御一字下され、正四位下少將に叙任せられ、佐渡守齊敬と稱し、豐後國實行の刀・金五枚・卷物十さゝげて見え奉り、御盃に備前國眞利の御刀そへて賜はり、父加賀守治脩も捧物して、同じ事を謝したてまつる。

二月十六日。朝鮮人參栽培及び販賣を自由にする幕令を領内に傳ふ。

〔政隣記〕

二月十六日左之通御觸出。

朝鮮人參之儀、拂底之品に而高直成故、輕き者及大病候而も容易用候事難成に付、享保年中より朝鮮種を以人參作殖之儀御世話有之候處、次第に致增長、當時は諸國に而作覺、世上指支も無之趣に候間、從公儀作殖被仰付候儀以來被指止、制法所に而座賣相止候。是迄は朝鮮種人參作候儀、無縮候而者不相成候處、以來は作候儀は勿論、賣買共可爲勝手次第候。

右之通可被相觸候。

十　二　月

松平越中守殿御渡候御書付寫一通相達候間、被得其意、答之儀松浦越前守方へ可被申聞候、以上。

十二月廿四日　　大　目　付

御名殿　留守居中

朝鮮人參之儀に付從公儀相渡候御書付寫一結二通相越之候條、被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

辛亥二月十六日　　本多安房守　印

長大隅守 印

諸頭御用番一名宛殿

中將は少將の誤

二月十九日。金澤に於いて諸士に前田齊敬叙任のことを告ぐ。

〔政隣記〕

二月十九日、昨日依廻状頭分以上登城御帳に付、柳之御間列居之處、御年寄中等御列座、御用番玄蕃助殿左之通ニ御演述。

又左衛門様御元服可被仰付候條、當十一日御兩殿様御登城被成候様、前晩御老中方御連名之御奉書到來、則御登城被遊候處、又左衛門様御儀、於御黒書院御目見、御一字御拜領、被為任正四位下中將に、御盃御肴御頂戴、御腰物御拜領、被為蒙御懇之上意。中將様にも御禮被仰上、御懇之被為蒙上意、重疊難有御仕合被思召候。此段何茂に可申聞旨、以御書被仰下、御名佐渡守様、御實名齊敬様与奉稱候事。

付札、御横目に

今日御弘之為御祝詞、今日中又は明後廿一日年寄中等宅に罷出可申候。幼少・病氣等に而今日登城無之人々者、向寄より傳達、為御祝詞御用番宅に以使者申越候様可被申談事。

二　月

二月二十日。前田齊敬と同字の實名を改むべきことを命ず。

廿日左之通御覺書御用番御渡之旨等、昨日定番頭より廻狀出。

佐渡守樣御名乘齊敬樣与被稱候に付、御家中人々實名同字有之候者相改可申候。文字には違候而も唱同事に候者唱替可申候事。閉門等被仰付置候者、當廿九日迄に有無之儀可書出旨、前々之通御用番より御觸有之。

二月二十日。浪人木村新助町人を毆打して禁牢に處せらる。

〔政隣記〕

二月廿日西末寺煙管屋江虛無僧罷越、亭主与口論之上尺八に而眉間を打損、檢使相立、右虛無僧者名捕置勤番有。生國遠州濱松与申候得共、當所之者躰に付、於公事場吟味有之候處、去々年御扶持被召放候御算用者、當時浪人木村新助に付禁牢。

二月廿四日。神護寺に於いて德川家基の第十三回忌法會を營む。

〔政隣記〕

正月廿九日、來月廿四日於神護寺孝恭院樣御十三回忌御執行、御奉行本多安房守殿より殺生遠慮等之儀、幷茜右衞門坂往來留等之儀、二月十三日被仰渡候旨等、御横目廻狀出。前々公儀御法事觸同斷に付略之。

〔政隣記〕

二月廿四日、前月廿九日記に有之通、今日於神護寺孝恭院様十三回御忌御法會御執行、御大小將役懸左之通。

御佛殿御錺幷御靈供奉行　堀新左衞門

宮崎淸左衞門

寺中火之番披露役相兼　不破駒之助

平岡次郎市

岩田是五郎

笠間銀三郎

二月廿四日。前田治脩上野寛永寺に豫參を行ふ。

〔政隣記〕

二月廿四日、上野御豫參。前夜九時不違御供揃に而、無程御出、常照院に而御裝束、御輿に被爲召、御小人目付兩人御先へ相立、朝六時過御本坊之前通大慈院裏門御乘通し、右表門右之方より裏通御供所御門前に而御下乘、被遊御豫參候。此處迄素袍御供四人（御番頭神保儀右衞門。御表小將三人）・布衣御供四人（御小將頭河地才記。御使番代中村萬兵衞。御表小將林平次郎。聞番坂野忠兵衞）・上下御供御先角。

右御下乘よりは布衣御供、御草履取迄被召連、相殘候御供人は大慈院座敷に有之。四半時過還御に候間、御輿廻し候樣目付申聞、最前之所に而御乘輿。重而常照院に被爲入、素袍御供等裝束改、八時過御歸舘。御横目代御供人見吉左衞門。

但、御步並以上於常照院、ほごき飯・御菜染被下之。右以下、御出前於御臺所御賄被下之、足輕以下御賄代に而被下之候事。

本文は二月廿五日の條に載せらる

二月廿五日。當春歸國供人の手當として金銀を給與すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、御道中奉行に

當春御歸國御供人之內、古詰之者も罷在候得共、多分去秋御供に而罷越詰滿不申者共に、去春御發駕之趣故夫々手當仕罷在候處、御發駕段々相延候に付彼是失却多、其上此表諸色高直に付何も致難澁候。是以後二ヶ月御貸渡被成間數旨等去年被仰渡之趣も有之候得共、前段之趣に候間、出立指支不申程御貸渡有之樣被致度旨等、再往段々被申聞候。右被申聞之趣無據儀に付、猶更遂僉議委細達御聽候處、願之趣に付今般格別之趣を以、去秋以來段々此表に相詰候者へ者、一人扶持に銀八十目、古詰之者には小判一兩宛被下候旨被仰出候。如斯被下候儀に候條、精誠致勘辨旅用不指支樣相心得、御供可仕儀肝要之事に候。

右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ被申聞、組等之内裁許有之人々ハ、其支配ゟ相達候様可被申聞候事。

二　月

右河内守殿御渡之旨、河地才記より廻狀出。

二月廿五日。江戸より歸國する者の土産物を齎し及び客を招きて酒宴を催すを禁ず。

〔典制彙纂〕

江戸表より御供等に而罷歸候人々土産物等堅指止可申旨被仰出趣、別紙之通於江戸表一統被御渡候條、尤此表も右之通嚴重相心得、尤以後交代等に而罷越候人々ゟ餞別として音物ハ不及申、其事抔に事寄、親類縁者たり共相招候儀堅指止可申候。以後聊無違亂急度相心得候樣可申渡旨被仰出候條、可被得其意候。則於江戸表被仰渡候寫相渡候。右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ――尤同役中可有傳達候事。

二月廿四日　　本多玄蕃助

前々より江戸御供等に而罷越候人々ゟ餞別いたし、又罷歸候節土産物無用可仕旨被仰出申渡有之、就中天明四年御歸國之節具に仰出、一統申渡候通に候。當時者萬端嚴重被仰出共有之

候得者、猶以其心得可仕儀に候。當御歸國御供人幷交代等に而罷歸候人々茂、土産物等致持參候儀堅無用いたし、假令身近親類緣者たり共、勿論右之沙汰に及申間敷候。此者詰も滿不及人々者、別而覺悟も可有之事に候。且又御供人者御發駕御着城之節、衣類相改候族も有之躰候得共、見苦敷儀は不被及御貪着候間不及相改候。

右之通申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々ゟ茂嚴重可申渡候。組等之内裁許有之面々、其支配ゟ茂不相洩樣被申聞、家來末々ゟも可申渡旨可被申談候。尤於金澤も一統申渡有之筈に候事。

亥　二　月

二月廿七日。去年以來前田治脩・齊敬に隨從出府し勤務に出精したる者に物を與ふ。

〔政隣記〕

二月廿七日於御次、左之通横濱善左衛門を以被仰出。御内々拜領被仰付、且御時節柄其上就御内々に、大勢罷出候而者目立候間、五六人宛指出候樣申談に而、同日朝・晝・翌朝等四切に申談、廿九日晝河地才記誘引。但就御内々横濱御小屋不及御禮勤、御小將頭・御番頭御小屋迄御禮勤。

去年以來御慶事に而、御兩殿樣御供等彼是烈敷相勤候に付、御目錄之通御內々を以拜領被仰付候段、善左衞門演述。御目錄夫々に相渡之。

染物二反・白銀二枚宛

野村順九郎　阿部波江
喜多岡善左衞門　田邊善太夫
人見吉左衞門　和田知左衞門

白銀三枚宛

中村助太夫　神子田五郎介
宮崎磯太郎　高田牛之助
坂倉長三郎　氏家九左衞門

同　二枚宛

岡田主馬　山崎彌次郎
鈴木左膳　本保加右衞門
一木鐵之助　堀七之助
松原安左衞門　羽田傳左衞門

前田牽次郎　小泉權之助
中村織人　田尻和一郎
堀　八郎左衛門
江戸在住組外、御大小將加人　青山五左衛門
金五百疋

二月廿九日。年寄衆御用番支配頭分奧村彌次右衛門の女、裁許人濱口庄右衛門と情死す。

〔政隣記〕

二月廿九日曉、年寄衆御用番支配頭分(最前御馬廻頭)奧村彌次右衛門二番目娘(廿四歲)ゐい、於使者之間裁許人濱口庄右衛門(四十二歲)と相對死、庄右衛門以脇指ゐいを指殺、其身自殺と云々。依之同日暮頃爲檢使、御大小將横目前田甚八郎・由比陸大夫罷越、見屆相濟退出之上、ゐい死骸以毛氈包み、屛風を以圍ひ藏し置、重而右庄右衛門爲檢使、公事場附與力二人幷足輕二人同夜四時過罷越、庄右衛門死骸見屆之、仁藏呼寄渡し遣、翌朝に至り夫々相濟、與力等退出之事。

右庄右衛門所持之道具等、不殘公事場に引揚之事。

二月。家中の人々男子を擧げたる時は速に頭•支配人に屆出づべきことを令す。

〔袖裏雜記〕

定番頭え

御家中之人々、男子致出生、虚弱に而成立難計候へば、出生之斷數年見合置候儀有之躰に相聞え候。自今致出生、虚弱に而成立難儀候はゞ、暫見合候儀は格別、早速頭・支配人へ及斷可申旨、先達而一統被仰渡置候へども、違失之人々も有之躰に候。男子出生之上虚弱等に而、若頭・支配人え難及斷候共、人々覺悟可有之事と被思召候間、以來早速頭・支配人へ及屆候樣、可申渡旨被仰出候。

右之趣組・支配有之面々え夫々可被申談候事。

辛亥二月

〔御觸并御返書留〕

本文は人持組中に對する通達なり

別紙之通可被得其意候、以上。

四月十七日　　長大隅守

御名殿　奉得其意候

御家中之諸士男子出生候而も届及延引、又は押隱し置、養子仕候者も候而は、品により親子之間存念相立、故障出來候儀も可有之事候。虚弱・病身等に而茂、頭・支配ゟ難届趣は有之間敷儀に候條、男子出生之上は不及延引相屆、若病身等に候はゞ其段も可相達候。惣而召仕候女、筋目宜も不糺族有之、畢竟申分等出來候躰不覺悟之至候。ケ樣之儀人々當々心得可有之事與思召候條、此段可申渡旨被仰出候。

右之通組・支配有之面々ゟ夫々可被申談候事。

二月。諸郡御扶持人以下及びその子弟の金澤に滯留中、不相應の參會或は不謹愼の行爲あるを戒む。

〔司農典〕

一統爲御用與御當地に相詰候內、不相應之參會、且於旅宿等に不愼之儀等無之樣每度申渡置候通に候。然處今以無用之參會不行狀之族も有之躰相風說も有之、自然右躰之族於有之而者、上急度可相咎候儀に候。乍然其方中左樣之族可有之與者不被存、名代等相勤候成人子弟愼方不宜、其內には同輩之者迄も進込、不相用候而者仲間馴合も不宜に付、惡敷儀乍心付若年未熟之者抔、心外他之勸めに隨ひ候樣儀風聞有之候。ケ樣之族別而他迄引害、風俗を亂候儀沙

汰之限ニ候。猶左様之儀於有之ニ者、其親・兄迄も可相咎候條、何れも急度相心得、子弟行状慎方無油断可申付候事。

亥　二　月　　　　　　改　作　奉　行

諸郡御扶持人・十村・新田裁許・山廻中

三月十三日。前田齊敬の任官等を祝する爲頭分以上の士をして金銀を上らしむ。

〔政隣記〕

佐渡守様初而御目見、且又今般御任官に付御祝儀物、三ヶ年兢御省略中、頭分以上之人々より都而年頭之通。

佐渡守様へ献上仕等に候間御太刀馬代銀一枚、目録認方御出府之節江戸表に指上候様に被相心得、來る廿五日迄之内御用番に可被指出候。目録月日は來月二日に相調可被申候。夫々相揃候上、年寄中之内より惣代使者代ニ飛脚を以、織田主税方迄相達申等に候。

一、在江戸之人々も目録此表取揃上申等に候間、代判人より目録相認、右日限迄之内御用番に可被指出候。

一、若忌中之人々有之候はゞ、忌明次第追而町飛脚へ指上可申儀候間、來月二日迄之内忌明

之人々に、尤前段之通目錄御用番に可被指出候。
一、御太刀馬代・鳥目代金或代銀者、座封に而輕く致上包、使者を以御進物所迄當月廿六日・廿七日兩日之內、四時より九時迄之內可被指出候。
右之趣可被得其意候、以上。

三月十三日　　　　前田大炊

一役連名殿

右之外佐渡守樣御抱守中よりは右同斷御祝儀、年頭御禮之通靑銅獻上之、其外平士已下者獻上無之事。

三月十三日。前田治脩就國の暇を受く。

〔政隣記〕

三月十三日上使御老中松平和泉守殿を以、御國許へ之御暇被蒙仰、御例之通御拜領物、從御臺樣ゟ御使中島三左衞門殿を以、御例之通御拜受物有之。

〔續德川實紀〕

三月十三日、松平和泉守乘完して、松平加賀守治脩いとまの事仰出さる。よりて銀百枚・時服三十を給ふ。

三月十五日。前田治脩柳營に上り徳川家齊に辭見す。

〔政隣記〕

三月十五日、御登城御暇之御禮。御鷹・御馬等御例之通御拜領之事。

〔續德川實紀〕

三月十五日、松平加賀守治脩就封の暇たまひ、御鷹・御馬を下さる。

三月十七日。石川郡粟ヶ崎の豪商木屋藤右衞門出牢を命ぜらる。

〔政隣記〕

三月十七日左之通。

粟ヶ崎　藤右衞門

出牢被仰付、同十九日家財之土藏開封被渡下。

右藤右衞門親隱居貞悅も禁牢被仰付置候處牢死、且又藤右衞門に被下置候御扶持者、一昨十七日於公事場被召放。

三月十八日。前田治脩江戸を發す。

〔三壽御譜〕

三月十八日江戸御發駕。此時三日御逗留あり、四月二日金澤御着。御供横山山城・今枝內記。

三月廿三日。前田利和の三十三回忌を天德院に行ふ。

〔政隣記〕

心樹院樣御三十三回忌御茶湯、今月廿三日一朝於天德院御修行有之候。右之節御家中普請・鳴物等不及遠慮候。乍然御寺近邊に罷在候者に、御茶湯御修行之內自分に指扣可申候。此段組・支配に可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之通可被得其意候、以上。

三月朔日　前田大炊

三月廿七日。岡田太郎左衛門、前田齊敬の任官せられたる口宣を得て金澤に歸着す。

〔政隣記〕

三月廿七日、去月廿九日記之通、岡田太郎左衛門同月廿三日江戸發足、京都へ罷越、口宣等請取之、今日金澤歸着、直に登城に付坂下御門へ向候處、右御品共入之御長持就有之に、大扉開候樣足輕番人へ申入候處、從割場申渡無之而ハ難開旨申聞候處、重き御品に候間此方及指圖候條可相開候、後日足輕之不念に者不相成趣等申渡候に付、大扉開之相通、夫より石川

御門へ向、右同樣を以聞候樣申達候に付、足輕番人より上番人へ相達、いまだ否之答無之內、太郎左衞門曁御長持小口より入。

但此次五月十七日互見右依御咎指扣被仰付候儀等有之。

三月廿九日。諸士の奉公人に請人を立てしむる法規を嚴守すべきを命ず。

〔政隣記〕

御家中幷又家中之者等奉公人相置候節、早速兩請人取置、請人之內故障等有之節は、早速代人立替可申儀、且又暇を出候家來請合狀、請人判形は消候共證文は相返不申、先主人方に指置可申儀等、前々御觸置之處、近年猥に相成、奉公人召置日數相立候而も、請人之內故障有之節も立替及遲々、其上得与相糺不申に付名違等も有之候。曁請人呼出之儀に付、請人名前書出候樣先々被申達候節、請合狀紛失又は見當り不申抔申越、於公事場過錢等申渡方甚指支候條、以來前條之趣違失不仕樣、御家中一統被仰觸候樣に与奉存候、以上。

三月十四日

前田主殿助

品川主殿

不破彥三

前田內藏太

前田大炊様

別紙公事場奉行紙面寫相越之候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配にも相達、家來等へも不相洩申渡候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

三月廿九日　　前田大炊

諸頭御用番一人宛連名殿

三月。小作人の悪習弊を改めしむべきことを命ず。

〔岡部舊記〕

諸郡請作仕小作共獘付悪敷候に付、寶暦八年委曲申渡置候所、近年亦々獘付悪敷相成、別而射水郡等之内小作共種々奸曲成巧共在之躰相聞。譬作躰不宜見立或は御貸米等有之年柄は、村々割符之御貸米少分等与申立、御貸米當之外對本作極之年貢米之内過分致減米候樣申入、不致承引候得ば、立毛之儘に本作へ可相渡等振付ねだれ、結句豊作之作徳よりは過分に不義之利分を貪候族、早春より其邪儀奸計を相貪居、荒起已來田地投養手入麁相に仕立置、假令全躰之作躰相應出來之年柄茂、秋縮前に氣候不順等無謂浮説を申立、村々秋縮御請難候樣相巧、其所を以本作へ難題を申懸、年々爲致負米候類。豊作之節、大本作ねだれ候方便無之に

付、農作を不新、却而不作を好候族も候樣風說も有之候條、萬一右躰之族有之候はゞ、御國恩を令忘却、天道を不恐仕形、言語道斷に候條、暫茂其儘に難指置譯に候間、十村手前において致締方置、早速可斷候。畢竟本作共、寶暦八年申渡候趣致違失令油斷により申儀に候。

右先年申渡置候趣嚴重可相心得候。

前條之通載申渡候、頭振等徒者農業を指止、不相應之稼を以可致渡世与相企候徒者候はゞ、急度可申付候條、右躰之儀無之樣可申渡候。猶更村役人共重々入念申付、其方中油斷在之間敷候。

右小作轉付惡敷に付、寶暦八年委曲申渡候得共、猶更此度寫相添申渡候條、一統へ申渡、請書付取立置、其許并廻り口御扶持人村廻度々無怠可申渡候。其方中請書可指出候、以上。

辛亥三月

杉野多助
岡田才記
笠間九兵衛
上木忠兵衛
立川金之丞
白江金十郎

前田源六郎
加藤左次馬
九津見甚兵衛
齋藤小左衛門

御扶持人・十村中

四月二日。前田治脩金澤に歸着す。

〔政隣記〕

明後廿九日高岡より御着城之筈に候條、御着之御樣子被承合、登城可被相伺御機嫌候。若御着七時以後に候得者、翌晦日四時より九時迄之内可被罷出候。病氣等之面々者、御用番宅迄以使者可被申越候、以上。

猶以難被罷出人々は、其段名之下に可被書記候、以上。

三月廿七日　　前田大炊

一役連名宛殿

〔政隣記〕

三月廿九日爲御待受夫々一統登城之處、夕七時前迄も境ゟ御着之飛脚も不致到來、姫川洪水

に而糸魚川驛に御逗留之御様子、其外川々も洪水、高岡横田川橋落、今日は迚も御歸城無之に付一統退出可仕候、追而御様子相知れ次第可被仰聞旨、御用番大炊殿被仰聞之段御横目中申談に付、一統退出之事。但、右に付今夜より御大小將町廻相始り、重而御着之御様子相知れ候前夜迄、晝夜町廻可有之旨、夫々ゟ申談。右高岡横田川橋水損之段申來に付、外作事奉行中山儀太夫急々發足被仰渡、今日晝頃俄に下役召連罷越候事。

〔政隣記〕

四月朔日晝、前月廿九日夜境發出之早飛脚到着。

中將様去月廿五日御日圖り之通糸魚川御泊之處、姫川滿水に付廿九日迄御逗留、同日減水に付晝九時頃糸魚川御發駕、暮六時過境御着、兼而之御泊附之通に而、今月二日御着城之筈与申來。但一宿御先之御小將中平尾村に逗留、且河地才記於姫川川場煩出、寒り之氣味に付、於平尾村保養之旨等も申來候事。

〔政隣記〕

四月二日爲御待請五つ時より登城。中將様今曉八つ時御供揃に而、同刻過高岡御發駕、夕七時頃御機嫌能御着城、御表式臺鏡板ゟ御城代本多安房守殿幷御家老・御若年寄被罷出、御意有之。御年寄中橋爪御門外二之御丸ゟ例之通罷出候。役儀之人持頭分等罷出、夫々御意有之。

勇之助は大聖寺侯前田利考

但頭分以上迄也御式臺階上へ御近邊之人々幷御醫師罷出、御白洲に定番頭・御留守居物頭罷出、御式臺構之間に御大小將御番頭・御大小將列居、敷付へ御近習頭・御表小將罷出、御先立若年寄衆被相勤候事。橫山又五郎殿也。

御供人前記に有之通夫々歸着、才記は昨朔日記之通に而氣滯に付、自宅に御跡より歸着、直に役引之處本復に付、五月十五日出勤之事。

一、御歸國御禮之御使、人持組本多內記御目見被仰付、於年寄中席如御例紗綾二卷・御羽織拜領、披露御大小將。

一、勇之助樣御使者東方庄左衛門登城。

四月三日。前田治脩寶圓寺・天德院等に詣づ。

〔政隣記〕

四月三日、一昨晦日夜魚津驛より之早飛脚今曉到着。御着城之上野田泰雲院樣御廟に御參詣被遊度思召候得共、御供仕罷歸候者被召連候儀は被遊御斷候。金澤に罷在候迄に而御參詣御供不指支候哉可相尋旨御意之段、志村五郎左衛門御大小將御番頭神保儀右衛門に申聞に付、御先供に取次之內より指出、御籠・御先角には宿割等御先に歸居候者指出候得者不指支旨、儀右衛門より申上、其外新番幷御步方等に茂御尋之上、右御參詣被仰出候段申來候事。

私共は盜賊改方奉行

〔政隣記〕

四月二日五半時御供揃に而、寶圓寺・天徳院江御參詣、夫より野田泰雲院樣御廟江御參詣。泰雲寺江御立寄被遊間敷旨、昨日被仰出有之。九時過御歸館。

四月七日。公事場及び盜賊改方に於いて處分する犯罪の區別に關して上申す。

〔御親翰幷言上留〕

御親翰被成下謹而奉拜戴候。前々私共於手前取捌仕候分与、公事場江引渡之者与、其罪之程差別格合可有御座間、委曲書記可奉指上之旨被仰渡之趣奉畏候。前々より公事場江引渡申候品は、放火仕候者或は人殺、其外死刑に茂可相成程之者、或は及刄傷候者、或は土藏破之賊、又は入墨及三度候賊、或は出奔立歸人、或は諸役所之品等相盜申者、或は博奕に而茂賊物取扱に拘り申分等、公事場江引渡申候。其外私共役所に而始終取捌仕候。

一、御筆之物幷御封印御指札奉返上之候、以上。

亥四月七日　　高畠五郎兵衛　判

四月十五日。前田治脩石川郡粟ヶ崎に放鷹す。

〔政隣記〕

四月十五日、出仕之面々一統御目見幷役儀之御禮等被爲受、且九時過御供揃に而粟ヶ崎筋御放鷹、御餌柄鶴・水鷄八つ、多分御拳之由。暮六時頃御歸殿。

四月二十日。前田治脩圍碁を職業とするものに就きて調査せしむ。

〔御親翰留〕

一、今町碁打善助与申者居候哉、前々碁を以渡世仕儀町格有之哉可申聞候、以上。

四月廿日

町奉行中

一、御親翰被成下謹而奉拜戴候。今町碁打善助与申者居申候哉、前々碁を以渡世仕儀町格御座候哉可申上旨被仰渡之趣奉畏候。右善助住居之儀猶更相糺追而可奉申上候。碁を以渡世仕候儀、改而町格与申儀ニ無御座候得共、遊藝之儀にも御座候故、夫々家職姉にも相成申儀、隨分相制可申品与奉存候。

一、御筆之物幷御封印御指札奉返上之候、以上。

亥四月廿日

小寺武兵衛　判

高畠五郎兵衛　判

一、今町集打善助与申者居候哉御尋に付相糺候處、中町に八百屋善助与申者罷在、元來越中城端出生之者に御座候得共、天明五年以前當所ゟ罷出、同八年より右中町居住仕候。右善助母絹織渡世仕、善助儀者筆宜仕候に付、指南仕謝禮請申旨、所役人申聞候。右之者かゝ集仕候風聞御座候得共、未与得相分不申候。一昨日奉申上候通商人家職妨に茂相成遊藝に茂御座候事、元來御郡之者にも御座候間、所方ゟ罷歸候樣可申渡与奉存候、以上。

亥四月廿二日　　小寺武兵衛　判
　　　　　　　　高畠五郎兵衛　判

一、其方共僉議次第たるべく候。

一、御附札物被成下、謹而奉拜戴候。中町八百屋善助、元來御郡方之者に付所方可相返儀奉申上所、私共可爲僉議次第旨被仰渡之趣奉畏候。

一、御筆之物并御封印御指札奉返上之候、以上。

亥四月廿二日　　小寺武兵衛　判
　　　　　　　　高畠五郎兵衛　判

四月廿一日。道中筋にて身分を僞り代錢宿料等を支拂はざる者を捕ふべき幕令を傳ふ。

〔政隣記〕

付札、大目附に

近來町・在道中筋に而、御家人或ハ御役人之家來抔与申偽、彼是權威振、押買代錢・宿賃等も不相拂、ゆすりがましき儀致候もの致徘徊候由相聞え、不屆之事に候。以來右躰之者はおさへ置、早々可訴出候。吟味之上偽之者に候者、御褒美可被下候。若於不訴出は可爲越度候。

右之趣可被相觸候。

三　月

鳥居丹波守殿御渡御書付寫一通相達候間、被得其意、答之儀は山田肥後守方に可被申聞候、以上。

三月十六日　　大　目　付

御　名　殿　留守居中

近來町・在道中筋に而御家人或は御役人之家來抔与申偽、宿賃等も不相拂族等も相聞候儀に付、從公儀相渡候御書付寫一結二通相越之候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配にも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

辛亥四月廿一日　本多安房守　印
長大隅守　印
諸頭御用番連名殿

四月廿四日、主人の爲に代牢を請ひたる金澤片町藤屋嘉兵衞の下人長兵衞を賞す。

〔御親翰留〕

片町藤屋嘉兵衞儀致禁牢罷在候處、於牢中相煩候に付、療養中右下人長兵衞代牢相願御聞屆に而、嘉兵衞出牢長兵衞入牢被仰渡候處、無程長兵衞出牢被仰付、嘉兵衞儀病氣本復之上に茂不及禁牢之段被仰渡候。長兵衞志に付、格別之趣を以右之通被仰付候樣にも奉恐察、誠以長兵衞身分に取不過之御褒美、冥加至極に可奉存儀に御座候。然ば此上賞美之沙汰に者不及儀に御座候得共、長兵衞平常之樣子、先達而御尋之節奉言上候通之者に而、是迄親子之間に而も代牢相願申候儀も御座候得共、於下人ヶ樣成志稀成儀、一統風俗之移にも相成申儀にも御座候に付、格別結構被仰付候上之儀にも御座候得共、以來之儀も御座候に付、於町會所別紙之通一作褒美遣之候に付奉達御内聽候、以上。

亥四月廿四日　小寺武兵衞　判

高畠五郎兵衛　判

片町　藤屋嘉兵衛下人　長　兵　衛

一、鳥目五貫文

右之者主人嘉兵衛、先達而不屆之趣有之、於改方致禁牢。然所嘉兵衛儀大病相煩候に付、右長兵衛爲代々牢相願、格別志之儀故則御聞屆有之候。右代牢相願候趣意は、主人嘉兵衛儀獨身に罷在、不斗致牢死候得者家斷滅之儀、長兵衛儀も獨身者に而、代牢御聞屆之上、其身牢死候而も一身切之事に而不苦儀与心中相決、爲主家志を相立候儀、輕き者には稀成志、誠可感之至神妙之事に候。依爲褒美遣之候。後來彌以盡志本儀可相守之者也。

辛亥四月廿四日　小寺武兵衛　判

高畠五郎兵衛　判

四月廿六日。前田治脩、出牢したる石川郡粟ヶ崎村藤右衛門に當分調達銀等を命ぜざるべきことを告ぐ。

〔袖裏雜記〕

四月廿六日左之御親翰被渡下。

伺之上土佐守・兵部へも御親翰之寫遣之。

粟ヶ崎村藤右衛門事、此度爲赦出牢申付候付、藤右衛門手前之儀郡奉行へ直に申渡候趣有之

候故、眞悅分限ニ取失、且彼是不埒之所行者、勿論其身不心得之事にハ候へども、上より之扱方にもよるへく可申候。今般藤右衞門儀、向來親へごとく金銀を貯候とも、當分調達銀等ニハ申付間敷候間、各にも其心得有之樣にと存候。將亦各にも先達而藤右衞門より借用之金銀可有之、定而自今可被及返濟事と存候。左候ハゞ是亦尚更被申談、差障なき樣可被相心得候。此段内々申達候事。

四　月

四月廿七日。前田治脩、齊廣と共に金澤大豆田筋に放鷹を行ふ。

〔政隣記〕

四月廿七日九ツ時御供揃に而、同刻御出、大豆田筋御放鷹、御拳に而鷺一・水鷄一有之、亀萬千殿御拳に而よしごひ一有之。七時過御歸殿。

四月、百姓等が藩侯に對する請願の事を御鷹方取次の者に依賴する者あるを戒む。

〔岡部舊記〕

御鷹方取次、御鷹野先に而御側近罷出候故、御郡方等に而不心得之者、願事等賴候得ば相整

候樣に存候而、彼是申込茂有之躰相聞候。都而願事等取組不仕儀は前々御定茂有之、別而去暮一統委く申渡置候儀に候得ば、右之族決而有之間敷筈に候之處、裁許人々申談不行屆故、今以右躰之心得違之者も在之樣子に候。彌右之族於相顯者急度可申付候條、末々之者迄も心得違無之樣可申渡候事。

亥四月　改作奉行

諸　郡

五月朔日。前田治脩金谷門通過の際番士等蹲踞の禮を失す。

〔政隣記〕

五月二日、昨日御鷹野より直に金谷御廣式に御立寄被仰出、七十間御門より御文庫口へ御入に付、金谷御門御番所前御通之處、泊番御馬廻組駒井宇右衞門・松江幸三郎（両人共佐藤勘兵衞組）蹲踞相洩。依之先自分に爲相扣置候段、翌三日頭勘兵衞より御達申置候處、同七日不及指扣段被仰出候段、御用番大隅守殿被仰渡則申渡有之。

但、金谷御門御番所は、暮六打候得者相仕廻候御格に付、仕廻罷在、尤御通之儀先達而承不申、過急に相成候に付、御通り之跡に爲蹲踞罷出候得ども相洩候由也。

五月四日。犀川・淺野川に塵芥を投棄し及び蛇籠を踏荒すことを禁ず。

〔政隣記〕

才川・淺野川川除に塵芥等捨置、御普請申付候節は取除不申而者御普請難申付、其上殺生人等竹篭之上致往來踏荒、甚御不益之筋に相成候に付、御縮方相立候樣每度私共より御達申上置候得共、近年猥に相成、心得違之者も有之樣子に相聞候間、以來嚴重一統被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

亥四月廿一日　　金森猪之助

阿部昌左衛門

村　八郎左衛門

本多玄蕃助様

右寫を以五月四日御用番長大隅守殿御[illegible]有之。

五月六日、火矢方小川七太夫自刎して死す。

〔政隣記〕

五月六日晝過、火矢方小川七太夫（町奉行支配組外並、領知八十石、享年六十二歳。）儀、宅之庭に刀を帶し出候而、右刀を後之方へ廻し、兩手を以前之方に首搔落し相果候。依之爲檢使御横目今村三郎太夫・前田甚八郎罷越、亂心之躰に候由云々。

五月十七日、馬廻頭岡田三郎右衛門先に口宣を持參して歸城の際、坂下門の大扉を開かしめたるを以て指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕

五月十七日御用番大隅守殿於御宅、本多玄蕃助殿御立會、御横目今村三郎太夫・安達彌兵衛指引を以、左之通被仰渡。

御馬廻頭兼御算用場奉行　岡田三郎右衛門

當三月京都御使より罷歸候節、口宣等入御長持爲持候に付、坂下御門大扉爲開候趣不念に付指扣被仰付、附六月十四日指扣御免。

附、右三郎右衛門此間御勝手方御席へ御呼立に而、今度於京都御邸內に可致止宿候處、去々年春御類燒後御貸小屋出來不申に付、御門外町家に致止宿候處、右宿賃自分拂之筈に候旨請人より申談候處、其儀は難心得候條、先御用銀より可相拂候、三郎右衛門罷歸候上及御達可申候、若御聞屆無之候はゞ、其節早速銀子可指出旨申入候段、右之趣御達申儀に候得共、先自分拂に致し置候而及御達、御聞屆之上於此許銀子可受取筈之處、御聞屆之有無相知れ不申儀を、右等之取計心得違与御叱之趣、横山山城殿被仰渡。但明和八年京都へ罷越候節者、御邸內に御貸屋有之、岡田三郎右衛門其節聞番候得共、御用不辨等に付態与町宿に罷在候處、宿

貸者請人より御用銀を以相拂候。此度は御貸小屋無之に付、不得止事を町宿に罷在候故、必竟御上御拂可有之答と相心得、右取計方いたし候由云々。

五月二十日。京都の儒者新井白蛾を召抱へんとするを以てその内意を探らしむ。

〔御用雑記〕

京都儒者新井白蛾、博學篤實之躰被聞召候間、被召出新知可被下趣、五月十六日以御親翰被仰出候付、伺之上左之紙面遣之。

其表儒者新井白蛾儀、博學篤實之躰に付被召抱候而も御家相望候哉。祿之高下等に望も無之候哉。被召抱候上は御國へ罷越候儀不差支候哉。委細大森三郎兵衛等より内々承合候樣被申渡、返答之趣等具に早速可被申越候、以上。

五月廿日　　長　大隅守　印

淺香治部殿

三浦重右衛門殿

追て、白蛾儀御家相望、彌被召抱候儀にも候はゞ、宗門并何方よりも無構慥成者に而、都而御家格之通も相心得可申旨申聞候段等、町人抔之内書付も可取立儀と存候間、兼而可有其心

三郎兵衛は京都町人大森氏

得候。此段者爲念申達候、以上。

右當座之返書到來之後、三郎兵衛へ申談置候處、承合之趣別紙指越候。且右追而書之趣、三郎兵衛より内々爲尋候處、いづれとも被仰渡候通差支不申樣子に候旨、三郎兵衛申聞候旨、六月四日治部等より申越。別紙は、三郎兵衛儀白蛾方へ罷越、内々及面談候處、祿之儀何程抔と望申儀曾而無御座候。二十人扶持・三十人扶持に而外々之國ゟ引越相勤候人も御座候由承候へども、若き頃より左樣之望も無御座只今迄罷在候へ者、白蛾より願申存寄無之候へども、此度は御家柄之御事故、難有拜仕御請申上度候間、御家之聞ゑにも可然程被仰付被下候者、難有仕合可奉存候。且又四十年來京住居、其上老衰、身も動き兼申候へば、御國住居にて勤候儀は難相成御座候。然共折々罷下り候儀者、隨分奉畏候旨申聞候旨等、三郎兵衛紙面也。右に付、左候はゞ白蛾儀何方よりも無構體成者に候段、委細存罷在候者之内より書付、并被召抱候上に萬端御家格之通相心得可申候、且切支丹宗門末類にても無之、宗旨は何宗寺者何方と申儀、白蛾書付も取立可被指越旨、六月十五日山城より治部等へ申遣候處、則三郎兵衛より爲申達候處、白蛾并受人武村南窓・武村嘉兵衛書付兩通取立差越之、宗旨は禪宗、寺者東山南禪寺塔中法皇寺檀那之由、右南窓書付之内にあり。南窓等兩人共書林也。右に付知行高、多分貳百石充に被召抱候故、先二百石と奉伺候旨七月三日申上候處、五百石とも思召

候へども、御時節柄之事三百石に可被召出旨翌日御意。且又被召抱候段申渡候節、此表に罷出候樣可申遣旨と御意。

五月廿一日。前大聖寺侯前田利精金澤の居宅を發して歸邑す。

〔政隣記〕

五月廿一日。正月八日御近習頭河內山久太夫等御使に而被仰進候通、今朝備後守樣御居所安江木町專光寺後井上勘右衛門居宅御借上、天明六年四月十一日、中將居所被仰付御保養被成御座。御發駕御歸邑。御迎從大聖寺御家老生駒源五兵衛等夫々罷越、御供仕罷歸候事。

右に付井上勘右衛門居宅被返下。依之修覆料小判二百兩、七月八日拜領被仰付。

五月廿四日。金澤城石川・河北兩門外に於ける下馬下乘の件に關し令す。

〔政隣記〕

付札、御橫目に

河北・石川兩御門之外下馬下乘之儀、天明六年にも一統申渡置候處、猥に相成、一之御門に近く下乘有之故、込合候樣に相聞候條、前々之通兩御門共、一之御門より廿間計も下り、段々下乘等有之候樣夫々可被申談候事。

右御城代安房守殿被仰聞候旨等、御橫目廻狀今日出。

今日は五月廿四日

五月。金澤所々に盗賊橫行す。

〔政隣記〕

五月廿日、頃日右押込ニ而無之盗賊、所々町屋等に忍入、或土藏等にも忍入、金銀錢等盗取候事每度有之、一昨十八日夜ハ觀音町町家土藏に忍入、鳥目十貫文幷大壺二ッ盗取、賊ハ金銀与心得盗取候躰ニ候得共梅干入与云々。

一說右徘徊之賊共、石川郡若松山与鈴見山之谷間致居住有之、晝ハ山人ニ似セ候而町へ出食物抔求候由。依之山人体ニ而不相應之品相求候者於有之者、早速捕手役人に及案内候樣、町會所・改方役所ゟ申渡有之。山中ニ而帶刀或鑓・長刀を携有之、其上人數も難計ニ付、捕人容易ニ難向、且夜中盗ニ出候節ハ帶刀、旁山人ニ似セ、白晝買物之ため町へ出候節可召捕与之事ニ而、右之通申渡有之与云々。將又此頃若松山に薪等拾ひニ參候者、既ニ賊之ため捕へられんと致し、持參之鎌・籠等打捨漸々逃歸候者數人有之由。賊他國者も入交有之由風說之事。

但、六月二日夜卯辰來教寺へ賊入、見付候ニ付召捕候得共、先年召置候弟子僧之由。右公事場へ引渡禁牢。同三日夜材木町・味噌倉町邊盗賊徘徊、所々ゟ高提灯等持出相探し候處、爰彼こへ逃藏れ、自宅門前を追つ返つ二三度も往來、賊四五人有之躰之處、漸夜半之

頃一人於村木町召捕候得者、帯刀幷刄鎌持有之、岡嶋市正役小者也。尤禁牢。同四日夜・六日・九日夜も町方等賊徘徊、其後も同斷、在鄕にも同斷躰に而、近在之寄せ太鼓之音折々聞え、甚騷々敷事に候處、至六月下旬いつとなく靜謐。

六月朔日。前田治脩、齊廣と共に金澤郊外大豆田筋に放鷹を行ふ。

〔政隣記〕

六月朔日、出仕之面々一統御目見、役儀之御禮等被爲請、且九半時之御供揃に而、大豆田口ゟ御放鷹、龜萬千殿御同道、七時過御歸殿。御獲物無之候事。

六月十二日。犀川・淺野川の水暴溢す。

〔政隣記〕

六月十二日、昨今兩川共洪水、御使番・御横目見分に罷出。尤言上に登城も有之。才川・淺野川共大橋、千鳥木迄之增水に候得共別異無之、下之方少々切れ込損所等有之、常水よりは五六尺增水之由。兩日共晝後に雨小降に而減水之事。

六月十五日。浪人及び乞食躰の者の取締方を令す。

〔岡部氏御用留〕

浪人者并乞食躰之者縮方仕法

一、三州御郡方ゟ入込押乞仕候浪人、乞食躰之者、都而物乞類・異躰之者不殘出生之所へ送返、其在所々々に而縮方仕度候。若在所においても縮方難成候はゞ、縮所へ入置、所養に仕候樣申渡候はゞ、右躰之者次第相減可申と奉存候。尤村方害に相成不申一通之乞食、并袖乞仕者共は負着不仕候。其餘は何方に而も村々ゟ立入候はゞ、廻藤内へ申付、尤村人足茂指出、夫々召捕爲致縄縮、其村方より藤内指添、組附十村共へ指出、十村手前に而出生在所承糺、加越能何方に而も其支配々々迄送り状仕、宿送り村送りに而爲屆、其十村より出生之村方へ相渡、品により縮所へ入置候樣仕候はゞ可然儀と奉存候。他國者に候はゞ、御國御關所外ゟ宿送村送りに而相送可申候。勿論宿送村送に而遣候砌、其所々廻藤内指添送屆候樣仕候はゞ可然奉存候。

一、富山・大聖寺御領之者は、十村より十村迄添状に而送遣候樣仕候はゞ可然奉存候。尤此趣御關屆之上、富山・大聖寺御役人中ゟ、右之趣不殘可指遣樣、兼而私共より彼御領御郡奉行ゟ可申談置候。

一、十村手前に而相糺候砌、出生在所有躰不申出、如何樣糺候而も知兼候者は、私共手前ゟ引出遂吟味、在所申顯候上は其所々へ爲送屆、若吟味之上にも在所不申顯候はゞ、詮議中私

共手前に而締方可申付置与奉存候。

一、石川・河北両御郡之儀は、御城下近故、別而浪人等大勢入込、其上浪人風躰に而怪敷者共百姓家江立入、彼是与以外手間取り、野業之障に相成百姓共迷惑仕候。外御郡に同様之儀に者御座候得共、別而両御郡之儀、時により村役人等手に合不申程之儀も有之躰に相聞候間、右等之者江藤内共付添先々送り、其者宅見届候上私共へ相断候得者、其時宜に寄御届申上候儀も可有御座与奉存候。

亥　六　月

近年御郡方へ、浪々者并押乞抔仕候者徘徊之程相聞候に付、段々様子相糺候處、野業に而百姓共在合不申、老人・子共留守に指置候隙を考、五人三人罷越食物等奪取、存外狼藉之仕方有之、村々一統迷惑至極仕候。左様之節は村役人等へ相断候に付、役人共より廻藤内江申付為相咎候得共、時により人多之時分は、却而藤内共を及打擲、手に合不申、夜中は村々社内等に而寝臥悉荒申候由。此儘差置候而者、彌右躰之者増長仕、其上村々之内極貧百姓・頭振・二三男躰之者難遁迫、自徒を見習、在所迯去、右躰之者共組し候族も有之躰、甚御締方指障、其上諸郡村方耕作手支難儀迷惑仕候に付、三州十村共一統示談之上、右締方委細仕法之趣申聞候に付、私共於手前猶更打返逐詮議、別紙に相調御達申上候間、御詮議之上別紙仕法之通

被仰付候樣仕度奉願候。尤御聞屆之上、金澤町奉行中幷遠所町奉行ゟ茂、夫々不差支樣被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

亥　六　月

水原五左衛門
恒川七兵衛
栂　喜左衛門
稻垣外記
岩田平八
齋藤小左衛門
篠原權五郎
大藪勘太夫

横山山城樣

右仕法帳、先達而加越能御郡奉行連印之添紙面を以御達申上置候處、右仕法書之通相心得、夫々御縮方申付候樣、六月十五日御用番山城殿恒川七兵衛へ被仰渡、帳面御返、尤類役中へ七兵衛より此段演說仕候樣、是亦被仰渡候事。

流浪者縮方之儀に付、先達而其方共紙面指出、則拙者共僉議之上、別紙帳面仕法書に添紙面

今以御用番へ御達申上候所、右仕法帳之趣に可相心得旨、當月十五日御用番山城殿被仰渡候條、得其意、夫々締方嚴重行屆候樣相心得、村々役人爲致會得置、不相洩樣可被申渡候、以上。

寅六月廿八日　　　　　　　　　　栂　喜左衛門

　　　　　　　　　　　　　　　　神保　權五郎

能州四郡十村中

六月廿三日。前田治脩學校を興さんとする意あることを告ぐ。

〔御異雜記〕

六月廿三日左之御親翰被渡下。

泰雲院殿學校被仰付候思召有之候處、其內御逝去被成候。其後手前も思召之通申付度存居候へども、入用等心當も無之、空敷打過候。今般新井白蛾召出候上者、學校作方等及僉議、過分入用もかゝり不申候はゞ、右思召を繼學校申付、白蛾儀彌人品宜候へば、學頭に可申付內意に候間、此段先爲心得申聞置候條、各僉而夫々しらべ置、追々可被相窺事。

六　月

六月廿四日。大聖寺侯前田利考幕府より甲州諸川普請の助役を命ぜらる。

〔政隣記〕

六月廿四日前田之依御奉書、勇之助樣大聖寺侯也。御幼少。御名代織田出雲守殿御登城之處、東海道筋甲州筋川々御普請御手傳被仰付、委曲は御勘定奉行御問合候樣、御老中被仰渡候事。

但、金納に而一萬二百兩御上納之筈。且酒井雅樂頭殿・松平周防守殿・鍋嶋備前守殿江も、

右同樣被仰渡召之候事。

六月廿五日。前田治脩、諸士の中文武の藝能に師範たる者を上申せしむ。

〔政隣記〕

御大小將横目江

御家中之人々陪臣迄之内、文武之藝能師範仕人々名前可被聞召旨被仰出候條、可被申談候事。

六　月

右志村五郎左衛門申聞候條、組・支配江申渡、早速名前御横目所迄可書出旨、昨廿五日日付に而御横目廻狀出。依之追々書出候師範人名前等數多雖有之、通例之分不記之、珍奇之師範人左之通。

一、天文學　一、暦學　一、數學　一、測遠術

右京住西村故千助許狀申請有之候。先年京都詰之節支配頭篠原故六郎左衛門江相達入門仕

候。
一、甲州流軍學
右有澤故惣藏・故平次右衛門に習練仕故、才右衛門より免状請之候。
一、信神影流劍術　一、荻通流管鎗
右出森故武大夫より免状請之申候。
不押立習練仕候品
一、小笠原古流禮法・折形・飾方等之事
右池田故吉左衛門より習請申候。
一、醫學・醫術之儀若年より心懸、書籍等之趣醫業之者に僉議仕、調合藥等仕候。
右相望候人々に指南仕候。今般御尋之趣に付書出申候、以上。
七　月　　本保十太夫
御横目衆中
一、令義解田中故平丞より傳來指南仕候（私記和漢名數に委有之。）
小川八郎右衛門
一、用法業術出羽國櫻葉采女正より傳來。（私記明和六年之頃鐵右衛門召仕候家來若黨より傳授之由云々。）

谷　鐵右衛門

六月廿七日、諸士の困窮する者に町會所の調達銀借用を許すことを示達す。

〔政隣記〕

前月廿七日御勝手方於御別席、前田大炊殿より定番頭御用番池田甚平に左之御覺書御渡に付、同人より廻狀有之。

當時町方金銀不通用等之儀に付、此度高畠五郎兵衛等より仕法之趣申聞承屆候品も有之候間、御家中之人々も少分之調達之儀者、五郎兵衛等及示談候はゞ可致出來与存候。委細之儀者五郎兵衛等可被承合候。此段諸頭へ無急度可被申聞置候事。

右於町會所貸渡銀、二百石以下之分甚指支候人々左之割高之通、且一作に付藏納不及除米に、來子七月元利急度取立返濟、來七月難指出人々者可指除樣致度旨。御扶持方之分者、來三月元利返濟之圖り。將又二百石以上に而も、馬持以下之人々勝手難澁至極に而無據致借用度人々者、得与相糺可申聞旨。此分は不依知行高下に三百目宛貸渡、返濟方前記同斷。右銀子當二十一日より寄日、於町會所可相渡候間、請取人可指出旨、今十三日町奉行兩人より頭々御用番に廻狀到來。

但、右銀子相渡候砌、見合印鑑入用に候間、當十八日迄に、一組宛惣銀高書寫与一集に、高島五郎兵衞方迄可指出旨等も、追啓に申來候事。

三 百 目 宛　百八十石より二百石迄。

二百五十目宛　百三十石より百七十石迄。

二 百 目 宛　八十石より百二十石迄。

百五十目宛　三十石より七十石迄。

百五十目宛　俵數之分五十石當り。

百五十目宛　御扶持方之分五人扶持より十五人扶持迄。

但四十俵より七十俵迄。

二 百 目 宛　二十人扶持。

二百五十目宛　三十人扶持。

但新番組は七十石當り。

覺

一、何 百 目　文 丁 銀

右今般町會所調達銀之内致借用申候。但一ヶ月百目に付一匁三分宛加利足、來子三月七月元利急

度可致返濟處如件。

年號月日　　　　　　　　　何之誰　判印

町會所

右相違無之候。期月之通元利急度可爲致返濟候、以上。

頭　　印

覺

一、何貫目　　文丁銀

右拙者組・支配之人々手前借用證文、別紙加奧書指出申候。一組惣銀高爲請取如斯御座候、以上。

亥　月　日　　　　　　　　頭　　印

奉行宛所

右之通に候處、渡方混雜指支候儀有之に付、人別證文相止。

一、組切惣銀高頭引受之證文に而、其頭々に相渡、來年返濟之節頭々に取立、町會所へ可差出候、遠慮等之人々に者不相渡候間、名前可相省旨、町奉行長谷川三右衛門より同月二十日廻狀有之。

附、右調達銀者町會所ゟ調達米一萬石代銀に候事。

右之通りに候處、同月二十八日町奉行中より御用番諸頭へ廻狀到來、猶更僉議之上七百石以下馬持以上之人々、知行高下に不依、三百五十目宛先達而之仕法を以可貸渡候條、勝手難澁借用有之度分、得与しらべ一紙證文可指出候。且七百石以下頭分之人々ゟも、右之通を以可貸渡候間、自分證文調方之儀、於町會所主付役人人ゟ可問合旨等申來候事。

六月廿九日。前田治脩人持組の士の乘馬を觀る。

〔政隣記〕

六月廿九日朝六半時揃に而、於堂形御馬場人持組横山藏人等十五人ゟ、持馬に而乘馬被仰付御覽有之。翌晦日ゟ菊池大學等十四人同斷、七月二日ゟ奥野左膳より末席横山大膳迄同斷。

六月廿九日。本鄉邸の火消役等、水戶邸の消防に從ふ。

〔政隣記〕

六月廿九日曉七時前、水戶宰相樣御上邸小石川御門の外之内御長屋より出火、六十間計之處過半燒失。三十間計此方樣御近隣火消消留之。一番火消渡邊治兵衞、二番火消富田左門。

右に付七月十一日、水戶樣御家來久貝惣左衞門より以奉札、六月廿九日曉上屋敷之内出火之處被消留候に付、從宰相殿被送之候旨に而、治兵衞・左門ゟ小杉紙一箱宛被下之。依之前々之

通、翌十二日右惣左衛門居小屋迄、爲御禮兩人共參出之事。

六月。能美郡千代村の百姓權兵衛孝行を以て賞せらる。

〔袖裏雜記〕

能美郡千代村百姓故庄兵衛養子權兵衛は、小松大文字町串屋長兵衛實子に而、當歳之時庄兵衛もらひ養子に仕、權兵衛八歳之時庄兵衛病死、御高六石餘支配難仕、村肝煎へ預之。養母者在所之內被雇仕事にて、少々賃錢を以艱難至極之渡世。實父者相應に暮し、不便に存、權兵衛を引取候處、幼少に候へども養母を慕ひ、在所へ歸度由晝夜歎候故、半年計留置、養母方に返候處、養母眼病頻次第に重り、盲に成、仕事も不得仕。權兵衛十二歲之春より、在所理左衛門方へ奉公、仕事も相應に仕、養母を養申事は、理左衛門方にて朝飯給候而、人々茶坏給休候間に、在所を乞食仕もらひ申食物養母に爲給、其儘主人之仕事仕、晝飯・夕飯之節も右同樣、其外菜物之類拵、何にても養母之爲に成可申品もらひ候而介抱仕、夜中には主人方へ歸夜仕事仕、每日懈り不申。長日之節外之者には晝寢仕候へども、權兵衛は落葉・枯枝等拾に出冬用意仕、時々は湯をわかし行水爲仕、夏者蚊をはらひ爲寐、冬は朝さへ火をたきあたらせ、少充炭を求置火箱にいけ寒氣を爲防、夜は在所中湯風呂有之所を尋、賴候而、養母之手を引又は負候而風呂へ入申儀度々有之、萬事深切に介抱仕候。權兵衛十二歲より十八歲迄は艱難

至極に養母を養、段々成長、少充主人より給錄を取、猶又養母を能介抱仕、農仕事も丈夫に仕に付、安永元年より持高之内三石餘作配爲仕、就夫壹箇月之内日數十日右田地作配、其餘奉公仕候。實父より古着抔こしらせ候へば、養母へ着せ候。小松へ參候へば菓子類抔土產、必養母へおくり候。權兵衛氣配惡敷節、藥を給候故、輕き者には容易に給申儀有間敷と申者有之候處、養母死後迄は何卒無事に居申度与申候。三十二歳之時妻を取、妻も實躰者に而、姑に能つかへ候處、始一人出生後、七箇年以前病死故、權兵衛一人にて前之ごとく介抱仕候處、翌年養母煩、近所之醫者を頼、療養看病大切に仕候へども、六十六歳に而病死、十二歳より廿四年之間養母に能つかへ候。右娘母にわかれ候後、里方へ遣、折節主人方へ連參節は、主人之難題に成不申樣、娘賄に當り候程、給銀之内減指引仕度と申入、主人夫に不及と申候へども、承引不仕必指引仕候。養母死後作方入精故、持高六石餘肝煎より不殘受取手作仕、近年は一箇月之内日數廿日は農作、十日は奉公仕候。此十日定日有之、其内祝日に當り候へば、外々奉公人は德に仕休候處、權兵衛は休不申、主人之仕事平日之通仕に付、主人見付留め申儀度々有之候。權兵衛當年四十一歳之由、去六月同村肝煎等書付、御郡奉行添紙面を以出候。依之前册に記す福正寺仁太郎等之例を引、今般權兵衛者、數十年來之孝行只今顯候事に候へば、當座之御褒美には及間敷候。諸役御免之例も候へ共、纔六石之御高に候へば、少分之事に

て可有之、御郡奉行存寄も内々承候處、格別存寄も無之、御高六石之分被下こ申様成儀被仰付候ニず、誠に格別に候へども相當り申間敷旨も申候。權兵衛儀稀成孝心に候へども、仁太郎・右瀬屋六兵衛に比候へば、乍同様次にも付可申哉に候間、一生二人扶持可被下哉、又は六兵衛例を以三人扶持可被下哉与、六月廿五日伺之處、二人扶持可被下旨御意申渡、右之通六月廿五日伺、是亦伺之通被仰出。

御算用場奉行江

能美郡千代村　權　兵　衛

右權兵衛儀、養母存命之内、幼少之砌より稀成孝心之趣有之候段、此節被聞召、奇特成儀に被思召候。依之爲御褒美、權兵衛一生二人扶持被下之條、此段御郡奉行へ可被申渡候事。

亥　六　月

六月。村御印及び御算用場印の文書を燒失又は紛失したる場合の處置を定む。

〔司農典〕

村御印幷御算用場印之書物、十村以下村役人等手前に而若燒失、或者被盜候節者、各手前に而先づ自分爲指扣置、當場江可被申聞候。不輕品に候間、以來右之通可被相心得候事。

亥　六　月　　　　　　　　　　　　　　御　算　用　場

右之通に候條可得其意候。尤村役人へも可申聞候。且亦拙者共より渡置候新開下證文等品重紙面者、右同樣相心得可申事。

六　　月　　　　　　　　　　　　　　改　作　奉　行

諸　　郡

七月二日。役掛りの諸士にして十ケ年以上皆勤の者の書上を命ず。

〔政隣記〕

七月二日御用部屋勤志村五郎右衛門より、御馬廻頭御用番小寺武兵衛に、左之覺書被相渡之、武兵衛より夫々傳達之事。

諸士之内役掛り之人々幷御番手共、今年迄十ケ年以上皆勤之人々有之候はゞ可被書上候。右之趣倂支配有之人々へは、各より可被申談候。此段被仰出候事。

七　　月

七月三日。本家より配知を受けたる末家の者が、更めて本家の養子となる場合に給する祿高に就いて示達す。

〔政隣記〕

七月三日左之通御用番御渡之旨等、定番頭池田綾平廻狀有之。

付札、定番頭へ

本家より配知被仰付候末家之者を、本家之養子に相願、故障等無之候者、自分配知共相重可被下旨被仰出候。此段爲承知申達候事。

六　月

七月十日。前田治脩、射手の的弓を観る。

〔政隣記〕

七月十日朝六半時御供揃に而、三之御丸稽古所へ御出、御射手中的弓御覽、五つ時過相濟。矢數三十本之內中り矢二十七本、姉崎五左衞門八本、平田孫三郎其外は十本より二十五本迄之間与云々。

十八日同斷御異風中鐵炮御覽。

七月十九日。稻花の候なるを以て石川・河北兩郡に放鷹を禁止することを告ぐ。

前月は七月

〔政隣記〕

七月十九日、稲花付實入に相成候間、石川・河北兩郡當月二十日より九月二十九日迄、御家中鷹野遠慮之儀に付、御算用場奉行佐藤勘兵衛紙面寫を以、例年之通御用番玄蕃助殿より御觸有之。

七月下旬、加入銀と稱する調達銀を諸士に貸附するの方法行はる。

〔政隣記〕

前月下旬以來、加入銀与云名目に而調達銀出來、借用之人々甚多也。

覺

一、四貫目　文丁銀

右綿屋與吉調達有之候樣致約諾候處、二貫目加入、右出來之旨申聞候。依而町會所調達方役所より、二貫目引足有之候樣仕度奉存候。尤與吉よりも右役所へ相願候筈に御座候。此段御聞届、町御奉行中に被仰達被下候樣仕度奉存候、以上。

亥八月廿五日　三輪齋宮判

伴源太兵衛

右頭より以奥書、町會所へ相達。

七月廿八日。鳳至郡大谷村の則定惣左衛門、平松時章より懐紙を贈らる。

〔又新齋日錄〕

七月廿八日、平松正三位時章卿より、石動山惣代五智院を以、大谷村則定惣左衛門ゟ被下之懐紙寫。

前平大納言時忠卿之遺跡、能登のくに珠洲郡大谷といへる所にありときけば、その國の人に尋侍しに、しかなりとこたふ。むかし全盛のころ、世のほまれいへばさらなり。我も一門のふかきちなみを思ひて、あとゝひものす。

ありし世にそのいさをしはおほ谷やこけの下にも名はくちずして

白檀香をつゝみて墳墓に手向侍るとて。

ほのかにもけぶりのうちに立そひてかへさむ魂のかほりともなれ

同時國村右京亮ゟ被下候懐紙寫。

おなじくにゝかの納言の苗裔歷代せるともがらありときゝていひやりける。

ほかならぬふたつの家のいたいらけくやすらかにして世々にさかへん

時章

右時國村に御料、大谷村に御領也。両人共に時忠卿ゝ子孫に而、系圖等ゝ有之由。

七月、公事場奉行等從來に於ける刑罰適用の慣例を上申す。

[袖裏雜記]

一、左に記候は、公事場御刑法、當時分迄之被仰付方、荒增書上候樣被仰出候付、右場奉行より書上候紙面也。寛政三年辛亥七月也。

磔刑之者

一、主殺・親殺・子殺之類。

一、十五歳以上之男賊心懸或意恨等に而付火仕候者。

一、寺住職之者肉食・女犯破戒之者。

一、人を殺賊仕候者。

一、馬を盜其上病馬を捨候者。

一、徒黨を企人家を打毀候者。

但、右之外及大罪候者は磔に被仰付候。

梟首刑之者

一、主筋之者殺候者。

一、捨子をいたし候者。

一、追おとし仕者。
但、右之外罪之様子により、梟首に被仰付候者共御座候。

生胴刑之者

一、馬附御印を贋、切手謀書仕候者。
一、御上之御道具・金銀等盗取候者。
但、右之外罪之様子により、生胴刑被仰付候者共御座候。

刎首刑之者

一、御歩並以上之者盗仕、或御かね私曲仕候者。
一、侍組之者せがれ謀書贋金仕候者。
但、右之外罪之様子により、刎首被仰付候者共御座候。

斬罪之者

一、賊心懸或意恨等に而付火仕女。
一、人を殺候者。
一、洩米仕候者。
一、贋がね仕者。

一、寺住職之出家女犯・肉食仕節宿仕候者。
一、夫年持密通仕女、幷夫有之女ニ密通仕男。
一、贋切手等拵、主人之知行米を致私曲候者。
一、蔵宿引負仕者。
一、馬を盗候者。
一、土蔵を破賊仕者。
一、最前賊仕、死刑爲赦命御助之處、重而賊仕者。
一、着類幷諸道具等品数多盗取、又は金銀過分に盗取申者。
一、最前賊仕、盗賊改方等に而入墨二度相重り、重而賊仕者。
一、最前入墨一度に而も、重而之賊品多者。
一、金銀等多数取逃候者。
一、苗字有之者侍方へ忍入賊仕者。
但、右之外其罪之様子により、斬罪被仰付候者共御座候。
三箇年禁牢之者
一、大抵十四・五品計より三十品計之賊仕者。

一、品數者少に而も賊之箇所多き者。

一、主人方致欠落、町家等に而主人用事と申僞、品物取受候者。

一、他國他領江女奉公人遣候者。

一、賍物と乍存品物多取扱候者。

但、右之類三ヶ年禁牢被仰付候。此外罪之樣子により、右年刑に被付候者共多御座候。尤右類に而も、人々之時宜により二箇年禁牢被仰付候者も御座候。

二箇年禁牢之者

一、大抵二・三品より少し之賊仕者。

一、賍物と乍存品物取扱候共品數少者。

一、寺住職之倅に馴合候女。

一、博奕宿仕錢取受候者。

一、主人所持之品取遣候共、品數少き者。

但、右之類二ヶ年禁牢被仰付候。此外罪之樣子により、右年刑に被仰付候者共多御座候。尤右類に而も、人々之時宜により月數に禁牢被仰付候者も御座候。

月數禁牢之者

一、品輕ミ取遣仕者。

一、欠落立歸者。

一、品輕き賤、并少之引負仕者。

一、御停止を乍存鹽取扱仕者。

一、博奕仕者。

但、右之類八・九箇月より以下月數禁牢者に御座候。人々之仕形により月數多少有之。尤此外不屆有之者、其品により日數禁牢之者共御座候。

流刑之者

一、御徒並以上不屆有之者、死刑一等御宥免之者。

一、侍人群集之場所に罷越、打擲に逢候者。

一、主殺之者之母流刑に被仰付候儀も御座候。

一、出家師匠に對し我意有之者。

但、右之外罪之樣子により流刑被仰付候。

遠嶋刑之者

一、御徒並以上之者、又不屆有之流刑被仰付候へば、其せがれ遠嶋。

一、侍組之者不行状有之、其上住所等も不存者より刀・脇刺買請不埒有之候処、死刑一等御宥免之者

但右之外罪之様子により遠嶋被仰付候。

八月朔日。前田齊敬初めて八朔に登營す。

〔政隣記〕

當八朔六時御供揃、前田信濃守殿御同道、佐渡守様八朔初而御登城、御禮御首尾能被仰上、御下り、爲御禮御用番松平和泉守殿へ信濃守殿御同道御勤、夫より御館ゟ御出。依之當日爲御祝詞御出之御客衆へ、一汁五菜之御料理等出。

但御供御時宜役御附より勤之、御表よりは御先角之人迄罷出候事。

八月五日。前田治脩、家老等にして公用なき時は速に退廳し得べきことを告ぐ。

〔御親翰拜寫〕

辛亥八月五日

一、四時過御居間書院へ内記被召段、櫻田折之助申聞罷出候処、左之御親翰被渡下に付、先

以段々結構之被仰出難有仕合奉存候。執茂拜戴爲仕、追而返上可仕旨御請申上、退去。

家老中に

去々年以來段々申出候趣に付、其方中勤方別而烈敷入情之段、大儀之事に候。今般舊例之趣を以、年寄中退出時刻之事に付而申出候品有之候。其方中にも用之透には爲保養鷹野等罷出可然候。短日退出後は間もなき事に候間、已來用向薄き節は相寛、定り之時刻以前勝手に退出有之樣にと存候事。

亥　八　月

八月六日。年寄等の放鷹を行はんとする時は定刻に拘らず城中より退下することを許す。

政隣記に八月六日の條に之を記載す

〔政隣記〕

寛文・延寶之頃は年寄中休日有之に付、以來鷹野罷出候節等相寛、定刻無構可致退出候。

一、月番宅へ寄合之儀舊例有之に付、御用之品により以來寄合可申候。

一、御家老中にも短日之時分鷹野等に罷出候節相寛、定刻に無構可致退出候。

有之通被仰出に付爲承知申達候事。

八　月

右御用番大炊殿御横目中へ御渡之事。

八月二十日。越中に暴風あり。

〔政隣記〕

八月二十日夜越中富山・魚津・滑川・小杉・境等者烈風至極、家損老樹過半吹倒し、餘程之風變、金澤幷高岡等曁能登者少々風高に而、爲指風に而も無之。併所により少々強弱者有之、老桐抔根發も抔之所も有之候得共、家損等者無之候事。

附記、九月三日越中放生津江津波打、磯際に而百八十軒有之一村不殘打崩し、內二十軒者海中へ引入候而人損多有之。

八月廿二日。前田治脩、盗賊改方奉行高畠五郎兵衛をして新井白蛾の人物を密偵すべきことを諭す。

〔御親翰留〕

高畠五郎兵衛江

一、自今其方役筋之外、惣様人品善惡等之儀承及候趣可申越候。此方より右等之儀に付尋る品可有之間、兼而其心得可仕候。此用向至而內密に候條、已來尋品曁申聞儀等も、皆他言仕

新井白蛾は八月下旬金澤に下りたるなり

間敷候。

一、此度新井白蛾ハ、弟子入之儀、別紙を以申聞候通に候。入門之上白蛾人品之樣子得与相考、存寄之通可申聞候。

但此請以判形書付可申聞事。

辛亥八月廿二日

一、今般儒者に召出候新井白蛾儀、博學篤實且律令等にも委敷躰承候條、その方儀致弟子入、學問相勵可申候。此段內々申渡候事。

〔御親書上〕

一、御親翰被成下、謹而奉拜戴候。自今私儀御役前之外、惣樣人品善惡等之儀承及候趣可奉申上、右等之儀に付御尋之品可有御座間、兼々其心得可仕、此御用向至而御內密に御座候間、以來御尋之品茂被仰出之儀等茂、堅他言仕間敷旨、且又此度新井白蛾弟子入之儀、御別紙を以被仰出之通に候。入門之上白蛾人品之樣子得与相考、存寄可奉申上段被仰出之趣、謹而奉畏候。先以重き御內密御用被仰渡、難有仕合冥加至極奉存候。併不才之私式、重々御用儀定以奉恐入儀奉存候。尤被仰渡之儀に御座候間、盡粉骨相及申限り相勤可申与奉存候。殊に今般新井白蛾弟子入仕候樣被仰出、定以難有仕合可奉申上樣も無御座次第、奉盡冥加儀に奉存

候。右入門之上、自然人品之様子得与相考之儀、別而重き御用向共、只々不才之私奉恐入儀に奉存候。其上賢才之人物与相聞申候間、中々私式愚眼に相見ゟ候儀共不奉存候得共、御用向之儀成限ハ愚意に奉存寄儀ハ可奉申上与奉存候。段々格別之被仰出奉徹心魂難有仕合、奉盡冥加儀奉恐入儀に奉存候。猶御請之儀ハ別紙書付を以奉申上候。

一、御筆之物并御封印・御指札奉返上之候、以上。

辛亥八月廿二日　　高畠五郎兵衛　判

八月廿一日。此日以後御歩石倉市郎左衛門が小者を殺害したる件に關し取調を行ふ。

[政隣記]

八月廿二日御用番大炊殿於御宅、奥村河内守殿御立會、御横目今村三郎太夫・安達孫兵衛指引に而左之通被仰渡。

御尋之筋有之、先指扣被仰付　　御歩頭　松田權太夫

一類御預　　御歩小頭　近藤源五兵衛

急度指扣　　御歩　木村十郎左衛門

右源五兵衛・十郎左衛門儀、昨廿一日朝より於公事場、先達而より一類ゟ御預之御歩石倉市

郎左衞門与對決之處、今廿二日暮頃相濟、於同所源五兵衞・十郎左衞門先右之通被仰付置候段申達有之。

右趣意は云々、寛政二年六月於江戸御貸小屋石倉市郎左衞門儀、同居之木村十郎左衞門家來小者を致殺害候處、市郎左衞門爲躰亂心之旨に而、御國へ相返一類に御預に候處、亂心に而無之、不得止事趣に付致手討候趣及露顯。依之市郎左衞門身當頭篠島平左衞門等より、市郎左衞門手前承糺、夫々及御達に付、今月十日にも於公事場御尋有之、昨日右之通對決有之候事。

〔政隣記〕

九月七日朝六半時より公事場始り候處、翌八日暮頃相濟、左之通被仰付。

石倉市郎左衞門与對決之上指扣。

六組御歩　小笹久平

松原儀助

平野與三兵衞

附、同月廿一日左之通被仰付。

於公事場石倉市郎左衞門一件御尋有之、急度指扣。

但、翌廿二日晝頃相濟。

六組御歩　木村八郎兵衛
　　　　　北村彌三郎

十月七日右同斷。
指扣被仰付。

六組御歩　嶋　三郎太夫
　　　　　淺野三郎右衛門

一、翌寛政四年四月十六日朝、松田權太夫居宅於居間自殺、爲檢使御大小將横目今村三郎太夫・小原惣左衛門罷越見屆之。但今朝迄相替儀無之、權太夫內寳側に罷在、小用に厠に罷越候內、暫之間に脇刺を以咽に突立候處、少しならで通り不申、ふえへも懸り不申候處、柄を握りながら前へ臥絶命罷在候由、年齡六十五歲。領地八百石。居宅所安江木町専光寺後。役御歩頭也。

一、寛政六年十二月廿七日左之通於公事場落着被仰付。

六組御歩　石倉市郎左衛門

同年八月晦日より禁牢之處、出牢之上御改易。

六組御步　木村十郎右衛門

同年五月四日より一類御預之處御改易。

同斷一類御預御免、御切米高五十俵之內二十俵御減少に而三十俵に被仰付、定番御步へ被加之。

六組御步　北村彌三郎

小篠久平
中村勘左衛門
菅野榮助
塚本圓藏
島三郎太夫
淺田順八
平野與三兵衛
淺野三郎右衛門
廣瀬榮右衛門
松本源左衛門

此十一人指扣御免許。

同月十二日牢死。　六組御歩小頭　近藤源五兵衛

但、同年五月四日より禁牢。

指扣之内病死。　六組御歩　木村八郎兵衛

八月廿六日。前田治脩、齊廣と共に石川郡宮腰に放鷹す。

〔政隣記〕

八月廿六日九半時之御供揃に而、同刻頃御出、宮腰口御放鷹。龜萬千殿御同道、暮頃御歸館。御餌構白鷺五ツ。内御拳二、御鐵炮二。龜萬千殿御拳一つ之事。

八月廿九日、作事奉行矢部友左衛門學校造營普請方主附を命ぜらる。

〔政隣記〕

八月廿九日左之通被仰付。

學校御造營御普請方主附。　御作事奉行　矢部友左衛門

右者此間金谷御門向上ヶ地に學校可被仰付旨被仰出候に付而也。

附、御僉議之趣有之、安房坂高之上ヶ地に御造營可被仰付旨に九月三日相極候事。

〔御横目方密役記〕

是月は大盡なり

八月揚地に學校可被仰付旨、繪圖之儀は追而可被仰渡旨、則尾張樣學校聞合に而繪圖出來、御作事所へ御渡、矢部友左衛門主付被仰渡候事。

八月晦日。諸士の中、文武藝能の師範に就き從學する者を錄上せしむ。

〔政隣記〕

御家中之人々幷陪臣之内、文武之藝能師範仕候人々之弟子、當七月一ケ月稽古出座之人々名前書上候樣被仰出候條可被申談候事。

八月十六日

右横濱善左衛門より御横目中へ相渡候條、當晦日切出座帳指出候樣、頭・支配人に廻狀有之、且帳面見苦敷等之御貪着無之候間、不調直其儘に而指上候樣被仰出候事。

〔政隣記〕

御大小將横目に

御家中之人々幷陪臣之内、文武之藝能師範仕人々名前可被聞召旨先達而被仰出候。右弟子數幷弟子之内文學各別に致修行講談仕候者、且又武藝之儀者ゆるし相濟候歟、又は格別藝術達者成人々之分書上候樣、夫々可申渡旨被仰出候事。

當地は蓮池邸續にして最初に學校を建てたる所

別紙之通夫々可申談旨、横濱善左衞門申聞候條、被成御承知、弟子數等之儀帳面に調御取立、來月十日切御横目所に御差出可被成候。尤御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。且御組等之內拔許有之人々は、其支配にも不相洩相達候樣、是亦御申談可被成候、以上。

八月晦日　御横目

御小將頭衆中

八月。前田治脩、將に學校を興さんとするを以てその位置の調査を新井白蛾に命ず。

〔袖裏雜記〕

八月廿二日左之御親翰被渡下。

右此度揚地・堂形前之內學校可申付与存候間、しらべ用申付候條、可被申渡候事。

八月　新井白蛾

九月朔日。新井白蛾初めて前田治脩に謁す。

〔歲々略曆〕

七月於京都新井白蛾被召抱、八月下旬府入、九月朔日御目見。但鳥目百疋献上、同日御殿に而講釋。

九月四日。江戸深川に於ける加賀藩の米倉浸潮の害を受く。

〔政隣記〕

九月十五日、今月二日夜亥之上刻江戸強地震、同四日曉より大風吹、大雨降候處、御邸內御小屋等處々大に破損、昔より靜謐、快天に相成。右に付品川深川邊又々大潮込、津波躰に而、八月六日汐波緣之節殘候洲崎辨天社も、此度に不殘流失、如野原相成、芝筋高繩邊之波除石垣も、十八町之間不殘波に而引崩し、永代橋抔も大損じ、深川邊之藏屋敷共不殘又々汐付、米損じ夥敷、此方樣御藏ゟも又々水付、御貯米此度に下値二品通り汐付に相成。尤翌五日會所奉行爲見分罷越。且戸田川も前月廿日過よりいまだ減水無之、船立不申、町飛脚等皆滯り廻り、往來右等之趣に付諸物彌增し高貴に相成り、都而夏頃倍價に登り、白米價金壹歩に七・八升之由。今月九日便、十八日來着申來候事。

九月八日。郡奉行水原五左衞門等非人頭の所屬に關する意見を上申す。

〔國事雜抄〕

藤內頭非人頭支配方爭論

加州御郡奉行紙面之通申聞候に付相違候間、所々奉行等手前茂僉議有之、紙面之通に而不指支候哉、各存寄茂承度候間、得与被致僉議可被申聞候事。

内々口達之趣。

非人頭共藤内頭之支配にて無之旨、先年より爭論有之、已後訴狀茂仕に付、於公事場夫々遂吟味候處、別紙申分之通に而、則別紙内密相渡候。非人頭共藤内頭之支配相違無之趣別紙之通候間、全藤内頭之可爲支配儀に候。然し先達而各より被指出候帳面之内非人頭勤向之儀は藤内頭致支配、人裁許之儀は領付村肝煎仕有之樣に被致候由、此儀如何に候哉之事。

一、札持乞食は垣内居住之者に候故、妻子等所持候歟、又は二代目には、本之平人に立戾申儀不爲仕流例に候へ共、相當り不申儀与奉存候。左候はゞ以來平人札持乞食に相成候分者、妻子等所持候而も平人之趣に取扱、指障有之間敷哉之事。

一、元祿四年二月公事場より藤内頭江、以來乞食共札相渡候縮方いたし候樣申渡候由。此儀者、散乞食之支配仕者指定無之故に而有之候。當時迄も ヶ樣に有之指支申間敷哉之事。

一、兩條之趣に付、非人頭共全藤内頭支配に相成差障申間敷候哉、得与被遂僉議可被申聞候。是迄に非人頭共、全藤内頭支配与申儀はきと不相定故、平人札持乞食に罷成候を、取立人も有之候へ者、重而平人に立戾り候故、自今全藤内頭支配に相極候而者、札持乞食之指障有之

聞敷、是等之儀茂存寄之通可被申聞候事。

御内々御口達にて、藤内頭・非人頭一件之儀に付私共存寄之趣可申上旨、先達而被仰渡奉得其意、則私共存寄之趣猶更穿鑿之上、段下りに相調左に申上候。

一、非人頭共藤内頭之支配に而無之旨先達而より争論有之、其後訴状も上候に付、於公事場被遂御吟味候處別紙申分之通、則別紙十五通御内密御渡之、非人頭共藤内頭之支配相違無之趣別紙之通に候間、全藤内頭之可爲支配儀に候旨。併先達而私共より指上申候帳面之内、非人頭勤向之儀に藤内頭致支配、人裁許之儀は領付村肝煎仕有之樣奉存候儀。

此儀非人頭者前々より藤内頭共より相撰役儀申付、勤向之儀夫々藤内頭より申渡、非人頭居屋敷儀私共に藤内頭より相願、夫々相渡置申儀、則別紙十五通之表に有之候通、何茂役儀に付候而之儀に御座候旨、役支配は藤内頭に相違無御座候与奉存候。且又人支配之儀は、非人頭与も不限、非人・藤内共其身縊死・故障或火災等に而御救米抔被下候節、往古より其領付村肝煎より引請に仕、裁許之十村に相願、夫々其所之御奉行所取捌來申儀御座候。左候得者人支配者、非人頭・非人・藤内共其領付村肝煎支配に相違無御座候与奉存候。以來此者共人支配、藤内頭仕候儀に相成候者、私共支配下にても、十村一組宛之人別帳にも指障可申候上、加州に而も小松・宮腰等所々御奉行付、并越・能之分茂不殘私共支配下に相成、御

人非は賤民の義

領國中非人・藤内共之支配私共に限り仕候樣に相成可申儀、如何敷奉存候。左候得ば却て御締方にも指障可申哉にも奉存候。元來藤内頭三右衞門・仁藏儀者、御領國藤内・非人之惣頭に而、都て人非に付候儀者、右三右衞門等支配仕御締方仕候儀、其人に付候而之儀者其所之御奉行支配仕候儀与奉存候。既に三右衞門等十村直支配之者に而茂無御座候。其領付村肝煎支配仕申儀に御座候。乍去役筋之儀に付候而者、品により私共役所に而直に申渡候儀に御座候。畢竟非人頭共藤内頭之支配に而無之与申募候儀は、小松・宮腰等其所之御奉行より、平人を非人頭与申名目に立置、支配切之御締方申渡候儀有之候に付、私共支配淺野・中嶋等之非人頭共と右之振に相成、平人交り可仕巧より事起り、爭論出來与相見得申候へ共、私共支配之非人頭共者、累年非人に罷成候者之内より、非人頭に藤内頭より取立、前段之通往古より夫々御締方仕來申儀に而、人非之者には相違無御座候。將又御領國中藤内肝煎者、藤内頭共より相立申候間、往古より御領國中において藤内頭共より相立置申候非人頭共も、以來者右藤内肝煎同樣に、藤内頭共より支配仕候儀に御極被仰渡御座候はゞ、人支配は領付村肝煎、役向之儀者勿論、人非に付而の支配者、以來藤内頭支配仕候儀に、此度はきと相極候はゞ、此以後彼是申分出來仕間敷御締方之爲にも可然与奉存候。

一、札持乞食者非人垣内居住之者に候故、妻子等所持仕候歟、又は二代目には、本之平人に

立戻申儀不爲仕流例候得共、相當ゟ不申儀与奉存候旨。左候はゞ以來平人札持乞食に相成候分ニ、妻子等所持仕候ニ茂平人之趣に取扱、指障有之間敷哉之事。

此儀數十年來流例に者御座候へ共、由緒有之者にも零落仕人非ニ落行申儀不便成物に奉存候。併是迄之分者右流例之通被成置、當時二代乞食之外、獨身に罷在候者、亦は妻子引連非人ニ罷成候者共一代之分相糺、筋目茂相知申者ニ撰出、皆以來ヶ樣成零落之者共ゟ筋目ゟ相糺御助小屋江入候樣に被仰渡、往々其出生所江立戻候樣仕度奉存候。尤ヶ樣一先御救之上、右ヶ所を遁去申位之者ハ、非人頭支配に申付、札持乞食に仕候はゞ可然樣奉存候。

一、元祿四年二月公事場より藤内頭江、以來乞食にも札相渡致御締方候之樣申渡候由。此儀ハ散乞食之支配仕者、指定も無之故に而可有之候。當時迚もヶ樣に有之指支申間敷哉之旨。

此儀當時之散乞食者札相渡、非人頭垣内之小屋へ入、朝夕人數相改申儀、是迄之通御座候へ者指支申儀無御座奉存候。

一、是迄者非人頭共を藤内頭支配与申儀にきと不相定故、平人札持乞食に相成候上、取立人も有之候ハ、者、重而平人に立戻り候處、自今全藤内頭支配に相極候而は、札持乞食之指障茂有之哉之旨。

此儀非人頭共全藤内頭支配にハ被仰渡候而も、此御ヶ條に指障申儀無御座与奉存候。其謂

者、平人札持乞食に相成候て全人非に落入申に而も無御座、零落より非人に相成申迄の事に御座候へば、是迄之通其身一代等取立人等有之、出世仕候而も敢て指障申間敷候。尤非人頭共相成候へば、此者は最早人非に相成申与申物に御座候へば、取立人有之者に而も無御座候。萬一左様之儀御座候而も、非人頭幷年來乞食之者共、垣内出申儀相成不申樣、猶更藤内頭共ゟ申渡置候者、隨分御縮方相立、以來指障申儀無御座与奉存候。

右私共存付之趣、前條に段々相調申候通に御座候間、自今以後非人頭役支配、幷人非に付候而は、支配者藤内頭共支配に被仰渡、人に付候而之支配は、往古より有來之通領村村肝煎支配に被仰渡候は、指障申儀無御座与奉存候。依て先達而御渡之御口達之御覺書、外に別紙書付十五通上之申候、以上。

亥九月八日　　水原五左衛門　判

恒川七兵衛　判

奥村河内守樣

九月八日、前田治脩、長谷川準左衛門をして經書を講ぜしむ。

〔政隣記〕

九月八日、月次經書講釋如例於賓檢之御間有之。且晝頃御居間書院、長谷川準左衛門へ中庸

之内講釋被仰付御聽聞。

九月九日。石川郡鶴來村附近に降雹あり。

〔政隣記〕

九月十日、昨九日晝強雷之砌、鶴來村邊に大雹降、壹貫目餘有之候与云々。

九月十日。前田治脩使を遣はして前大聖寺侯前田利精の病を問はしむ。

〔政隣記〕

九月九日、備後守樣御滯に付、爲御見廻大聖寺へ被遣候御使者御大小將より、御内々旨御用番河内守殿・御小將頭御用番河地才記へ被仰渡、平田磯次郎へ申渡有之、翌十日磯次郎へ御使書等河内守殿御渡、途中差急候樣被仰渡候。御進物味噌漬鯛一桶也。從備後樣之御使書等は、御用人被相渡、御進物鹽鯛一籠箱入。且歸着之上御返答書等、御用番御退出後に候はゞ、翌日御席持參可有之候。尤御次にて直に罷出、御容躰等口上を以申上候樣被仰渡、晝八時前從御城直に發足有之。但御貸馬不請取、會所銀知行當り、身當頭伴源太兵衛假切手を以受取被相渡之。將又宰領持參人割場にて之入は、御用番河地才記より相立、人數等は磯次郎より直に切手を以請取之。

路銀・馬銀・御扶持方代は、歸着之上身番頭伴より受取渡之。

同日從備後守樣依御願、御醫師横井元秀被遣發足。同夜より元秀御療治、醫王生脈散合劑、參入別煎參姜湯指上之。御病症御時疫、御熱甚敷御難治之御容躰等云々。右御煩に付、御馬廻頭中川四郎左衛門儀、御病用幷御締方等罷越候樣被仰渡、十一日發出罷越。

附、十月廿二日罷歸。

前條有之御使書寫左之通。

備後守樣江

御所勞、去七日夜より御熱發、御疲も相增候段御聞被成、御樣子無御心許思召候。因茲爲御見舞以御使者被仰進候に付、御肴御目錄之通被進之候。

右申述、委細之御容躰各迄相伺候樣被仰付候段申述、相伺可申候。將又是迄御勤合御指止被成御座候得共、御所勞不輕御樣子に付、格別之趣を以御使者被進候。御返答被仰進候儀は格別、分而御禮之御使者等には不被爲及候。此段も申述候樣被仰付候段可申演候。

右於大聖寺可相勤候、以上。

九　月　　　　御　使　平　田　磯　次　郎

備後守樣より備後守樣江

御所勞次第に御勝不被成、御疲も相增、甚六ヶ敷御樣子委細御承知被成、無御心許思召候。

箱吏御容躰御聞被成度、以御使者御見廻被仰進候に付、御目錄之通被成御進贈之候。
右申述、箱吏御容躰委御聞被成度、御使を以被仰進候段申演、御樣体相伺可申候。

九　月

前記之通平田磯次郎、十日八時前發足、十一日朝五時前到着。晝頃御舘へ罷出、御使用相勤、夕七半時頃退出、御使者宿へ罷越、無程發足。十二日晝九時前歸着、直に登城之所、幸身當頭作源太兵衛詰合に付、御席へ誘引、御返答等夫々御用番河内守殿へ被相達之。委曲左之通。
但御使者宿升屋宇右衛門。

一、味噌漬鯛一桶

備後守様　誘引　深町治右衛門
取次　土井市正

御目錄

右爲持罷越、御口上申述候處、御所勞去七日夜より御熱發、御疲も相增候段被爲聞召、御樣子無御心許被爲思召、依之御使者被仰進候に付、御肴御目錄之通御拜受被成、寔に御懇之御儀難有御仕合思召候。此段宜申上旨、野口兵部を以御請に御座候。
申述候處申述、御樣体相伺候處、是迄御勤合御指止被遊候得共、御所勞不輕御樣子被爲聞召、御各別之趣を以御使者被進候。右御請被仰上候旨も被仰進候。委曲御承知被成、畏思召候、此段も宜申上旨被仰付候。且又御容躰之儀、先達而より被仰上候通、御同樣之趣に而、差而

御膳ニ無御座候。委曲御容躰書に被仰上候旨、右同人申聞候。
御機嫌御伺、可被仰上儀に御座候得共、態与御扣不被仰上候旨、右同人私江迄申聞候。
一、御容躰書・御食付・御兩便付上之申候。
一、當十日未之上刻發足仕、同十一日辰之上刻參着仕候處、先拂足輕兩人町端迄出向、御使者宿へ誘引仕、暫有之御使者相勤、相扣罷在候內、一汁三菜之御料理被下之候。申之中刻退出仕、於御使者宿ニ右同樣之御料理被下之候。御馳走方御役人町御奉行中川軍彌・組外頭岡田織江相見廻申候。宰領・持參人江御湯漬被下、宰領江金子百疋宛、持參人へ鳥目五百文宛被下候、以上。

九月十二日　　　平田磯次郎

俊姬樣へ之御返答書右同樣、御使書受候而、
但、尋思召候。其外ニ同樣に付記略す。且御容躰書等三通記略す。

九月十一日。初めて學校惣奉行を命ず。

〔政隣記〕
九月十一日、左之通被仰付。
奥村河內守

學校惣御奉行　横山山城

前田大炊

前田利精は九月十五日を以て卒せしなり

九月十六日、前田治脩再び使を遣はして前大聖寺侯前田利精の危篤を問はしむ

〔政隣記〕

九月十六日、大聖寺御家老野口兵部出府、九時前登城。備後守樣御所勞段々被爲指重候儀等言上。右に付爲御見廻、早打御使者御使番兒島伊三郎へ被仰渡、同日八時前從御城直に發出。金貳步三十切御貸渡翌十七日夕七時歸着、直に登城御使書上之。

但、大聖寺へ夜四時頃參着之所、御使者宿出來不申に付隙取候趣有之、八時過御館に罷出、御使相勤、一汁三菜之御料理等被下、明六時前退出之所、於御使者宿も右同樣被下之。夫より御返答書相認、十七日五時頃被地發、且御口上は御六ヶ敷与態与不被仰進、御家老に迄御意之趣等、御請も御家老より段々御指重、最早被及御大切候趣申上候事。

俊姫樣よりも早打御使、御廣式御用達深見七之助被遣、都而兒島同斷。但御貸金は金壹分二十切。外に從俊姫樣小判壹兩、御內々に被下之候事。

九月十七日、前田治脩、高畠五郎兵衞が新井白蛾の人物に關し知り得たる點を上申せしむ。

〔御親翰留〕

九月十七日

一、其方新井白蛾に弟子入之儀先達而申出置候。定而弟子入可致、且白蛾當地へ參着以來、白蛾貸屋に何度罷越候哉、人品如何見に候哉先承度候、以上。

九月十七日

高畠五郎兵衞殿

一、御親翰被成下、謹而奉拜戴候。私儀新井白蛾に弟子入之儀先達而被仰付置候。定而弟子入可致被爲思召候。且白蛾御當地に參着以來、白蛾御貸屋に何度罷越候哉、人品如何見に候哉、先可奉申上旨被仰渡之趣奉畏候。右白蛾方に弟子入之儀、御當地に參着、御貸屋本家片岡兵七郎を以申入、在宅承合候處、御禮之廻勤之砌に而一兩日見合候內、白蛾少々痛所御座候而禮服仕兼候旨申越、其後猶又承合、當九日白蛾方に罷越、弟子入之儀相賴申候處、承知仕、學之趣も役儀も御座候事、專ら職學之趣に相學候樣申聞候。尤誠意正心之儀を申聞候。其後可罷出儀に御座候得共、白蛾儀御貸屋には御座候得共、本家も支配人町並にも御座候故、

毎度罷越候而は支配之者共何か氣遣成共可有御座、白蛾方家内出入之者も、多分は町家之者与奉存候。何かに支配方にも氣遣も可仕間、其段申入、何卒私宅ゟ罷越候樣相賴可申与奉存候。此儀相考見合罷在、其上當月御用番にも御座候故、彼是仕、九日後未罷越不申候。猶更一兩日中右等之趣相賴可申与奉存候。且又白蛾人品之儀、極老与申、殊勝甚篤實之躰に相見ゟ申候。暮之樣子粗承候處、至而相愼候躰に沙汰仕候。上方筋住居之樣子粗承候處、隨分愼宜与之沙汰仕候。

右御請奉上之候。

一、御筆之物奉返之候、以上。

亥九月十七日　　　　高畠五郎兵衞　判

九月十七日。前大聖寺侯前田利精卒去の報金澤に達す。

〔政隣記〕

備後守樣昨十七日御卒去之旨申來候。依之普請・鳴物・諸殺生、今日より明後日廿日迄三日遠慮之筈に候條、被得其意、組・支配へ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

平田とは九月九日平田磯次郎が前田利精氣病見舞の爲大聖寺に派せられたるをいふ

九月十八日

一役連名宛殿

奥村河内守

右に付大聖寺表御舍弟樣方へ御悔、并御家老に御意從中將樣御使、從俊姫樣よ御悔御使相兼御用に付、御大小將神保金十郎に申渡有之。翌十九日御使書河内守殿御渡、從俊姫樣之御使書者御用人渡之。尤途中指急候樣にと河內守殿被仰渡。廿日曉發出、同日申刻大聖寺へ參着、無程御使相勤候處、於御館一汁三菜之御料理等被下之、於御使者宿にも同樣被下之。御返答書等相認、同夜四時過發出、廿一日暮頃歸、着直に登城、兼而御用番依御指圖御次に罷出、御近習頭を以先口上を以申上、廿二日四時過登城、御返答書河內守殿へ御達申候事。

從俊姫樣に之御返答書は御用人に相達、其外平田御使之節同樣之趣略之。

一、勇之助樣へ爲御悔江戶表に之指急御使、同月十八日御馬廻組長屋平馬に被仰渡、同廿日發足。大聖寺へ御代香之御使御馬廻頭江守平馬に同月十八日被仰渡、同廿七日曉發足、十月四日歸着。

但、同月廿八日御葬式、十月朔日・二日・三日御中陰御法會之節之御代香に候事。

一、備後守樣就御卒去、大聖寺詰御用無之、御先手團多太夫・山崎彥左衞門、組外御番頭佐藤治兵衞并御步橫目・御橫目足輕九月廿日歸府之事。

高源院殿　備後守樣御法號也

右御中陰之節御香奠白銀十枚御備、則江守平馬爲持罷越。

一、十一月十四日御家老野口兵部奉札を以、左之人々高源院樣御煩中等御使者相勤候に付、從勇之助樣左之通被下之。依而右奉札返書幷別紙を以御禮之趣認遣す。何れも折紙也。

右之趣夫々頭々にて以紙面相達、頭より書替紙面を以及言上候。

白銀二枚宛御目錄

兒島伊三郎　　平田磯次郎

神保金十郎　　深尾七之助

長屋平馬

右之內御進物持參之分は、爲取持之儀御用所等詮議之上、足輕へ金百疋宛、小者へ鳥目六百文宛遣候事。

九月十八日。小將頭等集會の際に於ける酒食を省略す。

〔政隣記〕

九月十八日、御小將頭寄合之節、前月迄は薄茶、一汁一菜之懸合中酒猪口・吸物、膳後茶請・煎餅類出候得共、今日寄合より省略、一汁一菜外香物・煎茶迄に相成候。

附、今日宿伴源太兵衞。

昨十七日者御馬廻頭中寄合不破和平之所、昨日より懸合等都而相止、茶・菓若盃迄に相成候。右寄合も前月迄者一汁一菜之懸合等出候處、被仰出之趣有之都而相止、已來始而出席之同役有之節者、其仁迄ゟ熨斗三方・吸物・土器三方酒出之、亭主与致盃事、且年頭初而寄合之節者、一統ゟ熨斗三方・吸物・土器酒出候等に相極候由。右被仰出之趣御小將頭中ゟ者いまだ無之、依而右之通懸合迄被出候由之事。

九月廿六日。足輕小頭中村小兵衞大石寺派の宗義を信仰するを以て禁牢に處せらる。

〔政隣記〕

十月十五日、左之趣今日承に付記之。

割場附足輕小頭中村小兵衞等、御制禁之大石寺派信仰に付、今年七月二日以來改方御用幷上井之助宅ゟ右小兵衞追々呼出、已來急度相改候樣申渡有之候處、向後可相改旨申に付無構指置候處、曾而不相改、右申渡之處不心服に付、九月廿六日より禁牢申付有之。小兵衞外足輕共ゟ申迄に付、於割場指扣申渡有之。

附、十二月廿三日小兵衞出牢、其外指扣も指宥有之候事。

九月、土師清吉、筆道傳來の次第を答申す。

〔柳営雑記別集〕

寛政三年九月土師清吉ゟ筆道傳來之儀御尋之處、左之通。

大橋長左衛門儀、若年之時ハ瀧本坊ニ筆道等承稽古仕、中頃伏見院之御流執心ニ奉存候而、詩歌往來物等之宸翰を集執行仕、其以後只今大橋流与申ならはし候字形を書出申候由承傳申候。櫻井先平十郎儀、長左衛門弟ニ而相學申候ニ付、實父清太夫儀ハ平十郎二男ニ而右流儀相學、後専御用向ニ應し候樣ニ字形工夫仕相調申故、文字之形者少々違申候得共、右之筆意を心懸相學申候。

右手跡流儀之趣如此御座候、以上。

九　月　　　　　　　　　　　　土　師　清　吉

曾我流書法之儀、於先代將軍家曾我兵庫助代々書法口訣傳來之處、公方家衰微之後、曾我又左衛門尚祐信長公ニ奉仕書役相勤、信長公御沒後故有而圓滿院御門主を賴蟄居之所、家康公御治世之砌細川三齋ゟ御尋ニ付右之段々被申上、慶長年中被召仕法式定訖而寛永十一年長崎御奉行被仰付。法式之儀ハ久保吉右衛門正之ゟ不殘可相傳旨、酒井讃岐守殿を以被命之候。仍寛永以來吉右衛門正之、爲筆頭公用相勤被申候。

土師元祖清太夫儀、右吉右衞門弟其上妹婿に付、家傳不殘相傳仕候。

右書法傳來如此御座候、以上。

九月　　　　　　　　土師清吉

十月朔日。前田治脩、新井升平をして經書を講釋せしむ。

〔政隣記〕

十月朔日四半時頃御表に御出、於柳之御間出仕之面々一統御目見、於檜垣之御間役儀等之御禮幷新井升平召出候御禮被爲請、且升平に講釋被仰付候。

十月二日。前田齊敬、諸士の官位昇進を賀する爲物を獻りたるを謝す。

〔政隣記〕

十月二日、昨日御用番依御紙面、組附人持、御先手之外頭分以上一統登城、一役四・五人宛、列之通御席へ罷出、左之通御書拜戴之。但病氣等に而登城無之面々へは、同役等向寄より演述奉承知。今日中御用番御宅へ使者指出候樣、玄蕃助殿被仰聞候段、御横目中より申談有之。

御書御折紙に而左之通

當冬衬而御目見、今度官位被仰出候衬而、從頭分以上幷抱傳之者、太刀・馬・青銅到來、歡入事候。此段可被申聞候、謹言。

佐渡守御字　御判

四月十九日

本多安房守殿　長大隅守殿
奥村河内守殿　横山山城殿
前田大炊殿　本多玄蕃助殿

十月二日。金澤に於いて前田齊敬の初めて德川家齊に謁したる次第を披露す。

〔政隣記〕
猶以病氣等に而難被罷出面々ハ、其段名之下に可被書記候、以上。
佐渡守樣初而御目見、且御元服御官位就被仰出候御祝儀物献上に付而、御喜悦之旨被成下御書候間、布上下着用、明二日四時過登城可有拜戴候、以上。

十月朔日　本多玄蕃助

一役等連名殿

十月五日。學校主付新井白蛾老年なるを以て子升平をしてその事務を輔佐せしむ。

〔袖裏雜記〕

學校主付新井白蛾被仰付置候へども、極老之事歩も難儀仕候間、せがれ升平へも右御用可被仰付候間、白蛾申談相勤候樣可申渡旨、十月五日御意。

十月十二日。前田治脩、再び高畠五郎兵衞に新井白蛾の人物に關する意見を徵す。

〔御親翰留〕

十月十二日

一、新井白蛾儀度々前へもよび候而、人品之樣子考候趣有之候。其方にはその以來幾度ほど參會、如何見聞候哉。將又入門之上は學び方如何仕候哉。委曲可申趣候、以上。

十月十二日

高畠五郎兵衞殿

一、御親翰被成下、謹而奉戴候。新井白蛾儀、度々御前に茂被爲召、人品之樣子御考被爲遊候趣御座候。私儀其已來幾度程參會仕、如何見聞仕候哉、將亦入門之上は學び方如何仕候哉、委曲可奉申上旨被仰渡之趣奉畏候。先頃奉申上候後、白蛾方に一度罷越、私方に一度白蛾父子罷越申候。人品見聞之儀は、白蛾隨分信義を相守申与奉存候。併當時御召抱之御にも御座

候得ば、猶以愼茂可有御座、年月經不申而は怠り之躰相見不申物与奉存候。頃日白蛾不快之由故、先日之後見合稽古不仕候。先日白蛾罷越候節は、古易斷を以周易之趣を承申候。學方之儀、未會得仕兼候儀には御座候得共、其節を知其行に愼を取候儀易之本意に茂哉与奉存候。右御請奉上之候。

一、御筆之物并御封印御指札奉返上之候、以上。

亥十月十二日　　高畠五郎兵衛　判

十月十五日。前田治脩不破和平をして書經を講ぜしむ。

〔政隣記〕

十月十五日出仕之面々一統御目見等。且於御居間不破和平へ（于時御馬廻頭兼御儉約奉行、物價方御用。）書經講釋被仰付御聽聞。年寄中・御家老中・御家老中・若年寄中に聽聞被仰付。

十一月十八日。江戸に於いて御手木足輕等互に殺傷す。

〔政隣記〕

十一月十八日夜、江戸に而御手木足輕小頭淸水作太夫、同小屋に罷在候御手木鐵右衛門与申者与、酒狂に而宵之内口論之處、人々取扱に而相濟、相休候處、夜半之頃作太夫儀起出、鐵右衛門に手疵爲負候處、鐵右衛門儀作太夫之脇指を奪ひ取、作太夫を切殺、其身自害仕損候に

付、牢揚屋へ入、手疵段々平癒之事。

十月十八日。前田治脩慰能を行はしむ。

〔政隣記〕

十月十八日於二之御丸御慰御能被仰付、御番附左之通。年寄中等並御近邊當番切御用人・御臺所奉行・御祐筆、幷御次武藝稽古打太刀等に罷出候無息之人々、將又若年寄衆以上之嫡子、御目見相濟候二・三男、不破和平、隱居之面々之内最前御近邊相勤候者見物被仰付。

高砂 權之丞 甚助　葵上 木梨助三郎 蘭作　融 宮門 久左衛門

二人袴 秋悦　さつくわ 嘉六郎

右に付從金谷御子樣方暨俊姫樣御見物。附高砂太鼓者石野主殿助へ被仰付。

十月十九日。定番馬廻組齋藤兵三郎踪跡を失す。

〔政隣記〕

十月十九日朝、齋藤兵三郎（富田勝右衛門組、定番御馬廻百二十石、定紋花びし、古寺町。）御番相勤罷歸候後在合不申、出奔躰に付、今廿四日及御斷候處、一類之内上下に爲尋罷越候樣被仰渡有之。

附、實者出奔之爲躰に而無之、御番より歸り風与庭に出候處、夫より行衞不知、都而家内之仕抹方ら出奔之躰に相見得不申、妖氣に被誘候類歟与云々區說有之。

十月廿二日、前田治脩、石野主殿助等をして嘗て學ぶ所の帶佩を練習せしめ之を觀る。

〔政隣記〕

十月廿日、泰雲院様御在世之内、小笠原官次郎殿へ入門被仰付、帶佩稽古仕候石野主殿助・關屋中務・宮井典膳・山路忠左衛門・伊藤津兵衛・永原佐六郎等へ、當秋以來跡繼被仰付置候所、今廿日金谷於外御庭帶佩御覽被仰出、御近習向頭分御表向に而者、組頭已上に見物被仰付、各相揃候所雨天に相成御延引、同廿二日右被仰付、御覽等有之。

但、年寄衆・御家老衆・若年寄衆者望次第見物被仰付、御用人も御近邊頭分に列し見物被仰付。

附、帶佩被仰付候人々、右に記す石野等六人之外、松平才記・窪田左平・河内山久太夫都合九人也。

十月廿三日。新井升平月次講釋として中庸を講ず。

〔政隣記〕

十月廿三日月次經書講釋、中庸之内新井升平講す。御前實檢之間に御出御聽聞、年寄中等幷物頭已上幷當番頭分以上聽聞。

一十月廿四日。前田治脩、高畠五郎兵衛に新井白蛾召抱に關する老臣等の批評を探索せしむ。

〔御親翰留〕

十月廿四日

一、河内守・山城・大炊・玄蕃助は新井白蛾門弟之事に候へば、今度召出候一件等に付彼是評說も候哉、承及候儀有之候はゞ不泥可申越候、以上。

十月廿四日

高畠五郎兵衛殿

一、御親翰被成下、謹而奉拜戴候。河内守・山城・大炊・玄蕃助儀、新井白蛾門弟に付、今度被召出候一件等に付、彼是評說も御座候哉与及承候者、不奉泥可奉申上旨、被仰渡之旨奉畏候。評說仕候處は、山城・大炊儀は沙汰も不承。河内守儀は白蛾專ら贔負に而、今度被召出候場に至候樣に取々申。尤何れよりも之贔負有之而も、誠にヶ樣に儒者等も被召出、格別學文之趣御穿鑿之儀者誠以難有儀、第一風俗直りにも相至り可申与、心御座候者は人々申合候。然ハ内にも易學之儀、勿論聖教之儀には御座候得共、當時世人專取違仕、陰陽師之樣に奉存候者多ク相聞申、御年寄中之内にも當物抔迄之稽古に而、御政務之足りに相成間敷樣に相見へ

申与之評議も御座候。或は又易經之儀は、天人地合躰萬事易中に洩る事無御座、聖教隨一之儀にに御座候得共、當時之風俗に而は御役人等之手近く用立申間敷、先法令之糺或は古代之事跡を知て今に引合、經濟之道を能知り申儀、指當御役人中用立可申、其上に勿論易經之趣に而、其行天道之規に不違事を能學有之候者、手近く用立可申与之評議仕者共御座候。右風評之趣奉申上候。

一、御筆之物幷御對印御指札奉返上之候、以上。

亥十月廿四日　　高品五郎兵衛　判

十月廿五日。學校造營に付年寄本多安房守に土地の寄附を命ず。

〔政隣記〕

十月廿五日、今般學校御造營に付左之通手傳御賴被仰出。

四百坪田畠高に而三百貫目餘　　本多安房守

十月廿五日。忠義孝心等により嘗て賞賜せられ現に生存する者を錄上せしむ。

〔政隣記〕

是迄忠義孝心等之者には、從御上御褒美被下置候者は勿論、支配切に而褒美等爲取置候者、幷

寬政四年五月廿一日條參照

御家中之人々家來末々、町・在等にも前段之趣に而褒美等さゝせ置、未存命有之者に相しらへ、変名幷年附暨行狀等之様子、委細書記早速指出可申事。
右之通被仰出候條、被得其意、組・支配之人々被申渡、組等之内裁許有之面々者、其支配にも相達候様可被申談候事。

辛亥十月廿五日

別紙御用番玄蕃助殿御渡、御一統に私より可申談旨被仰聞候に付、則御渡之覺書寫一通指進申候。御同席等御傳達被成、落着より御返可被成候、以上。

十月二十五日　　津田平兵衛（定番頭 御用番也）

御用番諸頭連名宛様

十月廿六日。前田治脩、齊廣と共に石川郡粟ヶ崎等に放鷹す。

〔政隣記〕

十月廿六日九時、御供揃に而、七ッ屋口より粟ヶ崎筋・宮腰口迄御鷹野、龜萬千殿御同道。御獲物御拳に而雁一、御鐵炮に而雁二羽、幷御餌指竿突之雉子四羽有之。六時過御歸殿。

十月廿六日。道中筋往來の者にして先觸を出さゞる時は傳馬・人足を提供せざるべきことを告ぐ。

都而道中筋往來之面々、先觸可有之儀に候處、先觸無之人々も有之故、於宿々人馬指支候趣相聞候に付、以來は都而往來共、一統宿々江人馬先觸可指出旨、公儀より相渡候御書附之趣、寶暦八年本多遠江守等より一統相觸置候通に候處、近年先觸無之分多有之。或者先觸有之人々も、先觸之通人馬取不申分も有之儀に付、以來先觸無之人々江は、傳馬・人足とも不指出樣宿々江可申渡旨、御郡奉行別紙之通承屆候に付、右寫相越候條、被得其意、組・支配之人々江被申渡、組等之内裁許有之面々は、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

十月廿六日　　　　本多玄蕃助

栂喜左衞門殿

私共支配所、宿々格合往古与相違之儀御座候に付、夫々相糺候處、御家中幷寺社等、他國・遠所等往來之面々、近年先觸無之分多有之、或は先觸有之面々も、先觸之通人馬取不申面々も有之に付、餘り候人馬數割相詰罷在、空敷入用に無之候而は、近村助馬・助人足迄も甚だ迷惑仕候。就中先觸無之面々、右除置候人馬理不盡に取上、往來仕者も有之。大勢旅行之節は殊之外混雜仕候族御座候。元來道中往來之面々、人馬先觸可有之旨、寶暦八年十一月本多遠江守殿等より被仰渡之趣も御座候。依而自今以後先觸寫宿々より私共手前江取立、相しら

ハ申候間、以來先觸無之面々には、傳馬・人足共不指出樣に、宿々に可申渡候。尤自然先觸前後に相成候儀も有之候者、附出之傳馬帳を以、指支不申樣傳馬等可指出旨。往來病者等には、前々之通人馬無滯指出候樣、是又申渡候間、此段御家中一統被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

亥六月二日

恒川七兵衞

小原五左衞門

橫山山城樣

十月廿七日。年寄等に蓮池庭の觀覽を許し且つその馬場にて乘馬を行はしむ。

蓮池庭は後の兼六園

〔政隣記〕

十月廿七日、年寄中に蓮池上御庭拜見被仰付、同所御馬場に而乘馬被仰付御覽。畢而於御亭御菓子・御吸物・御酒被下之。

十月晦日。金澤城白鳥堀の老松風雨の爲に顚覆す。

是月は大盡なり

〔政隣記〕

天章院は本多政行

十月晦日、暁風雨強く候處、外御廓之内白鳥堀岸に有之松根覆り、鎗留番所之前通りに倒れ、依之御年寄衆等者河北御門より登城、其外者倒れ候枝之間より往來不支。是餘程之大木故也。于時又十二月廿三日曉にも、烈風雪に而同所之大木松根覆り、右同斷之事。

十月。老臣本多安房守聖堂建設の爲資銀上納を命ぜらる。

[天章院樣御筆物寫帳]

一、去十月廿日聖堂御手傳被蒙仰候御書立左之通。

今般學校被仰付候所、御入用高御不足御座候に付、御自分に聖堂御造營御手傳御用被仰付候。聖堂江御指急も不被成候間、追々銀納可有之候。此段可申達旨御意候。

十　　月

十月。金澤の商人山科屋庄九郎の僕八兵衞篤行を以て賞せらる。

[加能越良民傳]

石川郡加賀鶴來邑農八兵衞。自少志篤謹。及長來金城。爲賈人莊九郎家號山科屋奴。莊九郎初家富財貲。後漸衰落。終至喪家財并僦居焉。八兵衞痛惘悼之。雖力無可以辨給萬一。而旦夕焦思殫精。思一期興運而恢復祖業基趾。憂勤愈恪。莊九郎有兩女。其一蚤夭。自其初疾至終。八兵衞撫字調護之極厚。及其喪也。哀戚見乎面。殆如亡所生也。莊九郎哀其悃愊如此。嘗諭之曰。

凡人之遇否塞而屯蹇沈滯也。而猶所以底節困享者。亦欲追時樹身也。然非其地樹之不生。故其所以處身不可不善擇焉。燕雀尙擇棲。矧於人乎。汝之忠實。何往奚仕而不善遇焉。汝是之不圖而長爲貧家奴。非計之得也。八兵衞辭謝曰。敢不敬受敎矣。雖然吾一委身於人。而無復貳之志矣。幸獲不負舊日異恩而犬馬之齒沒于此。則願莫過於此。終不聽。每與俸金固辭不受。終始而一。寛政辛亥十月。街令召八兵衞。畀米若干苞。賞之。

十一月五日。前田治脩近臣をして堂形馬場に騎射を行はしむ。

〔政隣記〕

十一月五日、於堂形御馬場騎射御覽、御近邊御表頭分・御小將等、泰雲院樣御在世之内騎射稽古被仰付候者之内へ被仰付、且又持馬右等爲御用諸組より指出候者へ、右騎射見物被仰付候。人々御禮者御近習頭を以其人々より申上候事。

十一月廿六日。小松御城附足輕池田市右衞門孝行を以て賞せらる。

〔袖裏雜記〕

小松御城附足輕池田市右衞門儀、大聖寺足輕窪田卯兵衞せがれ之處、右足輕杉坂甚丞實いとこ之處、甚丞せがれに仕、同足輕池田平右衞門養子に願、平右衞門年寄御奉公難勤、天明四年八月立替願之通申渡被召抱候。平右衞門其節法躰仕、且那寺日蓮宗立像寺弟子に成、名茂

了山与改、立像寺法類之内小松妙圓寺無住に付、留守居旁罷越暮度旨申、市右衛門色々指宥候へども、達而罷越度旨望、一類示談之上任其旨候。妙圓寺貧寺に而了山獨暮に罷在、今年辛亥也迄八ヶ年之間、市右衛門非番日毎に右寺へ罷越、食餌認等其外坐臥之儀、無殘所大切に心を添孝養仕、時折節珍敷品有之候へば持參了山へ與へ、多分見舞候節菓子類品、分限相應少々充求持參與へ、或安宅浦水戸塞候節、水戸明人歩裁許被仰付、其日往來共風雨强、餘程夜に入罷歸、夫々案内等仕廻、了山居寺迄者程遠候へども、土足之儘直に罷越候躰。隣家之者暫休息可然抔申候而も、老親之事安否無心許迚、先見廻に參、風雨・雷・地震・洪水等之折節者、夜更候而も其時々必見廻、其外御用私用共少に而も遠方へ罷越候節者、罷歸次第了山方へ罷越候。右等孝心之趣了山甚悦、折々小頭等へ咄候。元來市右衛門不勝手之處、了山居寺甚貧に御座候に付、飯米其外諸入用悉皆市右衛門より辨遣候。惣而了山分入用之品者、一類共等彼是斷候而も一向に賴、自分之儀は萬端堪忍仕、了山望に任申候。了山折々市右衛門宅へ罷越候へば、何廉深切に饗應仕候樣子を隣之者見聞仕候。當四月了山市右衛門方へ參候途中に而煩出、市右衛門承之其所へ走付、脊負連來介抱仕候へども爾々不仕、看病御暇願、晝夜大切に看病。市右衛門獨身暮故、假人雇も仕置候へども、二便扱等自身手に懸候躰、近隣之者見受候。尤藥・飲食等、時々市右衛門相試與へ候。了山七十餘歲、其上大病に而無程相

果、市右衛門愁傷不大形、死後分限相應に葬候。於葬所市右衛門愁傷之躰、外人見に難忍候由皆申候。忌中每日香花相携墓へ參候。市右衛門廿一歲に而被召抱、今年迄八ヶ年御奉公懈怠不仕、御用方心懸宜、隨分全相見候。仲間共馴合和順に而、仲間一統實躰者之由申聞候旨等小頭紙面、小松御城番より十月廿四日指出之、入御覽、被仰出之趣有之。左之准例を以申渡之趣調、十一月廿五日入御覽候處、翌日伺之通被仰出。

小松御城番へ

御增米一五俵　小松御城附足輕　池田市右衛門

先御切米都合二十五俵

右市右衛門儀、養父存命之內格別孝心之段達御聽、神妙被思召候。依之爲御褒美如此御增米被下之候條、可被申渡候事。

辛亥十一月

十二月廿一日。德川家齊夫人歲末祝儀として物を贈る。

〔政隣記〕

十二月廿一日於江戶、從御臺樣歲末爲御祝儀、御使御廣式番頭梶野平九郎殿を以、干鯛一箱御拜受。同日御廣式にも從公方樣紅白縮緬二十卷、從御臺樣も干鯛一箱、上使御廣式番々頭

是月は大盡なり

松田小兵衛殿を以御拜領之事。

十二月廿五日。金澤野田寺町實成寺燒失す。

〔政隣記〕

十二月廿五日晴、野田寺町實成寺不殘燒出、門迄殘、八時前燒出、同刻過鎭火。隣妙法寺ゟも火移候得共防留候。右に付御年寄衆等登城。

十二月晦日。諸頭の勤向に關する條目を調査提出すべきことを命ず。

〔政隣記〕

付札、定番頭ゟ

諸場・諸役所ゟ前々より被仰出候御條目等、後例に可相成品々不洩樣相しらへ、帳面に調、夫々諸役人より、直に横濱善左衞門等迄、封じ物に而相達指上可申旨被仰出之趣、去年七月兩度申渡候通に候。然處諸頭等よりも右御條目等調出可申旨、重而被仰出候條、被得其意、都而先達而申渡置候振合を以、一統可被申談候事。

十二月

右今晦日、定番頭御用番津田平兵衞より例之廻状出。

十二月。武器調達の費用として本年以後別立米を支出せしむ。

[御朱印御書立其外被仰渡之品々記]

一、左之覺書今枝内記殿・大學ゟ被相渡候事。

御算用場奉行ゟ

御武器出來爲御手當、以來年々二百石・三百石之内可相渡旨、此度被仰出候。右ハ堂形米二百石別立之分代銀圖を以、三百石之節ハ御算用場引足、是又代銀圖りを以可被相渡候。當年ハ先二百石相渡候樣被仰出候事。

右之通可申渡旨被仰出候條、可被得其意候。米價相場五十目之圖を以、毎歳御家老方ゟ可被相渡事。

亥十二月

寛政四年

正月朔日。前田治脩金澤に於いて年頭の拜禮を受く。

[政隣記]

元日、終日折々雪降。今朝人持頭分六半時より登城、於御大式臺御帳に附、溜々に罷在、御

小姓中等五半時揃に候事。

五時過檜垣之御間に御出、御年寄衆・御家老中・若年寄中獨禮被爲請、近年之通諸大夫衆も大紋等着用無之、長袴着用御禮。

四時過重而御出、柳之御間に御着座、人持・頭分都合百六十七人獨禮被爲請、献上物組頭格以上御太刀馬代、新番頭已下青銅百疋。右相濟、重而八時前同御間に御出、六組御大小將幷御用番支配、幷御射手・御異風小頭等、都三十人頭新番組・御醫師・御儒者・坊主頭、夫々列之通、一統座附之御禮被爲請、献上物八百石以上青銅百疋、右已下領知に應じ候事。

但、年寄衆等御禮相濟、於御居間書院鶴之庖丁御覽、御料理頭勤之。人持頭分御禮相濟被爲入候節、御居間書院於三之間、御近習頭等支配之御近習平士一統御禮、御襖戸建之、右人々爲退、於舟之間御表小將一統御禮被請。將又御年寄衆於席、御家老衆同席に而御雜煮・御吸物・御酒被下之、かよひ坊主。若年寄衆者當席に而右同斷被下之。夫より鶴之御吸物等頂戴可被仰付旨、御近習頭を以被仰出、年寄衆於席御家老衆も同席に而被下之。若年寄衆者當席に被下之。かよひ坊主。

正月二日、例により松囃子を行ふ。

〔政隣記〕

正月二日、折々雪降、積雪尺餘。今日御馬廻組一番座六半時揃、二番座五半時揃に而、五時柳之御間ゟ御出に而、一番座一統御禮被爲請、重而四時前二番座御禮被爲請。且昨日御用支之人持・頭分幷御大小將、今日一番座上に列し御禮申上候事。

但、近例之通御間狹に付、定番頭・御馬廻頭・御小將頭・新番頭・御步頭一人宛伺公。御奏者番は不殘罷出、定番頭上に列し伺公。內一人者御禮人上に着座、何も年頭御禮申上候段披露勤之。

〔政隣記〕

正月二日夜就御松囃子に、七半時頃より各追々登城、六時過柳之御間ゟ御出、御吸物等御かよひ御表小將、御銚子役加藤嘉盃、御加辻八郎左衛門、御流御銚子御大小將平田磯次郎・人見吉左衛門・中孫十郎・岩田是五郎、御加中村織人・不破駒之助相勤之。御年寄横山山城殿・前田大炊殿・村井又兵衛殿・本多玄蕃助殿御吸物、御盃・御肴御手自被下之、若年寄衆御取合を以返盃有之。御家老衆・若年寄衆ゟ者御盃御指下し、御肴御手自被下之。

但、本多安房守殿等四人者當病等にて登城無之。

右相濟、御流頂戴寺社奉行前田修理より物頭並御近習御用勝尾吉左衛門迄、前々頂戴之役々

四十三人、御肴御年寄衆御挾ミ被下之。且役者共江も、於御目通御酒・取肴被下之、諸橋權進江猩々相濟於御目通若年寄西尾隼人御目錄持出被下之、同人御禮取合言上。六半時過夫々御規式相濟。御番附左之通。

高　砂　權　進　　四　海　波　權　進　　松　高　き　宮　門

東　北　宮　門　　此間小謡數番、御流頂戴相濟候所に而猩々御囃子始。　猩　々　宮　門

右御規式に者、御奏者番以下御歩頭迄伺公無之候。且役者迄も就御目通給仕御大小將、將又役者指引御大小將神子田五郎介・氏家九左衞門。

正月二日。前田齊敬使者を柳營に上りて太刀馬代を献らしむ。

〔政隣記〕

正月二日於江戸、佐渡守樣年頭爲御禮御登城可被遊筈に候處、少々就御風氣に御斷。依而御太刀馬代御獻上御使者、御留守居人持組織田主稅登城。且同四日五半時揃に而、在府頭分以上幷御附之分平士、佐渡守樣年頭御禮被爲請候事。

正月三日。前田治脩大德院及び寶圓寺に詣づ。

〔政隣記〕

正月三日、快天之處晝より風雪强。今日一番座御禮人六半時揃に而、昨日當番等に而相殘候

御馬廻組・定番御馬廻組・組外、二番座五半時揃に而寺社奉行支配平士諸組小頭幷與力・御大工頭迄一統御禮被爲請、御直に裏御式臺御杉戸より表御式臺通り御出、天德院・寶圓寺ゟ御參詣。御供裝束御步以上布上下、御步小頭以上熨斗目着用。右御出之節御禮人溜御廊下に而、御役者・醫師・町人之内御通り懸之御禮、披露御奏者番。年寄中御禮人溜に伺公。御表御式臺鑓板ゟ御家老中、階上御大小將御番頭・同御横目・御大小將列居。御先立若年寄、四半時頃奥之口より御歸殿。

但、五半時御供揃に而同刻過御出。

正月四日　打初・射初・乘馬初の儀を行ふ。

〔政隣記〕

正月四日、於檜垣之御間御禮人隱居之面々幷息方（頭分以上嫡子・御年寄衆二男）六半時揃に而相揃候處、少々御痛邪に被爲在、依之於柳之御間、昨日御用に而相殘候定番御馬廻等右面々一統御禮被爲請。

但、四時過御出、一先御入、重而四半時御出、二切に被爲請。

〔政隣記〕

正月四日今朝三之御丸に而御打初有之。村井又兵衞殿御出、幷御異風裁許御横目一人、着到

役御大小將一人罷出、五半時過相濟。御射初九時前於柳之御間相始り、吉田家迄御覽、御入、御射手中不殘相勤、年寄中御見分、九時過相濟。於御臺所右兩裁許御射手・御異風中江、御雜煮・御吸物・御酒・御取肴被下之、御横目・着到役江も同樣被下之。

但、御射手裁許并着到役ニ罷出候儀、御打初ニ同斷。

御乘馬初御居間先於御馬場被爲召、相濟、於御臺所御馬奉行御前料理等被下之、御馬役江同斷。

右之就御規式爲御祝儀被下物御目錄、於檜垣之御間頭分江者御用番渡之、平士江者御用人渡之。指引御横目。且又御射手裁許・御異風裁許并御馬奉行江者御上下一具宛。吉田才一郎・吉田權平江者染物二端宛、御異風・御射手金三百疋宛。御馬役江者綿二把宛。其外夫々前々之通被下之。

正月十二日。前田治脩如來寺及び寶圓寺に參詣す。

〔政隣記〕

正月十二日五半時御供揃に而、五時過御裝束に而奥之口より御出、如來寺江御參詣。夫より寶圓寺江御參詣、御裝束被召替御拜、表御式臺より御歸殿。其節十村・山廻共裏御式臺に並居、御通懸御目見。尤之御間新御廊下に而、御用相勤候町醫師等右同斷、披露御奏者番。

暫年寄中一人伺公。右御禮方に携候人々熨斗目、其外者都而常服、且御歸之節年寄中者服紗小袖・上下に而、表御式臺階上ゟ被罷出、御家老役は常服に而階下ゟ被罷出。若年寄は階上に有之、御先立被勤。御近習頭等內一人敷附ゟ出、御駕籠之戶開之。配膳役・御刀持同所ゟ出、階上中舖居之下ゟ出有之、御間之內御供。將又御鎗懸は虎之間ゟ入置、其跡に屛風圍出來。當番御大小將御番頭・御大小將中列居、尤常服。下之方少々引離、御算用場奉行・御郡奉行・改作奉行、尤のしめ着用列居之事。

但、寶圓寺に而御手廻白丁爲脫、其外は上下等之儘御供之事。

正月十二日。金澤城に追儺の規式を行ふ。

〔政隣記〕

正月十二日、同夜御追儺御規式。御例之通御年男會所奉行內藤甚左衞門勤之。拜領物、始而相勤候に付御上下一具。

但、御年男之外常服之事。

正月十六日。當春參覲道中の役人を命ず。

〔政隣記〕

正月十六日より、當御參勤御道中宿割所、每日新御廊下に而建、當分宿割御小將兩人出席。

当春御参勤之節御道役付

御旗籠取次　眞田佐次兵衛
成田長太夫
前田孝次郎
三宅平太夫
御表小將加人歩御供　平岡次郎市
小泉權之助
岡田德三郎
中村織人
池田三九郎
一宿御先　中　孫十郎
三浦重藏
笠間他一郎

右之通伺、被仰出候條、被得其意、御承知之驗可有御判形候、以上。

子正月十六日　村田甚右衛門　判

右之通に候處、岡田德三郎痛出來に付、閏二月廿一日一宿御先德三郎代、歩御供三浦重藏且御表小將林平二郎病に付、代加人歩御供笠間他一郎申談有之。他一郎代一宿御先永原七郎右衞門ゟ申談有之。

正月十七日、前田治脩金澤城内東照宮及び神護寺に參詣す。

〔政隣記〕

正月十七日五半時御供揃、御裝束に而御宮・神護寺ゟ御參詣、尤服御改之段昨日被仰出。今朝五時過奥之口より御出、唐門より土橋御門・七十間御門・松坂より、同半時頃御歸殿之事。

正月十九日。具足の鏡餅直を行ふ。

〔政隣記〕

正月十九日御例之通御具足御鏡餅直就御祝、御雜煮等御城詰合一統頂戴被仰付、御禮御奏所奉行ゟ申述、右御作法等左之通。

小豆煮雜煮餅　小かつを、朝漬大根

砂糖鉢盛　但御歩已上は椀之内に入、足輕小頭以下は砂糖不入。

吸物　鯨ごばう、山せう。　但足輕小頭已下は不被下之。

御　酒　但一統に被下之。　御取肴巻鯣　但平士已下に切鯣、足輕小頭已下は鑿鯣。
右御年寄中等は御席に而、坊主給仕に而御頂戴、御禮於同所御臺所奉行ゟ被仰聞。人持・頭分・御近習頭平士等以下夫々御臺所之内に席札打、其所々に而頂戴之事。

正月十九日。前田治脩。醫業を爲す者に治療を親切にすべきことを告ぐ。

〔御定書雜記〕

正月十九日左之御代筆物被渡下、可申渡旨御意。

醫業者貴賤となく人命を預り候儀に候へば、療治方大切に可心得段肝要之處、近年醫者之内心得違候者は、町・在抔之療治には漫りに緩怠に仕候に付、其會釋に迷惑いたし、病用賴兼候躰等承之、不心得之事に候。輕き者は療養行屆兼候ものに候へば、別而親切に療治可仕儀に候條、以來其心付肝要に候。若不心得之儀有之候はゞ、急度可申付候。

右之通可被申渡候事。

子　正　月

正月。前田治脩。自今春夏の候に死刑の執行を廢すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

今月□日、春夏之間死刑被仰付間敷旨、公事場等ゟ被仰出有之。依而左之御覺書、御算用場

は御用番大炊殿御渡之。

付札、御算用場奉行は

死刑之儀、當分春夏之間者被仰付間敷、秋冬之内可被仰付候。勿論何ぞか品有之分者格別に候。是等之儀に付追而被仰出儀も可有之候得共、先右之趣に相心得候樣被仰出候條、可被得其意候事。

壬子正月

正月。御目見以上の士にして十ケ年以上皆勤の者を每歲正月上申すべきことを命ず。

〔政隣記〕

御目見以上之人々十ヶ年以上皆勤仕候者、每正月中書出可申候。但先達而十ヶ年以上皆勤之者夫々書出候得共、相洩候者も有之候者是又書出可申候。

右之通可申渡旨被仰出候條、不相洩樣夫々可被申談候事。

正　月

此間御渡之御書立、御目見以上之人々皆勤每歲正月書出候樣被仰出之趣に付、去年迄十ヶ年以上皆勤之人々去年書出候分者、重而十ヶ年皆勤仕候者、其節書出申儀と奉心得候間、此段

御申上置候様致度旨横濱善左衛門に申達候處、其段可申上旨同人被申聞候、以上。

正　月

二月朔日。新井白蛾、學校の學頭を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

二月朔日、新井白蛾學頭被仰付、役料五十石被下段、御用番申渡濟候上、於御居間書院御前へ被召候事。

二月二日。學校の建築成る。

〔異本三壺御譜〕

二月兩學校落成。二日假に小典あり。

〔棟札之寫〕

乾兌離震。巽坎艮坤。

曩初泰雲院殿。有學校造營之命。而至治脩公金澤靈地大成殿之基址既定。而教養民間之人材。紹先君之大統。今玆寛政三年。有明倫堂造營之嚴命。而今冬十月初執斧。百工相與圖焉。同十二月建柱。勵勤其業進之。同四年二月遂成就。依各書姓名納諸梁上。仰願無風雨水火雷震之難。而長此賜於國家安全之基云爾。

治脩公御代。

御奉行　奥村河内守平尙寛・横山山城小野隆從・前田大炊菅原孝友。

主附　大音主馬藤原厚續。

御作事奉行　矢部八郎右衞門藤原成尺。

御横目　小塚齋宮橘行正・疋田半次源直强。

內作事奉行　谷猪左衞門以直・脇田瀨兵衞藤原尙尺・松野源左衞門藤原恭近。

御大工頭　淸水次左衞門峰充・淸水多四郎軌克。

御大工　篠田七郎兵衞政博・中村八兵衞知之・松田與助直高。

二月六日。前田治脩、齊廣と共に金澤郊外大豆田口に放鷹す。

〔政隣記〕

二月六日九半時御供揃に而、同刻頃御出宮腰口大豆田迄御放鷹。龜萬千殿御同道。暮過御歸殿。御獲物御拳に而小鴨一、御鐵炮に而雁二御打留被遊候事。

但、御休所觀音堂村平右衞門方之事。

二月八日。佐藤勘兵衞、武學校方御用を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

佐藤勘兵衛武學校方御用被仰付候間、可申渡旨二月七日被仰出、翌八日申渡、追而御前へ召候也。

二月十三日。前田治脩金澤郊外大樋口に放鷹す。

〔政隣記〕

二月十三日九時御供揃に而、河北御門より御出、大樋口に御放鷹。森下村邊に而鶴一羽御鐵炮に而御打留、暮前御歸殿。

二月十五日。前田治脩金澤野町郊端に放鷹す。

〔政隣記〕

二月十五日九時御供揃に而、同刻過御出、野町油屋小路より御放鷹、暮六時過御歸殿。御獲物鶴二羽、御鐵炮に而御打留。

二月十六日。能美郡大長野村等に於いて捕鳥を禁ずるの令を解除す。

〔政隣記〕

能美郡大長野村　小長野村　野田村　荒屋村　長野田村　平面村。

右村々鶴泊之所々に付、安永六年殺生御停止被仰付置候得共、御用に無之、最前之通猟場に

月十六日の令は殺生禁止を解除せしものなりその後更に禁止したるなるべし

被仰付候條、此段御家中之面々等一統可有御申觸候事。

子　二　月

別紙若年寄中紙面寫相越之候條、被得其意、組・支配之面々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配ゟも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可得其意候、以上。

二月十六日　　本　多　玄　蕃　助

諸頭御用番一名宛連名殿

二月十六日。聖堂造營せらるべきを以て、諸士に用材を寄進すべきことを諭す。

〔政隣記〕

別紙若年寄中紙面寫相越之候條、被得其意、組・支配之面々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配ゟも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

二月十六日　　本　多　玄　蕃　助

諸頭御用番一名宛連名殿

粟ヶ崎廻りとは大河端村より馬附にして金澤堀川口に入るゝなり
本年十月の條參照

付札、定番頭

今般聖堂就御造營、御材木多御用に候。右者格別之御用木之儀に候間、御家中之人々居屋敷等に、松・杉・栂之類、自分用事之心當無之分、御用に可相立大木致所持指上度志之面々も有之候者、不依本数多少に、頭・支配人に申出、御用に相立可申候。

右之趣被得其意、組・支配之人々に無急度可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配にも相達候樣可被申談候事。

右之趣一統可被申談候事。

子 二 月

二月十六日。石川郡宮腰町奉行、海運の貨物を大野・粟ヶ崎に着津せしむることなかるべきを求む。

〔粟ヶ崎湊詮議書〕

私支配宮腰浦に可致入津諸品、大野入津粟崎廻相成候に付、先役恒川七兵衛在役之砌より御達申上、暨私儀當役に相成候而も、去年已來度々御達申上、御別席等においても尚又申上候へども、去年中當春に至り候而も、今以何等之被仰渡も無御座候に付、支配町中下々之者共困窮に候儀は、先達而より再往御達申上候通に難澁至極行詰申候。既に去暮抔御貸米返上方

指支、厳重申渡置候得ども今以取立不申、上納不得仕族に御座候。當春に至り候而も一向渡世も不得仕程之者多御座候に付、頃日身元相應之者共ゟ申付、粥など爲焚、一日々々爲取續申族に御座候。別而馬借之者共は累年困窮仕罷在候上、前段之通諸着船無數に而、潤色に可相成賣荷物等如形無御座候に付、驛馬も甚減少至極仕候。然共御用之儀は、往古より御定之通九十六疋之割合を以、唯今迄に相勤來申候へども、前文之通りに御座候へば、當時之趣に而は迚も當春御參府御用之詰馬等も相勤得不申候間、是又御達申上置候。追付海上乘船にも相成候時節に相向候間、其砌に至り候へば諸荷物上げ下げ運送之賃錢等を以渡世も可仕候へども、當時之處甚急難至極に御座候。然共前々より御達申上置候通、大野・粟ヶ崎兩村着船方年々増長仕候處、當春も又候御詮議中に而、落着被仰渡無御座内着船之時節に至れ、大野・粟ヶ崎近年之振合之通多諸着船等有之、支配之者渡世もいたし兼候儀も御座候而は、風与破談之儀も出來仕候而は甚迷惑至極仕候。其外御縮方之儀は、委曲先達而御達申上候通御座候條、御定之通宮腰浦一方着之儀早速被仰渡候樣仕度奉存候。將又御家中諸士中能・越より取寄米、毀賣米に相成金澤爲用米商賣人より相廻候入津米、追付御算用場へ相願候時節に御座候間、大野入津之儀は格別、粟ヶ崎廻之儀は御聞届無之樣急速御算用場ゟ被仰渡可被下候。尤大野着船之俵物等、都而舊格之通宮腰馬ゟ附送り候樣、是又被仰渡可被下候。左候へば第

一御締にも可相成儀と奉存候。就中去冬以來米穀高直に相成、當年之儀は下々之者共取續方甚以難澁之年柄に御座候間、何分右一件之儀早速被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

子二月十六日　　伊藤權五郎

本多玄蕃助樣

二月十七日　聖堂造營の係員を命ず。

〔政隣記〕

二月十七日左之通。

聖堂御造營御用被仰付。

井上萬右衞門
吉田八郎太夫
矢部友右衞門

外作事奉行

脇田瀨兵衞
谷猪左衞門
松野源左衞門

二月廿一日。前田治脩金澤城內を巡視す。

〔政隣記〕

二月廿一日八時之御供揃に而御巡見、奥之口より御出、五十間御長屋幷橋爪御櫓御覽、唐御門より裏口御門・土橋御門・甚右衛門坂御門邊御見通し、御宮坂御門・西町口邊御見通し、石川御門續御櫓御覽、南御門・東之丸八枚戸御覽、御本丸・新丸御立歸、埋御門・松坂御門・玉泉院樣丸・金谷御門、堂形御馬場御入口より御見通、御立歸、奥口より御歸殿。

二月廿四日。聖堂造營の手斧初を行ふ。

〔政隣記〕

二月廿四日聖堂御手斧初有之。草之御規式に被仰付。依之御大工素袍・烏帽子着用、供物鯉・雉子等、御祝黑大豆強飯・御酒・御吸物被下之、下々一統江者右強飯・鱈・御酒被下之。

二月廿六日。前田治脩金澤大樋口に放鷹す。

〔政隣記〕

二月廿六日九時御供揃に而、同刻過御出大樋口江御放鷹、暮頃御歸。御獲物御鐵炮に而しこ一・かしら二御打留被遊候。今日之御鷹野者、鶴居候之御案内に而、内一つ者地道御出之處、鶴揚羽早く御寄せ成兼候に付御手に不入候事。

但、今日淡雪頻に降、御蓑笠・御馬也。

むめは無日

二月。十村・新田裁許等が役儀誓詞の際に於ける御算用場内着席の位置を定む。

〔岡部舊記〕

御領國御扶持人并十村・新田裁許、役儀誓詞之節座席、已來御算用場御横目席むきに敷居之外通之二疊目中程へ誓詞箱出置等に候間、誓詞人共心得に而可致出座候事。

寛政四子二月　改作奉行

閏二月二日。玉川孤源太の小者誤つて金澤城内の堀に墮つ。

〔政隣記〕

閏二月二日夜六時過、寺町邊に當り火事沙汰有之。御月番等登城有之候處、右火事上口出火事与云々。但右火事に付、御表小將横目玉川孤源太も登城之處、孤源太家來小者三助与申者、橋爪御門外御堀ゟ落入候に付、三ノ御丸泊御番御馬廻組中黒多宮・金谷與左衛門・木村平太夫家來共指出、網を下げ爲取付揚候段案内に付、右三助二ノ御丸新口ゟ呼寄、泊番組頭武田喜左衛門・御横目丹羽六郎左衛門見分、樣子相尋候處、主人に後れ闇紛れに不斗踏外し落、一旦沈候に付水は少々飲候得共、怪我等不仕段、惣身泥にひたり、大に凍へ候躰に而、右等之

趣やう〳〵に申聞候。併歩行は相成候躰に付、孤源太若黨指添宅に相返、右之趣喜左衞門・六郎左衞門より口上に而、御近習頭宮井典膳を以及言上、御城代には翌三日御出席之上兩人より御達申候事。

閏二月六日、諸士以下に學校に就學すべきことを諭す。

〔異本三壽御譜〕

爲四民教導、泰雲院殿學校可被仰付御内意候處、御逝去に付、今般右思召を繼文武之學校申付候。依之新井白蛾儀學頭申付、其外諸藝師範人等右用追々可申付候條、諸士は勿論町・在之者迄茂、志次第學校へ罷出習學可仕候。

右之趣一統可被申渡事。

寛政四年閏二月六日　御朱印

今般御書立を以被仰出之趣寫相達候條、拜見候而奉得其意、志次第學校に罷出、習學可仕事。

右之趣被得其意、組・支配之人々にも可被申聞候。組等之内裁許有之人々者、其支配にも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

壬子閏二月

〔岡部舊記〕

別紙前田大炊殿御渡一統可申談旨就被仰渡候、則寫一通指進候。御承知被成、御同役御傳達、御組・御支配御申談可被成候。早速御順達、留より御返可被成候、以上。

閏二月十二日　池田續平

菊池大學等五人樣

學校ゟ罷出申度人々は、頭・支配人迄可相達旨等、先達而申渡候通に候。右は當廿五日迄に、不破和平等ゟ名書可指出候事。

壬子閏二月

右之通池田續平より申越候に付、寫相達候條、各支配所不相洩樣被申渡、罷出度人々有之候はゞ、名書取立、右日限迄各より不破和平等ゟ直可被相達候、以上。

閏二月　御算用場

栂喜左衛門殿

神保權五郎殿

右之通申來候條、得其意、罷出度者有之候はゞ、日限迄可書出候、以上。

栂喜左衛門

神保權五郎

今とは明治廿四年

〔金澤古蹟志〕

金澤學校創立舊地

其舊地は即ち横山氏舊第の地なり。其舊圖を見るに、今金澤神社の境内より、長谷川氏の第地及び兼六園の地内へかけ、學校の境内と見えたり。一舊家に所藏せし學校境内の繪圖を縮寫して左に載之。圖略。

右繪圖の如く、本多氏邸地の向角に入口の門ありて、門脇腰掛の傍に、今金澤神社境内なる金洗澤の靈水ありといへり。故に三州志來因概覽附錄にも、此地は古昔金澤起源の名蹟にて、今も尙金澤水あり。金城と成ては横山々城・同右近・奥村河内の邸に賜る。此三第元祿九年に上り地と成、其後數十年闕地たる處、寛政三年九月より學校興造、翌春落成す。今年京師より儒者白井白蛾を召下し、白蛾に學校の指法を命ず。明倫堂十五間に七間を建つ。扁額は白蛾之を書たり。文學校の境内左の方百五十一間右の方百二十三間あり。武學校の地勢より八尺許高し。明倫堂後の地は復低し。經武館に九間に七間を建つ。扁額は前田直方之を書たり。馬場・射場あり。馬場は幅十間延百間弱しと云々。然るに文政二年竹澤殿經營の事に付其隣地へ遷し、同五年仙石町へ再轉すとあり。平次按に、兼山秘策に載たる享保六年六月四日室

新助の書簡に、前月廿四日木下平三郎へ有馬兵庫を以、加州には學校有之哉と御尋。平三郎、學校の儀は承不申。室新助存知可罷在由申上候へば、明日新助同道登城可仕旨に而、翌廿五日同道罷出候處、加賀守多年學問を好み被申儀、國中に學校歟又は教授の場所も有之哉之旨御尋に付、若年の時分より學問を好み被申候へども、學校等の儀は遠慮も有之候哉、終に相極不申旨申上とあり。右は徳川家八世吉宗公よりの御尋也とぞ。或云綱紀卿の時金澤に學校興造の尊慮ありて、既に建築の内命ありしかど、遂に其成功をなさずして薨逝也といへり。然るに綱紀卿薨去より六十八年といふ寛政三年に學校興造の擧に至れり。是金澤學校の濫觴也。右は舊藩十世權中將重教君の發起にて、十一世參議中將治脩卿その遺志を繼いで創造せられたるもの也。

閏二月十五日。前田治脩金澤郊外野町口に放鷹す。

〔政隣記〕

閏二月十五日九時御供揃に而、同刻過御出、野町油屋小路より御放鷹。暮六時過御歸殿。御獲物鶴二羽、御鐵炮に而御打留。

閏二月十八日。町・在の者就學するもその本業を忽せにすべからざるを諭す。

〔司農典〕

付札、御算用場奉行

今般學校出來に付、町・在之者迄も志次第罷出候儀被仰出候通に候。併商賣農業令入情、間暇に罷出可申候。若當業を怠り候而者、背御本意に候條、此段嚴重可申渡旨被仰出候。

壬子閏二月

右之趣被得其意、遠所町奉行・御郡奉行ゟ可申談事。

閏二月十八日

杉野多助

右之通御算用場より申來候條、被仰出之御趣意奉畏、請書付可指出者也。

前田源六郎

諸郡

閏二月二十日。百姓にして死亡するも自今郡奉行に屆出を要せざることを告ぐ。

〔司農典〕

前々者御郡百姓致病死候節、書付を以當役所ゟ相斷候得共、以來村肝煎病死案内之外及斷に間敷、百姓病死之儀者其方中迄承屆置可申候、以上。

子閏二月二十日　　　杉　野　多　助
　　　　　　　　　　前　田　源　六　郎

諸郡御扶持人・十村中

安永三年六月朔日の條參照

閏二月廿一日。前田治脩年寄以下をして蓮池亭を觀覽せしむ。

〔蓮池庭之圖〕

寛政壬子閏如月念一日教を奉り、蓮池の御苑を拜見させさせ給ひ、同席と同じく出づ。此日天晴朗なれば、暫く乘馬を御覽せられ、終りに再び召させ給ひ、猶苑中を隨意に見るべしと宣ひ、ここに宴を賜ふ。各逍遙するにおよんで、日既に薄暮也。抑蓮池の地は、遠く東南より聯り、連山遙々として帶の如く、西は堂形御馬場、夫より金谷に接續せり。巨木樹林陰翳し、松間に楓樹を多く生植して、大石は山上水道所々に苔むしたるが其數を知らず。泉水は南より注いで苑中に入り、池中深く回崖峨々として高く、磐石巖石を銜ておち、瀑布の濺沫樹石を蒙ひ、鼓の如く鳴りて苑中に滿てり。泉流は西南へ回旋し、竟りにまた西へ趣き、樹杪には鳥雀かけり、池には水鳥ここかしこに浮游し、鷺鷥は渚に一足を擧げ、魚は水草に傍うて潛む。泉上には反れる石橋を施し、泉流の行くところ、或は小島洲渚のある所、往々橋を設けざるはなし。瀧見の御亭の左右に橋あり。西に續いて八橋を擬して、また東には愛本の橋をなぞら

へり。池上には別館離亭あまたあり。中に就て瀑布に當り小島あり。爰に瀧見の御亭あり。凡地上険易高低あり。所々芝を敷て偏に山中のごとし。東北に當りて所謂蓮池の御馬場あり。此はとりに清泉ありて湧出す。うしろの斷崖には春艸青くして、此水中に細石を敷き、清流いさぎよく潺湲として、觀馬の御亭の中央に通ふ。扨その兩屋に跨りて橋を設けて、地上には細砂を敷て、晶々として明かに美し。右御苑の林泉のさま、喬木樹林、或は捨石の置き所、御亭の其中にも、往昔御淨手盃には、後藤家の彫など千緒萬端、その致景あげて言ふべからず。誠に瀛洲に在が如く覺ゆ。願ふにそのかみ侯家御心をよせられ、命ありて創造なし給ひ、世々次第に奇巧を加へ潤色ありて、如斯なりと思はる。更に一見の見盡すべきにあらず。況んや短き筆のおよぶべけんや。又夕陽かたむき、粗大なるうちにも認めしの事もあるべし。凡遠きより望めば、唯深林幽鬱にて、景色あるべしとは覺えず。近うして望み見て曠濶にして廣く、豁達にして闡明なり。君の恩賜を榮とし、また年を經ては忘れもせんことを恐るゝ故に、從侍のものに屬し、點して議り、心に存せるを側よりみづから指示して圖をなさしめ、その大略を記す。

同年臘月上旬日　　正　身　謹識

閏二月廿五日。學頭新井白蛾、平士以上の待遇を求めて拒絶せらる。

〔柳営雑記〕

新井白蛾學頭被仰付候處、和漢共左樣之職分者、相當之位格も御座候樣及承候。學校者禮義禮格可出之所に候所、平士に而は學校出座之諸學生も同役同格にては、一向重職被仰付候分別も無之候はゞ、敎導可仕共別無之候間、何樣之格式に被準可被下哉、此段宜被仰付被下度本願旨、寺社奉行へ迄白蛾紙面出。難承屆旨申聞可相返与伺、閏二月廿五日伺之通被仰出。

閏二月。江戸に勤務する諸士の衣服・參會等を節約すべきことを命ず。

〔政隣記〕

江戸表御式臺を初御表向、都而綿衣等麁服可致着用候。御見廻懸之御客等者、御給仕たり共綿衣等御貸着無之候間、勝手次第着用、御内輪相勤候人々は尤麁服可致着用候事。

但、前廉より相知候御客之節御給事、幷御供御使等之儀者絹類可致着用候。

一、江戸詰中於御貸長屋無益之參會無用之事。

一、餞別幷土産物堅無用之旨、前々被仰出候得共、違失之人々も有之躰に付、自今以後堅相互に指止可申旨、去々年被仰出候通猶更嚴重相守可申事。

一、足輕以下者御門外たり共綿衣着用、刀・脇指拵金銀相用申儀も可爲無用候事。

一、御家中家來若黨等衣類、不相應之族無之樣、主人々々より嚴重可申付候事。

右之大綱前々被仰出候得共、去々年より三ヶ年之間嚴重御省略被仰付候間、猶更急度相心得候樣可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々にも可被申渡候事。

閏二月

御式臺を初綿衣貪着無之候間、無泥綿衣可被用候。

一、聞番代被罷出候節も、小松絹之類可被相用候。尤聞番中にも相達置候間、無泥可被相用候。

一、火事裝束之儀も前々申談置候通に候條、其心得可有之候。若新たに被拵候人々も有之候者、はんくわい・こっんさい或黑服等之内可被相用候。

右之趣人々爲心得申達候條、御申談可有之候事。

閏二月

右横山山城殿村田甚右衞門に御渡之御覺書、并甚右衞門覺書共、御大小將聞番頭奧村十郎左衞門に甚右衞門より被相渡、則御大小將中に嚴重申談有之、其外江戸御供等之人々にも、夫々頭・支配より山城殿御覺書を以嚴重申談有之候事。

閏二月。村肝煎の選任を嚴にすべきことを告ぐ。

〔改作方年中行事追加〕

村肝煎納得方等之儀に付申渡之事。

村肝煎願方之儀者御定も有之、且前々申渡置品々近年其意を取失ひ、人々得方を以先侮易き小前之者を願出、或ハ人々贔負によつて親類・縁者・知音之者を申立、一村納得揃兼、代肝煎久敷相立不申村々も有之躰、沙汰之限りに候。人別相糺急度可相咎儀に候得共、是迄之儀者先令用捨候條、以来急度相心得、長百姓之内一村可取治宜き人柄之者を相願可申候。乍去實に長百姓之内肝煎可相勤人柄之者無之歟、無左共勝而働も在之、筋合宜、一村可取治者之儀は、時宜に寄小百姓之内たりとも相願候儀尤に候得共、其節ハ其方中手前に而も重々相考、格別之趣を以相願候段可申聞候。惣而代肝煎願以来六ヶ月を限、納得紙面可爲差出候。若無謂右限月及延引候者、組合村々肝煎等にも申渡、相應之者爲相選、其上其方中詮議之上相極願出し可申候。納又得方を申募り、一村納得之指障りにも相成候者之儀は、其方中立會相談所に呼出、無泥相糺、追而様子可申聞、品に寄當役より可及沙汰候事。

右之趣得其意、夫々申渡、人別請書付可取置者也。

子閏二月　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

閏二月。學校開始の際の作法を定む。

〔學校御開に付御作法之次第〕

一、學校御開に付、學頭新井白蛾ゟ孝經講釋被仰付、武學校御開に付、吉田權平・吉田才一郎弓術、御馬乘齋藤久之助・武村保九郎木馬、山崎次郎兵衞・笠間九兵衞劍術、原田又右衞門鎗術被仰付、兩學校共御前御出御聽聞等被遊候事。

一、學校御座之間御床に聖像被爲懸、御備物等被仰付候事。

一、年寄中土佐守・御家老中・若年寄・大音南郊聽聞被仰付候事。

但、來月御用番は不罷出候事。

一、頭分以上望次第聽聞可被仰付旨被仰出、其段河內守等より一統相觸候事。

一、御開に付懸り之人々は都而罷出候事。

但、學校御普請懸之人々、御大工以上罷出可申事。

一、學校御園中等所々警固之儀、割場奉行申渡、且警固等爲縮方右奉行も罷出可申事。

一、御醫者兩人相詰可申候事。

一、年寄中土佐守・御家老中・若年寄幷懸之役人頭分熨斗目・長袴、其外聽聞人等都而熨斗目・半袴着用之事。

但、御歩並ハ服紗小袖・布上下着用可仕事。

一、原田文右衛門を初武學校江罷出候人々、尤熨斗目・半袴着用。新井白蛾儀ハ野服着用之事。

一、諸役人揃刻限朝六半時前、其外聽聞人六半時過之事。

一、聖堂等請取火消、宅拵之振に而家來迄右近邊相廻、火之要心可申付候事。

一、不破和平等四人、學校中諸事御用取捌可申事。

一、御横目幷學校御横目所々見廻り、諸事作法等且列居之儀指引可仕事。

一、聽聞に罷出候人々作法能着座仕、段々列居可仕候事。

一、出座之人々名札持參、學校御横目江可相渡候事。

一、人々刀名札付、刀番之者江可相渡候。退出之節、人數多故名札しらべ出候に隙取可申候間、退出不指急、列之通靜に作法能致退去候事。

但、刀番足輕三人持出置候事。

一、講主・聽聞人・諸役人等列居之次第、且御前御出之節年寄中等罷出候ヶ所之儀ハ、別紙繪圖付札之通に候事。

一、諸役人を初聽聞人等相揃、列立しらべ等宜敷段御横目より河内守等江相達、其段河内守

等より御近習頭迄以紙面及案内候上、御前御出被遊、石川御門通學校御入口御門より學校ゟ被爲入候。尤御出前聽聞人等列居仕罷在、御出之節御作法之儀は、當時於實檢之御間御聽聞之節御作法之通に候事。

但、御戻之節も同様事。

一、御前御出之節、學校御式臺ゟ河内守等三人并大音主馬罷出、御廊下通に年寄中等罷在、主馬御先立仕、御座之間御襖は建置、御廊下通御近習頭詰所之方より御座之間ゟ被爲入候。御駕籠之戸は、御近習頭箱壇之上ゟ罷出有之、明之。且不破和平等内一人、御玄關前へ引離罷在蹲踞可仕候事。

但、御戻り之節は年寄中等何も御先ゟ武學校ゟ罷越候付、河内守等内一人御式臺ゟ罷出、主馬御先立仕、和平等内一人御玄關前最前之所へ罷出、蹲踞可仕候事。

一、御前御座之間ゟ被爲入候而、追付講釋初可申旨主馬を以河内守等迄被仰出、其段不破和平等ゟ申渡候上、御襖開之、和平等より夫々可申談候事。

一、右御襖開き候上、新井白蛾儀御座之間聖像之方ゟ少し進み、遙拜仕候而、講席ゟ居直り、開講之節書格は御儒者見習之内一人書格持出、孝經講之、畢而同人書格を引可申候事。

但、講釋相濟候趣、白蛾より不破和平等ゟ會釋仕、其段和平等より河内守等ゟ相達、河内

守等内一人御前へ罷出、右相濟候段申上御襖建之可申事。

一、右御座之間御襖建之、暫御休足被遊候内、年寄中等幷學校懸之人々迄武學校江罷越、尤御横目幷學校御横目も一人罷越、夫々作法等申談、宜敷段御横目申聞候はゞ、其段河内守等より學校に相殘り罷在候同席迄以紙面御案内申上候上、御前武學校江被爲入、御馬見所御上當日御道筋江不破和平等内一人罷出、蹲踞仕罷在、御馬見所に御着座被遊、御襖は先達而開き置、何も列居仕罷在、追付吉田家弓術等御覽被遊、相濟最前之御道筋より御戻被遊候。其節河内守等三人・圭馬、武學校雨落下た御通筋に罷在、幷不破和平等も御道筋江罷出候事。

一、學校江罷出候人々供之人數、下馬より内年寄中土佐守・御家老中小將二人・草履取一人、雨天に候はゞ傘持一人召連可申候。其外は都而若黨一人・草履取一人、雨天之節は手傘用被可申事。

但、若年寄は雨天に候はゞ、傘持一人召連可申候事。

一、武學校御開き御規式相濟候迄、聽聞人等何茂學校に罷在、御前御戻り後退出可仕候事。

一、御前御出中は、從者不殘下馬江出し置、御戻り後込合不申樣御門内江入可申候。尤警固足輕幷御横目足輕指出置、御縮方可申付候事。

一、惣供之儀は、學校下馬外より直に石川御門惣下馬へ相廻し置、尤作法罷在可申候。警固

足輕幷御横目足輕をも指出置、御縮方可申付候事。
一、年寄中等登城之上、以御近習頭御用相濟候恐悅、且聽聞等被仰付候御禮茂可申上候事。
但、病氣等に而不罷出人々は、河内守等迄以紙面可申上候事。
一、於御居間書院河内守等三人一切、主馬一切、御前江被召、相濟年寄中土佐守一切、御家老中等一切被爲召候事。
一、右相濟、不破和平等四人一切、其次新井白蛾儀も、御居間書院において御前江被爲召候事。
一、聽聞人何茂登城、於柳之御間列居之上恐悅、幷聽聞被仰付候御禮、年寄中罷出謁可申事。
但、御近習之面々は、年寄中席江罷出、恐悅等可申上候事。
一、不破和平等四人は別段に河内守等迄恐悅可申上候事。
一、原田又右衛門を初武學校江罷出候人々、幷新井白蛾儀、於御次御熨斗頂戴被仰付候事。
一、年寄中土佐守・御家老中・若年寄・大音南郊、御吸物・御酒・御取肴可被下旨、當日御近習頭を以被仰出、年寄中席において頂戴、若年寄は常之席に而頂戴、畢而以御近習頭御禮可申上候事。
一、不破和平等初懸り之役人御歩並以上、幷武學校江罷出候原田又右衛門等、且御儒者一

統、於御墓所御吸物・御酒・御取肴被下候事。

但、學校御普請懸り之人々、御大工以上迄も右之通被下候事。

一、兩學校御開相濟候爲御祝、不破和平等を初原田又右衛門等、幷新井白蛾を初御儒者一統、被下物御目錄榆垣之御間二之間に而、河内守等列座拜領物被仰付候段申述、頭分は河内守等内御目錄相渡、平士以下は御目錄御用人渡之、御横目指引に仕候事。

但、御步並等被下物は、前々之振を以御用人取捌可申候事。

右被下物爲御禮、何茂河内守等宅へ相勤可申談事。

以上

閏二月

三月朔日。金澤犀川々上に火災あり。

〔歲々略曆〕

三月朔日晝才川々上覺源寺前火事、百三十軒許。

三月二日。初めて學校を開き、前田治脩之に臨む。

〔御年譜〕

一、三月二日學校御開に付御出。御年寄中等出座。

但七月より諸人出座。

三月六日、前田治脩金澤を發して參覲の途に上る。

〔政隣記〕

三月六日快天、五時御供揃に而、五時過表御式臺より御發駕、鑑板に龜萬千殿御送、御年寄衆等前々之通被罷出、人持・頭分ミ前々之通に罷出、御發駕後御席に出、御用番大隅守殿に恐悅申述退出。

〔御年譜〕

御供出城・今枝内記、御步頭佐久間與左衞門。

〔政隣記〕

當御參勤御道中十二御泊附等

今石動	御中休。	高岡	御泊。
小杉	御中休。	東岩瀨	御泊。
東西水橋之内	御中休。	魚津	御泊。
船見	御中休。	境	御泊。
青海	御中休。	糸魚川	御泊。

前月は二月
御尋は三月六日

一　名立　御中休。　高田御泊。
關川　御中休。　牟禮御泊。
丹波島　御中休。　榊　御泊。
海野　御中休。　追分御泊。
坂本　御中休。　板鼻御泊。
落合新町　御中休。　熊谷御泊。
桶川　御中休。　浦和御泊。
蕨　御中休。　江戸御着。

三月六日。大小將組池田左平等男色の事によりて指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕

佐渡守樣御抱守御大小將組　池田左平
同斷　御近習勤新番　杉本新之丞
同斷　御居間方定番御徒　村田鐵平

此三人御國ゟ罷歸候樣、前月二十日被仰渡、同二十三日江戸表發足、一昨日四日金澤歸着之處、御尋之趣有之、御近邊之儀に付木梨助三郎等手前に而相糺候樣被仰出。右に付自分に指

加罷在候樣助三郎等より申渡。

右御糺之趣者、村田鐵平今年十五歲美貌に付、池田左平与兼而男色之因有之候處、元來御近習、別而御停止之儀故、甚隱密に致候得共、粗露顯之躰も有之候に付致心勞有之內、杉本新之丞儀も鐵平と密通之旨左平承出し、幸自分之罪を新之丞に掩護可申ため、新之丞・鐵平密通之趣夫々及屆候より事起り右之通云々。

本件の結果は寛政五年六月十八日にあり

三月十三日。江戸勤務の諸士に扶持方を增貸す。

〔政隣記〕

三月十三日於江戸表、去年以來等諸物高直、諸人一統難澁に付、一人扶持に金三分宛御貸渡、足輕・小者に者被下切之旨、今日被仰渡有之。

三月十八日。前田治脩江戸に着す。

〔政隣記〕

今月は三月

中將樣今月十八日曉五時御供揃に而、同刻頃浦輪驛御發駕、前記有之通蕨驛御中休、御下邸に御立寄、四半時頃御上邸に御着府。爲御茶請出雲守樣幷前田大和守殿・前田信濃守殿、其外御勝手座敷に御出入衆前田安房守殿等二十人參御出、一汁五菜之御料理等後御菓子迄夫々出、御城坊主衆等も夫々御出入之分參上、右於御席に御對顏等有之。八時頃御出御老中方御

勤。

但、此度御道中少之御支も無之、且御旅舘御發駕連日曉天、御泊〻御着者いつも夕七時頃、其外御供人少〻之中分等無之、宜き御道中与云々。

三月廿八日。徳川家齊使を遣はして前田治脩の參覲を勞す。

〔政隣記〕

三月廿八日上使御老中戸田采女正殿を以、就御參府御懇之被蒙上意。御作法御例之通。

四月朔日。前田治脩柳營に上りて徳川家齊に謁す。

〔政隣記〕

四月朔日御登城御參勤之御禮被仰上、御懇之上意。且横山山城・今枝内記御目見等御例之通之段、追々江戸より申來。

〔續徳川實紀〕

四月朔日、月次拜賀例のごとし。松平加賀守治脩參勤し、牧野備中守貞善家つぎしを謝す。

四月廿一日。奥村十郎左衛門、藩侯行列の指揮を誤るを以て指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕

四月廿一日於江戸左之通。

付札、村田甚右衛門江

奥村十郎左衛門

右昨日上野御參詣御戻之節、御供方心得不行屆趣有之に付、指扣被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

四月廿一日

右山城殿被御渡、則甚右衛門御貸小屋において申渡有之。右不行屆趣ニハ、今月廿日上野大猷院樣御靈屋江御參詣御戻之節、追付尾張宰相樣御參詣之御樣子に付、十郎左衛門其段達御聽候處、御出合不被遊樣にと御意に付、三十人頭江も申談、御先江三十人小頭爲見に遣置候。乍併御出會之所難計故、幸いまだ上下御供之御近習御使番御表小將も罷在候事故、常照院江御立寄被遊間敷哉と相伺候。夫れには不及と御意有之。于時吉祥閣之外に而、御挾箱御右之方不忍池之方小門江向候處、右門締り有之、御通行指支候に付、重而車坂之方江御挾箱相進め、依之御行列以之外混雜有之。併御出合ハ無之、山下御歸。然處御歸殿之上、石野主殿助を以被仰出候ニハ、尾張宰相樣御出合之儀に付、御挾箱方々江罷越、御道筋混雜、御外見ニも見

苦敷儀、如何相心得候哉と先達而御意之趣を如何相心得候哉と御尋に付、十郎左衞門御請ニは、只今御供方混雜之儀可申上与奉存候處に而御座候。先達而御意之趣ニは、御出合不被遊樣にと御意之旨申上候處、重而被仰出候ニは、常照院ニ御立寄之儀相伺候砌、夫れにには不及無構と御意被遊候旨被仰出候に付、無御構之御意之趣ニ承渡し、先達而被仰出候通御出合無之樣に可仕与奉心得、尤御脇道とも無之事に候得ば、指懸り御出會之趣に奉心得候。何れにも御先之御樣子相知不申に付、三十人小頭等爲見に遣候處、右小頭直に御挾箱持ニ申談、先刻之通混雜仕候儀に御座候。小頭より私に直に御出合之趣申聞、最早御脇道も無御座節ニは、御出合に仕候儀と奉心得候。先以御意之趣承渡し候儀、迷惑至極に奉存候段申上候處、翌廿一日夕方右之通指扣被仰付候事。

但、三十人小頭ニも、御歸殿之上、十郎左衞門より見分も此方より申渡遣候儀、此方ニ御先之樣子先申聞候者、何れ共可受指圖候處、直に御挾箱持ニ申談、御通行指支候趣等、不都合之趣申入。豐御次にても、右小頭御挾箱持手前も御糺有之候處、右池之端ニ之門御指支無筈之處、いかゞ之譯に而縮り有之候哉、且前々より兎角御出合無之樣相心得候抔と不分明之申分。依之同日小頭御挾箱持も指扣被仰付、廿七日重而追込に被仰付。

右十郎左衞門指扣ニ、同月廿八日御免許被仰出。

四月廿五日。前田齊敬歸國の許可を受く。

〔政隣記〕
三月廿八日佐渡守樣今般月次等御登城御願、五月上旬御歸國も被遊度旨御願有之候。御道中至而御省略、御國より御迎人も無之手を合せ候樣被仰出候旨、今月廿六日横山山城殿、江守平馬・村田甚右衛門等に御内々被仰出有之候事。

〔政隣記〕
佐渡守樣御袖留之儀、御用番御老中に御屆、今月廿七日被爲留、且御國許江之御暇之儀從中將樣御願被遊候處、今月廿五日上使御老中戸田采女正殿を以御願之通被仰出、御卷物御拜領。從御臺樣も御使御廣式番之頭安藤長左衛門殿を以、御卷物御拜受。且前日依御奉書、同廿八日御登城御禮被仰上、御懇之上意、御鷹・御馬御拜領。中將樣にも御登城御禮被仰上候處、御懇之被爲蒙上意候事。

〔續漸得雜記〕
一、寬政四年佐渡守樣御入國に付、上使御老中戸田采女正殿四月廿五日御越被成候。加賀守樣より御刀一腰、采女正殿へ御贈被成候。佐渡守樣今度は三品御指止、御側筒三挺爲御持被遊候。五月七日江戸表御發駕、同十九日金澤御着。

四月。聖堂造營の計畫を廢したるを以て本多安房守に資銀上納の必要なきことを告ぐ。

〔天章院樣御筆物寫帳〕

一、聖堂御造營御手傳被蒙仰候之所、子四月不被爲及其儀候段被仰出候段、同十四日被仰出候御書立左之通。

安房守に口達に而可申述趣

聖堂御造營方、御自分に御手傳御用被仰付置候。然處此度右御造營當分御延引之儀被仰出候間、上納方之儀當分不及其儀候。此段可申達旨御意候。

居屋敷玄關等普請、右御手傳方見合候躰被聞召候。此度聖堂御造營御延引之儀本文被仰出候通に候間、玄關等作業取懸可然与思召候旨御噂候。

四　月

天章院は本多政行寛政三年十月の條參照

五月七日。前田齊敬江戸を發して歸國の途に就く。

〔政隣記〕

五月七日於江戸、四半時御供揃に而、八時過御發駕。中將樣爲御見立御式臺に御出。且又佐

渡守樣朝六半時御供揃に而、御老中方御勤、九時御殿ゟ御出、御客衆ゟ御對顏之上御旅裝束に被召替、出雲守樣等御附使者、幷入江廣瑞・藤井貞三御城坊主衆、公儀御使者、御一門樣方御附使者、町醫師等、御通懸り御目見被仰付、假奏者組頭番頭替々勤之。中將樣は階上御杉戸之外迄御送、舖附ゟ御出入之御旗本衆御送、階上御勝手之高板之間ゟ後藤・本阿彌等罷出、御白洲ゟ御目見之町人共本幕番所前に並居。御先立御馬廻頭江守平馬相勤。右夫々御會釋有之、御發駕。御供之織田主稅等御玄關前に蹲踞、御行列ゟ入。其例中將樣御發駕之節御作法同斷に付略す。

五月十六日。馬廻組熊谷勘助の子小太郎誤りて人を殺害す。

［政隣記］

五月十六日暮頃御大小將領千石三輪齋宮家來湯村儀右衞門与申者、母宅を出候處、夜に入候而も不罷歸に付相尋候處、宗半町御馬廻組羽田要人居屋敷横に、何者之所爲に候哉手疵を爲負打臥有之段、右儀右衞門及斷候に付、縮吏家來差出爲見屆候處、右之通相違無之段、右手負之側に刀之鞘も有之候。依而檢使之儀公事場御奉行ゟ被仰達可被下旨、齋宮頭伴源太兵衞ゟ指出之。然處御馬廻組熊谷勘助せかれ小太郎儀、右之者に手疵爲負候段、勘助よりも及斷候に付、此段公事場御奉行ゟ相達可被下旨之書付、齋宮よりも重而指出之候に付、夫々以使者等

源太兵衛より達有之候處、翌十七日四時前、爲檢使與力平野彦右衛門・河地祐作齋宮宅へ罷越候上、彼所へ罷出手負人致見分候處、最早相果候段申聞、死骸見屆相替品も無之に付、則湯村儀右衛門へ相渡、十八日朝五時前夫々相濟、其段も源太兵衛へ齋宮より以書付屆有之候事。

但、熊谷小太郎十六歳、湯村儀右衛門母者七十一歳、町方へ用事有之罷出、宗半町圖書橋邊に而小太郎に出逢候處、小太郎儀平生甚癲病者之處、頃日宗半町邊へ狐狸之變化出候抔と怪談有之承居候處、白髮之老女を見受妖物与心得、鞘打に致候處、右老女鞘を握り奪取拔身に相成候に付、重而背・腰廻等三ヶ所餘疵付。然處老女儀最初に握取候鞘を放し不申、其內往來人等も有之候處、小太郎儀拔身を携歸候爲躰亂心之体に付、縮所へ入置。實者臆病比與与云々。勘助頭は中川四郎左衛門也。

五月十七日。大阪の加賀藩邸類燒の難に罹る。

〔政隣記〕

五月、今月十六日夜、大坂表七郎右衛門鹽屋源兵衛家、子上刻頃出火、十八日朝辰下刻鎭火。町數八十九ヶ所、家數二千百十八軒、竈數一萬五百四十三。

此方樣御屋敷も御類燒に候得共、御藏米は無御別條、詰人無難に立退候段申來。且又御出入

之鴻池・具足屋七左衞門・辻次郎右衞門類燒之由も申來。

五月十九日。前田齊敬金澤に歸着す。

〔政隣記〕

五月十九日九時前、御道中益御機嫌克、御日圖之通金谷御殿へ佐渡守樣御着。公邊へ爲御禮被指出候御使者、人持組前田兵庫御目見被仰付、二之御丸御年寄衆於席卷物・御羽織拜領、披露御大小將岡田圭馬勤之。八時頃發足有之。

五月廿一日。聖堂造營を中止したるを以て木材の寄附を要せざることを諸士に告ぐ。

〔政隣記〕

十五日とあるは十六日なるべし

自分は津田政隣

前記二月十五日廻狀留之通に付、御用に相立候はゞ指上度旨紙面頭々へ指出候人々數多有之、同役に而者恒川七兵衞栂二本、同組御小將中に而者津田吉十郞松三本、石黑庄司郞栂一本・松一本・杉一本、菅野兵左衞門松二本、平田磯次郎松一本、天野權五郞松一本、右之外數百人に付記略之。且自分指上可申御用木不致所持に付、其段相達之。
聖堂御造營先當分御延引被仰出候條、自分用事に立度儀有之候はゞ、勝手次第右紙面指出置

候木共伐取、其段及届可申旨等、五月廿一日前田大炊殿被仰聞候段、定番頭より如例廻状有之。

五月。町方の組合頭たる者の心得を諭す。

〔金澤雜談〕

寛政四年五月組合頭勤方之事。

一、御條目之趣、夫々前々より申渡置候通、能々會得致し末々に可敎訓候事。

一、二日讀之儀、古來より御定に候處、近年等閑に相成、甚令違亂候。偖而今般右追加茂相調渡置候間、毎月嚴重に爲讀聞可申、其上人々平生之所行、右申渡能相守候者は名前申聞、本源心得違之者には幾度も可申敎事。

一、組合頭第一組合ゐ疎遠に相聞ゐ候。其組合能成立ち不申候は、皆以組合頭之越度に候。組合介抱之儀は、其渡世之家職人々手前相糺、商賣等無之、空く日を立難澁申立候者は、先以不埒之至に候。當時風俗其身不致苦勞、多分に儲候事のみ心懸候故筋違候。夫によつて、おいつから御停止之宿等いたし、渡世之樣に相心得候者も有之躰、甚風俗不宜事に候。別而地子町等之儀は、小家困窮之者も多候へ共、誠に組合頭勤向により、其町々盛衰此所に止り候間、朝暮心懸不申にては行屆申間敷候。

一、町會所式日毎に、極難之者家修覆取懸等拜領銀相願候。右願方相考候所、甚之少銀に而、如何之小家にもとも願之道理に不相叶程に候。左候得ば、右を以其足りに可相成謂不相聞、右等之趣を以少銀にても申請度との趣意迄与相聞候。如斯之類其穿鑿不行屆故与存候。人々其渡世之業付に候時者、ヶ様之儀には有之間敷候。たとへ婦仕等之者にても、をかせ之類少々仕入取計遣候得ば、緑々にて其業不絶道理に候。或は被雇、又は相應之奉公、其外右等之類所作可有之事に候。男子は稼又は草履・わらんじ之類、夫々之所行可有之事。ヶ様之儀を取計遣、成立之儀組合頭働第一に候。其功有之時は、依之可揚用事定法に候間、役前心懸可申事。

一、組合之内行方甚宜敷無之者は、切々可致異見、近年風俗、或は無宿者等之宿をいたし、其組合より彼是申候者は、却而其者を惡む樣に申なし、却而正敷者を相嫌候形相見候。是等之儀何分心懸早速可申斷。當時地子組合頭之內、其組合難澁、地子代等指支候分取替遣候儀、格別働之樣に存じ罷在候躰相聞候。此儀は少組合之爲には可相成候得共、夫にて成立道は無之候間、畢竟夫々家職せり込、時々相守見屆之儀肝要に候。人々隨樂に相暮不申樣、嚴重可申渡置、尤右書物組合頭後役之者に可相讓候。

壬子五月　　高畠五郎兵衛　印

長谷川三右衞門　印

水野次郎兵衞殿

六月四日、前田土佐守の揮毫せる武學校の額面下書を提出す。

〔學校方覺書〕

經武館之文字相調候趣、先達而就被仰出候、下書眞行二通り二枚充相調候旨、土佐守別紙之通申聞指出候付、指上申候。以御序被入御覽、兩樣之内何れ可被仰付哉、調方等御好も被爲在候はゞ、被仰出之趣御申越可被成候。外に御好等も無御座、兩樣之内被仰付儀に候はゞ、重而本紙調筆被仰付には及間敷、此内を直に御用ひ御座候而も可然哉。且又額細工人之儀は、明倫堂之額被仰付候御細工人澤阜忠平儀、細工も格別宜敷樣子に御座候間、忠平へ被仰付に而可有御座哉と遂示談申候。思召も無之候はゞ、右之趣御伺候而御申越可被出候、以上。

六月廿四日　河内守判

山城樣

追而眞行草三樣に調候趣、先達而土州へ申談候處、草書は調兼候由にて、兩樣調指出候。此段は爲御承知申上被下候樣申聞候。右之趣致承知、則御紙面等入御覽相伺候處、眞行兩樣之内行書に可被仰付候。則可被仰付分一枚、別に御上包被仰付御返下候付、指上申候。尤重而

本紙調箪に不及、右下書之儘直に可被仰付候。幷出來方等之儀紙包之通こ被仰出候條、左樣御心得可被成候。將又右下書御用無之分三枚こも致返上候、以上。

六月十二日。寶圓寺に於いて前田重敎の第七回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

六月十日、今般爲大赦公事場禁牢者之内九十四人出牢被仰付。

十二日一朝於寶圓寺、泰雲院樣御七回忌御法會御執行、御奉行村井又兵衞殿。但御法事方一件諸事御觸等、都而前々之通に付記略。御名代御燒香本多玄蕃助殿御勤。佐渡守樣・龜萬千殿茂御參詣御燒香。佐渡守樣は直に如來寺に御參詣之事。

六月十四日。來月二日より學校の授業を開始することを告ぐ。

〔政隣記〕

今般學校被仰付、來月二日より稽古相始候樣被仰渡候に付、割方別紙兩通之通に御座候條、一統へ被仰渡、若難心得儀も御座候者、私共に直に承合候樣、是又被仰觸候樣に与奉存候。師範之人々御儒者等に者私共より可申談候、以上。

六月十四日

不破和平

佐藤勘兵衛
本保十太夫
槻尾甚助

奥村河内守様　横山山城様　前田大炊守様

毎月習學等之割

朔望　　四時より醫學・本草等

二七講日、朝四時夕八時

一番　二日　朝大學章句、夕論語
二番　七日　朝古易斷、夕孟子
三番　十二日　朝小學、夕孝經
四番　十七日　朝大學章句、夕論語
五番　二十二日　朝古易斷、夕孟子
六番　二十七日　朝小學、夕孝經

三八和學等、朝五半時夕八時

三日　朝令、夕算學

八日　朝和學、夕禮法
十三日　朝天文
十八日　朝禮法
二十三日　朝天文、夕算法
二十八日　朝和學、夕令
四九課日
十五日之外五・十　朝五半時より八時迄習學
一・六　朝五半時より八時迄習學
每月稽古割
朔日　朝　弓術　吉田彥兵衞
二日　同　鎗術　筒井常右衞門・筒井善左衞門・筒井勘助
三日　同　弓術　吉田權平
四日　同　弓術　吉田才一郎
五日　朝　劍術　山森武太夫・木村喜右衞門
五日　夕　劍術　木村藤兵衞

六日　朝　鎗術　原田又右衛門
同　　夕　馬術　片山久右衛門
七日　朝　劔術　山崎次郎兵衛
同　　夕　馬術　星野高九郎・小池伴太夫
八日　朝　居合　中村八兵衛
同　　夕　馬術　高桑津左衛門・明石數右衛門
九日　朝夕　劍術　八島金藏
十日　朝　劍術　神保三八
同　　夕　鎗術　土田武右衛門
十一日　朝　劍術　矢野久左衛門
同　　夕　馬術　齋藤久之助
十二日　朝　劍術　山森武太夫
同　　夕　居合　白江金十郎
十三日　朝　居合　富永半助・岡山森江
同　　夕　馬術　佐野久喜次

十四日　朝　劍術　木村惣太夫
十四日　夕　劍術　笠間九兵衞
十五日　朝　同　平井茂右衞門
同　夕　同　馬淵順左衞門
十六日　朝夕　鎗術　關和太夫
十七日　朝　鎗術　加藤三內
同　夕　馬術　田中源五衞門弟子中指引、小林品八・淺川市平
十八日　朝　居合　筒井常右衞門
同　夕　組打　萩原又六
十九日　朝夕　居合　武藤市郎兵衞
二十日　朝　軍螺　小嶋七右衞門
同　夕　馬術　安田安左衞門
二十一日　朝　長刀　岸清八郎
同　夕　居合　高畠安右衞門
二十二日　朝　劍術　南保太右衞門

同　　夕　柔術　　池上用助

以上

六月、學校に掲示すべき定書成る。

〔學校方覺書〕

付札、不破和平等に

兩學校御定書之儀は、追而漢文・和文兩様共可被仰付候。先づ夫迄は別紙御定書を兩學校に張置、夫々稽古相初可申候。都講之儀者追而可被仰付候間、夫迄は助教より相兼候様可申渡旨被仰出候條、被得其意、夫々可被申渡候。則右兩學校御定書寫二通相渡し候。本紙は調筆出來次第追而可相渡候事。

壬子六月

定

一、父子有親。君臣有義。夫婦有別。長幼有序。朋友有信。學校のおしへは此五倫に止りて、人々其身に行ひ、各其職分のなすべき事をおこたらずつとめはげむべき事。

一、師長に被仰付候人々は、其役不輕候へば、先其身を正しく心得教導すべし。學徒志之淺深、才器之甲乙にしたがひ、ねむごろに示諭すべし。假令不器の徒たりとも、丁寧に教諭す

べし。然れども强而おしへに不從の輩は、學校御役人へ可相達事。

一、習學之輩は貴賤となく、學頭・助教等之教導に從ひ、無怠惰勤學し、各其職分を全く心懸候儀肝要たるべき事。

一、講習は聖經賢傳を本とし、諸賢諸儒正說をも兼講し、又本朝先哲の書も其正しきを撰て用ゆべし。異端邪說等、聖經に害ある書は一切禁ぜられ候。此外歷史・諸子・詩文集等之得手にしたがひ會讀等すべし。和學・天文・曆學・算法・醫學等は、別に其師を被仰付事。

一、諸生を御養被成候は、三年にて學業上達不仕者は學校を出すべし。師長の教に不從者は、三年に不滿とも指置まじく候。若今暫相學び學業すゝみ可申程之者は、三年を通過候とも御養ひ可被成候。尤每年諸生之學業等考へ試み、相應之賞罰あるべき事。

一、惣而禮義正敷心得、言語進退着座之次第等急度愼べき事。

一、講書聽聞中居眠り、或無益之雜談、或無用に座を立、或扇つかひ等堅く仕まじき事。

一、師長之優劣、講述之善惡批判仕まじき事。

一、才器學力有之とも、無禮緩怠之所行候者學校を出すべき事。

一、不忠不義之輩、其斷なくみだりに學校へ入候者、早速追しりぞけ可申候。若先非を悔、習學相望者は、其實情をとくと見屆教導すべき事。

一、學　頭　　一　人

經傳を講じ、學者を敎導し、學徒才德之考試・課程等を可掌事。

一、都　講　　一　人

助敎・讀師等講述之當否を論じ、暨學校之法式等をたゞすべき事。

一、助　敎　　七　人　諸生之多少により増減あるべし。

諸書を講述し、諸生等敎導、學頭之助をすべき事。

一、讀　師　　八　人　前に同じ。

句讀を授け、手迹を學ばせ、幼學之指南第一にいたし、且又講述もすべき事。

一、諸生之内より毎日二人順番をたて、講堂等之掃除、筆硯等之飾、且又火之元等をも見廻るべき事。

右之通可申渡旨被仰出者也。

壬子　月　日

〔學校方覺書〕

定

一、治に亂を忘れざるは武士の本意に候へば、面々武儀之心懸専要たるべき事。

一、兵法之書家々之傳來有之候。よく其師傳を守り、無怠惰勤學すべき事。

一、弓・馬・鎗・太刀等品々之武藝、其流其師之傳へに從ひ、無懈怠稽古すべし。相弟子優劣之論有まじく候。勿論他流善惡之批判仕申候べし。且又勝を好む事、稽古之初心にて候。修煉不行屆候ては、可勝之理を我に備ふる事あるまじく候。よく其師にしたがひ、藝術成就之道を心懸べき事。

一、武藝衆に抽候とも、忠誠之志無之ては無益之事に候條、其心懸肝要たるべき事。

一、爲稽古罷出候人々、作法よく相心得、世上之噂無益之雜談不仕、列居等に至るまで猥なる儀有間敷事。

右之通可申渡旨被仰出者也。

壬子月日

六月。學校に學舍を置きたるを以て寄宿志願者を募集す。

〔御郡典〕

今般學校御領國學舍就被仰付候に、小身之侍中暨御步並之子弟、自分賄に而習學仕度相望候者には、三箇年學舍御貸渡可被成候間、寄宿之儀可爲勝手次第候。

一、陪臣又は足輕、且亦町・在に而も相應之慕方仕罷在候者之子弟右同斷。

一、町・在等之子弟、習學之志者厚候得共、貧窮に而自分賄難仕躰之者有之、寄宿相願候はゞ、學校御役人手前に而其志を糺、食事之分被下之、御養可被成候。且只今者先づ人多に無之様可被仰付候。

右之通被仰出候。諸生御養方之儀者、委曲不破和平等ゟ申渡候間、承合、相望候者は交名等書記、頭・支配人より當八月迄に追々和平等ゟ可指出候事。

右之趣被得其意、夫々申渡候樣、遠所町奉行・御郡奉行ゟ可被申談候事。

子　六　月

今般學校御領國中學舍御貸渡等之儀に付、別紙御覺書を以河内守殿御申聞に付、寫相達候條、被得其意、夫々可被申渡候。各支配所之内習學仕度右之趣相望有之候はゞ、各より不破和平等ゟ直に可被相達候、以上。

六月晦日　御算用場

梅　喜左衛門殿

神保權五郎殿

七月二日。町・在の者疾病の際は醫師の治療を受くべきことを告ぐ。

〔岡部舊記〕

付札、御算用場奉行

醫業は、貴賤与なく人命を預儀に候得ば、療治方大切に可相心得儀に候。輕き者療養行屆兼候ものに候得ば、別而親切に療治可仕旨被仰出之趣有之候。然所町・在之者共病氣之節、御醫者中療養相賴候儀は、容易に難相成事之樣に相心得候者も有之躰に候。左候而は被仰出之趣にも致相違候に付、御醫者中より申聞之趣も有之候條、是以後町・在之者共病氣等之節は、無會釋御醫者中ゟ療養相賴可申候。

右之趣被得其意、夫々申渡候樣御郡奉行等へ可被申談候事。

子七月

町・在之者共療治方之儀に付、御用番大炊殿別紙御覺書御渡に付、寫相達候條、被得其意、各支配所之者共へ夫々可被申渡候、以上。

七月二日　　御算用場

梅喜左衛門殿

神保權五郎殿

〔政隣記〕

七月十九日。前田治脩登營して德川家齊の子竹千代誕生の七夜を祝す。

竹千代ハ寛政五年六月廿四日早世

七月十九日、今度若君樣御誕生、御七夜爲御祝儀御登城、桔梗門より御下り、肥後守樣ゟ御立寄、御膳被召上、大手御門內同事之御供に而、御老中方御勤。且今日爲御祝儀、左之通御獻上。

公方樣ゟ中將樣より干鯛箱・昆布箱・御樽代金千疋

御使　石野主殿助

公方樣ゟ佐渡守樣より右同斷

御使　江守平馬

若君樣ゟ中將樣より御產衣一重・干鯛箱・昆布箱・御樽代金千疋

御使　石野主殿助

若君樣ゟ佐渡守樣より干鯛箱・昆布箱・御樽代金千疋

御使　江守平馬

御臺樣ゟ中將樣より干鯛箱・御樽代金千疋

御使平川ゟ　伊藤津兵衞

御臺樣ゟ佐渡守樣より右同斷

同斷　上月數馬

〔續德川實紀〕

七月十九日、七夜の御祝として群臣まうのぼる。若君御事、御臺所御養ひこなされ、御名を竹千代君とまゐらせらる。黒木書院へ出まして、三家のかた〴〵御對顔、及松平加賀守治脩初め溜詰・普第の大名・高名・詰衆・奏者番父子・布衣以上の輩見え奉り、云々。

七月廿一日。前田治脩、徳川家齊よりその子竹千代の誕生に關する祝儀を受く。

〔政隣記〕

七月廿一日、上使御奏者番土井大炊頭殿を以、御卷物白縮緬十卷臺居・干鯛箱・御樽代千疋。佐渡守樣に干鯛箱・御樽代千疋、今般若君樣御誕生爲御祝儀御拜領、御懇之被蒙上意、上使御出之節鋪附二枚目迄御前御出迎、御書院に御誘引之上、上意御拜聽。於御小書院、御料理御盃事御斷に付御餠菓子・御吸物・御酒等、御取持御先手戸田久助殿御相伴に而御饗應。御前御重引御持參等、御作法都而前々之通。右相濟、從御臺樣御使御留守居番作本隼人殿を以、御兩殿樣に干鯛箱一つ宛御拜受。上使御出之節、御前鏡板に御出迎、御大書院に御誘引、御口上御拜聽之上、御餠菓子等御同間に而御饗應。其外前々之通り御作法之事。但末に記す火事に而、御邸風筋も不宜候に付、御猶積之趣を以、爲御禮御老中方に之御勤御名代前田安房守殿に御賴之事。

七月廿一日、江戸に大火災ありて本郷邸附近に及ぶを以て前田治脩出馬す。

〔政隣記〕

七月廿一日四時過、麻布笄橋邊町家より出火、南風烈敷、御旗本神谷藤兵衛殿等五六軒、御大名阿部豐後守殿・伊達遠江守殿・鍋嶋殿かしの木屋敷、夫より飛越、今井谷妙福寺・松平掃部頭殿等兩側不殘、伴鐵之助殿等邊不殘、夫より糀町屋敷方兩側不殘、圓通院・毛利大膳殿屋敷少々類燒、赤坂藥罐坂組屋敷、夫より青山下野守殿・松平左兵衛督殿上邸・水野左近將監殿・松平出羽守殿・紀州樣御中邸、扨傳馬町一丁目より三丁目迄裏表不殘、夫より古屋町・赤坂町一丁目より二丁目迄、紀伊國坂紀州樣御上邸裏御門少々類燒、夫より飛火に而、糀町井伊掃部守殿中邸、心法寺門前十丁目中程より一丁目迄（但平川町は殘候事。）不殘、夫より御堀端飯田能登守殿・永井信濃守殿・北條安房守殿等、夫より三番丁より六番丁迄不殘、飯田町九段等不殘、扨又牛込通本多修理殿等不殘、小川町酒井紀伊守殿兩屋敷等、松平讃岐守樣兩御邸等御大名衆・御旗本衆不殘。夫より見付邊不殘、翌廿二日朝六時土手之稲荷・水戸橋・小石川にて燒留り、惣數御大名・御旗本等夥不記之。將又飛に而一二軒之燒失所々に有之候事。右に付御上邸南御櫓麻布通与遠板打、夫より追々見直し等、八半時過本郷六丁目出火与近板打候に付、一番

火消神田半藏、二番火消不破忠三郎御人數召連押出候處、本多中務大輔殿下邸之内出火に付御人數を以消之。此火事も右赤坂等より之飛火与云々。將又赤坂邊段々及大火に付、紀州樣に御先手上月數馬御人數召連罷越。于時暮比半藏御門之内火移候由に而、御櫓御城相圖打候處、觸拍子木被仰付、夫々御備相建。右火事烈火に而、以之外及大火、幾口にも相成、翌廿二日曉七時比小石川春日町に火移候由に而近板打、同朝五時前鎭鐘打。但右小石川御門内に火移候段、御櫓より申聞候刻、一二番御人數押出、建場に扣罷在候處、方境に間も有之、長延に付引揚歸入。重而牛込揚場之案内之節、重而一二番共押出、壹岐坂建場へ扣罷在候處、水戸樣御上邸危候條、御人數入候樣御役人衆就御指圖、則入、火之粉防罷在候處、水道橋切に而留り候に付、御人數引揚歸入。讃岐守樣に、爲物頭代御大小將御番頭田邊長左衞門御人數召連罷越候樣被仰出。御先手差支候故也。則罷越候處、御廐防候樣彼方樣御役人申聞、防有之候處、火之粉烈敷來、火勢强難防に付、御人數屋根より下之外防所之儀申入候處、火口三方に而烈風之風下故、最早防方も無之候間、罷歸候樣御役人岡嶋左仲与申者申聞候に付、御人數召連罷歸。兵部大輔樣にハ矢野藏御邸に、奥方樣にハ水戸樣に御立退之旨、左仲申聞。右等之趣言上、此方樣御上邸にも火之粉多く來り、危候に付、一之手御備御舘屋根に上り防候樣被仰出、則火之粉防之、谷中筋御貸小屋邊にも火之粉多來危候に付、御大小將不破駒之

助等ゟ申談有之、御人數召連出防之。御居宅別而火之粉來危候に付、祐仙院樣御下邸ゟ御立退に付、御先乘御大小將成田長太夫、御跡乘御附物頭。廿二日五時過、御表小將山口新庶御迎に被進、御歸被遊候。御前右木多殿下邸出火之刻御出馬、御邸中御巡見、夜中も一度御出馬、新口二枚開より大御門前ゟ御出、幷御邸中も御巡見。右之族に而夜半頃は御殿等も甚危候に付、御殿向等に有之御道具共等、夫々御土藏幷穴藏ゟ入、不殘片付、御貸屋にても人々家來共ゟ申付、道具共片付之。

七月廿五日。越中五ヶ山の流人小野木左門脫走せるを以て足輕を派して之を搜索せしむ。

〔政隣記〕

七月廿五日、五ヶ山流刑人小野木左門於彼所縮小屋ゟ被入置候處、右縮小屋を破迯出、行衞相知不申旨、右御郡奉行稲垣外記等より及御斷候に付、改方御用井上井之助手先足輕指出可爲相尋旨、御用番玄蕃助殿被仰渡。則足輕三人遣之候處、飛驒之方ゟ相越候段承合、罷歸候に付、彼筋可爲尋哉之段玄蕃助殿ゟ御尋申候處、其通与被仰聞候に付、重而尋に遣し、飛驒に罷在不申共、住所慥成所承候者、品により尾張邊迄も罷越、連可來旨等申渡。此度は足輕

四人指遣候由之事。

八月六日。德川家齊の子竹千代の名に觸るゝものを改めしむ。

〔政隣記〕

今般御誕生之若君樣御名竹千代樣与奉稱候。且又御官位被仰出候迄は、若君樣与唱可申候。

右之通被稱候段公儀御書附相渡候條、竹之字之名唱相改候樣組・支配之面々に可被申渡候。組等之內裁許有之人々には、其支配にも相達、家來末々迄不相洩樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

八月六日　　村井又兵衛

諸頭御用番交名連名殿

八月十一日。能登に歸花の咲くことを上申す。

〔眞館諸書物留〕

前月十三日大風に、山里之諸木風請之分葉色替り、別而槻・榎・はゝの木・櫻・かうはん・梨・柳等之類、其節落葉仕候處、頃日は如春若葉生じ、梨・李・櫻・たつま等花咲申候。變成故小紙を

かうはん・たつま本の儘

武部村　彌左衛門

以申上候、以上。

子八月十一日

栂　喜左衛門様

神保縫殿右衛門様

八月十八日。前田治脩登營して德川竹千代誕生の祝賀能を觀る。

〔政隣記〕

八月十七日御老中方御連名御奉書を以、明十八日今度若君樣御誕生に付御祝儀御能有之候間、御登城之儀申來候に付、則翌十八日朝六時不遲御供揃に而、同刻過御登城。御供人一統晝九時代合、夜に入六半時過御歸殿。但、御長袴御着用、御供人は羽織着用。

〔續德川實紀〕

八月十八日、若君生誕の御祝猿樂あり。三家のかたがたはじめ、諸大君・交代寄合・諸番頭・諸物頭・布衣以上の輩、かつ拜謁以上の人々、みな見る事をゆるさる。まづ大廣間へ出御あり。三家のかたがた・松平加賀守治脩・松平越前守重富・松平豐後守齊宣、その他御次伺公こもがらまで見え奉り、云々。

八月　日。武學校の稽古場に濫に立入るべからざることを告ぐ。

〔學校方覺書〕

今般武學校被仰付候は、武藝勵候樣にとの思召に候處、諸流ども秘し候品も有之候に付、以來學校懸り之者たり共、稽古之場所へは不罷出筈に候。併各幷學校御横目は、右場所へ罷出候付、此度別段に重き誓詞被仰付候間、自分々々之稽古所において、稽古之通無泥師範可仕候。且又拙者共出座候へば、手先執筆共御用之節罷出申儀も有之候に付、是又別段に重き誓詞被仰付候段、諸師範へ一統可申渡旨被仰出候條、被得其意、學校御横目へも可被申渡事。

壬子八月

九月九日。助教大島忠藏を新番御步並とすることを許さる。

〔學校方覺書〕

大島勾當せがれ大島忠藏儀、先達而其表より被召返、助教被仰付置候處、學才も宜敷、行狀等も正敷躰に相見に候。江戸表にて聖堂之役を相勤候處、只今之通に被成置候ては、不進にも可有御座候間、都講に被仰付候而も可然奉存旨、先達而不破和平内々申聞候。成程於學校講釋も承り候處、本義も能相分り、御自分樣にも委細御聞請之通に御座候間、都講に被仰付候而も可然哉に候へども、御儒者長谷川準左衛門等罷在候處、指越え都講被仰付候而は、信

服之所も如何敷候間、追而は各別、先此儘に被指置に而可有御座候。就夫忠藏儀、學才等も宜敷、畢竟御用にも相立可申者に候間、新井升平被召出候節之振を以、新番組御歩に被召出、御充行並之通被下之、御儒者に被仰付可然哉と存候付、房州等へ及示談候處、替存寄も無之旨に御座候。右躰御用にも相立候者、速に被召出候へば、一躰之進みにも相成、且前段にも相調候通、於江戸表も林百助殿家來分に相成、聖堂之役をも相勤居申者之儀、旁右之通被仰付可然哉と存候付、此段申上候條、尚更御了簡候而、替思召も無之候はゞ、以御序御伺、被仰出之趣御申渡可被成候、以上。

八月廿八日　　奥村河内守

大　炊　様

追て忠藏儀右之通被召出候儀に候はゞ、申渡之儀は前々之通、御家老中へ可申談と存候、以上。

右之趣致承知、替存寄無之候付、御紙面指上相窺候處、今日拙者儀御前へ被召被追下、窺之通と御意に候條、左様御心得被成、御示談可被成候、以上。

九月九日　　前田大炊

奥村河内守様

九月十三日。學校の寄宿舍に入舍志願の者を重ねて募集す。

〔御郡典〕

學舍寄宿之者、當八月中願出候樣、先達而一統へ被仰渡候處、御充行等之儀私共ゟ承合候者少御座候。願人有之候はゞ、先私共迄早速申聞候樣、重而三州一統被仰渡候樣に与奉存候、以上。

不破和平
佐藤勘兵衛
野村伊兵衛
本保十太夫
加須屋團右衛門
槻尾甚助

九月十三日

奥村河内守樣
前田大炊樣

〔岡部舊記〕

御算用場ゟ

先達而一統相觸候學校御國中學舍寄宿之儀、願人少に付、不破和平等別紙指出候間、寫相越之候條、被得其意、夫々申渡候樣可申談候事。

子十月

學舍寄宿之儀者、當八月中願出候樣、先達而一統被仰渡候處、御充行等之儀私共へ承合候者少御座候ニ、願人有之候にて、先私共迄早速申聞候樣、重而三州一統被仰渡候樣に与奉存候、以上。

不破和平
佐藤勘兵衞
野村伊兵衞
本保十太夫
加須屋團右衞門
槻尾甚助

奥村河内守樣
前田大炊樣

九月廿一日。京都の醫荻野元凱前田齊敬の病を診したるを以て能を觀覽

せしむ。

〔政隣記〕

九月廿一日、京住荻野左衞門大掾者元來當國金澤出生、又は前田土佐守殿醫師荻野正立与云々、先年於京都病死。右左衞門大掾者禁裡御役人に而醫術鳴世に、當時京・大坂に而一二与被稱。于時初秋已來佐渡守樣、御肺氣等御虛弱之御症に而御不例に付、御醫師等種々雖奉加御療養御快驗無之に付、右左衞門大掾御呼下し、則前月廿一日參着、則御療治被仰付候處、段々御快復に付御暇被下、今廿一日金谷御殿年寄中於見物所御能左之通拜見被仰付、御料理被下之。

養　老　三　輪　亂

同廿三日、御使番山路忠左衞門を以、從中將樣白銀百枚・御國染絹・串海鼠一籠被下之。外に結構之御書立を以、爲御合力永代三十人扶持被下之。從佐渡守樣白銀三十枚・絨筋一籠被下之、右別に雜用金小判三百六十兩被下之。翌廿四日金澤發歸京之事。

附、金澤等之舊病人・當病人、右左衞門大掾に療養を相賴候四民等夥敷有之、いまだ全快無之分も餘程有之候に付、發出後弟子矢野幸助に右療養方申談相殘置、幷當地町醫師津田隨分齋にも、療養方申談病人讓置候事。

附、左衛門大掾ゟ診脈を頼候者も夥敷、就夫京・大坂等に而之格合を以て、診脈迄に而も爲謝禮方金百匹迄之人々莫大之事与云々。左衛門大掾生質温柔、年齡五十三歲、且性吝嗇に而卑賤之情多く、所々より貰候串海鼠之術木をうつぎこ心得、術計を可賣拂旨旅宿亭主ゟ申談、各令一笑等之話多し。將又右隨分齋せがれ、右内今年二十一歲、右左衛門ゟ醫術之致入門、則此度同伴爲修行上京之。

九月廿二日。京師の醫師荻野元凱に三十人扶持を給す。

〔御裏雜記〕

荻野左衛門尉今般御國へ被召、佐渡守樣診等被仰付候處、甚御用立候付、御醫者に被召抱可然ナ内々承合候處、當時於京都官人、其上弟子も多有之、醫學等も勵み不申候而は難成、假令高祿被下候而も迷惑仕候旨。此表へ引越申儀は難仕、尤御用之節は隨分罷出可申旨に候間、重而御用等之爲二・三十人扶持被下可然与九月七日伺、僉議之通同月十六日被仰出候付、三十人扶持被下可然と、左之通町奉行へ覺書渡、左衛門へ申達候樣同月廿二日申渡、其段同日申上候。

今般佐渡守殿被相滯候付、療養之儀被相願候處、段々被致快氣大慶与存候。依之爲合力三十人扶持被指遣之候。此段可申達旨、江府より被申付越候事。

子　九　月

本年二月十六日の條參照

十月六日。大島忠藏・木下槌五郎二人儒者に列せらる。

〔袖裏雜記〕

御家老中ゟ

京居住御儒者木下彌一兵衞弟　木下槌五郎

大島勾當せがれ　大島忠藏

右兩人新番組御步被召出、御充行並之通被下之、當儒者に被仰付候。槌五郎儀御國居住被仰付候段被仰出。

右之通明日有御申渡候事。

十月六日

十月、郡奉行等、石川郡大野・粟ヶ崎へ入津の件に關し、宮腰の主張に抗議す。

〔粟ヶ崎湊詮議書〕

私共支配石川郡大野村等之船、大野湊出津入津之儀宮腰町より指構申段、右町御奉行紙面を以御達申上候に付、私共手前遂詮議可申上旨、且又右村方船數・人數當時有高相しらべ書上

可申旨等、委曲被仰渡之趣奉得其意候。則船數等相しらべ、別紙書記上之申候。右御詮議に付大野村等船商賣之譯委曲左に申上候。

一、宮腰町御奉行最初之紙面に、往古ゟ諸廻船宮腰浦一方之入津に而、正保年中迄二十五萬五千駄許也。荷物運送仕繁昌之津に御座候由。此儀相考候處、往古は才川・淺野川水戸口一集に流、宮腰浦一方湊に御座候様子。然處徴妙院様思召を以、水戸口兩方へ分、宮腰往還直道に作替被仰付候由承傳申候。依之宮腰は才川一方之湊に相成、大野川は大野村之湊に相成申譯与奉存候。右水戸口相分り申儀は、正保之後慶安年中頃にも可有御座哉。當時舊記ニ無御座年號等明には難申上御座候へども、前々より申傳候儀相違も御座有間鋪、左様御座候へば往古宮腰町繁昌之段、左ニ可有御座与奉存候。

一、右往古之儀ニ舊記無御座、慥には難申上候へども、當時大野川之儀大野村湊に相違無御座證據は、寛文十年松雲院様諸郡村御印物御成替之砌、大野村之村御印物に外海船櫂役并潟役銀与申名目御座候而、則御印物當時大野村に所持仕候。左様御座候へば大野川は大野村之湊に付、潟役銀指上、諸船出津入津仕候段、全宮腰町より指構可申筋無御座候。

一、前段承傳候趣を以相考候處、水戸口兩方へ分り申後も、宮腰町船商賣は犀川湊に而隨分指支不申筈。勿論其砌當分は前々より之繁昌減じ申躰も有御座間敷儀。且又其頃大野村等は

定而家數も不多、小高之耕作幷獵業而已に而、畢竟宮腰町之指障可相成与は心付申間鋪處、大野川湊出來仕候故船商賣に懸り、年々船數も相増候に付、寬文七年始而宮腰町之指障心付、彼是及異論申儀与奉存候。然ば其砌双方御奉行後年迄之首尾相考、夫々御達申上候而屹与譯相立置候て、其後之異論は御座有間敷處、其儀行屆不申、枝葉之取捌迄に仕置候躰。依之寬文十年村御印物御成替之砌、澗役銀之御ヶ條加り候に付、此處に而治定、大野村湊に相極り、彌船商賣增長仕儀与奉存候。

一、此度之異論、當春以來御算用場奉行中よりも夫々被申聞、宮腰御奉行紙面も被相渡披見仕、則私共より紙面相調御算用場へ相達置申候。然處今度御詮議之趣被仰渡候付、打返思慮仕候へば、先達而御算用場に指出候紙面には、右寬文七年幷元祿年中雙方枝葉之詮議出津入津之船數に拘り、彼是申達置候段今更相考候處、私共未熟之至と奉存候。根元村御印物之表に付、大野村湊に治定仕候上は、諸船出津入津聊宮腰町より指構可申筋無御座候。且又享保三年宮腰町より及爭論候段粗御記御座候へ共、濟口之書面無御座、落着難相知御座候。若其節之濟口、右村御印物に付落着仕にも御座候哉。何れにも夫より近年まで七十ヶ年許以來、大野湊船出津入津宮腰町より一向指構申儀無御座候。

一、粟ヶ崎村・向粟ヶ崎村船商賣之儀、宮腰町より彼是申立候得共、是又寬文十年村御印物之

座候旨。將又鳳至郡十村鈴屋村庄右衛門組同村理右衛門儀、鹿毛駒所持仕牽出候處、駒帳に無之に付、久之助等遂僉議候得ば、元來紙面に調洩候旨。村役人等誠に無故書洩候趣相違無御座候に付、紙面取立候旨、委細久之助等紙面、幷御馬奉行添紙面之趣も承知仕候。私共手前に而先達而糺置候趣左に申上候。

一、十村高田村喜三次組瀨戸村四郎右衛門所持之栗毛駒、星有之儀を屆相洩候旨、其砌喜三次より申聞候に付、早速呼出於役所相糺候處、不念之趣には御座候得共、外に替品無御座候故、以來之儀申渡可置申候。十村鈴屋村庄右衛門組同村理右衛門所持の鹿毛駒、しふく帳面に相洩置候に付、久之助等相咎候砌、十村庄右衛門於手前に遂僉議候處、村肝煎孫左衛門儀不計相洩不念之趣に付、樣子無心元早速役所へ呼出、重々遂僉議候處、役前不行屆趣に付孫左衛門儀咎申付置候へ共、日數相立候に付其後差宥置申候。尤此儀者先達而御馬奉行へ委細申遣置候。此外今江村左源次組藤瀨村五郎右衛門·長浦村勘太郎、高田村喜三次組瀨戸村小左衛門所持之駒、毛色幷星在之候處、右之者共久之助等へ答之趣相分兼候旨。依而段々樣子詮議仕候處、騙替馬等仕候儀には無御座候。元來能州之儀外御郡与違、干鰯地味に應じ不申故、厩屎而已第一に相用、右屎爲可取女馬所持仕候。依而子ゟ取候得ば御收納介成申儀故、馬多飼置申候。右譯故馬之日利等心懸申者には、皆而無御座候。一通之毛色者自然と覺申ものも多在

之候へ共、又は何毛与申儀も不存者も御座候族に御座候。十村共儀も右は同樣之趣に御座候。殊に當歳駒之儀は、毛色により一向相分り不申馬も毎度御座候。尤二歳に相成毛落之砌は、猶更見分兼候駒多御座候得ば、彌右樣之譯故、心外不行屆儀出來仕候。御縮方之儀は年々私共より申渡置、紛敷儀無御座候。毛色相違之儀は右躰之趣御座候間、兼而御聞置可被下候。併村方へは重々入念候樣に時々申渡置候。將又駒見分場所へ決而十村共罷出居申儀、前々之振に而は無御座候へ共、寛政元年に駒御縮方改被仰渡御座候樣保田安右衛門等見分に罷越候場所へ、十村共罷出御縮方相整候樣子。今度笠師村喜八郎悴九郎次抔駒見分之刻は、十村罷出不申儀と相心得居申躰。尤十村罷出候有無之儀は、從前に指定候振合と申趣に而も無御座候。外御用儀無御座節罷出候者も御座候得共、十村之儀者數多之村取治人裁許に而、於役所は一圓透隙無御座候者故、表立候而手代召抱置、夫々御用方手配を以相勤申候。夫故御郡方に而は、變死人等御座候節公事場へ申遣、指圖之上十村檢使申來候節、十村外御用等に而指支候砌は、手代に見屆申渡、御用相辨申候。右駒見分場所へ十村不罷出与而も、御縮方行屆不申儀に而者無御座候。都而御縮方等之儀は、常々村廻毎々申渡置候。右場所ゟ十村罷出候儀區々相成居申儀は、外御用無御座節は罷出候儀も有之候故、右之通に而御座候。猶更御縮方之儀申渡置候、以上。

子十月　　　　　　　　　　梅　喜左衛門
　　　　　　　　　　　　　神保権五郎

前田図書様
西尾隼人様
大音主馬様
横山又五郎様

十一月朔日。前田治脩登営して初めて徳川竹千代に謁す。

〔政隣記〕

十一月朔日於江戸、月次御登城之處、初而若君様江御目見被仰上。依之翌二日五時御供揃に而御登城、御下り御老中方幷本多彈正大弼殿御勤。

十一月十八日。江戸詰の諸士に扶持方を増貸す。

〔政隣記〕

十一月十八日左之通。

付札、江守平馬・大屋武右衛門江

諸人一統御小屋暮等も質素に相暮候段被聞召候。當時米價者引下げ候樣子に候得共、諸品者

引下け不申、高貴之躰に被聞召、何も烈敷相勤、一統可爲難澁与被思召候。當年も御國不作に而、當時御運方必至与御差支之御時節に者候得共、格別之趣を以御歩並以上ゟ者一人扶持に金三歩宛御貸渡、足輕ゟは金三歩宛、小者ゟ者小判一兩宛被下之候條、猶更令勘辨取續候様可申渡旨被仰出候。

右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。尤諸頭中ゟ演述、組等之人々ゟも申聞候様可被申談候事。

十一月

十一月十九日。前田治脩、徳川竹千代の色直祝儀を受く。

〔政隣記〕

十一月十九日八時前、御小人目付を以、御當番御目附衆より、若君様御色直爲御祝儀、追付以上使御兩殿様ゟ御拜領物有之段爲御知に付、一統熨斗目上下に改之候處、無程御拜領物御産衣二木具臺居・干鯛一箱・御樽代金千疋、佐渡守様ゟは干鯛一箱・御樽代金千疋、御歩目付等指添來、舗付ゟ御歩持之、御大書院縁御杉戸之外に而御大小將受取、六人に而代々御大書院御上段之下より段々順々餝之。追付上使御奏者番稲葉丹後守殿御出、舗附中ゟ御前御出向、御後之方ゟ御取持衆、御向之方ゟ勇之助様御出、御白洲ゟ頭分八人、御門下ゟ前田大炊・今

枝内記・聞番二人、内一人御下乘より御先立、敷付より御前御先立被遊、御大書院に御誘引、上意御拜應、御品物御頂戴之上、御のし木地三方出之。追付御小書院に御誘引、御料理・御盃事御断に付、御餅菓子・御吸物・御酒等、後御菓子迄段々出之。御重肴御持參。尤御相伴山本伊豫守殿には、御給事人引之。御かよひ御表小將、差引同御番頭、舟之間伺公御用人・聞番・御大小將・御番頭・同御横目。八半時過御退出。其節御送等最前之通。御刀取御大小將岡田德三郎。御式臺階上列居御用人・御大小將・御番頭・同御横目・御大小將中。七時過御出、御老中方本多殿御勤、時刻移御登城には不被遊、暮六時過御歸館。但上使御出前、勇之助樣等御取持衆に御肴類・御吸物・御酒・御肴等、上使御退出後一汁五菜之御料理等、御濃茶等、後御菓子迄於御居に出之。御給事御大小將、指引田邊・自分代々。

十一月二十日。江戸邸の消防器具に初めて龍吐水を採用す。

〔政隣記〕

十一月廿日火消道具に龍吐水相用候樣、先達而從公儀被仰渡、則被仰付候處出來に付、今日より此方樣御近所火消一・二番共相用。依之裁許足輕二人、持參人小者十六人之兵糧、增入紙面御臺所奉行に指遣。

十一月廿一日。三ヶ年節約の期滿ちたるも更に三ヶ年を延ぶべきことを

令す。

〔御觸幷御返書留〕

御勝手御難澁至極に付、御儉約之儀段々被仰出、去々年より三ヶ年之間は萬端御省略被仰付候段被仰出、當年に而右年限滿候へども、昨今年御領國作毛不熟、此末御運び方必至与御指支、御勝手向彌增之御難澁至極に被及候。依之來丑年より重而三ヶ年御省略被仰付候條、此段夫々可申渡旨被仰出候事。

右之通に被得其意、組・支配之面々へ可被申渡候。組等之內裁許有之人々へ者、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。右之趣可被得其意候、以上。

十一月二十一日　本多玄蕃助

十一月廿九日。藩侯の行列外に長柄傘を準備持參せしむることを定む。

〔政隣記〕

十一月廿九日、今年重陽御登城之刻、風雨强大荒に而御長柄傘折れ、其節者强荒に付御着笠上之、御下り之節者風も止み、替り之御傘取寄來候に付御点に合候。夫に付段々被仰出有之、僉議之上、已來は風雨强き節者、御行列外に御後用之御長柄傘被爲持候筈に伺、被仰出之上相極り、其段夫々申談置候事。

去年は寛政四年

但、外御大名之内爲後用被持候御方ニ有之、多分者爲御持之方無之、此方樣にも御代々爲御持無之候得共、自今如本文今日相極。

十一月。御算用者和田耕藏關流算法の皆傳を受く。

〔袖裏雜記〕

私儀最前於御國、三池流算法相極候處、傳來之術事少に付、他流習學心懸候へども指南人無御座、無是非關流之算法自讀仕致執行罷在候內、去年三月京都詰人被仰渡、於彼地御屋敷御用相勤罷在申候。右關流者本朝算學之機流に而、傳來之秘術多、他流に勝れ候緣書籍を以自學仕候に付、元誓願寺通大宮西江入町處士大橋松鶴と申關流箕裘之者有之、京都隨一之算法者に付、去年四月致入門習學仕候處、傳來之諸術秘訣共不殘傳授仕、則去冬免狀入手仕候。此就中四卒分身・分位下𠄘管等に、世上存知之者稀に而師家に於いても貴重之術に御座候。此外始終言之術者、目錄に附紙を以書分申候。且又別紙目錄七十五箇條に相添候寫本物二千餘枚、當夏中迄に書寫仕候。別紙兩通相添御達申候由、丑九月耕藏より小頭江之紙面也。別紙左之通。

右紙略文して爰に抄する也。

卷目之上、箇條目錄寫

序

一、八 算　一、見 一

前　禮式

一、定位付紙、習之法あり　一、開 平　一、開立付紙、別に習あり

初 段

一、算 法　一、天 元　一、點 竄　一、兩式天元付札、習之術

一、一兩式演段　一、纍演段　一、分合演段　一、矩合演段

一、因符演段　一、商演段　一、消長演段付札。習之術　一、聚伏演段

一、連 商

中 段　禮式　誓約一巻

一、互 約　一、逐 約　一、齊 約　一、遍 約

一、通 通　一、增 約　一、損 約　一、乘 約

一、除 約　一、添 約　一、割 約　一、零 約付紙、別に習あり

一、自 約付札、習と術　一、分母子　一、分 下　一、剩 一

一、欺 一　一、剩一翦管　一、欺一翦管　一、正負翦管

一、三率分身　一、交會　一、方程（別傳あり）　一、盈朒（別傳あり）
一、趕趁　一、歩索　一、町見

入奥　付札、十七ヶ條共皆々秘術

一、招差　一、垜積　一、交商　一、累玉
一、分果　一、纏數　一、容術　一、求積
一、逐索　一、變式　一、整數　一、脱子
一、綴術　一、作式　一、角術　一、奇角
一、作術

免許　禮式　付札、十三ヶ條共皆々貴重之秘術

一、平圓率起源　一、立圓率起源　一、孤背眞術　一、孤背立成
一、截積術　一、鉤股變換術　一、三斜無奇　一、弁積術
一、側圓解　一、四率分身　一、分位下翦管　一、極積
一、屑法秘訣

印可

以上

右以序次逐一可有指南者也。

寛政四子十一月　　　　　　　大橋藤原充敷　判

和　田　耕　藏殿

卷目之上、免許寫

關流算法傳來諸術秘訣共、委及相傳候。他日於厚志之輩者、可有御師範候、恐惶。

寛政四子十一月吉辰　　皇都　藤原姓大橋精七郎充敷　判

加州　和　田　耕　藏殿

十二月十五日。前田治脩參議を拜任す。

〔政隣記〕

十二月十四日暮頃、御用有之候間、明十五日五時御登城被成候樣御奉書到來。依之明十五日六時御供揃与被仰出、且御下り肥後守樣ゟ御立寄可被遊旨も、御近習頭前田權佐を以被仰出、奉自分諸向夫々申談。右に付明朝五時御殿揃、布上下持參之儀等、夫々向々より一統申談置有之候事。

十五日、昨日被仰出候通御供揃に而、六時二歩奥之口より御出御登城、御供人御平常例之通、御番頭御供自分、御横目御供永原半左衛門、上下御供組頭江守平馬、御使番久能吉太夫、御

表小將中村才兵衛、且不時に御表小將加藤嘉孟被召連。四時過御左右相知候に付、嘉孟早乘に而御舘ゟ歸、大御門より入、御轉任之段演述。夫より御殿詰人一統布上下着用、將又殿中御居殘に付、四半時頃御三家樣御隣より御下り、其節御乘用所迄安藝守樣御父子樣より、御使者守山貞助を申者被附置、今日之御左右御聞被成度旨之御口上、自分取次達御聽、伺被仰出之上、宰相拜任之段御返答申演遣す。夫より肥後守樣ゟ御立寄、御膳被召上、自分・半左衛門、聞番御供。

〔續德川實紀〕

十二月十五日、月次の拜賀例の如し。中略。松平加賀守治脩宰相に任ず。

十二月十七日。前田治脩轉任の奉書を京都に持參する爲使者を岩田是五郎に命ず。

〔政隣記〕

十二月十七日、今般就御轉任に京都ゟ口宣受取之御使、於金澤表人持組之内被仰渡、直に發出京着之筈。依之從此表京都ゟ御奉書持參之御使、御大小將より御用に付、詰組之内岩田是五郎書出置候處、今日被仰渡、於御殿是五郎ゟ大屋武右衛門申渡之。

但、借用金五十兩、外に別段百兩御貸渡、頭武右衛門より小拂裁許與力宛所之受取切手

返上之儀者金澤御算用場に可爲致上納旨之文言也。調、是五郎に兩通共相渡、直々被受取候筈。

附、右別段百兩者餘過之金龍歸次第一時返上之筈。遣ひ候分者於御國返上之筈に候事。

十二月二十日。前田治脩參議に昇任したるも諸士の緩怠の擧動あるべからざることを諭す。

〔政隣記〕

十二月廿日諸頭に御勝手座敷於三之間、左之御書立江守平馬・大屋武右衛門より傳達に付、則御小將中に申談、諸向組・支配に申談候儀同斷。但於金澤も、翌年正月被仰出之趣夫々に申談同斷。

今般宰相御拜任に付、從公邊之御會釋も、品により是迄与者違ひ重き御樣子共も有之候間、御家中年若成人々など右御樣子致見聞、萬一心得違御供先又は御使相勤候節等、都而於御公界向に、先々に對し御威光を含、緩怠之振廻など有之候而者、御前當々被仰付方等等閑之樣に御外邊より見聞可有之、左候得者先以御爲不可然、甚御心外之事に候條、萬端是迄之通に相心得、少も緩怠等之儀無之、猶々作法正敷おとなしく相見え候樣可相心得候。右之趣諸頭・支配有之面々にも、各より無急度寄々可申聞置旨御內意に候。

十　二　月

一、只今迄御途中御供押等ゟ、どなた様に候哉与相尋有之候得者、御名を答候得共、是以後者御前例之通御官名を答可申哉之旨相伺候處、伺之通就被仰出候、夫々申渡置候段、爲承知御横目永原半左衛門申聞候事。

今般就御轉任、只今迄与者從公邊之御會釋、幷從此方樣之御會釋等も只今迄与者違候趣、諸向承合候處左之通、此外相替儀無之由之事。

一、年頭御禮被仰上候節、中將之時者御太刀目錄御指出、三疊目に而御禮、御拜領之呉服臺南北に長く居付候處、宰相御任官に付而者、御太刀目錄御三家樣御同樣御老中御披露、四疊目に置付、其所に而御禮被仰上、御拜領之呉服東西に置付、御盃三方に載之只今迄中將之御時分は足打批共御返盃無之、御頂戴、右呉服御下着、地紋無之、但只今迄者此御下着御拜領無之候事。白綾に葵御紋織込候を御拜領但只今迄者此御下着御拜領無之候事。

一、御參府・御暇・御禮之節、御座之間御手自御熨斗鮑御頂戴。

一、御内書御判、但只今迄者御印。

一、御老中より之奉書御札致拜見候。啓文字如此。

但、只今迄者御札令披見候。啓文字如此。

一、御大名方に被遣候御書、御連枝等之外十萬石以下に者御官名に相成。

但只今迄者都而御名。

一、於殿中御奏者番衆ゟ被謁候節、御退之砌右御奏者衆少し御送り。

但只今迄は御送り無之。

一、御荷物之御會符・御泊驛御關札御官名。

但、只今迄者御名。

一、御獻上御目錄等幷御下げ札等、都而御官名。

但、只今迄者御名。

入膳は越中新川郡

十二月廿三日。前田治脩柳營に登りて陞任を謝す。

〔政隣記〕

十二月廿三日、昨日御老中方御連名之依御奉書、今朝六半時之御供揃に而御登城、御轉任之御禮被仰上、御下ゟ御老中方幷本多彈正大弼殿御勤。夫より廣德寺ゟ御參詣、御牌前ゟ白銀三十兩御備、御先使御大小將中村織人持參、八時頃御歸殿。但上下御供之分熨斗目着用、其外者御平常之通。

一、今日御獻上左之通。

御太刀　御馬 入膳氏 毛四歲

御臺様ゟ白銀十枚。
右御禮御首尾克被仰上候段、不時に被召連候御表小將山口新藏、下馬より早乘に而罷歸、大御門より入御左右演述、九時前也。
右御禮被仰上候に付、御表向一統服紗小袖・布上下着用平詰。但大炊殿被仰聞候由、昨日御横目廻狀有之。
一、今日御客衆ゟ一汁五菜之御料理等出、御附使者等ゟ者一汁三菜之御料理等出。
一、今日御老中等・若御年寄中ゟ御太刀馬代・綿三十把宛。但若御年寄中ゟ者二十把宛、聞番御使に而被遣之。御側衆ゟ御太刀馬代・綿十把宛、其外芙蓉之間御役人・御奏者番衆始不殘ゟ御太刀馬代、御大小將御使に而被遣之。但百挺頭中ゟ者不被遣之。
右御使人何も熨斗目着用、且御太刀馬代者不殘黄金一枚宛也。附本文御側衆・御奏者衆迄者今日夫々被遣之。其外之御役人衆ゟ者、明日より追々に被遣之候筈之事。

十二月廿七日。前田治脩年頭登營の際に於ける返盃の習禮を行ふ。

〔政隣記〕
十二月廿七日、今般爲御轉任に、來年頭より御盃御頂戴之節、御返盃有之筈に付、右御習禮爲御用、今日前田信濃守殿高家衆也御越也。但、御返盃は御三家様之外無之。御習禮畢而、御定

席於御小書院溜に、一汁五菜之御料理等出。

十二月廿九日。町方に於いて大雛等を販賣することを禁ず。

〔政隣記〕

近年雛之時節、猥に大人形亦者巧成雛之類、取扱等高料に致商賣に候躰相聞候。元來雛之儀者甚費成品に候條、都而手籠巧成高料之雛類致商賣候儀、指止候樣嚴重に可被申渡候。密々致商賣候儀於相顯者急度相咎可被申旨、去々年二月申渡候通に候。尙更相緩不申樣可被申渡候事。

壬子十二月

於町方大雛等致商候儀に付、別紙之通町奉行に申渡候に付、寫相越之候條、先達而相觸候通、勿論御當地に不限、京都等に右樣之類申遣候儀堅無用之事。

右之通被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配にも相達候樣被申渡置、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十二月二十九日　村井又兵衞

御用番之諸頭連名殿

正月朔日、前田治脩柳營に登り年頭を祝す。

〔政隣記〕

元日終日淡雪降。今朝六時過與之口より御出、兩御丸御登城、御裝束被爲召、御駕籠廻御先供新番六人、御先角幷代三人、御時宜役幷代共三人、御表小將御跡供二人、御大小將・三十人頭・御步小頭等其外前々之通。御番頭田邊長左衞門、御橫目者御禮方御用に而指支候に付假役御大小將より神田平藏、右各熨斗目・上下着用、布衣御供組頭江守平馬、御使番石黑小右衞門、御表小將加藤嘉孟、聞番高田新左衞門。九時過御例之通表御式臺より御歸館、敷付へ御近習頭幷御刀持・御表小將役配膳、鑑板に前田大炊今日御懇之被爲蒙上意、御盃御頂戴等之儀御意有之。同人恐悅之旨御請被申上、階下に今枝內記罷出向、御先立勤之。內記在江戶中若年寄兼。階上へ御表向諸頭幷御大小將中列居、御廣間溜より御勝手座敷二之間へ御通懸之節、同三之間に後藤本阿彌等御出入町人並居御目見、奏者御小將頭御客方兼帶之大屋武右衞門。夫より御通り懸り之所々御手役者等並居御目見、奏者物頭相勤奏者假奏者相勤候樣、諸物頭に大炊殿被仰渡有之、夫より御居間へ被爲入、八時前於御居間書院大炊・內記獨禮被爲請。同四之間に而御料理頭長谷川市兵衞鶴之庖丁相勤候を御覽。夫より同刻過於御同間頭分

以上一統御禮被爲請。御襖内記幷石野主殿助開之、奏者御馬廻頭兼御客方之江守平馬勤之。畢而御襖内記等建之。重而右之節相殘候頭分一統御禮、奏者大屋武右衛門。且飛騨守樣御出に付、於御居間書院に御雜煮・御吸物等出、御盃事被遊。其節御嘉儀御出入御旗本本多帶刀殿・齋藤長八郎殿御初、於御溜御料理等指上候筈之所御斷也。右御盃事之節御前にも鰭之御吸物上之、御かよひ御表小將。七半時過於御居間書院四之間蔦之間迄懸、御表小將・御大小將・御馬廻等より與力迄一統御禮、假奏者物頭勤之。

〔政隣記〕

今日・明日於殿中年頭御禮被爲請候節、五位以上者御流之御盃頂戴。御三家樣・此方樣も舊臘參議御拜任に付御返盃、其外者御返盃無之。併段々階級之御會釋共有之。且參議以上之者、しざらの御熨斗目に綾之御下着添候御時服被下之、四位以上にも者しざらの御熨斗目与御紋付御服紗小袖被下之、五位幷法印・御醫師にも者板熨斗目与御紋付ふくさ御小袖被下之。右夫々於御目通被下之。

正月二日。金澤に於いて頭分以上に前田治脩の參議に昇任せしことを告ぐ。

〔政隣記〕

正月二日於金澤、舊臘晦日依御廻文（御用番村井又兵衛殿より。）今朝五時人持・頭分登城、御帳に付、柳之御間列居之處、御年寄中等御列座、御用番玄蕃助殿左之通御演述。依之爲恐悅今明日中年寄中等宅に可相勤候。幼少幷病氣に而今日登城無之人々者向寄へ傳達、御用番宅へ以使者御祝詞申越候樣御用番被仰聞候段、如例御横目中申談有之。

中將樣御儀舊臘十五日御登城被成候樣、前日御老中方御連名之依御奉書御登城被成候處、於御座之間御懇之上意之上、參議御拜任被仰出、難有仕合思召候由、拙者共迄以御使者被仰下候。

正月三日。前田治脩東叡山及び廣德寺に詣づ。

〔政隣記〕

正月三日陰交。五半時御供揃に而、同刻過御出、上野御宮惣御靈屋御參詣、御本坊へ御年賀御勤、常照院へ御立寄、御裝束被召替、夫より廣德寺へ御參詣、九時御歸館。但、常照院に而御手廻り白丁脫候事。

附、御本坊へ御例之通御太刀馬代御持參、廣德寺へ白銀十枚御例之通被遣。夫々御先使御大小將。

正月四日。前田治脩増上寺に詣づ。

〔政隣記〕

正月四日快天寒風烈。四時御供揃に而、同刻過御出。御老中方幷本多彈正大弼殿へ爲御年賀御勤、御例之通御太刀馬代黄金一枚宛。夫々御持參。聞番兩人御供に而取唠有之。夫より増上寺惣靈屋御參詣、方丈白銀十枚宛進御備也、御勤。夫より芝御廣式へ被爲入、夜四時前御歸館。

但、御直率は池德院へ御立寄被爲召、御拜相濟。

正月五日。前田治脩使を日光に遣はして參議拜任を謝せしむ。

〔政隣記〕

正月五日快天餘寒烈。人持組御近習御用石野主殿助今曉發出、爲御太刀馬代御献納御使御用日光山江罷越。仍之昨四日於御居間書院四之間、大炊殿・内記殿御列座、御紋付御道服一・紗綾二巻拜領被仰付、御廣蓋披露御大小將平岡治郎市勤之。且御内々を以八丈嶋二端拜領被仰付、畢而於御居間書院御前へ被召出、御意有之。

〔政隣記〕

正月十二日、石野主殿助前記五日之通に候處、御使無異儀相勤、今夕方歸府也。日光山舊冬已來薄雪尺に不滿与云々。

正月十四日。右筆土師清太夫等書式を誤るを以て自分指扣を行ふ。

〔政隣記〕

正月十四日、左之通。

御大小將組御右筆　土師清太夫
組外御右筆　中西順左衛門

村井又兵衛儀、人持組頭格に殿文字調來候處、今般右組頭に而無之趣心付、不念之至迷惑仕段申聞候に付、江守平馬・大屋茂右衛門より自分指扣申渡、其段大炊殿に相達、則被達御聽候處、先以御格式相違等之儀、急度御咎可被仰付候得共、先今度之儀には御免被成候。已來之儀急度可相心得旨被仰出候段、翌十五日晝過大炊殿被仰聞、夫々申渡有之候事。

正月十八日。前田治脩平尾邸に至りて狩獵を試む。

〔政隣記〕

正月十八日曉七時御供揃に而、同刻過西之口より御出、御下屋敷に被爲入。御供方前々之通。御供頭には御奥小將御番頭河内山久太夫・御表小將横目村杢右衛門。朝四時前御歸館。但御下屋敷御庭に雁・鴨多附有之、御投網に而可被爲打与御出之處、風高に而羽早く、一圓御手に不入候事。

附、廿六日・廿七日も同刻御供揃等に而被爲入候得共、御獲物一圓無之、風無之候而も、右御庭之内狐等多有之候而、毎度鳥にあたり候故、鳥殊之外羽早く、少々之音にも驚候故、御寄せ難被爲成に付、御獲惣無之与云々。

正月廿一日。前田治脩が參議拜任の口宣受領の爲の使者竹田掃部金澤を發す。

〔政隣記〕

人持組　竹田掃部

今般就御轉任、京都へ口宣請取御使就被仰付候、今月廿日於二之御丸御年寄中席、御紋付御道服一・卷物二拜領、御廣蓋披露御大小將勤之。翌廿一日金澤發出。

今月は正月

正月廿四日。前田治脩增上寺に詣づ。

〔政隣記〕

正月廿四日、增上寺御成、九時還御。相公樣九時御供揃に而、還御後御出、增上寺台德院樣御靈屋へ御參詣。御供人羽織袴。上下御供はのしめ。直に芝御廣式へ被爲入、夜九時過御歸館。

增上寺御成は德川家齊

正月廿七日。金澤近傍の町藏給人米を用米として引取らんとするものはその所要額を正月中に申渡し置くべきことを命ず。

〔政隣記〕

能州御郡奉行支配所今濱村・子浦村、其外金澤手寄之町藏給人米、自分爲用米馬附に而引取申人々有之候。然所右引米切手を賣拂、買留人より右切手を藏宿へ持參、給人誰引米之旨申立引取申儀折々有之躰相聞え候。不作之年柄者、別而右躰紛敷筋有之候而者、村々致迷惑、第一藏米しらべ方指支候間、向後爲用米致引米候人々は、正月中石數等藏宿へ申渡置、紛敷筋無之樣御家中一統被仰渡候樣仕度候。以來右躰紛敷儀有之候ば、指押及斷候樣申渡置候段、御郡奉行紙面に御算用場奉行以添紙面申聞、承屆候條被得其意、組・支配之人々に可被申聞候。組等之内裁許有之面々は、其支配へも相達候樣被申渡、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

正月廿七日　　本多玄蕃助

諸頭御用番連名殿

二月二日。德川家齊、前田治脩に鶴を贈る。

〔政隣記〕

二月二日御使番寛助兵衛殿を以、御鷹之鶴御拜領之段、九半時頃御當番御目付衆より御小人目付を以爲御知有之に付、一統服紗小袖・布上下に改候處、八時頃追々御附人告來、鶴指續、上使助兵衛殿御出。御門外へ前田大炊・今枝内記・聞番二人、御白洲へ頭分八人、幕番所前へ御門受取之頭、同邊喰違前へ割場奉行兩人罷出、御玄關敷付へ飛驒守樣・前田信濃守殿等、御取持之御旗本衆御二人御出、鏡板へ御前御出迎、階上列居御用人・御番頭・御横目・御大小將、御刀取御大小將大村七郎左衛門相勤之。御前御誘引に而御大書院に御通、上意御拜聽之上、御熨斗木地三方出之、御餠菓子等左之通（略）。御盃事御斷、御酒之上御肴御持參。御相伴山本伊豫守殿（御先手也）には、御かよひ役引之。右夫々相濟御退出、其節御作法最前之通。

一、上使御退出後、追付之御供揃に而八半時頃御出、爲御禮御登城、御下り御老中方幷本多彈正大弼殿へ御廻勤、七半時御歸殿。

二月六日。佐久間與左衛門の若黨小者等博奕の嫌疑を以て吟味せらる。

〔政隣記〕

二月六日佐久間與左衛門若黨一人・小者一人、石黒小右衛門裁許人・若黨・小者都合三人、於御小屋博奕致候躰御横目足輕より及斷候に付、先頃より主人に御預之處、今日就御吟味に、

御先手上月數馬・奥村十郎左衞門、御横目永原半左衞門、朝五時より割場吟味所へ出座、翌七日朝五時各退出。右之者共如元主人御預之事。

但、佐久間家來小者は博奕道具持有之、石黑小者は法外之過言を申に付、此兩人は禁牢。其外之三人者一向博奕不仕段申聞、未致落着候由之事。

附、同月廿七日再御吟味之所、博奕者不致趣に落着。依之從御上御貪着無之。但石黑裁許人者締方相勤候者之處、不行屆趣有之に付牢揚屋へ被入。

二月十一日。前田治脩平尾邸に狩獵を試む。

〔政隣記〕

二月十一日、今曉七時御供揃に而御下屋敷へ被爲入、都而前月十八日等之通に付略記す。今日も御獲物無之四時前御歸館之事。

右之通度々被爲入候儀は、前月十六日御上邸御庭之內於御堀鴨二羽被爲獲候に付、今一羽被爲打獲候者御三家樣方へ一羽宛御進贈被遊度思召候に付、每度御下邸へ御出に候得共、前月十八日附記之通に而不被爲獲候。曁御上邸御堀へも、右二羽被爲打候後は一向不來与云々。

二月十三日。前田治脩再び平尾邸に狩獵を試む。

〔政隣記〕

能番組は之を略す

二月十三日曉七時御供揃に而、御下邸に御出、四時前御歸館。今日も鴨不被爲獲、其外一昨十一日記等同斷。

二月十六日。前田治脩、重教夫人等を招請し、大聖寺侯前田利考亦之に臨む。

〔政隣記〕

二月十六日、御表居間へ年頭始而、御轉任後初而旁、壽光院様・蓮仙院様・松壽院様・御招請有之、依之御能左之通、御歩並以上當番之人々見物被仰付、御禮御近習頭を以申上。平士以下之分ハ頭・支配人引受、同人を以申上。且今日飛驒守様御見廻懸り之趣を以御出、御能幸御見物被成候様被仰進候而、御中入之節御對顏、一汁五菜之御料理等、幷暮頃御夜食、御能相濟御餅菓子等被進之。御供之侍已上へも見物被仰付、一汁三菜之御料理等兩度被下之。暫壽光院様附、蓮仙院様・松壽院様之御供人見物被仰付、御料理等兩度、御餅菓子等被下之。御能朝四時過始り、夜中五時頃相濟候事。

二月二十日。百姓の變死したるものゝ跡目に關する取扱方を令す。

〔加州郡方舊記〕

一、百姓之内若致變死候者之跡目之儀、享保年中申渡置候趣茂有之、其後區々に相成り候。依而此度詮議之上、異變無之亂心之躰に而致變死候者之儀者、其品承り糺、子弟等ゟ跡目願次第可承屆候條、已來右之通相心得詮議可有之者也。

丑二月廿日　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

二月廿一日。前田治脩初めて徳川家齊の直判内書を受く。

〔政隣記〕

二月廿一日九半時御供揃に而、御老中方幷本多彈正大弼殿御勤可被遊旨、今朝被仰出、同刻頃御出、八時過御歸殿。

右御廻勤ニ、昨日御老中御用番戸田采女正殿より以御剪紙、今朝御城ゟ聞番被召呼、舊臘歳暮之御献上物に付、御直判之御内書御渡、宰相御拝任故也。今日御直判之御内書初而御頂戴に付、御禮之御廻勤也。右ニ宰相に被爲成候に付御書判也。尤是以後は御内書毎々御書判之御例也。依之頭分已上布上下着用、三四人宛御席ゟ可罷出旨、大炊殿被仰聞候段、御横目申談に付罷出候處、左之通り則大炊殿御演述。

舊臘歳暮御祝儀被指上候に付而、今日御直判之御内書初而御頂戴被遊、忝御仕合被思召、此

段何も可申聞旨御意に候事。
右拜聽退、重而罷出恐悦申上候事。但、御帳に附候儀等無之、且今日御使等に而不在合者へは、同役等より演述可仕旨、御横目を以大炊殿被仰聞、追而本人より恐悦申上候にも不及候等之事。

二月廿二日。藩侯に供奉して歸國するものゝ土産物を齎すことを禁ず。

〔政隣記〕

付札、組頭江

前々より、江戸御供等に而罷越候人々江致餞別、又は罷歸候節土産物無用に可仕旨被仰出有之、去々年御歸國之節御供人幷交代等に而罷歸候人々も、土産物等致持參候儀堅致無用、假令身近親類緣者たり共、勿論右之沙汰に及申間敷候、御發駕・御着城之節衣類相改候族も有之躰に候得共、見苦敷儀者不被及御貪着候間、不及相改候旨被仰出、一統申渡候通に候。當時別而嚴敷御省略中に候間、當御歸國・御供等に而罷歸候人々も、去々年之通嚴重に相守可申候。右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々へも嚴重可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配へも可申渡旨可被申談候事。

丑　二　月

二月廿二日觸出なり

右大炊殿御渡之旨等、大屋武右衞門・高田新左衞門連名之廻狀、諸頭連名に而出。

附、於金澤ら御用番大隅守殿より今月晦日御觸有之。

二月廿四日。岩田是五郎、前田治脩昇任の口宣を齎して江戸に歸る。

〔政隣記〕

二月廿四日岩田是五郎於京都御使御用夫々相濟、今月八日京都發足之處、川支に而三ヶ日之逗留有之、一昨廿二日藤澤驛止宿、昨夜品川驛止宿、今朝四時頃無異儀歸府、直に御館に罷出、大屋武右衞門誘引御次へ出、御近習頭を以言上、夫より御席へ出、口宣旨等竹田掃部より取受來候一認、是自分御使書共大炊殿へ御達申候事。

附、舊臘十七日記之通百五十兩、幷中勘御扶持方代路銀馬銀等受取候內を以、發出前於江戶表拵物料等に六十匁計入拂、右殘金不殘、幷自分に貯用金五十兩調達に而持參之處、存外に夥敷入用懸り、不殘遣ひ切、僅八兩計餘り候內、舊臘廿四日より今日迄の諸入用、都合金小判二百兩餘与云々。右岩田是五郎心覺等借覺左に記之。

宰相成

禁裡　御太刀折紙・白銀百枚。上﨟御局　銀五枚。長橋御局　銀五枚。大御乳人　銀五枚。執次　銀一枚。

仙洞　御太刀折紙・白銀五十枚。新中納言御局　銀五枚。勘解由小路御局　銀五枚。別當御局　銀五枚。執次　銀五枚。

女院　折紙・白銀五十枚。堀川御局　銀五枚。裏松御局　銀五枚。執次　銀五枚。

内侍所　御太刀折紙・白銀二枚。

上卿　銀六十目。職事　銀六十目。宣旨　銀五枚。中將如元上卿　六十目。中將如元職事　銀六十目。中將如元宣旨　銀五枚。兩傳奏　銀十枚宛。副使　銀二十目。中將如元副使　銀二十目。雜掌四人　銀一枚宛。

後之御禮

禁裡　御太刀馬代黄金一枚・綿五十把。

仙洞　御太刀馬代白銀五枚・綿五十把。

女院　目錄・綿五十把。

一、紗綾五卷包のし・御目銀　傳奏萬里小路前大納言殿・正親町前大納言殿、院傳奏六條中納言・梅小路前宰相殿。

一、御太刀馬代黄金一枚・綿二十把・干鯛一箱・御目錄　堀田相模守殿。

一、御太刀馬代黄金一枚・御目錄　町奉行三浦伊勢守殿・菅沼下野守殿・有馬播磨守殿、禁

裡御附武家石谷肥前守殿、仙洞御附武家三枝豐前守殿・安部駿河守殿。

癸酉二月參内　御用使者　竹田掃部。御使者指副　淺加作左衛門。御進献物指添　和田耕藏・狩谷津太夫。小遣小者　二人。持參人　五十七人。

右就御用罷出候人々諸事指引　職原　平田内匠。作左衛門一役に付助相勤　木下彌一兵衛。諸事指引等　大森三郎兵衛。判金御用　後藤勘兵衛。御服所　菱屋次郎兵衛・桔梗屋源藏。掛屋　平野屋次兵衛。太刀師　廣野播磨守。指物師　山本嘉吉。木具師　木具屋善右衛門・木具屋九兵衛。大森手代　安兵衛。桔梗屋手代　利兵衛。延縄取扱人宰領手傳等　北國屋源助。

一、御長持五棹、但四人懸り。　一、釣臺八指、但三人懸り。　一、木具二指但三人懸り。

五十八人外増七人。

一、口宣御小長持一つ　岩田是五郎・宰領足輕二人・持參人小者四人。

傳奏衆より被申述候御口上寫

今度被任宰相爲御禮目録之通被献之、目出被思召候。女院よりも御同樣。

仙洞御所より之御口上

此度任官に付目録之通被献之、御機嫌に被思召候事。

口宣　二枚。　宣旨　一枚。　位記　一卷。
右御拜覽は相公樣御獨見之外不相成と云々。

三月六日。前田重教夫人鳥取侯の金杉邸に赴く。

〔政隣記〕
三月六日御供揃に而、同刻過より壽光院樣略御行列に而御出、桂香院樣へ（因州鳥取侯松平相州樣御母堂。是金杉ノ御中邸に御居住、壽光院樣御伯母也。）被爲入、翌七日朝六時過御歸。右御邸は御庭より直に渡也。海際之御亭に而御饗應、藝子女被召寄、三味線・踊被仰付、且海路之通船等御見物、暨汐干に付貝御拾ひも有之、曳網も被仰付候處、大鯛・鰡數多捕れ、夜に入候而は女中等へ芝居・狂言被仰付、其外種々御饗應御慰共有由也。御供人、御表よりは御大小將横目安達彌兵衛・御大小將三人罷出、御賄料理一汁五菜・御吸物・御酒・御肴、暮頃一汁一菜之御賄、夜半頃一菜之御湯漬被下之、下々迄夫々右に准之被下之。從者共にも赤飯被下之候事。

三月七日。前田齊敬金澤を發して江戸に向ふ。

〔御年譜〕
一、佐渡守樣三月七日金澤御發、同十九日御着府。

三月十三日。前田治脩、德川竹千代髪置の祝儀を受く。

〔政隣記〕

三月十三日九半時頃、御當番御目付衆より御小人目付を以、追付上使御奏者番松平能登守殿を以、御髪置爲御祝儀、從若君樣御兩殿樣へ御拜領物有之段爲御知。依之一統熨斗目・上下に着改候處、無程御拜領物、相公樣へ干鯛一箱・御樽代千疋、佐渡守樣へ干鯛一箱御到來。御大書院三ノ間御杉戶外迄御步持參、夫より御大小將六人受取之、御大書院御上段下に餝之。無程上使能登守殿御出。御門前へ前田大炊・今枝內記・聞番三人內菊池九右衞門、御白洲之內御先立相勤。御白洲右之方へ頭分八人、左之方へ御門受取之頭幷割場奉行等罷出。敷附へ飛驒守樣幷御取持之御旗本衆五人、敷付中程へ御前御出迎、御大書院へ御誘引。御熨斗木地三方出之、上意御拜聽之上、御小書院へ御誘引。御料理・御盃事御斷に付、御餠菓子等段々出之、御酒・御肴は御持參。御相伴御先手山本伊豫守殿へは御給事人出之。御かよひ御表小將。右畢而御請被仰上、追付御退出之節、御作法最前之通。御刀取御大小將永原七郎右衞門、階上列居組頭・御用人・聞番・御番頭・御横目・御大小將。右爲御禮八時御出御登城、幷御老中方御勤。且御立戾今朝之御勤も有之。七時頃御歸、直に御居宅へ被爲入候。將又飛驒守樣幷御取持衆へ、溫飩・御吸物・御酒・御肴、上使御退出後二汁五菜之御料理等、御菓子迄出之。御

給事御大小將。

三月十五日。大聖寺侯前田利考前田治脩を本郷邸に訪ふ。

〔政隣記〕

三月十五日月次御登城、四時御歸館。且飛驒守樣御目見相濟候後、此方樣に茂初而御對顏、御盃事之上御刀被進候御例之處、彼是相延、去年九月右御作法に而御招請之筈に候處、其節ゝ相延、今日御招請、從御城直に御出、都而左之御作法書之通。御相伴能勢市兵衛殿、御嘉儀齋藤長八郎殿之事。

飛驒守樣當十五日御出之節御作法

一、御附人御城下ら幷本鄉三丁目二人宛付置可申候。御登城無御座候はゞ、御宅へ迄二人付置可申候。

一、御出之節中之口御玄關へ物頭兩人、御刀持御小將罷出、御溜へ物頭御誘引仕、御茶・御たばこ盆出之、御口上を以可被仰上候。

一、御居間書院へ御通之儀、被仰出次第組頭御誘引仕、右御通之段達御聽、御前御出御對顏之內、御熨斗木地三方出之、引之、御前御勝手へ可被爲入候。

一、御刀御溜より新御廊下入口迄御大小將持參仕、夫より御表小將受取、御居間書院上之御

縁頰に直之可申候。

一、御料理二汁六菜塗木具、御相伴御取持衆之内御一人可申談候。

一、御引菜、御前御持參可被遊候。御相伴へ者御給事人引之可申候。御酒之上、御肴御取持衆御引被成候樣に可申談候。御相伴に者御給事人引之可申候。

一、御盃事御土器木地三方、御肴同一向出之、御前御初に而飛驒守樣へ被進、御肴も被進。此時被進候御刀、御取持衆之内御持參、御戴御退座、御指替御禮被仰上、重而御着座之上御加被成御返盃、御肴も被上、御加御納可被遊候。御前御勝手へ被爲入、御濃茶後御菓子迄段々出之可申候。

一、御退出之節、御居間書院御廊下中程迄御送可被遊候。夫より御溜へ組頭御誘引仕、御近習頭を以御對面之御禮等可被仰上候。御退出之節御玄關へ、物頭等最前之通罷出可申候。

一、御居間書院御飾被仰付に而可有御座候。

一、御取持衆本多帶刀殿・齋藤長八郎殿可申遣候哉。

一、御城坊主衆利倉善佐・谷村嘉順内罷出候樣可仕哉。

一、右御用携候人々、服紗小袖・布上下着用可仕候。

右延享元年十一月造酒丞樣初而御出之節、安永三年十一月造酒丞樣・備後守樣御同道初而御

出之節之御振合を以詮議仕奉伺候、以上。

三月十一日

大屋武右衞門
高田新左衞門

右御客方、組頭より伺之通被仰出、則今日右御作法書之通り、本多帶刀殿に御隙入有之に付、能勢市兵衞殿御出之儀申遣候事。

三月十八日。藩侯に供奉して歸國するものに扶持方を增貸す。

今日は三月十八日

〔政隣記〕

春來諸物高直、御供に而罷歸候人々難澁、御供出立指支候者も有之段、大谷武右衞門より段々願に付、格別之趣を以御聞屆、御歸國御供人之內、去秋以來相詰候者は者、一人扶持に銀八十目宛、右詰之者は者一人扶持に金小判一兩宛御貸渡、足輕・小者は者右割合を以可被下段被仰出候由、今日前田大炊殿被仰渡候旨、大屋より諸頭へ廻狀出。

但、交代歸之御大小將中は者、知行之高下無差別金小判五兩宛御貸渡、是又諸物高直等に而指支候に付、格別之趣を以頭より之願御聞屆之事。

三月十九日。前田齊敬江戶に着す。

〔政隣記〕

三月十九日曉七時御供揃に而、佐渡守樣巖驛御發駕之筈に付、爲御待受朝六時過揃に而、各御殿に布上下着用相詰有之候處、四時過着府、追分口御門より御入、中之口御式臺より被爲入、大炊・内記幷頭分御白洲へ罷出、略指迄に而出。御近習頭暨石野主殿助蔦之間御廊下へ罷出、中ノ口より御附人持永原將監御先立に而、御溜へ被爲入、夫より於御居間書院、御旅裝束之儘に而相公樣へ御對顏、御熨斗三方御表小將上之。右相濟、御奥に被爲入、重而御表へ御出、御客衆へ御對顏、一先御溜へ被爲入、夫より中之口二枚開より御本宅御廣式へ被爲入、御對顏等之御禮壽光院樣に被仰上、夫より新御居宅へ被爲入。追付御老中方御廻勤、御表より御供御先角御大小將三人迄、其外者御身附より罷出、且又入江廣瑞・古筆了意等御出入之町人共、御客衆へ御對顏に御出之剋御通懸り御目見、奏者組頭・物頭・御番頭勤之前業大炊殿被仰渡有之、儀等、相公樣御着府之節御同事。

三月二十日。前田治脩湯島の聖堂に詣づ。

〔政隣記〕

三月十九日、明廿日五半時御供揃に而聖堂に御參堂、夫より傳通院へ御參詣被仰出。且御參堂に付御目見以上服御改之段も、石野主殿助を以被仰出、奉自分。夫に付左之通相窺之候處、伺之通就被仰出候、夫々申談候。御取次石野。

明廿日聖堂御參堂之節、仰高門之外に而御下乘。三十人頭此所に相殘、入德門外隬木坂之下に而、私共以下新番迄幷御草履取相殘。雨天に候得ば、入德門之內御手傘御手自被遊御指、夫より內上下御供之者迄御供仕可申奉存候。

一、御下乘より上下御供之組頭御先立可仕儀与奉存候。

一、步御供一統羽織・袴着用可仕与奉存候。

一、仰高門より三・四間計手前に而、御挾箱・御步・御鎗相殘可申与奉存候。

一、惣從者仰高門より十間計手前に而、見計相殘可申与奉存候。

右元祿四年閏八月十八日御參堂之御振合を以、詮議仕奉伺候。其以後も御先代樣每度御參堂御座候得共、委曲之儀留帳に相見え不申候間、右之振合に相心得可申哉与奉存候。

右奉窺候、以上。

三月十九日

田邊長左衞門
津田權平
永原半左衞門
安達彌兵衞

〔政隣記〕

三月十九日曉七時御供揃に而、佐渡守樣蕨驛御發駕之筈に付、爲御待受朝六時過揃に而、各御殿ゟ布上下着用相詰有之候處、四時過着府、追分口御門より御入、中之口御式臺より被爲入、大炊・内記幷頭分御白洲へ罷出、略指迄に而出。御近習頭暨石野主殿助蔦之間御廊下へ罷出、中ノ口より御附人持永原將監御先立に而、御溜へ被爲入、夫より於御居間書院、御旅裝束之儘に而相公樣へ御對顏、御熨斗三方御表小將上之。右相濟、御奥ゟ被爲入、重而御表へ御出、御客衆へ御對顏、一先御溜へ被爲入、夫より中之口二枚開より御本宅御廣式へ被爲入、御對顏等之御禮壽光院樣ゟ被仰上、夫より新御居宅へ被爲入。追付御老中方御廻勤、御表より御供御先角御大小將三人迄、其外者御身附より罷出、且又入江廣瑞・古筆了意等御出入之町人共、御客衆へ御對顏に御出之刻御通懸り御目見、奏者組頭・物頭・御番頭勤之前華大炊殿被御渡有之、儀等、相公樣御着府之節御同事。

三月二十日。前田治脩湯島の聖堂に詣づ。

〔政隣記〕

三月十九日、明廿日五半時御供揃に而聖堂ゟ御參堂、夫より傳通院へ御參詣被仰出。且御參堂に付御目見以上服御改之段も、石野主殿助を以被仰出、奉自分。夫に付左之通相窺之候處、伺之通就被仰出候、夫々申談候。御取次石野。

明廿日聖堂御參堂之節、仰高門之外に而御下乘。三十人頭此所に相殘、入德門外鳫木坂之下に而、私共以下新番迄幷御草履取相殘。雨天に候得ば、入德門之內御手傘御手自被遊御指、夫より內上下御供之者迄御供仕可申奉存候。

一、御下乘より上下御供之組頭御先立可仕儀与奉存候。

一、歩御供一統羽織・袴着用可仕与奉存候。

一、仰高門より三・四間計手前に而、御挾箱・御歩・御鎗相殘可申与奉存候。

一、惣從者仰高門より十間計手前に而、見計相殘可申与奉存候。

右元祿四年閏八月十八日御參堂之御振合を以、詮議仕奉伺候。其以後も御先代樣每度御參堂御座候得共、委曲之儀留帳に相見え不申候間、右之振合に相心得可申哉与奉存候。

右奉窺候、以上。

三月十九日

田邊長左衛門

津田權平

永原半左衛門

安達彌兵衛

〔政隣記〕

三月廿日、前記之御供揃に而同刻頃御出、御參堂等被遊、四時頃御歸館。自分御供。御横目御供安達彌兵衛。聖堂上下御供頭高田新左衛門・御使番石黒小右衛門・御表小將林平二郎、三人共服紗小袖着用。御前御長袴被爲召候。聖堂へ御太刀馬代金御獻納、御先使聞番菊池九右衛門勤之。但伺之上申渡置候迄、御草履取入徳門外雁木坂之下に相殘候處、杏檀門迄被召連候儀不指支段御役人申聞候由、聞番菊池九右衛門申聞候に付、御供爲仕、其段御歸殿之上主殿助を以申上置候。且入徳門より內には上下御供等も素足に而御供、御前には御草履被召替候事。

三月廿一日。前田治脩東叡山及び增上寺に詣づ。

〔政隣記〕

三月廿一日五時御供揃に而、同刻過御出、上野御宮惣御靈屋、夫より增上寺惣御靈屋御參詣、并御本坊・方丈御勤。夫より芝御廣式に被爲入、夜九半時頃御歸殿。

三月廿八日。馬廻組馬場孫三の嫡子藤左衛門金澤より出奔す。

〔政隣記〕

本年五月十日の條參照

一、御馬廻組會所奉行當時在江戶馬場孫三嫡子藤左衛門今年廿八歲儀、三月廿八日より出奔之躰に而在合不申に付、所々尋候得共行衛不相知に付、今月上旬表立及御屆。但千代能与申徘徊女を先へ爲致發足置、藤左衛門儀跡より、金子も五六十兩計貯罷越候由風說有。

十八日は廿八日の誤なり

三月廿八日。前田治脩就國の暇を受く。

〔政隣記〕

三月十八日、昨日より上使之御内沙汰に付、今日一統五時揃之處、九時前御當番御目付衆より、追付爲上使御老中松平伊豆守殿御出之旨、御小人目付を以爲御知有之、問番承達御聽。夫より一統熨斗目に改。但御暇之上使は、頭分以上幷御給事役迄熨斗目、其外取次御小將等者服紗小袖・布上下之御例に候得共、今日者佐渡守樣御參府に付而之上使も御兼に付、一統熨斗目着用也。

追付御拜領物紗綾三十卷・白銀五十枚、從若君樣紗綾二十卷到來、御玄關より御大書院三之間御杉戸際迄御步持參、夫より御大小將六人（臺一つ二人宛也。）に而持運之、御上段際に飾之、從御臺樣も御拜受物卷物五つ到來、是又右同樣に而、先御大書院溜に指置、伊豆守殿御退出之上右同斷御上段際に飾之、將又御拜領物者、上使御小書院に而御饗應之間に御大小將舟之間へ引之。

然所御附人追々告來、九半時頃上使松平伊豆守殿御出、御門下へ御兩殿樣御出迎、御門外へ年寄衆等幷問番三人、御白洲へ頭分十人、幕番所前へ御門受取之物頭・割場奉行與力、敷付へ飛驒守樣幷御取持山本伊豫守殿等七人、階上列居前々之通り、御前御先立被遊、佐渡守樣者上使御跡に御隨ひ、於御大書院上意御拜聽、御拜領物御頂戴、御勝手へ被爲入、夫より佐

渡守様上意御拜聽、畢而御熨斗木地三方出之、夫より御小書院へ御誘引、二汁六菜之御料理等出、御前御相伴、向詰御持參、御濃茶者佐渡守樣御持參、御酒・御肴は飛驒守樣御持參。御兩殿樣共御盃事被遊、夫より後御菓子等迄段々出之、御給事御表小將。畢而無程御退出、御作法最前之通。暫有之、從御臺樣御使御廣式御用人中嶋三左衛門殿を以、前記之通御拜受物有之、御作法都而御使番上使御同樣、二月二日之通に付略す。於御大書院御餅菓子等段々出之、御盃事御斷之事。

但、上使御刀持池田數馬、御使御刀持は石黒庄司郞之事。

三月。河北郡大根布村の位置を轉ぜんことを出願し、尋いで之を許さる。

〔大根布村文書〕

乍恐以書付奉願候。

一、私共在所之儀者、村園林等も無御座、潟緣に家建居住仕候故、年々家腰に砂吹懸、當時家續後方砂山岸に懸り、逐危居住難罷成候に付、領地之中屋鋪替之場所、村中示談仕候得共、家建替可申場所無御座候間、何卒相成候儀に御座候者、領續本根布村領北之上二百五十間借地仕、屋鋪替仕度奉存候。此段本根布村詮議被成下、指支不申候者奉願候通被爲仰付可被下候。尤村家數七十五軒之内三十軒餘砂吹懸、當時危場所御座候。尚相殘り申者共、隨分手段

を盡して砂防候得共、此末五三年之居住茂難計奉存候間、追而右借地に家建被爲仰付候樣奉願上候、以上。

寛政五年三月

大根布村肝煎 四郎右衛門
同村組合頭 與兵衛
同 十兵衛
同 源四郎
同 久右衛門

白尾村 理右衛門殿

右大根布村家屢砂山なだれ落、居住難罷成相斷、見分仕候處、相違無御座候間、本根布村に居屋鋪替奉願候通被仰付被下候、以上。

白尾村 理右衛門

林 彌四郎殿

高澤平次右衛門殿

表書所替家建願之趣、御用番御年寄衆に相達、御聞届之上承屆候條、借地境急度相立置、以來申分無之樣相心得可申候、以上。

高澤平次右衛門

林　彌四郎

本根布村は向粟崎村の北に接續したるなり

〔大根布村文書〕

一、私共隣村大根布村家廻に砂吹付、居住仕兼候に付、私共在所領に致借地、家建仕度旨相願候に付、指支申儀茂無之候やと御尋被成候。私共村中一統示談仕候通、大根布村願之趣無據儀私共思惟仕通に御座候間、大根布村領境より本根布村領之内北之方二百五十間貸渡置可申旨、村中何茂申聞候間、大根布村より御願申上候通に被爲仰付可被申候。尤領境之儀者前々之通相心得可申候得共、御請書印形仕上申候、以上。

寛政五年三月　向粟崎村・本根布村肝煎　伊右衛門

組合頭　多右衛門

白尾村　理右衛門殿

右本根布村之者共手前相糺候處、相障申儀無御座旨に付、印形爲致上之申候、以上。

白尾村　理右衛門

林　彌四郎殿

高澤平次右衛門殿

表書之趣御用番御年寄衆に相達御聞屆候。爲後年本根布村書付相渡置候也。

林　彌四郎

高澤平次右衞門

大根布村百姓中

四月朔日。前田治脩柳營に登りて就封の辭見す。

〔政隣記〕

三月廿九日八時頃御用番戸田采女正殿より以御奉書、明朔日五時御登城御暇之御禮可被仰上旨申來、佐渡守樣にも御同人より以御奉書、御參府之御禮可被仰上旨御同樣に申來。依之明日御殿向一統服紗給・布上下着用、平詰之旨御横目中申談有之。

〔政隣記〕

四月朔日、昨日之依御奉書、今朝六時御供揃に而、同刻過佐渡守樣御同道御登城、御下り御老中方幷御同格若御年寄衆御廻勤、九時過御歸館。但上下御供者熨斗目着、佐渡守樣は尤若御年寄御廻勤無之儀、御先例之通也。

附、此方樣若御年寄御廻勤者御暇之御禮被仰上候刻、其外者。

同日於御席、頭分以上幷聞番見習へ左之通大炊殿御演述。畢而於竹之間、頭分以上迄御帳に

其外はの次無之を脫歟

付恐悦申上候事。

前月廿八日上使松平伊豆守殿を以、御國許ゟ之御暇被進、白銀・御卷物御拜領、從若君樣右御同人を以御卷物御拜領、從御臺樣も中嶋三左衛門殿を以御卷物御拜領被成候。昨廿九日依御奉書、今日御登城被成候處、於御座之間御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、御手自熨斗鮑御頂戴、御鷹御馬御拜領、次に大炊・隼人御目先、拜領物も被仰付、重疊難有被思召候。將又今般佐渡守樣御參府に付、前月廿八日上使松平伊豆守殿を以被蒙上意、且今日御禮可被仰上旨、昨日依御奉書御登城、於御白書院御禮被仰上候處、御懇之被爲蒙上意、相公樣も御禮被仰上候處、御懇之被爲蒙上意、難有被思召候。此段何茂へ可申聞旨御意に候。

〔續德川實紀〕

四月朔日、月次例の如し。松平佐渡守齊敬・松平攝津守義裕參覲す。松平加賀守治脩就封の暇下され、鷹・馬を賜ふ。

四月四日。前田治脩江戸を發し歸國の途に上る。

〔政隣記〕

四月四日、八時御供揃に而、今日夕七時過御例之通表御式臺より御發駕、其節御通り懸り御目見、御居間書院四之間に而出雲守樣等御附使者、同御廊下先入口廣端、御料理之間御勝手

之方御緣頰屛風圍之內古筆了意、同下之方藤井貞立、御料理之間上之間御城坊主衆（間番御取合申上。）同御廊下屛風圍公儀御役者寳生大夫等、御廣間上之間御敷居際中納言樣等御附使者、（但御附使者不來。）右御緣頰御通筋西之方親安・意安・後藤本家之者、同御緣頰西之方御一門肥後守樣等御附使者、御使者之間御緣頰御杉戶之外町醫師等。右夫々御會釋、奏者組頭・物頭・御番頭・御臺所奉行代々繰々に相勤、尤先達而奏者可相勤旨被仰渡有之。（大炊殿也。）御式臺階上疊之上へ、御出入御旗本衆御送廿人餘御出、佐渡守樣・飛驒守樣・織田織部殿・前田信濃守殿、幷御用御賴之御先手衆・其外本多帶刀殿・齋藤長八郞殿等御格別之御出入衆十人餘、敷付へ爲御送御出。且又階上板之間御勝手之方へ後藤本阿彌・狩野家・寳生彌五郞罷出、御白洲へ御目見之町人共幷番所前へ罷出、其外前々之通、御先立御家老西尾隼人（若年寄兼也。）勤之。御供之前田大炊敷附に蹲踞、御跡より御行列に加り候。御着笠如例三十人頭加藤甚五兵衞上之、御馬に被爲召候事。

但、御小將頭大屋武右衞門等前記之通御供に而發足之事。

一、爲御見立御出之飛驒守樣等於御席に、一汁五菜之御料理等後御茶迄段々出之。幷御附使者等都而御見立に出候人々、於席々御料理等被下之候事。

一、今日御發駕、十二御泊附左之通。

浦和　熊谷　板鼻　追分　榊　牟禮　高田

四月六日。小松定番馬廻葛巻內藏太、その裁許人を手討とし次いで自殺す。

〔政隣記〕

四月六日曉小松定番御馬廻御番頭葛巻內藏太（領七百石、金澤居邸安江木町專光寺向。）儀、家來裁許人を致手討候處、初刀薄手に而部屋へ逃込候處、追懸來り討留之。右家來取逃候に付手疵を爲負、內藏太居間へ立歸、檢使之書付自筆に調、其上に而致亂心候哉、其身自害相果。依之爲檢使御大小將横目今村三郎太夫・丹羽六郎左衛門、翌七日曉金澤發小松へ罷越、八日夕方罷歸。但內藏太檢使之書付を調居候處、右家來妻夫之敵也与背より突貫候處、深手故令自殺与云々。

四月八日。前田齊敬東叡山及び傳通院に詣づ。

〔政隣記〕

四月八日四時御供揃に而、上野御宮惣御靈屋へ佐渡守樣御參詣、并御本坊御勤。夫より傳通院へも御參詣。

四月十六日。前田治脩金澤に歸城す。

〔政隣記〕

四月廿三日、去十六日金澤發之中飛脚、戊上刻江戸着、左之通申來。

相公樣御道中御日圖之通御通行、十六日朝五半時頃御歸城、追付之御供揃に而野田泰雲院樣御暇へ御參詣、且御歸國爲御禮公邊ゟ之御使、生駒右近御目見被仰付候後、御年寄衆於席御例之通紗綾二卷・御羽織被下之、披露御大小將松原安左衞門。

但、生駒右近廿七日江戸參着。

四月二十日。前田齊敬東叡山に詣づ。

〔政隣記〕

四月廿日上野へ御成。還御後、九時過右御佛殿へ佐渡守樣御參詣。

四月廿二日。前田齊敬增上寺に詣づ。

御成は德川家齊

〔政隣記〕

四月廿二日五半時御供揃に而、增上寺惣御靈屋へ佐渡守樣御參詣、方丈御勤。直に芝御廣式へ被爲入、暮頃御歸之事。

四月廿四日。御馬廻組有澤數馬蟄居を命ぜられ、家傳の軍書は之を押收

せらる。

〔政隣記〕

四月廿四日於金澤、左之通被仰付。

御馬廻組　有澤數馬

不愼之趣等有之に付、逼塞被仰付、御横目足輕兩人宛勤番。

但、翌廿五日より御近習御用横濱善左衛門・御表小將横目玉川孤源太、右宅へ連日罷越、家傳之軍書等御取揚、土藏も善左衛門・孤源太立會相改、封印被仰付。

四月廿五日。大聖寺侯前田利考歸邑の暇を給はりたるを以て本郷邸を訪ふ。

〔政隣記〕

四月廿五日、飛驒守樣今日御登城之處、御在所へ之御暇始而被仰出、御卷物十・御馬一疋御拜領、御目見御禮被仰上候處、御懇之被爲蒙上意、從若君樣も御拜領物被成。依之御普爲聽直に御出之事。

但、昨日御老中方御連名之以御奉書、今日御登城被成候樣申來候由之事。

四月廿六日。前田治脩石川郡粟ヶ崎に放鷹す。

〔政隣記〕

四月廿六日九半時御供揃に而、粟ヶ崎筋御放鷹、暮六半時過御歸殿。御獲物鶴・鷺九つ、御拳も有之候事。

四月廿七日。前田重教夫人兩國筋に船遊を行ふ。

〔政隣記〕

四月廿七日朝より、爲御行歩壽光院樣淺草邊へ被爲入、夫より兩國筋等御船に而御廻り、投網等被仰付御覽、夜五時過御歸。

四月廿八日。大聖寺侯前田利考將に歸邑せんとするを以て本郷邸を訪ふ。

〔政隣記〕

四月廿八日飛驒守樣爲御暇乞、九時前御出、左に記す御作法書之通に而、御料理御相伴齋藤長八郎殿、御酒・御肴御持參。且御嘉儀は能勢市兵衛殿。畢而九半時頃御退出。中之口御門邊より爲御禮御立戾、御口上御用人へ被仰置御退出。其節は御平生之通御先立物頭。

飛驒守樣就御歸邑御暇乞御出之節御作法

一、御附人御宅又は御勤等御座候其外にも、御附人指遣可申候。
一、御出之節中之口御玄關へ、御家老并組頭・御横目罷出、組頭御先立、常御溜へ御誘引仕、御口上佐渡守樣へ達御聽、被仰出次第御居間書院へ組頭御先立可仕候。
一、御刀御居間書院御棚下に直し可申候。
　但、御刀新御廊下之内迄御大小將持參。夫より御側小將へ相渡可申候。
佐渡守樣御出、御挨拶被遊、御熨斗木地三方出之可申候。御料理御挨拶被遊、御勝手へ被爲入、御取持衆之內御相伴に而、二汁五菜御料理出之、御引菜佐渡守樣御持參被遊、御相伴へは御給事人引之可申候。御酒之上御肴御取持衆御持參、御相伴へは御給事人引之可申候。
一、御吸物出、御土器塗三方、御肴同出之、佐渡守樣御始に而飛驒守樣江被進、御肴も被進、返盃、御肴も被上、御加御納可被遊候。御嘉儀、御取持衆可被成候。
一、御退出之節、御家老初最前之通中之口へ罷出可申候。
一、御客衆へ罷出候人々迄、服紗小袖・布上下着用可仕候。
右御作法書には、御發駕前今月二日、御客方組頭右兩人より、石野主殿助を以奉伺候處、伺之通被仰出候事。

是月は大盡なり

四月晦日。前田齊敬增上寺に詣づ。

〔政隣記〕

四月晦日増上寺へ御成。且佐渡守様九時御供揃に而、増上寺有章院様御靈屋へ御參詣、池徳院へ御立寄、七時御歸。

五月七日。本日以後前田治脩屢〻學校に臨む。

〔政隣記〕

一、五月七日以來相公樣兩學校へ度々御出有之。

一、今月相公樣度々御放鷹・御川狩御出有之。

五月七日。前田吉德の女暢姬江戸品川筋に行歩を行ふ。

〔政隣記〕

五月七日、祐仙院様五半時御供揃に而、略御行列を以、爲御行歩品川筋へ被爲入、御歸には高縄より昌平橋迄御船に而、夜四時過御歸。

五月八日。前田齊敬東叡山に詣で、押足輕林唯右衞門等尾張侯の從者と衝突す。

〔政隣記〕

じつていは十手なるべし

五月八日、佐渡守様九時御供揃、同刻過御出、上野厳有院様御靈屋へ御參詣、八時前御歸之事。

但御供惣従者黒門に殘、押足輕林唯右衛門・長谷川伊左衛門従者之前後に罷在候處、尾張宰相様御參詣、下座呼に付、右唯右衛門等従者へ其段申示候ため走廻り候處、御先拂之者下に罷在候様申聞候に付、致承知候段相答、猶又従者之不作法等無之哉与延上り致見分候處、致承知候与申候而不致下座儀難心得段申候而、右御先拂之者四・五人罷越、右唯右衛門を理不盡に押臥せ、じつていに而頭を打、亂髪之爲躰に致候に付、唯右衛門儀不得止事を脇指を拔放候得ば、十人計立懸り、其脇指を奪ひ取候。右之躰伊左衛門見付來候處、伊左衛門へも十人計立懸り候て、理不盡に手込に致し候。右之内唯右衛門儀刀を拔、最初に頭を打候者を目懸切懸候處、其者逃候に付追懸候得ば、右之者轉び候に付切付候由。其所へ伊左衛門走來り候而、唯右衛門を抱き留候内相手は逃候。然所へ尾張様御供人大勢罷越、唯右衛門・伊左衛門を手込に致し、上野之内番所へ預置之。但、唯右衛門儀被押伏ながら脇指を拔候故、指を少々怪我し、伊左衛門儀唯右衛門を抱留候節、足之脛を餘程怪我し致破血候。然處尾張様御供頭より達可申旨申來、御供之御横目本保六郎左衛門罷越、懸合候而、唯右衛門・伊左衛門を受取、御屋敷へ罷歸候。唯右衛門は歩行に而歸り、伊左衛門は

足之疵に而歩行難成、駕籠に而罷歸候。今夜東御門續於饗應所、御横目水越八郎左衛門・本保六郎左衛門罷出、唯右衛門・伊左衛門呼出、始終之趣承糺候處、兩人申分之通に而者敢てがさつ成趣も相聞え不申、先唯右衛門は割場へ指預、伊左衛門は無構、自分居小屋において疵保養之儀申渡候事。

九日御家老西尾隼人殿御申渡之趣有之に付、聞番菊池九右衛門儀、今曉七時過尾張様へ罷越、昨日於上野申分之一件懸合、昨日切内分に而相濟致落着、今晝九時頃罷歸候事。

〔政隣記〕

五月九日。馬場藤左衛門越前に於いて捕縛せらる。

孫三せがれ　馬場藤左衛門

盗賊改方手合足輕廿人餘召捕に被遣候處、於越前召捕今九日歸、父孫三宅に縮所出來入置之。

今九日は五月

金澤才川　寶久寺

馬場藤左衛門出奔前書物預置候處、出奔後不及屆に。然所藤左衛門被召捕候に付出奔。

〔政隣記〕

五月十日。馬場孫三江戸より歸國を命ぜらる。

本年三月廿八日の條參照

五月十日、左之通に付孫三儀翌十一日曉發足歸。

御馬廻組會所奉行　馬場孫三

不應思召趣有之に付役儀被指除候。用意出來次第御國へ罷歸候樣可申渡旨、於金澤頭多田逸角へ、御用番玄蕃助殿被仰渡候旨、前月廿九日出之紙面今十日來着。

〔政隣記〕

五月十一日。大聖寺侯前田利考歸邑の途金澤城に登る。

五月十一日飛驒守樣御登城。但昨十日金澤御着。

〔政隣記〕

六月七日。馬場藤左衛門禁牢に處せらる。

五月廿一日馬場孫三宅へ、頭多田逸角幷相頭作源兵衛罷越、馬場藤左衛門へ逢出奔之趣意尋有之所、父孫三勝手方取媒致候處、次第に及難澁に付致出奔抔ゝ不分明之答ゝ云々。同夜馬場孫三金澤へ歸着、翌廿二日自分に指扣可申哉之旨、紙面出之候處、指扣罷在候樣被仰出。

〔政隣記〕

六月七日

馬場藤左衛門

於公事場御尋之儀有之候處、不屆之趣有之に付牢揚屋へ被入置。

附、同道令出奔候女千代野も禁牢被仰付。

右に付近き續之者指扣伺紙面各指出愼罷在候處、同十一日夫々指扣被仰付、且左之通も被仰渡。

馬場恒太郎

馬場孫三せがれ藤左衛門せがれ

父藤左衛門不屆之趣有之、牢揚屋へ被入置候に付、藤左衛門父孫三幷一類へ御預。

六月十七日。江戸邸内なる諸士の貸小屋に自ら窓を穿つことを禁ず。

〔政隣記〕

御屋敷之内御貸小屋家來罷在候處、自分に窓明ヶ申儀者不相成筈に候段、前々度々相觸候得共、頃日窓明け候御小屋々々も有之由相聞え候條、自分に明候窓之儀は早速塞之、自今右之族無之樣家來末々之者へ急度可被申渡候。

右之趣夫々可被申談候、以上。

丑六月十七日　西尾隼人

本件の同類は寛政四年三月六日の條にあり

六月十八日、大小將組池田左平男色のことによりて遠島を命ぜらる。

〔政隣記〕

寛政五年六月十八日左之覺書

堀三郎兵衛就在江戸、御小將頭御用番大屋武右衛門御呼立御渡。

付札、堀三郎兵衛ゟ

右左平儀、不屆至極之趣有之候に付、急度可被仰付候得共、其段御宥免、遠嶋被仰付候旨被
仰出候條、此段可被申渡候事。

但、配所ゟ被遣候迄之内、一類共ゟ御預被成候間、急度締仕置候樣一類共ゟ可被申渡候。

尤一類共交名可被申聞候事。

〔政隣記〕

杉本新之丞

村田鐵平

同年同月は寛政五年

此兩人も、同年同月十八日遠嶋被仰付に被仰出之趣、池田左平同斷頭々於宅に夫々申渡有之。

佐渡守樣御側小將　土師左膳

佐渡守樣御側小將被指除、元組に御返之段右同日被仰出。

附、左膳儀も鐵平に艶書一封送候由与風說云々。

同二十一日左之御覺書御渡。

付札、堀三郎兵衞に

池田左平嫡子　十六郎

右父左平依罪、十六郎儀遠嶋被仰付。

但、配所に被遣候迄之内、一類共に御預被成候間、急度締仕置候樣一類共に可被申渡候。

同人二男　久米作

同人三男　外三郎

右父依罪、久米作等兩人同刑可被仰付者に候得共、幼少に付十五歲迄一類共に御預置被成候條、右及年齡候者及斷候樣、一類共に可被申渡候事。

丑六月二十一日

右に付同日八半時過、御用番大屋武右衞門并御小將頭野村伊兵衞・人見吉左衞門・音地淸左衞門、并與附御步橫目古市直右衞門・八十嶋小八郎彼宅に罷越、被仰渡之趣武右衞門申渡、御

請判形取受、二男等之儀一類中に申渡、是又御請判形取受各退出之事。

左平同姓　池田三九郎

左平妻之弟　宮川繁藏

左平妹聟　林甚左衛門

三人共指扣可申哉之旨頭々に紙面指出、則御用番に相達候處、不及指扣段同月二十日被仰渡。

六月廿三日、馬場藤左衛門の姉聟坂井權九郎及び平田磯次郎指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕

六月廿三日、今月十一日於金澤左之通御用番又兵衞殿被仰渡候段申遣來。今日高田新左衛門於御小屋自分立會、新左衛門被申渡、御請書判形取立候事。

馬場孫三せがれ藤左衛門姉聟　坂井權九郎

同　平田磯次郎

右藤左衛門儀致出奔候儀に付、於公事場遂御吟味候處、不屆之趣有之、牢揚屋へ被入置候條、權九郎・磯次郎儀指扣罷在候樣可被申渡候事。

右に付指扣之儀故、前々之通代判人は不申談、且御門外へ家來指出候儀は相止、成だけ同組中之家來賴、内々用被辨可申候。夫共自分家來に而なくては難叶儀有之節は、拙者へ迄被及斷承届候上、兩人可被差出旨等申談。且右に付權九郎代御中屋敷假御横目は、同所火消之内阿部波江へ當分兼帶申談有之。

六月廿五日。德川竹千代の卒去を告げらる。

〔政隣記〕

六月廿五日若君樣御不豫之處、昨廿四日酉上刻御逝去。依之爲伺御機嫌、今日御三家始惣出仕。病氣・幼少幷隱居之面々は、老中本多彈正大弼宅へ使者可指出候。在國在邑之面々は彈正大弼宅へ使札可指越候。普請は來廿八日迄、鳴物は來月三日迄停止之旨、大御目付衆より御書付今曉到來。且公方樣・御臺樣御定式之御遠慮被遊候段、松平阿波守殿留守居廻狀に而申來候事。

若君竹千代樣、御享年二歳也。

右に付普請・鳴物遠慮之儀、御横目所より小屋觸有之。

〔政隣記〕

六月廿五日、佐渡守樣今日御風氣に付御登城御斷之事。

付札、御横目へ

若君樣御逝去に付、普請・鳴物御停止日數之儀、從公儀御觸有之通に候得共、御葬式相濟候迄は、鳴物等自分に指扣可申候。右之趣夫々可被申談候事。

六　月

右靑尾隼人殿御申聞之旨等、御横目水越八郞左衞門より廻狀有之。

右御凶事に付、御近所火消方間廻、風番廻之振に而出。御葬式御當日迄遠方御成格に而出。

六月晦日。德川竹千代卒去の報金澤に達す。

是月は大盡なり

〔政隣記〕

今月朔日於金澤左之通。

若君樣去月廿四日御逝去之旨申來候。依之普請は昨晦日より明二日迄三日、鳴物等は當四日迄五日遠慮之筈に候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配にも相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月朔日　　　本多玄蕃助

諸頭一役宛連名殿

右に付朔日御表へ御出無之、出仕之面々御機嫌可伺旨被仰渡、年寄衆謁之事。

六月。御扶持人等、里子の制に關する諮問に答ふ。

至而先年御郡方里子与申者有之由、此仕法如何に候哉、御年寄衆より御尋に候事。

諸郡奉行

〔御用鑑〕

至而先年御郡々里子与申者有之由、如何之仕法に候哉、委曲相しらべ書上可申旨被仰渡奉承知候。里子与申は御改作所より被仰渡候御頭書之内にも相見申候。先年開作人不足之所に、且新開被仰付候砌、非人小屋より作人御仕立之由に而、衣類・食物等迄御渡、所々に被遣候に付、寛文十二年礪波郡上八ヶ新村に、飯山村七兵衛、蔵田村作助、地い上善五郎、宮腰市蔵、覺源寺前少兵衛与申者、御小屋より五人被遣候に付、家作等被仰付、延寶元年四月出來、右之者共家内引移申候。射水郡下八ヶ村新村にも被遣候得共、人別名前等は知不申、延寶二年・三年兩年に生源寺新村に、太郎兵衛・助右衛門・儀右衛門・五郎右衛門・彌二兵衛・又七・與七郎被遣、都合七人移申候。其節飯米・味噌・鹽・薪等迄御渡被下候留御座候。右里子末孫之者、今以里子百姓与相唱申候。則上八ヶ新村等前々里子被遣候書とも、別紙寫仕上申候、此外にも有之候哉、年久敷相立申儀故相知不申候。右就御尋申上候、以上。

丑六月　　　　　　戸出村　又右衛門

御郡御奉行所　　　横田村　宗四郎

七月二日。例によりて傳通院・廣德寺等に施餓鬼料を寄進す。

〔政隣記〕

七月二日、例年之通傳通院・廣德寺へ御施餓鬼料被遣候御使に罷越。清泰院様白銀二十枚、光現院様同十五枚、傳通院へ。

徽妙院様より天珠院様迄御七方白銀五枚宛、泰雲院様白銀十枚、梅嶺院様・梅園院様白銀五枚宛、瑞龍院様より淨珠院様迄御七方白銀三枚宛、以上廣德寺へ。

桂香院様白銀三枚、桂香院へ。

右傳通院に而者吸物・酒殽・素麪、廣德寺に而干菓子被出之。

七月四日。羽咋郡生神村の肝煎等耕作に出精するを以て賞賜せらる。

〔筒井舊記〕

一、當月四日御場に而、生神村之者共耕作情出候旨に而、肝煎江鳥目一貫文・米一石、組合頭江鳥目五百文・米五斗、惣百姓十一人江米五斗宛、吉田村百姓坪野太右衛門杉苗多植申爲

御褒美鳥目二貫文拜領被仰付候。右爲御心得申上候、以上。

寛政五年七月六日　　番代　太兵衛

仲間宛所

七月五日。鳴物遠慮の際に於ける虫送太鼓の處置に關し郡奉行の意見を徵す。

〔加州郡方舊記〕

一、御次より御用有之旨、高澤平次右衛門〻罷出候樣石野主殿助を以被仰出候。鳴物遠慮之節御郡方稻虫送り太鼓爲打申儀、前々如何有之候哉之旨御尋に付、稻虫太鼓之儀者慰に仕候鳴物与者品違申儀に御座候故、前々無構太鼓爲打候段御請申上候處、いかさま左樣可有之儀、其段可申上主殿助被申聞候。此段後年心得に茂可相成与存、兩御郡〻申聞候、以上。

寛政五年七月　　加州御郡所

石川・河北郡御扶持人十村中

〔河合錄〕

虫送太鼓

一、夏土用之頃石川・河北御扶持人より、稻虫送り太鼓爲打何日より初。申渡旨書附を以願出に付、

承屆、役所引取紙面を以御算用場へ相達置候事。場迄紙面定役御算用中認る也。

但、此儀元祿元年達御聽相始り候より以來、年々如此に候事。

一、寛政五年七月五日加州御郡奉行、御次より御用有之段申來、高澤平次右衛門罷出候處、石野主殿助を以被仰出候者、鳴物遠慮之節御郡方稲虫送り太鼓爲打候儀、前々如何有之哉之旨御尋に付、虫送り太鼓之分は慰に仕候鳴物与は品違申儀に御座候故、前々無構爲打候趣御請申上候。主殿助も左様可有之儀与被申聞候事。

一、能美郡に茂稲虫送り太鼓爲打候儀、御扶持人より書付を以達捨にする也。其餘之郡々よりは何等も達に不及振之事。

七月六日。前田治脩、增上寺へ德川竹千代の法會に對する香典を贈る。

〔政隣記〕

付札、御横目へ

七月二日より五日迄、於增上寺孝順院様御法事有之候旨。右日數中、鳴物自分に相扣候様可被申談候事。

七　月

右西尾隼人殿御申聞之旨等、水越八郎左衛門より例文之廻状出。右に付御法事二日夜より五

日曉迄有之。今夜より五日曉迄火消方間廻風番廻之振に而出候事。

〔政隣記〕

七月六日朝、增上寺大方丈に孝順院樣御香奠白銀百匁御獻納、御使組頭高田新左衞門。佐渡守樣よりも同斷白銀五十兩御獻納、御使組頭堀三郎兵衞。壽光院樣よりも同斷白かね十兩、御使御廣式物頭並原彌三兵衞。松壽院樣よりも同斷、御使御附物頭並竹田源右衞門。右各裝束半上下着用、曉八時出、於池德院見合、五時獻納之事。

七月十二日。荻野元凱の高弟矢野幸助、前田齊敬を診せん爲本鄕邸に着す。

〔政隣記〕

七月十二日京都住荻野左衞門高弟矢野幸助年五十歲參着。從者四人。從佐渡守樣御保養方爲御用被召候而罷下る。御貸小屋谷筋之内頭分小屋也。今般次之間迄天井張之、壁上塗、張附襖等迄結構に修理被仰付候而御貸渡之事。

附、御貸小屋に都而天井無之、請人自分に簀或は紙に而天井拵候事故如本文。

七月。學校構内に天神社を造營するを以てその神職を命す。

〔御鎮守御用一件〕

付札、寺社奉行に

於學校御園中客地天神御鎭座、幷稻荷社等就被仰付候、右御用田井天神神職高井隱岐に被仰付候段被仰出候條、其段隱岐に可被申渡候事。

七　月

於學校御園中客地天神御鎭座、幷稻荷社等就被仰付候、右御用私に被仰付候段御書立を以被仰出、難有仕合に奉存候。仍而御請上之申候、以上。

丑七月二十五日　　田井天神神主　高井隱岐　印

寺社御奉行所

八月三日、前田重教の生母實成院の三十三回忌を實成寺に行ふ。

〔政隣記〕

來月三日實成院様三十三回御忌に付、御當日一朝於實成寺に御法事御執行有之候。右之節普請・鳴物遠慮に不及候。併實成寺近邊に罷在候者は、御執行之内自分に指扣可申候。此段組・支配之面々へ可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配へも相達候様可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月廿三日　　本多玄蕃助

一役宛連名殿

附、右に付八月三日四時御供揃に而實成寺へ御參詣被仰出、御供人相揃候上御延引被仰出。

八月十三日。江戸詰の諸士にして困窮の者に扶持方を繰上げ貸與すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、高田新左衛門ゟ

當春以來此表米諸物共高直に而、詰人一統難澁之躰に付、御救方之儀追々金澤表へ申遣候處、委曲御聽に茂相達候。今以米價等引下げ不申、一統難澁之躰無據儀に付、御救も可被仰付候得共、連々御難澁打重り候上、去々年・去年凶作相續、過分至極之御損毛に而、當時必至与御差詰り之御時節に付、何分難被及御沙汰候。乍然御歩並已上、勤向等により格別難澁之者へ者、一人扶持に金二歩宛御扶持方代之内繰上御貸渡可被成候。足輕・小者へ者、先達九月渡御扶持方代之內、足輕ゟ金二歩、小者ゟ三歩宛御貸渡之分、格別之趣を以被下候段被仰出候。表向之人々、御勝手如斯御行詰り之場に至候与者奉存間敷候得共、誠に御難澁至極に而、指定り候御地盤方御手當すら無之程之御儀に候間、此所何も奉恐察、何分儉約を以御奉公取續候樣可相心得旨被仰出候。右躰之御勝手振に候者、此後米價等高直に付而願之筋有之候而も、何分御取上無之候間、兼而其心得可仕候。尤當時御小屋暮等も質素に相心得、人々油斷も無

之躰ニ候得共、猶又右被仰出候趣厳重ニ相守候様、一統可申渡旨、御勝手方主付大炊等より申来候。

右之趣被得其意、組・支配之人々へ被申渡、格別難澁ニ而拝借相願候面々者、交名可被書出候。尤諸頭中ゟ演述、組等之人々へも申聞候様可被申達候事。

八　月

別紙寫之趣西尾隼人殿御申聞ニ付、寫相廻之候條、御同役御傳達、御組・御支配之人々へ御申達可被成候、以上。

八月十三日　　高田新左衛門

諸頭連名様

右ニ付組・支配之人々ゟ夫々より申達候處、何も難澁ニ付借用仕度段申聞ニ付、夫々頭等宛所之願紙面取立、頭等引受之願紙面隼人殿へ御達申候。頭分已上も、春來諸物高直ニ付、六月渡御扶持方代跡引ニ相成、其上不順之氣候等ニ、次第ニ米價高直ニ可相成与之沙汰、左候而者跡引申所可取直手段ニ無之候ニ付、御時節柄奉恐入候得共、御扶持方代人數當り之通拝借仕度段願紙面差出候。但、佐渡守様御用人持組永原將監者、知行當り之通高御扶持方受取罷在候ニ付願無之、其外者一統願有之候事。

右御貸渡金、當十二月渡り御扶持方代を以返上之筈に可相心得旨、西尾隼人殿御申聞之旨等、高田新左衛門より同月十八日廻狀有之。

八月廿四日。御算用場奉行等、小頭の職務に關する心得を示す。

〔後年見合に可相成品々留〕

申談品々覺

支配之人々之內、心得等宜人々茂相聞候得共、人多之儀に候得者、其內にはは心得之道理合等未致會得人々も可有之、不肖之拙者致支配事に候得ば其筈に候儀与實に存じ候。依之年若成人々等心得にも可相成与存候品々等、左に相記候。

一、年若成輩抔、未至而不學たりとも、今日致勤仕候人々は、君臣父子夫婦兄弟朋友を五倫与申候而大切成儀を不知程之人は有之間敷候。然共年若成人々之內、未書算至而未熟成も有之躰に候。左樣之人々は、仲間之助合無之獨立候而は、全は相勤こそり兼可申哉。左候得ば、借恩をも常に深不奉存付說に候。其親・兄等も迫込薄候得ば同事之譯に候。書算迄にも無之、諸事心懸可申、能々臣之道を了簡可有之候。曁親戚甚睦敷人々之儀も及承、珍重に存候。中には親子兄弟之間に有之間敷、是非を爭ふ心有之故に候。孝弟也者其爲仁之本與と經書に茂有之候。孝ニ百行之源、於人道假にも親・兄へ對し疎略之儀有之まじき事に候。右等之儀御不

便に被爲思召、學校被爲建教導被仰付候儀与奉恐察事に候。厚大之御仁政、於人々は彌増之御高恩共不可忘。人々身之上を深省み、是迄不心得之品有之候はゞ速可相改、不及申儀に候。御用透には隨分學校にも罷出、并能師を求而、五倫五常之道教示を請、得道可有之専要之事。

一、御算用場は諸場・諸役所之勘定承糺申儀、何れも承知之通に候。其向々より遂勘定方、及遅滯候はゞ被及催促筈之儀に候。依去從御算用場仕立可相渡紙面證文等、其時々少茂無延引可相渡儀に候。然處先々より遂勘定度旨斷等有之候而も、於御算用場指支之品有之儀ども不都合之至、御算用場与唱候主意と相違に成行候貌、奉恐入儀に候。是等之味第一各如何被相心得候哉。勿論其懸り之人々之了簡難辨候。既に御定にも、算用有之剋は毎日早期より罷出候樣にと被仰出も有之候儀、皆々承知之通に候。尤以前与違、近年には日々之御用甚多き役所も有之候間、手後れにも可相成候條、何れも彌増入情無之而は、御算用場之主意相立間敷候。此段一統得与了簡有之、御用手張候節は、一役所主付棟取之人々たりとも、自他役所之無差別、申談次第互に助合、諸役所ひとしく御用無遅滯相辨候樣有之度候。勿論拙者ども退出之刻限、御定も有之候得共、不依何時不時場相立、終日相詰罷候而も少も不苦事に候間、申聞次第詰延可申、少もなまけ有之まじく候事。

一、前條諸向御算用を始、御用之僉議物或場印を加或は奥印を加渡候類、諸向懸合之品々、於御算用場及延引候得ば、先々に而指支、色々わづらひに相成候に付、其向々より懸り々々之役所江罷出、或宅々江茂罷越、指支候譯等具に語候樣之儀茂有之。無據趣承候得ば、拔出し不埒明候樣にも可相成、於人情尤も可有之儀に候。其段外より致見聞候得ば、贔負賄賂等之躰にも相聞江、心外之汚名を蒙申儀、畢竟御用筋手後れ申より事起り候。別而町人・十村・手代等私宅江寄候儀有之間敷段、兼々申渡有之通に候。且又遠所向より指出し候御用、右委細不相聞分は彌物事手延に可相成儀に候間、兎角人々請取々々之御用向出情有之、先々之御用濟に不相成樣心を付可申、相重み候御用共、一旦格別致出情仕除候はゞ、跡は必左程にも有之間敷候事。

一、支配之人々小祿之事に候得ば、家修理等悉大工・日雇等を以も難爲仕に付、每日役所に久敷相詰候而は、私用不辨抔与申人も有之躰及承候。一通り尤之樣に相聞え候得共、曾而道理に不相當候。惣而士農工商之人々も其業有之候。小祿たりとも支配之人々は、三民とは違申事に候。難澁之時節に付一概には難申候得共、衣食住其分限に不過候得ば自分之業を亂し、専工之業を奪、家修理等悉自身不働ことも不指支筈に候。然共可勤事茂全して、其上に閑暇ありて怠に致儀は格別之儀に候。大工等之賃銀を厭、専爲利に自身働候而は、貪利之譯に而有

之まじき事、甚敷は御政事之障にも可相成儀に候。其段心得可有之事。

一、江戸・京・大坂之儀は、各〻不被相詰儀に候間、年長等先輩之人々は、各代りとも心懸可申儀ト存候。其譯は、他組とも入交り相勤申に付、初詰等年若成人々には、馴合之處専に相心得、於自分事は悪敷事と作心付も、自分之了簡も難立筈に候。先輩之人々より、勤向を初御小屋暮并御門外出等、萬事心を付致介抱可遣儀に候。

一、自分之潔白を顯さんと欲して他を誹り、甚敷は人をそこなふにも可至儀を不心付、或御用先輕者抔義巧有之儀心付候而も、情を請けん事を恐、悪さまに評せられん事を厭ひ、公事之等閑にも可相成事も不心付程之儀も可有之、是等之味心得可有之事。

一、御算用場内諸役所手傳人勤方等之儀は、其役所棟取或主付人之躰により可申聞、棟取・主付之人々、猶亦自分之慎方等を初、萬事彌心を付、手傳之人々勤方は不及申、心得等も善悪相考、神妙成志等宜儀は、各ゟは勿論、拙者共ゟも早速申聞可有之事に候。不宜躰之儀は異見を加可申、假初之事にも衆人之心を蕩し、風俗をも可亂端之儀も有之物に候間、左様之悪敷儀は、是又早速各ゟ申聞可有之事。

一、俳諧抔甚相好候人々も可有之哉。年若成人々、右様之遊興成參會抔之暇は無之筈に候。朋友參會は藝能諸稽古事を以付合可申、亂階成參會に相成候而は心氣蕩、本然之正心日々に

勤所々本のまゝ

亡申事に候間、假にも下蔦之交にひとしき惡敷風俗無之、隨分長弟之禮を心懸、專に信を以互に助合、不了簡等少之儀をも異見仕合候樣可有之事。

一、支配之人々、組柄には輕候得共、勤所々多、御隱密等重き御用相勤候事に候間、愼方肝要に候。且又歷々之面々ゟ茂御用懸合申儀に候之間、隨分無禮慮外之仕方無之樣、急度可相心得候事。

一、御算用場諸役所之內、御用之品々留等、不綿密儀も有之躰に而、必留可有之品々留不相見儀每々に候。後年に至見合に可相成品々は、猶更具に留置、後々見出し易き樣に致置可申事。

一、奢侈之儀は天之惜たまふ事に付、前々より度々難有被仰出共有之儀は、一統承知之通に候。其上乍恐御上尊大至極之御身として、御衣食を奉始、萬事萬端少も御榮耀不被爲在、御質素至極成御暮方之儀、何茂粗奉承傳罷在儀に候。爲何如此御艱難に被爲在事哉、何も如何被心得候哉。乍不及申事、右等之御樣子は全天道を深御愼被遊、且世上之奢侈を御悲被遊、御戒之爲等色々思召可被爲在哉与奉恐察候。此段急度被相心得、人々妻子等へも爲致會得相愼可申事。

一、右之通之御事に候得共、當時世上一統之風俗奢侈甚敷相成候に付、老人たりとも少は其

風に随不申而は、者壽甚敷様にも諸人申なし候故、乍心付も不得止事少は時風に随ひ候。足輕抔も右同事之躰、御國・他國に而も衣類等其外暮方も分に超候様子。於民間譬一座之上に而は、尊卑は先衣服を以分り候處、右之通に付年若成人々は彌以相飾り候様に成行候儀は尤に候得共、右御上之御様子奉存付候而相愼可申事。

一、食用之儀も同然に候。乍然極老之親・兄等孝養有之に者、毎日麁薄成野菜類までに而は老を養ひ兼候間、程能相應之魚類をも進め可申事。

一、家居之儀茂、御上未御本丸御殿閣を始、二御丸竹之御間さへ茂御造營無御座事に候間、入用等指支無之人々に而茂、相應之新作者可相憚儀とも存候。惣而支配之人々、役前有之各之外者、座敷・式臺抔は近頃迄は無之様子に承及候。左様にも可有之事に候。是等之儀者全卑・候而中に而者毛頭無之候。漸四十俵・五十俵抔之御切米等之人々として、其身之居間、妻之洗濯所、せがれ之部屋等とて、別々に居間を分、自由に難暮筈に候。況平常用にも無之座敷・式臺建置候而は、可被暮様も無之事与被存候。衣食住ともも分に超候暮方に致罷在候而者、世人は難題を相懸候儀に相成まじく候。己之慾を恣にして人を苦め候而は、不仁不義之至、人を不忍天をも不恐次第に候條、急度愼可有之事。

一、前々より貯有之人々は、當分之儀も外へ難題不相懸候間、衣食住共宜暮候而茂不指支儀

と存候人々も可有之哉。一向左樣之道理に而者無之候。都而身分次第其限有之物に候得者、何程貯、或至而人少に而、被下置候祿を以餘分有之候共、其分を過し候得者、前條之通奢侈に相成、天之咎を可蒙事に候。眼前にも其害有之候得共、人慾之私に覆はれ辨兼候。其あらましを云に、分に過不相應之中に育候子弟等、其慣はせ性と成、全躰奢侈深相成、終には難澁に迫り、父祖より之家財悉賣拂、色々之見苦敷儀ども致出來、他人之誹りを請る樣に成候儀、世上多有之候。是必然之道理に候。人として子を不愛者は無之候得ども、右分限を不省奢侈に長じ候得ば、御咎は無之候とも、必子孫をも辱しめ候所へ至候間、何茂能々思慮可有之、別而御借知代官相兼候人々は、年により定祿より口米多被下候に付、今日之暮方等寬やかに可相成、代官除り候へば俄に行當り可申、夫迄暮方手延之癖者相改り兼可申候條、右之心得肝要之事。

一、前條之通、貯用等有之富有之人も可有之哉。左樣之輩に不圖すれば甚吝嗇に而、可爲事をもせず、可見繼人之難儀をも不救も有之者に候。或親類・朋友等に金銀取替候而も、利を取る有之者に候。此儀に有祿之身分業を亂す之甚敷儀、一圓有之間敷事。

一、前に相記候通、小祿といへども致其心得候得は、事足り可申候。併以前と違、諸色等高貴に候得ば、中々大抵之事に而者難暮事候。其心得無之困窮に至、商人之祿とする所之賣物

買取代銀不相渡族、世上多有之候。他之事は不知、支配之人々は專御公界向之勤仕に而茂無之候間、於勤向物入之申立も有之まじく候。小祿たりとも有祿之貴き身分として、右之通却而卑敷町人等之助に預り候躰。其類不義之財を貪、夫を以大切至極之親を茂養申段、則親をも不義におとしいるゝ同事無勿躰事、且口惜敷次第に候。困窮に迫り候得ば、自ら色々不埒致出來候。天道は福善禍淫与有之候得ば、假初にも非義之仕方有之まじく候事。

一、御上御難澁之儀は、先年と違、川流・山崩等に而年々御取箇莫大之損失故に候。依之御難澁深被爲成候に付、不被爲得止事御借知被仰付候。此儀何程か御心外至極之御樣子に候。右に付彌御艱難に御暮被爲遊候哉と奉恐察事に候。其所を奉存候而は、人々御借知之故に彌難澁仕候歟と不被爲思召候樣に仕度事に候。彼是以深覺悟有之、萬端に付分際よりは內輪に致し、難澁之勝手を取直し候樣有之度儀に候。

一、御家中之人々等を始、惣樣惡行とも相顯迷惑被仰付候儀、都而御身之上に被引請、甚御心痛被遊候御樣子前々奉承傳候。佐渡守樣にも未御十歲計之御時分より、右蒙御勘氣候人々之儀被聞召候而は、御慈悲甚敷、數日其名前等御噂御座候由奉承傳候。右之御意氣通に付、無調法等有之人々一旦重御咎有之候而も、無程段々御取立被遊候儀、何も承知之通に候。ケ樣之難有御仁君之下に罷在ながら、夫程に不奉存付而者、冥加に茂可盡果事に候間、一統急

度志を立、相互に勵まし佐合、勤方之儀者御國・他國に而も御爲宜儀相考、清廉以盡粉骨可有出情候。人々身分之儀は、能師について孝悌忠信誠意正心修身齊家之所へ至度儀に候。公私之事ともに、拙者共始各一統、聊も御心を被爲惱候事無之樣不仕而に不叶儀に候事。

右支配之人々勤方幷行狀愼等之儀、前々被仰出候通、次に先役之面々より申渡置候通相守候得ば、身を毀ひ家を亡し候樣之事者無之候間、今更不及申渡候得ども、右に相記候品々は、無據是迄御用方甚手後れに相成居候役所も有之、此御時節之儀に候へば、何も相和し格別人情有之度、且支配之人々指引方之儀は、各油斷有之間敷儀にては候得共、習慣に而不心附、存寄違之儀も有之物に付、拙者共にも中々不行屆候得共、常々心懸候品等と書加候。前々之通右書立を以只今一統被申渡候にも不及候。猶又各勘辨有之、右之心得を以寄々得与被申談、人々身之上を顧、心得不宜品々有之候はゞ、幾重にも改させ不申而は不叶事に候間、此段第一各常々深可被相心得候。右に相記候孝悌忠信等之儀は、誰々にも不限可相學事に候。年若成輩之内にも、後々急度御用に可相立と相見え候人品も有之候間、猶更成立宜不致而は、各拙者共にも申譯無之事に候。右等之趣重々被心付、一統可有介抱候。吳々も支配之人々之儀において、少茂御心に被爲懸樣之儀無之樣に可仕專要之事に候。猶不審之儀等候はゞ、少も無斟酌可被申聞候、以上。

八月

別段

一、取次足輕之儀は、諸事取次迄之儀に而、勤方も六ヶしからす儀に候間、猶更悪敷風評等も無之筈に候處、何廉悪ざま成風說も有之候。輕身分たりとも、御上より祿を被下候者どもの事に候得は、不埒之仕方は無之筈に候得共、御用多節は諸切手取次等致前後、様々之儀有之故哉と被存候。已來隨分心を付、心外之不順無之樣急度可入念候。以前は他國詰も無之所、段々憐愍之趣意を以、十五六ヶ年以前より大坂詰申付候。於彼地勤方も隨分大切に奉存、入情綿密に可相勤候。

一、小遣之儀は、以前は割場懸り日雇候所、近年場付小者に被仰付候。乍輕者御家人之事に候得は、於勤向不埒之儀は仕間敷所、是又不宜風評も有之候。畢竟身分を越奢侈之躰も有之故、諸人怪み候而彼是申なすに而可有之候。前條足輕幷小者共、衣食住等萬端愼方入念爲致會得可被申候。

右足輕・小者共不及申事ながら、御用相勤候町人幷諸郡番代等每度罷出候に付、自ら心易相成、時折節は勤合致行來、懇意之躰に可相成、夫よりして不相應之儀ども可致出來候間、前々より心易者而も、御用懸町人等少も馴合申間敷儀に候。御算用場之儀は、專御財用方之大

場に而、諸場之手本にも可相成、別而重御場に候間、足輕・小者たりとも、少に而も於勤方不相應之儀於有之は、乍不便少も用捨は難相成、嚴重之取捌に可至候條、此段重々分而可被申渡候。

右前後兩段之趣、一統會得有之樣被相考、夫々可有敎諭候。若不心得等之儀於有之は各之油斷、拙者共も無調法、則御上に相懸り申儀大切至極之事に候間、各平常嚴密に可被相心得候、以上。

癸丑八月廿四日

成瀨左近　印

中川四郎左衛門　印

笠間九兵衛　印

村松金太夫殿

和田半左衛門殿

吉田七郎太夫殿

水野惣太夫殿

松波六郎太夫殿

吉崎由右衛門殿

下村金左衛門殿
原[illegible]喜兵衛殿
芝山直左衛門殿
牛圓彌左衛門殿
堀江庄左衛門殿
竹中伊兵衛殿

右被仰出之通、八月廿四日御算用場於別席同役中列座、小頭本役迄六人之内七郎太夫不在合、則五人江口達之以申談、其上右之覺書相渡、猶口上に而も、此上心得違之人々有之於見聞は、嚴重に遂穿鑿可申存寄之段、分而申渡候事。

八月廿五日。先に入牢を命ぜられたる馬場藤左衛門の姉聟坂井權九郎等の指扣を免除す。

〔政隣記〕

八月廿五日、去十三日於金澤、御用番河内守殿左之御覺書御渡之由に而送來候に付、高田新左衛門於御小屋自分立會、新左衛門申渡之御請紙面判形取立、且爲御禮布上下着用、西尾隼人殿・高田新左衛門・自分御小屋へ被相勤候樣申談候事。

付札、高田新左衛門ゟ

馬場孫三せがれ藤左衛門姉聟　坂井權九郎

同　平田磯次郎

右藤左衛門儀致出奔候儀に付、於公事場遂御吟味候處、不屆之趣有之牢揚屋へ被入置候に付、權九郎・磯次郎儀指扣罷在候得共、御免被成候條此段可被申渡候事。

藤左衛門のことは本年三月廿八日に在り

八月。變死人の檢使として出張する與力を饗應することの禁令を嚴守せしむ。

〔政隣記〕

付札、定番頭ゟ

變死人有之砌、公事場より檢使與力共罷越候節、於先々彼是費有之段相聞候に付、今般公事場奉行へ申渡候趣有之候條、以來は馳走ヶ間敷儀仕間敷旨者、戌年申渡候通に候處、今以心得違之者も有之躰に相聞候條、彌嚴重に相心得可申事。

右之趣被得其意、組・支配有之面々へ夫々可被申談候事。

丑　八月

右御用番河内守殿御渡之旨等、如例定番頭御用池田華平より廻狀出。

八月。鹿島郡武部村の彌左衛門、野毛及び無地の意義に關して諮問に應ふ。

〔岡部舊記〕

野毛幷無地之儀御尋に付申上候。野毛与申は七木・雜木も無御座、かや・すゝき・柴まで生居申山を野毛与唱申候而、則山役銀相立候内に而御座候。右野毛に諸木生立候得者、百姓持山林与唱申候。無地与申には山入又者御高之外に而、川縁或者山際抔に作物も仕付不申、無毛之所を無地・空地与唱申候而、則御郡御奉行所御支配之物と承傳罷在申候。

右就御尋小紙を以申上候、以上。

丑　八月　　　武部村　彌左衛門

梅　喜左衛門様

梅喜左衛門は郡奉行

八月。投網を以てする漁獵を禁止する區域を告ぐ。

〔政隣記〕

御留場之内堀々・俣川・不湖に而投網打候儀、獵師たり共堅御停止に候。惣而本川筋之分も、毎年九月朔日より翌年三月晦日迄、投網打候儀、御家中は勿論、殺生渡世之者も、從前々堅

御停止に候。水戸口より大潟之分は御免に候得共、是又潟縁へ寄、鳥々こがし候所に而は打中間敷旨被仰出置候處、近年甚猥に相成、右堀々等於本川筋投網打候儀有之躰に付、以來右殺生人罷越候はゞ急度見咎、早速可及斷に旨、御郡方へ申渡候。且又御場之内本通之外は、殺生道具抔携罷越候儀不相成筈に候處、心得違之者も有之躰に候條、以後右等之族無之樣、御家中之面々等家來末々迄嚴重に申付候樣、一統御申觸可被成候事。

丑八月

別紙若年寄中より之紙面寫を以、今月二日御用番本多玄蕃助殿より、例文之以御添書、頭々御用番連名御觸出有之。

九月十五日。前田齊敬登營して德川家慶の世嗣となりたることを告げらる。

〔政隣記〕

九月十五日、月次佐渡守樣御登城之處、俄に御弘、敏次郎樣御儀若君樣与奉稱候樣被仰出。依之一先御歸之上、重而追付之御供揃に而、御老中方へ右爲御祝儀御廻勤、暮過御歸。右御弘之儀に付、宿次御奉書相渡。御用番太田備中守殿へ聞番御呼出、坂野忠兵衞受取來、如例上認等於御用所出來、大御門より夜五時過發出。其節御作法前々之通。但、右御奉書廿

一日四時過金城へ到着。同日御禮使御馬廻頭中村九兵衛へ被仰渡、廿八日發出。

九月十七日。前田治脩、酒井忠以と交誼を復舊したることを告ぐ。

〔政隣記〕

九月十七日左之覺書を以、御用人小川八郎右衛門夫々に申談。

酒井雅樂頭殿

右先年より御不通に候處、此度御和順有之、是以後御緣家前之御勤合に候事。

丑九月　御用所

右御和順之儀は、去々年以來從雅樂頭殿被仰込者有之、從肥後守樣も段々御取扱有之、彼方御代もくれ、其上讃岐守樣共御續有之、旁今般御和順に候事。

くれ本のまゝ

九月廿一日。前田治脩、石川郡宮腰に赴き火矢の技を見る。

〔菅原直養覺書〕

一、九月十九日、宮腰うつぎ濱にてほうろく抔被仰付、習禮今日也。御前にも御覽は同廿一日也。夕方より夜へかけて色々有之。番付等は別に有之故不記。

〔政隣記〕

九月廿一日八時御供揃に而。同刻過御出、宮腰口より御放鷹、宮腰中山主計方に而御休、夫

より宇津木濱へ御出、火矢左之通御覽、夜四時前御歸殿。

火矢打候次第晝之分

六貫目御筒に而　こわし玉　小川久太夫

十貫目御筒に而　亂　玉　同　上

六貫目御筒に而　亂　矢　小川友作

同斷　夜之分

一貫目御筒に而　ほうろく火矢　久太夫せがれ　小川兵左衞門

六貫目御筒に而　ほうろく火矢　小川友作

十貫目御筒に而　ほうろく火矢　小川久太夫　敵亡　小川友作

十貫目御筒に而　亂火矢　小川友作

十貫目御筒に而　埋　玉　小川久太夫

右之通有之、御覽之節は藥少々弱目に仕、十九日習仕之節は藥定法之通仕与云々。埋玉は別而響強く、金澤堅町邊抔へも聞え、人々驚候族。且十九日習仕之節は、見届人御近習頭宮井典膳（本役御小將頭。）町奉行高畠五郎兵衞、（小川久太夫等之支配頭也。）將又見物人貴賤群集す。

右火矢打出し場に小屋懸、其角より五十間之間御幕打之。夫より右之方に町奉行・御近習頭

溜之小屋御幕打之。夫より上に御覧所拵、皆々御幕打候而圍之。右打出し小屋より前に、御筒臺に仕懸八挺並べ立、左之通。(圖略)。

右之通何挺も飾立打出、小屋より一町々々に町竹立、十一町目に高さ六間計竹に大提灯目當に上げ置打之。ほうろくは十町より十四五町迄付之。こわし玉は大さ四五寸丸程之玉也。其場に而者餘程嚴敷雷之落たるが如し。亂玉は三匁玉を三百程集め、一塊りに打、空に而亂散す。亂矢は的矢を筒一ぱいに詰込打之。尤矢は燒け不申、空に而亂れ散々に相成。ほうろく火矢は、流星之如く尾を長く引落候而、其音嚴敷響き、又登り落ては又登り、十五町計先へ行候敷亡は小さき筒廿五挺一集に仕、箱に仕懸、其元へ樋を拵へ、それに口藥を入候故、火之傳ひ候に隨ひ礫打に相成、亂火矢は空に而柳之靡く如くに成、尾を引落候躰殊之外見事成物也。

埋玉は左之通埋之。(圖略)。

右之通に而三段に嚴敷音仕候内、大玉は打出し小屋より八町先に有之候處、町奉行等溜に而は土中へ響き、其外惣躰に響きこたへ海へ落入、鳴動強く如雷霆冷え敷、又山にも響き、金澤中へも響き渡り、建具・障子等鳴り響き、別而竪町・小立野者響き渡り大に強く驚候族与云々。

十九日之見物人凡三萬人計、同日七時頃より金澤往來人格別減少、夜に入候而者大町筋も所

により往來絶え候族也。廿一日も遠所或爲見物登山人夥敷事与云々。

右十九日習仕之節は一段宜く出來、廿一日は不出來也。廿一日町奉行は青地七左衞門罷出、御近習頭は右御用主付被仰付候に付、兩日共宮井典膳罷出候事。

九月廿六日。前田治脩金澤郊外大豆田口に漁獵す。

〔政隣記〕

九月廿六日八半時御供揃に而、大豆田口ゟ爲御放鷹御出。御獲物鮭魚十本、暮過御歸殿。

九月廿七日。江戸にて新番組渡邊治左衞門に命じ、小笠原平兵衞に就いて禮法を學ばしむ。

〔政隣記〕

付札、新番頭ゟ

新番組御歩並　渡邊治左衞門

右小笠原平兵衞殿ゟ禮法弟子入被仰付候條、此段可被申渡候事。

右今月十八日御用番玄蕃助殿被仰渡、以紙面治左衞門へ申渡候旨、新番頭山森澤右衞門より十九日出御用狀に申來。依之拙者より諸事西尾隼人殿ゟ御尋申、次左衞門へ、及差圖候大綱左

九月廿七日なり

之通。

一、初而罷越候節は服紗小袖・布上下着用、從者若黨一人・鎗持・草履取召連候事。

一、重而罷越候節者麻肩衣着衣着用、從者〔　　〕同斷之事。

一、年頭始而罷越候節者、格別之趣を以熨斗目着用之事。

一、組柄被相尋候ば、士列之者与可相答事。

右之外諸事心付之趣相尋候樣、次左衞門へ申談候處、追々尋及指圖候趣略之。

一、御貸人足輕・小者一人宛、平兵衞殿御宅へ罷越候度々御貸渡之儀願紙面出候に付、以書替隼人殿へ御達申處、御聞屆有之。

但、次左衞門御扶持方、組當之通上下三人に付本文之通。

一、平兵衞殿へ何日に可罷越哉与次左衞門以紙面申聞候に付、書替を以隼人殿へ御尋申候處、聞番へ承合候樣御申聞、則承合候處、四・九例月稽古日に付、其段御達申候處、來月九日頃可然由等御申聞に付、同日五時頃出可罷越旨次左衞門へ申渡候事。

一、平兵衞殿御宅へ罷越候刻、次左衞門斷次第御番除之儀、永原將監等へ申遣候處、承知之返書有之候事。

九月廿八日。前田齊敬登營して徳川家慶の世嗣となりたることを祝す。

〔政隣記〕

九月廿八日、今度若君様与可奉稱旨御弘被仰出、今日諸侯方等御禮被爲請候に付、佐渡守様六半時御供揃に而不時御登城。右御祝儀之御禮被仰上、御太刀金馬代獻上、御下り御老中方御廻勤。

九月。藤内頭と非人頭との爭議に關し郡奉行等その意見を上申す。

〔續漸得雜記〕

一、寛政五年九月藤内頭・非人頭之儀に付、御用番へ內達有紙面扣。

私共支配之内に罷在候藤内頭与非人頭爭論之儀に付、先役人々へ御内々御尋之趣御座候由、則僉議之譯帳面に認指上置申樣子に御座候。其儀に付當時私共段々相考候處、格別心付之趣御座候故違一左に申上候。

一、至而先年川原等に罷有候乞食共之内、不屆者有之候而も支配仕者無御座候に付、其縮方之儀公事場より藤内頭へ被申付候樣子。就夫承應元年右爲縮方、乞食之内より人撰仕、非人頭申付度段藤内頭共公事場へ相願、其通聞屆有之候由。則今以其格合に御座候。然者非人頭は藤内頭之支配に無相違、尤小方乞食共も藤内頭より支配仕趣。就中元祿四年乞食札相渡候上者、札持乞食も彌以藤内頭支配之樣に相成申儀に御座候。

一、平人貧窮に付札持乞食に罷成、其身一代之内者、仕合次第町人・百姓に立戻候儀差支不申候得共、二代目よりは平人に立戻申儀不爲仕流例之よし。此儀元來平人筋目無相違者、何代乞食仕候共人非之沙汰は無之筈に御座候所、藤内頭支配仕候に付如此流例出來仕儀与相聞ゐ申候。

一、平人筋目之乞食、且其中より撰出し非人頭に相成候者も、都而先年より人非之者之支配に相成居申段、一圓難心得儀に御座候。乍然此譯打返相考候得者、先年始而藤内頭之支配に相成候砌は、非人頭等平人無相違段者世上相知申儀。且二代目より人非に混じ申抔之沙汰者勿論無御座等。左様に候得者後年に至り、只今之躰にて心付も御座有間敷、公事場より藤内頭支配之振に被申付候儀与奉存候。然處百年來人非之者之支配に相成居申に付、只今に而者世上よりおのづから平人とは筋目も違候様に相見え、剰二代目より人非に落入申流例出來仕に依て、彌平人与品違候様成來申儀与相考申候。

一、右之趣乞食躰之者与者申ながら、平人之筋目人非に落入申段、人において大切至極之儀。其上平人より追々人非に落入候而者、畢竟人非之數相增申首尾、御政道に拘り甚如何敷儀奉存候。

一、右之通に奉存候間、近年藤内頭与非人頭爭論之儀は、双方申口取上げ不申打捨候様私共

ゟ被仰渡、其上に而改而急度御詮議を以、是以後非人頭幷小方非人共に藤内頭之支配を指除、惣而筋目相紀、人非混合之有無撰出、平人無相違者ハ全く人非之沙汰無之、何代乞食仕候共、仕合次第町人・百姓ゟ立戻り、世上交り指構不申樣被仰渡候者可然儀に奉存候。

一、乞食を非人与申名目、前々より唱來申儀に御座候得ども、若哉貧人与申文字を調達申に而も御座有間敷哉。何れに茂人非に無之者を非人与唱申儀、一圓相當り不申名目与奉存候。必名を正し申儀にも可有御座候間、右之通人非之沙汰無之旨被仰渡候上、非人頭ハ乞食頭与相唱、小方之者も非人之名目を指止、乞食与唱候樣仕度奉存候。

一、公事場・町會所・盜賊改方役所等、惣而是迄藤内頭承り相勤候御用向ハ、非人頭幷小方藤内・非人共打込、何茂藤内頭之指圖を請相勤來候樣子に御座候間、右之通非人頭幷小方非人共に、藤内頭之支配を指除候樣に被仰渡候者、必定彼是指支之筋藤内頭可申立候得共、其指支ハ枝葉細事之儀、右御政道に拘り重き御僉議を以被仰渡候上ハ、枝葉指支之分幾重にも相改、御用辨じ方可有御座儀に奉存候。公事場御奉行・町奉行・盜賊改方役ゟ被仰渡、私共ゟも僉議之上、藤内頭与非人頭立分り替々御用向相勤申歟、幾重にも辨じ方僉議之筋可有御座儀に奉存候。

一、是迄非人頭等都而藤内頭より支配仕候に付、外より手を指申者無之候所、以來藤内頭・

非人頭立分り申儀に相成候者、相互に非を改候樣申渡、御締方之一助にも相成可申与奉存候。

右私共僉議之趣如斯御座候。今度札持乞食二代目之者町方ゟ入込有之候由、頃日町御奉行より人非有無之譯私共ゟ尋來候處、近年御僉議之筋落着不仕に付、有無之返答猶豫仕置候間、幾重にも早速被遂御僉議、御指圖被仰渡候樣仕度奉存候、以上。

月　日　　　　高澤平次右衞門

九月。助教新井升平の學校に於ける勤務を緩くし、自己の學問を勵むべきことを命ず。

〔御夷雜記〕

前田修理等ゟ

御儒者　新井升平

右升平儀、於學校助敎授被仰付候處、御儒者幷助敎之儀者不輕役儀候處、元來幼年より家學之易學而已相勤、他經之儀者不案内に付、家學易之方振除き、外何御役儀に而も被仰付、當分御儒者等之儀御免被仰付候はゞ、家學出精仕候上、他經ゟも相及し、無泥勤學仕度奉願候趣、委曲書付各添書を以被差出候付、相達御聽候處、願之趣者無據候。乍然御儒者・助敎は

是迄之通可相勤候。學校御用之儀は、右願に付而、升平當り講釋日幷課日之外者御免被成候。依之佳節・朔望之外、毎朝五半時より九時迄學校に罷出、易學等無油斷相學、尤於宅も可致入精候。此段可申渡旨被仰出候條、可被申渡候事。

丑九月

十月四日。前田治脩金澤郊外大豆田口に漁獵を行ふ。

〔政隣記〕

十月四日於金澤、八時御供揃に而大豆田口に御放鷹、暮頃御歸殿。御獲物、御投網等之鮭十二本有之。

十月七日。本鄕邸御廣式に於いて前田重教の女頴姫の爲に女芝居を行はしむ。

〔政隣記〕

十月六日、御廣式へ今日より松壽院樣被爲入、十日迄御逗留。明七日は忠臣藏女芝居被仰付、其外品々連日之御馳走有之。

松壽院は會津侯保科容詮後室

十月十四日。與力植村内藏太、人持組伴多宮に御預に處せらる。

植松內藏太の罪狀は本年十一月二日の條參照

〔植松賜自盡錄〕

一、寛政五年丑十月廿三日晝四つ時過、二ノ御丸より御用番前田大炊殿御紙面を以、伴多宮へ御預人有之候間、支度宜候者可及御案內旨申來、人指之儀は追而被仰越候樣申來候事。

一、同廿四日晝頃御用番前田大炊殿・本多安房守殿・長大隅守殿・奥村河內守殿・村井又兵衛殿・本多玄蕃助殿・今枝內記殿・本多頼母殿・津田修理殿・前田圖書殿・不破彥三殿・西尾隼人殿在江戶御連印の御紙面を以て、中村故左兵衛殿跡組附與力植松內藏太御預に候條、公事場御奉行より御案內次第、同所まで家來可指出樣申來、其後御用番前田內藏太殿より乘物等用意にて、今日八時頃公事場へ請取人可指出樣申來。請取人々數之儀は、大抵給人組之者三人、中小將五人、足輕七人程前々有之段申來候事。

一、同日八時迄に縮所出來、公事場へ請取人指出し候事。

給人 橋本六左衛門　給人 毛利善太夫　中小將 德田惣右衛門
同 白崎左內　同 武山三郎右衛門　同 清水宇左衛門

青網掛 縮駕籠

足輕五人 內二人棒を持

刀箱宰領小頭 吉本仁左衛門

刀箱持　提燈持十人　家老 中村重右衛門　若黨一人　鑓持

用人 藤澤治部右衛門　同　同

草履取　　小仕三人

同　　　　内一人は挾箱持

〆　三十八人

一、内藏太着用之衣類、花鳥絹うちぬき二つ、淺黄絹うちぬき一つ、何れも紐付にして挾箱に入て遣す。榔箱も一集に入遣す。公事場にて着替、髮結直し、椙原紙にてなでに結候事。

一、内藏太暮六時頃來候事。

一、内藏太相煩候節、御醫者不破瑞元、御鍼立久保定圓へ被仰付候旨、寺社御奉行菊池大學殿より申來候事。

十月廿一日。前田齊敬平尾邸に赴き鳥構を行ふ。

〔政隣記〕

十月廿一日、佐渡守樣九つ時御供揃に而、御下屋敷へ御出、暮頃御歸。於同所網構被仰付候處、かしら・ほじろ等二十羽餘御獲物有之。

十月廿五日。富山侯前田利謙の江戸上邸燒失す。

〔政隣記〕

十月廿五日暮時前、下谷茅町出火与御櫓近板打候に付、火消一番宮崎藏人、二番大脇靭負、

御人數召連押出候處、火事所出雲守樣御借地御園之內、御長柄小者へ御貸長屋より出火に付爲防候處、御長屋十二筋並御厩は燒失、其外は防留之。然處無緣坂町家へ火移、此處に而も講安寺本堂並町家三軒は防留候內、榊原式部大輔殿御中屋敷へ飛火等に而燃付、本家は不殘燒失、門・長屋・土藏防留之候內、北風烈敷飛火等所々に有之、湯島切通等より天神大門通へ燒拔、立花出雲守殿燒失。此邊に而此方樣御人數消口都合十二ヶ所有之。右より段々燒通り、下谷和泉橋通、夫より須田町・今川橋邊へ燒拔け、遠火に相成候に付、夜九時前一・二番火消歸入有之候。右火事日本橋河岸に而翌廿六日晝九時前及鎭火。

右火事に付一統御舘へ罷出候處、夜九時前に至り遠火に相成、風筋も宜敷に付退散小屋拵与西尾隼人殿御指圖之由、御横目演述に付夫々退出。

右火事最初之內會所續御長屋へ火之粉來危候に付、御大小將岡田圭馬へ申談、足輕・小者召連防有之候事。

右火事に付、御一門樣方等より御使者贄御人數も來る。讃岐守樣よりは白粥五荷手桶に入、杓添被進之。紀州樣よりは翌廿六日朝御廣式へ御飯・御煮染にんじん・しみこんにゃく・しいたけ・山のいも・小鱸煮浸・香物みそ漬大こん・御酒。右之通夥敷被進之。

右火事に付、佐渡守樣御屋敷之內御巡見、御廣式・御居宅へも御見廻之事。

建置は閉置

廿六日曉七半時頃左之通廻狀到來に付、本役兼役支配中に如例觸出候事。

付札、御横目に

出雲守樣御圍中下長屋より出火、類燒も有之候に付、御指扣之儀御用番へ御伺書被指出候。依之大御門並くゞり共建置、御使者等有之節は二枚開より相通取次可申事。

一、御作事方御門之儀も建置、くゞりより往來可仕候。惣而御屋敷中御縮方之儀、御成之節之通可仕事。

但、御中屋敷も右同斷。

一、御近隣火消罷出に不及申候事。

但、御中屋敷も右同斷。

一、火之見番所蔀下し置、番人は中段に指置可申候。若火事等有之節は、尤早速及案内可申事。

一、御屋敷中普請・鳴物之儀、追而申渡候迄は指扣可申事。

但、御中屋敷も右同斷。

右之趣夫々早速可被申談候事。

十月

右西尾隼人殿御申渡之旨等、御横目水越八郎左衛門より人持頭分へ例文之添書略す。

一、宰相様御指扣御伺書就被指出候、佐渡守様御儀も御遠慮御伺書御指出之事。

一、前記之通に候處、不被爲及御指扣に段、御老中御用番戸田釆女正殿より御指圖有之候條、御平常之通御屋敷中可相心得旨、今廿六日夜四時頃御横目所より小屋觸有之。佐渡守様にも不被爲及御遠慮候段、釆女正殿御指圖有之候旨、新御居宅當番擧田折之助より以紙面申來候事。

一、出雲守様御指扣御伺之處、御遠慮可被成旨、釆女正殿被仰渡候。依之此方様御屋敷中も、人々心得を以鳴物等指扣可然旨、御横目より無急度申聞有之。依之支配之人々に向寄を以心得之儀申含置候事。

一、出雲守様御屋焼失に付、昨夜より御馬十五匹、口添等四十人餘、此方様明き御厩へ來有之、尤人馬共御賄之事。

一、右火事之節類焼ヶ所、昨日記に無之分左之通。

稱仰院　石川日向守殿下邸　青山大膳亮殿上邸御旗本衆以下略。

建部内匠頭殿上邸　湯島天神別當善行院　御目見已上之分四十三軒

妻乞稲荷別當村本備後　寳生大夫　一向宗福正寺

堀丹波守殿上邸

仲町四軒　金澤町三町与一町計　天神下町半町計
天神裏門通一町計　神田旅籠町一町四方　天神男坂女坂下二町計
神田松下町三町計　神田千代町三町計　神田永富町三町計
天神三組町三町与一町計　神田九軒町三町計　相生町三町計
佐久間町一町計　八軒町一町計　花房町一町計
通舟屋敷町一町計　榊原岩井下一町計　小轉馬町一町計
紺屋町代地三町計　紺屋町二町計　四間屋敷一町計
平永町一町計　富山町二町計　富永町新道一町計
松田町二町計　小柳町三町　上白壁町二町
川井町新道一町四方　永富町四町四方　本町片側一町に二町計
鐘吹町二町計　川井町新道一町四方　小田原町三町
瀬戸物町二町　新石町東方片側一町　神田鍛冶町東片側二町計
鍋町二町計　今川橋片側一町計　石町川端二町計
白かね町二丁目より四丁目迄　本町三丁目片側一町計　十間棚一町計

舟町二町計　室町三町計　日本橋表道一町計

本石町五町計　三嶋町一丁目より三丁目迄　富屋町一丁目より二丁目迄

雉子町一町　大轉馬町五六軒計　安神町二町

長濱町一丁目より二丁目迄

右は日本橋河岸に而止る。本町通は常盤橋御堀端に而止る。翌日漸鎮火。

〔政隣記〕

十一月四日、出雲守様今度之火災に付御遠慮之處御免許之段、御用番今日被仰渡候由爲御知有之。

十月。金澤の商人泉屋又右衛門の女太與孝行を以て賞せらる。

〔加能越良民傳〕

金澤賈人又右衛門家號泉屋。之女。名太與。以孝行聞。自幼出仕。家貧。父嬰篤疾。母失明。祖母年九十。弟八歳。皆踞異徒食而已。太與於是入家謀養。紡績織紝。夜以繼日。衆口稍足。然而父醫用不給。悉捐簪笄衣服。以營辨之。祖母年已九十。因律賜給一口俸。祖母喜甚。乃賜太與曰。宜以是贍朝夕之資。太與曰。此是公家所以恩惠褒老之物也。非宜他用焉。爲祖母之外。無敢以私焉。族爲太與納婿。生一女。既而不合而出。太與寡居圖畫家計。皆活存無恙。

人皆詡。篤孝誠力之所致。寛政五年十月。街令召太輿。畀錢十五緡矜賞。自時之後。隣境有志者。時償米錢賑給之。

十月。御扶持人十村の追込に處せられたる際、御扶持高の處分に關して定む。

〔岡部舊記〕

諸郡御扶持人十村追込申付候節、御扶持人高取揚不申振合之處、寛政元年詮議之上取揚申趣に相成來候得ども、今般打返詮議之上、前振之通已來追込中御扶持高取揚不申趣に候條、一統承知可有之事。

丑十月

右御觸御改作所より。

十一月二日。與力植松內藏太先に大津太右衛門を殺害したるを以て切腹を命ぜらる。

〔菅原直養覺書〕

一、植松內藏太本組與力、去年の春に候哉、去々年之暮に候哉火事の節、いれのまぎれに

いれの本の儘

舊績は十月廿四日なり

候哉、奥村左京家來同居人後藤太右衛門と、内藏太の妻と密通いかにわけも有之候哉殺害致候。亂心の躰にて、長々一類共へ御あづけ之處、與力仲間より色々口上書抔と仕組て書出し、喧嘩の形に相成、十月廿五日やら六日やら作八矢へ御あづけに相成、十一月二日八矢宅にて切腹也。首尾は甚だおちつきたる事にて、切腹之仕樣出來候樣沙汰致候。かいしやくの人も宜敷由の沙汰也。與力共にても、前々喧嘩と云時は人持へ御あづけの例有之事の由。若亂心と相成候得ば、公事場にてはね首たるべし。常々實躰成男之由。

〔植松内藏太切腹一卷〕

十一月朔日

一、左之覺書御用番大隅守殿御渡被成候事。

人持に御預人落着被仰出之趣申渡候節、場附御横目兩人罷越申候。明日作多宮方に而、植松内藏太落着被仰出候趣申渡等有之所、場附御横目千秋作左衛門一人に而者指支候間、各より被仰渡候御横目之外に、御大小將横目一人多宮方に罷越候樣可被仰渡事。

十一月朔日

一、右之通公事場奉行申聞候間、拙者共之内今一人可罷越候。明日御用多に而指支候者、兩人罷越候内より相兼候樣、大隅守殿被仰聞、尤相兼候者名前可申達旨に付、則彌兵衛相兼候

旨、御用番江御達申置候事。

一、明二日伴多宮方江五時分相揃候筈之由、執筆篠原喜兵衞を以被仰聞候事。

一、植松内藏太切腹之節、公事場奉行見屆候由、御用番より被仰聞候事。

一、公事場奉行中より左之通申來候由、當番同役横地茂太郎より永原・拙者江申來候事。

伴多宮方江御預人植松内藏太手前落着被仰出候趣に付、明二日朝五時分拙者共多宮方江罷越候條、各之内右御用に被罷越候方、右刻限多宮方江御越候樣にと存候、以上。

十一月朔日　　藤田求馬

上書御横目衆中

一、定番頭津田平兵衞等江、明日伴多宮方江、朝五時分拙者共罷越候間、其心得有之候樣、永原より申遣候事。

一、明日拙者共右御用に多宮方江罷越候趣、御近習頭村杢右衞門を以申上置候事。

一、明日出宅早候に付、丹羽六郎左衞門方江（味噌藏町也。伴多宮宅は彥三一番丁に而手寄宜故也。）永原・拙者寄合候而、夫より同道、多宮方江罷越候筈に示合置候事。

二日

一、右之通今朝六半時頃丹羽氏宅江拙者罷越候處、永原氏に茂無程被參候に付、致同道（常服也。）

多宮方ゟ罷越候處、公事場御奉行前田内藏太・品川主殿・小幡式部・藤田求馬并津田平兵衞・池田棧平、公事場御横目千秋作左衞門罷越居申候事。

但座敷之後方小座敷に、公事場御奉行中より拙者共迄一席に溜り居申候。千秋作左衞門儀者、同間敷居之外に溜居申候。最初拙者共与作左衞門与一席に溜り申趣に園有之、難心得に付、其趣多宮ゟ拙者申入、右之通に相成候事。

一、多宮方に而（表座敷上の間也。）公事場奉行中（御用番藤田求馬は上の方に進出着座。）并津田平兵衞・池田棧平・永原・拙者、少し引離千秋作左衞門列座、多宮儀者同間に引離緣頰之方へ進み着座有之候。内藏太儀縮所より緣頰ゟ呼出、被仰渡之趣、公事場奉行御用番藤田求馬内藏太ゟ申渡候處、奉畏候旨求馬等ゟ申述事。

但、内藏太呼出候節、多宮家來兩人（尤無刀也。）左右に指添罷出る。其外に五・六人無刀に而指添罷出、緣頰出口之所に殘り致伺公有之候事。

一、内藏太儀一先爲退候に付、公事場奉行中等何茂最前溜居候間ゟ引取居申也。

一、夫より内藏太儀裝束等相改宜候旨、多宮申聞候に付、公事場御奉行中等最前之通何茂座敷に列座いたし候處、内藏太裝束着替、白小袖・淺黄上下、介錯人・介添人茂同裝束、後見人服紗小紬・上下。（右三人とも大小帶す。）假屋二間・四間。後ゟ方白張屛風建、惣樣緣取敷、中程に白緣疊四

亥年は寛政三年

疊敷、右疊之上內藏太居り候所に毛せんを敷、兩方野交幕、前に白幕張、中程をしぼり上げ置也。（假屋前左右に盛砂、水桶に杓を打、左右に指添、多宮より之警固足輕左右に五六人出置也。）切腹相濟候上、死骸平兵衛等より多宮ゟ相渡。夫より內藏太一類之內請取候而、直に本因寺ゟ指遣候樣子に候。四半時頃相濟、何茂退出之事。

一、右御用に付、御步橫目吉江保助・本間與市申渡、常服に而多宮宅ゟ罷越候樣、昨朔日申渡置候事。

但、彼宅に而本間與市儀玄關に爲御締相詰、吉江保助者切腹之所見屆、諸頭相詰候次之間屛風圍之外に相詰候事。

一、內藏太ゟ被仰渡之趣左之通。

覺

中村左兵衛跡組附與力

植松內藏太

右內藏太儀、同居人亡養父植松故三郎太夫實方をひ奥村左京家來給人大津太右衛門、內藏太妻与密通之躰見請候得共、致思慮罷在候內、去亥年七月廿八日夜火事沙汰有之候に付罷出、歸宅之上每之通大小指置候得者、妻ゟ申付茂不致候處、腰物袋ゟ入不常躰に認、休候者及殺

太右衛門りう儀の次麗文獻

害候儀難計、不得止事密通之儀見屆候段妻に聲を懸け、刀を以突、其儘勝手に罷出、太右衛門に茂右之通聲を掛及殺害候旨等、內藏太申聞候。依之於公事場再三被遂御吟味候處、太右衛門儀內藏太妻りう与致密通罷在、馴合候所を內藏太見請、太右衛門与りう小刀を取渡いたし、其外毒藥躰之粉藥を取扱、太右衛門・りう儀食事不安事も有之。其上太右衛門所持之箱之內に、りう手跡之書物有之抔与申聞候得共、養母法行院等手前相糺候處、內藏太申分之趣一向不相當、不義之樣子都而證據に可相成筋聊茂相聞に不申、太右衛門を及殺害候に付、明後二日切腹被仰付。

右之趣被仰出候條、被得其意可申渡候、以上。

癸丑十月廿九日

前田大炊　印
在江戸　西尾隼人
不破彥三　印
前田圖書　印
津田修理　印
本多賴母　印
今枝內記　印

本多玄蕃助　印
村井又兵衛　印
奥村河内守　印
長　大隅守　印
本多安房守　印

前田內藏太殿
品川主殿殿
小幡式部殿
前田求馬殿

伴多宮家來

介錯　給人　白崎左內
介添　同　伊藤六右衛門
後見　同　九里權丞

一、內藏太切腹相濟、永原・拙者直に二之御丸ゟ罷出、委細封物を以及言上候。且又御用番大隅守殿ゟ、右切腹之樣子直に御達申候事。

一、切腹之節多宮儀茂罷出居申候事。

〔御預人之記〕

植松内藏太、定番頭中村故左兵衛跡組附與力百石。内藏太ハ同居人奥村左京臣大津太右衛門と、自分ハ妾密通ハ察しにて、寛政三年七月廿八日右兩人を打果す。然處内藏太母密通にて無之と云、一類中ハ御預置也。

寛政五年十月廿四日前日被仰渡。伴多宮方五千石、内千五百石與力知。但定火消役。ハ御預。同年十一月二日爲檢使池田乾平・津田平兵衛、御大小將横目永原半左衛門・安達彌兵衛相越切腹。

十一月四日。前田齊敬、徳川家齊の放鷹によりて獲たる雁を贈らる。

〔政隣記〕

十一月四日、今日佐渡守樣へ御鷹之鳫御拜領之御沙汰に付、昨三日御側小將御大小將打合習仕、左之通申談候事。

御刀直	御大小將	三輪齋宮
御熨斗三方	御側小將	杉江彌三郎
御土器三方	御側小將	松平康十郎
御土器三方	御大小將	石黑庄司郎

御したみ　　　御大小將　天野權五郎
御盃事御銚子　　　　　　松江彌三郎
代　御　肴　　御側小將　中村玉次郎
平御給事　　　御大小將　澤田一學

今日右御沙汰に付、五半時揃に候處、九時過御當番御目附衆より、例之通御小人目付を以上使之爲御知有之。一統服紗小袖・布上下に致候處、無程御拜領物附人來。無間も御鷹之雁二羽靑竹に提、御徒目附等指添來、敷付に而御附御番頭樫田折之助・不破五郎兵衞受取之、御大書院御上段之向に持參罷在、指續御附人追々告來、上使御使番筧助兵衞殿御出、佐渡守様鏡板へ御出向等御作法前々御使番上使之通に付記略。於御大書院御取持市岡丹後守殿御相伴に而、御餅菓子等左之通出之、御給事御側小將・御大小將、指引自分・御附御番頭。御盃事は御斷に而、夫々相濟御退出。且御取持前田大和守殿・前田安房守殿・山本伊豫守殿等にへ、於御席に糸温飩・御吸物・御酒・御肴・一汁五菜之御料理等、後御菓子迄段々上使御出之御前後に出之。將又上使御退出後、追付佐渡守様御登城幷御老中方御勤之事。

十一月十一日。前田治脩幕府に呈する書の字句を誤るを以て指扣伺の使者を江戸に發せしむ。

十一月十七日夜九時頃、御横目水越八郎左衛門より左之廻状到來に付夫々觸出候事。

今度公邊御勤向之儀に付、間違之趣有之に付、御指扣御伺可被遊哉之旨、御老中へ被及御内談候に付、御鷹野等にも御出不被遊等に候條、御家中之面々可有其心得候。此段無急度申聞候事。

付札、御横目に

今度公邊御勤向之儀に付、間違之趣有之候に付、御指扣御伺可被成哉之旨、御老中方へ被及御内談候に付、御鷹野等に茂御出不被遊等に付、御家中之面々可有其心得等、一統相觸候通に候間、御家中之人々押立候振舞等遠慮可然候條、此段夫々可被申談候事。

付札、御横目に

別紙兩通之趣於金澤被仰渡候段、御用番より申來候に付、寫相達之候條、御屋敷中其心得可仕旨、無急度夫々可被申談候事。

十一月

右今月十一日立之早飛脚に申來、今暮頃來着。且又右間違之趣譯者、今度中村九兵衛御使に而被指出候御呈書御文面之内、御飛札与可調之處御使札与書損仕候由。依而右相調候御右筆土師清太夫、并相しらべ候櫻井平十郎・中西順左衛門・土師清吉（定番御馬廻御番頭兼御右筆所見廻り。）指扣伺候處、

其通可相心得候、追而御指圖可被成旨、御用番大隅守殿被仰聞、將又右御書致校合候若年寄兼御近習御用之大番主馬殿も指扣御伺、同月十八日に有之末に記す。

十一月十八日。幕府に提出すべき書札の執筆を誤りたる土師清太夫等處罰せらる。

〔政隣記〕

十一月十八日於金澤、夫々頭々へ左之通御用番大隅守殿被仰渡、則頭々於宅申渡之。

付札、松原元右衛門に

土師清太夫

今度若君様御弘に付、御禮被爲請候爲御祝儀、御飛札被指出候處、清太夫儀御草稿引合御書相調候處、御使札与書損仕候段、先以公邊へ被指出候御書之儀は、別而大切至極に候得者、精誠入念可仕處、右間違之趣甚以無念至極に被思召候。依之御大小將組被指除、組外へ被加之、閉門被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

丑十一月十八日

櫻井平十郎

付札、安井典膳に

今度若君様御弘に付、御禮被爲請候爲御祝儀、御飛札被指出候處、御使札与御右筆書損仕被指出候。其節平十郎儀眼氣悪敷、調筆は不仕候得共、夫々しらへ仕候得者、右間違之趣心付可申處、其儀無之段、先以公邊へ被指出候御書之儀者、別而大切至極に候得者、精誠入念可仕處、甚以不念之至に被思召候。依之指扣被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡候事。

丑十一月十八日

遠慮　　土師清吉

閉門　　中西順左衛門

右御咎之趣同断に付略之。

右一件に付指扣伺紙面出之、自分に指扣罷在候人々左之通。

十八日指扣伺之處、翌十九日不及指扣旨被仰出。

大音主馬

十九日指扣伺之處、同日不及指扣旨被仰出。

御近習御用御用部屋勤　石野主殿助

御用人不殘

右主殿助者煩役引中に而一圓取捌不申、御用人ゟ御飛札与申上、御書者御認之上相渡り候儀

故、書損等之儀一圓存知不申事故、指扣不相伺候處、御年寄衆御僉議之趣有之由に而、御用番より指扣可相伺旨御指圖に付、右之通に候事。

但、御用所執筆も右に准じ左之通。

牛丸新左衞門等

十九日夕方より指扣伺紙面指出愼罷在候處、翌廿日不及指扣旨被仰出。

右之通に付當分御用部屋勝尾吉左衞門へ被仰渡、御用人當分加人御步頭和田采女・佐久間與左衞門へ被仰渡候段、御用番大隅守殿於御宅十八日夕被仰渡候事。

十一月十九日。前田治脩指扣の伺書を幕府に提出す。

〔政隣記〕

十一月十九日前記之通御老中御用番松平伊豆守殿へ被及御内談候處、御伺書可差出旨御差圖に付、今日夕方被差出之。依之西尾隼人殿左之通御申渡之旨、水越八郎左衞門より例文之以廻狀申來、夫々觸出候事。

付札、御横目に

今度公邊御勤向間違之趣有之に付、御指扣之儀御用番へ御伺書被指出候。依之御指圖有之迄者御愼中に付、大御門幷くゞり共立置、御使者等有之候節は、二枚開より相通取次可申事。

一、御作事御門之儀も建置、くゞりより往來可仕候。惣而御屋敷中御縮方之儀、御成之節之通御門留に可仕候事。

　但、御中屋敷・御下屋敷も同事。

一、御近隣火消罷出に及不申候事。

　但、御中屋敷も同斷。

一、火之番所詰下之置番人者、中段に指置可申候。若火事等之儀有之候者、尤早速及案内可申事。

　但、御中屋敷も同斷。

一、御屋敷中普請鳴物之儀、追而申渡候迄は指扣可申事。

一、此節火之元之儀嚴重相心得可申事。

右之通早速夫々可被申談候事。

　十一月十九日

追川口本のまゝ

右に付御近火之節、幷追川口筋等遠近難分り節は、手寄之御門內へ御近所火消御人數相建可申候。遠火之節は都而御人數建申間敷旨、火消役中僉議之上御用人へ相達、則御家老衆へ御用人より相達候處、其通与御申聞之旨に候事。

前記之趣に付、佐渡守樣にも御遠慮御伺書御差出可被成哉之旨、御用番伊豆守殿へ御內談之處、宰相樣御伺書之趣及御差圖候迄、御見合可被成旨被仰渡候に付、御伺無之事。

十一月二十日。幕府前田治脩の指扣を要せざることを令す。

〔政隣記〕

十一月廿日晝八時頃、御用番松平伊豆守殿より奉札を以聞番御呼出に付、卽刻恒川七兵衞罷越候處、不被及御指扣候段被仰渡。但御伺書御付札、不及指扣。依之左之通西尾隼人殿御渡、夫々可申談旨御申聞之旨、水越八郎左衞門より例文之廻狀を以申來に付、支配中へ夫々觸出候事。

付札、御橫目に

只今御用番松平伊豆守殿へ聞番御呼出、御指扣不被爲及段被仰渡候。依之御門方等之儀御平生之通心得、急速夫々可被申談候。且又右之通御指圖者相濟候得共、於御國も被遊御承知候迄は、御鷹野等御出之儀も御扣被遊候事に候得者、御往返之內者御屋敷中心得之儀、御指扣之御伺書不被指出以前之通相心得候而可然候條、此段も無急度夫々可被申談候事。

十一月廿日

廿一日より御屋敷中普請者始り候。且佐渡守樣御馬場等御稽古者、不及御指扣旨宰相樣御承

本文は金澤に於いてなり

知之御往反迄御見合被遊候事。

〔政隣記〕

先達而相觸候通、今度公邊御勤向間違之趣有之候に付、御指扣御伺可被遊哉之旨、御老中方へ被及御内談候上、御伺書被指出候處、不被及御指扣旨御指圖有之候。此段申聞候事。

右之通被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十一月廿六日　　長　大隅守

諸頭一役宛連名殿

〔政隣記〕

付札、御横目へ

今度公邊御勤向間違之儀に付、不被爲及御指扣段御指圖者相濟候得共、於御國御承知被遊候迄は御屋敷中猶又心得も可有之儀之段、其節申渡置候通に候處、右之趣今月廿二日達御聽候に付、御家中之面々へも一統被仰渡候段、御用番大隅守殿より早飛脚を以申來候條、此段夫々可被申談候事。

十二月三日

右水越八郎左衞門より廻狀に付、夫々觸出候事。

十二月十二日。德川家慶の通稱に觸るゝ人名を改むべきことを令す。

〔御觸幷御返書留〕

今度敏次郎樣御事、若君樣与奉稱候段御弘被相濟候に付、敏之字之名幷唱共相改候樣、組・支配之面々に可被申渡候。組等之內裁許有之人々は、其支配にも相達候樣、家來末々迄不相洩樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十二月十二日　　村井又兵衞

十二月十一日。前田治脩に婚約したる俊姫の名を正姫と改む。

本文十二月廿三日江戸にて有り
改名は十一日に在り

〔政隣記〕

左之通酉尾隼人殿御申聞之旨、水越八郎左衞門より例文之廻狀到來に付夫々觸出候事。

但、於金澤も今月十二日、同樣之御横目廻狀出候事。

俊姫樣御事正姫樣与御改被成候。此段一統可被申談候事。

十二月

敏次郎は德川家慶

〔三守御譜〕

十二月十一日、俊姫君御事、正姫君と御改名。敏次郎君と唱同事に付てなり。

十二月十二日。長谷川準左衛門明倫堂都講を命ぜらる。

〔御異雑記〕

御儒者長谷川準左衛門儀、都講被仰付、役料三十石被下、若年寄支配被仰付候旨被仰出候條、明日可有御申渡段、學校方より御用番へ十二月十二日以覺書申達。都講役之始也。

〔政隣記〕

十二月十三日於金澤左之通被仰渡。

御儒者學校助教　長谷川準左衛門

學校都講、役料三十石被下之、若年寄支配へ被加之。

〔文化雑記〕

一、昨十三日御儒者長谷川準左衛門御用有之、御呼出置被成候間、支配頭誘引、私共指引御席に可指出旨、御用番又兵衛殿被仰聞候に付、則前田修理誘引、私指引指出候所、別紙寫之通都講に被仰付候段、又兵衛殿被仰渡候。服改當座之御禮、例初而之儀に付御用番にも御詮議有之、私指引當座之御禮申上候。

〔又新齋日錄〕

一、長谷川準左衞門寛政五年十二月都講被仰付候。御役料三十石被下候。御役料知者、年内被仰付候ゝ、者半分被下候御定に候。然處御射手等新に被召出料知被下候者は、全御役料被下候御定、御算用場に有之に付、其趣意を以被相伺候處、右例を以準左衞門も、全三十石御役料知被下候事。

十二月廿一日。德川家齊夫人歲暮の祝儀を前田治脩に贈る。

〔政隣記〕

十二月廿一日、御使有之筈に付、五時揃に而熨斗目着用各御殿へ相詰有之候處、四時前歲暮之爲御祝儀、從御臺樣御使御廣式番之頭淸水新左衞門殿を以、干鯛一箱・白銀十枚御拜受。御意之趣佐渡守樣御拜聽、御作法都而去年今日之通に付略之。

但、去年迄は公邊三ケ年御省略中に付、干鯛迄御拜受之處、今年より如最前兩種御拜受也。

十二月廿八日。前田齊敬前髮を除く。

〔政隣記〕

且今日御料理・御盃事御斷。依之餅御菓子・御吸物・御酒、御茶請後御菓子迄段々出之。御給事御側小將・御大小將打込勤之。指引自分・不破五郞兵衞。

十二月廿八日佐渡守樣御登城、御下り之上御前髮被爲執候。依之爲承知隼人殿高田新左衛門へ御申聞、同人より傳達有之。右に付新御居宅附之人々江者、御祝之赤飯・御吸物・御酒被下之。御表向者御平日之通、都而相替儀無之候事。

十二月廿八日。更に三ヶ年間の省略を命ず。

〔政隣記〕

御勝手御難澁之儀者、是迄奉承知通に而段々御儉約等被仰付、御入用方相減候品も候得共、元來御取箇与御符合無之内、五六十ヶ年以來御領國中水損・山崩れ等に而所々變地出來、御取箇段々過分相減候故、年々御不足相かさみ、最早來年より御入用方御手當無之候に付、當年より三ヶ年之間御省略之儀被仰出置候得共、來寅年より改而三ヶ年之間者、年頭御規式等も先年御省略之節之振に被仰付、夫に准じ萬端御省略可被仰付候。此段可申渡旨被仰出候事。

右之通被得其意、組・支配之面々へ可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十二月廿八日　　　　村井又兵衛

諸頭御用番連名殿

右に付來正月二日夜御松囃子相止、御謠初に相成、小謠迄に而先年御省略中同事に相成候事。

十二月。十村及び手代・番代等、御算用者の私宅に至りて公用を議することを禁ず。

［岡部舊記］

御算用者宅に、十村并手代・番代等罷越、内分御用筋申合候儀も有之哉、右之浮說も有之候。元來十村・手代等より、御算用者に内分を以相達候樣成御用筋は有之間敷候。隨分表立役所へ罷出可申儀に候。御算用者心得違等之儀能々申渡置候間、假令右宅々へ每々罷越候而も對面等致間敷、度々罷越候はゞ拙者共へ可及斷。左候得ば何に付罷越候哉及僉議、依品急度相咎可申候條、已來に一圓罷越不申、都而御用筋役所々々へ罷出相達候樣、急度可被申渡置候。勿論御用筋爲可申達、役所々々へ罷出其段相屆候而も、いづれも指懸之御用取込候段等を以不聞請、或は可相渡書物等無謂致遲々、御用筋手後に相成候樣之儀致儀は無之筈に候。若々右躰之儀有之、御用向手支にも相成候はゞ、各迄相斷候樣可被申渡候。尤各にも右躰及見聞候にて、早速拙者共へ可被申聞候。爲念此段も申達候事。

癸丑十二月

右御算用場より、御覺書を以兩御役所へ被仰渡候旨に而、御郡所より寫御渡相廻る。

兩御役所は御算用場及改作所

是歲、能美郡澤村金山の發掘を停止す。

當年は寛政五年

〔三百二條舊記〕

一、能美郡澤村金山、明和五年より金掘、當年迄廿六ヶ年、一ヶ月に金目多き時に五百目、少き時は六・七十目程宛上り、近山に而雪不深故、十二ヶ月共稼出來申に付、一ヶ月二百目に平均、年分平均二貫四百目程上る。二十六年金目大躰六十二貫四百目、內三貫目程京都へ賣申候事御座候。大躰六十貫目。小判一兩之金目三匁五分、內銀拜さこん四分入申物に付六分也。金目二匁与圖り候而三萬兩に成、一兩六十目に圖り銀目千八百貫目に成、五十目米に圖り三萬六千石に成る。此金御上御土藏納り有之、御拂方等未無之候由、寛政五年十一月澤村源次噺に承る。

一、都而金銀等掘申儀は、入用過分に相掛り、稼之品には成兼申由。土中之寶を世間に弘め申心に而、大名之仁心より爲御掘候事之由、澤村源次噺被申候。依而永々澤村金山爲御掘候得共、余程出方薄く、過分御不益に相成申に付御指止に相成申候。

正月朔日。前田治脩金澤城に於いて年頭の禮を受く。

〔政隣記〕

正月元日金澤、天氣宜長閑至極和暖、近年無之春色与云々。

年頭御禮御例之通。二日夜御謡初四海波等猩々舞に而相濟。御作法先年御省略之節之通。四日御弓初等御例之通、但御省略に付御吸物等者不被下之、拜領物者被下之。

正月朔日。江戸に於いて太刀獻上の使者を柳營に上らしむ。

〔政隣記〕

正月朔日、今朝御太刀御献上之御使者、御小將頭高田新左衞門素袍等着、聞番恒川七兵衞同道登城。御守殿・紀州幷御三家樣且又御老中方へ御太刀馬代被遣之、御使組頭指支候に付、御步頭篠島平左衞門・御先手奧村十郎左衞門相勤。若御年寄衆御太刀馬代被遣候御使者聞番、御側衆へも御太刀馬代被遣之、御使御大小將之事。

若君樣に舊臘西丸就被進候。いまだ御徒移は無之候得共、從今朝西丸え諸侯方等登城相初り候事。

御舘例年之通、今日より人日迄幷十五日御表向平詰之事。

佐渡守樣今日年頭御目見、於御居間書院御家老（長者着用太刀馬代献上。）西尾隼人獨禮被爲請、夫より頭分已上幷問番見習・御附之平士等幷御醫師一統御目見被仰付、献上物者無之。奏者御附組頭堀三郎兵衛。右之節御用に而差支候人々者二番座に一統御目見。奏者御附御步頭神田吉左衛門。此時も御用に而差支候人々者明二日御目見被仰付筈也。

但、御側小將者新御居宅於御居間御目見被仰付。

右九時頃相濟、夫より頭分已上御席へ出、上々樣益々御機嫌克御超歲之恐悦隼人殿へ申演候事。

正月二日。前田齊敬登營して年頭の拜賀を行ふ。

〔政隣記〕

正月二日曉七半時御供揃に而、六時二歩頃御出、兩御丸ゟ佐渡守樣御登城、九時頃御歸。昨日御用に而相殘候高田新左衛門等一統御目見被仰付。

但、御裝束之事。

正月三日。前田齊敬東叡山に詣づ。

〔政隣記〕

正月三日、上野御宮惣御靈屋江、佐渡守樣五半時御供揃に而御參詣、御本坊へ御勤御例之通、御裝束、且御目見以上服御改也。

翌四日も五半時御供揃に而御老中方御勤。

正月四日。遊行上人滯錫中その使僧が登城年頭を祝する例を止め、年寄中御用番の宅に於いてせしむ。

〔每日帳書抜〕

正月四日。

一、遊行上人正德三年巡來越年之砌、御在國に付正月七日以使僧年頭之爲御祝儀一束一卷被指上、使僧登城いたし候。當時は御省略中之儀にも御座候間、御城御類燒以後御造營方も不全、彼是指支之旨申達、使僧登城之儀は被指扣、御用番宅或寺社奉行御用番宅迄以使僧被申上候樣可申談哉之旨、右奉行申聞、年寄中御用番宅迄被指上候樣可申談旨申渡、其段申上候事。

正月五日。前田齊敬增上寺に詣づ。

〔政隣記〕

正月五日、九時御供揃、御裝束に而增上寺惣御靈屋へ御參詣、方丈御勤、池德院へ御立寄。

六日五つ半時御供揃に而、御三家樣へ御勤之事。

正月十五日。前田治脩使を江戶に派して當年頭前田齊敬に時服を賜はりたるを謝せしむ。

〔政隣記〕

正月二十七日、當年頭佐渡守樣御目見被仰上候節、始而御時服一重御拜領之爲御禮、從相公樣被指出候御使、定番御馬廻御番頭國澤主馬、去十五日金澤發足、一日之逗留に而今朝參着。御使夫々相濟候而、二月三日夕江戶發歸。

正月廿九日。前田治脩の養女藤姬病を以て出府の期を延ぶ。

〔政隣記〕

正月二十九日於金澤左之通。

藤姬樣御儀、先頃以來御持病之御積氣に而御勝れ不被成、頃日餘寒甚敷、別而御不出來被成御座、右御樣子に而者來月二十七日御發輿之儀御不定に候。依而御出府方等御用意、先御見合候樣可申渡旨被仰出候事。

正月廿九日。前田治脩儉約の爲に鷹の飼養を廢し馬匹の數を減ぜしむ。

〔政隣記〕

正月廿九日、今般格別御儉約に付、御鷹不殘御取拂、掛り之役人當分御用無之、御馬も御減少被仰付。

　但、右に付年寄中等も所持之鷹不殘被取拂、馬も減少、贅普請等も延引に相成候事。

〔菅原直養覺書〕

一、殿樣御鷹皆放れ候由。御拜領之御鷹迄放れ申候由。御拜領御鷹は御放しは被遊間敷儀と下にて評致す。泰雲公御逝去之時分皆御鷹放れ申候。御拜領之御鷹迄殘り申候處、御鷹師共より御拜領之御鷹より外に宜御鷹有之候間、宜しき御鷹をおかれ、御拜領之御鷹を放し可申旨申候處、鷹之善惡に依て放し申わけにてはなし、御拜領之御鷹故御放し被成不申旨當相公樣御意之旨。然る處此度皆御拜領之鷹も放れ申候は、其時之御意と相違と申候。御馬も二疋御はなしに成候由。是より段々御馬もまだ出候樣申候。御道中御馬廿疋程御連被遊候樣申候處、御省略にて十三疋に成候由。藤姫樣今年江戸へ御出府之節御婚禮有之筈之所、御旅行暫く御延引に相成申候由。

彦三は不破氏

兩通とあるは正月廿九日藤姫出府延期の令と共になり

正月廿九日。藩の財政困難なるを以て收入と均衡を得しむる爲年寄等勝手方御用を勤務す。

〔政隣記〕

御勝手御難澁至極に付、御取簡与符合之御詮議被仰付候。依而拙者共何も申談、御勝手方御用可相勤候。御家老中も同樣に被仰付候。御平生方一通り品輕儀者、彦三一人に而相勤候樣被仰付候。爲承知申聞候事。

右兩通、御用番河内守殿御横目所へ相渡之事。

〔菅原直養覺書〕

一、何茂七手より金子指上候筈に相成候由。安房守殿より百貫目あまり、大炊殿より二十五貫目計、玄蕃助殿より銀子百枚、河州より十貫目ばかりと、河州へ土州公御聞合被成候返事に調有之。尤後に指上候而も、夫は御勝手次第。何程と云員數さへ相知候得ば宜くと申來る。夫より御家老之組下へは、相達に不及。平人持へ口達之趣には、當年に至り御勝手必至と閊へ申候旨、夫に付百石十五石之御借知之處、五石返り候を亦御借知被成度趣に調有之樣見申候。左くとは調がたし。其寫は組方に扣仕等。組方に有なり。世間沙汰には又兵衛より十五貫目、隅州より四十貫目抔と申候。追て相糺し調可申。世間沙汰頃日專ら右之沙汰迄、氣毒

成事也。

正月。初めて扶持を與へられ又は加增せられたる十村は、發令の日によりて支給すべきことを定む。

〔河合錄〕

御扶持高被下候刻、遠郡等に而出府遲く候共、被仰出候日を本文に相立候儀之事。

一、初而被下候御扶持高、幷增御扶持高とも、たとへ大晦日に被仰付候とも、其年より丸收納被下候格之事。

一、年暮御扶持人被仰付候等に而御扶持高被下候者、遠郡等に而不斗越年いたし申渡候共、願御聞屆被仰出者前年之事故、被仰出候年より之御扶持高被下候儀に候事。

但、此儀寬政六年正月御知行割役所・御代官役所より及示談、如此相極り候旨、年中行事記に有之。

〔改作方年中行事〕

十村幷御扶持人被仰付時分御代官割所へ案內等之事。

一、十村共被仰付候刻御代官割所へ案內之儀、被仰付候日を調遣し可申。御扶持人被仰付候刻、御知行割へ案內も右同斷。

但、是迄役所より申渡候付、相調遣申儀も有之候へ共、左候而者暮に被仰出、遠路之者呼出、正月へ越出府いたし申渡候而者、去年分御代官口米幷御扶持高も取不申譯達申儀故、

寛政六年正月御代官割等相談者以來本文之通相極る。

二月七日。江戸詰人に扶持方増借を出願することなかるべきを告ぐ。

〔政隣記〕

二月七日左之通被仰渡候旨諸書を以、例之通廻狀に付夫々觸出候事。

付札、高田新左衛門ゟ

此表詰人一統難澁に付、去十二月御扶持方代之內、先達而繰揚一人扶持に金二歩宛御貸渡之分、依願當三月迄返上延引之儀承屆候處、今以諸物高直等に而難澁仕候に付、當春御供代罷歸候節者、組用金に而も御貸渡無之而は、必至与指支候段委曲被申聞之趣、其節金澤御勝手方へ申達置候。猶亦此節右催促之趣も被申聞、委曲紙面も被指出候。然處御勝手御難澁至極に付、今年より格別御省略も被仰出、中々右躰願之趣抔一圓御取揚可被成御時節に而は無之候間、此所奉恐察、何分願ヶ間敷儀無之樣可相心得候。尤先達而御貸渡之分は、當三月急度返上可仕候。此段一統可申渡旨、從御勝手方申來候。先達而より段々被申聞候趣も有之候處、右之趣に而者何も可爲難澁候得共、當時之御勝手振追々申來候趣に而者、誠に御行詰り之御

時節に候間、何分會得仕、返上方等之儀可有其心得候。右之趣被得其意、組・支配之人々に被申渡、尤諸頭中に演述、組等之人々へも申渡候樣可被申談候事。

寅　二　月

二月十二日。今年より諸士の知行借上を增率すべきことを命ず。

〔政隣記〕

二月十三日、御用番九郎左衞門殿より被仰談儀有之候條、明十四日四時過登城候樣に与、一役宛頭一人宛御紙面を以御呼出に付、則十四日各罷出候處、於檜垣之御間左之御覺書御渡之。但人持も組々よりも筆頭一人宛御呼出也。

御勝手御難澁之段者、兼而一統承知之通に而、是迄段々御儉約等被仰付候得共、元來御取箇与御入用方不致符合候に付、年々御不足相かさみ、此上少宛御儉約等被仰付候而も、御不足埋合出來不申候故、今般者御取箇に而符合之處格別御僉議被仰付候。然し御當用過分御不足に而、外に被成方無之故、御家中も難澁之程御察被遊候得共、今年より當分百石以上五石宛增、御借知都合十五石宛、右以下より者增御借知共都合十石宛之圖りを以、御借知被仰付候旨被仰出。

右之趣被得其意、組・支配之面々へも可被申渡候。且又組等之内裁許有之人々者、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

申 寅 二月

今般御借知之儀別紙覺書之通に候。然所御難澁之趣恐察有之、各別指上米等有之度旨、各先達而被申聞候段相達御聽候處、志之程御喜悦被思召候儘、此度被仰渡候增石之通りに而上米有之度旨被申聞候人々者、一統之通被相心得、夫より過上米等有之度人々は、尤先達而之通可被相心得候事。

申 寅 二月

今般御借知被仰付候趣、別紙を以申渡候通に而、一統難澁之程深御察入被遊候得共、不被得止事被仰出候。乍然極難澁之人々者、日用に茂指支、困窮至極仕品も可有之旨被思召候間、誠に格別に無據極難澁人之儀は、頭・支配人より其段拙者共迄申聞候樣可申渡旨、別段被仰出候條可被得其意候事。

寅 二月

付札、御馬廻頭へ

今般一統御借知就被仰付候、隱居之人々者是迄御借知等不被仰付候へ共、此度者格別御難澁

至極之儀故、百石十石宛、右以下者七石宛之圖を以御借知被仰付候條、被得其意可申渡候事。

寅　二　月

今月は正月なれども誤りなるべし

二月十五日。算學者本保十太夫歿す。

〔政隣記〕

御先筒頭　本保十太夫以守

今月　　日病死享年

右十太夫以守、幼名杢之助与號、本保　　之子也。伯父長瀨藤左衛門与言人之許に寄住せしが、同苗常右衛門に實子無之候に付、此十太夫爲養子。天生之才人多藝、別而算學を好み、其上に天文學・曆學等をも學びて算學を成就せり。儒學且醫學をも兼學び、本草にも甚委く、一粒金丹等も調合す。右金丹主藥に者膃肭臍、蠶之化蝶、鼯子の露等入て、夫を仕立る事甚世話成調合也与云々。

先年小堀牛由(は小堀牛右衛門隱居とて領地二千石、居宅高岡町、寶曆八年定番頭より隱居、改牛由与、明和二年十月病死)實八十之賀を祝し時、右以守より順之字の壽といふ事を書て祝語を述れり。是は是八十年之年數之月日之數、暨氣候・節季等之數を拾ひて、三十八萬五千三百といふ數を得て、是を算木に布ば、見る所聢如斯之形に成、是を

順之字に見たる事也と云々。左傳にある亥の算は、七十年之日數二萬六千六百六十と成。是を算本に布て見るに如此之形と成、則亥之字之算といふ事是也与以守云之。右十太夫以守は此國に於て者古今無之人也。算學に長じたる上曆學・天文學等に長じ、年來不懈勤學せしが共、誰よつて問人も無之處、天明五年泰雲院様加州分領之改曆を作りて可入御覽旨被仰出、則調上之候處、向來御用可被遊与御喜悅之段被仰出、以守數年勤學之功顯れたる事を難有がりしと云々。曆學之師者、土御門家之門弟に京都之人居行子（博學多才の人、著述之書居行子前後篇十冊等、其外數部有之。）として有、先年以守より北國下行を賴、則下りて五・六十日逗留。其節書籍等も集り、就中渾天儀之具抔も從京都取寄、又算學之方唐算盤・算木等も拵之所持也。

附、居行子西村遠里とも言。野總茗話と言書も同人作、則西村遠里と有。

〔諸士系譜〕

本保十太夫以守。實三郎兵衛二男。千八百石、御馬廻。御作事奉行、明和八御指除。天明五十剃再御作事奉行。同六正廿五物頭並、勤向如元、幷兼御勝手方。同年九六役儀御指除遠慮、後御免。寛政三四十三御先筒頭、同六二十五死、七十歲。

二月十八日。江戶詰の者の服裝・參會等に關する前令を嚴守すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

二月十八日左之御覺書を以、本多玄蕃助殿一役御用番へ被仰渡、夫々觸出有之候事。

江戶表御式臺を初御表向、都而綿衣等麁服可致着用候。御見廻懸り之御客等之御給事たり共、綿衣等御貸着無之候間、勝手次第着用、御內輪相勤候人々者尤麁服可致着用候事。

一、江戶詰中於御貸長屋、無益之參會無用之事。

一、餞別幷土産物堅無用之旨、前々被仰出候得共、違失之人々も有之躰に付、自今以後堅相互に指止可申旨、近年被仰出候通、猶更嚴重に相聞可申事。

一、足輕以下者御門外たり共綿衣着用、刀・脇指拵金銀相用申儀者可爲無用候事。

一、御家中家來若黨等衣類、不相應之族無之樣主人々々より嚴重に可申付候事。

右之大綱前々被仰出候得共、改而三ヶ年之間嚴敷御省略被仰付候間、猶更急度相心得候樣可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々にも可被申渡候事。

二月十九日。藩侯に供奉して出府する者の會所銀借用額を努めて減少すべきを命ず。

〔政隣記〕

二月十九日武田喜左衞門より左之寫如例以廻狀到來。

付札、定番頭ゟ

會所銀御貸渡高之儀、御供人に百石五百目、交代人者百石四百目宛に候得共、御勝手御難澁至極之趣承知之通に而、御貸渡方指支候に付、可被相減候段御詮議有之候得共、御供人者最早過半致用意ニ可申所、人々可爲迷惑儀に付、此度之儀者格別之趣を以、只今迄之通御貸渡被成候。乍然隨分致省略、知行當不致借用候而も可也に相濟候人々者、可成程相減致借用候様相心得可申候事。

右之趣被得其意、組・支配有之面々ゟ夫々可被申談候事。

寅　二　月

二月二十日。廻來の遊行上人金澤より出發す。

〔菅原直養覺書〕

一、遊行上人寛政五年之冬より被參、當年二月二十日御當地出立。於小松之上人之歌左之通り。

遊行上人神前奉納歌

奉納　多太八幡宮

ちかひにしその言の葉の末廣く御法の場に猶や榮えん

名號板札詩歌　　他　阿

寢寥篠原古戰場　正弔墳墓更斷腸
昔時成佛稱眞阿　名留萬世武勇香
篠原や露の手向いこゝのはも迷はで更に南無阿彌陀佛

遊行　五十四世
他阿上人尊祐書

御當地に於ても歌拵有之、手もよく御座候。矢田六郎兵衛實盛之繪と遊行柳之繪と調遣、さんを賴、調被異候とも見候處、見事に相見申候。

二月廿七日　火の元の要心を嚴にすべきことを諭す。

〔政隣記〕

火之元之儀隨分嚴重相心得候樣、御家中を初末々曁町家に至迄、不相洩候樣一統可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可得其意候、以上。

二月二十七日

二月、諸士に財政整理に關して意見あるものは之を上申すべきことを命ず。

〔政隣記〕

二月十三日、於御席諸頭・諸役人へ左之兩通西尾隼人殿御渡、御口達を以も、何に不依心付之儀無底意御達可申旨御申渡之事。

御勝手御運方種々御僉議被仰付候得共、元來御取箇不致符合、年々及御不足候に付、御取箇与致符合候樣被仰付候儀、御治定被遊候旨等、去午の年申渡候處、右符合之處御圖りも不被仰付候、今以同樣之御運方に而、次第に御難澁深相成候。如斯に而者畢竟被成方も無之段に至り候事に付、今般御出納符合永久全御運方之處格別御僉議被仰付候。依之此段爲心得申達候條、御入用方に拘り候品者、何によらず心付の通無底意可被申聞候事。

甲寅二月

別紙之趣於金澤表一統申渡候に付、於此表も一統可申渡旨御用番より申來候に付、寫相達之候條可被得其意候事。

寅二月

右に付被仰渡之趣奉得其意候、心付之趣有之次第御達可申旨申述退去。且又右御書立之内、去午の年被仰渡候趣与有之儀互見左に記之。其砌之御運方御僉議、大概東・北一ヶ年分御入用銀六千貫目に而被爲濟候御圖り与云之。

御勝手御運方只今迄種々御僉議被仰付候得共、元來御取箇に不致符合、年々及御不足候。依之此度御取箇与致符合候樣被仰付候儀御治定被遊候。然者諸場御入用に拘り候儀、先當分指止置可申候。尤背々指止置候而者御用不辨儀可有之候間、其品に當り時々拙者共迄可被申聞候事。

九　月

右天明六午年也。

右に付於江戸表ち御馬御減少に付、左之三役火事之節御貸馬御渡不被成旨、昨十二日被仰渡候事。

表御納戸奉行　　御作事奉行　　深川火消

二月。欠落人ある時はその請人等必ず法によりて行衞を探索すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、定番頭へ

欠落人之行衛尋方者、請人又者一類之者、御領國上下御關所迄相尋、彌行衛相知不申上に而、夫々可及斷儀に候所、近年請人等尋方等閑之躰に而、主人等より届候上にも、兩川之内等に而致溺死有之段、又は近在等に而致變死有之、其所之者等見付相斷候而も、日數相立候者而躰不相分、知遣知れ不申儀度々有之候。右之内には欠落斷之者も可有之候得共、其儀相顯れ不申故、請人ゟ者御法之通過錢等申渡候。品により欠落人に而無之而も、右之通躰に而過錢等申渡候儀可有之事故、欠落斷に行衛尋方無之書付者相返、兩御關所迄尋候趣等有之分者受取候處、近くは御關所迄相尋候趣名目迄之樣相聞候。欠落人出足之日より、斷書付指出候迄之日間無之分も有之、不都合之儀も有之間、尋方嚴重に可申渡候。

一、欠落人を請人共召捕及斷候得者、過錢等取立不申候。假令右過錢等取立置候而も、欠落より三ヶ年之内に召捕候得者、過錢等相返候儀公事場格式に候。近年過錢等上納方及遲々、御締方相立不申候間、以後於公事場取立方嚴重に申渡候條、欠落人有之候得者、右之趣請人共致會得候樣、主人等より申渡、行衛爲尋可申候。

一、都而一季居奉公人暇指遣候節、請合狀判形者爲消候共、右受合狀者致仕抹置可申旨、相觸置候通に候。

右之通公事場奉行申聞候條、被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

二月

右定番頭武田喜左衞門より例文之廻狀出候事。

二月、猪を捕獲したる者は四季共に褒美米を與ふべきことを告ぐ。

〔筒井舊記〕

猪狩捕候者へ、四季共御褒美米被下候處、寛政三年以來十月より翌二月迄狩捕候分被下候旨、其節夫々申渡候通に候。併右之通に而者猪捕方怠り可申儀に付、最前之通四季共被下候樣相願候處、右願之通御聞屆之旨、御算用場奉行中被申聞候條、此段一統末々迄申渡、見懸次第爲又入情狩捕、尤狩捕候者之名前等前々之通書記、猪之革を相添可及斷旨夫々可申渡候、以上。

寅　二　月

榊　喜左衞門

神保縫殿右衞門

前田　源　六　郎

小谷左平太

能州四郡御扶持人・十村中

〔改作方年中行事〕

猪狩御褒美之事

一、猪狩御褒美之儀、毎作一作願に而御郡奉行申談、連名紙面を以、猪一疋に米一斗宛爲御褒美被下候様相願候得者、御勝手方より御入有之、御米所より引集、一組切御米所御印相渡候。但寛政元年御郡奉行・改作奉行より、是以後定入に御褒美米御渡被下候様相願候處、御聞届有之、定入に相成候事。

但、狩取之案内時々不申聞御褒美願候節、番代等に承り候事、御郡奉行に而時々承届置由也。右御褒美米、寛政三年より毎歳十月より翌二月迄捕候分迄被下候へ共、左候而者狩捕怠り可申儀に付、最前之通り四季共被下候様、寛政六年能州奥・口、礪波・射水之分、御郡奉行役所連名に而相願候處、御聞届有之に付、其段下に申渡、以來御横目被仰付候節之事。

二月。倹約實行の爲單に流例による金銀の支給を廢すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、定番頭に

今般格別御儉約等就被仰付候、是迄毎歳被下方之內、流例之樣に成來候分者當分被指止候條、組・支配之內右被下方有之人々へ可被申聞候。指定候被下方等者、猶更御詮議之品有之候。將又是迄毎歳被下方有之分者、夫々都而可被書出候事。

右之趣被得其意、組・支配有之人々に可申談候事。

寅　二　月

右如例定番頭廻狀出。

二月。藩の財政困難なるを以て江戶・京・大阪の詰人交替を秋季に延期することを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、定番頭に

御勝手御難澁至極に付、御當用必至与御指支に候間、江戶・京・大坂等詰人、當春交替に相向候者、當秋迄詰延可申候。右之趣被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配にも申渡候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

寅　二　月

右御用番九郎左衞門殿御渡之旨等、武田喜左衞門廻狀有之。

二月。町奉行等金澤町中に對して儉約の旨趣を述べ、妄に消極に陷ることなかるべきを諭す。

〔政隣記〕

町奉行中より町中へ申渡之覺書左之通。

今般御上御難澁に付、御仁政御執行思召之程にも不被爲叶故、格別萬端御省略有之、永久思召之御政事に被爲在度之御樣子に候。依之町家も彌奢侈等無之、人々家業專相勵、風俗正敷候樣に与可申渡旨、拙者共迄被仰渡候。尤近年斷申渡候趣も候得共、猶更嚴重相心得、無違失可相守候。

一、町家之内にも貴賤高下有之事に候得者、夫々分限に應じて心得專要に候。右省略之儀人々心得候迚、親族之好しみを忘れ、或は相應之身代之町人も、出入之下人又者心易者迄、譬ば指懸り罷越候に時刻之食事等迄も不與之類、且以有之間敷儀に而、吝嗇にして不本意候。今般之御難澁に付而は、御借り銀抔も被仰付候ても無是非場に候得共、於御上も能々下々之躰御察被成下候御樣子に而、其儀も無之段御年寄衆被仰聞之趣も候。人々手前者勿論、於拙者共も難有存る次第に候。此節彌夫々之家職心懸、妻子に至迄も宜敷手をつかね申儀無之樣

相心得、年齢相應之所作を宛行ひ可申、風俗之宜与申儀外に者無之、家內上下睦敷志を一にして、何も安穩に暮すより外無之候。兼而申渡置候通、當町は武家にて渡世専に致し候儀、既に頃日人々相察も可有之、浮說彼是有之、御家中ゟ之御借米等に而、商方薄儀に而可存當候。然者常々御家中に而相立町家之譯可存入、萬事利欲增長を不存心得可有之事に候。頃日末々輕き者渡世無之、御家中を初於町家も中分以上之助成を請相立候處、人々今般省略等に而其日過之者渡世を失ひ、畢竟下賤之者而已行詰りに相成、此儘に而は人々妻子離散、今日之食物に絕る族与存候間、彌以肝煎共ゟも夫々產業取計之儀申渡、且又右に付拙者共より、末々輕き者之躰具に御年寄衆へも御達置申候趣も有之候。殊にごせ・座頭抔は外渡世も無之者に候之處、一圓御家中へ呼寄不申而者相過不申、樂舞之儀も役者共渡世も無之、藝方執行も不相成趣故、段々存念之趣御達置申候。於町家もごぜ・座頭勸進之儀も近く甚薄相見得候。三味線抔も往來於見込に、誠に勸進躰にてひかせ候儀指支之趣無之候。此等之趣何となく一圓不相成樣に心得候譯にては無之候。

一、町家家修理等も人々見合候形に相見得候。相應之身上之者は、別而末々渡世に仕事無之時節を相考、助成にも可申付事に候。榮耀之普請者本より有之間敷、每々相應之無據手入可有之事に候。

一、町家之人々其職相勵、妻子迄も倶々に無慢怠相稼候上者、或は春秋野山之行歩抔も一圓難相成儀にては無之、終日終夜其家業を相勵候上は、年若之妻子等指遣間敷儀にても無之候。此處相免るし候とて、先々は罷越、着服は勿論萬端奢たる致方、或は他之連中に戲れ事を申、不作法之次第等有之間敷、道之往來は左右をわかち候程之者に候。尤於先々に、諸士之面々ことごとしく相交り申儀にては無之候。妻子抔罷越に者必親族を伴ひ可申、睦敷之本意不可忘候。奢侈と申も金銀を費す而已に不限、身之分限を越候もの皆以奢に候。此等之趣能々相辨、只々御上御仁政之御恵みを永く相請、無他事人々家之繁榮を可存、皆手前〳〵之行ひ可有之事に候。人として貴賤高下者世之有樣に候。貧福者天之成す處、其身を愼み其實を盡すにおいて、などか驗しなかるべきや。難澁は無是非、今日飢寒之二つ、恐れ多くも御見捨者有之間敷。然れ者奉頼候は此御恵に候。依之御國恩を常々存付、兎角人々無他事其業を可相勵、皆人々手前に歸する處に候。此節浮說とり〴〵、下々渡世を失ひ候樣に存候ては、不安堵之事共故存念を申入置候事。

右之趣肝煎・組合頭等より人々會得候樣、念頭に可申含旨可被申渡候、以上。

甲寅二月　　　青地七左衞門　印

高畠五郎兵衞　印

水野次郎兵衛殿

今般御難澁之儀に付被仰渡も有之候間、別紙下々ゐ申渡候。早速肝煎共ゐ被申渡、一通りにては會得も出來兼候間、二日讀之樣に致し、先肝煎會得致し、右書立之趣一々解き、輕き者之心に落候樣に申聞せ可然候。此段早速可被申渡候、以上。

二　月

破段は破談なるべし

二月。諸郡町村に財政困難の情を告げ、專ら儉約の勵行を命ず。

〔司農典〕

累年御勝手向御難澁被成、是迄種々御詮議有之候得共、元來御出納御引合無之に付、年々御不足相立、竟に者御借銀方等御破段之場へも至り、諸向御入用方詮議甚喧敷、御仁政之御指障にも可相成哉に付、今般者御公界を初、是迄之御振合格別御立替被成、是非共御取箇を以可被辨御仕法被仰付候儀、有增先達而申渡置候通。右御仕法當分は末々迷惑之儀可有之、且不得心之所を以彼是申立候趣も可有之候得共、御成就之上は長久御國民之安堵、誠に以忝儀に候。就夫諸向可也に御仕法相整候迄、諸事願方大抵之儀は指押可申、尤此儀長久之御仕法ゐ掛候御省略之趣に而は無之候得共、前々之振合立替、且御借銀方等は格別御詮議之趣有之、當分別而御運方指支候譯有之に付、無據右之趣に候。尤當分之事に候間、末々疑惑不致

樣可申渡置候。今般御仕法大本之所者、農業暨稼方致出情、衣食住等少しも榮耀ヶ間敷儀を指止、依而御難題に不相成樣心懸可申儀專要之事。

御上御衣食を始、御暮方之御樣子其方中も奉承知候通、實以無勿躰御儀ごもに候。此儀曾而御儉約之思召而已に而は被爲在間敷、末々迄質素之風儀を御敎可被遊たる、御國民に先達而之御儀与奉恐察候之條、此御意氣通末々迄會得爲仕、今度者格別風俗を相改候樣相心得可申候。前々衣食住等之儀嚴重申渡候得共、今以分限に過候族も有之。別而宿立候所々之內、妻幷女子抔不相應之衣服着用佛詣抔致候者共有之躰。婚姻・葬式之行粧も甚分限を越候族に相聞得。婚禮者正敷申合、葬禮は深くいたみ申儀、大本に候處、甚實を失、行粧花美をいたし候儀決而有之間敷儀に候間、今度前段御趣意を以爲致會得、急度相改可申候。三州共町分之儀者、別而儕上を好、奢侈之族有之躰。此儀に付而者相達置候趣も有之候得共、指懸り在々之指障りに相成候儀は、尤無泥可申聞候。前段心得違之者共嚴重及穿鑿に可申与、兼而承調理置候儀も有之候得共、今般之御趣意御上之御樣子奉恐察候はゞ、不制共相愼可申儀に付、先不及其沙汰に候條、致會得候樣可申渡候。且又中古以來御郡方相廻候に、役人を始諸事甚事多に相成、第一自分之費、農業幷稼方等之指障に相成、且餘荷銀等過分百姓困窮之基可相成候に付、舊例之品たりとも、御縮方に指障り不申儀者、詮議之上追々可被指省旨被仰渡、則

先達而申渡候通に候。

右兩事者、今般之於御趣に肝要之事に候間、無油斷可致僉議、尤心付之儀者無泥可申聞候事。

寅　二　月　　　　改　作　奉　行

諸郡御扶持人・十村中

付札、御算用場奉行ゟ

今般御取簡与符合之儀格別御詮議被仰付候儀者、往々一統不及難澁樣に与之御趣意に候。就夫御郡方在・町、是迄之何廉事繁末に煩敷儀共有之、下民及難儀に候儀共多有之躰に候。左候而者今般之御趣意に不相叶儀に候間、舊來流例之品たり共、御政事之障に不相成儀は遂詮議可指省事に候條、遠所町奉行・御郡奉行・改作奉行ゟ得与被申渡、委曲被遂詮議可被申聞候事。

寅　二　月

二月、高澤平次右衞門政務の改革に關する意見書を上る。

〔高澤草稿集〕

上書　内密書

此度御財用出納御符合御僉議に付、私存付申端々先日ふと御噂申上候處、書記懸御目候樣被仰聞、近頃恐入候得共、懸案之次第申上候。

一、御財用方頃日御僉議之端々被仰渡、粗承知候處、指當り候御入用方相減可申筋、諸役所御穿鑿御座候御樣子。勿論此上追々格別御簡略可被仰渡与は奉存候得ども、先づ只今之處右役所々々御勘略は、是迄多分指詰り居申躰、今更格別之御益も有之間敷。夫迄に而は中々御符合之處に至申間敷哉。若又夫に而御符合に至り候共、右之御僉議迄に而は悉皆聚斂之御沙汰に相聞え、如何敷樣奉存候。然ば此度專一に可有御座儀は、全躰御國風廣大に超過仕候趣共、格別に御簡略被仰付、其中に而御財用方御穿鑿御座候はゞ、大分御益可有之、必定御符合之處も御成就可有御座。第一御國風易簡に相調候はゞ、四民安定之場に至可申基。定御仁政に相叶可申道理可有御座与奉存候。其子細は大綱左に相調申候。

一、御勝手御難澁、御國用不定仕。幷四民貧窮之者多く罷成候根元は、凡百年來御國風段々超過仕候處、御城下之繁華諸役人目出度儀とのみ存、畢竟之心付申上候人無御座、只今迄過來申故与奉存候。其御國風不移、御家中奢侈出來、其御家中之奢侈に依而御城下工商遊民之類夥敷相增、繁華奢侈に移り、其御城下之繁華を羨み、御郡方追々奢侈に移り、或は農家を疎み御城下は奉公等に罷出候に付、御國用作出候百姓は減じ、御國產を費候遊民之類多相成、

四民右之次第に而奢侈は習俗之常に相成、何茂世間並に押來候に付、中古以來段々貧窮にも至り候得共、誰抽で儉約質素にも難仕、只今之爲躰に御座候。尤昔より四民衣食住之御制度被仰付置、其後度々儉約被仰出も御座候得共、右風俗に而押來候故、御制度も中々難被行、四民習俗之奢侈相止可申期は容易に御座有間敷候。將又右奢侈に依而貧窮之人々多有之候得ば、時により難被捨置儀有之、是迄度々米銀を以一統御救御座候得共、其一統之御救は多分從來之奢侈に遣ひ失ひ、或は榮耀を增、還而儉約之爲には害に相成候。とかく四民儉約之御制度急度相立候而、人々分を守、夫々之業を勵候得ば、難澁貧窮は大概無之道理。只此御制度を以四民安定に可被仰付儀、御仁政不過之奉存候。就夫此御制度可被行儀相考候處、古語に上行下傚謂之風とも申、又移風易俗とも有之、惣而人民數多之御國政は、風を移之道を以御制度可被行儀、天然之令然所に御座候。然ば此度之御僉議、根元御國風廣大之品々御簡略被仰付候はゞ、出納御符合も速に相調可申儀。第一には先は格別御簡略之形に依而、諸人習俗之心を動、尙此上如何可被仰付哉等樣々之惑起り可申、其中には難有儀与感動仕者も可有之儀。其時に乘じ行儀・儉約等嚴密に被仰付候はゞ、全く御制度可被行儀。則風を移し俗を易、四民安定之道、御國政之根本与奉存候。

但、右御國風御簡略之儀、昔より之御格に違候段如何敷哉之御評議可有御座候得共、政依

俗革ゝ中古語も有之、其上本文之趣、衣食住は人倫之根本、御國政之大儀に御座候處、此御制度難被行候而は大切之御儀。御權道を以御懸合御評議可有御座儀奉存候。

一、右御國風御簡略之品々、數多可有御座內、假令ば御郡方は御郡所・改作所・定檢地所三役所々夫々取捌候得共、御郡所・定檢地所被指止候而、改作所一方に支配被仰付、隨分相濟可申候。或御作事所・御普請會所被打込、合一ヶ所に被仰付、會所は御算用場に被打込相濟可申哉。此類品々可有御座、其分諸頭・諸奉行等も其數御減少、小役所・小役人者成限り御省略御座候はゞ、物每易簡に相成、御用方悉く辨じ安く、御財用方益多く、剩聚斂之沙汰無御座、其御國風を被押移候而、御家中始儉約行儀綿密に相調候はゞ、此度之御僉議全御仁政之御趣意に相叶可申与奉存候。

但、諸役人等之內、非常之御手當等御樣子有之品も可有御座候得共、此等も打碎き御僉議御座候はゞ可然御儀。只今迄御樣子有之役前も、其譯も不存罷在候而は、御手當之御用にも無覺束事に奉存候。何分にも諸事御僉議之上、被仰付置候役々者常・非常共に全御用に相立、冗官に相成不申樣可有御座与奉存候。

一、前條之通、御家中奢侈相止、儉約全相調候はゞ、御城下遊民之類渡世難澁之者出來可仕候。其取扱により町方不靜程之儀茂可有之哉。此儀兼而其心得を以、取扱尤被仰付樣も可有

御座儀。畢竟右之趣に而、遊民無用之無頼者等減少仕候はゞ、御城下之行儀相調、御縮方之筋昔より之御制度も全被行、其上御國御静謐に繁昌仕候得ば、永久之御社稷萬々歳恐悦之御儀奉存候。

右私内々存寄罷在候趣、過當至極之儀、口外可仕品に而も無御座候得共、御内密被仰聞に依て、誠恐誠惶如斯御座候。此中に若哉御耳に留り候品御座候而、御摘取被成、御用御座候はゞ可爲本懐奉存候。尤御一覽之上は、速々被投火中可被下候、以上。

甲寅二月　　高澤平次右衛門

笠間九兵衛様

三月朔日。德川家齊の前田治脩に贈れる鶴金澤に着す。

〔政隣記〕

二月廿五日餘寒御尋之驛次御奉書・御鷹之鶴今夕相渡、例之通に而暮過發之處、三月朔日暮頃金澤到着。依之御禮之御使御馬廻頭伴源兵衛に被仰渡、同四日金澤發出、□日江戸參着、四月十三日江戸發。

三月五日。金澤城二ノ丸御進物所の金銀盗難に罹る。

〔政隣記〕

三月七日。二之御丸御進物所長持に入有之候、御禮錢代金壹歩四十九切、銀壹貫貳百目餘、今月五日夜紛失。同斷番人割場附足輕齋藤和助与申者疑敷に付、翌六日盗賊改方伊藤平太夫於宅吟味之處不分明に付、牢揚屋江入置、今七日再吟味に而白狀。右金銀者盗取候得共、怖敷相成候に付、坂下御門內御堀江投捨候段申に付、御用番江平太夫より御達申候處、御堀浚へ被仰付候得共無之に付、重而吟味之處、右御堀江捨候に一向無相違段申候由。尤右同日より禁牢、同廿七日より公事場に引渡有之由也。

三月七日。前田治脩病によつて出府の期を延ぶ。

〔政隣記〕

三月七日左之通被仰出。

當月十三日御發駕可被遊旨被仰出置候處、先日以來御胸痛、其上御持病之御疝癪に而御腰痛強、且御脚氣被成御座、當時之御樣子に而は長途之御旅行御難儀被成候に付、御發駕暫御延引御保養被成候思召候。依而御用番御老中へ聞番參上御屆仕候樣、明八日江戶表へ聞番より早飛脚を以申遣候樣被仰出候筈に候。此段可相達旨被仰出候。右御發駕御延引之儀、御道中奉行江も可申渡旨被仰出候事。

三　月　七　日

三月九日。御郡方に於ける荷物改所を廢止す。

〔政隣記〕

三月八日、當國之御郡之內荷物改所之儀、享保六年以來被建置候得共、御僉議之趣有之、當分被差止、其段御郡奉行等へ夫々被仰渡有之、翌九日相止。都合十三ヶ所也。是今迄七十六ヶ年連續与云々。

三月十二日。道中供奉の士の行裝を簡素にすべきことを令す。

〔坂井留記〕

御供人道中行粧之儀に付、先達而玄蕃助殿御渡之覺書相廻置候處、御僉議之趣有之、重而別紙御渡に付寫相廻候樣、御承知被成、御組・御支配之內御供人へ御申談可被成候、以上。

三月十二日　　河地才記

宮井典膳

付札、御道中奉行に

御供人駕籠乘用之儀、及極老乘懸馬に而旅行難成人々者格別、其外竪頭分たり共年若成人々者、乘懸馬可然候事。

一、御家老役者、鑓三本・矢籠・隻組具足櫃迄之事。

一、人持組鑓三本・具足櫃。
但、鑓二本爲持候儀、幷具足櫃は蔓組に而も荷に而も、勝手次第之事。
一、組頭鑓三本・荷具足櫃。
但、鑓先は二本爲持候而可然候。
一、物頭以下鑓二本・荷具足櫃。
但、鑓先は一本爲持候而可然候。且又前々一本爲持候役柄之人々は、尤只今迄之通之事。
一、平士之具足は荷物認之事。
一、御供人頭分を初、御表小將・御大小將・新番・御步等、衣類・菅笠等迄も在合候を用可申候。見苦儀は御貪着無御座候事。
右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、夫々可被申談候事。

三月十四日。人持組及び頭分の士を城中に集め儉約實行に關する條項を示す。

〔政隣記〕
三月十四日人持・頭分一役一人宛二之御丸へ御呼出、左之御覺書を以御用番大炊殿被仰渡。

覺

一、衣類之儀絹・紬・木綿勝手次第着用可仕候。袴・羽織等茂准候而麁品を用、御歩以下者猶以其心得可仕候。勿論絹・紬より宜品者堅無用之事。

一、於江戸表御式臺を初御表向、都而綿衣等麁服可致着用旨等、於御道中方御供之人々等に申渡候通に候。以來者御供・御使・御給事等相勤候御歩並以上も、絹・紬・木綿相交勝手次第着用可仕候事。

但、是迄羽二重所持之人々は、一向着用指止可申候。京・大坂へ相詰候人々等も、尤同樣相心得可申事。

附、御内輪相勤候面々、暨御歩並より以下之人々は、猶以麁服用可申事。

一、女向衣類今以花麗之形、父・夫等不覺悟之儀に候間、禮服者格別、平生絹・紬より宜品堅着用爲仕間敷候。召仕候女者、絹たり共遠慮可仕候事。

附、銀笄いまだ用候者も有之躰、不心得之事に候。且又近年たいまいを以拵候高料之笄等用候儀、不所存之事に候。以來至而麁品を用可申事。

一、町人之內に者分限を取失、甚奢侈有之、妻女・娘等衣食を初、別而花美を事と仕候躰、不埒之至に候條、奉行・支配人申談、改而嚴敷可申渡候事。

一、百姓之內にも御城下、又者遠所町續抔に居候者共は、別而分限を取失、衣食等も不相應

之躰、其外にも同樣之族相聞候條、是又奉行・支配人申談、改而嚴敷可申渡候事。

一、饗應之菜數、雖爲歷々之面々、押立候振舞は一汁三菜・吸物一つ・肴一色、尤魚鳥等輕き品用可申候。酒は三篇を不可過候。勿論濃茶後段は出申間敷候。其餘者輕き一汁二菜、或は御用に付寄合候節、或は稽古事抔に而參會之節は湯漬飯可出、又は燒飯持參候而尤に候事。

但、菜數等之儀、前々より被仰出有之候得共、心得違之人々も多躰に候。以來は急度相守可申候。何とか子細有之候者格別、一通り咄合等之節長座無用之事。

一、小身幷輕き人々は、押立候祝事にても、一汁二菜又は一菜に可仕候事。

但、長座無用之儀前條に准候事。

一、祝事等參會之節、作法正敷相心得、微陋之仕形有之間敷事。

一、茶會は當分遠慮可有之事。

一、家作之儀彌輕可相心得候。近年は表向致麁相に、內輪に色々物數奇等相聞え候。左樣に者有之間敷事に候條、無內外輕く可仕候。新宅等は頭・支配人其樣子委承屆可申事。

一、輕き人々之內に者、身上不相應之家作等有之躰相聞え候。此度御糺不被成御用捨被成候條、以來前條に准じ猶以至而輕く可仕候事。

一、一通り之音信・贈答一向無用、祝儀物等取遣不仕候而不叶儀は、輕き干肴之類用可申候

事。

但、身近き親類・緣者は、樹木又は殺生之品抔は各別之事。

一、當時押立たる婚禮は無之候得共、內證に無用之費等多躰候條、已來成たけ事輕く可仕候事。

但、妻子を指置候家作料等遣候約諾仕候者も有之躰。一向左樣之儀者有之間敷段、前々被仰出有之處、心得違之人々も有之躰に候條、彌左樣之族有之間敷候事。

一、年頭御規式當時御省略に候得者、自分之規式等は不拘內例に、費之品成限り相省可申事。

一、三月雛・破魔弓・五月之菖蒲兜、飾相なるを用可申旨前々被仰出候通に候處、心得違も有之。且又雛に付而者、別而無用之費多躰に候間、猶更輕く可相心得候。菖蒲兜も彌心輕く相心得可申事。

一、葬送・法事等も至而輕く執行可仕事。

但、親子兄弟等身近き親類緣者之外者、香奠又は菓子類等之品送候儀堅無用之事。

一、諸勸進に入候儀堅無用之事。

一、群集之邊其外爲遊興、寺社方・町家等をかり相越候儀、堅無用之旨前々被仰出有之處、

忍候而罷越候者も有之躰相聞候條、以來急度可相守候事。

一、人馬之儀、當時分限不相應に召置候躰は不相聞候得共、供廻りも表向をはり候而々も有之躰に候條、成限り省略可仕候。御城中召連候人數も、減少之儀御用捨被成候事。

但、他國御供・御使等之節人數之儀は、追而可申渡候事。

一、惣而殺生に付而も無用之費多躰に候間、成たけ費相省可申、度々罷出候儀は遠慮可仕事。

一、長柄傘之儀以前は爲持候者少く候處、其後多候故、人々遠慮候樣先年被仰出候處、今以同樣之躰に候條、彌遠慮可仕候事、以上。

甲寅三月

〔政隣記〕

御勝手向格別御詮議被仰付候處、御當用も過分御不足に付、當分增御借知被仰付候儀、先達而委曲申渡候通に候。右に付猶更嚴敷御儉約等被仰付候。御家中儉約之儀前々より每度被仰出候處、心得違之人々も有之躰に候。依之今般被仰出之趣、別紙覺書之通に候條堅可相守候。尤內輪幕方等准候而急度儉約可仕候。勝手難澁之人々者、右覺書之趣にも不拘幾重にも簡略仕、御奉公可相勤儀肝要之事に候。將又儉約に事よせ、不筋之儀は一向有之間敷儀に候。此

段可申渡旨被仰出。
　附、陪臣は右之趣に准、猶以嚴重相心得候樣可申渡事。
右之通被得其意、組・支配之面々え可被申渡候。且又組等之內裁許有之人々者、其支配へも相達候樣可被申聞候事。
　　甲寅三月
今般儉約之儀被仰出候趣、一統申渡候通に候。是迄御財用御不足に付、思召之通に不被伺品も候故、甚御心勞被遊、此度格別に御勝手向御詮議有之、嚴敷御儉約等被仰付候得共、下々迄も可及難儀儀は、何分被指除思召に候。乍然御當用過分御不足に付而、不被得止事御省略之品々も有之候。右之思召に候間、儉約に事よせ不筋之儀者一向有之間敷旨、一統へも被仰出通に候。且又是迄御家中儉約之儀、每度被仰出候處、心得違之躰、頭・支配人油斷も有之与被思召候。以來若組・支配之人々之內不心得之品候者、急度御穿鑿可被成候條、無油斷可相心得候。此段可申渡旨被仰出。
右之趣可被奉得其意候。今般格別之御詮議に候故、御身分に付而者彌御質素至極に被爲在候得者、無勿躰も御家中之人々、自分之榮耀聊も有之間敷事に候。將又素より御憐愍深く被爲在候間、今般御省略之品之內には、誠に御心外に被思召、御苦勞被遊候儀共も被爲在候。右

等之御様子能會得有之、幕方等艱難に被相心得儀肝要に候事。

甲寅三月

右諸頭共頭・支配人判形之紙面を以夫々申渡、承知之驗判形取立之。

三月十九日。御勝手方の省略に關し町人の守るべき心得を令す。

〔金澤町中法度書等〕

今般御勝手方御省略等之儀に付、別紙御書立を以被仰渡候。右に付猶更町家之者共に、別紙ヶ條書之趣申渡候樣、是又被仰渡候。御書立にも有之通、儉約に事よせ不筋之族有之間敷、先頃も申渡置候儀も候間、彌以其趣相心得可申事。

右之趣可被申渡候、以上。

甲寅三月十九日　高畠五郎兵衞　印

青地七左衞門　印

槻尾甚太夫殿

今般儉約之儀被仰出之趣、一統申渡候通に候。是迄御財用御不足に付、思召之通に不被任品も候故、甚御心勞被遊、今度格別御勝手向御詮議有之、嚴敷御儉約等被仰付候得共、下々迄も可及難儀儀者何分被指除思召に候。乍恐御當用過分御不足に付而、不被得止事御省略之品

も有之、右之思召に候間、儉約に事よせ不筋之儀は一向有之間敷旨、一統ゟも被仰出候通に候。且又是迄御家中儉約之儀、毎度被仰出候通心得違も有之躰、頭・支配人油斷も有之与思召、以來若組・支配之人々之内不心得之品者、急度御穿鑿可被成候條、無油斷可相心得候。此段可申渡旨被仰出、右之趣可被得其意候。今般格別之御詮議故、御身分に付而者彌御質素至極に被爲在候得者、無勿躰御家中之人々自分榮耀聊も有之間敷事に候。且又素より御憐愍深く被爲在候間、今般御省略之品之内に者、誠に御心外被思召候御苦勞被遊候儀共も被爲在候。右等之御樣子能會得有之、暮方等艱難に被相心得儀肝要に候事。

甲寅三月

覺

一、町家之内分限取失奢侈之趣も有之、妻女・娘等衣食を初、別而花美を事とし仕候躰にも及御聽も有之御樣子に候。彌以嚴重に相心得候樣に、今般被仰渡候事。

一、女向衣類、今以花麗之儀も中に者有之躰、父・兄・夫等不覺悟之儀に候間、嚴重可申含置候事。

附、銀笄いまだ用候者有之躰、不心得之事に候。且又近年たいまいを以拵候高料之笄等用候儀、不所存之事に候。以來至而麁品を用可申事。

一、祝事等參會之節、作法正敷相心得、微隔之仕形有之間敷事。

一、茶會之儀者當分遠慮可有之事。

一、家作等之儀彌輕く可相心得、榮耀之致方有之間敷事。

一、諸勸進に加り候儀堅無用、從前々之御定之通に候。近年寺庵方勸化專に相加り候躰相聞候間、彌可相守事。

一、三月雛・五月のぼり等之儀者、前々被仰出候通彌以相心得、費無之樣可相心得事。以上。

寛政六甲寅三月

三月廿二日。江戸詰人の扶持代及び從者の人數を減ずべきことを告ぐ。

〔坂井留記〕

御勝手連々御難澁至極に付、今般格別御詮議被仰付候趣、先達而申渡候通に候。依之江戸詰人御扶持方代、幷知行當り人數高、當分別帳之通被仰付候。是又京・大坂詰之人々茂右に准じ被相減候。然上者詰人一統可爲艱難段、御心外之儀に候へ共、不被得止事右之通被仰付候條、成たけ致勘辨取續、御奉公不指支候樣相心得可申候。

右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配ゟ茂不相洩被申渡、同役中可有傳達候、以上。

三月二十三日　　　　　　　　　　　　　　前田大炊

武田喜左衛門殿

渡邊主馬殿

大屋武右衛門殿

相改候御扶持方帳

御家老役

一、四千石以上、古來御定之四千石當り。但四千石より内者古來御定之通。

若年寄

一、千九百五十石より二千七百石迄　　上下二十三人・馬一疋

但千九百五十石より内者古來御定之通。二千七百五十石以上之分は此度相極候。

平人持人數高之通

平人持

一、千石　　上下十三人・馬一疋

一、千五十石より千三百石迄　　同　十四人・馬一疋

一、千三百五十石より千五百石迄　　同　十六人・馬一疋

一、千五百五十石より千七百石迄　同　十七人・馬一疋
一、千七百五十石より千九百石迄　同　十八人・馬一疋
一、千九百五十石より二千石迄　同　十九人・馬一疋
一、二千五十石より二千三百石迄　同　二十一人・馬一疋
一、二千三百五十石より二千四百石迄　同　二十二人・馬一疋
一、二千四百五十石より二千七百石迄　同　二十三人・馬一疋
一、二千七百五十石より二千九百石迄　同　二十四人・馬一疋
一、二千九百五十石より以上都而　同　二十六人・馬一疋

頭　分

一、二百五十石　上下九人・馬一疋。但一人之増共。
一、三百石より四百石迄　同　九人・馬一疋
一、四百五十石より七百石迄　同　十人・馬一疋
一、七百五十石より八百石迄　同　十一人・馬一疋
一、八百五十石より九百石迄　同　十二人・馬一疋
一、九百五十石より以上都而　同　十三人・馬一疋

但、手替足輕有之役柄之人々者、右人數之内に立込候事。

平士

一、百石　上下四人
一、百五十石より二百石迄　同　五人
一、二百五十石より　同　六人
一、三百石より四百石迄　同　七人
一、四百五十石より七百石迄　同九人・馬一疋
一、七百五十石以上都而　同十人・馬一疋

但被下足輕有之役柄之人々者、右人數之内に立込候事。

御醫師

一、五人扶持より三十人扶持迄　上下四人
一、五十人扶持　同　五人
一、百石以上者平侍割合之通

諸小頭

一、都而上下　三　人

新　番

一、上下三人只今迄之通

與　力

一、都而上下　　三　人

御歩等

一、都而上下　　二　人

但御切米等之者只今迄之通上下二人

一、都而道中往來幷御使等に罷越候時分在留中共、古來御定之通之事。

右人數減少之儀、今般御參勤御供之人々參着、翌日より相減候。先達而江戸表に相詰罷在候人々者、當五月朔日より相減候事。

一、御扶持方直段只今迄一石百七十目充に候所、御徒並以上十匁相減百六十目に相極、足輕・小者之分者只今迄之通り百七十目、且足輕は一ヶ月に銀三匁、小者は二匁五分充當時被下候分、以後被指止候。今般御供人者、發足之日より右之通之直段に而相渡筈に候。先達而江戸表等に相詰罷在候人々者、當五月朔日より右直段を以相渡候事。

但發足前於此表相渡候中勘銀者、只今迄之通相渡、彼地に而本勘差引之節、右直段を以

相極候事。

一、御供人罷歸候節、仕切御扶持方迄に而者指支可申候間、一人扶持に銀三十目充可被下候事。以上。

三月廿五日。江戸詰の諸士に町人等より借銀をなすを戒む。

〔政隣記〕

付札、定番頭ゟ

江戸詰之人々等之内、江戸町人共より過分借銀返濟方無沙汰仕、畢竟御取替に相成御難題之儀、其上返濟方年賦に被仰付候而も彼是申立返上不仕段、一圓有之間敷事に候條、以來詰中猶更萬端致省略、借銀等不仕、御難題ヶ間敷儀無之樣相心得可申事。

寅　三　月

右之趣被得其意、組・支配有之面々へ夫々可被申談候事。

右御用番大炊殿被仰聞候旨等、如例定番頭武田喜左衛門より、今月二十五日廻狀出。

今月は三月

三月。學校に於いて使用する四書五經の訓點を一定すべきことを命ず。

〔學校方覺書〕

佐藤瑒兵衞等ゟ

學校において、習學人へ致敎授候訓點之儀、一樣に無之而ハ、習學いたし候人々紛敷可有之候間、以來四書等ハ闇齋點、五經者後藤點ニ可申渡旨被仰出候條、此趣御儒者等へ可被申渡候事。

三　月

三月。公事場より檢使を發する場合と所檢使にて檢分する場合との區別を定む。

〔岡部舊記〕

寬政六年三月公事場御奉行中より御書立を以、向後縊死・溺死・自害人、或ハ自害仕損候者、或ハ人を殺候共相手召捕置、或ハ人に疵付相手不相果者に而も、双方入組候儀茂無之候ハヾ、其所檢使に可仕事。被切殺候者有之、誰所爲に候哉不相知都而不分明成儀、且都而奉公人相加り申分ハ、公事場より檢使可被遣事。右所檢使之譯、其外他國・他支配者・寺社方者等縊死・疵付人等之取捌方、公事場よりヶ條書を以被仰渡有之。右一件留帳別冊記置候。以來縊死人或者疵人等有之節、奉公人加り居申歟、入組六ヶ敷分ハ、右御ヶ條書之表會得いたし、入念を以取捌可仕事也。

但、奉公人ニ有之候者、武士方奉公人之儀に而、在・町下人之事に而ハ無之事。

四月五日。天德院に於いて前田光高の百五十回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

四月五日朝於天德院、陽廣院樣百五十回御忌御法事御執行。御奉行長九郎左衛門殿。御所勞に付、御參詣無御座。御寺詰人前々之通。

但諸殺生・鳴物等、三日より五日迄遠慮、其外御法事觸前々御代之通に付略之。且又於江戸廣德寺も今朝御茶湯有之。鳴物遠慮、拜禮諸小頭以上被仰付候。

佐渡守御參詣、其外前々之通に付略記す。

四月十一日。先に幕府領より加賀藩領に轉じたる能登の諸村に本年以降定免法を施行すべきことを定む。

〔袖裏雜記〕

天明六年御替村に一御取請被成候千路村・阿部屋村・町村・上棚村・二所宮村・中山村・安津見村・佛木村、都合八ヶ村、其御差付定免被仰付候而者差障有之に付、去年迄者御預所之引付を以、一作圖に免にて納所爲仕、諸役銀も右引付を以取立候。最早當年は定免被仰付、都而改作之御法を以諸事御締方被仰付可然旨。其通被仰付候へば、他郡御扶持人召連、私共之内

四月十一日は寛政六年

右村々に出役、改作之御法を以地味見圖り、免合相定可申旨等。寛政二年四月廿日改作奉行より御算用場奉行へ紙面出、右場奉行添紙面を以差出、其節押札を以入御覽候處、未被仰出に付、彌右之通被仰付可然と四月十一日伺之處、伺之通と御意。

四月十三日、金澤元如來寺町孀よし、小松大文字町宇都宮正安娘すゑ二人篤行を以て賞せらる。

〔袖裏雜記〕

元如來寺町孀よし儀、先年米屋九右衛門与申者下女に被召仕候内女子出生、其節九右衛門より合力貰受他に居住候處、九右衛門病死後、年頃預厚恩候程存付、三ヶ年之間肉食相斷ち、尤三ヶ年他に縁付不申處、よし志之程澤田伊三右衛門家來中村丈右衛門承之、嫁娶仕、娘一人出生、當年十五歳に候。最初之女子は相果候。丈右衛門病死後孀暮にて罷在、近年極貧窮、佛花を商渡世いたし、其内より日毎一・二錢充地子銀を除、終に不相滯令上納、母子共つゞれ一重着用、膚を防兼候に付、町會所より商賣元手錢少々取計遣置候。且右女子賣女にもいたし候はゞ、三・四貫文も可指遣抔と申入候者も有之候處、身社賤、何程貧窮に迫り候とても、左様之儀は可致儀にて無之与承引不仕、其外常々母子共心立宜旨。其上右居町組合、別而風儀不宜者共有之候處、志操正敷、不貪之行衆に秀候旨等。右に付御賞美御座候様仕度旨、町

奉行紙面出候付、様子は違候へども秋吉村肝煎又右衛門之例を引、よしへも三貫文被下可然候と三月十一日伺、四月十三日伺之通と御意。

〔袖裏雜記〕

小松大文字町吉竹屋長兵衛後家借家人宇都宮正安娘すゑ、今年廿六歳、孝心者に付、同所町奉行より米一石爲相渡、其節委曲相達。正安殊外難澁至極、家內四人罷在、取續得不申間、何分御慈悲之御沙汰有之樣仕度旨、右奉行より紙面出、伺等前件同斷。

四月廿七日。前田治脩金澤を發して參覲の途に上る。

〔政隣記〕

四月二十六日、明日就御發駕、去二十三日御用番大隅守殿御廻狀之通、今日四時より九時迄之內、人持・頭分登城、伺御機嫌之御帳に附、退出之事。

但、病氣等之面々者、御用番御宅迄使者差出候事。

明日御發駕御供揃六時過与就被仰出候、御見立揃刻限七時過与昨日御横目中より申談之處、御儉約之筋に而、御見立揃刻限六時に相成候段、重而今日申談有之候事。

二十七日朝五時頃、御機嫌克御發駕被遊候。其節龜萬千殿階下へ御送。御城代・御用番・御家老中階下へ被罷出。御先立若年寄大音主馬。其外御年寄衆等幷諸頭之內等罷出候ヶ所前々之

通。御發駕後御席へ頭分以上御見立に罷出候人々者罷出、御用番大隅守殿へ恐悦申述退出之事。

但、五月九日九半時頃御日圖之通江戸御着、都而御例之通。

〔御年譜〕

御供御年寄中玄蕃助、御家老詰不破彦三、御歩頭詰前田甚八郎。

四月。領内の川除普請を當分十村等の引受となさしむ。

〔筒井舊記〕

三州川除御普請、十村引受に被仰付可然趣、先達而改作奉行より差出之覺書被出之、達御聽候處、當分右覺書之趣に可申付、御普請出來之上、定検地奉行并改作奉行之內一人立會、遂見分候樣可申渡旨被仰出候條、被得其意、夫々可被申渡候事。

四　　月

三州田地圍川除御普請、近年度々之出水に而大破に相成、最早一庶御普請不被仰付而者難叶段に付、定検地奉行中申談、打返遂僉議候得共、誠御難澁之御時節に付、格別御普請可被仰付儀何分詮議埒取兼候。乍然此儘に而は川筋村々難澁至極、且又此末若出水在之節、過分入川等に相成、莫大變損之程も難計、危急至極之場に付、何卒格別詮議方も有之間敷哉之旨、

諸郡御扶持人へ及示談候處、定銀二百五十貫目之外、毎歳百貫目計相當竹木等御郡より爲指出、且近年繰越に御普請申付置候御入用銀百貫目除、先御郡へ引受置、格別變損之外は何分御郡方に而可致修理旨書付差出候に付、夫々御達申候處、御時節柄無據右詮議之通、其方中引請普請可被仰付旨被仰渡、則別紙覺書御渡に付寫相越之。將又御普請出來之上、定檢地奉行中幷拙者共之内立會、折々可致見分候。尤普請方之儀者、其方中存寄之通無泥可申付者也。

卯四月　　　　杉野善三郎

　　　　　　　立川金丞

諸郡御扶持人・十村中

〔郡方舊記〕

一、寛政六年より三州川除御普請方十村引受に被仰付候事。但同九巳ノ年より、最前之通定檢地奉行御手合に相成候事。

四月。郡方百姓に關する制令にして近時輕忽に附せらるゝものを列擧し之を嚴守せしむ。

〔御郡典〕

覺

一、金澤を始遠所町・宿驛等之商人共、堂形等百姓共相集候所々幷村々江、近年者酒饌品宜敷魚類、又者蒸菓子、其外小間物、且革細工物榮耀之品々持參いたし、百姓共江彼是申勸メ、作物与交易いたし候族も有之、所に寄秋中者野間江も持參いたし賣勸メ申躰に候。以來右躰之商人、村方等江立入候はゞ見咎、其處に押置、早速御郡奉行等江爲致案内、品により右商物取揚候而、商人之儀者其支配江引渡可申候。將又右躰之商人見受次第召捕候樣、盜賊改方江も渡置候事。

但、至而品輕き食物賣買之儀者格別之事。

一、近年御郡中之者勝手次第町方江罷出居住仕者多有之躰に候。左候而者御締方に相障り候條、以來人別帳混雜不相成樣急度相改可申候。是迄町方江罷出候者之內、相應に農業等可相成分は御郡地江相戾可申候。尤是以後若奉公等相望候者、裁許之十村江斷、得与相糺、御郡奉行・改作奉行申聞承屆候上、十村より送紙面を以指出候樣可仕候。送無之者、町方借家又者奉公人宿請等相願候而も承引仕間敷、若右躰之族於有之に者、宿請等仕候者急度可申付候樣、金澤町奉行等江も申渡候。尤本人之儀者、御郡奉行等手合に而爲召捕可申候事。

一、惣而町方之者共近年次第に奢侈に相成、衣食住を始分限を越、身元宜者抔者妻子美服を

着用榮耀之品多、遠所町方之内に者婚姻葬式等別而分限を過候儀共有之樣子。且亦祭禮等も甚繁華之躰。將又茶店幷煮賣抔仕候者ニハ、女奉公人召置給仕に爲仕候躰、畢竟驕之至に候條、右等之品々堅く制可申候。百姓共も右を見習、侈之儀も有之躰に候間、以來嚴重可申渡候事。

一、古手商之儀、縮方之札相渡候得者紛敷無之候處、御郡方之内に者札無之者も右商仕候躰故、賊物紀方紛敷、御縮方立兼候間、以來右縮方嚴重可申渡候事。

一、御郡方等之者、於往來に着類等買請候内、紛敷品有之候條、以來買受申間敷候。若疑敷品与心付候ハヾ、仕抹方相働、村方等役人ゟ及斷に可申候。其首尾によつて御褒美可有之候。若亦潜に買受候ハヾ、過怠之御沙汰可有之候事。

但、右之趣公事場奉行ゟも申渡候事。

一、御郡方より病身等を申立、醫者又ハ發心之躰に而無斷町方ゟ罷出、旦那寺等を相賴剃髪仕、聽聞事讀合抔与稱し、在々を廻り施物取申族多有之。其上寺庵方弟子等に仕、庵室抔を爲持置候儀も有之躰に候。是迄之儀者其通に而も、以來至而無據訳有之儀者、裁許之十村ゟ相斷、御郡奉行等承届候上、送紙面を以指出可申候。送無之者猥に指置候ハヾ可爲曲事候。本人之儀者御郡奉行等手合に咎可申候。且亦新寺・同心寺相建申儀者御停止之趣、萬治年中

同心は道心なるべし

公儀被仰渡を以度々申渡置候處、當時違失之族も有之躰に候間、急度相心得候樣可申渡候事。

一、御郡方に罷在候者共之内、不届に而所之害にも罷成候者有之候而も、其分に仕置候族も有之哉に候。ヶ樣之者、外惡事に而於公事場に禁牢申付候而も、其儀相知不申候得者、御刑法之品差別も相立不申候條、以來左樣之族之者は、支配人等より委細公事場奉行に相斷可申候事。

一、夜談議者御停止に候處、近年遠所町方・寺庵之内、夜説法抔与稱し夜談議いたし、參詣人之内亂行之族も有之躰相聞候。以來家之内たりとも夜談議不仕樣、嚴重可申渡旨寺社奉行に申渡候事。

一、於御郡方に諸勸進御停止之儀、度々被仰出も有之候處、近年座頭等在々に相廻り、別而富山・高岡等之目明瞽女在々に入込、所に寄數日逗留いたし、不埒之儀も有之躰に候。往還筋相通り一宿宛仕候儀者格別、以來右之躰之族無之樣、急度可申渡候事。

一、旦那寺之致寄進候儀者、人々分限相應志に可任處、近年者指而堂塔破損も無之内、物好等に而造替之節、町・在之者取持人等相加り、押勸化同事難題を申懸、且承知無之者に者、其趣意を含、事に觸難儀を懸、且御郡より縁組・養子等申合候節者、双方旦那寺に音物等いたし

談合之上、巡狀受不申而者、病死仕候節抔彼是邪魔も有之樣子風聞も有之候。右取持人之儀者別而嚴重可申渡候事。

一、御郡百姓共之內先藏宿に申合、手廻之筋及示談、何廉非義之取組等仕候族相聞得、以前も申渡候處、違失仕者も有之躰に候間、藏宿支配之奉行より急度可申渡候。尤百姓共之儀、改作奉行より夫々可申渡候事。

申　寅　四　月

付札、御算用場奉行に

三州御郡方先格之內、次第に忽に相成候品々も有之躰相聞え候に付、要用之儀委細被遂詮議、御郡奉行等より指出候紙面等、添紙面を以被指出候に付、詮議之上別冊相達候條、町・在之者共違失不仕樣、嚴重申渡候樣所々町奉行并御郡奉行・改作奉行に可被申談候。且寺社奉行にも申渡候條、可被得其意候事。

寅　四　月

三州御郡方先格之內、次第忽に相成候品々も有之躰相聞得候に付、各詮議之趣被申聞、於當場にも遂詮議年寄中に相達候處、別紙御覺書を以御渡御帳面・寫共兩品相達候條、被得其意、以來右之趣聊違失無之樣、夫々急度可被申渡候。

以　上

申寅四月十日　　　　御　算　用　場

三州御郡奉行中

町方幷宿驛之商人、村々ゟ立入榮耀之品商内候趣等之儀に付、兼々拙者共より御達置候趣有之候處、今度別紙之通被仰渡候に付、寫一冊相達候。尤御定も有之、且拙者共よりも前々申渡置候品に候得共、其支配違之商人共も立入候儀に付、制し方行屆兼候体に付、此度格別御詮議之上、寺社奉行・町奉行等ゟ重々被仰渡候間、宿驛等之商人共之儀者、別而嚴重可相心得、且村々百姓共ゟも急度可申渡候。若心得違之商人有之候はゞ見咎候而、人之儀者勿論商物も其所に指置、早速可相斷候。若見免し置、外より相顯候はゞ、急度咎可申付候。村役人共ゟ者別而嚴重可申渡者也。

寅七月十日　　　　林　彌四郎

神保縫殿右衛門

栂　喜左衛門

長屋平馬

在小杉　大野瀨兵衛

在岩瀬　篠原権五郎
大藪勘太夫
岡田才記
立川金之丞
小谷左平太
御郡廻り　山岸七郎兵衛
同　前田源六郎
同　野村忠兵衛
在大坂　加藤左次馬

加州・越州・能州御扶持人・十村中

五月九日、前田治脩江戸に着す。

〔三守御譜〕

五月九日江戸御着。同日老中御廻勤可被遊處、御疝積氣に付御使間番を以被仰達。

〔三守御譜〕

日記に、御老中四方・同格本多彈正大弼殿へ、今日御着府御機嫌御伺旁御廻勤可被遊處、御

持病之御痛積等御指引、難被成御廻勤に付、右御案内將又御安否御尋、此段茂乍序被仰述候御口上之御使、自分相勤候。御廻勤不被遊御例には、寶暦十一年・安永十年也とあり。登壽曰。此儀時々不記といへども、江戸御着、其日一先御屋形へ御着、追付御出、老中御廻勤被遊御例なり。御服御上下なり。御供人羽織・袴なり。外御大名にては、御屋敷々々へ御着なく、直に老中御廻勤と云。依て御供人は道中裝束のまゝなり。先年御長小將相勤候內、老中へ被爲入、御供中見請候儀もあるに付記す。御歸國の節は、前日老中御廻勤被遊御格なり。文化十五年齊廣公御暇之御禮、即日御發駕の節も御廻勤あり。是は御實母樣御病氣に付、御急にて即日御發駕なり。

五月十三日。德川家齊使を遣はして前田治脩の參覲を勞す。

〔政隣記〕

五月十三日、今般就御參勤而之爲上使御老中安藤對馬守殿。御作法前々之通。十五日御登城御參勤之御禮被仰上、玄蕃助殿・隼人殿も御目見等、都而御前例之通に付記略。

五月十四日。火災の際無用の者の現場に群集するを禁ず。

〔政隣記〕

付札、定番頭ゟ

火事之節、無用之人々火事場へ不罷越筈御定も有之候處、近來御役人之外早乘仕候族茂多、

火元へも無用之者入込、御役人之障に相成候樣子に相聞候事。

一、辻々大勢相集り、火消人數等致見物、往來之障にも相成候樣子相聞え候事。

右等之趣前々より相觸、寛政三年にも急度相觸置候處、近き頃猥に相成候躰、夜中火事之節提灯無之、馬上に而駈廻候人々も有之躰に候。火事之節親類等之宅に見廻候儀者、御定も有之儀に候間、都而心得違無之樣嚴重可相心得候。尤右躰之者於有之者御横目より相咎、夫々名前も承屆候筈に候條、被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配へも相達置、尤家來末々迄不相洩申渡候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

五　月

右定番頭不破和平より、十四日々付例文之廻狀到來之事。

五月十五日。前田治脩登營して參覲の禮を行ふ。

〔三守御譜〕

五月十五日御禮於御座之間被仰上。此時本多玄蕃助御目見。福武公日記に、本多玄蕃助殿御禮被申上候節、御父安房守殿御同事帶劍にて御座有度被仰出之御使、四月三日も松平伊豆守殿へ東野忠兵衞被罷越候處、五日埒明、帶劍御目見に極る。右帶劍之儀は、前日御届にて相濟候儀に御挨拶有之候とあり。

〔續德川實紀〕

五月十五日、月次例のごとし。松平加賀守治脩參覲す。

五月十六日。省略方御用別役所を開始す。

〔政隣記〕

今日より御當地御省略方御用別役所相立申候。依之諸頭幷諸奉行等に、御省略方詮議之儀に付、右別役所に而懸合申儀可有御座候間、其節私共より申達次第罷出候樣仕度、此段夫々被御渡御座候樣仕度奉存候。

以上

五月十六日　　石野主殿助

河地才記

本多玄蕃助樣

西尾隼人樣

右御横目添書を以廻狀有之。

五月。江戸に於ける諸士の扶持方を減ず。

〔御年譜〕

一、江戸表等御扶持方代當五月より被減候旨被仰出。

但、一石代百六十目、足輕小者百七十目。且平士百石四人、諸小頭・新番・與力三、人御歩二人。

六月六日。他國居住の者に給する合力米等十分の一を減す。

〔手役者召抱一件〕

六月六日御在江戸玄蕃助より演達に付、御用人幷會所奉行ゟ申渡。

御用人ゟ

累年御勝手御難澁之上、近年彼是御物入有之、其上御領國不作等に而莫大之御損毛に付、彌增被及御逼迫候付、段々嚴敷御儉約等被仰付候得共、御運方一圓御指支に付、今度御家中一統增御借知被仰付候段、各承知之通候。將又他國居住之人々ゟ御知行・御合力・扶持幷御給金等被下置分ニハ、是迄御借米等不被仰付候得共、今般者格別之御時節故、都而御合力米等高之内十ヶ一之圖を以、乍心外當分御借上被成候間、會得候樣實生彌五郎等ゟ可被申渡候事。

〔手役者召抱一件〕

一、京都御手役者一統、寛政六年より御給金之内十ヶ一充御借上之處、依願同九年より御用捨之段、正月廿八日町奉行ゟ申渡之。

六月十二日。寶國寺に於いて前田吉德の五十回忌法會を營む。

〔政隣記〕

六月十二日於寶圓寺護國院樣五十回御忌御法事有之。御奉行奥村河内守殿。都而前々之通。

六月十三日。前田修理の家來增田助左衛門・酒井貞助二人鬪爭して相殺傷す。

〔菅原直養覺書〕

一、六月十三日前田修理家來增田助左衛門と酒井貞助と云者と及喧嘩、貞助切殺され、助左衛門儀手疵を蒙り存命也。右助左衛門之家、此方足輕梅澤安右衛門之隣家也。兩隣り向三軒には、何事と云時事かゝり候事に候間、此方よりも達無之而不叶か、又修理方より達候而宜候か如何と御持、其處如何決斷に及候哉、修理方より檢使不乞由申候か、十五日承候得ば檢使乞候樣にも聞え申候。如何相成候哉追而書加べし。

世上之沙汰にては、野町神明に子供かぶき有之候に付、貞助二十二三歳之由。式臺番之由。見物に參り居候處、助左衛門六十一歳と承申候。用人之よし。番之食拔之内其處へ參りのぞき候處、貞助呼懸酒を振廻候處、此酒は

くさり居候段申候得ば、酒を進せ申候上、左様之儀は如何之趣と貞助怒り候由。去共其場は事濟、神主抔詫言にて事無之候。依而助左衛門宅へ歸り、はだかに成縁先に涼居候處、其處へ貞助參り、覺悟仕候樣に申懸切懸候得ば、助左衛門心得候由に而刀を取て參り、はだかにて切合候處、貞助負色に成門之外へ逃出候を、追かけ候得ばころび候處、すかさず切懸候得ば又門之中へ入申候。其所にてのどをつきとめ申、門を打候由申候。助左衛門六十有餘に候得共達者にて、其疵にも弱り不申候。十四日抔にても、此疵は痛も不致か、重而腹切候時は餘程痛可申抔と申居候由。

又世上沙汰に、修理之實母寶珠院、故修理病死後不行跡有、小門より町人共を夜中入、一夜一兩之金子にて町人共遊び候由。右助左衛門寶珠院とふるきなじみにて候所、十三日神明之しばゐ見に、寶珠院貞助召連しばゐ見物に參り候由。其儀を助左衛門心元なく存、跡より參り、夫より事おこり候由も申候。又助左衛門娘、只今成瀨内藏助方に居申候。召使候女共世上に申候得ども、左樣に而は有間敷候。右娘貞助のなじみにて、以前より遊び候處、此前もしんぼうをせんさいたし候處、助左衛門承り異見いたし申候。然れば右娘を貞助所望いたし申候處、助左衛門承知不致候。依て貞助妻を取候得共、妻とは不和にて、未だに折々右娘と出合申候由。右助左衛門娘をくれざる意趣とも申候也。追而委敷儀可入也。

六月十九日。大聖寺侯前田利考參覲の途金澤城に登る。

〔文化記〕

寛政六年六月

一、飛驒守樣御參勤に付御當地ゟ御着、二御丸御廣式ゟ被爲入候に付、御作法附一通御渡、前々之振を以夫々申談候樣、御用番河內守殿被仰聞候に付、則夫々申談候處、昨十八日御當地ゟ御着、十九日一日御逗留、廿日御發駕被成候旨、町奉行中より申越候に付、十八日爲御待請御旅宿邊ゟ三宅氏被罷越候處、暮六時過御着被成、御指障無御座旨被仰出候段、御前へ罷出御意有之候に付、退、御家老野口兵部迄御禮被申上。其節前々之通御橫目足輕召連、且又御旅宿火之元見廻り御步橫目・御橫目足輕指出申候。

一、飛驒守樣御參詣に付、當十九日二御丸御廣式ゟ被爲入候節、御廣式御門內外御供人溜可申候間、御步橫目相廻り致指引候樣可申渡旨、御用番河內守殿被仰聞、則三上淺右衞門申談指出候處、同日四時迄河北御門より堀端通二御丸御廣式ゟ被爲入、四時過御戾被成、相替儀無御座旨、淺右衞門幷御先立御橫目足輕申聞候。

六月。前田重教夫人の知行米を減額すべきことを定む。

〔袖裏雜記〕

御勝手御運方種々御僉議被仰付候へ共、元來御取箇に不致符合、年々及御不足候付、御取箇ニ致符合候樣被仰付候儀御治定被遊候旨等、去午年被仰渡候へ共、右御符合之處御鬮りも不被仰付候付、いつとても同樣之御運方に而、次第に御難澁深相成、如此にては畢竟被成方も無之段に至り候付、當春以來、出納符合永久至御運方之處格別御僉議被仰付候付、諸向萬端嚴敷御儉約被仰付候。且御當用も必至と御指支に付、御家中御借知增石も被仰付候。依而金澤幷此表御廣式向、暨佐渡守樣御定銀之內も、御減少無御座而は一統之差障相成候趣に付、夫々被仰渡候。就夫壽光院樣御知行米之儀者、元來一萬石被進候處、御入用御不足に付、其後五千石御增、一萬五千石代金を以被進候。然處御勝手御難澁に付、安永十年より五千石御減少之儀に候へ者、此上御減少者難被爲成儀に候へ共、諸向各別之御省略故、於自他國御合力・扶持等被下置候人々よりも御かかり上被成候等に付、此上にも少々御減少に候へば、格別諸向之押方にも相成候儀に付、當時一萬石代之內三百兩御減少被爲在候樣仕度旨、拙者共より申上候處、先達而御減少之上に候へば、御許容難被成旨被仰出候へども、何分御減少不被仰付候而は格別之御僉議難調旨等、再往申上、無據儀に付被聞召屆候。依之御不自由には可被爲在候へども、乍御心外三百兩御減少被成致候。此段宜申上旨被仰出候事。

寅　六　月

六月。石川郡の十村、倉谷四ヶ村の沿革を郡奉行に上申す。

〔倉谷銀山之事〕

石川郡倉谷村・二又村・日尾村・見定村右四ヶ村由來書

一、四ヶ村共先祖者平家之落人に而、其節山籠いたし居申候内、家建山稼仕來申候事。

一、御先代樣大坂御陣之節御供仕候由。尤杣百姓之儀故、陣小屋等懸、度々御用に相立、且又御城中樹登り杣御用相勤申候。陣山刀相渡り候處、先年倉谷村火事之節燒失仕候。右之趣故、今以杣百姓与申名目に御座候事。

一、銀山初り之儀者慶長十三年に御座候。元和九年に倉谷村・二又村御役家幷掘子家等四十二軒建申候。萬治元年迄者、右四ヶ村共御算用場直御取啰に御座候由。右銀山盛りに出申節、御郡御奉行御請被成候處、常御詰難被成候に付、萬治二年より吉野・鶴來兩十村右裁許被仰付候處に、銀山出方薄く成、銀山御用茂無御座候に付、享保十三年に四ヶ村百姓依賴、吉野村甚七組付裁許に被仰付候。慶長十三年より今寛政六年迄百八十七年目也。

一、右四ヶ村之儀、御先代樣之時分、度々杣方御用に相立申に付、諸役御免御座候。然處中納言樣御代寛永十三年より、四ヶ村山役等御極被遊、每年一貫三百六十四匁、六月・十二月兩度に上納仕候事。寛永十三年より今年迄百五十九年也。

一、延寶八年より未三ヶ年之間極難至極に御座候哉、四ヶ村共從御上預御養、尤其節之御養米返上、今以毎年御見圖りを以代銀五十目宛四ヶ村より返上仕候事。延寶八年より今年迄百十五年也。

一、銀山運上銀一枚半、倉谷村・二叉村より上納仕候得共、安永五年銀山町屋敷退轉被仰付候に付、安永五年より右御役銀上り不申候事。

右倉谷四ヶ村往古より之御印幷書物等、先年倉谷村火事之節燒失仕候得共、相殘り申書物入御覽申候。其外之儀村方之樣子承り傳申儀共、覺書指上申候、以上。

寬政六年六月　　　白山村　又八郎

右之通相調、御郡御奉行林彌四郎樣へ上る。

七月十二日。江戶に於ける富山侯及び大聖寺侯邸、並に旋風の害を受く。

〔政隣記〕

七月十二日未上刻、旋風不忍池邊より起て、茅町邊町家屋根等吹まくり、損所多、出雲守樣御邸も損所多く、飛驒守樣御邸は別而大に破損、御櫓中半より吹倒し、且御玄關敷付御座虛空へ吹揚、此方樣御邸內へ落下る。其外損所數多、此方樣御邸內には無御別異。但垣等は損。

七月十五日。右筆不破半六の養子茂一郎亂心して組外堀才之助を傷く。

七月十五日八時頃組外堀才之助儀、弓之町御異風今村次右衛門宅へ罷越、於居間暫對話之處、次右衛門儀用事有之に付勝手へ退き候ゆゑ、暑を凌候ため縁頰に立有之候處、同居人御右筆不破半六養子茂一郎（實は次右衛門二男也。御大小將組御用番支配。）半六罷出、脇指を以切懸候處、兼て意趣も無之、其躰亂心与見受候に付、飛懸り組合候處江、次右衛門も立合、兩人に而右茂一郎を組伏、柱に縛り付、才之助江存念も有之哉与次右衛門相尋候處、全亂心与相見得候間、存念も無之旨才之助答之。其内才之助嫡子新番御歩堀十藏も罷越候に付、是江も存念相尋候處、才之助同樣之答也。夫より半六支配頭遠藤兩左衛門、御番頭田邊善太夫・永原半左衛門罷越見屆之上、御用番長九郎左衛門殿江書付を以御屆申候。才之助頭千田次右衛門・野村與三兵衛よりも、才之助手疵檢使之儀等九郎左衛門殿江御屆申候處、翌十六日朝五時前、爲檢使御横目永越八郎左衛門・三宅平太左衛門罷越見分有之。夫々口上書取受退出有之。但才之助儀、頭上に一ヶ所、胸の下に一ヶ所、横腹に一ヶ所、兩手に一ヶ所宛疵を蒙り候得共、皆々薄手に付命に障り候事は有之間敷、併暑強候故難計与云々。且次右衛門支配頭御異風裁許古屋孫市・富永右近右衛門、十藏頭山森澤右衛門相詰有之候。自分方江も十五日夜八時前、次右衛門より以紙面右之趣、并同居人後藤吉太郎家内（同組御大小將、當時在江戸。）無別條段爲知之處、同役田邊善太夫罷越居

候否不相知。樣子無心許に付追付見廻候處、前記之通相詰有之に付無程致退出候事。

七月十七日。諸士に命じ絹・紬以上の衣類を着用することを禁ず。

〔政隣記〕

衣類之儀絹・紬・木綿勝手次第着用可仕候。袴・羽織等も准候而麁品を用、御歩並以下は猶以其心得可仕候。勿論絹・紬よりも宜品者堅無用之旨等、當春一統被仰渡候處、於此表縮緬羽織等致着用候人々も有之躰、不心得之至りに候。家來共之儀者、主人申付方不行屆趣に候。是以後若右之族有之候はゞ、急度御咎可被仰付候。

右之趣御家中之人々幷家來末々も、嚴重に相心得候樣可申渡旨被仰出候條、被得其意、一統相觸候樣頭・支配人可被申談候。且又御横目足輕致見分候而相咎候樣可被申渡候事。

寅七月

同日右玄蕃助殿被仰渡候段、御横目廻狀有之。

同日は十七日なり

七月十八日。成田勘左衛門公金を私せしを以て牢揚屋に錮せらる。

〔政隣記〕

七月十八日、成田勘左衛門御金私曲に付、今十八日於公事場一往御吟味之處、私曲無相違に付牢揚屋へ被入置。依之翌十九日、左之通御覺書を以御用番長九郎左衛門殿被仰渡候に付、

則野村伊兵衛於宅、大屋武右衛門・御番頭安達彌兵衛立會、伊兵衛申渡、御請紙面判形は、梅之助幼年に付同道之不破平左衛門代判調之。且類中ゟも被仰渡之趣、有平左衛門・成田長太夫ゟ伊兵衛申渡。是又御請紙面判形取立之。成田内藏之助儀者指扣中に付、長太夫より相達判形取受、明廿日朝長太夫持參之筈。右夫々相濟、梅之助儀平左衛門・長太夫同道に而退出出之事。

付札、野村伊兵衛ゟ

成田勘左衛門せがれ　成田梅之助

右父勘左衛門儀御かね私曲仕候趣、於公事場遂御吟味候處相違無之に付、牢揚屋ゟ被入置候。依之梅之助儀一類ゟ御預之段可被申渡候事。

寅　七月　勘左衛門姉聟　不破平左衛門

同人同姓　成田長太夫

右指扣可罷在哉之旨紙面出候處、不及其儀旨御用番九郎左衛門殿御指圖有之。附、同河地才記儀ゟ於江戸今月十五日指扣伺之處、不及其儀旨被仰出有之。

右成田勘左衛門妻腹に八月上旬男子出生、號辰之助与。則御用番ゟ御屆有之候處、九月廿四日左之通御番大隅守殿被仰渡候に付、頭於野村伊兵衛宅、大屋武右衛門・安達彌兵衛立會、

成田内藏助・成田長太夫へ申渡、御請紙面辰之助代判右內藏助相調。類中へ被仰渡之趣も右兩人に申渡、是又御請紙面判形有之候事。

付札、野村伊兵衛に

成田勘左衛門せがれ　成田辰之助

右父勘左衛門不屆之趣有之、於公事場御吟味之上牢揚屋へ被入置候處、今般妻腹に致出生候に付、辰之助儀一類に御預被成候條、此段可被申渡候事。

寅　九　月

七月廿四日。旱魃に付妄に水を消費することを勿らしむ。

〔政隣記〕

當年永照に而、村々田地用水段々及減少、番水等に申付候得共、今以潤雨も無之、所により飲水にも指支申躰に付、水源に而も隨分水致大切、少にても流末に至候樣可相心得旨、御算用場奉行より御郡方一統申渡候。右躰之儀に候得者、侍屋敷等之內相通候用水、并金澤町・遠所町共家廻り用水流通り候所々、猥に堰留・打水等仕候儀者、人々心得も可有之儀に候事。右之趣被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配にも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

七月廿四日　　　　長　九郎左衛門

諸頭御用番連名殿

八月朔日。二條治孝の使者金子を借らんが爲金澤に來り。尋いで江戸に赴く。

〔政隣記〕

八月朔日八時過、從二條樣之御使者御家老北小路隼人正、幷副使御用人鈴木縫殿來着。三日大隅守殿御宅ゟ中對謁有之。是者年寄中ゟ從二條樣深被仰込之趣有之故也。依之御意之趣者、隼人正申演、被下物鰑粕漬一箱宛・御目錄者縫殿渡之、各頂戴。畢而二汁五菜之料理等、濃茶後菓子迄段々被出之。隼人正相伴者御馬廻頭多田逸角、縫殿相伴者御醫師賀來元達、取持江守平馬・高畠五郎兵衛・青地七左衛門・菊池九右衛門等也。七日發出、直に江戸表ゟ罷越、御使被勤候筈之由也。

附、今月廿三日右兩人共本鄕御邸ゟ參上、御使相勤、御口上御家老衆取次に而被達御聽候處、追而御返答被仰進候筈。依而隼人正御目見無之、御勝手座敷於上之間、二汁五菜之御料理等被下之。相伴御馬廻頭河地才記。御口上之趣、御館御燒失後御造立之御手當無之に付、御借用金御賴之趣也。御進物懸物二幅、佐渡守樣ゟも御口上有之、同一幅。

附、鈴木縫殿江も同樣之御料理被下之。

十月三日右御返答被仰進、御兩殿樣共少々御勝れ不被遊に付、西尾隼人幷堀三郎兵衞を以御答有之。御作法前記同斷。御料理之相伴、組頭指支候に付御先手窪田左平。

但、金小判二千兩御賴之內五百兩被進之。

附、前記二萬兩与有之候處、迚も右金高相整不申趣年寄中演述に付、於江戸者二千兩御賴之御口上に申演与云々。

八月二日。前田治脩の養女藤姬江戸に發輿の期を定む。

〔政隣記〕

八月二日、藤姬樣御儀九月四日御發輿、同廿二日江戸御着与今日被仰出。十一日六半時不遲御供揃に而、天德院・寶圓寺江御參詣、暮前御歸。廿一日六時過不遲御供揃に而、卯辰觀音江御參詣、暮頃御歸。

藤姬樣御道中御泊附

九月四日 津幡	高岡	滑川	三日市	泊
糸魚川	名立	高田	關川	善光寺
榊	海野	落合村	坂本	倉ケ野

同月廿二日
江戸

八月十四日。浪人吉村猪之丞等河北郡淺野村穢多の家に集り酒宴を催すを以て禁牢に處せらる。

〔政隣記〕

八月十四日淺野村穢多理右衛門妹いのに、馴合呉候樣中黑多宮家來若黨吉村直八、當時浪人改名猪之丞より、同所穢多八兵衛娘てつを以申込に付、可任賴旨返答申入、前月廿三日夜右猪之丞幷松平源次郎家來足輕岸井與太夫・後藤又助、土師淸吉小者二人、谷猪左衛門家來若黨野村權兵衛、いの・てつ等、同所穢多岩松方ゟ寄集り、座頭小僧連來り三味線爲引、且酒肴等持參穢多共ゟ給合候不屆に付、右之者共夫々今明日に盜賊改方伊藤平太夫宅に而吟味之上禁牢等申付有之。右之外町方之者之內罷越候者も有之由沙汰有之。

八月十七日。博奕・賭の諸勝負を禁ずるの幕令を領内に布く。

〔政隣記〕

大目付ゟ

博奕・賭之勝負之儀に付、從公儀御制禁之處今以不相止、博奕又者紛敷賭之勝負いたすも

い有之趣に相聞候に付、無油斷召捕、たとひ御料所之者に候とも、其所之御代官ゟ、懸合之上、差圖次第直に仕置可被申付候。他領之引合も勿論、其領主懸合之上相互に勝手次第仕置可被申付候。尤小給之面々陣屋無之、家來等も不指置分、幷寺社領之分者、村役人より向寄之奉行所又は御代官ゟ申立、右奉行所或は御代官に而咎申付候儀茂、勝手次第之事に候。右之通被相心得、猶更嚴重可被申付候。右之通可被相觸候。

六　月

戸田采女正殿御渡候御書付寫一通相達候間、被得其意、答之儀は松浦越前守方ゟ可被申聞候、以上。

六月晦日　　大　目　付

御名殿　留守居中

博奕・賭之勝負之儀に付、從公儀相渡候御書付寫一結二通相越之候條、被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配ゟ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

甲寅八月十七日　　長　大隅守　印

本多安房守　印

諸頭・御用番連名殿

八月廿七日。金澤城尾坂門の石垣を修築するを以て通行を禁ず。

〔政隣記〕

付札、御横目江

尾坂御門脇御石垣御修覆就被仰付候、来月六日より往来指留候條、此段夫々可被申談候事。

八月廿七日

右御城代安房守殿被仰聞候旨等、如例御横目廻状出。

九月四日。前田治脩の養女藤姫金澤を發して江戸に向ふ。

〔政隣記〕

九月四日藤姫様今朝五時過之御供揃に而、晝九時過御發輿。夜五時過津幡御泊宿へ御着。九日由之下波高に而指支、泊驛に一日就御逗留に、廿三日御着府之御日圖に相成候處、同日者御差支之趣就有之、是非廿三日御着被遊候様従江戸御旅中江迄被仰進候に付、御追込に相成、御泊所を違、廿一日大宮驛に御泊、廿二日夜五時前本郷御廣式(御本宅也)江御着府。但、於御旅中關川御本陣大石新右衛門妻女御目見被仰付候儀等前々之通。將又御着之節前々之振を以、警

固是輕御持方より指出、御着御當日御上邸詰之頭分已上布上下着用、平士以下者常服。頭分已上者御着之上、爲御祝詞於竹之間に御帳に付候事。

〔政隣記〕
前記藤姫様御着府御差支之譯者、同日徳川五郎太様御遺体御發棺之處、木曾路御通に付而也。

九月六日。前富山侯前田利與卒するの報金澤に達す。

〔政隣記〕
淡路守様、先頃以來御滯之處段々御指重り、御見廻御使度々毎日兩度宛被進之。然處今月廿八日より被及御大切、御附使者に相成、且出雲守様爲御看病御出府之儀、從此方様御願書御指出之處、御願之通被仰出、同日夕方御奉書相渡。于時翌廿九日朝御卒去。

（今月は八月）
（卒去實は廿二日に在り）

〔政隣記〕
淡路守様前月廿九日御卒去之旨申來候。依之普請・鳴物・諸殺生、今月より八日遠慮之筈に候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内、裁許有之面々者、其支配に茂相達候様可被申聞候事。
右之趣可被得其意候、以上。

　一 役宛連名殿
右に付出雲守様江爲御悔、富山江之御使永原佐六郎御使番江被仰渡、翌七日晝發出。御香奠・御代香之御使者人持組末席原九左衛門江被仰渡。

九月廿六日。高松侯松平頼儀の使者来りて藤姫入輿の期を告ぐ。

〔政隣記〕
九月廿六日讃岐守様より、御留守居山口隼人御使者を以藤姫様江御結納、且御引移等之御吉日被御進、右御使者誘引之御小姓布上下着用、御使者之間江相通、聞番江申達候處、御口上取次御答共坂野忠兵衛。於御廣間溜に御吸物・御酒・御肴被下之、相伴聞番恒川七兵衛。右相濟九時前相披候事。
　但四時比隼人罷越。

九月廿七日。前田齊敬、徳川家慶の紅葉山參詣に豫參す。

〔政隣記〕
九月廿七日、紅葉山御宮江若君様就御社參に、佐渡守様朝六時前御供揃に而御豫參。御供人服御改、裝束熨斗目・上下。翌廿八日五時之御供揃に而、御宮參相濟候爲御祝儀、兩御丸江御登城、幷御老中方御廻勤被遊候事。

但、於殿中御吸物・御酒等御頂戴之事。

相公様少々御持病之御疝邪に付、御豫参等御斷之事。

十月八日。御歩谷口彌八郎、地中を穿ちて赤栴檀を得。

〔政隣記〕

六組御歩居宅御小人町谷口彌八郎、前月八日夜夢に居屋敷之内乾之隅を二間四方二間餘計可穿之、判金五百枚可有之旨異人之告有之。依之則掘穿之候處、長さ二間餘太さ二抱計之紫檀を取揚たり。右に付御上へ御用有無伺候處、御用にも無之旨。遂吟味候處、極上之赤栴檀に而高價之物と云々被仰出候に付、賣拂候處左のみ高價に者求候者無之、併掘出候日雇賃計にて賣拂候由。將又猶掘見候得共、判金者一圓無之候由之事。

前月は十月

十一月朔日。藤姫、高松侯松平頼儀より結納を受く。

〔政隣記〕

十一月朔日、江戸快天。朝一統五半時揃、九時過御結納御祝儀物來、御使者御家老矢野源右衛門、嘉珍熨斗目・同長袴着用。副使御留守居出口隼人嘉珍熨斗目・半袴着用罷越、御作法書之通御首尾能相濟。且御進物舗敷に而臺より出之、將又御式臺まいら戸御使者之間御緣頰、御廣間上之御緣頰、御大書院入口之御杉戸共皆々外し、右御祝儀物持參相濟候而、又々御杉

戸入之。其外御小書院等御客御料理等、都而御作法書等之通に候事。

右相濟、於竹之間頭分以上御帳に付、恐悦申上候事。

十一月十九日。藤姫高松侯松平賴儀に嫁す。

〔三守御譜〕

十一月朔日御結納。同十九日小石川へ御入輿。此時より小石川御前樣と奉稱。

藤姫君安永七戊戌年九月廿日夜（一書十九日とするは非なり。）金谷御廣式にて御誕生。實御年十七歳に被爲成。然所寬政元年賴儀卿へ御緣談之節、御十二歳の處御十歳と被仰進。依て表向十五歳也。寬政八年四月廿三日御袖留。八月十五日一女を產せらる。御名瑛姫君と申す。井伊掃部殿直亮へ嫁せらる。此年七月廿六日藤姫樣、當八月・九月之內御出府可被成段、御用番安藤對馬守へ御屆。

十一月廿二日。高松侯松平賴儀本鄕邸に聟入の儀を行ふ。

〔政隣記〕

十一月廿二日、讃岐守樣御聟入、御見廻掛り之趣に而御出。

御作法書

一、讃岐守樣御出之節、敷付年寄中・御家老并御先立之組頭罷出。頭分敷付居こぼれ之趣に

而、御白洲ゟ罷出可申候。

一、御兩殿樣御廣間二之間御緣頬迄御出向。相公樣御誘引、御小書院へ御通り、御刀御小書院御杉戸之内御刀懸出置、直之可申候。

但、御兩殿樣御挨拶之上、御熨斗御表小將持出る。

一、御奥へ御通、相公樣御誘引に而、讃岐守樣御表へ御出被成、相公樣御料理之御挨拶被遊、追付御料理。（二汁六菜 塗木具）御引菜相公樣御持參、御相伴衆へは御取持衆御引。御酒之上、御肴御取持衆之内御引、御相伴衆へは御給事人引之可申候。

一、御吸物出、御土器・御肴三方讃岐守樣へ居之。相公樣御出、御嘉儀御先手衆御挨拶之上相公樣御初、讃岐守樣へ被進、御一獻御請、御肴被進。此時御腰物御先手衆御持出、御請取御側に御指置被成、御禮相濟、御加へ有而、相公樣へ被進、御肴も被進。相濟、御土器・御肴三方共、讃岐守樣御まへゟ御取持衆御直し置、相公樣御勝手へ被爲入候。御相伴衆へは數之御土器出之、御肴御取持衆御引可被成候。

一、御盃事之内、寶生大夫等罷出、小謠うたひ被仰付候。

一、讃岐守樣より年寄中・御家老ゟ被下候御土器・御肴共出之。讃岐守樣御まへ之御土器三方は、三尺計上之方へ直し置、御肴は讃岐守樣御まへ之御肴三方与引替。玄蕃助三之間御敷居

際迄罷出扣罷在。御取持衆御取合、讃岐守様御土器御銚子役持添に而、御敷居之内竪畳二畳目上に直し、玄蕃助御三方際へ進寄、御土器頂戴、御肴も被下、復座加へ有之候上、御土器可指上旨被仰聞、御土器を持御勝手ゟ退、坊主衆取持、御三方へ被載之、御銚子役持添に而上之。玄蕃助御同所三之間御敷居之際ゟ罷出、御土器御取上之節御禮申上相披。次に不破彦三へ被下、御土器御敷居之内竪畳壹畳目上に直之。頂戴御作法右同断。相濟、御土器三方御銚子役持添入、御肴三方引之。追付御納之御土器三方・御肴三方出之、讃岐守様御まへに有之候御土器三方与引替。相公様御出、御挨拶之上讃岐守様御初。此時従相公様御肴被進、御加へ有之、御土器相公様ゟ被進、御肴も被進、御納被遊。御土器三方・御肴三方共、讃岐守様御まへゟ御取持衆御直し置、相公様御勝手ゟ可被為入。但、達而御挨拶、相公様御初に相成候得者、被召上被進、御肴も被進、御加へ、相公様被進、御肴も被進、御加へ、御納可被遊候。

一、御取持衆御挨拶有之、御土器三方より段々引之、御湯出、御茶請与御本膳・後御菓子・御薄茶迄段々引替出之、御取持衆御指圖に而後御菓子引之、御たばこ盆出之可申候。

一、讃岐守様御披之節、御兩殿様御出御挨拶。追付御披、相公様御使者之間御杉戸之外迄御送。夫より御廊下ゟ御出、御取持衆鏡板ゟ御出、年寄中・御家老以下最前之通。

十一月廿九日。前田宗辰夫人梅園院の五十回忌法會を江戸廣德寺に執行す。

〔政隣記〕

十一月廿四日於金澤左之通御用番又兵衞殿より御觸出。

梅園院樣五十回御忌御法事、當月廿九日於江戸表御執行有之候。御作事・御普請、其外三御丸御射手・御異風稽古、諸組弓・鐵炮稽古之儀相止候に不及候事。

一、御家中普請者不及遠慮候。諸殺生・鳴物等之儀者、當廿九日自分に遠慮可然候事。

右之通組・支配之人々に可被申渡候。且又組等之內裁許有之面々者、其支配にも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十一月廿四日　　村井又兵衞

諸頭・御用番連名殿

〔政隣記〕

十一月廿九日江戸下谷廣德寺において、梅園院樣五十回御忌御法事御執行。

閏十一月朔日。前田齊敬、治脩に代り登營して藤姫の成婚を謝す。

〔政隣記〕

閏十一月朔日於江戶、小石川御前樣御婚禮被爲濟候御禮被仰上候樣、昨日御老中御連名之依御奉書、御登城可被遊候處、少々御風氣に付、御名代佐渡守樣六時御供揃に而御登城、御禮被仰上、御下り御老中方幷御同格にも爲御名代御廻勤。

右に付御表向平詰之事。

閏十一月七日。金澤に於いて諸士に藤姫の婚禮終れることを告ぐ。

〔政隣記〕

閏十一月七日、御意之趣有之候條、布上下着用今日五時過登城可仕、病氣等に而難出面々者、名之下に其段可書記旨、一昨五日就御用番九郎左衞門殿より人持頭分に御廻狀、同各登城之處、御式臺に於て御帳に付、柳之御間に一統列居、御年寄衆等御列座、左之通御用番御演述。

藤姫樣前月十九日御引移、御婚禮御首尾能相整候。此段何もに可申聞旨被仰出候事。

右畢而今日登城之面々、爲御祝詞今日幷當十日兩日之內年寄中等宅へ相廻可申候。幼少・病氣等に而登城無之面々者、今般之御樣子夫々向寄傳達、爲御祝詞御用番宅へ以使者可申越候旨、如例於横廊下申談有之候事。

十二月朔日。暦書に日蝕あることを記すといへども金澤に於いて之を見ず。

〔文化雜記〕

左之通出仕之面々に可申談旨、御用番九郎左衛門殿當廿三日被仰聞候に付、廻狀を以申談候。

付札、御横目に

來月朔日辰之刻日蝕九分餘に候間、出仕之面々刻限繰上、六時過に相揃、早速列居相立、五時前退去有之樣可被相心得候事。

閏十一月

〔政隣記〕

十二月朔日雪風強、巳上刻地震。今日暦書之表辰二刻より巳四刻迄九分之雖日蝕、於加陽聊無虧。

同日月次出仕、就日蝕曉天七半時より六時迄之内御帳出、同刻過年寄衆等謁各退出。

十二月七日。二條治孝の使者金澤に來り緣組を求む。

〔政隣記〕

十二月七日、二條様御使者西村東市正・松井内記來着に付、御用懸り左之通被仰付。

主付組頭　御馬廻頭　中村九兵衛

御小將頭　高田新左衛門

御馳走方　御大小將　湯原友之助

坂井權九郎

右於御使者宿角屋伊右衛門堤町宅、御家老奥村左京殿御口上取次、早飛脚を以江戸表に言上有之。御答相濟候迄、東市正等逗留、否哉之御答承候而、歸京之筈与云々。御口上之趣は、飛驒守様御妹女様を此方様之御養女に被成候而、二條様与御縁組被仰合候様に被成度旨被仰込与云々。且年寄中へ御掛物一軸・一箱宛被下之。尤御意之趣有之、各東市正等旅宿へ罷越、拜聽等有之。

寛政七年三月十三日条参照

十二月九日。嫁娶に際しての家に石を投ずるを禁ず。

〔政隣記〕

御家中之人々幷町方之者致嫁娶候節、石打候儀堅不仕様前々より申渡置候得共、近年別而猥に相成、往來之者暨近隣より石打、右に事寄せ帯刀人も入交不法之族有之躰相聞、御締方に

指障候儀も有之候間、以來右之族有之候者急度相咎、変名相糺又召捕候樣、盜賊改方廻役人へ可申付旨、今般伊藤平太夫へ申渡候條、被得其意、此段組・支配之面々へ可被申渡候。組等之內裁許有之人々者、其支配へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十二月九日　　　　前田大炊

諸頭・御用番連名殿

十二月十一日。德川家齊夫人歲暮祝儀を前田治脩に贈る。

〔政隣記〕

十二月十一日於江戶、從御臺樣御使廣式番之頭萩野小左衞門殿を以、歲暮爲御祝儀、御例之通干鯛・白銀御拜受。相公樣少々就御疝邪に、爲御名代佐渡守樣御拜聽、御用番御勤も被遊候。且御廣式へも、公方樣・御臺樣より御例之通紅白縮緬二十卷・干鯛一箱、上使御廣式番之頭原田半兵衞殿を以御拜領。上意御附頭寺川斧左衞門拜聽、佐渡守樣御出御挨拶。御請者大女﨟を以被仰上候儀等、都而御例之通に候事。

十二月廿八日。道路の雪を除きて交通を便にすべきを諭す。

〔政隣記〕

十二月廿八日御用番大炊殿より左之通被仰聞候旨等、如例御横目廻状出。

付札、御横目へ

先頃以來之雪に而往來之人々指支候躰に相聞え候間、屋敷廻之雪早速除之、致道廣、往來へかゝへ不申樣可相心得候。

右之趣被得其意、組・支配之人々にも申渡候樣、夫々可被申談候事。

十二月

十二月。九十歲の者に扶持を與ふる際その子孫をして請書を提出せしむべきを命ず。

九十歲の者に扶持を給する令は寛文十年に在り

〔筒井舊記〕

御部方之者九十歲に罷成候得者、御扶持被下之、誠に御趣意之程難有儀に候。然處御扶持頂戴之節、先年者御請指出申趣に相見候。尤本人呼出可申儀に候得共、極老之事に候へば罷出得申間敷候間、以來子孫之者其組之十村方ゟ呼出、先年被仰出候御趣意爲申聞、御請紙面取立指出可申候、以上。

寅十二月

神保縫殿右衛門

梅　喜左衛門

奥口は能登奥郡及び口郡

寛政七年なり

能州四郡十村中

〔加藤氏日記〕

九十歳之者御扶持被下候御趣意先年被仰出御書立、去十二月御郡御奉行所御添紙面を御觸渡、尤先年は御請も出申躰に候間、向後御請取立可指上旨被仰渡之趣、御承知之通に御座候。就夫御請文面區々に相成申儀如何敷候に付、奥・口相談之上相寛、別紙草稿相廻候間、以後初而御扶持被下候節、九十歳者御呼出御書立之趣御申渡、御請御取立御上可被成候。若し病身・不行步に而其身罷出候儀仕兼候者は、子孫之者御呼出御請御取立可被成候。仍而御受草稿二通相廻申候。

一、御扶持米請取之紙面上來候得ども、是以後は各樣方へ御取置、御郡所へ御上におよび不申候、以上。

三月十五日　眞舘彌左衛門

三輪喜八郎

仲間宛所

是歳、無住の寺院は之を庵寺たらしむべきことを令す。

〔上田舊記〕

一、寺院之内無檀・無本寺等に而、住職之僧宗旨定りも無之、何宗に而茂望之僧ゟ住職爲致、其僧死去無住に相成後住之僧無之節、村方より見立住職爲致、或は本寺無之分も於其所寺院一ヶ寺之様に相成、宗旨等も定り致相續、其住寺之働に而段々寄進等いたし、其宗旨之本寺觸頭ゟ相便り、寺號本末帳に書載置候類も有之哉に相聞え候。以來右躰之無住に相成居候節は、其所において指障無之分庵寺に可申付、尤右之趣兼而其寺院ゟ達置候筋に而者無之、其時々糺之上寺社奉行ゟ承合可取計旨、寛政六年公儀より御觸。

是歳、從來一ヶ月兩度に上納すべき年貢米の歩入を晦日一次とすることに改む。

［郡方舊記］

御年貢米之内歩入米御定

八月十五日	二厘五毛
同　晦日	五　厘
九月十五日	八厘五毛
同　晦日	一歩二厘
十月十五日	三歩二厘

同　晦日　五歩二厘
十一月十五日　六歩七厘
同　晦日　八歩二厘
十二月廿日限皆濟。
右之通歩入目錄、月に兩度充上申所、寛政六年御省略方被仰出、右歩入之儀十五日には指出申に不及、以來晦日迄可指出旨被仰渡候。其外諸書物之內指出申に不及分も有之、二通充上申分一通に相成申分も在之、諸事御省略有之候事。

寛政七年

正月朔日。前田治脩登營して年頭の儀を行ふ。

〔政隣記〕
正月朔日、於江戶、六時御供揃に而同刻過御登城、都而御例之通、四半時頃表御式臺より御歸殿。其節階上板之間上之方に佐渡守樣御出、鑑板へ玄蕃助・彥三、敷附に御近習頭等罷出。御先立彥三。御通懸り御目見等都而御例之通。夫より九半時過より年頭御禮被爲請、鶴之庖丁御料理頭長谷川宇左衞門勤之、御覽等都而御例之通に候事。

正月二日。前田齊敬登營して拜賀す。

〔政隣記〕

正月二日、佐渡守樣六時御供揃に而御登城。

正月三日。前田治脩東叡山に詣づ。

〔政隣記〕

正月三日、上野御參詣其外年頭御勤御規式等、都而前々之通。

但、御服就被爲在候、御宮御參詣無御座候事。

正月廿一日。徳川家齊、前田治脩に鶴を贈る。

〔政隣記〕

正月二十一日於江戸、上使御使番徳永小膳殿を以、御鷹之鶴御拜領。御作法都而前々之通。

御痛邪氣に付、都而御名代佐渡守樣御勤之事。

正月晦日。他國詰人の歸國せんとするものは、扶持方代の過不足を出發以前その所に於いて精算すべきを命ず。

〔政隣記〕

是月は大盡なり

政隣記は本文を廿八日の條に記せり

付札、定番頭ゟ

他國詰人御用相濟罷歸、又は氣配相滯、或爲看病御國ゟ之御暇相願罷歸候節、御扶持方代本勘指引相極、不足之分者受取、過渡之分者於其品々に可致返上等に候處、其時々於御國返上之趣に相願、罷歸候而も年賦等相願候人々も有之、彼是返上指支候間、是以後罷歸候節、於其所々に嚴重に一時に取立候樣夫々申渡候條、兼而左樣相心得可申事。

右之趣被得其意、組·支配有之面々ゟ夫々可被申談候事。

卯正月

右大隅守殿於御勝手方御席御渡之旨等、定番頭武田喜左衛門より例文之廻狀有之。正月晦日。

二月十三日。江戸詰の者に餞別し又は歸國の際土產物を齎すを禁ずる前令を嚴守せしむ。

〔政隣記〕

二月十三日於江戸、前々より江戸御供等に而罷越候人々ゟ致餞別、又に罷歸候節土產物無用可仕旨被仰出、假令身近き親類縁者たり共、右之沙汰に及間敷旨等、且御發駕·御着城之節衣類等見苦敷儀不被及御貪着候條、不及相改旨被仰出候段等、玄蕃助殿被仰渡有之。

但、餞別等之儀於金澤も今月二十七日御用番村井又兵衛殿よりも御觸出有之。

二月廿四日。金澤神護寺に於いて德川家基十七回忌の法會を執行す。

〔政隣記〕

二月二十四日於神護寺孝恭院樣御十七回忌御法事御執行。御奉行長九郎左衛門。

二月廿四日。前田治脩、德川家齊の東叡山參詣に豫參することを辭す。

〔三壺御譜〕

二月十三日御兩殿樣へ、當廿四日御參詣被仰出候へば御豫參御勤可被成哉之書付、三枝豐後守より御連名にて一通到來。（元文の頃は御連名にて到來之事も有之候。）十四日三枝豐後守へ、御豫參御勤可被成旨之御兩殿樣よりの御書付御指出。廿三日大御目付三枝豐後守より、明廿四日東叡山孝恭院樣御靈前へ被遊御參詣候間、御豫參可被成旨等之書付一通、御兩殿樣御名充にて到來。同日公御斷之御書付被指出。

日記。相公樣御疝邪御勝不被遊に付、明日御豫參御斷之御書付、御用番戶田釆女正殿へ持參、取次へ御口上申述、御書付相渡。御書付御請取、御承知之段承り、夫より御法事御奉行安藤殿へ罷越、右御斷之趣御用番へも被仰達候に付、御屆被成候旨御口上取次へ申述。是は前々より御口上迄にて、御書付不出候。御承知之御答承り、夫より大御目付三枝豐後守殿へ罷越、用人青木辰之進へ懸合候て、右御斷之旨申述。是は御用番御同樣にて、御斷

申達候との御書付持參。右用人へ相渡候處、未御城に罷出候間、退出に可相達旨申聞候に付、罷歸言上とあり。

〔政隣記〕

廿四日於江戸上野御法事に付、可被遊御豫參候處、就御痳邪に御斷。佐渡守樣御豫參被遊候處、御成御延引に付常御參詣に相成候事。

二月。能登の各浦に於いて濡米に潤役を徵することを許す。

〔御郡典〕

能州四郡浦々川筋・潤筋より積出之品々俵物幷濡米、潤改人改賃銀一石に付一分宛爲受取度旨、享保九年二月四郡御扶持人共相願、御聞屆に御座候處、其後寛保三年八月右俵物等品々改賃錢猶更詮議之趣、能州四郡御扶持人より相願御聞屆、其通改賃爲受取來候處、濡米与申名目一箇條書落し候哉相見え不申候故、改賃錢之儀に付浦方等申分之品も御座候に付、私共詮議仕候者、濡米に而も改賃錢爲受取可申儀与奉存候間、享保九年御聞屆之趣を以、向後濡米一石に付錢四文宛潤改賃受取候樣被仰付可被下候。

一、公儀御城米幷大坂等爲御登米、若難船有之濡米入札拂に相成、落札人受取候上者、商米に候へ者、是以後潤改賃錢何れ之者落札に而も爲受取申儀与詮議仕候間、御預所にも御通達

被成下、其節に至り彼是申分無御座候樣仕度奉存候。爲其書付を以申上候、以上。

寛政七年卯二月

武部村　彌左衛門
笠師村　喜八郎
中居村　三右衛門
鵜川村　政右衛門
馬場村　八左衛門

神保縫殿右衛門殿
梅　喜左衛門殿

表書之通請米改賃一石に付四匁宛爲受取申度旨、承屆候條、渕改人共に可申渡候、以上。

三月六日。金澤城尾坂門側の石垣修築成るを以て本日より通行を許す。

〔政隣記〕

付札、御横目に

尾坂御門脇御石垣御修覆中往來指留置候得共、當月六日より右往來不指支候條、夫々可被申談候事。

三月十一日

右御城代安房守殿被仰聞候旨御横目廻狀出。

三月九日。江戸詰の者に扶持代を增貸すべきを告ぐ。

〔政隣記〕

三月九日於江戸、當御在府中米穀者下直に候得共、去年相減候御扶持方高に而者引合不申、詰人一統難澁に付、去春被仰渡置候通、一人扶持に銀三十目宛被下候而者、中々不行屆段々頭等より願に付、御步並以上一人扶持に金二步宛、去秋以來相詰候者ゟ者三步宛、足輕・小者・古詰之者ゟ者四十目宛、去秋以來到着之者ゟ者五十目宛御貸渡被成候條、旅用不差支御供可仕儀肝要之旨等、玄蕃助殿被仰渡候旨、組頭より諸頭演述、廻狀前々之通有之候事。

三月十一日。盛岡侯南部信敬本鄉邸を訪ふ。

〔政隣記〕

三月十一日於江戸、慶次郎樣初而御出、御兩殿樣ゟ御太刀馬代御持參、披露組頭。御兩殿樣御盃事被遊、御刀統行被進之。畢而二汁六菜御料理等、御引菜御持參。御酒・御肴は佐渡守樣御持參。頭分以上幷御給事人熨斗目着用、其外御一門樣方御出之節之通に付畧之。

但、南部公也。往昔より御字利之字被進儀等、右御刀被進儀等、御舊例也。

寛政六年十二月七日參照

三月十三日。前田治脩就封の暇を受く。

〔政隣記〕

三月十三日上使御老中安藤對馬守殿を以、御國許へ之御暇被蒙仰、御例之通卷物・白銀御拜領。從御臺様も御使御廣式御用人小笠原久兵衛殿を以、御卷物五御拜受。御作法都而御例之通。十五日御登城御暇之御禮、御懇之上意、御手自御熨斗鮑・御鷹渡り十四日・御馬栗毛八歳月毛五歳御拜領。玄蕃助・彦三御目見、拜領物等都而前々之通。

三月十三日。御先手物頭上月數馬、二條家に使者として金澤を發す。

〔政隣記〕

二月廿八日左之通被仰付。

御先手物頭　上月數馬

今般從二條様御使西村東市正等下向に付、右爲御答京都へ被遣候御使。

但、三月十三日發足。

四月四日、前記に有之通、京都二條様へ之御使人上月數馬、御使御用相濟今日歸着。

但、在京九ヶ日、且三汁九菜之御料理等二條様被下之。附、發足前御定金小判七十兩等之外、學校銀二貫目・産物銀一貫五百目借用。

三月十五日。前田治脩就封の辭見す。

〔續德川實紀〕

三月十五日、月次朝會例のごとし。松平加賀守治脩・内藤山城守政峻はじめ、就封のいとま賜はる。加賀守治脩、鷹・馬を賜ふ。

三月十七日。二條治孝の使者西村東市正金澤より歸る。

〔政隣記〕

一、三月二日東市正・内記近々發足に付、旅宿に而夫々御馳走方相立、内記は翌三日發出、東市正は同月十七日發出罷歸候事。

但、東市正儀、越前路迄退罷在、御歸城之上重而罷越候躰与風說有之。

三月十九日。前田治脩江戶を出發し歸國の途に上る。

〔政隣記〕

三月十九日夕七時前江戶御發駕、御作法前々之通。且御泊附左之通。

浦和　熊谷　板鼻　追分　榊　牟禮

荒井　能生　泊　魚津　高岡　津幡

〔御年譜〕

御留守詰人持織田主稅、御歩頭井上井之助。

三月、往還道路筋に百姓の家屋を建築する手續を令す。

〔岡部傳記〕

往還道筋等村端に新家相建候儀は、御定も有之候處、商賣方心懸、中古より猥に相建申樣子に付、近年被仰渡之趣御承知之通に御座候。夫に付百姓等二・三男躰之者、別家不仕而不叶者在之節、其村役人詮議之上家建可申地面も無之、且作方不手寄に付、無據村端へ罷出相建度旨相願候はゞ、其組十村・廻り口御扶持人詮議之上、連名書付を以御達可申上旨、今度御改作御奉行より戸出村又右衞門迄被仰渡候。是以後右被仰渡候通御心得可被成候。則礪波郡に右躰有之、御詮議之上御聞屆に付、右書付文面爲御心得別紙寫相廻申候。此書狀落者より御返可被成候、以上。

三月　　武部村　彌左衞門

仲間宛所

往還筋に百姓新に致屋敷候例は、同郡御扶持人に及相談、別存無之候はゞ、廻り口御扶持人右願書付に致加判可指出事。

卯　三　月　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

三月。闕所等を命ぜられたる百姓の農道具は跡高作配の者に交附すべきことを定む。

〔上田舊記〕

牢死人并走人等、惣而役所詮議之上、居村追出、家・高取揚、闕所等申付候農道具之儀、跡高に付候品に候處、渡方是迄區々に成來候躰に付、今般詮議之上、以來右跡高作配方ゟ相渡可申候。此段一統不相洩樣可申渡候事。

卯　三　月　　　　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

四月朔日。前田治脩金澤城に歸着す。

〔政隣記〕

四月朔日、相公樣昨夜津幡御泊、今曉七時御供揃に而、今日四時前御着城。御作法都而前々之通に付畧す。且爲御禮江戸表ゟ之御使人上坂平次兵衞、御目見後拜領物可被仰付候處、去

々年暮より格別御省畧に付、御使人ゟ之被下物當分相止候事。

但、野田泰雲院様御廟ゟ、御着後御參詣与昨夜被仰出置候處、雨天に付御延引、寶圓寺ゟ

御參詣、津田權平御供。

〔政寛覚書〕

四月朔日

今日御歸城に付、津幡より七時過御發駕之由に而、六半時揃こ玄蕃助等より申來、五時過に

出席之事。

四時前御歸城。年寄中三ノ九ヘ罷出、御城代一人・御家老・若年寄銕板伺公之事。

於表席、以御近習頭恐悦申上候處、追付御前ヘ年寄中一切、御家老若老一切に被爲召、御意

之趣有之。一先御入被遊、重而御出、御使人上坂平次兵衛被爲召、御意有之。其節例之通伺

公有之。今日野田泰雲院様御廟ヘ御參詣可被遊旨被仰出候處、雨天に付重而御延引之段被仰

出、寶圓寺ヘ御參詣有之。

退出より直に兩御廣式ヘ恐悦に罷出。

四月六日。能登奥郡の獵師等に、收入の一部を蓄積することを郡奉行より命ず。

〔上田舊記〕

寛文十年獵師等幷山方・里方縄俵等稼候小前之者共、稼取續方之儀に付被仰出之趣を以、

寛政七年獵師除錢取立方之事。

一、浦方・山方頭振稼之儀獵師共者、魚取揚候而も後之考もなく當座喰失、一日過之樣に存、獵無之時ハ迷惑仕。向後ハ肴取揚賣候代銀高、又は其身之分限に應、其村肝煎、裁許人に指加、山廻り之者見圖りを以爲除置、以後續候心得方第一に可仕旨常々堅可申付。且又獵師にかぎらず、山方・里方縄・俵・持籠・くつ・わらんじ等之稼、其外女共布稼仕分も、無油斷切々吟味仕、出來高又ハ其身之分限に應じ除置せ、是以後續き候心得第一に可仕、其村肝煎、裁許人に指加へ山廻り之者、堅申付裁許可仕候。

右、兩條共、其村肝煎幷裁許に加候山廻之者見圖を以除置候銀高縮方申付置、むざと不仕、以後成立候樣、末々稼之儀御郡奉行吟味不仕与も、心易續候樣宜敷裁許可仕。且又跡々年季に相極り候御貸置米銀者申に不及、是以後御貸候分に而茂取立方、御郡奉行見圖宜敷程無油斷取立、返上濟候樣心懸尤之旨、田地持不申者共、何与して稼も仕立候樣可仕旨被仰出候旨、津田宇右衞門殿・岡嶋五兵衞殿より、三嶋彦右衞門殿・田伏彌左衞門殿宛所之書取也。

寛政七年獵師除錢取立仕法

一、鰤網　一、鰆網　一、鮪網　但鮪之分は釣獵共。　一、鯖引網
一、海豚網　一、鮪倉嶋諸獵　一、名舟村胡獱獵　一、鯨
右之分取揚候魚高、村切肝煎幷長百姓之内一兩人宛圭附、夫々取調理いたし、獵師手前より
取揚、魚高賣拂代錢之内一貫文に付五文宛除置可申事。
一、鯖釣獵之分、小獵に而舟數幷人多故調理方出來兼候間、諸魚賣立候錢高肝煎手前に相し
らべ、獵師共より一貫文に付五文宛之見圖を以除置申事。
　但、釣小獵右同斷之事。
一、煎海鼠
此分所口町鹽屋清五郎一人買入に而、村肝煎又は慥成人柄之者清五郎より相賴買入候間、右
清五郎賴置候者手前に而、一貫文に付五文宛爲除置可申事。
右村々肝煎手前に而其時々取立置、一ヶ月切十村手前へ取集置、一ヶ年三度御扶持人中居村
三右衛門方へ指出、政右衛門・八左衛門相封致置可申事。
右浦方獵師共取續方之儀に付、寛文十年被仰出候御趣意を以、御算用場奉行中頭書に而申談
有之候得共、是迄右仕法相立不申、尤極難澁之村方には者御貸米幷年々延御拂米をも御貸渡有
之候得共、御指支之御時節故無據行屆兼候儀、一統可有恐察儀。彼是拙者共僉議之上、右

寛文之頃被仰出候御趣意を以、獵師共取揚候諸魚賣立代銀之内、少分宛爲除、往々銀高にもおよひ候はゝ、一方之救にも可相調事与も存候に付、則除銭方仕法別紙之通、僉議之上相極候間、舟元は勿論、其村肝煎共主附、其時々相調理、代銭一貫文之内五文宛爲除、村肝煎方へ取集、月々中居村三右衛門方へ取集、鵜川村政右衛門・馬場村八左衛門相封を以指預置候條、取締致置可申。然上は極難澁獵師手前、僉議之上年賦或は一作に貸渡、畢竟退轉等再興取續成立調候はゝ可然、此段一統之ために可相成儀に付、右之通相極候條、獵師共へ夫々申渡請書可指出候、以上。

卯四月六日　　栂　喜左衛門

神保縫殿右衛門

珠洲・鳳至御扶持人・十村中

四月十五日。一條治孝の使者西村東市正等再び金澤に來る。

〔政隣記〕

四月十四日。從二條樣爲御使者西村東市正・松井内記當月八日京都發足、於越前二・三日逗留、夫より此御地え御指下之筈に付、左之通今日被仰渡。

主附組頭　　御馬廻頭　　多田逸角

御小將頭　水野次郎太夫
御大小將　和田知左衞門
佐藤八郎左衞門
御馳走方

十五日右御使者西村東市正等今日參着。旅宿菅波屋三郎兵衞。御作法書前記之通、幷登城之節（登城無之に付不記之、）御作法書も出候得共、登城は無之。今月廿二日七時頃より、東市正儀村井又兵衞殿御宅へ罷越、本多安房守殿・前田大炊殿も御越、人拂に而御對談有之候。右に付主附組頭多田逸角・水野次郎太夫、町奉行青地七左衞門、御使番山路忠左衞門も相詰、暮前東市正退出之事。

但、東市正へ菓子・吸物等被出之。松井内記は當病に而不罷越候事。

同月廿五日松井内記、本多玄蕃助殿御宅へ罷越、大炊殿又兵衞殿御越、御對談人拂に而有之。依之町奉行高畠五郎兵衞・御使番永原佐六郎相詰。五月十六日東市正發足歸京。内記は未罷歸、每度御斷申上候に付、同十九日より御馳走方御役人等旅宿へ相詰候事相止、町奉行御使番等折々見廻りに相成。尤御馳走方御作法相止有之候之處、七月十五日内記も發足歸京。其節御忌中等に付、御馳走方之御作法等一圓無之事。

五月九日、大聖寺侯前田利考歸邑の途金澤城に登る。

〔政隣記〕

五月九日、飛驒守樣昨八日御着、今日八時過御登城、御作法都而前々之通。且依御願兩學校に被爲入、稽古中之處を御見物。

但、前月廿四日江戶御立之處、川支に而御逗留。

〔政寬覺書〕

五月九日

一、飛驒守樣御歸邑に付、昨日暮合此表御旅宿へ御着に付、御使者御近習頭石黑小右衞門被遣候由。依之今日御登城に付、右御用懸り一統五時揃、年寄中等布上下着用、五半時頃より段々登城之事。

一、飛驒守樣御使者野口兵部登城、昨日御使者被遣候御挨拶、幷今日御登城被成候御禮等、御口上申述、御取次御奏者番多賀帶刀相勤候由之事。

一、飛驒守樣御旅宿御出之付人來る。重而九半時過尾坂口に御出之付人來り候付、年寄中等御式臺に罷越、追付御出、年寄中は御右、御家老・若年寄は御左、裏御式臺之方後に致罷出有之。左右御會釋有之、階上へ被爲入候上、御大小將罷出有之、御刀持之御奏者番御先立、御檜垣之御間上之間へ御通、御刀御同間御床へ直之。

但、右御出之節、御奏者番幷當番組頭御用人等御白洲に罷出有之、虎之間御緣頰八頭御杉戸際に御使番兩人罷出有之候事。

一、檜垣之御間上之間に御着座之上、木地三方に而御熨斗出之、御たばこ盆・御茶出之候上に而、藏人罷出、御敷居之外御緣頰に而中座いたし、夫より御同間へ入御口上承之、退き正廟樣〻之御口上御奏者番前田兵部罷出承之。

右畢而年寄中等に御逢可被成旨に付、年寄中一切、御家老中・若老一切罷出候處、段々御懇之御意有之、座上より御請申上退去。

御口上書御渡、御口上左之通。

益御機嫌能被遊御座、恐悦至極奉存候。於江戸表御揃、益御機嫌能被遊御座、恐悦至極奉存候。私儀在所〻之御暇被仰出、昨夕御當地參着仕候付而、奉窺御機嫌度登城仕候。

右御口上、藏人御居間書院二之間に罷越、田邊長左衞門を以申上候處、御返答應じ可申上候、少々御勝れ不被成候付御對顏不被遊候趣可申上旨、以同人被仰出候付、藏人罷出、無御障被成御達珍重思召候。少々御勝れ不被遊候付御對顏不被遊候旨申上候事。

但、御容子御尋被遊候付、御當分之儀に被爲在候。猶更御容子之儀は、御近習頭に御尋被遊候樣申上候處、御近習頭被召候段御意に付、典膳申談罷出、御容子申上候處、同人を以

重而御機嫌御伺被遊候に付、其段典膳奉御聽、重而同人罷出御返答申上候。

宮井典膳罷出、御前少々御勝不被遊候に付、御對顏不被遊候、前々御廣式に御鈴通り被爲入候得共、御對顏無御座候故、御通り指支候間、御堀端通り御廣式に被爲入候樣申上る。

八時過御退出、年寄中等最前之所へ罷出、御下城橋爪御門より御堀端通り御廣式に被爲入候事。

但、今日此方樣御日柄に付御料理等不被遣、委細は御作法書に有之候事。

一、御下城後御使者御近習頭青木與右衛門を以、御旅宿迄御進物御肴味噌漬鯛被進候由。

一、飛驒守樣爲伺御機嫌年寄中・御家老中退出より直に御旅宿へ罷出候事。

五月十一日。前田齊敬登營して大坂落城の紀念祝賀能を觀る。

〔續漸得雜記〕

一、元和元年乙卯五月七日大坂落城に付、家康公へ諸大名爲御祝儀御能有之。諸大名拜見之上御料理被下。其御例に依て、六十一年目寛政七年乙卯五月七日より十一日迄御能有之。是を支干之御祝儀と申也。此度相公樣御在國に付、佐渡守樣御登城御拜見、御料理御頂戴。

〔政隣記〕

今年家康公天下一統之干支に付、今月十一日於殿中御祝御能有之、諸侯方等見物被仰付、御

料理被下之。佐渡守樣にも御登城、御料理は御連枝方等御同席に而御頂戴。右に付十日五時不運御供揃に而御登城。十一日六時過御供揃に而御登城、御供人晝九時代り合、夕七半時過御歸。十三日五時御供揃に而御登城。

六月十五日。前田重教夫人淺草より兩國橋に舟遊す。

〔政隣記〕

六月十五日朝五時過御供揃、御忍御行列に而、壽光院樣爲御行歩淺草邊より兩國橋筋に御出、同夜曉七時頃御歸。于時同夜九時頃甚强雷鳴、近年無之程之雷。依之御用人より爲伺御容體御大小將前田儀四郎、佐渡守樣より御附御番頭菅地清左衛門を以御伺、兩人共彼筋に罷越候處、筋違橋邊に而本出合、尤御取次を以御船中に申上之、歸。

六月十九日。前田齊敬平尾邸に赴く。

〔政隣記〕

六月十九日五時過御供揃に而、佐渡守樣御下屋敷へ被爲入。

六月二十日。前田齊敬上野の德川吉宗廟に參詣す。

〔政隣記〕

六月二十日九時御供揃に而、上野有德院御靈屋へ御參詣。

六月廿七日。前田齊敬江戸に卒す。

〔觀樹公御言行錄〕

寛政七年六月上旬之頃より、御足に少し御浮腫被爲在候內、同月二十一日より御風邪氣に被爲在、猶更御醫師詮議御療養御座候處、元來之御胎毒濕熱に、時節之暑濕を兼候而御浮腫被爲在候御儀に而、次第御重り被爲遊、公儀御醫師橘宗仙院を初御越、横井元秀等罷出種々御詮議被盡御療治候得共、段々御指重、同二十五・六日よりは甚御難儀被遊候御容躰に被爲在候得共、少も御行儀御崩被遊候儀無御座候。公儀御醫師衆御越之御時分も、夫々之御會釋御洩被遊候儀少茂無御座候。御作法正敷御儀に候。二十六日爲御見舞壽光院樣被爲入、御對面之御時節抔も、御行儀正敷御尊敬之御樣子に御座候。何茂御側に相詰罷在候內に、同二十七日曉天神田吉左衛門金澤ゟ之言上封物判形仕、御用相勤候席ゟ暫罷越候處、御近邊之者を以急に被爲召、早速御寢所ゟ罷出候處、御側近く被爲召、手を御取被遊、殊外御じゆつなく御覺被遊候、如何与御意被遊候故、取合御請奉申上候內、其儘に而御卒去被爲遊、奉恐候。

〔政隣記〕

七月朔日、佐渡守樣前月二十五日宵より俄に御煩出之處、不一通御樣子に付、御抱守高畠源

右衛門ゟ指急之御使被仰付、二十六日夜九時前江戸表發出、今朔日九半時頃御城へ到着、同夜四時頃御返答被仰出、拜領物ニ被仰付、追付發出歸府。

右に付御年寄中等追々登城之上、爲御見廻指急御使御近習御使番久能吉太夫、幷御醫師内藤宗安・久保江庵・中野又玄（隨安せがれ）も道中指急可罷越旨、奥村河内守殿（御部屋御用主付故也。）被仰渡、今夜五時前より同半時頃迄に追々發出之事。

但、指急ニ被仰渡候得共、皆々早打に而罷越。

同日於江戸者、前記前月晦日記之通御凶事に付、御殿向一統喪服着用之事。

但、御殿向一統平詰、日數之儀者、追而可申談旨、御留守居織田主税より申談之事。

前田齊敬行狀

〔觀樹公御言行錄〕

一、至而御正直御温和之御氣象に而、元來御聰明、御決斷御早、御忠孝之御志深く、御仁惠之思召厚く被爲在候。

一、御幼少より御父子樣之御間之儀抔、御平生御側之者ゟ一向御意不被成、泰雲院樣御位牌ゟ御幼少より御日拜之御樣子に候。

一、神を御崇敬被成候。御内々天滿宮ゟ御日拜之御樣子に候。

一、御幼少より御側廻之者・幼少者に至るまで、御意に不應儀有之候節、たとひ御急切之事に而茂、御直に御叱り之儀不被爲在、それぞれ支配之者に被仰出、急度叱り候樣被仰付候。

一、御幼少より、御抱守等之人々、何時御目覺申上候而も、終に御機嫌惡敷被成候事無御座、御おむたく被爲在候節も御機嫌能御目覺被成候。

一、御平生御行儀甚御宜、御端座がちに被爲在候。常々御調筆を御好被成候。毎日々之内御常服、夜中も御寢成候迄御袴被爲召候。御奥に而茂聊御くつろぎ之御樣子不被爲在、御表御同事に被爲在候。

一、御記憶御強く被爲在候。諸方其外御役人衆、暨御家中侍帳、幷役掛り之人々所付・紋・鑓等御慰に御調筆、委く御記憶被成候。御國に而金谷御殿より御出之節、七十間御番人抔何人目誰次に居候者、何之紋所之衣類致着用罷在候御覺不被成候間、名前承可申上旨被仰出候事抔有之、又江戸に而殿中暨御一門樣に而一度御覽之人々は、其名前御存無御座而も人躰等能御覺被成候。

一、萬事何かも御心懸能御覺被成候。公邊之儀甚御崇敬、御登城等御進み無御懈怠御出、殿中御作法等且御役人衆等之儀迄悉く御糺能御覺、時々御作法等之儀御記憶被成候。若御風氣

等に而御登城御斷之節は御殘念被思召、相公樣よりも御懈怠無御座樣御意被遊候に、御斷之節は御心持不御宜旨御意も御座候。

一、御側被召仕候者、御意に應候哉否之程、何も一向愚察仕得不申、平等に被召仕、其内新古之御差別御意味を御含、且其人々生質・器量之勝劣等、得与御掌握之御樣子に候。又惣而人之得方之品を御用被仰付候。調筆宜者は書寫御用、書籍讀候者は御慰御書爲御讀被成候与申樣成儀に候。且又御附人多に成候儀は御悅、一人に而茂被指除候へば不御宜御樣子に候。

一、誰にて茂御爲を心付御諫言等申上候節、品により即座に御聞屆之御樣子不被爲見候ても、後に必ず御取用被成候。

一、何事に而も御氣然に不應儀、御爲与存申上候者、誰々はいやに存御事申せども忠義者に候与、かげにて御噂御座候。右等之御樣子故、御側相勤候人々、何も無泥御奉公申上候。

一、何事を御聞被成候ても、一篇に而能御會得被成候。又下より申上候品、其筋合をわけ御聞被成候。

一、御平生御居間方之者、何ぞ御用有之格別に晝夜御側詰被仰付、又一通り御側遠く相詰罷在候者も有之時分、御遠き者被爲召、御衣服抔頂戴被仰付候儀御座候。

一、御近邊之人々、病氣等に而御番引仕罷在候得は、無御心許被思召、毎容子御尋、御醫者診之節抔、於御前も爲御尋、御聞被成候事も御座候。

一、御附之人々に不限、惣而下々に至る迄、難儀を深く御いとひ被成候段、かれこれに付毎度其御容子被爲在御様子も御座候。鳥類・畜類迄も、無益殺候事を甚御嫌被成候。

一、文徴明筆石摺御覽、中書草書など御調筆之處、其字形等無御拘、早く筆意を御會得之御氣象に御座候。御筆之御はたらき被成度まゝに、至而御早筆御自由に御調之處、至而見事成御儀、常人之とても不奉及御様子に被爲在候。

一、天明二年二御丸御廣式橋の御間御普請之節、同御廣式御三の間に而御騎射之御遊び事之時分、其邊之御敷居御疊より高く成、幼少之御居間方折々つまづき候故、御足障不被成様にと、其座にて御附の人々談合候を御聞被成、それは其敷居をさげるが宜敷与御意。（此年御五歳。）

一、同二・三年之頃蓮池御庭に御出、俄に御亭に可被爲入旨御意。御供之御附之內、御亭御座之間に入御戸明け候節、脇指帯し候處、其者之名を御呼、脇指は如何与御意。

一、同三年之頃、或時いまだ詩を作らず、作りて見様与御意に而、御ならひも不被成、早く御調筆被成候。其御調筆之品左之通。（此年御六歳。）

船止暫心休　風大吹天動

丹頂鶴遊林　田雁落喰餌
糸髪見月笑　酒醉颯々聲
白髪向鏡佈　錦天下治

一、金谷御殿に御引移之上、御近邊之人々与御走り合之內、御行當り可申躰故御側より毎度制候。其節御色相之目立候御召物可指上旨風与御意。則寬候上指上候處、此小袖にては何も不行當等与御意。御九歳計之時分之事也。

一、天明七年二月二日宮腰町火事之節、御側に而火事之噂申上、出火之節は何も勇み申候、夜中は提灯多御覽被遊候はゞ御慰に可被爲与申上候處、火事を致見物は慰に可成候へども、燒たものは可致難儀与御意。此年御十歳。

一、同年頃御城中御行歩、御本丸高塀之邊ゟ被爲入、野田山筋を御覽被成、あれはいづれこ北村三郎左衛門ゟ御尋に付、野田山邊に御座候与申上候處、泰雲院樣御廟はさ御意。さいい山い内に被爲在候段申上候處、御落涙之御樣子三郎左衛門見上候。

一、同頃冬雪有之時分、金谷御殿御表御間御歩行、御玄關前腰懸に壹番之者之家來迎に罷越、平伏仕居候を御覽、誰家來に候哉与御尋、御先立中川次郎兵衛壹御番迎之者に御座候与申上候處、何も歸不申候ては不歸哉と御尋、左樣に御座候与申上候處、暫御覽、御入之節、

大儀成もの与御意。

一、同八年五月五日端午之爲御祝詞、二御丸御廣式ゟ被爲入、御戻りに小雨降出候へども、御供人合羽着不仕候處、御駕籠之内より御覽、駕籠をはやめよと、度々御番頭柘植儀太夫ゟ御意。此年御十一歳。

一、同年六月十二日泰雲院樣三回御忌に付、同月六日より御居間暨御次廻り鳴物等遠慮之處、五日夜中御居間方等ゟ被仰付、御太鼓・御鼓・御笛等都而鳴物之御箱を御取寄、御自身御手紙御引さき、不殘御封御付、若居間方うかと打候へば如何に候、加樣にすれば安堵と御意。

一、同年八月十四日奇麗成石菖鉢上り、御居間に被指置候處、御側之人々、是は見事成御鉢と申上候内、格別に拜見仕候者有之候處、同夜其人ゟ被下之候。

一、同年九月二十五日初而御鷹野、七つ屋口ゟ御出之節、諸江村領を御通之處、道脇に青鷺居申、御鷹匠に被仰付羽合とり付、御抱守奉抱其所ゟ罷越候。道すべり候に付、御側より大根をふべ候樣聲をかけ候處、大根をふむなと御意。其上に而畠をふみあらし不申樣、何茂ゟ可申聞旨御意。

一、鴿を御好被成、鴿部屋に放飼に被成置候處、同年十一月十二日御飼猫右鴿一羽とり候。それに付當時御居間先雪垣等もなく、鴿部屋猫抔之用心不宜思召候由に而、御秘藏之鴿三十

羽計不殘御取拂、御近邊望候者に被下之候。

一、天明八・九年之頃、御鷹野御出。御晝粟ヶ崎之所、御挾箱持指急候哉、かゝり橋を渡し候節不斗川に落、御挾箱之内に水入、其段何茂申合候を御聞被成、其人共痛も不仕哉尋候樣御意。翌朝いまだ御奥に被爲入、年寄女中を以、昨日川に落候御挾箱持、今日致番引候哉尋候樣被仰出。相勤居申候旨申上候處、痛所押而相勤居候哉、今日御出御座候而茂御供相勤候哉之旨御尋、痛も不仕旨申上。

一、寛政元年三月四日御慰御能之内、藤戸を木梨助三郎に被仰付。翌日木村茂兵衛御前に罷出、昨日は御能被仰付御慰に可被爲在旨申上、助三郎も藤戸出來仕候与奉存候段申上候得ば、佐々木三郎は藤戸致先陣恩賞賜候へ共、渡守を致切害候。梶原源太は宇治川之先陣二番に付候得共人を損不申。依而源太は三郎より功は可勝存ると御意。（此年御十二歳。）

一、同年三月十七日富田織人病死之節、十六日晝頃より塞り開き不申段頭より申上、本札を以御尋。其節塞候と死去とは違可有哉与頭に御尋。それは隨分相分り候段申上候へば、塞り候者を若死去と心得候はゞむごき事と御意。

一、同年閏六月五日、此頃雨降續き、同日大雨にて才川之橋杭餘程流失、橋危候に付暮頃より往來留り、御附之内も橋之あなたに宿有之人々は歸得不申、御居間方抔直に泊番相勤候。

同夜御夜詰高畠源右衛門宅も川近故騒候段被聞召、水之様子委敷申上候様御意に而、頭より取次足輕見分に遣、時刻移り候に付御奥ゟ被爲入、外見に遣候者歸候はゞ、假令御寢成とも御目見申上早速申上候様にとの御意。山岸辨左衛門宅抔も水邊故、若水難も可有之哉与御心頭に被懸候。

一、同年九月御火事帽子鐶、木の葉、惣數六十枚計三段程之内、白赤黄之御細工人より取合指出、御納戸方より入御覽奉伺候處、これにて可宜候へども、木の葉に白きは無きもの、今少し外之色伺候様御意。

一、同二年十月二十日頃、御居間方幼少者に手習被仰付、手本被下候とてさら〳〵と御調被成候。御作左之通。（此年御十三歲、）

行空中双鷺聲　　飛海中双魚姿

御醫者中野隨庵承知之仕、其後御韻に奉賡候とて入御覽候詩。

蓄播雲烟錦字詩　　詩成珠玉有芳姿
群臣共喜春秋富　　活國名公更可期

一、同年十二月朔日朝、御膳奉行相勤候御抱守御前に罷出、今日晝御膳御料理物之内にんじん指上申筈。昨日奉伺置候得共、朔日にんじんと申事如何敷御座候に付相止、外之品指上候

与申上候得ば、朔日まで人の死なぬにてもなし。其上にんじんは藥の中の上品にて、病を除く第一之物なれば可忌樣なし。扨々をかしき事と御意にて御笑被成候。

一、同四年五月七日江戶御發駕、同月十九日金澤御着、公邊ゟ之御使前田兵庫金谷御殿ゟ罷出、於同之御間御目見被仰付候。兼而は御着御祝御膳被召上候而、御目見被仰付候筈に候處、追付御目見可被仰付旨被仰出候。右之節、膳後まで目見不爲致候而は、從者等も可爲難儀与御意。此年御十五歲。

一、同年冬之頃御膳被召上候節、御膳部之内御煮物少々御箸を御付不被召上、御汁は御代被召上御膳相濟候。當々御料理之品御餘慶有之分、御抱守之内御膳奉行相勤候者より、御倹を詰合頭誰ゟ可被下哉抔与相伺被下候付、右奉行御前に罷出、御煮物毎々被召上候御品に候。如何故に御座候哉今日は不被召上候段申上候處、今日のは不出來に候与御意に付、御鹽梅も毎之通与奉存候處、猶更御料理方ゟ申聞候にて可有御座段申上候而、御倹頭誰に可被下哉与申上候へば、不出來なる物を爲給候儀不入事と御意。御膳奉行奉畏入罷在候。

一、同五年六月江戶において神田吉左衞門御夜詰之節、此間西尾隼人より何ぞ御慰に成候御品獻上仕度旨、私共迄内分申越候。何が宜有御座候哉、阿方樣には何御宜敷与吉左衞門に御幼少より御なじみ故御心易奉伺候處、こなたの好には人程よきものはなきと御意にて御笑被成

候。此年御十六歲。

一、同六年秋之頃、幼少之節は、存せぬ儀尋候事、時により恥申樣にも存候。只今思ひ出候得ばをかしくと御意。此年御十七歲。

一、同年十一月頃御意之內、國政之大事は一人之思慮には決斷難成ものと御意。

一、同年冬之頃、江戶において御居間續御敷舞臺に而、御木馬被爲召、それより御卷藁被成候。富永佑太夫御矢數取罷在候處、寒冷之時分板之間は冷候。渡邊次左衞門軍學講釋之時分久敷板之間に罷在、老人定而難儀可仕与御意。其後御疊之上に而講釋等可被仰付旨被仰出。此後御出前迄は御敷舞臺に而講釋被仰付候也。

一、同七年三月織田主税江戶表に參着之後、御前に罷出候節、前田大學事御尋に付、隨分無事に居申候与申上候處、附をはなれこまり可申与御意。此御意御座候段、大學承知仕、事之外難有がり候。此年御十八歲。

一、同月孝經御素讀之內、賤き者は常々父母之側に居る事故孝行をなしやすし、貴き身にては孝行之心有ながら、輕き者之樣に手づから孝をつくす事なりがたく、殘念なるものなりと御意。

一、同年六月十三日御居間に臺八車をおし申聲聞え候に付、飯尾半助半助同月朔日江戶參着也。昨日廣德寺

本文天明三年の事に係る

登品先詰越候節、臺八車を見候哉与御意に付、見申候段申上候處、右臺八車は米抔のせおし候に付聲をかけ、暑中別而汗あぶらを出しおし候。下々之者は惣身より汗あぶらを出し不申ては、今日之露命つなぎ不得事不便成ものに候。古人も申置候通、上たる身の上にては下々之經營を憐み可申事与御意。

一、同月二十六日御病氣段々御指重り之時分、木村茂兵衛御看病申上居候處、是迄大病毎度滯候へ共本復いたし候。此度之様子は命に可障哉与御意。御病中も甚御行儀に被爲在、右同日壽光院様ゟ御對顔等之節、幷公儀御醫者ゟ御挨拶等、少も御きげんなど不被爲在候。

一、惣而神佛は、きらいなく照し守るなれ共、信心之者のみ其加護を得ると御意。（此御意年月不詳以下も同じ。）

一、御仕舞被成候とて、尉ものを御好み之處、或時御意に、年來もの、能は宜敷もの、若年に相應之ものは不出來なれば甚目立不宜候。尉物類は不出來にても目立候儀薄く、元來品が年來不相應故、不出來が卽相應すると御意。

一、或時御登城御下り之上、御同席御大名それぞれの御様子御意之内、陸奥守殿抔は席に被座付候處、度々騷ぎ被申候。惣躰言葉少き生質にては無之、此儀所存もある様子と御意。

〔政隣記〕

十月六日左之趣承に付記す。洞神滅論に有。

教千代樣今年御六歲、但公儀向は御七歲也。此間之御詠之由。

雨ふりていとゞ淋しき夕暮にかみの鳴ことゝいやにこそあれ

六月廿八日。德川家齊、使者を以て前田齊敬の病を問はしむ。

〔續德川實紀〕

六月廿八日、奏者番土井大炊頭利和をして、松平加賀守治脩養子佐渡守齊敬所勞を、兩御所より問はせらる。

六月晦日。前田齊敬の喪を發す。

是月は大盡なり

〔政隣記〕

六月晦日於江戶、佐渡守樣不被爲叶御療養、卯上刻御逝去。

但御實は今月二十七日卯の二刻御逝去之事。

七月朔日。前田齊敬罹病の報金澤に達す。

〔筆のまに〳〵〕

七月朔日

一、佐渡守樣御抱守高畠源右衞門儀、江戶表へ相詰罷在候處、佐渡守樣御儀前月上旬頃より

拙者に奥村尚寛

御徴痛之處、同廿二日より御風邪之樣に而、同廿五日夜も御平生躰に御机に御調筆被遊候處、同夜御寢成候而より、御胸下御つかへ被成、御難儀被成、御服藥有之候處、兩度御嘔有之、其後も右御つかへ不御宜、廿六日は御膳も御少く、晝御膳過御吐兩度有之、同夜彌御難儀に付、諸醫診察之處、御水氣御上衝之躰之由。同夜御足に御灸治も被遊候處、少御やすらか成樣に被爲在候旨。右御樣子爲言上、源右衛門儀同夜亥の下刻江戸發足、今日九半時過登城言上之。拙者は四半頃歸宅故、執筆堀勘左衛門宅へ罷越申聞候付、追付早乘に而八時御登城、源右衛門御次御用に而表へ急に出得不申故、御次へ罷越委細御容躰承之。

但、右於宅承之候故、明日・明後日之内金澤發足、江戸へ罷越度所存に而、夫々用意候樣申付。

一、右以後御前へ被召、御意有之。

一、右に付年寄中・御家老中等不時登城之儀、御用番より以紙面被申達、八時過より段々登城。

〔菅原直養覺書〕

一、佐渡守樣五月上旬頃御徴痛有之候段、織田主税等より河州方迄申來候由。然る處同月十九日出に、段々御快方にて大方御全快之由申來候旨。然る處六月廿六日發足にて、高畠源右

土州は前田土佐守なり

衞門早打にて七月朔日御當地へ到着いたし、佐州君御大病之旨申上る。依て御用番は未御城に被罷在候由。其外之年寄衆追付登城、御家老衆も登城、不破彥三抔病氣にて朔日登城不致處、右之趣御用番より演達之よしにて、登城いたし候由にて屆紙面參り申候。河州抔は馬拵候間も無之、歩にて鑓・時宜役一兩人にて罷出候由。河州は佐州君に主附故也。土州公にも御用番より達しにて御承知被成、御樣子も無御心許に付、小竹政助方迄、御紙面にて御尋被成候處、前に調置候如く、五月上旬頃より御微腫にて候得共、段々御快被爲在候處、六月廿四日夕景より御むね御苦、御体僉被遊候。廿五日に御瀉し被遊、夫にて御むねの御難儀もやすらかに可被爲在處、尙更御難儀之御樣子にて御座候。御醫師中御大病之旨申候由にて、高畠源右衞門早打に參り候由小竹政助より紙面參り申候。一ぺん拜見被仰付候故、文面は相違可致候。其日は此方粟ヶ崎へ行歩に參り、罷歸候途中迄土州公より被仰下、早速罷歸候樣に被仰下、馬を早めて罷歸申候。御大病を御大切と使之者申誤、猶更驚き申事に御座候。內藤宗安に早打にて江戶へ發足いたし候。河州も早打にて追付發足可在哉与存候處、三日に發足之旨申來り、二日朝いとまごいに參り逢候時分咄に、持病之積氣に籠抔早め候ては大きに障り候に付、當之旅行之通り之旨被申、前廉より早打抔にて罷越がたき旨御斷申上置候旨被申聞。段々御快方之御左右を奉待御事に御座候。

倦にも本のまゝ

七月二日、前田齊敬の病急なるの報金澤に達す。

〔政隣記〕

七月二日、前月二十七日卯中刻江戸發之早飛脚足輕、今二日午中刻到着。

佐渡守樣御容子、御喘氣甚敷、御難儀至極に而、御急變之處只今も難計、衆醫々案無之旨申來候事。

但、御容躰前月中旬より御足に少々御浮腫有之候處、無程御快全、嘉祥御登城。其後十九日二十日御出も見え、何之御替も不被爲在、二十五日夜御休被遊候處、御歎息之上御吐瀉有之、御胸膈に指込、御苦痛至極、次第に御倦にも甚く相成。依之御醫師者不及申に、公儀御醫師橘宗仙院等を初、町醫師に至迄名之鳴り申者共數醫奉診候處、何も御病名難號、先御脚氣腫上升衝心与申御症に而、霍亂も御兼候奉診察、御三里に御灸仕候處、少々御苦痛退き、御飯二十目計被召上候處を奉見受候而源右衛門發出、昨日同人より申上之。然處右早飛脚今日到着、本文之通不御宜旨申來候事。

右に付爲御見廻、御近習御先手青木與右衛門に早打御使被仰付、從正姬樣も御廣式御用達石川太郎右衛門、從龜萬千殿も御抱守坂井小平に爲御見廻早打御使被仰付、今夜五時前迄に皆々發出、且前田大炊殿醫師松原柏庵も、今夕早打に而被遣之候事。

三日、右に付奥村河内守殿も再往願之趣御聞届有之、今朝六時過發出、江戸表に被罷越。執筆兩人被召連。

但、永原將監等御附之人々も、江戸表へ罷越度段相願候得共、御指留之事。

同日、前月二十七日申中刻江戸發之早飛脚足輕、道中川支に而隙取、今日巳下刻參着。

佐渡守樣次第に御指重り、衆醫御藥劑難附、半夏湯等指上候得共最早被及御大切至極に候段、先早飛脚を以申來候事。

〔菅原直養覺書〕

一、七月二日御用番村井又兵衞より紙面之趣大がい左之通。

佐渡守樣御容躰御同篇之內、段々御草臥相增、御本復之處如何可有御座哉之旨、御醫師中申聞候段、前月廿七日卯之下刻發足之早飛脚、織田主稅等より之紙面到來いたし候。爲御承知申進候、以上。

月　　日

右は二日七つ時前見置候樣に御意にて、寫を以て拜見被仰付。文面は少々相違可有。

七月四日。前田齊敬の危篤の報金澤に達す。

〔政隣記〕

七月四日、御大小將鈴木左膳、前月晦日曉丑中刻江戸發、早打爲御使罷越候處、姫川滿水に付三時計逗留、今日九時過御城に到着。佐渡守樣最早被及御大切候段御案内有之。御小將頭詰合無之に付、當番御大小將御番頭田邊善太夫儀御席に誘引、御用番又兵衛殿へ左膳演述。夫より御次にて善太夫誘引、關屋中務を以左膳申上、夕七半時過又兵衛殿御返書御渡、押返早打に而同刻發出十日江戸に歸府之筈之事之事。

但、拜領物之儀者追而御詮議有之。

附、左膳儀宅に相返、駕籠修覆等申付。右之間二之御丸に致附人置、御席より呼に來候節可申達候間、早速罷出候樣善太夫申談。

右に付富山・大聖寺より早打御使者追々登城。

右に付御大切爲御見廻、御使番夫之御使番也。永原佐六郎に早打御使被仰付、暮頃發出之事。

右に付早速江戸表へ可罷越旨被仰渡候人々左之通。但、五人共六日曉天發出之處、二十日に參着。

御家老役　西尾隼人殿。北村三郎左衛門・本梨助三郎・柘植儀太夫・本保三郎左衛門。

〔菅原直養覺書〕

跡三通には本紙を見て調候故、文面等無相違。

佐渡守樣御病氣段々御指重り被成候付、其段公邊ゟ御屆有之候旨、前月廿八日不時立町飛脚、早飛脚歩を以織田主税等ゟ申越候。此段爲御承知申進候。且又右に付拙者共相公樣相伺御機嫌候間、追付御登城御伺可被成候。若御當病等に而御登城難被成候はゞ、御紙面を以御伺可被成候、以上。

七月四日　村井又兵衛

前田土佐守樣

旅封〆にして九つ半時頃御城より來る。

佐渡守樣御病氣段々御指重被及御大切候段、公邊ゟ御屆有之候旨、織田主税等より御大小將鈴木左膳早打を以指越。左膳儀前月晦日曉八つ時江戸表發足、只今致到着、右之趣申聞候。此段爲御承知申進候。且又右に付拙者共相公樣相伺御機嫌候間、追付御登城御伺可被成候、以上。

七月四日

追而右之御樣子に付、正姫樣御機嫌も相伺申候間、御廣式ゟ御出御伺可被成候、已上。

村井又兵衛

前田土佐守樣

旅封にして、

佐渡守様御氣色御指重被遊候付、年寄中等より惣代飛脚を以相伺御機嫌候趣に付、右飛脚大隅守より今日指出申候。御紙面御認、相濟次第大隅守方迄可被遣候。尤箱認におよび不申候。右之趣爲御承知申進候、以上。

七月四日　　村井又兵衛

前田土佐守様

七月四日。徳川家齊使者を派して前田齊敬の卒去を弔せしむ。

〔政隣記〕

七月四日於江戶、上使御奏者番有馬左兵衛佐殿を以、御香奠白銀三十枚御拜領。上意前田大和守殿御拜聽。

但、御悔之御奉書は御番に相渡、同人より御用人へ相達、夫より御國へ上之候事。

〔續德川實紀〕

七月四日、松平加賀守治脩養子佐渡守齊敬うせしかば、奏者番有馬左兵衛佐譽純御使して、香資の銀三十枚を遣さる。

七月五日。前田治脩、齊敬の葬儀を歷世藩侯に准じて執行せんとするこ

とを告ぐ。

〔袖裏雜記〕

觀樹院樣御葬式等、泰雲院樣御實子之御儀候へば、厚被仰付度思召候。泰雲院樣御葬式は、御代々樣よりは厚被仰付候へども、當時御省略之御時節に付、御代々樣御法事さへ一朝御執行被仰付候間、御例には當り申間敷候へども、喜六郎殿御葬式、御代々樣御葬式振を以、都合宜樣可遂僉議可申旨、七月五日御用番へ迄御意。重而同月七日、御歷代樣に被准、御省略等遂僉議可申旨御意。

七月七日。前田齊敬卒去の報金澤に達す。

〔政隣記〕

七月七日、佐渡守樣御所勞不被爲叶御療養、前月晦日卯上刻就御逝去、爲御案內早打御使御大小將山崎拜次郎、同日未中刻江戶發之處、信州筑摩川高水に付松代に相廻候處、是又船留に付川田に二日二夜逗留。今七日巳二刻御城に到着。御小將頭宮井典膳いまだ退出以前に付、御席御次に誘引夫々御達相濟。申上刻頃御返書御用番又兵衞殿御渡。旅中不及早打候、指急可致歸府旨被仰渡、同刻發出之事。附、姬川川支其外人馬支等に而、十六日午二刻江戶歸府之事。

佐渡守様御氣色御滯被成候處、段々御指重、不被爲叶御療養、前月晦日御逝去被成候段申來候。依之諸殺生・普請・鳴物等可有遠慮候。日數之儀は追而可申渡候。

一、御家中さかやき可有遠慮候。又者は及其儀不申事。

一、御先祖様方御忌日御寺江參詣之儀も、當分指扣可申事。

一、右に付頭分已上之面々者、爲伺御機嫌明八日五時より可有登城候。幼少・病氣等之人々者、御用番宅迄以使者可申越候。

右之趣被得其意、組・支配の人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配にも相達候様可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月七日　　村井又兵衞

一役宛連名殿

七月七日。江戸に於いて前田齊敬の法號を假に曹溪院と稱す。

〔政隣記〕

七月七日於江戸、今般就御凶事に平詰無之、一統常服之事。

曹溪院殿。佐渡守様假御法號廣德寺より奉號、且又従天德院奉號候御法號十日に記之。

七月八日。前田齊敬卒せしを以て普請・鳴物以下遠慮の日數を定む。

〔政隣記〕

七月八日、昨日御用番又兵衛殿依御廻文、今日五時より四時迄頭分以上登城、御帳に附退出。尤常服着用罷出候事。

佐渡守樣御逝去に付、普請・鳴物等遠慮日數之儀、追而可申渡旨先達而相觸候通に候。依之不押立普請は昨七日より十三日迄七日、諸殺生・鳴物等當十九日迄御忌中日數遠慮可仕候事。

一、御家中之人々御目見已上月代剃申儀、昨七日より十三日迄七日、御歩已下者三日遠慮可有之候。又者は不及其儀候事。

一、御附之面々、頭分以上は五十日、平士等御目見以上三十五日、御歩並・御居間方等坊主は廿一日、足輕小頭以下二七日、月代剃申間敷候事。

但、本文日數相濟候共、御葬式相濟候迄は相扣可申候。

一、頭分已上、當月十三日五時より爲伺御機嫌可有登城候。幼少・病氣に而登城無之人々は、御用番宅以使者可相伺事。

但、御近習之面々は拙者共於席可相伺御機嫌候。

一、當十五日例年之通出仕無之。出勤之面々着服之儀は、都而例年之通に候事。

右之通被得其意、組・支配之面々に可被申渡候。且又組等之内裁許有之人々にハ、其支配にも相達候樣被申聞、尤同役可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月八日　　　　村井又兵衛

一役連名殿　但、同役中傳達方之御觸文面に候得共、一役宛連名也、

七月九日。加賀三郡の郡奉行等、前田齊敬の忌中なるに拘はらず稻蟲驅除の爲に太鼓を打たしめんことを請ふ。

〔加州郡方舊記〕

一、私共支配三郡村々之内、所により稻に虫付候に付太鼓打申度旨及斷候。當時御忌中に御座候得共、格別之儀に御座候間、太鼓爲打虫爲拂申度御座候。此段御聞屆御座候樣仕度候、以上。

卯七月九日　　　　宮崎藏人

林彌四郎

御算用場

右之通御算用場に相達候處、御用番又兵衛殿御聞屆之旨、右奉行中より申談有之候條、得其

意、夫々可申渡候、以上。

卯七月十日　　　　　　　　　　宮崎藏人

加州三郡十村中

七月十日。前田齊敬の法諡を觀樹院と稱す。

〔政隣記〕

七月十七日。左之通被仰付。

佐渡守御葬式等主附御用　　　奥村河内守

佐渡守樣御法號。　指舘　觀樹院殿故正四位下羽林次將法山道輪大居士　神儀

〔筆のまに〳〵〕

七月廿四日

一、紀州大納言宗直卿御實母、觀樹院殿と被稱候。御指つかへは有御座間敷候へども申上候由、御用人よりしらべ申上候。此儀今日之急便壽光院樣へ被仰進候。其御答次第御改之儀も可有之趣、石野主殿助を以御內々被仰出候。其段江戶へも拙者よりも申遣儀等一卷留帳に委し。

七月十四日。盂蘭盆中の展墓を停止し、且つ藩侯の忌中は近習諸士に月

代を剃らざらしむ。

〔政隣記〕

盆中廟所江切籠燈し候事不苦、自分寺等江參詣之儀者無用之事。

右若相尋候者有之候者、右之通可相答旨、御用番又兵衞殿御横目江被仰聞候事。

〔政隣記〕

七月十四日、就御忌中、盆中御參詣並御名代參詣も不被仰付、且左之通。

天德院・寶圓寺・如來寺・經王寺・實成寺・桃雲寺江、御手向料御使番御使者を以被遣之。

〔政隣記〕

七月十四日

付札、御横目江

拙者共月代御忌中だけ剃不申儀御噂有之候。依之當十五日着服之儀、都而例年之通与相觸置候得共、右之趣に候間出勤之面々に可爲常服候條、夫々可被申談候事。

右今十四日九時頃御用番又兵衞殿御渡之、急速御横目中より夫々被申談有之、組・支配江急觸出之候事。

相公様御忌中日數、御近習向に都而月代剃不申筈に相成、御右筆中等江も剃不申様に与、御

近習頭より申談有之。

七月廿二日。前田斉敬の靈柩着後、天徳院に於ける諸士の服裝を定む。

〔政隣記〕

七月廿一日

付札、御横目に

覺

觀樹院樣御尊骸天德院へ被爲移候時分、幷御寺に被成御座候内、罷出候役人、頭分・平士共に不殘染帷子・布上下之事。

但、御棺被成御座候御間、幷御次之間等勤番之人々は白帷子、上下は何色に而も可爲勝手次第候。

一、御葬式幷御中陰御法事之節、御寺幷御廟所に罷越候役人・御番人等、御徒並巳上之面々、白帷子・無地淺黄、石餅布上下之事。

但、御寺に相詰候頭分以上之面々は、長袴可致着用候。

右之通夫々可被申談候事。

七月

見分に奥村尙寬

七月廿六日、前田齊敬の廟所豫定地の見分を行ふ。

〔筆のまに〱〕

七月廿六日

一、今日御寺御廟所等見分に罷越。是に此度御廟之御土饅頭、前々御歷代には八間之四方之處を、六間四方に被仰付、夫に准じ御柵も小さく可被仰付被仰出に付、遂見分、十三間四方御柵之繩張也。遂見分候處恰好に見候。十三間四方忌事も無之候哉と、夫々遂僉議候處、無之由也。且又今般御着棺者書院也。是も遂見分。又此度御葬式之御行列之處、御寺へ御着棺之上、同寺之御廟へ畧なる御行列に而被爲入候時は、前々と御振違候故、御葬式濟山門外より裏門へ御出、夫よりがあ坂通り下馬へ御廻り、直に御廟へ被爲入候へば右之御行列立候故、此處も遂見分。

但、松雲院樣にも書院へ御着棺と帳に有之候へども、それは御晩年に被仰付候御間に而、寺之間に無之。

七月、算用場奉行藩の財政補塡の方法に關し稟議す。

〔成瀨氏所藏小紙寫〕

去秋より當夏迄、於大坂御借入銀高多御座候處、當年御廻米少候に付、江戸表當七月より十

月迄之御入用、大坂より御仕送難相成譯、委曲當五月彼地詰人より申越、其節御達申候通、右七月より十月迄四ヶ月御平生方御入用、從此表御仕送可仕、依之諸方上り等迄に而者六百貫目餘不足仕候に付、別立御貯用米之內五千石御貸渡相拂候代二百貫目計、幷本吉等より四百貫目餘御調達を以可被辨圖に而、七月分は六月中旬御仕送濟、八月分等追々御仕送可仕處、今般御國事此表之御入用茂過分之儀に付、從此表御仕送難仕、大坂よりも右之通兼而申越置候得共、今般誠に無存懸不時之御入用出來に付、格別御藏許等出情仕御仕送仕候樣申遣候。

一、七月より十月迄之間にも、少宛之不時御入用必可有御座、幷小石川御前樣御印章金之分は前方不相知に付、於江戶表富田屋六兵衞等により御調達を以可被辨心圖に御座候處、今般之御入用急切成儀、當月四日中飛脚を以二百貫目遣、此餘大綱六百貫目餘に茂可及哉。此分富田屋等より御調達申遣候間、此上每月不時御入用、小石川樣御入用等打重、於江戶表御調達出來兼可申、依之是又大坂に而何分何茂出情爲仕、御仕送仕候樣申遣候。

但、右兩樣之銀高凡千貫目計、大坂に而者無存懸過分成不時之御仕送、其上兼而請合罷在候當十一月・十二月江戶御平生方御入用、幷京・大坂御入用、御舊借渡り銀等千三百貫目計御調達之圖に付、此分与右今般申遣候千貫目計与、當年中都合二千三百貫目計之銀高、誠過分至極之儀に御座候間、御藏許等出情仕候共、御調達出來之程甚無覺束儀に御座候。

一、此表御手繰之儀、右初ヶ條に相記候通、八・九・十之三ヶ月分、此表よりは御仕送指止候間に仕候得共、當月四日出急に指遣候二百貫目、此外此表に而之今度之惣御入用、先日御使人ゟ御貸渡金等をも合而、六百貫目餘にも可相成哉と奉存候。指懸り候渡り方爲御手當、御城方より百貫目、役銀より七十貫目、幷別立御貯用米重而御貸渡被下候三千五百石餘御拂仕、幷御次ゟ可指上町會所より之返上銀等を以、急渡り等相辨候得共、右之内無程追々返納可仕、是等之御手當等、本吉・小松・高岡此三ヶ所ゟ、來二月之御返濟之極に而御調達申渡置候。未御請は不指出候得共、六七百貫目計は相調可申哉。左候得ば、今般不時此表之御入用、先可也に可被辨候。

右手配之通地・他御調達都合能出來仕候共、江戸に而今度急御調達之分は、當十一月比之御返濟極に可有御座、此御手當者無御座候得共、元金之内少返濟仕、殘來春迄再借等其期に至取計出來可仕哉。先今年之處は何分右之樣成揃に而、格別之指支取計可申与奉存候。

一、兼而當暮迄之御はこび方、甚御難澁に御座候處、今般之御凶事過分之御物入に付而者、中迄に茂不及、危急之御指支に御座候得共、近年地・他御借銀議定相違不仕、何方茂信服不惡に付、御調達之手配を以危急之所を被辨候得共、來春に至而者誠御手段茂盡候場に御座候。其譯左に記申候。

一、二千三百貫目計　當年中大坂に而御調達、江戸御仕送等
一、千三百五十貫目計　來正月より五月迄江戸惣御入用指詰候圖、大坂に而御調達之圖
にして
〆三千六百五十貫目計
此銀高に應る御廻米
六萬八百三十石餘
但、石六十目圖に而此の如く、若五十五匁平均に相成候得者、六萬六千三百六十石餘相成申候。然時者屆高八萬石御廻米御座候而も、跡一萬石計ならで相殘不申候。其分は京・大坂御平生方御入用にも行屆不申族に候間、江戸表六月より末御入用御仕送り之道相見ゑ不申候。
一、六百貫目計　此度江戸に而御借入之御返濟
一、六十貫目計　右利足
一、七百貫目計　此度本吉等より御借入之御返濟
一、四十四貫八百目計　右利足
〆千四百四貫八百目計

此御返濟銀出方無御座候間、江戸之分來春に至而茂押而又御再借、此表之分或當町等より押而御調達を以、繰返〳〵仕候而御はこび可申道も可有御座候得共、實に只暫之計に而、無程行詰候而已ならず、右押而御調達仕候而者、いつ迄も御領國中金銀縮融通甚悪敷相成、末々迄一統之大指支に可相成。右族に至而者、只今迄信服宜躰之大坂・江戸共銀主共、御容慮之程惜に相見え候に付俄に手を引、且御返濟を強て願出候而已に可相成候條、前々之儀に候得共決定相違仕間敷と奉存候。右之躰に候得者、指當り來春御參勤御支に可至、大切至極之場に御座候。何分御公務欠候儀は難相成、旁以此度之儀者は、近年之樣成取計方に而者相成間敷と奉存候。依而私共僉議仕候處者、一旦喧敷一統之支に御座候共、後之宜を相考申候處、左之通に御座候。

一、今般之御内事に付、町・在に二千貫目餘之御用銀被仰付候旨、先頃より町方等甚申ならし候。是則左樣に可被仰付時与相考申候。乍然當時御用銀等被仰付、今般之御入用被辨候譯に而者、別而如何敷奉存候に付、先江戸・大坂御調達、御國に而者近年も折々御調達申渡候本吉等三ヶ町より、當之御調達を以此度之御用相濟せ置、來早春に至町・在に御借銀被仰渡、銀高八千五百貫目より二千貫目迄之間に而可有御座候。其銀高を以此度御國并江戸等之御調達銀返濟可被仰付候。尤右御かり銀一通りに而者、當町奉行を始、遠所町・御郡奉行中承知

仕間敷候間、押而被仰渡候樣にと奉存候。右御借上之上、半年或一年過候而、御借上高之十ヶ一被返下、其節急切之御用立候御褒美之貌を以、二朱或三朱計之利足に相當り候程之銀高御添可被下候。前方不申渡置候て、御手繰見計年譜御返濟之振に可仕。左候得者上げ切与存居候所、無存懸御渡方に而難有可奉存。是を以漸人氣御取返御座候樣に与奉存候。中古以來延享・寶暦之初頃迄者、度々町・在より御借銀有之樣子に候得共、上り切に而、御返濟之御沙汰は無之樣子に御座候。左樣之例者有之候共、御取上切に仕候儀者甚不宜事と奉存候。其後安永年中よりは、下々之才覺与同事に、色々相賴候而御調達仕候。是亦御用に者不似合事、尤其筋之時宜与奉存候。當時に而者右之通可被仰付時宜と奉存候。勿論曾而好候儀に而者無御座候得共、此外御計方決而有御座間敷と奉存候に付、私共決談仕置候得共、不容易事故發言不仕、先御勝手方杉野善三郎等、何茂人別了簡爲書出、其上寄合、段々利害得失論談仕候處、終に何茂右之處に決疑仕候。乍去猶此上可然被仰付方も御座候はゞ、御指圖可被下候。重々御僉議被下、其上私共治定之通に被仰付儀に御座候はゞ、御借銀被仰付候期に至、彼是少喧敷申立御座候共、押而被仰付不被下而者相調申間敷候間、御思慮被下候上、御決談之御内意早速被仰渡可被下候、以上。

八月七日。前田齊敬の靈柩江戸を發す。

〔御裏雜記〕

觀樹院樣御尊骸御國に被爲移候付、御用番に御書付被指出、御勝手次第之旨以御付札御差圖有之候趣、達御聽候。

〔政隣記〕

八月七日於江戸、卯上刻觀樹院樣御尊骸御發棺、其節御歩並以上追分御門之内等に爲御見立罷出。

〔筆のまに〳〵〕

一、觀樹院樣御泊附左之通。

但、御關札之儀、江戸幷金澤にて段々相糺、御右筆方も遂僉議候へども、御先例相知不申候故、道中承合有之候處、前々御關札無之由故、此度も無之。

十五御泊附

八月七日	江戸	九里二町	桶川御泊
八日	桶川	八里三十二町	深谷御泊
九日	深谷	六里七町	倉ヶ野御泊
十日	倉ヶ野	六里七町	松井田御泊

十一日	松井田	七里六町	追分御泊
十二日	追分	十一里十八町	榊御泊
十三日	榊	十里十八町	牟禮御泊
十四日	牟禮	三里	野尻御泊
十五日	野尻	六里三十四町	荒井御泊
十六日	荒井	十一里十八町	能生御泊
十七日	能生	三里十八町	糸魚川御泊
十八日	糸魚川	六里三十四町	泊御泊
十九日	泊	八里二十町	滑川御泊
二十日	滑川	九里二十九町	高岡御泊
廿一日	高岡	七里十七町	津幡御泊
廿二日	津幡	三里十八町	金澤

八月十四日。昨今兩日江戸廣德寺に於いて前田齊敬の中陰法會を執行す。

〔政隣記〕

八月十三日・十四日江戸於廣德寺、觀樹院樣御中陰御茶湯御執行有之。

但、十四日御茶湯相濟候後より十五日迄懸、主税・頭分之面々拜禮可罷出候。平士・諸小頭ハ不及拜禮候。普請・鳴物十二日より十四日迄三日遠慮。御寺詰人頭分以上染帷子・半袴着用。且拜禮に罷出候人々半袴着用之旨、織田主税申談之由先達而御横目廻狀有之。

八月十四日。鹿島郡高畠村百姓儀兵衛の妻三子を生む。

〔袖裏雜記〕

鹿島郡高畠村百姓儀兵衛妻腹に、寛政七年八月十四日より同十六日迄に三子出生、先ニ女子、次男子二人出生、其内男女二人果、一人存命之旨、御郡奉行より御算用場へ紙面出。近年三子出生候へば稀成儀に付、子供三人扶持被下趣被仰渡候。然共安永九年三子出生、初而御扶持被下候節、難澁等を以御惠御座候樣に与之趣に候へ者、兩人相果候間御扶持方被下間敷与本存候旨等、右場奉行添紙面に、九月御用番大炊より押札を以、紙面之趣に御座候間御扶持方被下間敷儀与僉議仕候与調上候處、押札之通被仰出。

八月廿二日。前田齊敬の靈柩金澤天德院に着す。

〔政隣記〕

八月廿二日曉八時津幡驛御發棺、朝六時過森下村ゟ御着棺之旨等、附人追々告來。五半時過天德院ゟ御着棺、御次第書昨廿一日に記之通り無御滯被爲濟、且御供御家老西尾隼人殿初御

附之人々等。御先三品御筒押者御先手兼御附北村三郎左衞門、御弓押者聞番・物頭並交代、聞番詰一人御減少に付先長瀨五郎右衞門、御長柄押者御大小將より篠原與四郎、其外御大小將前記七月十日に有之役附に而歸着。將又御道中御供人裝束、常御道中之通也。御道具とも同斷。但一統長髮、御棺上げ輿色を懸け、辻々等に而拍子木打之數三つ、居之御香を燒く。

一、廣德寺塔中桂香院御供に而到着。旅宿小立野石引町越中屋。參着後右旅宿に、御使御大小將高畠彥之丞を以、遠路御大儀被思召候。猶更近日御逢可被仰入旨之御口上被仰遣。

〔菅原直養覺書〕

覲樹院樣當廿二日此表御着棺之筈に付、御葬式等御日取別紙之通与被仰出候に付、爲御承知進之候、以上。

八月十三日　　奧村──

前田──樣

御葬式等御日取

八月廿五日　御葬式

八月廿八日より二夜三日　御中陰

九月三日　御三十五日

同月五日　　御四十九日
同月七日　　御百ヶ日
以上

八月廿五日、前田齊敬の葬儀を天德院に行ふ。

〔政寛覺書〕

八月廿五日

一、今日於天德院、觀樹院樣御葬式辰上刻相勤候に付、惣御奉行河内守六時頃、其外年寄中等白帷子淺黄長上下着用。六半時迄に段々御寺へ罷越候事。

一、出雲守樣御使者御家老村圖書、飛驒守樣より御家老前田靱負、桐陽院樣よりも御用人志村平左衛門被遣之、右夫々於御寺御巡道相濟候上、御代香相勤候由之事。

一、御廟所へ被入、御塚穴御納め前御火屋に奉居、御名代等相濟、安房等自分之拜禮。

一、於御寺御葬式前、年寄中一切・御家老中一切村圖書等ゟ逢候事。

〔政隣記〕

八月廿五日、前記に有之通に而今朝五半時頃御葬式相初り、詰人頭分已上太鼓堂之方後ろに仕伺公、御巡堂之間中場ゟ罷出、緣取之上庫裏之方廻廊後ろに仕列居。夫より御出棺之節爲

御見送、山門之外勝手門之方へ罷出蹲踞。夫々四半時頃相濟、御廟御納り暮頃相濟、御寺詰人者九時過退出、同役より田邊善太夫相詰。都而御次第等前記之通。且又龜万千殿就御風氣に御詰無御座候事。

八月廿八日、今日より三日間、天德院に於いて前田齊敬の中陰法會を執行す。

〔政隣記〕

八月廿八日御中陰御法事初日御執行、同役より白分御寺ゟ相詰七時過罷歸。

廿九日同斷中日御執行、同夜より御寺詰田邊善太夫。

晦日、一昨日より今日迄御中陰御法事於天德院二夜三日御執行、無御滯相濟。今日同役より御寺詰平田三郎右衛門。且御法事畢而、於客殿和尚ゟ御時服二重・白銀五枚被遣之。披露御大小將。壽光院樣等より被備候御香奠、夫々御代香前披露之。引離、出雲守樣等被備候御香奠、披露右同斷。將亦上座見八人ゟも於客殿時服一重宛被下之、披露御大小將。下座見三人ゟは於同所白銀御目錄、寺社奉行相渡之、頂戴之。

但、和尚等御法事御奉行ゟ向御禮、退座之上右御品物共披露役引之。

一、出雲守樣御家老村圖書・飛驒守樣御家老前田靱負・桐陽院樣物頭志村平左衛門御使、三ヶ日共朝六時過より御法事終

御代香勤は津田政隣

慶次郎は盛岡侯南部信敬

迄相詰。今日に御代香勤、且年寄中等拜禮之次に自分之拜禮仕、圖書・靱負は階上四疊目、平左衞門は三疊目に而拜禮被仰付。

但、三ヶ日共御菓子・御料理被下之、挨拶等都而御奏者番之事。

一、慶次郎樣御使者加嶋舍人儀、御馳走方御大小將前田牽次郎同道に而、五時頃天德院に罷出、誦經中に付廻廊禪堂之方より罷上り、夫より披露役御大小將出向、御使者之間に誘引、御奏者番・寺社奉行罷出挨拶。其上にて河內守殿御出御挨拶。誦經中には出雲守樣等御使者上に列し聽聞。畢而惣御代香之次に御代香。尤夫以前御香奠披露。御法事畢而本廻廊より退出。其節河內守殿幷御奏者番・寺社奉行、幷最前誘引之御大小將共、都合四人階下迄送之。

但、法事御菓子・御料理等被下之、給事御步之事。

右夫々相濟、年寄中等拜禮有之。附、自分儀前記廿三日之通に付、今日巳刻より午刻迄之內拜禮に可罷出候處、二之御丸朝御番に付不罷出。九月三日辰之上刻熨斗目・長袴着用出宅、御靈牌に階上横疊於三疊目拜禮仕候事。

一、右御法事等相濟、龜萬千殿御參詣御燒香之事。

八月、前田齊敬の葬馬飼育の希望者を加州三郡の百姓に募る。

〔加州郡方舊記〕

雪山

右覩樹院樣御馬、一日大豆一升宛御指添、御飼捨可被仰付候條、御支配所之內宜望人早速被遂御詮議、相望候者前々之通御請紙面御指添、御厩迄請取に御指出可被成候、以上。

卯八月　　　　　　神尾織部

宮崎藏人

林彌四郎

右紙面寫指遣候條、得其意、早速望人可申聞候、以上。

加州三郡十村中　　　　　　林彌四郎

九月七日。藩內に大赦を行ふ。

〔政隣記〕

九月七日爲御大赦、左之通御免許被仰付。

能州島配所御免　　最前御大小將組 佐渡守樣御抱守　池田弘助

同斷・　　弘助嫡子　池田十六郎

同斷　　最前新番組 佐渡守樣御居間方　杉本新之丞

同斷　最前定番御歩同斷　村田鐵平

同斷　最前定番御歩　清水圓右衛門

越中五箇山に流刑御免　最前横目藏人與力　高橋仙之丞

同斷　最前明組與力　嶋正左衛門

遠慮御免　定番御馬廻　中村善兵衛

追放代　三年禁牢被仰付　最前御算用者小頭並　篠崎知太夫

實方見混人篠崎知太夫落着之御付候に付指扣御免　御家老方執筆組外　齋藤彌右衛門

妹實混人篠崎知太夫同斷に付指扣御免　火矢方御細工者　吉田宇兵衛

急度指扣御免　但御矢御應式御用は被指除之　御醫師　內山養福

指扣御免　明組與力　津田源助

一類に御預御免御扶持被召放　火矢方御細工者　小柳喜兵衛

兄御扶持方大工安田與一郎落着に付指扣御免　御歩橫目　安田吉左衛門

同斷　御歩　安田勇左衛門

遠慮御免　御鷹方御歩　吉田新左衛門

一類之儀に付指扣御免　御算用者　小川清太夫

同断　　　　御算用者　小川伊左衛門

右之外足軽・小者追込等御免有之。

見分は奥村尚寛

九月十三日。前田齊敬の廟所を見分す。

〔筆のまに〳〵〕

九月十三日

一、今日御廟見分之節、御柵内之御塔婆も見分之。右御塔婆之筆書、和尚之手跡に候哉と寺社奉行へ尋候處、右奉行も不存、先へ案内之役僧（役僧両人先へ立往来御案内す。）に尋（奉行尋之。）候へば、和尚之代筆宗泉寺之由申候。此御塔婆長さ十一間有之。泰雲院様御塔婆は十三間之由也。御代々様大方十一間之由也。

但、御寺へ先達而遂僉議候處、八間よりは短くては調筆難仕、八間よりは上に候へばつかへ不申由也。

九月十三日。天徳院の出家二十餘人施物の分配に不心服の爲退去す。

〔筆のまに〳〵〕

九月十七日

天徳院出家之内、寺中において大勢寄合騒敷（其主意は、今度御内事に付御法事御施物等之配當不列等之品有之、不心服より起候躰なり。）候故、方丈

拙宅は奥村尚寛のなり

備姫は前に前田齊敬と婚約せしもの

よりも一旦被鎮候とも不相治故、十三人寺を去り候様被申付候處、夫に從候而廿人あまりも罷出、拙宅に可參訴と申捨にいたし候由。右に付同寺副寺禪峯と申者、一昨十五日家來頭役木原一郎左衞門迄、右之段申聞候故、拙者へ達候儀にても無之由故、承置遣候旨同人申聞、其段承知候故其分にも難致、席執筆馬淵順左衞門迄右之譯咄之、寺社方取次與力迄世評之趣にして承候樣申達置候處、今日取次與力出合候付、順左衞門尋候へば、右之趣役僧より取次與力迄内々心得に申候。前々僧之出入之儀、寺社所へ不達候へども、大勢之儀、寺中騷動儀世評とも可有之と、内分與力迄相達候由申候旨に候。順左衞門心得を以、右之通寺を被拂候上は、如何之ものに候哉と尋候へば、兩剎に而右樣に不申渡候ては、最早御領國中之寺庵には難便候と定而他國へ出候にて可有之由與力申候由に候事。與力は源武兵衞也。

但、此後右出家之所爲と見えて訴狀有之。

九月廿二日。前田齊廣に對し紀州侯徳川治貞より緣組を求められたるを謝絶することに決す。

〔備眞雜記〕

壽光院樣へ紀州樣より以御直書、備姫樣御事外に御相應之御方も無御座候間、亀萬千殿は御嫡子御願可被成と思召候間、御緣組被仰合度。か樣之例相模守樣にも有之故、公邊御差支

は無之、何分被仰合度由被仰進候付、尚更御考、追て御答可被仰進旨被仰遣候。御守殿之御沙汰も可有之哉に候間、兼而之御内存は、紀州様に當年御出生之御女子御座候を御貰被成度候。備姫様事は思召懸無之事。何卒右御出生之御方に被成度候。此度此方様にか様之儀御座候而は、以後諸大名方之御手本に被爲成候。夫迄にも無御座、御家中か様之儀以後初候様成ものに候へば、御斷被仰進候様にと奉存候。御斷方被仰立御六ヶ敷候はゞ、龜萬千殿より幾重にも御斷被成候趣被仰進候はゞ、其上被仰進候事は有御座間敷旨等、九月廿二日申上候處、成程尤に被思召候間、備姫様御事は御斷可被成旨等御意。此外委曲は此帳に留なし。

但、御斷被仰進、右當年御出生之御女子様之事被仰進候ても、其御女子様は御許容無之也。（備姫様与申也、太眞様子而御變之由也。）

〔御用雑記〕

前に記す備姫様御事、猶又御意之品も有之に付、龜萬千殿ゟ御縁組之儀、打返僉議仕候處、先達而申上候通り、觀樹院様御縁組御願も被爲濟候上候へば、外様に御例御座候とも、私共には御不義成御事与奉存候。假令如何程之御不利御座候共、難被爲成御儀与僉議仕候旨等、十一月十七日申上。

九月廿九日。先に前田齊敬卒去の報を齎したる早打使者山崎彌次郎にて

の旅行遲着の狀を上申せしむ。

〔袖裏雜記〕

觀樹院樣御逝去に付、江戶表織田主稅より言上早打御使御大小將山崎彌次郎、六月晦日晝八時江戶發足、丹波島川支、松代へ廻り福島に二日逗留、七月七日四時過到着之處、飛驒守樣より爲御悔御使者山崎權丞七月七日被遣候。左候へば大聖寺表ゟ、右御逝去之儀江戶表より早く申來候と奉存候。右之通候へば、彌次郎逗留候處も分り不申、せり込候はゞ、今少早く參着可相成儀候間、逗留等之樣子彌次郎手前御糺と可被仰付哉と九月十七日伺、伺之通と御意。此後之儀此帳に不見。

〔政隣記〕

付札、宮井典膳ゟ　　山崎彌次郎

右彌次郎儀、觀樹院樣御逝去之段織田主稅等より早打御使を以及言上候に付、右爲御使六月晦日晝八時江戶表發足、丹波嶋ゟ罷越候所、川支に而松代ゟ相廻り、福嶋に二日逗留有之由に而、七月七日四時過致到着候。然處飛驒守樣より爲御悔御使者被進、七月七日此表へ到着に而、大聖寺ゟは御逝去之儀早く相知候躰に候。左候得ば彌次郎延着之儀如何之譯に候哉、

猶更逗留等之樣子相尋、紙面取立可被指出候事。

九月

右御用番大炊殿御渡之處、彌次郎在江戶に付、則頭典膳より昨廿九日便に江戶表へ申遣候處、十月八日江戶着。彌次郎より指出候紙面左之通。

私儀、當六月晦日観樹院樣御逝去之段、織田主稅等より及言上候早打御使被仰渡、同日八時過此許發足仕、七月七日四時過金澤表へ到着仕候。然處飛驒守樣よりは爲御悔被進候御使者七月七日金澤到着に而、大聖寺へは早く相知候躰に付、左候得ば私延着之儀如何之譯に候哉、猶更逗留等之樣子委細御達可申上旨、前田大炊殿被仰渡候段承知仕候。前段之通御當地發足仕、七月二日信州矢代驛ゟ罷越候處、川支に而松代へ相廻り、福嶋驛へ七月二日暮前着仕候處、布野川舟渡指留、同四日申之刻迄逗留仕候處、同刻舟渡相立、一番舟に御國より之早打御使久野吉太夫幷御醫師中相越、右戻り船に私相渡り申候。私逗留中、此方樣より之早飛脚足輕追々罷越居申候處、私同船に相渡り申候。將又於糸魚川河內守殿に御出合申候處、御指留に付暮六時頃より五時頃迄同所に罷在、夫より尙又指急津幡驛迄罷越、殊之外亂髮に相成候に付、髮爲詰暫隙取、夫より指急金澤表へ着仕候。勿論福嶋驛に而逗留之樣子、問屋より一札取立置申候。尤武州・上州・信州等驛に而は、夜中等別而墓々敷人足指出不申、隙取申所

々も御座候。暫之儀に付先達而到着之砌御達不申上候得共、此度委敷御尋之儀に付、右等之趣御達申上候、以上。

十　月　　　　山崎彌次郎　判

水野次郎太夫樣

九月、藩の非人小屋に窮民を收容する手續を改む。

［御郡典］

笠舞非人小屋先年初而被仰付候砌以後、右小屋ぇ入人方之儀等奉窺、被仰出之趣等有之、親類有之者幷高持百姓等入不申樣に候處、是迄右小屋ぇ罷越候者之口上迄を以承屆候事故、出生所等相違之儀も有之。或は親類有之者も、悉皆預介抱に候を厭、無斷其處を去、小屋へ罷越候者も可有之、其時々糺方行屆兼及混雜、御縮方相障り候族も有之候。且亦猶於何方にも親類等無之、鰥寡孤獨癈疾之者たりとも、於所方に成限介抱いたし、其上に不及力者は、詮議之上右小屋ぇ指遣可申處、不致介抱、相勸め指遣候族も有之躰、其失本意候仕方も相聞候。其上先年与違、當時者病者等於小屋力附、奉公等望候者有之候而も、一旦小屋へ入候者は永々在附兼候躰に候。其所々に而精誠介抱を盡し不申、致疎畧に候者は、無是非小屋ぇ入、多分生涯非人に落、留り申首尾に而、御惠之御趣意にも相障り候爲躰にも至り候に付、今般遂

詮議御年寄衆江相達、夫々古法を以左之通相改候。
一、高持百姓幷町・在共親類有之者は、小屋江入不申候。
一、町・在共肢躰無障健者、身一分過兼可申筈者無之儀に候。鰥寡孤獨癈疾之者も、於其所に成限り致介抱、其上にも不及力者、或者至而小村等に而介抱難相成候はゞ、其所役人承糺、村方ニ組合頭・肝煎紙面裁許之十村奥書、町方は組合頭紙面肝煎幷横目肝煎連名奥書送紙面を以、小屋へ送可遣候。當十月朔日より、右送紙面不持參者は小屋へ入不申事。
付札、本文當十日朔日より送紙面不致持參者は、不爲致小屋入与申儀者、小屋入方之儀に候間、右文段に不拘此度相改候趣被申渡、承知之上小屋入相願候者は、當月之内に而も本文之通、送紙面を以送越候樣可被申渡候事。但、送紙面別紙草案相違候。且亦横目・肝煎無之處者肝煎迄之奥書、寺社門前地之分も右に準じ候事。
一、右之趣に付、諸郡十村・町方寺社門前地肝煎・横目肝煎印鑑、當月中被取立、各より直に小屋裁許之與力迄可被相達候。
但、町方等肝煎・横目肝煎印鑑一紙に可出事。
一、當月より以後當年中、右小屋被送遣人高、別紙草案之通組切被取立、何通に而も繼立、各奥書を以、來正月中拙者共宛所に而可被指出候。來年より者一箇年限り、翌正月中可被指

出候。

一、當町に而飢人并病氣に而行倒居候者、小屋役人見付候分小は屋ゟ連越候得共、此以後倒者有之候はゞ、其住所等相尋、他國者に候はゞ隨分勞り療養等を加へ、御定之通宿送を以送遣可申。言語も不通、住所等不相知乞食躰之者には、是迄之通非人頭取扱勞り可申儀、其上に而言語も通、御國者に而住所等相知候へ共、遠方之者に候はゞ、非人頭より小屋裁許與方迄屆可申、小屋へ引取養生等相加置、住所支配方迄小屋裁許與方より屆可申候。

右之通相改。

一、各支配所之者、當時非人小屋ゟ入罷在候者可有之、追而相糺、名前等可申達候。其內親類等介抱可仕者罷在候歟、無左与も其所役人組合頭之者納得之上引取、相應之稼奉公等爲致度事に候。且右小屋に而生出之者、兩親者先達而相果候者も可有之、左樣之者には其親より所を去居候事に候得ば、容易に引取兼可申。然其親之在所候而、引取介抱世話も仕得申者に候はゞ、納得之上引取、奉公稼等爲致可申候。右當時小屋に罷在候者之內、彌親類無之者は勿論之事、假令親類有之候共、引取世話介抱仕得候者無之者は、唯今之通小屋に可指置候。其內男共身健に而、農業等仕得候者可有之、左樣成者奉公人不足成御郡方より拜領仕、下人に召置度候はゞ、願次第可被仰付候。尤拜領仕候上、用事に立兼候者を暇遣候儀者勝手次第に候。

尙更此儀者相調理候上、人數等追而可申談候。
右都合七箇條之趣、御用番に相達候處、夫々可申談旨御申聞候條、被得其意、一統不相洩樣可被申渡候、以上。

乙卯九月

笠間九兵衞
青地七左衞門
高畠五郎兵衞
小寺武兵衞
中川四郎左衞門
成瀨左近

神保縫殿右衞門殿
楫喜左衞門殿

猶以瘋癩者、先年より入不申格に候故、以後迚も尤其通に候。爲念申達候、以上。

十月二日。小松詰馬廻の士中に學問流行するを以てその講師たる者の件を議す。

〔筆のまに〳〵〕

十月二日

一、小松御馬廻、近年金澤に學校被仰付候以後、學問にむかひ候處、學風混雜仕候間、學校講釋仕人々之內、暫充小松へ被遣候歟、又は小松町醫者之內相應講讀等仕候者御呼寄、學風正敷候ニ而其者へ相學候樣被仰渡候とも、何れとも御僉議有之樣仕度旨、今日牧昌左衞門申候事。

十月五日。能美郡上吉谷村肝煎八右衞門。同村百姓淸八後家てう二人篤行を以て賞せらる。

〔御用雜記〕

能美郡上吉谷村肝煎八右衞門儀、篤實者に而、近鄕にも感服仕居候者に付、加州郡奉行手前に而賞美として、鳥目十貫文遣度旨。且又同村百姓淸八後家てう儀、夫におくれ候後、入聟之儀一圓其申入候へども、聊存念無之、對亡夫實意を盡、暨耕作方出情仕、幼少之せかれ致養育、都而所行之所稀成者に付、從御上御賞美之儀右奉行より相願候付、僉議之趣申上、てう江三貫文可被下旨等、十月五日窺之處其通ニ御意。

〔加能越良民傳〕

淸八妻名長。吉谷村農八左衞門之女也、年十九。爲同邑淸八婦。生二子。昆曰淸助。季曰

本文の日附は誤りなるべし

叉助。天明六年淸八嬰疾。二子更力田事。長視疾之暇。傭人理由。淸八疾日漸。其十二月終。長時年二十五。淸八宗兄八右衞門等集議。將爲長再納贅。長不懌曰。今所議者非吾之願也。能惠而爲我。則有斯二子之在焉。伯也叔也。孱訓導之。使之力於畎畝之中。而奉夫子之後。又孱由是得全吾婦節母儀之行。則何德如之。是吾之所以日夜憂勞不忘於懷也。敢請以此謀之。八右衞門等垂泣。感長之言。遂從之。長每遇夫之祥忌。則必營庶羞。招致親族。族人諭之曰。今者主亡子弱。家不可以有所費也。長曰。善如所教。雖然祭之爲儀也。所以奉乎其先者也。若其忽之。則所以繼後之道。或幾乎熄矣。如草酌薄奠。吾將竭力營之。人善其言。各餉米錢資費云。淸助年甫十二。一日長命使適鶴來市。因爲炊精飯飯之。裹其餘以行。淸助呼弟。將頒與之。長曰毋。原是爲汝遠行也。而頒之。殆不支汝午食也。淸助曰。雖然。郎幼稚無知。偶所有之物。彼將欲之。乃頒餉之。聞之人嘆曰非是母也。弗可有是子也。農長所兵衞居于釜淸水録長志行告于府。寛政七年五月賜錢若干。

十月六日。前田治脩その子齊廣の今年十六歳となれることを幕府に上申す。

〔政隣記〕

十月八日。龜萬千殿御出生後、御虛弱に付いまだ公儀に御屆無御座候處、今般御丈夫に被爲

龜萬千は在金澤なり

成、今年御十六歳之段、一昨六日御飛脚を以御屆有之。右之趣今八日龜萬千殿にも被仰進、且今年御十四歳に候得共、御十六歳ニ御屆之儀も被仰進候事。

十一月三日。出羽の儒原改造をして大學を明倫堂に講ぜしむ。

〔年々まに〳〵〕

十一月三日

一、出羽國儒生原改造、今日於學校大學講釋被仰付、經之分不殘講、頭分以上勝手次第聽聞被仰付。但、改造儀浪人にて、當夏以來當國幷高岡に寓居、學校望ニ罷越候躰に相違候故、右之通被仰付、町旅宿に罷在、毎月入用金三兩充被下筈也。

十一月九日。前田齊廣をして廣式より表住居に轉ぜしむ。

〔御年表〕

寛政七年十一月九日御表御住居之儀被仰出。

十一月十二日。前田宗辰の五十回忌法會を天德院に執行す。

〔横山氏日記〕

十一月十二日　雨降

十二日は發喪の日にして、且つ實は十二月なるを歲末なるが故に十一月に繰上げたるなり

一、今日大應院樣五十回御忌御法事、於天德院一朝御執行に付、今朝六時過より、各御寺へ相詰候事。

一、施行米百俵、昨今於玉泉寺相渡り候由之事。

一、今日四半時御供揃に而、八半時前御出、天德院ゟ御參詣。山門下ゟ寺社奉行前田内藏太罷出、中廻廊通被爲入。中程迄御先立、御先詰之御近習頭村杢右衛門、夫より御裝束之御間迄御先立又五郎。階下ゟ和尚幷安房守罷出、年寄中等階上に伺公、緣頰通り御裝束之間ゟ被爲入。暫有之、御香爐之火宜候段、安房守より又五郎ゟ申聞に付、其段又五郎より以村杢右衛門申上、追付御燒香被遊。其節客殿之内御左右知職等着座、御會釋有之。重而御裝束之間へ被爲入、和尚に罷出候樣可仕哉之旨、安房守申聞に付、又五郎より村杢右衛門を以相伺候處、其通与被仰出候付、御簾爲卷上、和尚被罷出、安房守誘引、白銀十枚御時服被下之。右頂戴、御禮安房守被申上、御意有之、安房守御取合被申上、退去。夫より御服立等被爲取、御下向之節和尚幷安房守階下最前之所へ被罷出、其所に而御蹲座。和尚へ御意有之、安房守御取合被申上、安房守へも御意有之、御請被申上。御先立最前之通、夫より寶圓寺へ御參詣、七半時御戾り之事。

御服立本の儘

十一月十四日。非人小屋に再收容する窮民の手續に關し通牒す。

「御郡典(一)

非人小屋より出て奉公仕居候者等、病人に成、主人等方に難指置暇遣候者、御小屋へ入申度に付御小屋へ罷越候處、送無之、小屋入指支候に付、送持參仕候樣小屋裁許より申渡遣し、重而出生所より送紙面請取罷越可申儀に御座候得共、差懸り申病人等に而、居在所に送返し候而者、彼是いたし候内病氣指重り致病死候而者、御助小屋被仰付置候御趣意にも相當り不申儀にも御座候間、先達而御觸付候紙面箇條之内無之而も、右樣之者は雇置候者或者召仕置候主人之村役人紙面に、出生所等之儀委細書譯、病人に而居在所江送遣候儀も仕兼候間、御小屋入被仰付被下候樣致度旨相調可申候。尤紙面十村奧書いたし指遣可申候。慈愛を以取捌之儀に候へ者、假令本文觸出之箇條的當無之而も、其儀は不指支候之間、此所致會得候樣十村等江可申渡旨、御算用場奉行笠間九兵衛殿被申聞候事。

右之趣私共よりも各樣江演述仕候樣申聞有之に付、如此御座候。夫々御順達、落着より御返可被成候、以上。

卯十一月十四日

宮崎藏人

林彌四郎

神保縫殿右衛門樣

栂　喜左衛門様

十一月廿七日。前田齊廣未だ痘を憂へざるを以て、家族に該病者を有する者の登城を遠慮せしむ。

〔政隣記〕

亀萬千殿いまだ御疱瘡不被成候に付、御家中之面々家内疱瘡病人有之候はゞ、三番湯懸り候迄は、金谷並二之御丸に罷出候儀遠慮可仕候。且又御番人等は御目通に罷出候儀相扣可申候。

一、疱瘡病人は相見に候日より三十五日過候者、肥立次第罷出相勤可申候。右之通被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配にも相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十一月二十七日　　奥村左京

別紙之通可被得其意候、以上。

十一月二十七日　　本多安房守

十一月廿九日。鶴見平八・林慶助二人明倫堂助教を命ぜらる。

〔文化雜記〕

寛政七年十二月

一、奥村河内守殿家來給人鶴見平八、今枝内記殿家來林慶助兩人、御用有之御呼出置被成候間、私共内誘引指出候樣御用番左京殿被仰聞、則私誘引指出候處、御年寄衆等御列座に而、別紙寫之通左京殿被仰渡、兩人共寺社奉行支配被仰付候。依而前田内藏太ゟ引渡候處、右内藏太誘引、私指引に而服改、兩人共當座之御禮申上候事。

但、兩人共御儒者に被仰付候事。

〔筆のまに〳〵〕

十一月廿九日

拙者は奥村尙寛

一、拙者家來儒者鶴見平八儀、御用有之候間、追付二御丸へ罷出候樣可申渡旨、御用番より以紙面被申聞候付、添使者を以二御丸ゟ指出候處、新知九十石に被召出、御儒者に被仰付、學校助教被仰付候段、御用番申渡濟候上、御禮御用番ゟ申達。

但、平八當座之御禮上下に改申上。今枝内記家來儒者林慶助も二十人扶持に被仰付、平八同樣に被仰付。平八へは是迄五十石遣置候。慶助は七人扶持・金十兩被遣候由也。

十二月十一日。自今金谷御殿を金谷御屋敷と稱せしむ。

〔政隣記〕
十二月十一日、左之通於御横目所、御城代前田大炊殿被仰聞候段申談有之。
金谷御殿之儀、是以後金谷御屋敷与唱候様被仰出。

十二月十三日。金澤町奉行等、家柄町人越前屋次郎左衛門の御目見を許さるべき特權を回復せんことを稟請す。

〔國事雜鈔〕

三州浦廻米見　越前屋次郎左衛門

右之者先祖从古遍より祖父喜右衛門迄七代、御先祖様方護國院様御代迄御目見被仰付、御直書御判物等数通頂戴仕、于今所持仕罷在、代々町年寄役幷銀座役等相勤罷在候處、祖父喜右衛門儀勝手不如意に相成、居宅賣拂借家仕候に付、其後御目見不被仰付、中絶仕候由に御座候。然處次郎左衛門儀、當町荒町に家所持仕、役儀茂相勤罷在候間、御目見奉願度旨申聞候。依而右中絶仕候儀何故与相尋候處、喜右衛門儀謙德院様御代御目見奉願候へ共、家所持不仕候而者御目見不被仰付旨に而、其後家相求、兩三度茂御目見奉願候へ共、時節も可有之旨に而右願指留候様子に付、謙德院様御寺御參詣之節直訴仕候旨に而、於町會所日數三十日入牢仕、其後中絶仕、次郎左衛門父吉兵衛儀者御目見不奉願由に御座候。併右家柄之者に御座候

間、右願指出可申哉与奉存候に付御内談申上候。

則由緒書茂懸御目申候。御指圖次第表向願指上可申奉存候、以上。

十二月十三日

青地七左衛門

伊藤平太夫

長　九郎左衛門様

右願之趣に付、以來御目見被仰付候段被仰出之趣、翌正月十六日御書立を以被仰渡候付、別に表向願に不及候事。

三州浦廻米見　越前屋次郎左衛門

右之者先祖以來御目見被仰付候處、祖父以來御目見不被仰付、當時役儀茂相勤罷在候付、御目見奉願度旨申聞候付、先達而御達申上候處、被達御聽候處、以來御目見可被仰付旨被仰出候段被仰渡候に付、則申渡候處、難在仕合冥加至極奉存候旨私共迄申聞候、以上。

辰　正　月

伊藤平太夫　判

青地七左衛門　判

村井又兵衛殿

十二月廿六日。前田齊廣金谷御屋敷に移る。

金谷御殿を金谷御屋敷と改稱すべきことは十二月十一日の條に見えたり

〔横山氏日記〕

十二月廿六日　天氣吉

龜萬千殿今日金谷御殿へ御引移被成候事。右に付各布上下に改、於表方席、年寄中・御家老中・若年寄一集に、以三郎兵衛相公樣へ御祝詞申上。且退出より直に金谷へ罷出、龜萬千殿へも右御祝詞申上候事。

十二月廿八日、助教新井升平講釋を辭したるを以て差扣を命ぜらる。

〔袖裏雜記〕

神谷治部儀、學校方御用相湊候儀も有之、且同役和順不致趣共有之付、役儀可被除哉之旨。且又當九月廿二日、近思錄講師大島忠藏・石黑源五郎共不出、治部より新井升平在合候故講候樣申渡候處、下讀不仕難講旨斷、林慶助呼に遣候處、途中より腹痛之由に而斷。是は從升平内狀遣、斷候樣申遣候由。其紙面慶助より取揚、九里幸右衛門所持いたし内々出之。不埒之事に付急度指扣可被仰付哉之旨等、十二月廿六日委曲以紙面伺之處、此儀に付被聞召候品も有之旨に而、治部は思召有之付役儀被指除、指扣被仰付候段可申渡旨。升平は先達而易學等入情之儀被仰渡候處、等閑之躰被聞召候間、左樣之儀も書加へ入御覽可申旨、十二月廿七日御意。左之通調上候處、伺之通明廿八日可申渡旨被仰出。

前田修理等へ

新井升平

右升平儀、先達而願之趣有之、佳節・朔望之外毎朝五半時より九時迄學校へ罷出、易學等無油断相學、尤於宅も可致出情旨被仰渡置候處、其以來勤學等閑に相心得候躰。且當九月廿二日近思錄講釋日、講師等差支候處、升平乍在合下讀不仕旨に付相斷候首尾、彼是甚不應思召。依之急度差扣被仰付候旨被仰出候條、此段可被申渡事。

是歳、鳳至郡宇出津野役銀の上納増額を請うて許さる。

〔改作方年中行事〕

野役増銀之事

一、寛政七年宇出津領之内近年砂除松等爲植、只今に而者餘程雜木茂生立、御田地砂吹入不申、難有儀に付爲冥加當暮より野役銀二十四匁相増、是迄之役銀与都合四十三匁以來指上度段書付出候に付、本紙奥書左之通に而御算用場へ相達候事。

奥書

右之通野役増銀指上申度段願上候條、御聞届被成、當暮より取立之儀可被仰渡候、以上。

御用番名印

御算用場

右願扣に付、付札に而下もへ相渡、左之通付札。

本文野役増銀願之儀、御算用場へも相達承届候條、當暮より可致上納者也。

何何月　　役名連印

是歳、能美郡小松の鶴島屋七兵衛の女余所、金平屋佐平の女曾與、町人半兵衛並に篤行を以つて賞せらる。

〔加能越良民傳〕

小松賈人七兵衛（家稱鶴島屋。）女。名余所。以純孝見推郷里。家太貧。余所典身於織戸。竭力織絹帛。勤其課功（凡織戸畜女織絹帛。課一日之功立限。勤其餘者別受其直賃也。）之餘。以育養父母。父沒。余所力不能營葬。舊時所事之家及親舊。皆憫而賑給。殯殮頗備。自是余所入家養母。雖貧衣食無缺。郷族喜余所閑雅貞正。多爲其嫁者。余所以母老皆不肯聽。母聞而諭之曰。汝有善家。宜不可失時。如我之養。亦有汝之姉在焉。莫以我之故也。余所故曰。未欲適他也。愈益承事不怠。寛政七年。街令召余所爲優賞。

〔加能越良民傳〕

曾與者。小松賈人佐兵衛（家稱金平屋。）之女也。僑居東街。（在于小松城下。）父母旣老。偕不能營生。曾與獨織紝

受賃。以育養父母。寸陰分晷。無徒過也。以故爲父母之外。絶无出門戸。人多不識其面者。父及後母深感其篤孝。晨昏相昵。談笑歡娯。如不識貧窶者。寛政七年街令召。畀錢若干賞之。

〔加能越良民傳〕

半兵衛居于小松。沽魚以給。事母孝養不遺餘力。每出未嘗有告其所之。其出也。途反戒婦曰。今日所進于母宜某物。而出。旣復反曰。庭有薪木旁午。速不收。恐或令母躓焉。如此至于再至于三。其顧念母皆此類也。家遵之。教孝成風。婦及子弟幼稚。亦皆愛護老嫗爲心也。半兵衛嘗轉商宿湆佐見。(能美郡)半夜火見。在于小松城之方。因促裝甚急。同宿之人曰。止矣。夜闇不宜獨行。吾爲子苦危之。且未詳火所。借令小松火。相距遠矣。行且弗及救焉。盍待詰朝。半兵衛思母之情弗能已。乃起。松林三里餘。冒黑夜而達。半兵衛服賈也。賣買尙義方。嘗抵濱海。遇漁者來賣鯷。半兵衛定其價。別與錢若干。人問其故。半兵衛曰業已擔至。不可沒其力也。其廉義如此。寛政七年街令與錢賞之。

是歲、能美郡三坂の農與三左衛門孝行を以て賞せらる。

〔加能越良民傳〕

能美郡三坂邑農與三左衛門。孝于二親。家素貧。年十七。喪父時貲財窮屈。多所負債。因乃損家及田地。以分償。又典身同邑總左衛門爲奴。邑俗使事奴僕。月耗五日爲休暇。與三左衛

門以此日僅耕種。育養母。年二十八。欲以父嘗所賣故主總左衛門田請買之。總左衛門以與三左衛門舊忠勤之故。輒聽其請而亦不收其價云。與三左衛門隣家有女。母欲爲與三左衛門納之。及娶婦亦孝順。事姑甚謹。生一子。亡幾死。親舊勸繼室。與三左衛門謂。苟不識其人而納。如有不悅于母。而一旦離婚。不特病吾家。亦且辱人之女。吾所不欲也。不果。母年老多病。與三左衛門自是雖有事之利。莫宿于外。母疾日漸。時冬時寒甚。寢具不全。寒夜輒安母足於己腹上温之。母痛不欲生。一日謂與三左衛門曰。大命曷爲斯。殘喘餘息。徒累若爾。與三左衛門流涕而對曰。孺人隆恩之亡極。肝膽塗地。安得報萬一。請勿出斯言。母歿。與三左衛門哀慟頓仆、水漿不入口者數日。隣族慰解之曰、順死愈於逆生。且子於生養無不盡。尙何負愧。又宜節哀攝生。曰。吾於母在時。欲得一絮衣。而力不能。罪何言。豈吾心之所能盡乎。聞者涙下。子與三年十三。方祖母疾篤。撫視服勞。無出戶。人皆稱傚其父而然也。農長孫助具以告。寛政七年郡令深異賞。畀錢若干緡。

寛政八年

正月朔日。前田治脩金澤城に年頭の禮を受く。

〔政隣記〕

丙辰朔日、君上今朝御熨斗目・御半袴被爲召、於御居間大福御茶・蓬萊、夫より三献之次第

御熨斗三方　御雜煮　御吸物　御土器三方

長柄御銚子　長柄御提　御取肴三方

右段々上之、御祝相濟順々引之。畢而服紗御雜煮上之、最初之御熨斗三方与引替之。御祝相濟、二汁五菜之御茶受、濃茶等迄上之。御給仕御奥小將勤之。

但、二日・三日朝服紗御雜煮等上之。

〔横山氏日記〕

正月元日　雨降

一、年寄中等六時過より段々登城之事。

一、四時前檜垣之御間に御出、御見立石野主殿助。左之通御禮、御奏者番替々披露。

年寄中　三郎　御家老中　若年寄

一、龜萬千殿年頭御禮被爲請候筈に候處、龜萬千殿少々御眩暈之氣味に被爲在候に付、今日御禮不被爲請候事。

正月三日。前田齊廣の病水症と決す。

〔筆のまに〱〕

正月三日

一、亀萬千殿此頃御熱有之處、御水痘に相極り候由、今日被仰出。

但、天明四年に御水痘被為濟候付、御僉議有之候處、其節内藤宗安も一度罷出相診候。其時分御醫者中診察之處、御痘と申者、御水痘と申者と半分々々にて分り不申、宗安も御痘之樣に診候へども、慥に診得不申候。御藥は魚住道徹にて、是も輕き御痘之心得之御藥指上候。右之通不決故、泰雲院樣伺之處、御水痘と御治定被仰出、御水痘に極り候。此度者御水痘に相違無御座候。但醫書にも、水痘二度いたすと申事は無之候。疱瘡者濟候而も、又家内痘病人看病などいたし、再び發し候事も書物に見申候。左候へば最前は御疱瘡にても候哉と申候由也。右に付伺御機嫌之儀、先例しらべ候處、天明四年之時は、被仰出候即日罷出候而、御酒湯之御祝儀に罷出候へども、今日は三箇日之事、且御嫡子樣とは御樣子も違候事、其上一度伺御機嫌に罷出候事に候へば、明日可然と示談極る。

正月十日、前田齊廣の水痘癒ゆ。

〔筆のまに〳〵〕

正月十日

一、亀萬千殿今日御酒湯に付、各退出直服紗小袖・布上下着用、金谷に罷出恐悦申上候處、

御ついし被下候。

但、相公様には恐悦不申上候也。

正月廿六日。防火に就いて注意を促す。

〔政隣記〕

火之元之儀、随分嚴重相心得候様、御家中を初末々至町家に至迄、不相洩様一統可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配にも相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之通り可被得其意候、以上。

正月廿六日　　　　村井又兵衛

別紙之趣可得其意旨、安房守殿より例文之御廻狀有之。

二月四日。この日以後前田治脩諸所に放鷹す。

〔政隣記〕

二月四日、廣岡筋御放鷹、御獲物鵰一羽。六日大豆田口より野町筋同斷、御獲物無之。七日大豆田口同斷、鵠・鶴一宛。十三日大豆田口より堀川口へ同斷、御拳に而鴨二羽・小鴨二羽御打留、鵠一羽御射留、雉子一羽。其外御次鷹等に而御獲物數十羽有之。

二月十一日。前田治脩遊獵して河北郡横枕村に鶴を獲。

〔横山氏日記〕

二月十一日　雨降

一、明十一日九時之御供揃に而御鷹野、御出口大樋口町端、往還森下村迄御出被遊、同所十村方御小休に而、夫より大場村・瀬木村領御廻り、うるし橋御越、田中村・高柳村領御廻被遊、淺野村より御戻り可被成旨、以才兵衞被仰出候事。

野間御往來御道程四里計。

一、右御出に付、若年寄御供に不被召連旨、善左衞門を以被仰出候事。

一、右御出之段御横目よりも相屆候事。

御獲物左之通り

御鐵炮

一、一つ　袖黒　河北郡横枕村領

二月十四日　天氣吉

一、此間御打留之鶴、望次第拜見被仰付候段、帶刀を以被仰出候付、年寄中・御家老中・若年寄、御居間書院三の間へ罷出拜見。畢而御禮之儀、帶刀迄申述候事。

〔政隣記〕

二月十五日九時過より宮腰口ゟ御放鷹御出之處、風有之候に付半途より御歸。十八日大豆田口御放鷹之處、御獲物無之。廿二日松任筋へ同斷、鴈一羽御射留、小鴨一羽御拳。廿三日田井口同斷、御鷹指雲雀一羽竿に而刺之。

二月廿二日。窮民の一たび非人小屋に收容せられたるものに證票を與ふることを定む。

寛政七年十一月十四日參照

〔御郡典〕

非人小屋に罷在候者之內、力附達者に相成候者は爲致小屋出可申筈に候得共、當時之定に而者、右達者に相成候者致小屋出、奉公在附候上、病氣等に相成、不得致奉公族に至り、重而小屋入相願候とも遂紙面可指出者無之に付、召仕候主人或者請人に相立候者之手に附候樣相成候。依之に奉公相望候者も、小屋出不得仕躰被申聞候趣、令承知遂詮議候處、右爲奉公致小屋出候者には、先達而御算用場より各ゟ被相渡置候燒印を木札に押、裏に其者名前・歲附相記、可被相渡候。追而其者病者に成、不得致奉公族に至り、重而小屋入相願、右燒印札致持參候はゞ被相糺、最初致小屋入候者に彌相違無之候はゞ、小屋入可被申付。將亦右爲奉公致小屋出罷在候內、自分に家相求、或は養子・入聟に相成、家持等に相成候はゞ、右印札小屋ゟ

持參返上仕候樣、急度可被申渡候、以上。

辰二月廿二日

小寺武兵衞
伊藤平太夫
青地七左衞門
笠間九兵衞
成瀨左近

非人小屋裁許與力中

當時非人小屋に罷在候者之內、力附候者奉公相望候ても、一旦致小屋出在附候上、病者に而奉公難相成族に至り候而者、請人等手に附可申事故、知音之者に而も請人に可相立者有之間鋪。依之ゝ遂詮議、右族之者重而小屋入不指支樣相極、別紙之通小屋裁許與力ゟ申渡候條、前ゝ人柄致承知居申者は、右重而請人に相立候樣に与改候。且亦右致奉公罷在候內、自然取逃欠落等仕、右印札を以小屋ゟ來、小屋入願申者も可有之哉。左樣之族有之候而も、於小屋に者難相知事に候間、是等之爲締方与、右請人に相立候者又者召仕候主人手前ゟ、右印札預り置候樣に与存候。將又奉公中致病死候はゞ、請人等より右印札小屋ゟ可相返候。右之趣御支配一統不相洩樣御申聞被成候樣いたし度候。爲其如此に御座候、以上。

辰二月

小寺武兵衛
伊藤平太夫
青地七左衛門
笠間九兵衛
成瀬左近

神保縫殿右衛門殿
栂　喜左衛門殿

二月廿六日。物頭並土肥庄兵衛虚事を傳ふるを以て指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕

二月廿六日江戸御廣式御用物頭並土肥庄兵衛儀、御國へ罷歸候樣、御留守居織田主稅迄從御用番被仰遣、則主稅申談に而江戸發、昨廿五日歸着之所、今朝御用番九郎左衛門殿於御宅、御横目指引左之通被仰渡。

役筋等心得違之趣有之に付、急度指扣被仰付。

土肥庄兵衛

右御咎之趣、役向心得違之趣有之。且又去年夏之比以來、高野山貯用之金銀數萬御借受、御

年表に寛政七年三月六日に係るものあるは誤なるべし

家中へ御貸渡可有之筈与之取沙汰追々相募、秋に至候而者、彌慥に相成一向相違無之、不日に到來抔与申事に而、其手當を以普請取懸り、或は右金銀到來之上者諸物高價に可成、今之内可然与之事に而兼々望之諸道具等相求（町人共は猶更右取沙汰を實事与心得、俄に金銀貸出し、高野銀借用次第可及返濟与之證文取受候者も有之由云々。）候人々も有之候所、畢竟虚説に而却而難澁に至り候人々増長。右起りは江戸在住御醫師（外科）關口道育を、江戸町人（俗にヶ樣之工面名な山師共云々。）之内より申僞、前金爲入用可受取工面之所、道育實与相心得、土肥庄兵衛御貸小屋に罷越申入候處、甚尤躰之趣共に付、庄兵衛も實与心得、内々御留守居織田圭税に茂申入候處、金澤表へも申迸等有之。右等に付東・北専之取沙汰与相成、庄兵衛今般之御咎此一件も籠れり与も云々。

附、庄兵衛急度指扣之儀、同年七月十二日御免許。

三月六日。前田齊廣、額直・袖留の儀を行ふ。

〔政隣記〕

三月六日、龜萬千殿御角入等御祝有之。

〔三壺御譜〕

三月六日、御袖被爲留。

〔筆のまに〳〵〕

三月六日

一、今日亀萬千殿御額御直し、御袖下御留に付、各出席之上、布上下に相改、相公様ゟ恐悦申上、退出在金谷御屋敷ゟ罷出、亀萬千殿ゟ御祝詞申上候處、年寄中一切・御家老中一切桐之御間にて御逢被成、（各帯刀之儘罷出候處、去年も記候通也。）退候上御のし被下之、頂戴之御禮高田新左衛門を以申上。但河内守・大炊御逢之節、退候時分不進退に成候故、其段同人迄申達、御噂も候はゞ宜申上候様申達候事。

三月九日。前田治脩、齊廣と共に石川郡粟ヶ崎に遠乘を行ふ。

〔政隣記〕

三月九日、九半時御供揃に而同刻比御出、粟ヶ崎より宮腰へ御行歩、騎馬御供二十騎餘被召連、何も御近邊也。且亀萬千殿御同道之事。

三月十一日。前田治脩參覲延期を請ふ爲飛脚を發す。

〔横山氏日記〕

三月十一日　天氣吉

一、左之通御道中方、圖書等より演述有之。

當十五日御發駕可被遊旨被仰出置候處、頃日之氣候に御觸、御持病之御疝積に而御腰痛強、

御難儀被成候。只今之御樣子に而者長途之御旅行無覺束候に付、御發駕暫御延引、御保養被成度思召に候。依而御用番御老中ゟ開番參上、御屆仕候樣、今十一日江戶表開番ゟ以早飛脚被仰出旨に候。此段可相達旨被仰出候。

右御發駕暫御延引儀、御道中奉行ゟも可被申渡旨被仰出候事。

三月十一日

三月廿三日。大聖寺侯前田利考參覲の途金澤城に登る。

〔横山氏日記〕

三月二十三日　天氣吉

一、飛驒守樣今般御參勤、昨日暮合此表御旅宿ゟ御着に付、御使者御近習頭村杢右衛門被遣候由。

一、飛驒守樣御使者御家老前田靱負登城、今日御登城被成候御禮等之御口上、御取次御奏者番横山大膳罷出候。御返答ゟ同人罷出申述候由之事。

一、今日四時過御登城に付、諸役人揃刻限五時、年寄中等布上下着用、五半時迄に登城。

三月廿四日。末期養子として年長又は遠緣の者を選定出願せざるべきを

諭す。

〔政隣記〕

付札、定番頭に

近來せがれ所持不仕人々、末期養子願置候節、親類等之内相應之者無之候得者、年増之者名跡相續相願、或續無之候而も年増之者相願候。兄或同姓或父方をぢ等は舊例も有之候。其外父祖之血脈續遠者等遺書に相願候而も、近く願之通与不被仰出候間、以來は右願方心得を可有之与存候。依之此段内證申聞候事。

辰　三　月

右今廿四日御用番玄蕃助殿、向寄に可申談旨被仰聞候由に而、定番頭御用番武田喜左衛門より例文之廻狀有之。

〔政隣記〕

前記三月廿四日に有之、御用番本多玄蕃助殿より定番頭御用番武田喜左衛門へ御渡、同人より傳達廻狀有之候、せがれ所持不仕人々末期養子年増之者願方之内、文段に父方をぢ等者舊例も有之候。――此等之字いとこに茂當り可申哉、をぢ無之者は父方いとこ迄は苦ヶ間敷儀与相心得罷在候旨、御馬廻頭御用番多田逸角前月廿六日執筆竹中伊兵衛を以玄蕃助殿へ御尋

申置候處、今月十五日右伊兵衞を以、右之字いさゝに決定して被仰渡候趣に而も無御座候。をさゝ之外に而も其系當により可被及御指圖候間、左樣に相心得罷在候樣に与被仰聞候に付、爲承知逸角より同役中に茂以廻狀申談置候事。

三月廿八日。前田治脩、齊廣を伴ひて石川郡宮腰に遠乘を行ふ。

〔政隣記〕

三月廿八日、龜萬千殿御同道宮腰に御遠乘。騎馬御供二十人餘被召連。但鰯網曳御覽有之。

三月廿八日。馬廻組遠藤次左衞門の娘若黨の爲に誘拐せらる。

〔政隣記〕

三月廿九日、定番御馬廻御番頭兼御儉約奉行遠藤次左衞門娘、昨廿八日夜より行衞相知れ不申に付、所々相尋候得共相知れ不申處、御大小將横目神田十郎左衞門家來若黨渡邊幸助（當月四日迄次左衞門方に罷在候者に而、此間中次左衞門方へ罷越、尋方取持等致候由云々。）所爲之躰に相聞え、疑敷趣有之に付、四月二日相糺候處及白狀。則十郎左衞門方若黨部屋之内敷板を外し、其下に入置、如元板疊を並べ敷、其上に長持を据置候段等委曲申顯候に付、則同夜次左衞門一類等罷越、右娘連れ來り先縮所へ入置之。右若黨幸助、十郎左衞門より貰請、翌三日夜令手討候。右等之趣に付先自分に指扣可罷在哉之旨、同月四日頭定番頭迄指出、則御用番大炊殿に相達候處、其通与御指圖有之、相愼罷

在候所、翌年四月十三日右一件取噯方御定も有之儀之所、不心得之至に付、役儀被指除、逼塞被仰付。頭不破和平（定番頭也）儀も、支配次左衛門取噯心得違之處一段宜与存候段、御意も有之處不心得之至、別而重き御役も相勤候處不心得之至に付、同日指扣被仰付。

三月。悪酒改良の方法を傳授すと稱する者若し入國せば之を捕縛すべきことを諭す。

〔政隣記〕

丹後・丹波邊より八手合に分れ諸國へ出、於國々酒屋・醤油屋・味噌屋に立寄、少々之代料を以悪酒等忽直し可遣段申入、薬味を入、二三日立候得者宜き酒等に相成、右酒等致飲食候者は五十日計立煩出し相果候。出雲國邊に而者八百人計相果候由。此間越前今庄驛に而も右族之者酒屋へ立寄、悪酒直し候處、雲州等之儀相知れ候に付、一統觸有之、右直し候賣酒指留に相成、敦賀に而者右同類兩人召捕候處、及白状露顯候。府中旅籠屋綿屋市太夫与申者方に右躰之者泊り、加州に參り候段申候由。越前筋に爲御用指遣置候兼役方手先足輕共、右等之趣承り告越候に付、夫々申渡、役先に而無之所々之分は、早速支配人に可被仰渡旨、御用番に紙面差出候處、夫々被仰渡有之、一統御觸も有之、左之通。

但、損じ酒も直し候由。右に而染候衣類着用候得者、是又煩出候由云々。

付札、定番頭ゟ

丹後・丹波之者之由に而、八手合諸國ゟ罷出、於國々酒屋等へ立寄、惡酒忽直し可申段申入、藥味を入、二三日立候得者宜き酒に相成、右酒を呑申人は、五十日程立候得ば煩出相果申由。此節越前致徘徊、御領國へも入込可申段相聞候に付、右躰之者立入候ば召捕、及斷候樣夫々申渡候に付、爲心得申達候。

右之趣被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配ゟも申達候樣可被申談候事。

右之通一統可被申談候事。

辰　三　月

三月。勝手方役所を廢し改作奉行の兼職に復したるを以て十村等に配下村々の監督を怠らざるべきことを諭す。

〔司農典〕

諸郡之内土地兎相に不應村々、古來致難澁候躰に付、年季引免等有之、且亦不作御償米之外御取救等も有之候得共、不拘豐凶年々難澁深相成、諸納所も調兼申躰之村々致出來候に付、近年石川郡貧村御仕立をも被仰付候儀、其方中承知之通に候。勿論貧富者時運に而、古來諸

稼相衰、或者山川年々水損變地等に相成候村方致衰微、無據及難澁申村々も有之候得共、左而已右等之變地も無之及難澁に申村方も可有之哉に候。是等畢竟商賣遊食之徒に習ひ、農事を疎に産業を怠候より、いつとなく地味も衰候故、假令相應之年柄も作物取劣り、及難澁に申族も可有之与存候。尤是等之趣其方中常々見聞有之事に而、無油斷勢子も可有之儀に候得共、太平に住候得者、四民共次第職業怠慢いたし候儀古今常理に而、別而會得有之度事に候。就中近來御仕立をも被仰付候村々無程難澁へ立戻り、御仕法之詮も無之場に至り候而者、其方中幷拙者共迄本恐入儀に候條、第一石川郡之内御仕立被仰付候村々等、向後荒起・植付・草拂見分之外、臨時に拙者共致廻村、是迄難澁之由來をも相考、且成立方之否をも及察問度候之間、其方中も可有其心得候。其外諸郡引免等之儀も、古今村柄善悪之違も可有之儀に候之間、尚更寄々其方中了簡をも承り、何与欤有餘を減じ不足を補ひ申樣之取捨も有之度与存候。右之趣改而不及申渡にも事に候得共、今度御勝手方役所御指止、古來之通改作所江打込兼帯に被仰付、尤改作方之儀是迄之通拙者共江御任せ被遊候段被仰出も有之候條、猶更改作之御法無違失相守可申儀専要之事に候。右之通今度御勝手方打込に被仰付候に付、若役所向相改、新規之詮議方有之樣末々心得違之者も可有之哉与、右等之趣其方中迄申談置候事。

辰　三　月

改　作　奉　行

四月二日。藩侯放鷹の際若年寄の供奉する件に關し先例を調査す。

〔横山氏日記〕

四月二日　天氣吉

一、當御參勤御道中、高岡迄御鷹野有之に付、圖書・帶刀若年寄兼帶之儀に候間、野間御供可相勤儀にも候哉と、爲相しらべ候處、前々は於御道中御鷹野之節、若年寄野先へも御供相勤候へども、寶暦十三年九月於金澤從泰雲院樣、御鷹野之節若年寄御供御用捨被遊候旨被仰出、金澤に而者御供無之候得ども、御道中之儀譯而被仰出も見え不申候に付、御道中日記右十三年以後相しらべさせ候處、明和六年御歸國御供松平大貳相勤候時分於三日市、今日御鷹野之内、御本途迄御出を御待請仕、一統之通御供可仕儀に候へども、風邪未何々与有之候。左候得者、野先へ御供は不相勤趣に成居候体。別に伺等は無之候へ共、於金澤御用捨に候へば、御道中とても同樣之儀故、右之通与被相考候。當御代に成、最前若年寄御鷹野御供に召連候處、當春御供之儀、重而被仰出候迄は御用捨被遊候旨被仰出候間、今般御道中御鷹野之節、圖書等野間へは御供不仕儀与相心得罷在候。猶更一往相伺候樣、主殿助へ申入候處、則申上候へ者、不及御供旨被仰出候由、同人申聞候事。

但、當御代御道中、御鷹野は寛政元年・同五年御歸國之節迄に而、其節者土佐守・大炊迄御供故、其例無之事。

四月二日 幕府加賀藩に熊膽を獻納すべきことを命ず。

寛政八年四月朔日の御日附にて、明二日四つ時大手御番所後御勘定所へ可罷出旨、御勘定奉行柳生主膳正殿より御剪紙到來、不破平左衛門則御勘定所へ罷出候處。

〔江戸公用諸式記〕

一、加賀國熊膽

右之品先達而見本被差出候處、他國出産に相勝氣味宜候に付、爲藥御用可被指上候。尤年により捕獲候儀有之候由に付、年々指上候に不及、隔年又者三ヶ年目に而茂、捕獲次第數三つ宛指上、拂底之節者一つに而茂可被指上候。

右之段可申達旨、松平伊豆守殿被仰渡候に付、相□え申上候樣、柳生主膳正・肥田十郎兵衞申達す。

辰 四 月

一、熊膽御差上候事、寛政八年より初まり隔年と申事、右に記す如し。八年にとれ不申に付、九年之春御屆有之上、九年に熊とれ候に付八年分九年に上る。

示談とは藩の使者牧某となり

一、十年順年也。三ッ御國より參り、御家老衆被相渡、御勘定所に指上候。

一、寛政十二年順年也。此年三つ到來。

一、享和二年順年也。此年茂三つ上る。

一、文化元年順年也。今年は熊拂底故、一つならで不被得上候に付、御家老中御申渡之趣在之、大地氏示談之上、御勘定奉行柳生主膳正殿に罷出候而、役人岡本彌九郎へ懸合候は、加賀守より隔年に指上げ候加賀國熊膽之儀、先達而被仰渡候通、拂底之節は二つにても一つにても上げ候樣に被仰渡候所、今年は熊拂底に付、漸一つならで無之候。先達而被仰渡も在之儀に候間、一つに候得共近日指上申候。此段御届申置候段相演候。

四月三日。十ヶ年皆勤の諸士に賞詞を傳ふ。

〔政隣記〕

四月三日、寛政六年已來書上有之候十ヶ年皆勤之人々へ、於御次今日石野主殿助等を以、一段之儀被思召候旨之御意有之候事。

四月四日。前田治脩、齊廣を養嗣子たらしむるも簡易に待遇すべきことを命ず。

〔袖裏雜記〕

左之御親翰四月四日被渡下。

龜萬千事養子嫡子に相願候より官位被仰付候迄段々之次第、佐渡守之通に而は有之間敷儀に存候。於公邊にも、先若君樣とは當若君樣之御取扱格段輕き御樣子に候。左候へば此度は隨分手輕く、成限り略式たるべく候。財用不足無之節にても、右之次第は有之儀候處、當時は猶以之事候條、豫而夫々僉議被致、追々可申聞事。

四月六日　前田治脩金澤を發して參覲の途に就く。

〔政隣記〕

四月四日、明後日就御發駕に、去朔日御用番大炊殿依御廻文、今日四時過より九時迄之内、人持・頭分布上下着用登城、伺御機嫌之御帳に付、於御帳前前々之通、御留守中火事御定書披見、退出之事。

〔政隣記〕

四月六日、御見立揃刻限六半時、御發駕御供揃五時に而、四時過御發駕。今夜今石動御泊。

但前々之通、改方小頭已上布上下着用、役所ゟ罷出候事。

附、御日圖り之通十八日江戸御着。

〔御年譜〕

御供御家老前田圖書・大音帶刀、御步頭和田源次右衞門。後詰園多太夫。

〔御參勤御道中日記〕

六日	金澤	津幡御中休	今石動御泊
七日	今石動	高岡御中休放生津・堀岡・大門巡り	高岡御泊
八日	高岡	下村御中休	魚津御泊
九日	魚津	三日市御中休	泊御泊
十日	泊	青海御中休	糸魚川御泊
十一日	糸魚川	名立御中休	高田御泊
十二日	高田	關川御中休	牟禮御泊
十三日	牟禮	丹波島御中休	榊御泊
十四日	榊	海野御中休	追分御泊
十五日	追分	坂本御中休	板鼻御泊
十六日	板鼻	落合新町御中休	熊谷御泊
十七日	熊谷	鴻巣御中休	浦和御泊

十八日　浦　和　蕨御中休　江戸御着

四月六日。大聖寺町に火災あり。

〔政隣記〕

四月六日、暁七時より、大聖寺町家魚屋五郎兵衛与申者家より出火、大家共百二十軒餘焼失、朝五時前鎮火。

四月八日。諸橋權進等、前田齊廣の仕舞稽古御用を命ぜらる。

〔手役者召抱一件〕

四月八日　　諸橋權進

波吉宮門

右爲萬千殿御仕舞御稽古御用被仰付可申渡旨青木與右衛門より申來、申渡候旨町奉行紙面出之。

四月廿五日。前田治脩、紀伊侯徳川治貞がその女鑒姫と前田齊廣との縁組を承諾したることを告ぐ。

寛政七年二月廿二日及び本年八月十五日の條參照

〔袖裏雜記〕

龜萬千殿ゟ鑿姫樣と御緣組之事、猶又被仰達候處、御許容之趣左之御親翰五月五日到來。

鑿姫事、龜萬千ゟ緣組之儀、中納言殿許容有之、內約致治定候。則芳村書付內々相達候條、

被致披見、房州幷家老中ゟも可被申聞候。誠以大慶、各にも可爲安氣と存候、以上。

四月廿五日

年　寄　中

四月。公事場に於ける規程その外後例となるべき諸事を記錄して上申す。

〔公事場御條目書〕

一、公事場留帳之儀寛永年中より御座候處、萬治年中迄は虫指等に而損失有之、不具物に御座候。寛文之比より帳面慥に御座候得共、右年限より元祿初迄は、式日每御用頭書迄調申事故委敷儀は無御座候。尤言上留帳は委敷御座候。元祿四年三月より奉行御用番宅に而之日記帳出來、夫より以來都而御用方不殘留帳に記、一ヶ月一冊宛に仕置候。古き被仰出等は書物甚混居申、御土藏之內に有之品々取出候處、相損居申分も御座候。此度夫々類分に爲仕、向來損不申樣に爲仕置候。今般書上候品々は、惣而之留帳豎書き物類不殘相しらべ書出候得共、自然帳面に附洩又損じ物に相成候內に而、御定等相知不申儀も可有御座哉与奉存候事。

右公事場御定、其外後例に可相成品々、帳面に記上之申候、以上。

寛政八年四月

小幡式部
原九左衛門
藤田主馬
前田内藏太

五月朔日、前田治脩登營して參覲の禮を行ふ。

五月朔日御參勤御禮被仰上。

〔三壺御譜〕

五月朔日、松平加賀守治脩參覲す。

〔續德川實紀〕

五月八日。本月朔日前田治脩登營して參覲の禮を行ひたりとの報金澤に達す。

〔御留主諸事〕

五月十日

一、前月十八日御着府之處、御脚痛被遊、御老中方御廻勤御延引之處御快、同二十八日御廻勤、同二十九日上使太田備中守殿を以、御參勤に付被爲蒙上意、翌晦日御老中御連名之御奉書到來、當朔日御登城御參勤之御禮被仰上候御樣子、年寄中等に御書同日發足、町飛脚中飛脚歩に而、一昨八日到來に付、今日各不時出席、例之通常服に而右表方於席拜戴之事。

五月八日。妻の死後妾腹に出生したる男兒、亡妻の養子たり得るや否やの伺に關して指令す。

〔政隣記〕

妻死去已後妾腹に男子出生、此男子を亡妻之養子に相立度旨御達申候者、御聞届可有御座哉。右御聞届之上は、母方之親類服忌如何可有御座候哉。

有澤故才右衛門妻死去已後、有澤數馬儀(御馬廻組也。)妾腹に出生之處、右亡妻を養母に相立、親類服忌請候趣に而、由緒帳にも調指出候間、右は養母に難相立儀与存候得ども、是迄僉議區々にも相聞得候に付、右之通相伺、則數馬組頭宮井典膳より、御用番左京殿に執筆小竹政助を以、今月五日御尋申置候處、右に養母に相立候儀は無之筈之旨、政助を以同月八日左京殿被仰聞候事。

右爲承知、典膳より同役中に以廻狀申談候旨、任承記之。

今月は五月

五月十日　漁業を奬勵して鰤網等の數を減少せざらしむべきを諭す。

〔加藤氏日記〕

近年鰤網等、當時下し網・退轉之網御調理も有之候處、其後起歸之網は無之、退轉網統多有之候。浦方獵業之儀は、古來より地方改作方同樣、裁許之十村共無油斷勢子入爲致出情申筈之處、退轉之網容易に永屆申儀は有之間敷儀に候。然處近年網役・舟役ども、出來少く退轉多有之候間、只今迄退轉之分も精誠遂吟味爲起歸可申候。もしまた其村網致仕入者無之候はゞ、隣村より相應之者見立起歸之儀可申渡候。假令ば餘村より網仕入候而は、其村之爲に不相成樣申立儀も可有之候得ども、於其浦魚類多捕揚候得者、自ら潤色にも可相成儀に候。近年網數減少致し候故、御城下魚類拂底候。且又尿物も高直候間、網數・舟數出來之儀、浦方裁許之十村無油斷遂詮議、出來之儀可申渡候。是迄有來候獵船にも、借舟或農業舟等申立、擢役物洩居申分も有之躰風聞有之。惣而散小物成取立方猥に相聞候間、嚴重遂吟味可申儀候。此段浦方裁許之十村幷御扶持人共へも嚴重可被申渡候。別而近年不獵に而、浦方村々及難澁候段も每度申立候儀も有之候。然處網數致減少候而は彌可致困窮儀に候。假令不獵之年柄にも、網數有之候へば其内には捕揚候網可有之事に候。臺網・引網とも退轉いたし候而は、雇水子等之稼無之致困窮候儀眼前之事に候。御上之御損失、下々之困窮に相成申儀に候得

者、甚不輕儀に候之條、能々此趣相考少も無油斷網仕入、網統場起歸之儀遂吟味候樣、裁許有之十村共幷御扶持人共にも嚴重に可被申渡候。若又起歸之儀相願候とも、指障之儀申立、外網より指構申樣成儀有之、難相分り儀も有之候はゞ、双方書付當場に可被指越候。於當場遂詮議可申談候條、被得其意、早速夫々御郡一統可被相觸候、以上。

五月十日　　御算用場

神保縫殿右衛門殿
栂　喜左衛門殿

右之通申來候に付指遣之候、以上。

神保縫殿右衛門
栂　喜左衛門

能州四郡十村中

五月十五日。前田治脩の江戸に着したることを諸士に告ぐ。

〔政隣記〕

五月十五日月次出仕、御年寄衆等謁。其節御用番左京殿左之通御演述、座上之者恐悅之旨申述、四時前相濟。

但、拜聽迄に而御用番御宅に參出に不及、且左之寫同組筆頭前田兵部より、追而被相觸候事。
前月十八日御機嫌能御着、同廿九日上使太田備中守殿を以被爲蒙上意。當朔日御登城於御座之間御禮被仰上、殊に御手自御熨斗鮑御頂戴、前田圖書・大音帯刀御目見被仰付、重疊難有御仕合に被思召候由、以御書被仰下候事。

六月三日、小松城代等塩辛土藏の修理成れることを報ず。

〔御留主諸事〕

私共支配、小松御城中鹽辛御土藏及大破候付、寛政二年御屆申上、同所御作事方御土藏當分借用、右鹽辛入置申候處、頃日鹽辛御土藏御修覆出來仕候付、如最前鹽辛詰直申候條、右爲御案内如斯御座候、以上。

辰六月三日

不破新丞 判

田邊丈平 判

今枝内記様

本多頼母様

津田修理様

横山藏人様

前田圖書様
不破彥三様
西尾隼人様
大音帶刀様

各支配、小松御城中鹽硝御土藏、今般御修覆致出來候付、先達而同所御作事方御土藏へ入置候鹽硝、如最前右御土藏へ被致詰直候旨、當月三日紙面之趣令承知候、以上。

六月十九日　　　西尾隼人　印

不破新丞等兩人殿

六月七日。犀川・淺野川の川除に塵芥を捨つへからさる等のことを諭す。

〔政隣記〕

犀川・淺野川川除へ塵芥等捨申間敷趣等、御普請奉行阿部昌左衛門等より、前月廿四日御用番へ指出候紙面寫。

但、前々之通文段に付略す。

犀川・淺野川共今年殺生人多く、其内には末々心得違甚猥成儀茂有之躰に付、御横目足輕相廻、若右樣之儀於有之者、急度爲相咎候樣申渡候。且又兩川川除へ塵芥等捨置申間敷旨等之

儀ニ付、別紙御普請奉行出候故寫相越之候。右之趣前々申渡置候處、今以心得違之者ミ有之躰候條、已來猥成儀無之樣、組・支配之人々ゐ嚴重可被申渡候。組等之内裁許有之面々ハ、其支配ゐミ相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六　月　七　日　　　　　長　九郎左衛門

右今八日玄蕃助殿御廻狀を以如例到來。

六月廿一日。鷹司政凞、荻野元凱を介して更に前田齊廣との緣組を求めしむ。

〔筆のまに〳〵〕

六月廿一日

一、左之覺書家來千田庄太夫方迄到來。

關白樣姬君樣御儀、龜萬千樣ゐ御緣組之儀、先達而被仰込候所、御斷被仰進候。然所强而再應被仰込候所、四月下旬再度御斷被仰進候。然上ハ此上被仰込候儀如何に思食候得共、若關東之御振合を被思食御斷之儀に而茂可有之歟。左候得者、當春關東年頭使高橋兵庫頭被遣候節、堀田攝津守樣ゐ御聞合被成候處、如別紙於關東御差支無之段、御返答に御座候。定而

家來に與村
備寛のなす

御一存之御返答に而者有之間敷儀と奉存候。右之趣に而は、關東御差支は無之儀と奉存候。若又二條樣御釣合も被爲有候に付、自然此御方樣へ被對、如何に茂被思食候儀茂候はんか。此儀に御座候得ば、勿論御差支に不相成、二條樣より御口添茂被爲有候樣に可被成との思食に御座候。然共御國之御振合如何可有御座候歟と思食、未被仰込候由に御座候。何れに御家柄御懇望に付被仰込候處、右二箇條之儀に付御斷に茂被及候事に御座候得者、餘り御殘念被思食候との御事に御座候。

右之段御國御偏機有之、私儀、御存之上被仰下候儀に御座候へば、外樣と違強而御辭退茂難申上、其上近日には京都御屋鋪御役人中之うち、御殿ね御招被成候而、御內意茂被仰込度との御沙汰有之樣承り候得ば、不得止乍御內々右之段申上候。甚恐入候得共右之仕合故、被仰下候趣無據申上候儀に御座候。御昭察可被下候、以上。

五月廿四日　　荻野典藥大允

此叚書庄太夫より入內見候時、同席中へも及內談候上、難取次旨庄太夫より爲申遣。

六月廿二日。前田齊廣に對し鷹司政熈より申込みたる緣談謝絕を議す。

〔袖裏雜記〕

荻野典藥大允より、河內守家來千田庄太夫と申者へ、前々より心易文通もいたし候處、關白

樣御方樣、鶴萬千殿江御縁組之儀、御内々被仰下候旨に而、庄太夫迄覺書到來に付、相返候様可申付旨、河内守より六月廿二日内談、各存寄無之、其通に庄太夫へ申付事。

六月廿九日、天德院に於いて前田齊敬の一周忌法會を執行す。

〔政隣記〕

六月廿九日、於天德院觀樹院樣御一周忌御法事御執行、卯上刻出宅拜禮、階上横疊二疊目に而仕候事。

拜禮は津田政隣なり

七月廿一日、大小將高田牛之助詐僞取財の嫌疑を得たるも自ら取調を請はざりしを以て逼塞を命ぜらる。

〔政隣記〕

七月廿一日左之通被仰付。

御大小將　高田牛之助

去年七月五日於江戸表、岸本太兵衛方へ會所奉行野口左平次名前之僞狀持參、金子七兩かたり取候者有之、右紙面之手跡牛之助手跡に似寄申儀風說も有之候間、其節牛之助より嚴敷御吟味も可相願筈之所、ケ程重き儀を御吟味も不相願、不埒之趣に被思召候。依之逼塞被仰付。

御大小將　阿部波江

右紙面高田牛之助手跡に似寄候与申儀、波江より申出候儀證據も無之處を申出候。依之遠慮被仰付。

七月廿八日。河原山關所備付の鐵炮破損せるを以て交換を請求す。

〔横山氏日記〕

河原山御關所并御貸家渡之御鐵炮二十挺之內、十一挺御用立申候得共、殘り九挺之分甚損、御用立不申候。御鐵炮之儀は、御縮第一之品に御座候に付、其儘に難指置奉存候間、御修覆被仰付候歟、又は御取替御渡被下候歟、兩樣之趣早速御僉議御座候樣に仕度奉存候。

一、木滑・阿手等之御關所へは、御紋付雨袋前々より渡居申候得共、河原山には前々より相渡不申候。何卒此度御取替御渡之九挺之分迄に而も、御紋付雨袋、古物に而も損じ無御座候得者不苦候間、御渡御座候樣に仕度奉存候。河原山御關所は、外御關所与違ひ、冬中は御貸家之向に御番所構申候而、春に至雪消候得ば本御番所に構申候事故、其度毎に持運び申候故、雨降等之時分右皮雨袋御座候へば、御道具も損不申、且又他國者も往來仕候へば見入も宜鋪御座候間、何卒御僉議之上御渡御座候樣仕度奉存候、以上。

丙辰七月二十八日　河原山口留　河嶋一平判

今枝內記等八人樣

河原山御圍所幷御貸家渡之御鐵炮二十挺之內、九挺損御用立不申に付、取替相渡候樣被致度旨、先達而紙面之趣承屆、則御異風共許に申渡候條、可被得其意候。且又右鐵炮に御紋付皮雨覆、前々より相渡不申候得共、此度取替申九挺之分迄に而も、皮覆相渡候樣被致度旨、是又令承知候。此儀者追而遂僉議可申候、以上。

十一月十六日　　西尾隼人

河島一平殿

本年四月廿五日の條參照

八月十五日、金澤に於いて前田齊廣の緣談を變更したることを告ぐ、

〔袖裏雜記〕

八月十五日到來之御親翰左之通。

經姫殿事、龜萬千に緣談內約治定之趣、先達而申達候通候處、其後從中納言殿申來候趣有之、難任其意儀に付、此方主意之趣申斷、乍殘念外向に緣談內約可相極旨申達候。依而此度尾張殿養女琴姫殿事、龜萬千へ緣談內約之儀利倉善佐を以申達候處、許容之段被申越候。先以安堵之事に候。此等之趣前廉各了簡も可承筈に候へ共、隙取候而は首尾整候儀難計に付、不及其儀候。始末入組候事故、要文迄申達候。委細は横濱善左衞門より申達候樣申付候條、可有

承知候、以上。

八月四日

年寄中

尙々本文之趣、房州幷家老中へも内々可被申聞候、以上。

九月二日。前田治脩の養女藤姬歿す。

〔三守御譜〕

九月二日小石川御前樣御卒去。御忌日八月廿九日に御改。御產後御煩なり。御年實十九。順正院深譽妙智惠照大姉と號す。初法號晴雲院樣。同月御改號。九月十九日發引。十月五日靈骨讃岐高松に至り、盤若臺（一爲法然寺）に葬り、御位牌を高松淨願寺に建つ。

九月七日。前田治脩の養女藤姬重病の報金澤に至る。

〔御留主諸事〕

一、九月七日小石川御前樣御產前より御浮腫被爲在、御產後も御通じ少、種々御療養御座候而、御通じも被爲在候得共、元來御產後之御事故段々御指重り被成候段、前月二十九日江戶發足之早飛脚に傳附、圖書等より昨夜表方へ申來候事。

備濱甚左衛門より出候早飛脚に傳附遣候。

九月八日、前田治脩の養女藤姫逝去の報金澤に達す。

〔政隣記〕

九月九日重陽出仕、四時前御年寄衆等謁相濟。

但、左之趣に付江戸より之早飛脚夜前來着に候得共、無御沙汰當日御謁相濟候事。

小石川御前樣御氣色御滯被成候處、不被爲叶御療養、去二日御卒去之旨江戸表より昨夜中來候。依之爲伺御機嫌頭分以上之面々、今明日之内御用番宅迄可被罷越候。幼少・病氣等之人には以使者可被申越候。

一、普請者昨日より三日、鳴物等者來る十四日迄日數七日遠慮之筈に候。

右之趣組・支配之人々に可被申渡候。且又組等之内裁許有之面々には、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之通可被相心得候、以上。

九月九日　本多玄蕃助

別紙之趣可被得其意候、以上。

九月九日　本多玄蕃助

津田權平殿　　但急觸に付同組五人連名

小石川御前樣御法號　順正院樣

右御遺躰讃岐高松へ御移、今月十四日江戸御發棺、此方樣御附より物頭並安達彌兵衛・御用人等儀兵衛御供、爲御代香御小將頭野村伊兵衛罷越。

等儀兵衛本の儘

九月十九日。前田治脩幕府に齊廣を養嫡子たらしめんとの願書を提出す。

〔袖裏雜記〕

左之御書付、御先手武藤庄兵衛殿を以、御用番太田備中守殿に九月十九日被指出候。

養父故肥前守二男　前田龜萬千

當辰十七歳

私儀今年五十四歳罷成候處、實子無御座候に付、右龜萬千儀、私致養子嫡子仕度奉願候、以上。

寛政八年九月十九日　御名 御印 御判

松平伊豆守殿

戸田釆女正殿

太田備中守殿

安藤對馬守殿

加賀守養方弟龜萬千事、養父故肥前守二男にて、國許罷在申候。去年加賀守在國中、於此表嫡子佐渡守死去仕候以後、右龜萬千當分養子相願置申候。今年加賀守參府之上にも、右龜萬千儀致養子、嫡子仕度段、早速相願申度内存罷在候處、右養子相願候に付而者、彼是取しらべ向等も御座候而延引仕、今般右之通養子奉願候儀御座候。此段申上置候樣申付候、以上。

御名内

九月十九日　　恒川七兵衛

一、右御書付等、前方伊豆守殿幷奥御右筆近藤吉左衛門殿へ御間合、隨分宜敷旨御指圖有之外、何等之儀も不被仰聞也。然處同月廿四日夕、備中守殿より閽番御呼出に付、恒川七兵衛罷越候處、役人長瀧萩左衛門を以、左之御書付之趣被仰聞、御書付相渡。御承知之御屆、及夜陰候間明朝御屆可被成旨、萩左衛門申聞。右に付七兵衛儀内玄關へ罷越、右萩左衛門へ、何等之御趣意に而龜萬千出府之儀被仰渡候哉。可相成儀候はゞ御内々承知仕度趣申述候處、同役へ示談之上可及御挨拶旨に而、重而罷出、内々備中守へ詣候處、龜萬千樣今般御養子御願に付而、御出府之儀被申談候。先年敎千代樣之御時者御幼年之御事、龜萬千樣にはゞ御年頃にも御座候間、御出府無御座而者御願通相濟不申趣之旨、備中守申候段申聞候由、七兵衛よりも相調上候。右御書付左之通。

卷日之上、御名に
右當地に呼寄、着次第可被申聞候。

養方弟　前田龜萬千

九月廿四日。幕府前田齊廣の出府を命ず。

〔御年表〕
同年九月廿四日龜萬千殿御出府之儀、御用番太田備中守殿より以御書附被仰渡。
但、敎千代樣を御養嫡御願の時は、御幼年之事故御國に御出被成候儘、御願之通被仰出候得共、今般龜萬千殿には御年頃に候故、御出府無之ては御願通相濟不申由にて右之通なり。

九月廿八日。前田齊廣、尾張侯德川宗睦の養女琴姬と緣組を約す。

〔御年表〕
同年八月廿五日尾張大納言宗睦卿御養女琴姬樣と御緣組御內約之儀、御雙方以御使者爲御取替有之。

〔御年表〕
寛政八年九月廿八日御緣組御內約之儀、表向御双方より御先手衆を以て被仰合。

但、御家老を以御取遣可有之處、尾張樣御家老罷越候節、こなた御門大扉開不申に付掛合之趣有之、御先手衆を以被仰合候事に相成。

九月廿八日。御馬廻組村上定之助先に喧嘩の際その處置緩漫なりしを以て遠慮を命ぜらる。

〔政隣記〕

九月廿八日、左之通被仰付。

遠　慮　　河地才記組御馬廻組　村上定之助

寺西九左衛門家來中小將　松永源五郎

右九左衛門、組頭長大隅守殿御宅江御呼出、源五郎儀主人了簡次第与被仰渡。依之唯今迄遠慮申付置候處、今日より逼塞申付置候由。

廿九日、昨日記に有之御馬廻組村上定之助遠慮被仰付候等之旨趣者、今年六月廿三日夜、寺西九郎左衛門家來中小將松永源五郎与申者、淺野川海老梁致見物有之候處へ、村上定之助罷越及口論組合、翌廿四日定之助より九左衛門方江、昨夜淺野川縁に於何者共不相知及口論組合候に付、切留可申与存候處、同道人引分致了簡候樣申聞候。右組合候節致怪我、右之手大指屈伸不自由に相成候故、右扱人（者村上傳右衛門弟九左衛門也。）江引渡、追而存寄有之段申談罷歸候處、右相

手者御自分樣御家來松永源五郎与申者之由承候。私江對し法外之族不届に付、不得已事願之筋有之候條、不縮無之様に与以紙面申越候に付、九左衛門より吉田才一郎を以挨拶有之候得共、定之助不致承引、扨又九左衛門より源五郎手前相尋候處、海老やなへ罷越候而、海老は上り候哉与尋候得ば、尋而何に致候与申に付、彼是口論仕候處、其節誰に而候哉彼是取さへ退申候。今日承候處、相手は村上定之助殿と申事に御座候。夜中故輕き者と存、慮外も申入候与奉存候。其上少々酒も給罷在候旨等申聞。依而右等之趣承知之段等、九左衛門より定之助江返書遣之。

右等之趣御組頭大隅守殿へ委曲以紙面相達。

一、七月七日九左衛門より定之助へ以紙面、御願之筋致承知度段、先達而以使者得御意候處、御僉議相極り不申に付、相極り次第可被仰越旨御返答に候處、いまだ何之御沙汰も無之候。御願之筋承度段、重而以紙面申遣候處、先達而願紙面指出候得共、其儀に付頭衆被申聞之趣有之、いまだ僉議決不申候間、重而可得御意旨返書有之候事。

一、同月十七日定之助より九左衛門江、源五郎儀酒狂に而不埒之趣に御達申段、先達而御返書に候間、願之筋相止可申候條、御縮之儀御宥候樣致度段申來に付、承知之應答、幷別紙を以、尤以來源五郎に被對御存念も有間敷与存候。猶承度段申遣、將又使者口達を以、源五郎

酒狂与御申越候得共、先達而酒狂与者不申進。依而先達而申進候通、酒給罷在候旨及御返書候旨も申遣候處、尤已來源五郎江對し存寄無之、其外致承知候旨返書有之。右等之趣、七月廿日大隅守殿江九左衛門より及御達候事。

但、翌廿一日源五郎儀縮之儀御差圖次第可相心得旨、大隅守殿へ九左衛門より紙面差出。

一、九月廿八日大隅守殿御宅江九左衛門御呼出、源五郎儀に付定之助其端之首尾、彼是不都合被思召候に付、遠慮被仰付候。源五郎手前之儀も定之助御咎に准じ、九左衛門存寄次第可申付旨被仰出候段、御用番被仰談之旨被仰渡。依而九左衛門より御請書付に、源五郎儀逼塞申付置候段調差出候事。

〔政隣記〕

前記九月廿九日記に有之河地才記組御馬廻村上定之助より、六月廿四日朝才記方へ、昨廿三日夜淺野川小橋下に而、何者に候哉酒狂之躰に而組付候に付、組臥候處、少々疵付候間、見屆有之候樣致度旨申來候に付、相頭關屋中務申談令同伴、定之助宅へ罷越、檢使有之儀申談、翌朝檢使相濟退出。同月廿七日より、定之助儀痛所に付御番引。然所九月廿八日定之助儀、寺西九左衛門家來松永源五郎与口論之處、手ぬるき致方之趣被仰出、遠慮被仰付候旨、御用番本多玄蕃助殿覺書を以河地才記江被仰渡、則於才記宅に中務立合申渡之。

九月、御郡方に於いて老牛馬を買集め上方に賣却するを禁ず。

〔加州郡方舊記〕

一、於御郡方斃牛馬有之節、海川に流捨或埋隱、且又老牛馬買集置上方に爲牽登候者も有之躰に付、皮多共依願、先年御年寄衆より右不埒無之樣嚴重一統被仰渡も有之、其後每度拙者共より一統申渡置候處、又候近年老牛馬買集置、寄々他國に牽遣候者共も有之、斃牛馬致減少、皮多共御役皮暨渡世も致兼候段申聞候に付、老牛馬買置右爲躰之者共呼出、遂吟味候處、樣子疑敷相聞え候。猶更外にも右爲躰之者共可有之候間、御郡方馬口勞共手前常々村役人心懸候樣申渡、於及承者早速可及斷候。斃牛馬有之節、海川へ流捨等不仕樣、嚴重一統へ可申渡候。尤先年も申渡置候通、老牛馬爲牽登候儀外より洩聞候はゞ、本人は不及申、村役人越度可申付候。右縮方之儀、村役人共之內にも不致承知者も有之躰相聞候條、念に入夫々可申渡候、以上。

辰九月　　林彌四郎

宮崎藏人

加州三郡十村中

十月七日。金澤附近の山林を盜伐し又は損傷すべからざることを告ぐ。

別紙御郡奉行紙面之寫相越之候條、被得其意、組・支配ぇ嚴重可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配ぇ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十月七日　前田大炊

石川・河北郡山々之内、松盗伐度々御座候付、山廻之者堅村方ぇ茂嚴敷申渡置、格別爲相廻候處、去年以來金澤町方幷私共支配百姓等之内、賊伐仕候者御座候而召捕、格合之通牢舍等申付候者共御座候得共、今以盗伐有之候。就夫金澤近廻山々之内ぇ者、輕き奉公人躰脇指を帶候者、三・五人或七・八人茂申談候樣子に而、小松等を伐取申者共有之に付、山番人見咎候處、却而不法之儀共申聞、山刀を以打擲茂可仕躰に付、難寄付、村役人ぇ斷に罷越候内立退、其所に居不申樣之儀茂有之、山廻ぇ足輕共見請申儀茂御座候得共、早く逃去候付捕得不申候。別而若松村・田上村・鈴見村・長屋村邊山々ぇ、右躰之者共罷越、猥之儀共度々御座候。

一、御家中鳥構場之内松枝等を下、生木之皮を批、或木之根に火を焚、損木等出來、堅新に構場を作置候所茂有之。第一山方御縮相立不申に付、寛政五年御達申上、一統被仰渡御座候處、一兩年又候所々猥之儀御座候内、小松之眞を切平均、網場之躰に致置候處茂有之、構場

之邊火を焚、其儘に仕候樣子に而、芝等に火燃付、山火事に可相成躰之所茂有之旨等、山廻り共及斷候。近年嚴敷被仰渡も有之儀に御座候得共、今以家來下々心得違之者茂有之躰に御座候間、以來新場之儀は勿論、有來候構場に而も、松枝幷小松等伐置候儀有之候はゞ、名前相糺可申上候間、急度御糺可被下候。右之趣御家中始一統、嚴敷被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

辰八月二十七日　宮崎藏人判

林彌四郎判

長九郎左衛門樣

十月十六日。前田治脩の使者金澤に着して齊廣の速に出府すべきことを告ぐ。

〔袖裏雜記〕

前に記趣に付、勝尾吉左衛門石野主殿助役引故、當分右座御用相勤罷在候也。九月廿六日江戸發足、十月六日金澤へ參着、直に金谷御屋敷へ罷出御使相勤。相濟、二ノ御丸へ罷出、年寄中へ御意之趣左之通奧之間に而申述。

今般龜萬千殿御出府之儀、先達而被仰出候通に候。初而御出府之儀、其上御道中も御せり込

被成候儀候へは、甚無御心元被思召候へども、御養子等御願之御書付御留置に而被仰渡候事に候へは、一日も早く御出府不被成候半而は、御首尾相等に不御宜候付、當月中には此表御發駕無之候而は相成不申候間、急々御用意有之、萬端御差支無之樣相心得、勿論伺之往反には無之儀候間、取計夫々可申渡候旨等、御意之趣申聞候事。

十月廿六日。前田齊廣江戸に向ひて金澤を發す。

〔政隣記〕

十月廿六日、四半時不遲御供揃に而、九半時頃龜千殿御發駕、今夜津幡驛御泊、來月十日江戸表に御着之御目論。

十日は豫定にて十一日なりしなり

但、御附關屋中務本役御馬廻頭・高田新左衛門同御小將頭・青木與右衛門同御先手御供に而發足。外に御大小將横目永原半左衛門・御大小將一人立歸御供、御醫師内藤宗安・久保江庵從江戸爲御迎被遣之、御供に而發足。且御出府方御用に付、御近習御用物頭並勝尾半左衛門被遣之、今月六日來着、同十三日發足歸府之事。

十月。石川郡宮腰の中山主計、漁業税に關する慣習を上申す。

〔加賀古文書〕

宮腰中山主計方聞合之趣、寛政八年十月

一、春網鰯・ごゝめ類八歩御口錢取立可申候。

一、秋網眞鰯之分迄八歩御口錢取立可申候。

右御口錢網師より取立可申候事。

一、かれい類　八歩御口錢

一、きじ鮭　右同斷

一、小鯛　右同斷

一、小かに　右同斷

一、大鯛　六歩御口錢

一、眞鱈　右同斷

一、赤もの類　右同斷

一、大かに　右同斷

右之品々獵師より御口錢取立可申候事。

右之通に而商人と申も相極不申、誰々にても買請申儀指支不申候。尤宮腰にて御口錢相濟候分は、金澤魚問屋に而者御口錢におよび不申候。都而一方之御口錢にて相濟申候、以上。

十一月朔日。前田齊廣を呼ぶに樣付を以てせしむ。

御同所様は前田齊廣

前月は十月

朔日は十一月

〔横山氏日記〕

十一月廿二日、御萬千殿御儀、向後様付に唱候様、去朔日被仰出候由。

十一月朔日、前田齊廣松平氏を冒す。

〔横山氏日記〕

十一月廿二日。御同所様御儀、御出府之上松平之御稱號幷御乘物御乘用之儀、御用番ゟ御書付夜指出候處、前月二十九日御先格之通与被仰出候。且御鑓二本爲御持之儀も御願被成候處、是又御願之通同日被仰出之旨、朔日被仰出候由。圖書等ゟ表方ゟ申來候事。

十一月九日。諸士に下街道を經て江戸に至る途中に於ける人馬供給の狀を上申せしむ。

〔政隣記〕

十一月九日、本多玄蕃助殿より左之趣得其意、十六日迄に可書出旨之如例御廻狀到來。

去年已來下通道中、別而人馬爲指支候樣子に付、道中御奉行衆へ御届被成候等に候。依之去春已來交代人幷御使等相勤候人々、追分宿より板橋宿迄之内、何月何日ヶ様之趣に而人馬差支致逗留、或增賃錢相渡候儀者相對たり共、於何方何程相渡候与申儀、且ははきと覺不申ヶ所に而も、荒增者譯相調指出候樣申渡、當月廿日迄に取立可被指出候事。

但當時在江戸、其外他國詰之人々者不及書出候事。
右之通被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配ゟも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。
右之趣可被得其意候、以上。

十一月八日　　奥村左京

十一月十一日。前田齊廣江戸に着す。

〔毎日帳之内書抜〕

十一月十一日

一、今日龜萬千樣御着に付、圖書・帶刀布上下に而五半時頃致出席候事。

一、龜萬千樣今日四時過御着有之候樣可被成旨、夜前早飛脚を以被仰進候旨横濱善左衞門申聞。

一、四半時頃追分御門御附人來候に付、圖書・帶刀儀中之口御式臺階上新番溜を後にいたし罷出候事。

一、龜萬千樣巳之中刻益御機嫌能御着。御旅裝束之儘中之口御式臺より被爲入、圖書・帶刀罷出居申所に而御意有之、御先立高田新左衞門。御溜ゟ被爲入、御口上以善左衞門被仰上。

新御居宅はもと前田齊敬の居りし所

十月は誤なり

御居間にて御逢御對顔、御熨斗三方出、相濟御溜に被爲入、御熨斗目・御上下に御改、重而於御居間御對顔。夫より相公様御同道に而、御廣式に被爲入候事。

十一月十一日、本鄕邸內前田齊廣の居る所を北御居宅と稱せしむ。

〔御年表〕

同年十月廿六日金澤御發駕、十一月十一日江戶御着、新御居宅へ被爲入、已後北之御居宅と相唱候樣被仰出。

十一月十四日、前田治脩、齊廣を養子とすることを許さる。

〔三壽御記〕

十月十三日御老中連名之依奉書、翌十四日治脩公御登城被成候處、於御白書院御緣頰御老中列座、鶴萬千樣御儀御養子被成、御嫡子被成度段、（御養嫡御願九月十九日也。）御願之通被仰出候旨、御用番松平伊豆守演述。

此時より鶴萬千樣御儀、是以後御振合前々御嫡子樣之通に候條、此段一統可申渡旨被仰渡之[illegible]。

〔每月帳之內書拔〕

十一月十四日

一、昨日依御奉書、今朝五半時御出御登城。御下城より直に御老中方本多彈正大弼殿御勤被遊、八半時前御歸殿被遊候事。

但、龜萬千樣には御風氣に付今日御登城御斷被成、御名代にも不被爲及候事。

一、御表小將前田作次郎、九半時過御城より罷歸、龜萬千樣御養子に被成、御嫡子御願之通被仰出候段演述之旨、林十左衞門席に罷出申聞候事。

十一月十八日。前田齊廣の江戸に着したる報金澤に達す。

〔横山氏日記〕

一、十一月十八日。龜萬千殿牟禮御着之日荒強、曉天御着、御供人追々着。龜萬千殿に茂少々御難儀被成候に付、同所に一日御逗留、去十一日江戸御着之由。同日之早飛脚今日表方へ到來之事。

十一月十八日。明年年頭に於いて諸士の獻上すべき太刀代及び馬代銀の認方を告ぐ。

〔政隣記〕

來年頭各より獻上之御太刀代銀七匁八分、御馬代銀鳥目代金一歩共座封、其上に名印可被相

記候。御太刀目錄折紙之儀前々之通、一統中廣杉原可然候。爲日被指上候衆、如每指出紙面可被相添候。

一、與力士御禮錢代銀も座封名印、指出紙面可被相添候。但與力之内在江戸之人々指出紙面、肩書に在江戸与可被相記候。右何も當月廿七日四時比、拙宅迄爲持可被指越候。

一、各知行高・役附・歳付之帳一冊來正月二日之日附、是又勝手方人馬數帳一冊同四日之日附に而、十二月廿日を限可被指越候。重而申觸間敷候條、被得其意、名之下可有御判形候、以上。

辰十一月十八日　　本多玄蕃助

津田權平殿　　但連名

猶以與力江戸詰人之内、來月七日比迄に罷歸候者可被申聞候、以上。

十一月廿一日。金澤に於いて前田齊廣の松平氏を冒すことの許可を得たる旨を告ぐ。

〔政隣記〕

付札、御横目に

龜萬千樣御儀、御出府之上松平之御稱號之儀、御用番に御書付被仰出候處、御先格之通与被

仰渡候旨被仰出候。此段一統可被申談候事。

十一月廿一日

付札、御横目ゟ

龜萬千殿御儀、向後樣付に唱候樣被仰出候條、此段一統可被申談候事。

十一月廿一日

別紙兩通之趣夫々可申談旨、御用番左京殿被仰聞候條、被成御承知、御同席御傳達可被成候、以上。

十一月廿一日　　御横目衆中

人持衆中

御先手物頭衆中　但餘略す

十一月廿三日。德川家齊使を遣はして前田治脩が齊廣を養子としたることを祝す。

十二月三日は日記の日附なり

〔横山氏日記〕

一、十二月三日。龜萬千樣御養子就被仰出候、前月二十三日以上使御奏者番本庄甲斐守殿、公方樣より卷物十卷・御樽一荷・干鯛一箱、從若君樣御樽一荷・干鯛一箱御拜領被成、從御臺

様同日御使御廣式番々頭植山三郎兵衞殿を以、御樽一荷・干鯛一箱御拜受被成。龜萬千様に右以甲斐守殿、公方様より御樽一荷・干鯛一箱、從若君様干鯛一箱御拜領被成、從御臺様茂御使御廣式番々頭本多金左衞門殿を以、干鯛一箱御拜受被成、御懇之被蒙上意候。相公様・龜萬千様にも少々御風氣被爲在候付、御名代飛驒守様御頼被成、御拜聽被成候。且又相公様・龜萬千様より御禮之御扣書物、二十五日御使者を以首尾好被指上、將又二十四日御連名之依御奉書、二十五日相公様御名代慶次郎様、龜萬千様御名代飛驒守様御登城被成候所、於御黑書院御養子之御禮被仰上候段申來。

十一月廿五日、前田治脩及び齊廣、物を徳川家齊に獻じて恩を謝す。

〔三壽御譜〕

治脩公・龜萬千公より御禮之御獻上物、十一月廿五日以御使者被指上、將又前日御老中連名之依奉書、同日治脩公御名代南部慶次郎利慶君、龜萬千公御名代飛驒守利考君御登城、於御黑書院御養子之御禮被仰上。

十一月廿八日、金澤に於いて諸士に前田治脩が齊廣を養子としたることを告ぐ。

〔政隣記〕

十一月廿八日、一昨日御用番左京殿之依御廻狀、今朝人持・頭分一統登城御帳に付、四時過栁之御間に列居之處、御年寄衆等方御列座、御用番左京殿左之通御演述。

當月十三日御老中方御連名之依御奉書、翌十四日御登城被成候處、於御白書院御縁頰御老中方御列座、龜萬千樣御儀御養子被成御嫡子被成度段、御願之通被仰出候旨、御用番松平伊豆守殿御演述被成、難有被思召候。此段何茂に可申聞旨、拙者共迄御書を以被仰下候事。

前々御使者をも被成下候得共、當時者御省略中に付、其御儀も無御座旨被仰出候事。

右相濟、左之御覺書可致披見旨、御横目中申談に而、栁之御間横廊下に出し有之。但自分は兼役一人役に付、前々之通御用番左京殿御宅迄に相勤候事。

付札、御横目に

今日御弘之趣爲御祝詞、今明日中年寄中等宅に可相勤候。且又幼少・病氣等に而今日登城無之面々者、御弘之趣向寄より傳達、爲御祝詞御用番宅迄以使者可申越候。此段夫々可被申談候事。

付札、御横目に

龜萬千樣御儀、是以後之御振合前々御嫡子樣之通に候條、此段一統可被申談候事。

十一月廿九日。幕府、前田齊廣が尾張侯徳川宗睦の養女琴姫と婚を約することを許す。

〔政隣記〕

十二月十一日朝五時過、布上下着用登城之樣、御用番九郎左衛門殿より一昨日依御廻文、人持・頭分登城御帳に附、四時過柳之御間列居之處、御年寄衆等御列座、左之通九郎左衛門殿御演述。

龜萬千樣御縁組之儀、尾張大納言樣御養女樣与被仰合度旨御願被遊候處、前月廿九日御登城可被成旨、前日御老中方御連名之依御奉書、御名代飛驒守樣御登城被成候處、於御白書院御縁頬御老中方御列座、御願之被仰出難有御仕合被思召候。此段可申聞旨被仰出候事。

右相濟、於横廊下今日并當十三日之内、年寄中等宅に相勤可申旨等之覺書、御用番御渡之由に而披見申談有之。自分儀如前記に付、御用番迄に爲御祝詞參出之事。

〔續徳川實紀〕

十一月廿九日、松平加賀守治脩請ふまゝに、尾張大納言宗睦卿養女琴姫（實は支封松平彈正大弼勝當女。）を、其養子龜萬千に嫁せしめらる。又大納言宗睦卿家司めして、その事つたへらる。

十一月、羽咋郡今濱村の八左衛門、革多の旅宿を營むことを許さる。

〔鳥館諸書物留〕

羽咋郡今濱村　八左衛門

右八左衛門儀、先前より加州河北郡淺野村領・石川郡扁留村に罷在候皮多共宿仕來候得共、先年者鹿島郡馬場村には皮多無之所、平人右皮多之宿いたし皮剝候儀見習、いつしか當時者皮多同類と相成候例有之候に付、宿難爲致旨申渡候處、加州御郡奉行中より宿無之而は難相成段、則昔よりの皮多江被仰渡も有之由紙面寫等を以申來り、其上宿無之而は御用皮指支候旨に付、最前之通宿は申付候得共、火を喰合不申樣心得、皮多止宿爲致候樣可申渡候。猶更八左衛門、後年皮多と紛不申樣に可申渡置候、以上。

寬政八年辰十一月　　榊喜左衛門　印

神保縫殿右衛門　印

荻谷先組當分裁許　　武部村　彌左衛門

右今濱村八左衛門儀、加州淺野等皮多共致宿候に付、後年紛敷爲無之、御郡御奉行所より相渡り候御紙面寫相渡之候條、可被得其意候、以上。

辰十一月　　荻谷先組裁許　　武部村　彌左衛門

今濱村　肝煎組合頭中

荻谷村長右衛門先組今濱村八左衛門儀、加州淺野村領等皮多宿仕候に付、火を喰合不申樣嚴重申渡候樣、御紙面を以被仰渡之趣奉得其意候。則八左衛門呼出、以後之趣申渡候。請紙面取立左に繼上之申候、以上。

辰十二月　　荻谷先組裁許　武部村　彌左衛門

神保縫殿右衛門殿

册　喜左衛門殿

覺

一、五　貫　文　　錢

右私儀淺野村等皮多宿仕候に付、火喰合不申樣可相心得旨、先達而被仰渡奉畏候。仍而鍋・釜・椀・折敷等相捨候爲代錢、右之通御取計を以御渡被下、忝體に請取申候、以上。

寛政八年十一月　　今濱村頭振　八左衛門

荻谷先組御裁許　武部村　彌左衛門殿

十二月四日。前田齊廣、名を又左衛門利厚と稱す。

「毎日帳之内書抜」

一、左之覺書兩通、善左衛門持參之。

龜萬千樣御名、御吉例に付昨日勝丸樣与御改、重而御代々之御名に付犬千代丸樣与被稱、且又今日又左衛門樣与被稱、初而松平伊豆守殿等ゟ前田信濃守殿御同道に而御勤被遊候。此段被仰聞候。右之趣年寄中等ゟも被申越、且又頭分以上ゟも可被申聞旨御意に候。

十二月四日

又左衛門樣御實名利厚樣与被稱候事。

十二月七日。金澤に於いて德川家齊が前田齊廣に祝儀に物を賜はりたること等を告ぐ。

〔政隣記〕

十二月七日、一昨日御用番九郎左衛門殿依御廻狀、今朝八持頭分登城御帳に付、四半時頃於御之御間列居之處、御年寄中等御列座、御用番九郎左衛門殿左之通御演述。

今度龜萬千樣御養子就被仰出候、前月廿三日以上使御奏者番本庄甲斐守殿、相公樣・龜萬千樣ゟ、從公方樣・若君樣品々御拜領物被成、從御臺樣も以御使者御拜領物被成、且又相公樣・龜萬千樣より御禮之御獻上物、同廿五日以御使者首尾能被指上、將又前日御老中方御連名之依御奉書、同日相公樣御名代慶次郎樣、龜萬千樣御名代飛驒守樣御登城被成候處、於御黑書

院御養子之御禮被仰上難有思召候。此段何茂へ可申聞旨被仰出候事。

十二月

十二月十一日。金澤に於いて前田齊廣の緣組を許されたることを告ぐ。

〔政覺覺書〕

十二月十一日御弘之趣。

龜萬千樣御緣組之儀、尾張大納言樣御養女樣与被仰合度之旨、御願被遊候處、前月廿九日御登城可被成旨、前日御老中方御連名之從御奉書、御名代飛驒守樣御登城被成候處、於御白書院御緣組御老中方御列座、御願之通被仰出難有御仕合被思召候。此段可申聞旨被仰出候事。右に付退出より各御廣式に罷出、御祠祝申上、賴母・南郊登城無之、以紙面御祝詞申上候事。

十二月十五日。金澤に於いて前田齊廣の改名したることを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月十五日月次出仕、四時過御年寄衆等謁之節、左之通御用番九郎左衛門殿御演述。

龜萬千樣御名、當月三日勝丸樣与御改、重而御代々之御名に付同日犬千代樣与御改、翌朝又左衛門樣に御改被遊候。此段何茂に申聞候樣被仰出候。且又御實名利厚樣ト奉稱旨、前田圖

書等より申來候。

右之趣同役中傳達、組・支配之人々へも相達候樣可被申談候事。

但、今日登城無之面々ゟ者、向寄より相達可申候。

付札、定番頭ゟ

又左衛門樣御名乘字利厚樣与奉稱候。御家中之人々實名、御名乘字同字有之候は相改可申候。字違候而も唱同事に候は唱替可申候事。

辰十二月

十二月十五日。前田齊廣柳營に上り初めて德川家齊に謁す。

〔齊廣樣御傳畧等之内書拔〕

十二月十五日御登城、御白書院に於て初て將軍家齊公御目見、御懸之御ふり。作り御太刀・白銀三十枚・綿紗十卷・裸背馬一疋進上せらる。

〔每日帳之内書拔〕

十二月十五日

一、又左衛門樣七半時過御殿ゟ被爲入、相公樣御對顏被遊、六時過御同道に而御登城被遊、御下も諏訪部文右衛門殿へ御立寄。夫より御老中方・若年寄衆御廻勤、七時過御歸殿之事。

但、又左衛門様には中之口より御出、圖書等御玄關階上へ（御玄關に向右之方。）罷出、頭分以上に蔦之間御廊下通に並居、御見立申上、相公様には奥之口より御出被遊候事。

一、右相濟、圖書・帶刀追付一先退出、熨斗目・布上下に改、四半時重而致出席候事。

一、又左衛門様御目見被仰上候儀等、諸事御先例之通御首尾能被爲濟候段申來候旨、九時過十左衛門申聞候事。

一、七時過於御居間書院、又左衛門様御禮被仰上候御ならし被遊候付、圖書等罷出候事。

一、又左衛門様御裝束御改被遊、御ならしも相濟候旨、以杢右衛門申上候處、七半時御居間書院に御出、又左衛門様御禮被仰上、御太刀帶刀披露、御熨斗御手自被進、御刀も被進候事。

一、右相濟、圖書・帶刀御前に被召、今日於御白書院又左衛門様初而御目見御首尾能被仰上、相公様に茂御禮被仰上、重而御兩殿様被爲召御懇之被爲蒙上意、忝被思召候。此段頭分以上へも可申聞旨御意に付、應じ及御請退去。

〔續德川實紀〕

十二月十五日、松平加賀守治脩養子又左衛門初見し奉り、加賀守治脩おなじこと謝し奉る。

十二月廿五日。儉約實行の期本年を以て終るべきも尙當分舊の如く心得

べきことを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月廿六日本多玄蕃助殿より左之趣如例御廻文到來。

御勝手御難澁に付、去寅年より改而三ヶ年之間、萬端御省略可被仰付旨被仰出之趣一統申渡置、當年に而右年限相濟候。依之猶更追而被仰出之品も可有之候得共、夫迄は先只今迄之通可相心得候事。

右之通被得其意、組・支配之面々江可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配江も相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十二月廿五日　　長　九郎左衛門

十二月廿九日、金澤に於いて前田齊廣が初めて徳川家齊に拜謁したることを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月廿九日、御用番九郎左衛門殿より夜前依御廻文、今朝五時登城。如例御帳に付候處、

四時過御年寄衆等被謁、歳末御祝詞申上。畢而重而頭分已上列居之處、重而御年寄衆等御出御列座、御用番九郎左衞門殿左之通御演述。

又左衞門樣御目見之儀御願置被成候處、去十五日御同道御登城可被成旨、前日御老中方御連名之御奉書就到來、則御登城被成候處、於御白書院御目見被仰上、相公樣にも御禮被仰上、重而御兩殿樣御一所に被爲召、御着座被爲仰付、御懇之被爲蒙上意、重疊忝御仕合被思召候旨、拙者共迄以御書被仰下候。右之趣可申聞旨被仰出候事。

右相濟、於横廊下左之御覺書御用番御渡之旨に而披見御横目より申談有之。

但、自分儀如例に付、御用番御宅迄に參出之事。

付札、御横目に

今日御弘之爲御祝詞、今日幷來正月朔日年寄中等宅迄罷出可申候。幼少・病氣等に而今日登城無之人々者、向寄より傳達、爲御祝詞御用番宅へ以使者申越候樣可被申談候事。

十二月

是月は大[illegible]なり

十二月晦日。前田齊廣の生母を貞琳院殿と稱すべきことを命ず。

〔政隣記〕

又左衞門樣御袋之方、自今御家中之人々貞琳院殿与唱候樣被仰出候條、此段一統可被申談候

事。

別紙之通夫々可申談旨、御用番九郎左衛門殿被仰聞候條、御承知被成、御同席御傳達可被成候、以上。

十二月晦日　　御横目

人持衆中

寛政九年

本年六月の條參照

正月二十日。金澤の町奉行醫師須貝玄徹の僕久七の篤行を賞す。

〔政隣記〕

正月廿一日、左之趣承に付記之。

才川荒町々醫師須貝玄徹家來

毎歳金二兩　　久七

右久七儀、妻子有之、居宅も致所持候者に而、玄徹方に二十ヶ年餘召仕候處、故玄徹已來致難澁、兩度之給金も全相渡不申樣子に候得共、聊不相厭、主人を大切に存、無怠奉公相勤、入情相勤、玄徹家内人多に而甚致難澁、藥種抔等指支、病家ども無是非可相斷族有之候得者、

久七儀氣之毒に存、所々駈廻り、自分才覺を以藥種等致調達、玄徹に與へ候而病家爲相勤候儀度々有之躰ニ、且病家も無之節ハ、兼而近所之者共に賴置、奉公之隙を考へ日雇に罷越、或ハ米搗等ニ被雇手間料を受、主人方日用取續之引足に致し、又者寒氣之砌抔、玄徹家内大勢夜具等不調に而、寒風凌兼候躰ニ見受候ニ付、其身夜着をも不拵、自分着用之綿入を脱ぎ主人へ爲着、自身ハ莚抔を着致し寒夜を明し、右に准玄徹方萬端指支候に付、少々之儀に而も主人助成而已を考、折々ハ暫之暇を乞自宅へ參り候而者、私用に而罷越候躰に仕成、妻子等紡等を以給續候僅之内より食用相調、早速主家へ歸候而者又其振をも不爲見、主人大切に仕、奉公而已相勤。其上二季寄銀有之候得者、折節給銀相渡候而も主人手前之難澁を相察し取請不申。將又久七心易き者共より外、主人に相應之儀申入候得共、難澁之主人ハ暇を乞候者爲迷惑に可有之、何卒先途迄も見屆度旨申入、一向外主人ハ不相屆。殊に近く久七妻致病死、子共養育之世話も有之候處、居宅遠方に而者奉公怠りに相成候迚て致變宅、玄徹居宅近邊ハ罷越候由粗相聞、段々承糺候處右之通相違無之候。主人に者忠勤を盡し、親に者孝行を成し候儀、人たる者之常に而本意に者候得共、左者難行所、數年衆に勝れ候志行不尋常、中々他之及ぶ所にあらす候。貴賤上下共如是有之べき儀に而、臣たるもの、爲見習にも相成、誠に奇特之至令感入候。別而當時之世風、輕き者に至稀成る事に候。依而爲褒美每歲右之通指遣候

條、猶更無怠志取失ひ申間敷事。

右之通久七へ可被申渡候。尤右之趣に付、先達而組合頭等より申聞之趣も有之候に付、猶更組合頭幷玄徹組合之者共手前相尋候處、先年より今以右之通相違無之儀に付、如是申付候條可被申渡候。加樣之者召仕候玄徹儀も、相叶本懷候事に候之條、深く加憐愍大切に召仕候樣、玄徹へも可被申渡候、以上。

正月二十日　　冨永右近右衛門　印

伊藤平太夫　印

竹村三郎兵衛殿

〔加能越良民傳〕

久七者金澤商太兵衛家僕別所屋之子也。有一姊一弟。久七自少有孝行。年二十餘。事醫須貝玄徹。玄徹歿。養子嗣後。襲稱玄徹。久七歷事蓋三十年餘。忠愛備至。玄徹稟資孱弱。多病善臥。因廢醫業。而家累頗衆。以故益窮困。雖適有病客請治。不得購藥品。因謝而去。久七竊憫之。私出營辨藥品。納與令得其業。玄徹喜之。及客致禮物。則先授久七體錢。久七固辭而不受。猶且勞事不遺餘力。値其暇。則出傭于隣鄉。得其貨。以給主家朝夕之資。有時主家食飲亡廩。則私抵家。就妻紡績自給之中而食。不敢令主家知之。嘗値冬時夜甚寒。玄徹最怯寒。而衣衾

不全。久七解躬所衣衣之。已業藥薦以達明。其忠愛又有至如此者矣。寛政八年妻歿、子女皆幼。恐其顧養之而或闕主之務。乃移家主家之則而居焉。一親故嘗諭久七曰。子生產未成、而私累且衆。績備事貧困之主。而齷齪虛歲月。竊爲子惜焉。毋乃于仕於他乎。久七曰、善如所教。然吾事我主也有舊矣。今請遽去。則主或憂之。吾不忍之。且吾欲及一見主家之合[illegible]運也。竟不[illegible]、先是伍家長老具狀告聞。寛政九年正月。街令召錄忠狀。以金二兩并與曰。久七忠節奇特、韮野所管。僕奴輩宜見而傚之矣。見賞如此。及六月。更又加鎰故所賜。爲中銀五錠。沒身處賜給。

是月に大書なす

正月晦日、金谷御屋敷を改めて金谷御殿と稱せしむ。

〔政隣記〕

正月晦日左之通於御横目所披見申談有之。

是以後金谷御殿与相唱可申候事。

正　月

寛政七年十二月十一日の條參照

二月九日。前田齊廣棚營に登り、正四位下左近衛權少將筑前守に任ぜられ、前名利厚を改む。

〔每日帳之內書抜〕

二月九日

一、又左衞門樣七半時過御殿ゟ被爲入、相公樣御對顏被遊、六時過御同道に而御登城被遊候事。

但、又左衞門樣には中之口より御出、圖書等御玄關階上ゟ罷出、頭分以上は蔦之間御廊下通に並居御見立申上。相公樣には奥之口より御出被遊候事。

一、右相濟、圖書・帶刀儀一先致退出、四時過重而出席之事。

一、又左衞門樣今日於御前御一字御拜領、被任少將、御腰物御拜戴、御名筑前守樣与御改被遊、御盃御頂戴。相公樣に茂御禮被仰上、萬端御先例之通御首尾能被爲濟候旨、御附使罷歸申聞候段、九時過十左衞門儀席ゟ罷出申聞候事。

一、御兩殿樣御同道、御城御下りに御老中方・若年寄衆御廻勤、八時過御歸殿之事。

〔每日帳之內書抜〕

二月九日

一、左之御書付等拜見可仕旨被仰出、以善左衞門就被渡下候拜見、畢而以同人返上仕候事。

卷目之上

松平加賀守

松平又左衛門御一字被下候御作法書、爲心得指越候。名は筑前守与可被改候。右之節長袴着用可被致候。加賀守儀茂長袴着用尤候。日限之儀は追而可相達候。

御黒書院

松平又左衛門

御縁頰に而御目見、小さ刀之儘御下段御敷居之内御右之方着座、此時御字之折紙老中可相渡候間、罷出頂戴、御次間ゟ被持退。此節上意之趣老中申達候。其後以進物御縁頰に而御禮、御次間ゟ退座、進物引之。重而御下段御敷居之内御右之方着座、御盃御前ゟ被召上、其御盃御銚子に被之、御下段中央に御酌扣在之時、御次ゟ退、小さ刀取之罷出頂戴。御肴被下之、復座加有之。此時御道具可被下候間、頂戴而道具持之御次間ゟ退、被下候道具を差候而罷出、御縁頰に而御禮、御次間ゟたゝ候而道具を置く。小さ刀帯刀罷出、一獻加、御盃を持退座。御銚子入、此節獻上之御刀上ル。出座老中言上之、又最前之席ゟ着座、老中御挨拶言上御禮いたさせ退去。

松平加賀守

以進物御縁頰に而御禮披露有之而、御次間ゟ退座、進物引上、重而

加賀守
又左衛門

一同に出座、御右之方着座、上意有之。老中御取合申上退去。

〔續德川實紀〕

二月九日、臨時朝會あり。黒木書院にして松平加賀守治脩養子又左衛門元服し、御一字を下され、正四位下の少將に叙位し、筑前守齊廣とあらため、備後國正興の刀・馬一疋・金五枚、卷物十を献じ謝し奉る。御盃に春江守次の御刀を添て賜ふ。臺の上へ銀二十枚・干鯛。若君へは美濃國兼定の刀・馬一疋・金五枚を献る。父加賀守治脩同じく謝し奉りて、御所へ銀・綿、臺の上へ卷物十・干鯛、若君へは銀二枚捧ぐ。

二月十九日。金澤に於いて先に前田齊廣の柳營に登りて權少將に任ぜられたることを告ぐ。

〔政隣記〕

二月十九日、御用番九郎左衛門殿より御意之趣可申述候條、熨斗目・布上下着用、今日五時過登城候樣、昨日御廻狀就到來、則頭分已上登城。如例御帳に附、四時過柳之御間列居、御年寄中等御列座、左之通御用番御演述。畢而左之御覺書於横廊下披見退出。自分如例御用番

御宅迄へ相勤候事。

又左衛門様御元服可被仰付候條、當九日御兩殿様御登城被成候様、前日御老中方御連名之御奉書到來、則御登城被遊候處、又左衛門様御儀、於御黒書院御目見御一字御拜領、被爲任正四位下少將、御盃・御肴御頂戴、御腰物御拜領、御懇之被爲蒙上意、相公様にも御禮被仰上、御懇之被爲蒙上意、重疊難有御仕合に被思召候。此段何茂へ可申聞旨、以御書被仰下候事。

御名筑前守様、御實名齊廣様与被稱候事。

付札、御横目に

今日御弘之趣爲御祝詞、今日・明後日之内年寄中等宅へ罷出可申候。幼少・病氣等に而今日登城無之人々者、向寄より傳達、爲御祝詞御用番宅に以使者申越候様可被申談候事。

二　月

二月二十日。諸士に前田齊廣と同名又は同訓の名を改むべきを命ず。

〔政隣記〕

二月廿日、左之趣本多玄蕃助殿より如例御廻文到來。

付札、定番頭に

筑前守様御名乗、御一字御頂戴、齊廣様与奉稱候。御家中之人々實名同字有之候ば、相改可

申候。文字は違候而も唱同事に候者、唱替可申事。

巳　二　月

二月廿二日。金澤に於いて前田治脩の養女藤姫の忌日を改めたることを告ぐ。

〔政隣記〕

二月廿四日、左之趣本多玄蕃助殿より如例御廻文到來。

順正院様御忌日九月二日に候處、思召有之候而向後八月廿九日に御改被成候旨、此度讃岐守様より被仰進候。依之毎月廿九日御家中諸殺生指扣可申旨被仰出候。尤二日には相扣候に不及候。右之通被得其意、組・支配之人々可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配にも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

二月二十二日　　長　九郎左衞門

二月廿三日。前田齊廣佳節及び月次に登營することを許さる。

〔三壽御譜〕

二月廿三日佳節月次御登城、御質通被仰出。

二月廿八日。前田齊廣初めて月次登營を行ひ、且つ前髮を除去するの儀を行ふ。

〔政隣記〕

二月廿八日初而筑前守樣月次御登城、御城下り之上御前髮被爲執。于時御年十八歳、御實年ハ十六歳に被爲成候事。

二月廿八日。前田齊廣任官せしを以て口宣受領の使者及び日光東照宮の代拜を命ず。

〔政隣記〕

二月廿八日、筑前守樣今度就御元服、京都江口宣之御使在江戸御小將頭野村伊兵衛江被仰付、右御用相濟直に金澤江罷歸候樣被仰渡、且高田新左衛門（御小將頭に而御部屋御用兼帶也。）儀日光江之御代拜御使被仰付候旨、江戸より申來。

三月三日。前田齊廣初めて佳節の登營を行ふ。

〔御年表〕

同年三月三日五節句初て御登城。

三月四日。前田治脩・齊廣登營して德川家慶元服の祝賀能を觀る。

〔御年表〕

同九年三月四日、若君樣御元服御祝儀之御能有之、爲御見物御兩殿樣御登城。御歸殿之上、御當官にては都て御三家御同樣之旨御意有之。

三月四日。金澤城橋爪門外の橋梁を修繕するを以てその通行を禁ず。

〔政隣記〕

付札、御横目に

橋爪御門外橋御修覆有之候に付、來月四日より往來指留候間、二ノ御丸に罷出候人々、鶴丸通埋御門より往來之筈に候條、此段不相洩樣夫々可被申談候事。

但、三ノ御丸御番所左右入口より、供之人數二ノ御丸之通召連可申事。

二月廿五日

右御修覆出來、三月廿二日より橋爪御門往來相立候段、御城代大炊殿被仰聞候旨、同月十七日廻狀右同斷有之。

齊廣はナリヒロと訓ずるを以てなり

三月四日。村井又兵衞長祥の諱は前田齊廣と一字同訓なるも之を避けざるべきことの許容を求む。

〔袖裏雜記〕

筑前守様御一字御拜領齊廣様と奉稱、又兵衞實名長祥之長の字同稱。右に先祖豐後守、瑞龍院様より長の御一字拜領被仰付、代々付來候。延享三年長字等七字御觸之時、明和八年治脩様と奉稱候節も右之趣伺、無構付候様被仰渡候。此度如何可相心得哉之趣又兵衞紙面出、無構付候様可申談哉。伺之通被仰出候にて、筑前守様被達御聽候上御申越候様、三月四日江戸へ申遣、伺之通被仰出、筑前守様御聽にも達候旨、三月廿八日返書。

三月八日。前田齊廣任官せしを以て諸士に祝儀を献るべきを命ず。

〔政隣記〕

筑前守様初而御目見且又今般御任官に付御祝儀物、御省略中に付各初并頭分以上之人々より、都而年頭之通筑前守様へ獻上仕筈に候間、御太刀馬代・目錄、御在府之節江戸表へ被指上候振に御心得、披露狀御添箱に御認、御封印候而、箱之上大奉書刀宛所に御調、當月廿四日迄之内御用番へ可被指出候。依之御組之面々より獻上之目錄も、御組頭迄御取立、御添日

錄を以右箱之内に御入、一緒に被認可被指出候。御組中より人別に披露狀指添候には不及、御組頭より御引受、披露狀も御添、箱之内へ御入、御認可被成候。夫々相揃次第、惣代使者代り之飛脚へ相渡、帶刀方迄相達申筈に候。

一、御組中之内在江戶之分も、目錄於此表に一緒に取揃指上申筈に候間、御組之内在江戶之人々ゟ有之候はゞ、前條之通代判人へ御申渡、御取立可被指出候。

一、御組之内鳥目獻上之人々目錄には、月日有之候間、四月六日に相調候樣御申渡可被成候。

一、若忌中之人々有之候はゞ、忌明次第追而町飛脚に指上可申儀に候。來月六日迄之内忌明之人々は、尤御取立可被成候。

一、御太刀代・御馬代は別々に座封有之、尤御組之分も右之通に御申渡、輕〻上包有之、御組頭迄御取立、以使者御進物所迄、當月廿四日四時より九時頃迄之内可被指出候。

以上

別紙之通被得其意、御太刀銀七匁八分、御馬代銀鳥目代金壹步共座封、其上に名印可被相記候。御太刀目錄折紙之儀、一統中廣杉原可然候。鳥目被指上候衆、指出紙面被相添、當月十九日四時より九時迄之内指宅迄以使者可被指出候、以上。

三月八日　　本多玄蕃助

津田權平殿　但前田兵部等連名

三月廿一日。前田治脩就封の暇を受く。

〔政隣記〕

前月廿一日以上使安藤對馬守殿、御國許江之御暇被仰出、白銀・御卷物御拜領。從大納言樣ゟ水野出羽守殿を以、御卷物御拜領。將又從御臺樣、中島三左衛門殿を以御卷物御拜受。去朔日右爲御禮御登城被成候處、於御座間御目見、御懇之上意、殊に御手自御熨斗鮑御頂戴、御鷹・御馬御拜領。且又前田圖書・大音帶刀御前江被召出、其上御卷物頂戴之、重疊難有被思召候旨、拙者共江以御書被仰下候事。

四月

三月廿八日。先に領內の川除普請を十村に委任したるを改めて藩の直營とす。

寛政六年四月の條參照

〔加州郡方舊記〕

一、三州川除御普請十村引請に被仰付可然趣、寛政六年改作奉行より覺書指出候に付、當分

右普請出來之上、定検地奉行幷改作奉行之内一人宛立會遂見分候樣可申渡旨被仰出之趣、其節夫々申渡候へ共、今般先規之通可被仰付旨被仰出候條、被得其意、夫々可被申談候事。

丁巳三月

右御改作所より被仰渡候。定検地所よりも右同様之御紙面出申に付、寫之儀略す。

今日御改作所へ御召、三州川除御普請引受に被仰付置候得共、今般御詮議之上先規之通被仰付候間、猶更是迄御改作所に而被仰付候分者、御算用場へ御示談有之、追而委細可被仰渡旨、此段私より一統申談候樣被仰渡、別紙御渡に付相廻し申候。夫々早速御順達可被成候。

一、定検地所よりも御別紙御同樣御紙面御渡之上、山森樣・原樣より被仰渡候者、諸郡之内、去年定銀之外不時御入用銀を以御普請被仰付候分者、御改作所へ御引請御算用可有御座儀に候間、去年定銀に而不行屆候而、今年定銀之内繰上げにして御普請出來候分者、當年定銀之内に候間、此分者定検地所へ御引請可被成、左樣無之而者兩御手合入組可申儀与被仰渡候。尤春來急切場所、當時御普請に取懸り居候与歟、又者何程出來仕候与歟申儀、其ヶ所之委細相調、定検地所へ早速御注進可申上。左樣いたし置候得者、急切場所之儀者無泥御普請仕候而も指支申間敷候間、前段之趣私より一統夫々可申談旨、兩役所より被御渡候。

右兩役所より被仰渡候之趣、爲御承知如斯御座候、以上。

三月二十八日　　　　　舟見村　和七郎

諸部御請番中樣

四月朔日。前田治脩登營して就國の辭見す。

〔續德川實紀〕

四月朔日、月次拜賀例の如し。松平加賀守治脩就封の暇賜ひ、御對面ありて、御鷹・御馬下さる。

〔横山氏日記〕

一、四月十日。御歸國御暇被仰出、當朔日御禮被仰上候儀に付、八日に御書表方に到來。昨日は御日柄候故、今日各不時登城致拜戴候事。但前々之通常服之儘拜戴之事。

表方は金澤の役所なり

四月朔日。例に依て今明日觀音院の神事能を行ふ。

〔政隣記〕

四月朔日、於金澤長谷觀音祭禮能番組左之通、請人町奉行伊藤平太夫・富永右近右衛門、御先手園澤主馬・杉野善三郎、御横目永原五左衛門。

翁　千歲 權左衛門　三番三 彌作　面箱 彌三郎　　高砂　權進　　田村　庄八

半蔀　宮門　邯鄲　甚次郎　岩舟　六右衛門

餅酒　仁十郎　花子　九郎兵衛　惡太郎　恒之丞

二日、昨日同斷、但詰人御横目者神田平藏。

翁　千歳 善五郎　三番三 又三郎　面箱 半次郎　玉井　六藏　忠則　忠藏

羽衣　幸太郎　安宅　權進　鳥追　宮門

亂　權進

煎物　幸助　呂蓮　長左衛門　弓矢　德次

四月四日。前田治脩江戸を發し就封の途に上る。

〔御年譜〕

一、四月四日江戸御發駕、同十五日御歸城。

〔御歸國御道中日記〕

四月四日、天氣能

一、今日九半時之御供揃に而、七時過御發駕、御下屋鋪ゟ御立寄。夫ゟ浦和ゟ四半時前御着被遊。

四日　江戸　蕨御中休　浦和御泊
五日　浦和　鴻巣御中休　熊谷御泊
六日　熊谷　本庄御中休　板鼻御泊
七日　板鼻　坂本御中休　追分御泊
八日　追分　海野御中休　榊御泊
九日　榊　丹波島御中休　牟禮御泊
十日　牟禮　關川御中休　高田御泊
十一日　高田　名立御中休　糸魚川御泊

一、當十六日津幡御泊より御着城被遊候筈に候得共、津幡御泊御指止被遊、十五日高岡より直に御着城可被遊旨被仰出候。

十二日　糸魚川　青海御中休　泊御泊
十三日　泊　三日市御中休　魚津御泊
十四日　魚津　下村御中休　高岡御泊
十五日　高岡　今石動御中休　金澤御着

四月十四日。儒者石黑源五郎、前田齊廣の師範たるを以て知行を加增せらる。

[補遺雜記]

御儒者石黑源五郎儀、金澤にて筑前守樣御素讀御指南申上候に付、出府可被仰付旨、二月廿四日被仰出に付、源五郎儀最前周叅と申、京都在住御醫者石黑周軒——儒學心懸候に付、——御儒者被仰付、御扶持方は是迄の通被下置候。寬政六年四月助敎被仰付、右御指南をも被仰付置、實躰成人品に而、御用にも立候。源五郎曾祖父元周は、護國院樣御代於京都御醫者被召出、三十人扶持被下、祖父周達は元周跡被召出、十五人扶持被下、其後兩度御加增、三十人扶持被下、父周軒は爲跡目被召出、十五人扶持被下候。右之通候間、八人扶持御加增、父御扶持方之十五人扶持被仰付、金澤在住被仰付可然と、三月九日申上候留有之。其後の事不見。但於江戸四月十四日御加增被仰付候也。申渡も左之通謂伺之。此通申渡候儀四月十五日の帳にあり。

御加增

一、八人扶持　　石黑源五郎

先御扶持方都合十五人扶持。

源五郎儀役向實躰相勤、其上筑前守樣御師範被仰付置候に付如斯御加增被仰付、金澤在住被

この後放鷹のこと屢々あり

仰付。

四月十五日。前田治脩金澤城に歸着す。

〔横山氏日記〕

一、四月十四日、明後十六日御着城之筈に候處、津幡御泊被指止、明十五日高岡より直に御着城可被遊旨被仰出候段、當十一日糸魚川より之飛脚昨夕到着之事。

〔政隣記〕

四月十五日夕七時過御機嫌克御歸城、御作法前々之通。且爲御禮江戸表より之御使人持組富田權佐發出。拜領物三ヶ年以前迄之通、御羽織一・御卷物二、於御年寄衆席御大小將披露に而被下之。

五月朔日。前田治脩石川郡粟ヶ崎村に放鷹す。

〔政隣記〕

五月朔日、粟ヶ崎に御放鷹、御獲物鶴九有之。

五月二日。大聖寺侯前田利考歸邑の途金澤城に登る。

〔横山氏日記〕

五月二日　雨降

一、飛驒守樣今般御歸邑、夜前津幡驛御泊、今朝五時頃此表御旅宿に御着に付、御使者御近習頭□被遣候由。

一、飛驒守樣今日御登城に付、諸役人揃刻限五時、年寄中等布上下着用、四時迄に段々登城。

五月廿八日。讃岐の儒溪世尊明倫堂に於いて大學を講ず。

〔政隣記〕

大坂より御當地に罷越候儒生溪千賀太儀、當月二十八日於學校大學講釋就被仰付候、人持幷頭分之人々望次第聽聞被仰付候條、四時より可有參出候事。

五　月

別紙之趣可被得其意候、以上。

五月二十四日　　本多玄蕃助

〔筆のまに〳〵〕

五月廿八日

一、讃州產にて大坂居住溪千賀太（名は世尊、號百年、天朝史鑑・經典餘師の著述あり。）と申儒生、先頃より金澤尾張町住吉屋方に罷越居候而、學校方より指留置、宿料等相渡し候。右千賀太に、今日學校において大學

江間竹林坊は御醫師

講習被仰付、三綱領講之、頭分以上經習學課日に罷出候人々聽聞勝手次第被仰付、且又年寄中・御家老中・若年寄中子弟も、勝手次第聽聞被仰付、各罷出聽聞之。尤學校惣奉行御用番大飲之外罷出、主付横山又五郎も罷出、御用番幷御家老中・若年寄中、主付之外も聽聞勝手次第被仰付候時何も罷出、三郎も罷出。四時過講初り候事。

但、年寄中嫡子は傘持一人も便門内に召連、上り口も明倫堂御額下也。縁通り惣奉行等之詰所之後に相詰、御家老中嫡子等は下之上り口より罷上り、詰所は同所に而、年寄中嫡子に引違い着座也。便門内手傘用候筈也。今日天氣宜故、不及傘。學校濟候而、右子弟武學校見物、馬場も見物、射場に稽古有之候故是亦見物有之候。

五月、前田齊廣の通名筑前守と類似の名稱は之を改むるを要せざることを告ぐ。

［御夷雜記］

左之覺書下出入御覽。

筑前守様御名之字似寄唱も同事に付、江間竹林坊名替仕様子に候。餘り敬過候も如何。旣御前之御名之字抔無構付來申候。旁如此相觸可申と五月三日伺、詮議之通と御意。

定番頭に

御家中之人々實名、御名乘字同字相改、并文字は違候而も唱同事に候はゞ唱替可申旨、前々一統申渡候通に候。御名の文字等は、是迄指而御貪着無之候處、人々心得を以相憚候段、存寄次第に候へども、先祖之名抔は相改に不及事に候。此段拙者共迄御時之趣も有之に付申達候事。

巳　五　月

この前後學校に臨むこと甚だ多し

六月十四日。前田治脩文武學校に臨む。

〔筆のまに〳〵〕

六月十四日

一、今日四時頃御着城以後、初而學校御園中御鎮守へ御參詣、（此度服御改之旨被仰出。）夫より學校へ御出、課日に付前漢書并戰國策之席へ御出御聽聞。それより武學校へ御出、木村忠太夫門人出座之人々稽古不殘御覽被遊、九時前御戾り之事。

一、御鎮守天滿宮之御額は、觀樹院樣之御親翰にて、御細工人澤阜忠平に被仰付候。御額かゝり候後、いまだ拜見不仕故、拜見之儀可相願与存候處、外御家老中・若年寄中も何も拜見相願度由に付、其段先達而織田主稅を以奉得御內意之處、勝手次第之旨被仰出。且又横山三郎・大音南郊へも尋候處、是亦願度由。前田內匠助も御鎮守拜見之儀先達爲申聞有之に付、御額之旨も尋候處、不苦候はゞ拜見仕度由故、夫々主稅を以奉伺候處、何も勝手次第と被仰

出候付、今日御戻り之上、何も御鎮守ゟ罷出候而拜見之仕、重而學校ゟ罷越、各御禮拙者迄被申聞、登城之上各々御禮幷自分之御禮共主税を以申上る。

六月十五日、前田治脩本日以後經武館に於いて重臣等に武技を講ぜしむ。

〔筆のまに〳〵〕

一、今日左之通家老共ゟ申渡。

別紙之趣各にも可被得其意候、以上。

六月十二日　　河内守

三上庄左衛門殿
小川七右衛門殿
齋藤與右衛門殿
庄田十右衛門殿

來る十五日より、重臣之人々武學校ゟ罷出、武藝稽古之儀被仰付、難有儀に候。依之家中之人々相望罷出候者、御昵近之面々に對し、聊無禮緩怠之族有之間敷候。此段夫々急度可被申渡事。

但、武學校稽古所幷溜所において、御昵近之面々列座之儀者、其師範人存寄次第に申談候筈に候。此段者各爲心得申達候條、夫々被申聞候ても可然存候。

右之趣可被得其意候、以上。

六月十二日　　　　河内守

年寄中

六月十五日。陪臣の經武館に出席することを許さる。

〔御年譜〕

一、武學校に陪臣出座被仰出。六月十五日。

六月十八日。町奉行の職權を以て孝子を賞するが爲永年に亙る褒美の賜與を禁ず。

寛政六年四月十三日の條參照

〔國事雜抄〕

私支配所小松町醫者宇都宮呂安娘すゑと申者孝心に付、毎歳役所切に而米三俵充指遣候儀に付、別紙之通御算用場奉行中迄被御渡候段、今日於御算用場小寺武兵衛殿被申談。右之趣各樣に私より申進候樣御同人被申聞候に付、如此御座候。乍御郡廳御順達、落着より可被返下候、以上。

六月十八日　　　　有賀淸右衞門　印

遠所奉行等連名

付札、御算用場奉行に

小松町医者宇都宮昌安娘　すゑ

右之者今般御扶持方被下候付、有賀清右衛門より毎歳遣候分は指除可申候。且又於御郡方等、忠孝之者に其支配切に而年々褒美指遣候例、先達而相尋候處清右衛門支配に而も先例は無之趣ニ而同人紙面茂被出之。元来孝心者等為褒美、一作鳥目等遣候儀者格別一生扶持等之儀其支配切に取計候段者不容易儀に候間、以来何与歟格別之品有之節者、一往御用番に相達受差図候様清右衛門に可被申談候。其外所々御郡奉行等に茂、右之趣寄々無急度可被申談置候事。

巳　六　月

六月廿九日。天徳院に於いて前田齊敬の三回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

五月廿八日、観樹院様御三回忌御法事、来月廿八日・廿九日於天徳院御執行就被仰付候、御法事御奉行前田大炊殿御廻状、并御横目に被仰渡候御同人御覚書に、本多玄蕃助殿御添廻状を以追々到来。凡而同趣に付略之。相違之趾、去年は一朝御執行之所、此度は二朝御執行。

〔政隣記〕

六月二十九日、昨今於天徳院観樹院様御三回忌御法事御執行。

本年正月二十日の條參照

六月。前田治脩、金澤の醫師須貝玄徹の義僕久七の篤行を賞す。

〔毎日帳書抜〕

町醫師須貝玄徹家來小者　久七

右之者、故玄徹以來二十ヶ年餘召仕候處、忠勤之志厚、身之艱苦をも不厭、彼是親切之振舞有之趣、委曲被達御聽、輕き者には別而奇特之至に付、格別之趣を以每歲白銀五枚被下之候段被仰渡之趣申渡候所、難有仕合冥加至極奉存候段、私共迄申聞候、以上。

巳六月十七日　富永右近右衞門

伊藤平太夫

奧村左京樣

六月。諸寺庵の法に違ふ者あるを戒む。

〔上田舊記〕

諸寺庵不如法之族無之樣、寺務方如法に可相心得段、惣而愼方之儀、去年より每度申渡置候所、今以心得違之寺庵有之、不屆之儀參會輩ゟ有之躰粗及承。既に近年其罪及露顯候者は、重き御刑法に茂被仰付、ヶ樣之儀令忘却、僧儀取失候爲躰相聞ゑ候。急度可及糺明儀に候處、今般御赦之砌に付先令猶豫候條、向後愼方嚴重に相心得寺務專可有之事。

一、雖爲檀那、寺中江女出入之儀、佛參之外ハ不相成趣ニ申渡置候處、近年猥ニ相成、夜ニ入候而茂勝手次第爲致出入候寺院有之躰ニ相聞得候。以後堅く可爲禁制候事。

一、博奕等賭之諸勝負、跡々より御停止之儀、別而近年毎度被仰出、其時々申渡置候處、心得違之寺庵ニも有之、右等不埒之場所江携り、別而能・越之内ニ者、於自坊相催人集致候躰相聞得候。急度以來之儀相嗜可申候事。

一、御家中之人々子弟、子細有之出家ニ相成候節ニハ、夫々相願候上可蒙御聞屆候儀。町・在ニハ其支配先江願出、送状取請候上、惣而剃髮之儀寺社所江可伺出儀、前々より御定ニ候所、相對を以致僧形候族相聞候條、以來彌其時々書附を以可訴候事。

一、一向宗寺庵昇進之儀ニ付、右入用銀檀那共江過分致割符、押而取立候躰、加之右割符不信服之族も有之者、其者共手前ニ寺役有之砌者、必爲指支候躰。死去人有之候而も、彼是葬方爲及遲々候寺庵有之段及承候。惣而寺庵ニハ旦那助力を以相續可致儀ニ候得者、昇進ニ事寄過分入用押而相勸、剩死亡取置抔爲及遲々候族、不屆至極身分令忘却候爲躰ニ候。以來急度相心得可申事。

一、町・在之者共子弟等緣組・養子指遣候節、旦那寺容易ニ承引不致候躰、不限男女別家・出家相進ミ、養子緣組之儀者難承屆旨申達候由相聞候。旦那寺不任申分候時ニハ、寺送り不指出

候由に候。是等甚だ寺庵心得違に候。第一右躰成行候而者、在家之者共先以可令迷惑儀。御郡方において別家等爲致候儀、品に寄御縮方指支候族も可有之候。元來養子等に指遣候儀、旦那寺及相談納得抔与申儀者有之間敷事、養子等に指遣候前後之內、一往屆者可致置儀に候。以後者一圓旦那寺より指構申間敷候。右之趣者先年も申觸置候得共、違失之寺庵有之躰に候。緣組・養子に指遣候砌、實方旦那寺より寺送指出候に者不及候。都而宗門之儀者、其先々之家において縮方相立居可申儀に候事。

一、一向宗法談夜中興行、暨於俗家法談之儀堅く致間敷段、跡々より度々申渡置候處、今以右等之興行相企候由、不屆之至に候。前々申觸置候通、彌違失仕間敷候事。

一、三州共所方より寄進地に居住之寺庵、村方等隨分和順可致儀に候處、我意に不法申募候寺庵有之由に相聞え候。向後之儀右躰之族無之樣、心得方可爲專要候事。

右ヶ條之趣被得其意、聊も違失無之、嚴重相守候樣可有御申渡候。向後違犯輩於有之者、不及前豫嚴重遂糺明、可令罪科候。夫々被申渡候上、人別に請書可被取立置候、以上。

巳六月

前田修理 印

品川主殿 印

前田內藏太 印

七月十二日。前田治脩暑氣甚しきを以て老臣に熟瓜を饗す。

〔日　記〕

七月十三日　少々雨降

一、近年は御省略に而冷物不被下候處、今年は以外之暑に付、今日御前熟瓜被召上候間、御下頂戴被仰付候段、長方ゟ被仰出候由に而、月番九郎左衛門主付大學ゟ右之趣演述。且押立被下候儀に而も無之候、尤御禮も月番引請に而被申上候筈之旨も演述に付、難有仕合奉存候段申演。

一、九時前御膳奉行杉江彌太郎熟瓜指出候段申聞、年寄中・御家老中は於表方席頂戴、若老は常之於席頂戴。給事、席之坊主。相濟、又五郎・大學月番より御禮之趣申述。

七月廿六日。金澤城内時鐘の鑄造成る。

〔續漸得雜記〕

一、時鐘直り候事、寛政九年七月二十六日、釣鐘之高さ六尺八歩、口指渡三尺八寸、目形四百十三貫目、八星之座之上に村山若狭守正久と銘有之候也。

七月。京都紫野芳春院の位牌殿を再建せしむ。

〔文化雜記〕

一、寛政九年京都紫野芳春院御位牌殿等御再建に付、京・大坂詰御歩横目見廻等之御用可申談旨、御用番九郎左衛門殿被仰聞、別紙御渡被成候に付、猶更御作事奉行等手前承合候處、日數相懸候儀に而茂無之旨申聞候に付、指支候儀茂有之間敷候。同役中示談之上、則當二十日右之趣以紙面、兩所御歩横目ゟ申談、尤及言上候。

付札、御横目ゟ

今般紫野芳春院御位牌殿幷大庫裏爲御再建、御作事奉行淺加三左衛門、同所御横目高山伊左衛門、其外寺社方破損修理裁許與力等被遣候。依之於京都、右伊左衛門儀當病等之節者、御屋敷詰御歩横目見廻、御召上之品抔立會候儀等、申談次第相勤候樣可申渡候。

一、於大坂御材木爲御召上、修理裁許與力等罷越候節、同所詰御歩横目立會見屆、品に寄加印可仕儀も可有之候間、是又申談次第、相勤候樣可被申渡候事。

七　月

閏七月八日。尾張侯德川宗睦その女を前田齊廣に嫁せしむべき時期を照會せるを以て之が回答に關し議す。

〔袖裏雜記〕

琴姫樣御入輿御比合之儀、あなたより申參候趣に付、左之通閏七月八日伺、伺之通被仰出、江戸ゟ申遣。

尾張樣御用人竹中彥左衛門ゟ長瀨五郎右衛門可申述趣。

琴姫樣御入輿御比合等之儀に付、當六月御演述之趣、具に家老共へ相達候處、舊臘武藤庄兵衛殿を以御懸合候節も申述候通、勝手向連年難澁之上、近年打續臨時物入多、彌增之逼迫に付、婚姻取しらべ之儀中々急には出來兼申候。尤夫々役人共へも申付、無由斷相心得候へども、先達而も得御意候通、婚姻被相整候付而者、廣式向普請等も不被申付而は相成不申、彼是七・八箇年之内には御入輿御座候樣被致度含に御座候。且又御入輿向之儀、あなたにては先年壽光院殿御入輿之節之樣子、紀州樣御聞合御取調之儀に御座候。併近年御連女樣方御婚姻之節之儀も御座候へば、紀州樣御聞合之儀迄に而は、御指支之儀も御座候付、品により御省略之儀茂可有御座由。此儀者何分御事輕に御取扱御座候樣被致度。且御附人之儀も如何被成候哉、定而御省略可有御座候へども、近年彌增勝手難澁之事候間、重立候御役人迄被附置に而も可有御座哉之旨等、當春も庄兵衛殿迄及御懸合置候通御座候。前條にも申述候通、廣式向等普請被申付候而も、逼迫中之儀に候へば、可也に被相辨度含に而、甚手狹故、御人多に而は何かと指支申候間、女中向も御男子向に准じ、御省略御座候樣被致度含に御座候。猶更

あなたに而之御取しらべ御模樣、御內々被仰知候はゞ、此方よりも追々御示合被申儀も可有御座候。將又あなたにも近年臨時之御物入等重り有之候へども、大納言樣御老年にも被爲及候へば、早く御入輿御安堵被成度御含之趣も致承知、御尤之御儀、加賀守殿にも御同意之御事故、今度歸國後も無油斷種々格外に僉議も被申付候處、彼是指支がちに而、乍心外御比合等之儀前段之通御座候。是等之趣宜及御懸合候樣申越候事。

二段に可申述趣

御附人之儀御省略御座候樣被致度趣、本文申達候通に御座候。就夫壽光院殿附人者、多分定府に而、家內ども引越罷在候故、貸屋敷向も違申候。右躰無之ども、當時に而者貸長屋一圓無之、指支候故、御男子向之儀は御通勤にも被仰付候樣致度候へども、左候而は御屋形も遠方之事、御指支も可有御座哉に付、手狹ながら可也に貸長屋手當も不被申付而は難相成候へども、逼迫之事故行屆不申候。箇樣之わけ合故、御附人之儀は兼而其御心得有之、成限御事輕之御取しらべ御座候樣仕度含之趣、御內々御咄申置候樣役人共申聞候段、無急度申述、猶又あなた之御模樣可承候事。

閏七月二十日、越前の鍼醫市橋帶刀に金澤より立退を命ず。

〔袖裏雜記〕

本科は本道に同し

市橋帶刀と申者、當時此表に罷越、強鍼をたて人をあやまち候躰承及候間、盜賊改方へ尋可申哉之旨、閏七月十七日伺之處、兼而御聞及被爲在候。越前國出生之者之由御聞被遊候。いづれにも改方へ尋候樣御意、則尋候處、改方に而糺候へば、越前今立郡清水町之者に而、鍼術最初大聖寺御醫者服部壽德と申者に習、其後諸國遍歷、諸流稽古いたし、江戸淺草前山本宗徭と申者之弟子に成、本道流相傳當時より、鍼迄に而、うち鍼は不用由。本科は越前府中大熊養頑と申者之弟子之由申候へども、醫書杯も一向讀得不申、文盲にて、ホンダウ流之文字も不存由。鍼は二寸五分より四寸迄用候段申候旨等相違。いづれにも一兩日中爲立退可申哉と治兵衞申聞候付、其段委曲達御聽伺之。且以來右躰之者立入候はゞ、時々逐穿鑿可爲立退旨も治兵衞へ申聞可然と伺、僉議之通被仰出候付、爲立退候樣閏七月廿日申渡。且惣て以來右樣人命にも拘り候儀大切候間、右躰之者とくと穿鑿爲立退可申旨被仰出候段、口達に而申渡。

但、千葉玄能と申者も同樣之者と被聞召候間、尋可申旨も被仰出、尋候處、去年罷歸、今年は未罷越。尤罷越候はゞ相糺可申旨申聞、其趣も達御聽。其後能・越改方に而糺候處、替儀無之故、先其儘に被成置。

八月十二日。能美郡今江潟・木場潟等に於いて諸士の漁撈を行ふことを禁ず。

〔政隣記〕

能美郡今江潟・木場潟、幷梯川上は佐々木・伊藤之渡りを限、下は安宅水戸口共川筋不殘、幷水戸先海之内八十間三方共、今江村・向本折村・下牧村之獵場に被仰付置、先規より運上銀指上、獵師之外者右於獵場殺生不相成儀、往古より之格合に候處、猥に相成、獵師共致難儀候に付、獵師之外者不相成趣、享保年中・安永年中にも御家中一統申渡候處、近年又々猥に相成、殺生人多入込、甚獵師共及難儀相歎候段御郡奉行申聞候條、右於獵場御家中之人々等殺生堅無用之事。

右之通被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組・等之内裁許有之面々は、其支配に茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

八月十三日　　　　本多玄蕃助

右本多玄蕃助殿御添書を以、例之通同組連名之御廻狀到來。

八月十四日。能美郡別宮口留御用進士權兵衞、郡內御林の沿革等に就きて上申す。

〔御與雜記〕

安宅草野御林之儀に付、寛政九年に別宮口留御用進士權兵衛より言上之紙面之要。
安宅浦近邊御林之儀者、微妙院様別而被爲入御念、度々被仰出置候由。右御林者、小松御城抱御目當松御林候間、何ぞ子細之品候者、早速直可申上旨被仰渡候。上口・海手共御要害御大切被爲思召候御底意故、安宅浦御林邊新田開不被仰付一件者、水指込候へばおのづから松枯、御好之御林損可申候。明暦年中新田開仕候處、段々御林松盛木仕、田地日蔭相成作不宜、及斷打捨置申由。今以御林之内畔之様成所相見え申候。元來安宅浦砂地、風強吹申砌者松根返仕候、水地松枯申候故、度々御吟味被仰付、惣而能美郡御林之儀、越前幷公領之御境故、上口御要害之御境目故、小松近邊由中別宮押、寛永十六年人持前田刑部へ、與力四人被指添引越被仰付、刑部へ、夫々御直被仰渡、御役目者能美郡中七木支配ニ被仰渡候。是者被對公邊而之儀ニ奉恐察候旨。常々麁抹相心得候而者、迷惑可被仰付旨度々被仰出候。新開願候而も被仰付間敷、御林由之儀御隠密相心得候様被仰渡、小松者上口惣而之大手に而御大事被思召。御領國之内能登者袋之口、越中は下口越後迄、御境口不自由海手に而、さのみに不被思召。上口者平日・海手共御要害御大事被思召候御意之旨。能美郡中諸事之御定書刑部へ御渡置被遊候處、二代目刑部在役之内、御貸家出火燒失仕候付、御改被渡下候様奉願候處、御聞届、追而御渡可被遊被仰出候内御逝去。松雲院様御入國之砌、右御定書御改被渡下候様奉願候處、

能美郡之儀者、微妙院樣御定法被遊候儀御改難被遊、刑部へ被仰渡候通、奉傳承候通可奉心得旨被仰出、奉傳承舊記之通勤來申候。三道山御林、慶長五年七月廿六日岡嶋備中三道山被指置、肥前守樣大正寺城御責、八月三日御責落、中川宗伴被召連、御本陣へ御歸陣被遊候御舊地御座候。先年三道山御林御用木伐渡、御林薄相成候間、先役太田與左衛門夫々相達、御品山罷成、押紙面相渡申候。寛永十五年肥前嶋原一揆、其砌小松要害共御手入之刻、所々御林御指圖を以口々御締被仰付、被對公邊御隱密被仰渡候。安宅御林・船手之御林筋、荒不申候樣可奉心得旨重々被仰出。右御代安宅・符津・矢嶋・須天・向本折御林之内、松かさ實生出來、落葉にてしなごに罷成候間、取申儀不罷成ニ度々被仰出、小松御城より每日御徒小原庄太郎・近藤加左衛門、御小人頭中村次郎吉・中村權十郎兩人御林廻仕候。脇田助右衛門儀も相加も相廻申候。前田刑部并與力等も相廻申候。今以私共與力春秋御林廻仕、御締方申付候。寛文七年より阿手御關所、尾小屋・西俣・大杉御口留御締方加役被仰渡候。安永三年三月、能美郡中百姓持山垣根七木支配被指除候。御林之所付別紙奉指上候。此外右御代之内、鷹打山与申儀被仰付候樣申候へども、舊記見當不申候。箇所追而相糺可奉言上候。且又安宅御林之内、相生松盛木仕候。珍木御座候付、承傳へ人々往來之節立寄見物仕候――〇八月十四日之紙面也。御林儀所書左之通。

能美郡御林

符津村　矢嶋村　今江村　須天村

右今江村源助組。

大領中村　向本折村

右若杉村八郎兵衛元組。當時無組御扶持人若杉村八郎兵衛裁許。

田子嶋村　橋村

右上宰村半兵衛先組。當時波佐谷村丈兵衛。

三道山村

右寺井村孫三郎組。

安宅浦

小松町奉行支配。

以上

鷹打山之儀重而言上

鷹打山ハ安宅領草野二十八町九間之内に御座候。安宅御林より者西之方に御座候。山之高さハ、地面より見計四丈許も御座候。敷幅二十五六間許に相見申候。山之上平地三間許相成居申候。以前者餘程高御座候由。微妙院様御代御好に而被仰付、海上船往來爲御見透にも被仰

付候哉、御樣子ゟ御座候樣奉傳承候。海手見おろし、遠見相成候旨奉傳承候。被仰付候年限相糺候へども相知不申候。八月廿八日之紙面也。

八月十四日。前田治脩經武館へ臨み老臣以下の乘馬を觀る。

〔筆のまに〳〵〕

八月十四日

一、今日八時過武學校に御出、笠間九兵衛門弟劒術之稽古御覽相濟、直に左之人々乘馬、同所御馬場に而御覽相濟。勘解由等學校へ罷越、當月主付又兵衛迄御禮申聞。乘馬御覽御屆に相成、御喜悅被思召候段御意之趣申述。

但、先達而堂形御馬場においても人持中乘馬御覽之人々は、此度御覽無之、其餘三分御覽被仰出候也。

鹿毛九歲、能州出生	本多勘解由
月毛九歲、出生不知	青山將監
鴇毛五歲、新川郡出生	前田式部
黑毛九歲、出生不知	三田村虎次郎
栗毛、歲付出生不知	篠原彌助

栗毛九歳、新川郡出生　富田權三郎
月毛四歳、新川郡出生　青木新兵衛
黑毛五歳、新川郡出生　永井七郎右衛門
栗毛十一歳、出生不知　横山織部
鹿毛九歳、新川郡出生　小幡主計
栗毛十歳、羽咋郡出生　奥村兵部
鹿毛六歳、出生不知　原九左衛門

氣滯幷病馬等に而斷之人々。生駒專太郎・篠原賴母・富田權佐・津田虎之助。

八月十九日。前田治脩小松城を巡見せんとすることを告ぐ。

〔御吏雜記〕

小松御城等御巡見之儀、兼而思召付被爲在候付、來月・來々月之內、御鷹野之振に而、御事輕に被成被爲入度御内意之旨等、八月十九日被仰出、九月十八日御發駕、同月廿一日御歸城之趣被仰出。依之御留守中ゝ御勝手方御用等有之付、寄日每可罷出旨十七日に申上候處、御用番之外は休息有之可然旨等御意に付、十九日は不罷出、廿一日は御歸城之筈に付、廿二日之しらべ方御用も有之故、出席可仕ゝ其段申上。

此一件右之外御親翰に不見。私曰、小松へ被爲入候儀は公邊へも被仰達候事に而、御代始に被仰達置候由也。

八月廿五日。寶生大夫、前田齊廣の師範御用を勤むるを以て合力扶持を給せらる

〔下役者名抱一件〕

八月廿五日之日付に而、江戸表津田修理方ゟ又五郎より申遣候處、九月十二日晝後御用人ゟ申渡候處、寶生大夫當病に而同十四日御用人より寶生大夫ゟ申渡。

一、三十人扶持　　寶　生　大　夫

只今迄被遣候御扶持方は被指除之。

右寶生大夫儀に、筑前守樣御師範御用等就被仰付候、御合力扶持先代之通被遣之。

但、扶持米先代之通當分金澤直段を以被遣候事。

九月十六日。十村に與ふる扶持高の土地選定に關する規程を定む。

〔上田舊記〕

十村共ゟ御扶持高被下候節、組之内何方に而も相願候振合故、免相高下有之不同に付、是以

後大概甲乙無之同樣相願候詮議方有之間敷哉之旨被仰渡、段々於役所致詮議候處、從前々石高に而被下候分は、反別を以被下候振合に而、是迄不作之年見立等之節も、御扶持高之分先指除相願不申趣に御座候間、平均免等に相成候而は、右等之處にも相障り申候。依而左之通爲相願候而可然哉之詮議仕候。

一、御扶持高被下候分は、居村持高之內に而爲相願可申候。居村に持高無之組之內、外村に持高有之候者、其村高之內に而爲相願可申候。

一、居村幷組之內持高無之、他組に而も同郡に持高有之候はゞ、其村に而爲相願可申候。

一、居村幷組之內幷同郡之內に茂高所持不仕者は、居村に而爲相願可申候。併居村引免多有之候歟、又は御藏入無之、皆知行出村に候得者指支申候間、隣村等之內其節詮議之上爲相願可申候。

一、他郡より引越被仰付御扶持高被下候者は、居在所も相極不申、多分其御郡に高所持不仕筈に候。依而大郡組之內居住可仕村方に而爲相願可申候。且又品に寄指支之筋御座候はゞ、其節郡吏達詮議御達可申候。

右之通相極可申候哉与奉存候。併十村家柄に寄、是迄代々反別に而被下、又は先代より何村に而被下候与申樣成流例之分者、是迄之通被仰付候樣仕度候、以上。

巳九月　　　　　　　　　　　　　立川金丞

江上清左衛門

御算用場

右之通御算用場ゟ相達相極候間、以後御扶持高被下候節、右之趣相心得可申候、以上。

巳九月十六日　　　　　　　　林彌四郎

中村宅左衛門

諸郡御扶持人・十村中

九月十八日、前田治脩小松に赴き次いで城内及び附近を巡見す。

〔横山氏日記〕

九月十八日　晴

一、今朝六半時御供揃に而、五時過奥之口より松坂通金谷御門より御出被遊候事。

當十八日金澤御發駕。

野町々端より往還通り　一里十一町計　野々市　一里八町許　松任御小休　一里十二町計

福富十村方御晝御膳所　水島　但此間手取川原舟渡し御越し　粟生村　三道山村通り

福富より二里計　寺井村十村方御小休　夫より往還通り二里半計　小松に御着　久津屋彌

廿二日とあるは二十日なるべし

平次。

同十九日小松御城御巡見。

御戻り御晝休より　安宅御小休　同所舟渡御越し　二堂邊御廻り　浮柳村　夫より御舟に被爲召、今江潟之内網等被爲遊　今江御上り　夫より本道通り小松に御戻り。

同二十日。

小松より一里計　勘定村　一里計　澤村源次方御晝御膳所　十八町計　不動山（御出無之）　但山之内所々御巡見　夫より十八町計　澤村に御戻り　但御晝御膳所に御戻りに而候哉、夫者其節御様子次第　一里計　勘定村　一里計　小松に御戻り。

同廿一日。

小松天神前町端より　大島村御小休　中郷村　福島村　湊御小休　此間舟渡し御越し　本吉御晝御膳所　水島　福富御小休　松任御小休　野々市御小休　野町々端より金澤御着。

右之通御往來道書如此御座候、以上。

九　月　　　山崎忠太夫

［舊　記］

寛政九年九月十八日宰相様能美郡御巡覽、廿二日御鷹野被爲御入、則十八日傳右衛門方御

小休被仰付候。此時狐ころしと申梨五十、籠に入獻上仕候事。且小松御逗留之内、澤金山御巡覽被爲遊、則澤村源次方御晝御膳所に被仰付候。同日大野通若杉村八郎兵衞方御小休被仰付候。澤ゟ御出被爲遊候節、今江御幸塚ゟ御出被爲遊候。

九月廿一日。前田治脩金澤城に還る。

〔政隣記〕

九月十八日五時前御出、御放鷹之御振に而能美郡筋御巡見。今夜・十九日・二十日小松御泊、彼邊御巡見、二十一日暮過御還城。御打留等之雉子十三羽御獲物之事。

九月廿二日。能登口郡に猪狩の便を得しむるが爲山林の下苅を命ず。

〔加藤氏日記〕

能州筋猪・鹿多、依而猪狩捕候者には、爲御褒美猪一疋に付御米一斗宛、近年四季共就被下候、一入無油斷狩捕旨に候得ども、口郡筋別而山林茂り深く、雪中勢子を以て追立候得ば、右茂り之内ゟ隱れ、或に外浦筋海邊雪淺場に而は、是亦手に合不申躰に相聞、いつとても狩殘り村々及難儀候旨。依之格別茂り深き場所、百姓手透之時せつ下苅申付置、冬中雪を待、奥郡筋達者成者共呼越、格別勢子入れ爲狩候ところ、大躰は狩捕可申候。依之格別茂り深き場所相しらべ、村々人足を以爲苅置可申。しかし領付之人足に而一圓行屆不申村方も有之候は

一、隣村等へ加勢可申付候。且又字付御林も可有之候條、格別茂も深きヶ所早速相しらべ書出可申候。其上ニ而字出津山奉行中申談候はゞ、右御林下苅之儀領村人足指出苅置可申候。右之通南役所詮議之上、夫々相達、被聞届候上申渡候條、雪降も候以前百姓共罷出爲致下苅置可申、尤雪積待捕候時節宜敷頃可及案内候。拙者共之内罷越候條可有其心得候、以上。

巳九月二十二日

神保縫殿右衛門

栂　喜左衛門

中村宅左衛門

羽咋・鹿島兩郡御扶持人中・十村中

九月廿九日。時鐘を撞き誤りたる足輕指扣を命ぜらる。

〔政隣記〕

九月廿八日夜、五半時之鐘を四つ時之鐘に打損、依之二之御丸御仕廻半時早く相成候。尤五半時之鐘は打不申。右に付當番足輕大野五右衛門・添番足輕高桑宇兵衛手前、翌二十九日於御割場詮議之上、五右衛門儀者先急度指扣、宇兵衛儀者御用之外徘徊留申渡有之。十月二日右宇兵衛幷食代北村彌右衛門も、御奉公指扣候樣割場申渡有之。

十月廿八日。諸士困窮するを以て役・出銀以外上納の期を緩くすること

を告ぐ。

〔袖裏雜記〕

諸士困窮之旨等、御馬廻頭を初當八月以來段々紙面出候内、江戸表出訴之儀に付諸國へ響き、當時以之外かね支に付、役・出銀は品重候間、幾重にも可爲銀上納、其餘上納延引に可成哉。此儀承屆候樣にとの趣、御馬廻頭より十月覺書出候。依之左之通申渡可然と下書、十月廿八日入御覽、伺候通被仰出、即日申渡。

（政隣記には十月廿七日支配頭より發令と見ゆ）

定番頭へ

當時銀支に而調達方別而不通用に付、御家中之人々難澁之躰に候。依之役・出銀之外、當月より末上納銀之分、才覺相調候迄御用捨被成候條、調達出來次第無由斷早速上納可仕候。尤不指支人々は勝手に可有上納事。

右之趣被得其意――

右之通一統可被申談事。

巳十月

十一月二日。御扶持人十村・十村等の序列を改定す。

〔加藤氏日記〕

無組御扶持人
無組御扶持人列
組持御扶持人
無組御扶持人並
組持御扶持人列
組持御扶持人並
平十村
平十村列
平十村並

諸郡無組御扶持人中等列之儀、以來別紙御覺書之通御極被成候旨、此段一統申談候樣、今日御改作所より被仰渡候に付、爲御承知如斯に御座候、以上。

十一月二日　　田井村　次郎吉

諸郡御扶持人・十村中樣

十一月廿三日、本多悠々齋の喪を發す。

十一月廿三日悠々齋老被及大切候に付、末期之御禮被申上。依之御用番左京殿等招請、并御家老中兩人御越に付作法、玄蕃助殿鑑板端に御出向、其外は御使之節同斷。御家老御越之節は玄蕃助殿階上へ御出向、勘解由等は鏡板に出、敷附には用人罷出、且熨斗三方・たばこ盆・茶迄出候事。

右各御退出後、悠々齋老病死之弘有之。實は廿日朝也。

廿四日玄蕃助殿へ御悔之御使、定番頭不破和平勤。火鉢迄出、其外作法前記同斷。尤今日は上邸也。昨日迄は中邸悠々齋老居宅也。

本多悠々齋儀、昨廿三日卒去に付、町方鳴物等之儀昨日より三日遠慮候樣申渡候間、可有其心得候事。

人持・頭分以上之面々、爲伺御機嫌明日四時過可有登城候。幼少・病氣等之人々は、御用番宅迄以使者可被申越候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十一月廿四日　　　奥村左京

廿五日、昨日御廻文之通に付常服にて四時頃登城、御帳に付退出。

但四時より御帳出、同半時之御時計にて引候事。

廿七日玄蕃助殿ゟ、悠々齋老就卒去に、御馬廻頭佐藤勘兵衛御使を以、御香奠白銀五枚奉居被下之。作法等廿四日同斷。

廿九日朝五時悠々齋老葬式、并來月三日中陰茶湯於大乘寺有之段、一昨日申來。

十一月。無人島に漂流したる鳳至郡鹿磯村市之丞等金澤に歸着す。

〔郡方舊記〕

一、天明七年鳳至郡鹿磯村市之丞、大坂北堀江龜次郎沖船頭儀三郎船水主に罷成、船頭・水主共十一人乘組、同年十二月相州川浦出帆いたし候處、難風に被吹落、翌年二月無人嶋へ漂着、其三四年已前土州錢郡赤岡村松屋儀七舟四人乘之內水主長平与申者、右無人嶋に罷在、又其後戊之年薩州志布志浦之者六人乘之舟漂着仕。然所右三艘乘組共之內追々彼島に而病死仕、龜次郎、沖船頭儀三郎乘組之內九人、土州舟之內長平一人、薩州舟之內四人都合十四人に罷成、彼島に而磯貝類、并國地に見なれ不申、惣体白き羽先黒大きなる鳥多居申、曾て人に恐不申候故是を捕、汐に煮或は燒鳥にいたし食物に仕、右無人島に十ヶ年罷在候。右薩州舟漂着之節取上置候のみ・かんな・鋸・斧・脇刺等所持仕候に付、是を以寄木拾集舟を拵、何卒國地へ罷歸度念力に而、漸四年目に幅六尺長六間計之小舟造立、右十四人之者共乘組、彼島乘出、日の出之樣子月星之行方を考走せ候處、寛政九年六月十三日青島へ走着、夫より八丈

嶋へ着船、同年九月二十二日江戸表に着船仕、御勘定御奉行所へ被召出、御吟味相濟、從公儀木綿布子一つ・帶一筋宛被下、廻船問屋村澤善三郎へ御引渡、夫より此方御屋敷會所へ被召出、爲路用幷衣服料金子五匁宛被下、足輕等兩人御指添、同年十一月三日江戸表罷立、同二十日金澤へ着、御郡奉行所において御郡方相濟、御郡所より鳥目二貫文被下致歸村候。御領分之者、右市之丞石川郡大野村長兵衛与申者と兩人なり。右一件江戸表に而御吟味御書等帳面一冊に書留有之候事。

但、市之丞國許へ罷歸候は寛政九巳の年十一月下旬、其節裁許八左衛門・舘快也。且又同十年の春市之丞へ、御郡所より爲取續銀子二百目被下候事。

〔又新齋日錄〕

口上覺

一、私共儀御領分之者、市之丞は能州鳳至郡鹿磯村出生、長兵衛者加州石川郡大野村出生に而、市之丞は壯年より木屋藤右衛門廻船に乘組渡世仕居申候處、藤右衛門方家業差扣候付他國廻船に乘組、長兵衛儀も他國廻船に乘組渡世仕候處、去る天明七年未年夏中、大坂に而儀三郎船に兩人とも水主に被爲雇、越後國に乘下り、御城米積受江戸着仕、無滯御藏納相濟候後、當地に而右船奥州荒濱御城米御雇船に相成、同年十一月下旬容船に而當地出帆、同二十

八日浦賀御番所御改受、日和見合、十二月初旬同所出帆仕候處、沖合に而難風に逢、帆柱・外艫等痛乘凌難相成、無是非檣切候而六十日程沖合に漂流罷在。翌年二月朔日頃与覺、両方に漂着仕、早速傳馬船に而乘組十一人共一同陸上り仕候而、嶋々樣子等見渡し候へ共、人家樣之物も相見ゑ不申に付、礒貝等取候而食物に仕、一兩日も相立候而險阻之山を越見廻し候處、谷間に人間形之者相見え候付、言葉を懸候處返答仕、人間に無相違候付、其所ゑ參り而談仕候處、土州舟四人乘に而、三年以前に此嶋へ漂着、三人は追々死失候而一人生殘り居候由物語承り、當嶋々樣子等問合候處、無人嶋に而穀物等一切無之、魚鳥・礒貝等取候而食物に致助命候由、冬は右食事にいたし候大鳥之羽を以着用いたし相凌候旨。尤國々よりは暖氣に而、寒中にても國々之九・十月頃之時候に覺候趣申聞候。其後乘組十一人之內二人嶋に而病死、九人相殘申候。尙更私共漂着後三年程相立、薩州舟之由六人乘に而此嶋へ漂着、此內二人は追々嶋に而病死仕候付、生殘り之者土佐一人、薩州之者四人、私共乘組九人、都合十四人に而魚鳥・礒貝等給候而助命罷在候へ共、穀類無之候へ者追々自滅を待而已に而、無類身之上色々一同心配仕候上申談候は、薩州舟より鍛其外細工道具等少々上げ置候付、追々流れ寄候破船之板木釘等拾ひ上候而、小船形之もの打建一同乘出し、海上に而變死候共船乘之本望、萬に一運に叶ひ人住嶋へ流寄候へば、再古鄕へ歸候儀も可有之与決議仕。尤要用之道具不足

之品も有之、其分は一人鍛冶屋之隣家に數年住居候者有之、此者大躰見聞居候而思ひ付、ふいごを拵古釘を以不足之道具等拵、可也に間を合、彼是三四年も相懸り、六間計之小船漸成就致候付、銘々破衣類等を帆に致、當六月中旬頃与覺、一同に右嶋乘出し、六日目に青ヶ嶋与申所へ乘着陸江上り候處、此所へは八丈より仕送りを請候而九人居合、此者共へ面談仕候而、月日等相尋候處六月十三日之由。左候へば無人嶋乘出候は六月八日に有之候。夫より私共漂着之始末承届、私共乘參り候船へ爲案内二人乘組、當七月八日同所乘出し、同日八つ過之頃八丈嶋へ着船仕、陸上り仕候處、嶋役人中罷出止宿等世話致、段々介抱致吳候而、是迄之漂着始末承糺、口上書取候而、私共乘參りし舟は陸へ上げ預置、八丈嶋御用船に嶋役人相添、御當地江十四人共送可屆旨に而、九月四日出帆、同二十二日當着仕候。右に付御勘定御奉行根岸肥前守樣一同被召出、右漂着舟無相違候付無御構之旨被仰渡、土佐之者一人、薩州之者四人は夫々御領主へ御引渡被成候樣に御願申上候へ共、私共乘組九人は御領主樣へ御引渡御願申上候儀も奉恐候付、右漂着仕候廻船之御當地問屋村澤善三郎方へ御引渡御願申上候處、當月十七日夫々願之通御引渡に相成申候。尤右御吟味中に御奉行樣より、右十四人之者へ一人別に木綿布子一・同帶一筋充被下置、着用仕寒さ相凌候。右に付私共九人善三郎方江引取世話相成申候。右御引渡之節之御請之寫、嶋に而差出候御書之寫者別に所持仕候。

右之通御座候、以上。

巳十月

市之丞印

長兵衛印

〔又新齋日錄〕

私共漂流無人嶋より歸着之次第。

一、私共奥州荒濱御城米御雇舟に相成候付、彼地へ差向可申處、船頭・水主共一同東海筋不案内に付、荒濱出生忠八与申者船頭に相雇、去る天明七未年十一月二十六日空船に而江戸出帆、同二十八日浦賀御番所御改請、同十二日同所出帆候へ共日和悪敷、相州三嶋へ乘入、無程順風に相成候付乘出、犬ほふが鼻与申所迄乘参り候處、同夜七ッ頃より風樣變、北風時化に相成波風共荒、彼是相凌候内西風に相成彌増烈敷、楫・外艫等痛、無是非檣を伐、乘組一同髪を切拂佛神へ心願仕候而、風に任せ流、方角を取失ひ、月日を不相辨、凡五六十日程も海上沖合に漂流、水遣ひ切り天水を大切に溜置候樣心懸候。飯米は江戸に而白米五俵積入候間、初之内は相應に食事仕候へ共、日數相立飯米不足に相成候故、粥に致少々充給候而相凌居候處、翌申年二月朔日頃与覺、嶋山見懸候ゆゑ乘組一同力を得、何國何嶋共不知候へ共、傳馬船をおろし、乘組十一人一同に乘移、右島に寄候處、至而荒磯に而漸取付候而陸へ上り

候節、艀四挺・釜一つ・鍋一つ・火打道具等漸取上げ申候。其後波風彌増、元船・艀共破船仕候し夫より方々見渡し候へ共、人家は勿論食物に可致もの、并水など出候樣之所も無御座候付、所々見廻り候へ共無人嶋に而可便方無御座候付、無據磯貝を拾ひ食物に仕候。猶又國地に而見習不申鳥多居候付、捕候而給申候。水は天水計に而、右磯貝・鳥を食事に致候には、汐に而煮又は燒鳥に仕候而飢を凌、二三日も過候而食物相尋申度一同申合、山上へ登り候處、すゝき樣之草高さ凡五尺餘に生茂り、通路も無之を漸登り候而、向之磯邊見下し候處、人間形之者相見え候故、夫を見當に難所を下り、中途より言葉を懸候處、土州鏡郡赤岡浦松屋儀七船之水主四人乘組候而、三年以前此所へ漂着致し、三人は此嶋に而追々病死、當時一人生殘り候長平与申者之由申聞候付、私共名前并漂着之始末相咄、互に落涙仕。當嶋之樣子等承合候處、無人嶋に而食物何に而も無之、魚鳥を取給候より外致方無之、糸・麻等之類少も有之候はゞ大切に可致、火打道具は持候而上り候哉与申聞候付、持上り候由其外咄合。夫よりは長平・私共乘合都合十二人、岩穴に住居仕候而、魚鳥・磯貝等を食に致居候內、乘組之內忠八・五兵衛追々病死仕候。其後戊年、薩州志布志浦之者六人乘に而此所へ漂着致候付、早速私共濱邊へ罷出、右之者共助け上げ、傳馬船之道具其外小道具等取揚申候。其後無間も元船・傳馬舟共破船致、其節波に而打上げ候品等取揚。右六人之者岩穴へ同道致、嶋之樣子申聞、一同助命

罷在候。右嶋之様子左に申上候。

一、右無人嶋凡山之高さ七八丁計、嶋廻二里程も可有之候哉与相考申候。山之形眞中高、東西少低、七合目程に中段有り。夫より山三つに分れ、北より南へ打通り谷二ヶ所有之。凡長四五丁程も可有之哉。其通りに鳥夥敷居申候。北之方に穴有、指渡し四五十間程、深さ二十間程も可有之。其谷茅原に而、其中に蔓に相成木御座候。是は國地に而豆ふじ与申木に似寄申様に奉存候。南之方へ引請候而右に同様之穴有之、木草同様に生茂り、少幅狭く相見え申候。右穴より東之方へ私共打寄石之塚を建置申候。重而漂着之者も有之候はゞ、力にも相成可申与築置申候。夫より難所を東之方へ下り右之方に木立有之候。此木國地に而は一さき与申木に似たる木に而御座候。右之皮はぎ取碇綱・細物等拵、此度渡海致候節相用申候。右木之高さ凡六七尺限に御座候。嶋廻り右躰岩山嶮岨に有之、東之方四五町程石濱有之、夫より北之方三町程右濱へ入口之様成所有之候。此外上之方岳に而、此度小舟打建申候。其近邊に葉黄之木有之、草は茅・大黄・朝顔御座候。大黄は葉を乾候而たばこに相用申候。右山岩崩候而上り申事相成不申候。

一、私共住居之場所は、西東向之岩に而三つ有之候。拵直し又々新穴三つ堀、凡五六尺四方之場所に二三人・四人位迄住居仕候。夫より五六町餘も有之、東之方に而小船打建申候。此

嶋國地より至而暖氣に御座候。
一、食物魚鳥・磯貝等汐に而煮、又は燒候而給申候。其外に茱萸之木之實も有之候へ共、鳥に被取候故無數、魚鳥・磯貝こてゝ澤山に者取得不申候付、割合を以日々食事仕候。水は出水等無之、天水計りに候故、岩穴之前に深く地を掘、貝殼を燒しつくいを拵候而土地を塗堅め、水溜に致候へ共、旱魃之節は度々水切に相成難儀仕候。
一、衣類は暖氣之嶋故、草物に編半等に而相凌、寒中は鳥之羽に而蓑之樣成ものを拵置着用仕候。

右嶋に有之候魚鳥・貝類。

一、大鳥是は惣毛白、羽は黒き所少々有之。大さ兩羽開き候へば凡七八尺も有之。此鳥人を不恐候故、岩間に追詰棒に而打殺申候。此鳥五月頃より八月頃迄何國へ參り候哉一向居不申候。近頃は人を恐、容易に捕かね申候間骨折申候。國地に而一向に見馴不申候鳥故、青ケ嶋に而承候處、白ぶこ申鳥之由承り申候。右鳥之油を取候而、穴之内に而燈火に用申候。
一、鶯・目白是は年中不絶居申候。
一、鵬・鴨・鷗年により相渡候事も有之、鷗は年々相渡申候。
一、鳥も初より有之候へ共、追々外より相渡哉、又は嶋に而出生致候哉、近來は夥敷相成、

食事等之節ハ住居之所へ群寄食物を取、一向人を恐不申、防方に甚困申候。

一、ざこ魚・鮫・赤魚等有之候。ざこ魚ハ國地に而見馴不申、色黒、形鯛に似寄、一尺二三寸より七八寸位迄。鮫ハ國地同樣大小御座候。赤魚は國地之かさごに似申候魚に御座候。大魚類釣候には、木之皮を以細く釣糸を拵、泙候日を見込候而釣候へども、磯際至而高く、荒濱に而候故釣かね、一日に二三枚、能々釣候節六七枚も釣上申候。

一、鳥も澤山に相見え候へ共、取方不存、道具も無之候故、在嶋中漸与二三枚取上け、其時々汐に而煮給申候。

一、貝類はびらふ貝・しざみ貝与申、至而細に有之。泙之日を見合拾ひ、汐に而煮給申候。其外魚鳥類一切無御座候。

一、私共在嶋中、右嶋へ漂着幷漂流之舟等一切見當不申。先年遠州舟一艘右嶋へ漂着之由、外に江戸靈町宮本善八舟一艘、元文三年正月漂着致候由。右二艘共書置岩穴之内に板に書記有之。船頭忠八讀分度見候へ共、數年來土に付有之事故に、板腐り候而文字相分りかね、飛々に相見候付、推量讀にいたし、右之通讀分け申候。其後薩州舟船頭榮左衛門に爲讀候處、右同樣にも可有之与申候。右嶋に先年人住申樣子に而、岩穴之内に鍋・釜之類与相見え、鐵之錆有之、形ハ備さ相分も不申候。又外之岩穴之内に、死人葬候躰に而一人之骨有之候。其

外所々相尋候へ共、死骨等一向相見え不申候。

一、私共乗組之内、右に而追々病死之者七人有之候。其時々相應之地所見立、打寄候而葬、墓所之右に俗名彫付置申候。

一、蠅夥敷有之候。食事之節は一向に飛付、容易に食事不相成程に御座候。

一、蚊是亦夥敷、殊に山蚊与申に而も可有之哉、國地之蚊より大き成形にて、晝夜共穴之内に隠れ被居不申。外に居候而も火を離れ候而は相成不申、暑中などは難儀仕候。

一、此度私共乗組相渡候小舟打建之儀左に申上候。

此度三艘乗之者共數年罷在候内、追々病死之者有之、十四人相殘、晝夜殺生而已に而壽命相助罷在候處、日々之艱難言語に絶し候事故、晝夜打寄相歎候内存付候は、如此難澁助命罷在候而も、いつの世に國地古郷之樣子承候便も無之、此通に而は往々命數盡、此嶋に而朽果候より外無之心外之至、平常佛神を祈願仕候も何卒日本へ一度相渡、親子兄弟對面而已相願候。然處に薩州舟に而錨一枚、やすり・錐一本、脇刺一腰取上け置候間、是にて寄木・寄鐵等拾ひ集め、いか樣にも小舟打立、出來候はゞ運を天に任せ、此に而乗出、運に叶ひ佛神之御加護を以地方へ取付、親子兄弟對面致候はゞ、誠神願成就難有御事。若運盡如何樣に成行候とも、此まゝ朽果可申候故、少しも思ひ殘候事無之哉与各申合候へ共、第一鍛冶無之而は釘出來不申候

得共、十四人之内鍛冶心得之者一人も無之處、休七与申者、國地に而隣家に鍛冶有之朝夕見聞候間、先いか樣にもふいご仕立見可申与申候付、夫より寄木に而ふいごに取懸り仕立之處、可也に出來仕候間、石を鐵敷にいたし、斧等を鎚にいたし、不足之道具釘拔一挺、釘〆一本、釘鑿一丁、鐵鎚二丁、鉋一枚、揉錐一本打立、墨坪一ツ仕立、夫より寄木心懸候處、敷にも可相成木一本寄候付、天之與へ与取上げ、舟に打立に懸り候處、是亦舟打立方存候者一人も無之に付、中合蓆に而雛之形を仕立、夫を手本に致、長三尺程に又々木に而舟打立、釘打立方等も見、夫より地所見立小舟打立に取懸候へ共、寄木を當に仕立候故、別而はか取不申、三ヶ年餘相懸り、六間計之小舟漸出來仕候處、右舟打立候場所より濱邊之間難所に而容易に雛難出候間、夫より道普請に懸り、土石之所切通之岩間へ道を付、數日相懸漸普請出來仕候。尤人歩等夥敷相懸り候へ共、夫食等相働候餘手之間有之候節相懸候間、人夫高相分りも不申候。尤手本舟に書置相添、岩穴之内に丈夫に入置、此後漂着之者有之候にはゞ力にも可相成哉与、在嶋中之樣子、夫食拵小舟打建出帆之樣子委敷書置申候。夫より日和見合出帆可仕与、船中飯料當て之鳥干物・魚干物等用意いたし、水樽四ツ仕立天水を入、用意相調候處、三艘乘組共磁石無之に付方角不相分候付、致方無之日之出を以相考、西北を心懸南風を相待候處、南日和に相成候間、一統佛神を祈出帆仕、追風に而晝八里程も走り候与覺し与、右嶋見

八丈島役人なり

隱し、其外嶋山等一切無之、各風様も不相分五日相走候處、五日より夕方に相成嶋山見懸一統力を得、右嶋心當走候處、翌六日の晝四つ時頃着船仕候處、役人中御出會、種々御世話を以小船濱揚致、私共も無難に上陸仕相尋候處、青ヶ嶋之餘由承り、誠歡之餘り皆々落涙いたし候。年月承り候處寛政九年巳年六月十三日之由被申聞候。左候はゞ私共無人嶋出帆は六月八日に御座候。夫より青ヶ嶋に御介抱を以逗留仕、七月八日に相成、日和宜候間出帆相願候處、水先(案内之事也)兩人御乘せ被下、都合十六人乘組、七月八日朝五つ時青ヶ嶋出帆致候處、汐風宜敷、同日八半時八丈嶋八重根濱に着船仕候處、御役人衆中濱邊に御待受、種々御取計を以小船陸上げ被成下、御糺之上雜道具等御改被下、早速旅宿被仰付、萬事無差支御介抱被成下、猶亦被仰渡候には、便船次第江戸表へ御差出可被下旨被仰聞、重々難有仕合奉存候、以上。

寛政九巳年八月　日

御役人衆中

地役人　菊池恒七様

菊池左内様

菊池左平次様

名主　菊池秀右衛門様

十二月三日。藩侯の鷹場に入りて捕鳥するものあるを戒む。

〔政隣記〕

當國御鷹場へ近來殺生人多紛込、御場之内不締之躰に而、毎度網等有之取上候。依之藤内共相廻、胡乱候者に勿論、殺生人躰之者見受候者、不依何人付廻、任所見届及斷候樣申渡候條、御家中之人々家來末々之者等、心得違無之樣一統可有御申觸候事。

別紙若年寄中紙面寫相越之候條、被得其意、組・支配之面々に可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配にも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之通可被得其意候、以上。

十二月十三日　　前田大炊

右玄蕃助殿より例之通御廻文を以到來。

十二月八日。來年頭の儀式は寛政六年省略を行ひたる以前の法に據るべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月八日、年頭御規式を初、寛政六年より嚴敷御省略被仰付置、未御省略中に候得共、來

年頭御規式之儀は寛政四年之通可被仰付旨被仰出候條、可被得其意候事。

一、來年二月朔日、小松御城番等且又頬等に而年頭不罷出頭分等年頭御禮可被仰付之處、二月三日高德院様二百回御忌御法事御取越御執行有之に付、右人々御禮正月廿五日に可被仰付旨被仰出候事。

但、二月朔日御法事中に付、尤出仕も無之候事。

右之趣被得其意、夫々可被申談候事。

十一月十六日。本年に限り增借知の分を諸士より徴收せざるべきことを告ぐ。

〔御用雜記〕

十一月十六日伺之上、御馬廻頭・小將頭・新番頭・御歩頭・御射手裁許・御異風裁許・組外御番頭・定番御馬廻御番頭・御細工奉行一人充相揃、左之趣申聞。

各組・支配勝手難澁之儀に付、先頃以來紙面被指出、其後口達にても被申聞候趣有之、種々懸僉議候へども、何分增御借知等可被返下御勝手振に而は無之、拙者共僉議之筋者委細達御聽候處、尚更打返御僉議之上、當年一作增御借知之分被返下、且小身之面々には、少々充御貸銀可被仰付候旨御治定に候。此段内分可申渡旨被仰出候事。

私共は年寄中

一、右被仰出に付、私共之儀ハ是迄之通指上度、加判之御家老中よりも同様指上度旨、十二月十六日各連名之以紙面申上候處、何分被返下度思召候へとも、各より申上候儀に付、被任申上候旨御意。

一、隱居・御儒者并他國在住之人々ハ、寛政五年迄ハ御借知無之、同年增御借知之節、儒・隱等ニも御借知被仰付候。左候へは、此分ニハ今年ゟ作叁可被返下儀ニ遂示談、申渡之下書十二月十六日入御覽、伺之通ニと御意。

巳十二月

「政隣記」

十二月十七日左之通。

御用之儀有之候條、今日可致登城旨、昨日御用番大炊殿より就申來候、則致登城候處、別紙一結三通大炊殿御渡、相組中へ可致傳達旨被仰聞候に付、寫相廻し申候。且御横目所被見物是又寫相廻申候。爲御承知以廻狀如斯御座候、以上。

十二月十七日　　前田兵部

津田權平様　但同組連名

御勝手御難澁之段兼而一統承知之通に而、段々御儉約等被仰付候得共、元來御取箇に御入用

方不致符合候に付、年々御不足相かさみ、此上少宛御儉約被仰付候而も、御不足埋合出來不申候故、御取箇に符合之處格別御僉議被仰付候。併御當用過分御不足に而、外に被成方も無之候故、御家中も難澁之程も御察被遊候得共、當分百石以上五石宛增御借知都合十五石宛、右以下より者增御借知共都合十石宛之圖りを以、御借知被仰付候旨寛政六年被仰出、是迄指上來候處、御家中一統別而難澁之段被聞召候。依之右增御借知之分、今年一作被返下、小身之人々へ者御貸銀被仰付候條、猶更遂勘辨取續可申候事。

別紙兩通之趣被得其意、組・支配之面々へ可被申渡候。且又組等之内裁許有之人々者、其支配へも相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

丁巳十二月十七日　　前田大炊

今般增御借知一作可被返下旨被仰出之趣、別紙を以申渡候通に候。御勝手振者寅年申渡候同樣之御運方に而、右御借知難被返下候得共、頭々より願之品々も有之候に、右之通被返下候。右之趣に候間、其儘差上度人々者勝手次第に候。此段も達御聽申聞候事。

付札、御横目へ

今日被仰出之趣に付、布上下に改、爲御禮人持・頭分二三日中御用番宅へ相勤可申候。幼少・

病氣・在江戸等之人々ゟ者、同役又者筆頭代判人より可有傳達候。右人々御禮名代人、御用番ゟ相勤可申事。

一、組・支配人之御禮者、其頭等宅ゟ相勤、頭・支配人より御用番へ以紙面可申聞候事。

一、與力ゟ者其寄親より可申渡候。御禮ハ寄親迄罷出可申事。

但、自分御禮相勤候節、與力之儀も一所に可申述候。

右之通夫々可被申談候事。

十二月十七日、諸士に貸銀を許すことを告ぐ。

〔御觸幷御返書留〕

別紙兩通之趣一統申渡候付、爲御承知指進候條、與力幷御組之内與力有之面々ゟ茂御觸可被成候、以上。

十二月十七日　　前田大炊

町方不調達等に而、御家中之人々甚難澁之躰被聞召候。依之別紙割方之通當分銀子御貸渡被成候。當時御勝手御運方甚御難澁至極に候得共、格別之思召を以右之通り被仰付候、其上之儀は追而可申渡候。

一、當時勝手取續相應に仕候者ゟは、尤御貸渡被成間敷候間、頭・支配人より人別名前可書出

候。

一、頭分之内にも、當時難澁之人々には別紙割方之通御貸渡可被成候。

右之通可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之面々に可被申渡候。組等之内裁許有之人々者、其支配へも相達候樣被申渡、尤同役中可有傳達候事。

巳十二月

御知行之分

一、自分知七十石迄都而七十目當り。

一、同　七十石以上百石迄百目當り。

一、同　百石以上五百石迄百石百目之圖りを以、はした知行迄も、右割合。譬ば四百三十石ば四百三十目御貸渡之圖り。

一、五百石以上は都而五百目。

御扶持方之分

一、五人扶持より九人扶持迄六十目充。

一、十人扶持より十四人扶持迄七十目充。

一、十五人扶持より十九人扶持迄八十目充。

一、二十人扶持より二十九人扶持迄百目充。

一、三十人扶持百五十目充。

一、百人扶持五百石之振を以五百目。

御切米之分

一、俵数三十俵迄五十目充。

一、同　三十俵以上七十目充。

但新番に百目之圖。

一、足輕之分都而一人三十目。

一、坊主三十目。

一、小者二十目。

右御貸附方之儀は、委曲御算用場奉行に申渡置候條、直に承合可申事、以上。

十二月、諸士の諸方御土藏に返上すべき借銀年賦を當年限り容赦することを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、定番頭に

當時銀支に而、調達方不通用に付、役・出銀之外當十月より未上納銀才覺相渡候迄御用捨之段、先達而申渡置候通に候。然處段々及月迫、相對借銀高遂指引候時節に向、彼是指支可申候。依之御使人江御貸渡金、幷於江戸御歸國御供人江御貸渡金等、都而年賦に相極諸方御上納江返上之分、當年一作御用捨、其分末江繰延返上可仕候。今年當り上納相濟候人々は、來年上納御用捨、其分末江繰延返上可仕候。尤當り之通返上仕度人々は勝手次第之事。

一、御城御造營人足賃銀纂打之分、當年一作御用捨、先達而上納相濟候人々は、來年指次、來春打之分御用捨之事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配へも相達候樣可被申談候事。

巳十二月

十二月。一季居奉公人の欠落したる時は其主人より公事場に申告すべきことを命ず。

〔政隣記〕

定番頭江

一季居奉公人、於江戸表欠落仕候而、一兩日中にも立歸候者には、禁牢之斷有之、請合狀等主

人より指出不申候得共、其樣子により、右躰欠落人に而も、請人手前過錢等可申付儀候間、以來欠落人之儀は都而請合狀等指出候樣、享保三年一統被仰渡置候。然處於御當地欠落仕者行衞尋中等、公事場江不及斷內、盜賊改方へ召捕取捌候得ば、欠落之儀公事場江斷無之、請人共江過錢申渡方相滯候儀有之候間、以來右之通、尋中改方江召捕候趣其主人承候にて、其段公事場へ及斷、請合狀も指出可申事。

右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配江も相達候樣可被申談候事。

巳十二月

右例之通安房守殿より御廻文到來。

寛政十年

正月朔日、前田治脩金澤城に於いて年頭の賀を受く。

〔政隣記〕

正月朔日、例年之通御在國御格御作法を以、年頭御禮被爲請。一番御禮九時頃始り八時相濟、重而七時前二番御禮相濟。其外年頭御規式都而前々之通に付記略。

正月二日。前田齊廣、年頭祝賀の爲初めて登營す。

〔御年表〕

同十年正月二日年頭初て御登城。

〔横山氏日記〕

正月十日　曇

一、筑前守様當二日、年頭初而兩御丸江御登城被遊候處、於大廣間公方様江御禮被仰上、御盃御頂戴、如御例御時服御拜領被遊候。

正月十六日。城門の鎖鑰破損したる場合の取扱に就いて令す。

〔政隣記〕

正月十六日河北御門鎖損候旨、御番與力より三之御丸御馬廻（一番組御番人佐藤勘兵衛・小寺武兵衛組也。）御番所江斷に付、右鎖持參候樣申遣候處、是迄御鎖損候節持參不仕、出來之上者罷出受取候旨申越候に付、御馬廻中より此方御城代江持參御達申候間、持參候樣重而申達候得共、與力中承引無之指支候に付、先下番足輕を以受取候。以來持參之儀被仰渡候樣仕度。乍然是迄新鎖御作事所より御番所江、棟梁持參之儀に候條、損物御用立不申品に候間、是非與力持參無之而も苦ヶ間敷哉。左候得者御馬廻中も御城代江持參に及間敷哉。是以後者損候段迄御達申、損じ鎖は御番

所ゟ棟梁受取に出候樣可被仰渡哉之旨、水越杢兵衛等十五人連名狀紙面、佐藤・小寺宛所に而出候に付、則二月十九日兩人奥書を以御城代奥村河内守殿・前田大炊殿ゟ相達置候所、是迄新鎖棟梁持參者不相當儀、間違之趣も可有之候。以來者損候鎖與力持參に不及儀者、損じ品に候得者不指支儀に候。御馬廻中も御城代ゟ不及持參候。依之向後者御馬廻より罷出、損じ候儀可相達、左候得者内作事奉行御番所ゟ罷出受取、御修覆等出來之上持參候樣可被成御申渡候。右御修覆等之鎖等者、與力罷出受取候樣被仰渡候間、此段三之御丸御番人中ゟ可申渡旨、四月二十一日御城代河内守殿被仰渡、則佐藤・小寺より申渡候事。

正月廿四日。徳川家齊の前田治脩に贈りたる鶴金澤に達す。

〔政隣記〕

正月二十四日、宿次御奉書を以、餘寒御尋、且御鷹之鶴御拜領、今晩到來。依之御禮之御使、御馬廻頭宮井典膳ゟ翌二十五日被仰渡、二十七日發足。

正月。前田治脩羽咋郡大島村に漂着せる蠵龜を見る。

〔又新齋日錄〕

寛政十年正月能州羽咋郡大嶋村にて流寄候死龜を取上入御覽候。大さ幅二尺七八寸計、長三尺計、甲に斑文あり。瑇瑁に似たり。四足先にて薄く、雛子の羽の形に似たり。爪常の龜の

如くに無之、裏の中ほどに至て小く爪あり。腹白く堅し。此龜たま〳〵取得候事有之よし。形は如此の由。漢名本草蠵龜是に當るよし。首餘程傷けり、依て死せしと見ゆ。

端貞元京師にて、此龜の生けるを見せ物にしたるを見たり。大さは是より餘ほど小さく、

正月、百姓の切高・讓高等に關する特殊の場合の取扱方を改作奉行より指令す。

〔加州郡方舊記〕

一、百姓自身亂心躰に罷成、高方取哆仝出來兼、御收納皆濟時節抔、御用儀申談候而も、氣分指引有之相辨不申に付、忰一門等ゐ申談、御收納明米抔之方に切米等爲致相辨置、翌年致土分等田地相渡、切高主付人出作致候場に至り氣分本復いたし、切高仕間敷抔与申聞、前年暮切出置候高を取返度抔与申募り、出作之妨致候樣之者有之。切高爲取返候而者、翌年又々右躰之儀御座候而も切高主附人無御座、必至与指閊申儀故、呼出詮議仕候而も、元來亂心躰に付相分り不申者御座候。ケ樣之者本人幷一家一門納得之上惣領忰、或者惣領忰病身者等に而用立不申候はゞ、二三男に而開作之用立申者ゐ讓高に相願、御聞屆可被下哉。是迄ケ樣之願御聞屆之例相知不申故、願上候儀指扣居申候得共、村方甚指支に相成申儀も御座候間、御伺申上候。尤亂心躰之者に候得者、自身納得不仕候共、一門一家納得之上、肝

煎・組合頭詮議仕相願候上、猶更十村廻り口相糺御断申上候ハヾ、讓高可被仰付哉奉窺申候。

御開札

本文見届候。百姓病中に年貢不足有之、切高いたし、病氣致本復右切高取返可申旨及懸合候ところ、一旦切高いたし候上之儀に候得者、爲相返申間敷候。且又親病氣に而高作配難相成に付、本人一家共納得之上惣領せがれ、或ハ惣領せがれ病身に付次三男等ハ讓高爲致度之旨、此儀者村役人等予前承糺、裁許十村幷廻り口御扶持人詮議之上、拙者共役所ハ相斷可申候。詮議之上願之通申付候儀も可有之事。

一、百姓共惣領せがれ性質惰弱に而、或は遊所等に耽り、且又博奕を好、公事之下持抔仕、耕作をおろそかにいたし、時々御咎に逢候而も嗜不申者、親病死後相續仕候而も無程及潰可申躰に付、親存命之内に跡式相續爲仕、惣領せがれ一生懸り人之様に仕養育致度与相願申者も御座候得者、是も御例相知ハ不申故相見合居申儀に御座候。前ヶ條之通一家一門納得之上、村役人詮議仕、十村廻り口相糺相願候ハヾ、御聞届可被下哉奉伺候。尤惣領忰右之首尾に而、二男三男無之に付、一門之内より筋目之者養子に相願候歟、又者他人に而も同様に可被仰付哉、御寛申上候。畢竟ヶ様に被仰付候はゞ、懲ゞにも相成可申哉与奉存候。已に肝煎幷組合頭・藏宿等者、是迄右之振合も御座候。

御附札

本文見届候。時々詮議之上聞届可申儀も候條、村役人等手前得与相糺、裁許十村・廻り口御扶持人致詮議、連名を以書附可指出候事。

一、百姓二三男少々取高いたし、一名之百姓に相成居候得共、親或は兄之家に致同居、未家建不申者等、外百姓之養子に罷成、自分百姓名を親類之者等へ譲り申度与相願申者御座候。未家之百姓本家筋へ養子に参り候儀者、前々より御例も御座候得共、親類に而も無御座方へ養子に罷越候儀、是迄御例相知不申に付、指扣置申儀に御座候。自分持高本家へ取添等に相願、養子に罷越候而者、百姓一軒絶申儀に御座候得ども、自分跡式親類等へ譲り候而養子に罷越候得者、百姓数も減不申儀に御座候間、御聞届可被下哉奉窺候。

御附札

本文無據願之分者、格別詮議之上、品に寄聞届申儀も可有之候。併跡高譲請候者手前相糺、身近成親類等曁村役人より高方縮之請合證文取立、委細之儀書附可指出候。役所詮議之上可申付候事。

右三ヶ條之趣諸郡へ可申談置候事。

午　正　月　　　　　　改　作　奉　行

内島村に處
申[illegible]渡罰

右ヶ條御詮議之上、否被仰渡被下候樣奉願候、以上。

寛政九年七月　　　　　　　　　　　　　内島村　孫　作

御改作御奉行所

別紙御伺申上候處、御附札之通被仰渡候。御郡々御寫取、納より私方に御返可被下候、以上。

午正月二十日　　　　　　　　　　　　内島村　孫　作

諸郡御詰番中

二月朔日。今日より三日まで前田利家の二百回忌を寶圓寺に執行す。

〔政隣記〕

高德院樣二百回御忌御法事相濟候爲御祝詞、來月四日御用番宅迄可被罷越候。幼少・病氣等之面々者、以使者可被申越候事。

右之趣夫々可申渡候、以上。

正月二十七日　　　　　　　　　　　長　九郎左衞門

津　田　權　平殿

〔政隣記〕

二月朔日より御法事に付月次出仕相止。今朝寶圓寺に拜禮に可罷出處、御施行方御用に付、

三日右御用相濟次第罷出候段、昨日御法事御奉行に及御届置候事。

二日・三日御法事無御滯相濟。

四日前記之通に付、爲御祝詞御用番御宅に參出之事。

〔横山氏日記〕

二月朔日　雪降

一、高德院樣二百回御忌御法事、今日より當三日迄於寶圓寺御執行有之に付、今朝六時過より御寺に左之通相詰候事。

總御奉行

又兵衛

御寺に不相詰　河内守

安房守

三郎

隼人

又五郎

二月十日。前田利家の二百回忌法會を終りたるを以て赦を行ふ。

〔政隣記〕

二月十日左し人々御咎御宥免被仰付。

逼塞	高田牛之助
指扣	菅野嘉右衛門
指扣	宮崎儀三郎
指扣	神保金十郎
閉門御門、御格之通遠慮	永井儀右衛門
同上	青木友右衛門
同上	今村三右衛門
同上	根來三九郎
同上	金石與左衛門
同上	不島與左衛門
遠慮	村上定之助

指扣　作　七兵衛

大石儀右衛門弟、徘徊御差留　大石半次郎

遠慮　安宅三郎左衛門

附、此度之御咎御宥免無之人々左之通。

前田兵庫

森　榮左衛門

青木左仲

行山次郎太夫

有澤數馬

二月十三日。前田綱紀の子雅十郎の百回忌法會を金澤寶圓寺に營む。

〔横山氏日記〕

二月十三日　天氣吉

一、花心院樣百回御忌御茶湯、今日一朝於寶圓寺御執行、初辰之刻に付、隼人儀六半時前より御寺に相詰、御名代御代香相勤、八時前直に登城、無御滯御執行相濟。

二月廿一日。能登惣持寺に安置する前田利家の木像の修理を命ず。

〔毎日帳書抜〕

二月廿一日

一、能州總持寺に御安置之高徳院樣御像、御彩色等損候付修覆之儀同寺より相達。依之會所棟取御算用者一人、古物裁許足輕一人、并佛師一人指遣爲致見分候上、御入用入札に申渡、松井左運に申渡候儀、伺之通被仰出申渡候事。

二月廿八日。本多安房守叙爵を謝する爲江戸に向ひて金澤を發す。

安房守は本多政成

〔政隣記〕

今般拙者儀江戸表に罷越候に付、明後二十八日致發足候留守中相組御用之儀、前田大炊に申談置候。急成事之儀者大炊に直に可被相達候。其外不依何事紙面等此方迄可被指越候。爲其如此に候、以上。

二月二十六日　本多安房守

津田權平殿　但同組連名

二月二十七日安房守殿叙爵爲御禮、明日江戸表に之發足に付、今日四時頃御馬廻頭河地才記御使に而御意有之。白銀二十枚・御紋付御羽織一拜領被仰付。

但一汁五菜之料理等被出之。相伴自分之事。

二月廿九日。珠洲郡法住寺の住僧年頭御禮の際不敬の行爲ありたるを以て押隱居を命ぜらる。

［袖裏雜記］

左之趣准例不見、寺庵方之内頭寺を離押訴仕候者有之候へば、寺社方より致借牢入置候儀も有之旨申聞候。今般法住寺儀、先達而知職願之趣に付而之儀候へば、幾度も願出可申か、如何樣とも申聞方も可有之處、御規式中殊御目通において不敬之儀に御座候。か樣成儀ゆるやかに被成置候而は、却而心得之御縮方にも相障可申、急度御咎も可被仰付哉に候へども、愚蒙成仕方に而、知職米之一件、寺之爲を存段々願候へ共不叶故、一概に願度より之所存にて、外に邪惡は無御座樣にも相見候處、追院等被仰付候ても、心中之怨甚解ず不申而は、此上又如何樣之訴狀等可有之候も難計、却而御縮方全からざる間敷哉とも奉存候間、左之通可被仰渡哉と二月廿九日伺。伺之通と御意。

寺社奉行に

能州吼木山　法　住　寺

右法住寺儀、去月六日年頭御禮被仰付候處、於御前不敬之趣有之に付、被相糺候處、從元祖樣知職御免被成置候處、致中絕、近年右知職之儀度々相願候へ共、難承屆旨申渡候付、御畢

付之處も有之に付、於御前御書取出、御擧當有之候はゞ、右御擧付之儀は明白に相成可申哉と奉存旨等口上書、各添紙面を以差出候付、達御聽候處、知職願之儀は幾重にも其筋を以願方可有之處、其儀無之、御規式中於御目通不敬之至、沙汰之限被思召候。急度御咎も可被成候へ共、其段者御用捨、押隱居可申付旨被仰出候條、可被申渡候事。

右書付等は正月之每日帳にあり。不敬之中には卽御禮之節書物を懷中より取出候也。

三月七日。前田治脩先に徳川家齊より贈られたる鶴を調理して老臣に頒つ。

〔横山氏日記〕

三月七日　天氣吉

一、今日御拜領之鶴御吸物御下被下候旨、表方において年寄中・御家老中・若老一列、御膳奉行木村茂兵衛罷出申演候事。

三月八日。前田治脩十三日を以て參覲發途の期と定め、次いで之を延ぶ。

〔政隣記〕

三月八日、當十三日御發駕之筈に候條、十一日四時より九時迄之内被致登城、可被相伺御機

嫌候。病氣等之面々には御用番宅迄以使者可被申越之旨等之御用番九郎左衞門殿御廻狀出候處、御痛積に而暫御發駕御延引被仰出候間、十一日不及登城旨、翌九日重而御廻文御同人より出。

〔横山氏日記〕

三月十日　曇

一、左之通昨日月番より演述有之候事。

當月十三日御發駕可被遊旨被仰出置候處、當春氣候不順、頃日立歸候餘寒に而、御持病之御痛積御指發、御難儀被成候付、御發駕暫御延引、御保養被成候思召に候。依之御用番御老中江御聞番參上御屆仕候樣、今九日江戶表御聞番江以早飛脚被仰出筈に候。此段可相達旨被仰出候。御發駕暫御延引之儀、御道中奉行江も可被申渡旨被仰出候。

三月十一日。東西本願寺の使者金澤城に登りて前田治脩の厚誼に對し謝す。

〔政隣記〕

三月十一日從兩本願寺御使者登城、石川・河北・橋爪之三御門江大組頭・御持頭・與力召連罷出。

東本願寺御使者　御用人領金二百兩　横田主水

御進物　立關一箱五懸。羽二重一箱五疋。海月一桶。御目錄。

餘寒之節彌御勇健珍重被存候。先般於乘州御林立木被致拜領候。用材取入之砌、夫食米幷運送方等御聞濟被成進、都合能相整不淺滿悅被致候。右御挨拶以使被申候。隨而目錄之通被致贈進候。

取次御奏者　前田兵部

右御直答可有御座所、就御風邪に前田織部（家老役）を以御答有之。二汁五菜之御料理、御濃茶箱後御菓子迄被下之。相伴組頭多田逸角。且御使者主水自分獻上左之通。

御太刀一腰。御馬（代銀一枚）一疋。目錄。

右御使者退出後、旅宿東末寺迄、御使者御大小將長瀨善次郎を以、白銀五枚御目錄被下之。且登城之節途中同道御馳走方、御大小將阿部波江。

西本願寺御使者　御用人　藤田大學

御進物　御太刀一腰。干鯛一箱。御馬（代金十兩）一疋。御目錄。

春寒之節御座候得共、彌御堅勝御在國珍重思召候。今般越中勝興寺緣邊之儀、段々御懇意御取扱に而、婚禮無御滯相整候趣、於御門主茂不淺御大慶思召候。依之目錄之通被進候。不相

替御懇情被成進候様御願被成候。右御挨拶旁被仰入候。

取次　永原久兵衛

右御使者大學。自分獻上扇子一箱・鯣一箱・目錄。御料理等都而前條同斷、相伴高田新左衛門。

右兩御使者御馳走方主附、御馬廻頭高畠五郎兵衛・御小將頭和田源次右衛門・寺社奉行品川主殿。

一、從東本願寺用材取入爲御挨拶、年寄衆等幷寺社奉行・御算用場奉行へ、茶宇島袴地箱入・鰹節箱入、夫々階級を以御使者に而被下之。町奉行・町同心、且其御懸り之門番・越中庄川御郡奉行・寺社方與力・御算用者懸り之分等、都而右一件に携り候人々へ、丹後袴地・鰹節夫々階級を以、御使者或御使僧を以被下之。

三月廿三日。大聖寺侯前田利考參覲の途金澤城に登る。

〔横山氏日記〕

三月二十三日　天氣吉

一、飛驒守樣今般御參勤、夜前松任御泊、今朝五時頃此表御旅宿へ御着に付、追付御使者御近習頭不破五郎兵衛被遣候由。且今日御登城に付、右御用懸り一統五時揃、年寄中等布上下

着用、五半時過より段々登城之事。

〔政隣記〕

三月二十三日飛驒守様就御登城、月次經書相止候段、御月番被仰渡候由、御横目中より一昨日申談有之。且今日右に付、三御門朔望等之通御先手勤番有之。將飛驒守様昨夜松任御泊に而、四時前御旅館へ御着、九時前御登城之所、御疱瘡御保養中に付御對顔無御座、御料理被進之、御相伴叙爵之人々登城無之に付、前田大炊。右相濟、橋爪御門御塀端通御廣式へ被爲入、正姫様御對顔御菓子等被進、八時過御歸。

三月。諸郡御扶持人及び十村等にその管轄の巡視を懈ることなかるべきを告ぐ。

〔司農典〕

諸郡御扶持人并十村組々村廻り之儀に付、寛政四年紙面を以嚴重申渡置候處、其内無怠入情相心得候人々も粗及承候得共、今以心得違之人々有之、加州・能州之内に者別而等閑之族有之躰相聞、沙汰之限之趣、畢竟情弱之至りに候。先達而も申渡候、繁々致廻村其様子得与致會得、諸事心懸用ひ、無油斷不致勢子候半而者、末々能行屆不申儀、裁許等被仰付置候詮無之事に候。依而人別逢穿鑿、急度可申付儀に候得共、此儀は致猶豫候。以來無怠繁々相廻り、諸

事遂穿鑿、見聞之樣子尤可致注進候。併指懸り申御用等有之、延引に相成候儀者格別之事に候條、其段紙面を以可及案内に候。別而御扶持人之儀者、其御郡之萬事功者に無之候半而者、指懸り申渡御用等も指支申筈に候條、廻り口村々者不及申に、御郡中春秋兩度相廻り、見聞之趣委細可及注進候。如此申渡以後相怠申人々、少しも無猶豫急度可申付候。且亦御郡に寄、裁許村々不通例願方暨僉議方等、廻り口御扶持人ゟ不致示談、人々切に書付等指出申樣成儀も有之候。指定申願等之外、僉議可有之儀者、都而廻り口御扶持人申談、書付可指出候。尤品重き儀、御郡御扶持人一統遂詮議候上可申斷候。併平十村より御扶持人ゟ及示談に候儀を、私之意地構、彼是申立指押候樣之儀自然有之候はゞ、無泥拙者共ゟ直に可申聞候。右等之趣無違失嚴重可相心得候、以上。

戊午三月

林彌四郎
山岸七郎兵衛
小谷左平太
江上清左衛門
前田源六郎
中村宅左衛門

三月。大聖寺藩の照會に應じ、加賀藩の士が大聖寺關所を通過する際の作法を告ぐ。

御家老は大聖寺藩のなり

〔袖裏雜記〕

大聖寺御關所、御家中之者通り候節之儀、寛政十年三月御家老より尋來り候付、泰雲院様東海道御通之節、御行列奉行より觸出候趣を以、御供に候へば笠を取騎馬之儘致御供、無左候へば、笠を取下り立罷通候振合之旨、御用番九郎左衛門より及返書。右御行列奉行より觸出候者左之通也。

一、大聖寺・柳ヶ瀬・荒井・箱根

右四箇所御關所、何も御行列立申候。大聖寺・荒井・箱根御關所者、騎馬御供之面々笠取、騎馬之儘御供可仕候。非番等之面々、笠取下り立候而罷通可申候。尤御行列歩御供之面々、幷末々迄笠取罷通可申候事。

一、御着之町分品川――

八　月　　　　　　　　　　　御行列奉行

御　横　目

四月四日。前田治脩金澤を發して江戸に赴く。

〔政隣記〕

四月四日四時頃御機嫌克御發駕。其節は至而微雨。御供御家老横山藏人、御近習御用人持組石野主殿助、組頭並勝尾半左衛門等、御筒支配生駒傳七郎御近習、御持頭、御弓支配菊池九右衛門物頭並、聞番、御長柄支配御大小將篠原與一郎、御道中奉行兼御行列奉行御小將頭野村伊兵衛、御歩頭兼御用人岡田助右衛門、御歩頭中川平膳御道中御近習騎馬、御大小將御番頭仙石兵馬同上、御大小將横目永原五左衛門・大脇六郎左衛門。但七日魚津に御着之所、片貝川等滿水に付、十日夕七時迄御逗留。十三日牟禮に御着之所、筑摩川滿水に付十五日迄御逗留。同日善光寺驛迄被爲入候得共、いまだゞ高水に付翌十六日迄御逗留、同日御發駕。且又熊谷驛御泊之筈に候處、指支之趣有之御泊所違、二十一日蕨御泊、翌二十二日御着府之事。

〔御年譜〕

御家老詰津田玄蕃、御供横山藏人。九月より御年寄中又兵衛、依而玄蕃罷歸。御歩頭中川平膳、兼御用人岡田助右衛門。

四月廿二日。前田治脩江戸に着す。

〔三壽御譜〕

四月廿二日江戸御着。同廿五日上使戸田采女正。御口中御痛に付、同廿八日御參勤御禮上物以御使者被指上。此時御供横山藏人。

日記に、三月廿二日御懸日早飛脚夜前到來。來る四日御發駕。同十七日江戸表ゟ御着之旨被仰出。併四月十七日之儀、御着之儀如何可有御座哉との御詮議にて、今日御日柄御治定不被仰出候。拙者共よりは御日柄にても御着不指支候間、御祥月にても苦ヶ間敷、去共御道中にて御逗留御座候ての御日柄とは品違可申。御着に御指支は無御座候へ共、此上は思召次第之旨申上。明和年中細川越中守殿にも、四月十七日江戸御着之由、御用所に奉札留に有之。御日柄に御着御指支無御坐と申御書付到來之旨も申上置。折節御用所に右書付今日見當り不申候。○廿三日御次御用有之、今日四時過菊池氏當番。右衛門。九自分罷出候處、御用部屋より御發駕來月四日と被仰出、江戸御着四月十七日之御鬮りにて、十七日御祥月にも御座候間、早飛脚を以江戸表ゟ猶更御用所より尋に參り、右御樣子次第十七日又は十八日御着之筈に相極候旨にて、九時過罷歸。此時御道中川之指支御逗留被遊、四月廿二日御着府被遊。○安永七年四月十日留、井上河內守殿被仰聞候旨、大目付横田備中守殿より御書付寫。參勤之諸大名幷遠國御役人等御當地參着之儀、御精進日にても不苦候間、勝手次第可有參府候。尤屆に被相伺候儀も不苦候。右之段可被相達候。已上四月。とあり。

五月十一日。前田齊廣歸國の暇を受く。

〔政隣記〕

五月二十五日、昨夜御用番安房守殿依御廻文、今朝五時致登城候所、四時頃柳之御間列居、御年寄衆等御列座、安房守殿左之通御演述。畢而於横廊下、左之覺書披見直に廻勤す。

筑前守樣御國許江之御暇御願置被成候所、去十一日以上使本多彈正大弼殿、御暇被仰出、御卷物御拜領。從大納言樣も、以上使水野出羽守殿、御卷物御拜領被成。從御臺樣も以中島伊豫守殿、御卷物御拜受。同十五日爲御禮御登城被成候所、於御白書院御目見被仰上、其上御着座に而御懇之上意、殊御鷹・御馬御拜領被成、重疊難有御仕合に被思召候。相公樣にも御登城、右御禮可被仰上處、御持病之御痛積に付、其御儀不被爲在候。此等之趣何も江可申聞旨、拙者共迄以御書被仰下候事。

付札、御横目江

今日御弘之爲御祝詞、今日・明日之内年寄中等宅江罷出可申候。幼少・病氣等に而今日登城無之人々者、向寄より傳達、爲御祝詞、御用番宅江以使者申越候樣可被申談候事。

五　月

〔齊廣樣御傳略等之内書拔〕

五月十一日上使執政本多彈正大弼忠籌を以て、初て金澤に之御暇仰出さる。卷物二十御拜領。西丸より水野出羽守忠友を以卷物十賜る。御臺君より御用人中島伊豫守を以て縮緬五卷を賜るなり。

同月十五日御白書院に於て右御禮仰上らる。御懇之御諚有て御鷹一据・御馬一疋賜る。

〔續德川實記〕

五月十五日、月次拜賀例のごとし。中略、松平越中守定信・松平筑前守齊廣はじめ三人、就封の暇たまふ。

五月十五日。金澤に於いて諸士に前田治脩の着府を告ぐ。

〔政隣記〕

五月十五日月次出仕、四時前年寄衆謁。其節左之通御用番安房守殿御演述、座上より恐悦申述退出。

相公樣前月二十二日御着府之所、同二十五日上使戶田采女正殿附御老中を以、御懇之被爲蒙上意、同二十八日御參勤之御禮可被仰上旨等、前日御奉書之處、御口中御痛に付以御使者御獻上物相濟候。此段爲承知申達候。

附記、御家老津田玄蕃・横山藏人獻上物に、兩御丸に持參、御納戶に相納与云々。

五月十九日。前田齊廣江戸を發し歸國の途に上る。

〔筆のまに〳〵〕

一、筑前守樣御國許に之御暇被仰出候へば、當月十九日御發駕被成候樣被仰進候旨、五月二日之急使今日着申來。御泊附左之通。

江戸　蕨御中休　浦和御泊　鴻巣御中休　熊谷御泊　落合新町御中休　板鼻御泊　坂本御中休　追分御泊　海野御中休　榊御泊　丹波島御中休　牟禮御泊　關川御中休　荒井御泊　長濱御中休　能生御泊　青海御中休　泊御泊　三日市御中休　魚津御泊　下村御中休　高岡御泊　今石動御中休　津幡御泊　金澤。

〔齊廣樣御傳略等之內書拔〕

五月十九日江戸表御發駕。六月朔日金澤に御着なり。是は治脩公御願有之に依てなり。同日御謝使として人持前田修理知周を東武に遣さるゝなり。

五月廿二日、前田吉德の子利實の三十三回忌法會を寶圓寺に營む。

〔政隣記〕

瑞龍院樣三十三回御忌御茶湯、當五月廿二日一朝於寶圓寺御執行有之候。右之節御家中普請・鳴物等不及遠慮候。乍然御寺近邊に罷在候者は、御茶湯御執行之內自分に指扣可申候。此段

組・支配江被申渡、組等之内拔許有之面々は、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

四月廿五日　　奥村左京

五月廿三日。前田吉德の女暢姫江戸に歿す。

〔筆のまに〳〵〕

六月二日

祐仙院樣御滯之處、四月以來御浮腫有之、段々不御宜、御指重り之趣、前月廿四日江戸發足町飛脚早飛脚歩、今日津田玄蕃等より申越。又早飛脚歩に傳附、以紙面伺御機嫌。

但、實者廿三日晩六時頃御逝去之由也。

五月廿三日。金澤に於いて高田藩の士一時蹤跡を失す。

〔政隣記〕

五月二十三日昏頃、金澤森下町手判宿中條屋八郎兵衛方に、侍旅人三人従僕六人（榊原式部大輔殿御家中、一人は頭、二人者組士之由云々。）驛馬に乘來泊候所、右頭役之士翌朝行衞不知。依之八郎兵衛より町會所にも及屆、手配りを以相尋候得共相知れ不申。依而殘る兩人之侍も逗留、然所前日爲乘來候驛馬之馬士、粟ヶ崎街道藪之内を則馬牽通り候所、昨日爲乘候侍右小

藪之内に臥有之。不思議に付側ゟ立寄樣子尋候所、昨夜旅宿に休息、其後之儀覺無之。何とぞ右旅宿ゟ迄送り屆候樣にと賴に付、則馬に爲乘右中條屋ゟ送り來り候處、何も尋中に付大に悅ひ、暮前に出立、津幡驛迄通行。右之士氣滯等に而も無之、寔に怪異之事与云々。

但、右馬士ゟ爲褒美、從町會所金小判一兩與へ有之候由之事。

五月廿五日。前田吉德の女暢姬の喪を發す。

〔政隣記〕

六月三日左之御廻文夕方到來、依而翌四日御用番御宅ゟ常服に而參出。

岫仙院樣御氣色御滯被成候所、不被爲叶御療養、前月二十五日御卒去之旨江戸表より昨夜中來候。依之爲伺御機嫌、頭分以上之面々今明日之内御用番宅迄可被罷出候。幼少・病氣等之人々者以使者可被申越候。

一、普請者昨日より三日、鳴物等者來る八日迄日數七日遠慮之筈に候。

右之通組・支配之人々ゟ可被申渡候。且又組等之内裁許有之面々者、其支配ゟ茂相達候樣可被申聞候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月三日　長　九郎左衛門

別紙之趣可被得其意候、以上。

六月三日　本多安房守

津田權平殿　連名如例

六月朔日。前田齊廣金澤に着し金谷御殿に入る。

〔政隣記〕

筑前守樣來月朔日津幡より御着之筈に候條、御着之御樣子被承合、爲御祝詞御用番宅迄可被罷出候。幼少・病氣等之面々者、以使者可被申越候事。

右之趣可被得其意候、以上。

五月二十九日　本多安房守

津田權平殿

〔筆のまに〳〵〕

六月朔日

一、筑前守樣前月十九日江戸御發駕之事前條之通にて、御泊附之通御遲留も無之、益御機嫌好、今晝金谷御殿に御着被遊候之事。

〔三壺御譜〕

六月朔日金澤御歸着、金谷御殿に爲入玉ふ。御年十七歳に被爲成。表向十九歳なり。津幡御泊にて朔日四半時前御着なり。御供御家老代人持成瀨監物・横濱善左衛門。

六月六日。徳川家齊、奉書を以て前田齊廣に暢姫の逝去を弔す。

〔政隣記〕

六月六日、今度諦仙院樣就御卒去に、筑前守樣に以御奉書御尋。依之爲御禮御馬廻頭九里幸左衛門に御使被仰渡、同八日發出。

六月十二日。昨今兩日寶圓寺に於いて前田重教の十三回忌法會を執行す。

〔政隣記〕

六月十二日、昨今於寶圓寺泰雲院樣御十三回忌御法會御執行有之。

七月七日。前田治脩出府の後初めて柳營に上る。

〔筆のまに〳〵〕

七月七日

一、相公樣御痳邪等御快、今日兩御丸に御登城。御下り之節御老中方御勤。御歸館以後御表に御出之節、拙者共於御居間書院御前に被爲召、御痳邪等御快、御參府後今日初而御登城被

筆は執筆の意

本文は金澤に於いてなり

五月廿三日は宣に逝去の日なり

成候處、就右御慰之被爲蒙上意、難有被思召候由御意に候。右之趣各にも可申遣候旨被仰出候旨、且右之趣、此表頭分以上之人々にも不急度可申聞旨被仰出、筆へ申聞、夫々演述有之候樣申談候由。

〔政隣記〕

八月朔日月次出仕、四時前御年寄衆等詰、左之通御用番御演述、座上より恐悦申上相濟、

相公樣御痛所等御快被成御座、前月七日御參府後初而御登城被遊候處、就右に御慰之被爲蒙上意、難有被思召候旨、拙者共迄被仰下候事。

七月十一日。前田吉德の女暢姫の忌辰を改めたることを告ぐ。

〔政隣記〕

七月十二日左之通御組頭安房守殿より如例御廻狀有之。

結仙院樣御祥月五月二十五日に候得共、思召に而五月二十三日御振替に候。依之每月二十三日、御家中諸殺生差扣可申旨被仰出候。尤二十五日に者扣候に不及候。

右之通被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配にも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月十三日。現時通用せざる古銀を交換すべき幕令を傳ふ。

〔御郡典〕

慶長以來於銀座吹立候慶長銀・元祿銀・寶永銀・永字銀・三寶銀　四寶銀・享保銀之分、吹改候度每通用不相成銀に付、不貯置、其時々銀座に指出、新銀に引替可申旨相觸候處、不殘引替に不指出、當時右口々古銀之分引替殘有之哉に候。當時通用無之品、貯置候而も無益之事に候。猶亦此度年限相立候間、當午五月より來る酉年迄三箇年之內、早々銀座に指出、通用銀に引替可申候。代銀左之通。

一、慶長銀十貫目に付、此代通用銀十一貫二百目。

一、元祿銀十貫目に付、此代通用銀八貫九百六十目。

一、寶永銀十貫目に付、此代通用銀七貫目。

一、永字銀十貫目に付、此代通用銀五貫六百目。

一、三寶銀十貫目に付、此代通用銀四貫四百八十目。

一、四寶銀十貫目に付、此代通用銀二貫八百目。

一、享保銀十貫目に付、此代通用銀十一貫二百目。

右之通定代銀を以、於銀座に引替候等に候間、此節より右年限中右銀所持之者、江戸・京・大阪・長崎銀座ゟ勝手次第指出引替可申候。萬一心得違に而不引替向之者も於有之に者、吟味之上急度可申付候。

一、灰吹銀之外潰銀類、銀座幷下買之者ゟ賣渡、銀道具下銀入用之節銀座より買請、他所に而賣買致間敷旨。且通用銀二朱判幷銀具焼損等之分、銀座ゟ不指出、外に而賣買いたし候者も有之趣に相聞候。先年も相達候通、彌右躰之儀無之樣急度相守可申候。

右之通可被相觸候。

五月

安藤對馬守殿御渡候御書付寫一通相達候條、被得其意、答之儀者池田筑後守方ゟ可被申聞候、以上。

午五月十二日　　大目付

御名殿留守居中

慶長銀等通用不相成分、新銀引替之儀に付從公儀相渡候御書付寫一通一緤二通相越之候條、被得其意、組中・支配人々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之面々は、其支配ゟも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

戊午七月十三日

長　大隅守

奥村河内守

高田彌左衛門殿

七月廿五日。波吉三藏絞殺せられ、その下婢等寃罪により拷問を受く。

〔政隣記〕

七月二十五日夜、波吉三藏宅に心祝有之得客、亭主三藏も酩酊、及曉天に客歸、三藏休臥、翌二十六日朝起出不申に付、相改候處死有之、首邊に繩跡等有之、吐血夥く、全他殺之躰に付、町檢使町同心大平直左衛門　兩人罷越見分、猶又僉議之上、公事場檢使與力見屆相濟、多分下女幷隣家貸替屋仁兵衛所爲之躰に付、於町會所拷問有之。八月二日於公事場も拷問有之候得共不申顯。併尤兩人共令牢舍有之、段々吟味有之候處、右下女幷仁兵衛所爲に而無之に付、寛政十二年春右兩人共出牢之事。

但、三藏を令殺害候者相知れ不申候事。

七月廿八日。本鄉邸内の貸小屋に落雷す。

〔政隣記〕

七月廿八日江戸。昼後より曇強く、七時過より頻に黒雲覆、無程大雨如傾盆、其間雷鳴光甚強一聲敷、御上邸之内又兵衛坂之高石側地蔵堂續御長柄小者小頭小林仙蔵御貸小屋之内に雷落、破風口より窓之方に落入、屋根三尺計明き、掻裂跡柱等に数多有之。暫時之間硫黄臭く有之、人損は一圓無之候事。

附記、明和九年にも右御上邸長屋之内大杉之邊にも雷落。

右之外江戸中所々、雷落候ヶ所数多有之。

八月十五日。前田治脩と婚約せる大聖寺侯前田利道の女正姫の呼稱を改む。

〔三寺御譜〕

八月十五日、正姫君御事正姫君と御唱替被成。

〔筆のまに〳〵〕

八月廿四日

一、正姫様御名、正姫様と御唱改之儀、今日御用番より夫々觸出。

但、公方様姫君様御出生、格姫様と奉申故也。

八月廿一日。前田治脩、尾張侯徳川宗睦の邸に臨む。

〔政隣記〕

八月廿一日、尾張様ゟ相公様御招請。

八月廿五日。石川・河北兩郡の用水等に釣魚を試むるもの、作物を害することを禁ず。

〔政隣記〕

石川・河北兩御郡用水溜・江川々々ゟ、御家中幷町方より鮒・鯰等釣殺生に多罷越、作物踏荒、幷川除等御普請方にも指障、其內亂行之族も有之、百姓共及難儀候間、御家中之人々等釣殺生等に罷越候節、右之族無之樣、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配ゟも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

八月二十五日　　長　九郎左衞門

別紙之趣可被得其意候、以上。

八月二十六日　　本多安房守

津田權平殿　但同組連名前々之通。

九月八日。德川家治の十三回忌法會を神護寺に執行す。

〔政隣記〕

八月十九日、浚明院樣御十三回忌御法事、來月八日於神護寺御執行に付、奧村左京殿より之御觸狀爾通、例之通安房守殿御廻文を以今十九日到來。

九月十五日。二ノ丸御殿に於ける講書は四書のみに限ることゝす。

〔御夷雜記〕

二ノ御丸においても月次經書講釋、當月八日に而中庸不殘濟候間、廿三日より五經に移講可申哉。最初論語より講始、大學未講候間、大學講可申哉之旨御儒者申聞候旨等、御横目神田十郎左衛門申聞候。元來公邊に而之月次講に被准候哉にも奉存候。公邊に而は四書迄に候哉。於其表御讀有之候はゞ相知可申、當廿三日迄に御報不來候はゞ、大學講候樣可申渡旨等、九月四日江戶へ申遣、江戶に而開番より聞合候處、左之通に付則入御覽、大學講釋有之候樣伺候處、伺之通被仰出候旨、同月十五日返書。

山本宗朴　聞合

一、講釋定日每月十日に而御座候。十日相闕候而延引候へば、十二日・十四日・廿日・廿四日之

本文は幕府の講書なり

内に相成申候。いづれ月毎に一度充に而御座候。但正月・十二月は無之樣に覺申候。
一、講釋者定式山吹之間より雁之間に而御座候。
一、講釋者四書許に而御座候。當時は孟子離婁下篇之內歟と覺申候由御座候。大學・論語・孟子・中庸ヶ申順に、段々有之候。
四書講釋不殘相濟候へ者、大學頭ゟ時服等被下候。
右之ヶ條承合候へども、書留等無御座故相知不申候付、大學頭登城を相待、日々心懸候へども、不快に而登城無之、今日登城に付承之、私共兼而覺居申候儀共も相認上之申候、以上。
九月十四日

九月廿三日。犀川に於いて漁撈する者は川師より見合札を受くべきことを告ぐ。

〔政隣記〕
當町淺野屋吉兵衞与申者、當午年より犀川諸魚請負申付置候。然處前々より御家中之人々等初、都而自分に致川殺生候人々、川師方ゟ相屆、見合札を受可致殺生筈に候所、近年猥に相成、川師方へ不相屆致殺生候人々有之躰に付、運上銀致不足及難儀候。釣獵之外、諸殺生人川役銀定之通指出、札を請可申。其外鮭川之時節、下川筋に而投網等猥に打候に付、梁登候

魚落魚に相成候。惣而川を荒し候故職業之障りに成、川師致迷惑候段、町奉行申聞候條、以來右之類無之樣相心得可申候事。

今月は九月

右之通得其意、組・支配之人々に可申渡旨等、今月二十三日於金澤御用番奥村左京殿御廻狀寫に例之通安房守殿御添書を以申來候旨、代判人より告來候事。

九月廿八日。尾張侯德川宗睦本鄉邸に臨む。

〔政隣記〕

九月廿七日陰、晝より快天。夕番。明廿八日尾張樣就御招請、朝六半時揃与又兵衛殿被仰聞候由、御横目中申談。且右一件左之通。

大納言樣御出之節御作法

一、大納言樣御付人、御屋敷前・小石川邊・本鄉三丁目、并付廻共二人宛付置可申候。

一、御出之節、年寄中・御家老敷附より一・二尺御白洲へ罷出可申候。人持・組頭・物頭等御白洲中程に罷出可申候。聞番御門外に罷出、御駕籠御玄關迄被爲召候樣、御供人迄可申達候。

一、御前御玄關鑑板へ御出、飛驒守樣・前田信濃守殿・前田安房守殿等敷附右之方へ御出、御先手衆等同左之方に御出。安藝守樣・若狹守樣之內御出被成候はゞ、御廣間上之間御床之方に御扣、御前御先立、御大書院へ御通可被遊候。

但、御刀持御大小將御式臺敷付左之方へ罷出、御刀持可申候。御大書院取付之御廊下より御表小將持之、御刀懸に直可申候。

一、御刀懸御大書院御下段御障子際に一腰懸出置、御刀直之可申候。

但、御小書院に而は御棚之方に御刀掛出置、直之可申候。

一、松平彈正大弼殿御付人、御宅・本鄉三丁目二人宛付置可申候。

一、右御出之節、年寄中・御家老敷付、頭分敷付居こぼれ罷出、組頭御先達可仕候。御前御廣間二之間折廻し邊迄御出向、先御小書院溜に御誘引被遊、御挨拶、被爲入、御茶・たばこ盆出之。大納言樣被爲入候はゞ御案內仕、御小書院へ御通被成候樣可仕候。組頭指合候はゞ頭分御先立可仕候。

一、御刀掛御床脇へ出置、御表小將直之可申候。

但、御廣間御杉戸之內に御表小將扣罷在、御刀御渡被成候はゞ受取、直之可申候。

一、大納言樣御上段之方に御着座被遊、御前御出、御向座に少御ひずみ御着座被遊、馬代金御表小將持參置之、御太刀又兵衞披露、御手屆候程に置之。御前御手を被添、御頂戴之御樣子に而、御挨拶相濟引之。御挨拶之上御小書院へ御誘引、御着座之上御熨斗(木地三方)・置熨斗出之。御取持衆御挨拶之上引之。大納言樣へ御吸物御前御持參被遊、直に御向座に少御下り御

着座被遊、御前にも御吸物上之可申候。

一、御土器木地三方・御肴同出之、大納言樣へ居之、長柄之御銚子御加共有之。御挨拶之上、御土器大納言樣御初、御土器御前へ被進、御肴も被進、御結。此時御勝手より御肴改出之、御立向、御敷居際に而御取被遊、御肴被進。御嘉儀御先手衆。畢而御肴三方より段々引之。大納言樣御吸物御膳も御給仕人引之可申候。

但、御土器三方御酌より上之。

一、大納言樣御したみ御八寸に居、御給事人上之。御前御したみ、御八寸に不載上之可申候。

一、右御盃事之內、彈正大弼殿には御小書院溜へ御披被成候樣、御取持衆迄可申入候。

一、大納言樣御盃事相濟候上、御奥へ御通被成候樣、御前御挨拶被遊候而、御前御床之方より御出向、御奥へ御誘引可被遊候。御居間書院邊迄御前之御先立御家老、夫より石野主殿助等內。御刀御表小將持之、御居間より配膳役持之、夫より御奥へ御刀入。

一、御奥相濟、御前御誘引。御前之御先立等最前之通。御刀御居間邊より御表小將受取、最前之處へ直之可申候。

一、大納言樣御小書院御緣頰之方御着座之上、彈正大弼殿にも御出、御引下り御着座。追付御前御出、御料理之御挨拶被遊、三汁九菜、木具薄盤。出之。向詰御前御持參被遊、彈正大弼殿へは御給

事人出之可申候。御引案、御前不殘御引可被遊候。御酒之上御肴飛驒守樣御持參、御相伴へも御引可被成候。

一、御吸物出、御嶋臺一向・掉共大納言樣に居之。彈正大弼殿御土器木地三方・御肴同有之。御前樣御出、御挨拶之上、御土器大納言樣御初、御前へ被進、御肴も被進、御結。此時御肴御勝手より改出之、御敷居之際迄御立向御取被遊、御肴も被進、御加。御嶋臺・御肴共御取持衆大納言樣御前へ御直し、夫より彈正大弼殿へ御向、御挨拶之上、御土器御前御初、彈正大弼殿へ被進、御肴も被進、御結御肴も被進、相濟御三方御勝手へ引可申候。

一、長柄之御銚子には、最初之御盃事之節迄に而、此所に而は常御銚子出之可申候。

一、大納言樣御盃事之內、寶生大夫等罷出、小謠うたひ可申候。

一、大納言樣より年寄中・御家老等へ御盃被下候者、御先手衆御取計、此所に而御土器木地三方・御肴同大納言樣へ居之。外に數之御土器木地三方御側へ置、御銚子役罷出、頂戴人又兵衞罷出。御敷居之外横疊目に御土器三方直之、二疊目に而御土器頂戴、御肴同、御取持衆御挨拶有之、壁之方へ寄短刀取之罷出、御肴被下、復座、加、御勝手へ退き、御給事人御土器受取持出、御三方へ載之。

御土器御取上之時分、御禮申上退去。次に藏人罷出、右同事頂戴仕。夫より人持・組頭一人

宛罷出、同所に而御土器頂戴、御取持衆御挨拶、短刀取之罷出、御肴被下、加、退き、順に如斯罷出可申候。

一、右相濟、御前御家來へ御盃被下候御挨拶被遊、追付御納之御嶋臺・御掉共大納言様へ居之、最前之御嶋臺与引替可申候。御挨拶之上、御土器大納言様御初、其時御肴被進、御土器御前へ被進、御肴も被進、御加、御納可被遊候。

一、段々相濟、御茶・菓子出之。御濃茶御前御持參被遊、彈正大弼殿には御給事人持參。大納言様御茶碗には、御給事人臺に而引之可申候。後御菓子迄段々引替、相濟、夫より追付御囃子初申に而可有御座候。

一、右御囃子之内、御菓子・御吸物・名酒等指出可申候。尤彈正大弼殿御相伴可被成候。右相濟、夫より御休息之御間へ被爲入候にて、御煎茶等御取持衆へ御示談仕差上可申候。

但、御刀は腰懸、御庫脇に出置、御刀直之可申候。

一、御庭に御出被遊候はゞ、間番先立仕、其先に三十人頭案内可仕候。御跡より組頭之内一兩人罷出可申候。御亭に而御菓子等之儀は、御近習頭より可奉伺候。御刀持御表小將、御休息之間御縁より罷出可申候。

一、彈正大弼殿御跡より御出被成候にて、是又御刀持御表小將罷出可申候。

一、御取持御先手衆之内、幷御醫師衆之内にも御出可被成候。

一、大納言樣御家老御用人、其外御近習之人々、何も御供罷出、茶屋長意幷に御城坊主衆ら罷出可申候。

一、御庭相濟、最前之通御休息之御間ゟ御上り、夫より御小書院へ御復座之上、御樣子次第後段物類・御吸物・御酒等、彈正大弼殿御相伴に而出之可申候。段々相濟御退出之節、御前敷附右之方へ御出、御一門樣方等最前之通御出、其外前段之通罷出可申候。

一、彈正大弼殿御退出之節、御使者之間御杉戸之外迄御送、其外最前之通罷出可申候。

一、安藝守樣・若狹守樣之内御出被成候はゞ、御付人御宅・本鄕三丁目に付置可申候。

一、御出之節御家老鑑板、頭分敷付へ罷出、組頭御先立可仕候。御前御廣間二之間折廻し邊迄御出向、御誘引に而、御居間書院へ御通御挨拶被遊、御勝手ゟ可被爲入候。

但、組頭指合候はゞ、御先立頭分相勤可申候。

一、御刀懸御床脇御障子之外に出置、御刀直之可申候。

但、御廣間御杉戸之內に御表小將扣罷在、御刀御渡被成候はゞ、受取直之可申候。

一、御料理前御菓子・御吸物・御酒等出之可申候。

一、御小書院御饗應初り候はゞ、差續御料理三汁九菜、淺木具。出之可申候。御引菜御取持衆御持參。

御酒之上、御肴は御給事人引之可申候。御料理之内一度御出、御挨拶可被遊候哉。

一、飛驒守様御溜に而、前田信濃守殿・前田安房守殿御一所に御菓子・御吸物・御酒、其後御料理右同様差出可申候。

一、御取持衆、御居間書院二之御間に而、御菓子・御料理等見計、替々指出可申候。

一、安藝守様・若狭守様之内御退出之節、御使者之間御杉戸之外板之間迄御送被遊、御家老敷付、頭分敷付居こぼれ罷出可申候。

以上

大納言様御出之節伺

一、大納言様御持参之御太刀、先達而参候節、頭分持参に候はゞ、頭分受取可申候。平士持参に候はゞ、御大小將請取申候。

一、御供之御家老、御大小將誘引、御勝手座鋪上之間屏風囲上之席へ相通、懸り之頭分罷出挨拶仕、御茶・たばこ盆出可申候。

但、組頭之内并聞番も罷出挨拶可仕候。

一、御側御用人、右同所下之席、御小將・御近習之面々等御勝手座敷二之間・同三之間に御大小將誘引、夫々相通、懸り之頭分罷出挨拶可仕候。

但、聞番も罷出挨拶可仕候。

一、御供之侍中并御目見已上之人々、御間之内席々へ御大小將誘引、相通、懸り頭分罷出挨拶可仕候。

但、聞番ゟ罷出挨拶可仕候。

一、御前御小書院におゐて、御料理・御引菜御持參相濟候上、御大書院へ御出、二之間御床之順に御着座、御供之御家老（誘引年寄中）被召出、御敷居之内一疊目頭に着座、御意之上二疊目へ進ミ御禮、重而御意有之退去。次に御側御用人、組頭誘引に而罷出、御敷居之外に着座、御意之上御敷居之内へ進ミ御禮、重而御意可有御座候。次に御小將・御近習之面々組頭誘引罷出、是又右同樣御意可有御座候。此外御供人へは御逢被遊候に被爲及間敷哉与奉存候。

一、右御逢前、御供之御家老已下於席々、御菓子・御吸物・御酒等指出、席に懸り之頭分罷出、夫々挨拶可仕候。

一、御逢相濟候後、御供之御家老へ、御勝手座敷上之間屛風圍上之席に而、御料理（三汁九菜、塗木具）出之可申候。御料理之内御酒之内、一度宛組頭御使相勤可申候。年寄中・御家老替々罷出、挨拶可仕候。

一、御側御用人・御小將・御近習之面々并御醫師等於席々、御料理（三汁七菜、塗木具）、出之可申候。懸り

之頭分・間番に罷出、挨拶可仕候。御料理之内、物頭御使相勤可申候。

一、御供之侍中幷御目見以上之面々席々に而、御料理二汁七菜、塗木具。出之、懸り之頭分・間番に罷出、挨拶可仕候。

一、御目見以下御小人頭等、上使腰懸に而一汁五菜之御料理出之、懸り之人々罷出、夫々挨可仕候。

一、御小人組頭・御厩之者組頭已下御手廻之者へは、中御門内饗應所等に而、赤飯・御酒・御肴可被下之候。

一、大納言樣御挾箱幷御茶辨當共、御使者之間へ上置可申候。請取人御歩、御間之内持參人足輕、羽織・袴着用可仕候。但指添人有之候はゞ、御茶・たばこ盆出可申候。御料理は相替り於饗應所被下候樣可仕候。若指添人無之候はゞ、此方樣より御歩付置可申候。

一、茶屋長意罷出候はゞ、御城坊主衆溜に而、御料理二汁七菜、塗木具。且御菓子・御酒等指出可申候。

一、松平彈正大弼殿御供人、幷御一門樣御供人江、御料理等御斷之儀、兼而間番より申遣に而可有御座候。右御供人饗應所等に而、御茶・たばこ盆等夫々指出可申候。

一、御一門樣方初御出之御方々、大納言樣御附人來候以後は、裏御式臺に而取次候樣可仕

候。

右伺、被仰出候事。

九　月

〔政隣記〕

九月廿八日快天、朝六時過御邸出、尾張樣ゟ今日彌御來駕可被下樣に与之御使に參上、五時頃歸。直に御殿へ出、御答書上之、相詰罷在、直に泊番相勤候事。

一、尾張樣四時御供揃に而、同刻過御出、夜五時前御退出。御作法御饗應之次第前後に記之通。且御往來共、御白洲へ頭分十人罷出、御歸之節は寬りと御意有之。御往來共御挾箱御門內へ入、御駕籠御門內中程に而御供頭指留之、御下乘。且御歸之節相公樣へ、寬々御丁寧最早御入与敷付に而御挨拶。其外御一門樣等幷年寄中等へも、寬りと与御挨拶。相公樣於舖付、御供中大儀与御會釋。大納言樣最前之所に而御乘用以前、御供之內より敷付際へ立戾り、最早御入被成候樣に与御使御口上。相公樣へ直に申上候處、被入御念候御儀与之御應答被仰述。

九月廿八日。前田治脩來春歸封の期を延べんことを幕府に請ふ。

〔政隣記〕

九月廿五日、左之通御近習御用石野圭殿助(御用部屋より勤也、)御用人ゟ爲承知申聞有之由承に付記之。

正姫樣、來春御出府之上、御婚姻御整可被成思召に候。然處來年は御暇之御順年に付、如御定例御暇被仰出候はゞ、御暇後五・六月迄には御婚姻御整可被成候間、右相濟御發途被成度旨、當廿八日御用番ゟ御先手衆を以御願書被指出答に候事。

九　月

九月、子なくして死したる百姓跡式の件に關して告ぐ。

〔岡部舊記〕

子を持不申致死去候百姓跡式之儀、親類緣者之内耕作可致丈夫者相撰、一門共に村役人相加り相談、納得之趣連判書付を以願出候舊格に候。然處右緣者共之内御家中致奉公居候者、或は金澤町・遠所其外寺社方等、都而他支配ゟ先々より罷出世帶を持、亦は致奉公罷在耕作之間合不申者も、百姓跡式相談之砌、舊宅之家財等目懸、筋目等申立及爭論、數年納得相揃不申儀、前々より間々有之候所、近年別而此類多相成、失墜之筋茂有之に付、相應に高致所持居候百姓も悉及困窮候樣之趣も有之、甚改作方取治之指障に相成。元來百姓跡式之儀は、耕作慥に可致者第一に相撰候趣に候間、他支配に罷在候者之内にも、筋目之者に而耕作間合候得ば、

尤跡式爲致相續候得共、耕作之間に合不申者に候得ば、何程之筋目に而も難爲相續候。然處是迄之通、他支配之者も願紙面爲致印章候而は、彼是不埒之趣申募、前段之趣共有之候間、以來他支配之分は百姓跡式願紙面印章相省可申候。併相續之儀は身分に取大切之儀に候間、得与爲及相談可申候。乍去無故儀を彼是申立、不筋之取組等致候者は、無貪着相談爲相省、外一類共納得之通可申付候條、其段可申聞。右之趣今度御算用場へも相談之上申渡候條、得其意、末之者にも不相洩樣爲申聞、已後都而百姓跡式願遲々無之、速に爲相願可申候。ヶ樣に申渡候上、別而依怙贔負之仕方等聊も無之樣、嚴重に爲相心得可申候。勿論其方中於手前も、重々入念相糺候上願出可申候、以上。

午九月

野村忠兵衛

林　彌四郎

山岸七郎兵衛

江上淸左衛門

前田源六郎

在遠所　青木彌次右衛門

在大坂　小谷左平太

在大坂　加藤左次馬

諸郡御扶持人・十村中

十月六日。前田治脩、水戸侯徳川治保の邸に臨む。

［政隣記］

十月六日四時過より、水戸様に被爲入、夜五時前御歸殿。

十月十三日。前田治脩、尾張侯徳川宗睦の江戸外山邸を訪ふ。

［政隣記］

十月十三日五時前御供揃に而、同刻御出、尾張様外山之御邸に被爲入、夜四時頃御歸殿、御饗應等有之、御供人にも一汁三菜・御酒・御肴・御吸物等之御料理被下之。其後重而御吸物・御酒・御肴、夜に入御湯漬被下之候事。

但、右外山之御邸内に東海道五十三驛之寫有之、驛々之名物賣店・茶屋等、且寺も三ヶ寺有之、間に村家も有之。御庭客有之節は其眞似御設、寔に東海道通行之如しと云々。將又去る七日、終日公方様御成も有之候故御手入出來、一入活氣共之由也。

十月廿八日。出雲國大社勸化銀を上納すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

出雲國大社勸化銀御身當、幷御組知行高割符仕、左之通御座候間、當十二月廿日切諸方御土藏へ御上納被成、右奉行請取切手御算用場へ御指出可被成候、以上。

十月廿八日　小寺武兵衛

本多安房守樣

十一月四日、德川家齊自ら放鷹して獲たる鴨を前田治脩に贈る。

〔政隣記〕

十一月四日、昨日より上使之御沙汰に付五半時揃之所、九時過上使御使番榊原左衛門殿を以、御拳に而爲御捉之鴨一御拜領。御作法前々之通、御都合克被爲濟。追付之御供揃に而兩御丸へ御登城、御老中方御廻勤、御三家樣へ御普爲聽御使、同役河内山勤。御側衆へも御使、御書院番頭・御使番共差支候に付御大小姓相勤榊原左衛門殿へ上使御勤之爲御挨拶、御使御大小將被遣之候事。

十一月廿一日。水戸侯德川治保、前田治脩に蜜蜂を贈る。

〔政隣記〕

十一月二十一日、從水戸樣御内々、蜜蜂箱入二升、御使者を以被進之。是者先達而御直約に付、御庭之内に御所出來、其所へ右箱を入置、夜者蓋をし、晝は蓋を明置候得者、蜂飛行し

て諸花を吸ひ、及夕景に右箱之内へ歸る。春夏秋は御飼に不及、冬は青木之葉に蜜或は水飴を塗り置、箱之中に而養之。且蜂箱之中に蜜を屁出するを溜て、別器に受蓄諸用に當つと云々。則今日水戸樣蜜方御役人來り、御露地奉行三田八郎左衞門懸合、飼方等承受之。御飼所にも右御役人同道見分有之候上、御料理等被下之罷歸候事。

附、去る十八日にも、御同家樣より御內々御使者御同朋鈴木磊阿彌を以、アッフル一籠御進贈。其節自分當番に而取次候處、當十五日於殿中是も御直約之旨也。アッフル形狀里芋之如く、則芋之屬也。調味之方、薄く批、湯煮し、吸物・煮物等にして水戸樣御賞味有之由。且作り方は春三月植付、里芋之如く度々さくをきり、莖出候ても無構さくを切り懸候方宜し。助けに之致方も芋同斷。十月に入候得ば實入候也。入用之節は八月頃より取出用之。種芋は十月下旬に不殘掘出し、里芋之通り霜氣不申樣に、砂交之土ゐ生け置候。春植付候。地面も砂交り之土地宜しと云々。

十一月廿六日。石川郡八田村領海にて坊主鰐を獵す。

〔筆のまに〳〵〕

十一月廿九日

石川郡八田村領にて、當廿六日鰯網引候處、右網に大成魚かゝり、引上候處、何魚候哉不知、

金澤魚問屋に而承候處、坊主鰐と申由。所により烏鰐とも申由之旨、御郡奉行より一昨廿七日屆紙面幷繪圖も出し候。

右魚口より下長十八尺計、廻り三尺六七寸計。繪圖別に在。

十一月廿八日。百姓の緣組する手續に就いて令す。

〔岡部舊記〕

於御郡方百姓等緣組之儀、雙方裁許十村江書付を以願出、十村聞屆致裏書相渡候上緣組申合之儀、前々より之御條目、則拙者共春秋兩度御郡廻之節御條數書を以爲讀聞、一統致承知罷在候通に候之所、近年猥に相成、緣組之儀不願出、相對を以勝手次第に緣組申合、村方人別無斷致增減、年月經候ても寺替證文も不指出、不埒之族相聞候。元來人別御締方之儀は、御政事方第一之儀に候所、村役人申渡方不行屆、夫々等閑に致置候故、前條不埒之趣致增長候。面々組下右樣之族有之候哉、綿密逐穿鑿、不埒緣組爲相願候歟又は僉議により、嫁付候女は其親元に引返し、御締方相立候樣申渡、追而其品巨細可書出候。

一、前段之通緣組之儀不願出、下にて申合候故、寺替證文も難指出首尾合与相聞江候。右之通下にて緣組申合候により、寺替證文不指出嫁付候女病死いたし候得ば、右女親元旦那寺より可取置旨可申出。乍去相對たりとも正に嫁付居申者に候得ば、夫旦那寺にて可取置段可申

出ゝさすれば不埒之縁組申合候て嫁付候女、死後に至甚申分も可致出來基本に候。以來は嚴重に及穿鑿、前段之族於有之は、第一村役人急度申渡、本人之儀は嚴敷咎之上過怠可申付候條、右之通相糺、人別御締方相立候上、以後之儀嚴重可申渡置候、以上。

午十一月廿八日　　御用番　奥村郡左衛門

御扶持人・十村・山廻り・新田裁許中

十二月朔日、切支丹類族の死亡を幕府に屆出づ。

〔御用雜記〕

古切支丹類族病死之覺

一、加賀國金澤町外科古切支丹幸三娘本人同前ゑん曾孫尾内源右衛門孫尾内安左衛門せがれ尾内長之助儀、當午七月廿七日七十八歲に而、父安左衛門於舊宅病死、旦那寺同國能美郡小松日蓮宗立像寺に而取置申候。

一、松平加賀守家來轉切支丹郡平八曾孫郡勘三郎孫但養子郡長太郎悴郡喜太郎儀、當午十月十四日七十二歲に而、父長太郎於舊宅病死、旦那寺加賀國金澤淨土宗如來寺に而取置申候。

右之通類族二人致病死候。其外去巳十二月より以後、病死等異變之儀無御座候。依之爲御屆如此御座候、以上。

寛政十戊午年十二月朔日　　　　奥村河内守　判

　　　　　　　　　　　　　　　長大隅守　判

松浦越前守様

神保佐渡守様

十二月四日。本郷邸の長屋に於いて大小將春日斧人の若黨主人の金品を盗み尋いで死刑に處せらる。

〔政隣記〕

十二月四日夜六時過、御大小將春日斧人外御小屋へ罷越、四時過歸候間に、同人家來若黨小川直助与申者(歳十八)納戸へ忍入、金子七兩二歩・刀・脇指等都合廿七品(着類・火事装束等也。)盗取、南馬場日影町埓より逃去。右に付夫々以書付及斷置候處、年寄衆等より割場奉行へ召捕方等内々被仰渡、其手配出來に付、右直助儀境町於芝居座、御先手火付盜賊改御役池田雅次郎殿御手合之者召捕禁牢。右贓物似寄爲見分、十三日斧人儀、雅次郎殿御宅へ可差出旨申來候得共、斧人當病に付若黨長谷川貞助爲名代差出、聞番長瀬五郎右衛門召連罷越候處、懸り之與力罷出、於御吟味所似寄物貞助へ見分申付、無相違段申答候處、直助詮議之筋落着迄は斧人へ被預置候由に而、右廿七品幷金子四兩相渡候事。

但、三両二歩は直助遣ひ失候由。且又廿九日落着に付、重而被呼出、小川直助儀死刑に被處候。依而被預置候品々相渡之段、御申渡有之候事。

十二月廿一日。徳川家齊夫人歳暮の祝儀を前田治脩に贈る。

〔政隣記〕

十二月廿一日歳暮之爲御祝詞、從御臺様御使御廣式番々頭原田半兵衛殿を以、干鯛一箱・白銀十枚御拜受之旨、一昨日相知れ、一統揃刻限朝六半時より熨斗目・布上下着用罷出候處、五時過御拜受物來、四時過御使之方御出。御作法前々之通に而御餅菓子等出。相公様少々御痛邪に付、御名代飛驒守様御出向等、且御禮之御廻勤も被成候。都而御都合能、九時前相濟。

十二月廿二日。前田重教の夫人等徳川家齊より歳暮の祝儀を受く。

〔政隣記〕

十二月廿二日、歳暮爲御祝詞從公方様・御臺様、壽光院様江上使等御廣式番々頭淸水新右衛門殿を以、御例之通紅白縮緬廿卷・白銀十枚・干鯛一箱御拜領。御作法前々之通、御都合克相濟。

但、御用番御老中江之御禮御勤には、少々御痛邪に付御名代前田信濃守殿江御願之事。

十二月廿七日。江戸の詰人難澁するを以て金子を貸與すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月廿七日、左之通被仰渡候旨、佐藤勘兵衛・野村伊兵衛より廻狀有之。且別紙之通に候得共、段々参着之月に而渡り方減候間、詰不足之者は會所承合候樣又兵衛殿御申聞之由も、廻文中に有之。

付札、組頭江

詰人一統難澁之趣等、先達而より委曲被申聞、外頭・支配人よりも段々願之趣有之候。當年は折々打重り候御物入之上、御國表不作之樣子等先達而申聞置候通に候得ば、此上願ヶ間敷儀は一圓御聞届難被成候得共、右願之趣も無據儀に付、格別之趣を以一人扶持に金二歩二朱宛之圖りを以御貸渡被成候條、何分令勘辨取續可申候。返上之儀は追而可申出候。右之趣被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。尤諸頭中へ演述、組等之人々へも申渡候樣可被申談候事。

午十二月

右會所承合候處、八月江戸へ参着は本文之通。九月参着は二歩宛。十月参着は一歩二朱宛。十一月幷今月参着人江は一歩宛。但一人扶持は本文之圖り也。右之通差別有之段申談之事。

十二月廿八日。嵯峨法輪寺の勸化銀割當額を通牒す。

〔政隣記〕

嵯峨法輪寺勧化銀、御身當年御組知行高割符仕左之通に御座候間、來年二月中銀諸方御土藏ゟ御上納被成、右奉行請取御算用場へ御指出可被成候、以上。

十二月二十八日　　　笠間九兵衛

本多安房守様

當九月九日御知行高、御役料知・茶湯料幷與力明地除之高七萬七千七百二十石。

一、八十目五分七厘　但百石當り一分三毛六七

右之通申來候條、得其意、銀座封に而、與力分者寄親之封之内へ入、名印記、當月廿八日朝五時より四半時迄之内、拙宅ゟ以使者可差出旨、未正月六日安房守殿より御廻狀到來之由、代判由路忠左衛門より申來。任㗊紙爰に記。

當月は寛政十一年正月

代判は津田政隣のなり政隣は本多安房守の組に屬す

十二月。煮賣・請酒を營業とすることを禁ず。

〔御郡典〕

煮賣商賣之儀、近年金澤町等甚致増長候に付、別紙之通加州御郡奉行ゟ申談、右商賣指留申候。尤金澤町中ゟも、同所町奉行より指留申候。遠所町・宿所之儀者、御城下与は様子違可申候得共、御藏所幷給人藏宿等近邊、都而御郡方百姓多入込申所に者、煮賣・請酒屋等有之に

付、百姓下人抔眼に觸飲食仕、自ら百姓費之筋多有之躰相聞候。寔に旅人之爲、宿場などに團子餅樣之麁物賣置候儀者格別、町之内所々に右等之商賣いたし候儀者、指止候樣可被申渡、則別紙寫一通相達候條、可被得其意候、以上。

十　二　月　　　　　　　　　御　算　用　場

三州御郡奉行中

遠所町御奉行中

近年御城下町續に罷在候者共之內、煮賣商賣を初、剩樽酒抔取寄置賣候者共有之に付、百姓・召仕之下人共御城下往來之節立寄、食事にかこつけ煮賣物を求酒を呑、要脚を費し候者共有之躰に候。日々之事に候得者、第一百姓之詰り与相成、暨百姓・下人等風俗甚惡敷相成、畢竟御郡方困窮に可相成、御年貢方にも指障、不輕儀に候。尤御城下續に而、右樣之商賣者有之間舖筈之處、近年猥に相成、次第增長いたし候躰、粗相聞候條、以來右煮賣商賣堅く指止候樣、嚴重可被申渡候事。

午十二月　　　　　　　　　御　算　用　場

是歲、作事奉行等藩の御大工頭の手當に就いて稟議す。

〔袖裏雜記〕

御大工頭之儀者、寶永二年始而二八被仰付、其以後元文二年羽田故十郎右衛門被仰付、三人に而御用相勤候、十郎右衛門病死仕候へども、不時に被仰付候者故、代人相願不申候。御大工頭之儀、惣様御作事方等頭取僉議仕、且又御大工御扶持方・大工以下、諸組小頭同様之趣を以指引仕、勿論惣様大工等職方之儀吟味指引仕候。當時安田庄八郎一人役に而――御用方指支申候――。御充行之儀、役料之外前々御切米御引足被下、平御大工同様に被仰付候者に無御座候へども、此儀者其身勤方年劳等之趣に付、御賞美之譯に而も可有御座候哉。御大工頭之儀者、別段之趣を以御充行御直被下置候譯も可有御座候哉。尤役儀に付料被下置候儀に而御座候へども、少々にても御切米御直被下置候者、平御大工与者勤方格段之儀にも御座候付、何分御僉議御座候様仕度旨、御作事奉行佐藤勘助・金森多門紙面に付、伺之紙面もあり。且御大工頭最初より被仰付候例書もあり。

付　札

寶永五年被仰付	七十俵	大西平右衛門
同　上	六十五俵	安田八郎右衛門
享保十二年被仰付	七十俵	大西久左衛門
享保十七年被仰付	六十五俵	安田庄八郎

享保十七年被仰付	七十俵	羽田十郎右衛門
延享四年被仰付	六十俵	笹田覺右衛門
寛延四年被仰付	六十俵	安田吉郎右衛門
此間御大工頭十一ヶ年中絶		
安永二年被仰付	七十俵	西田三郎右衛門
同　上	六十俵	田邊久丞
安永三年被仰付	六十俵	藤岡庄左衛門
安永七年被仰付	五十俵	清水治左衛門
天明二年被仰付	六十俵	清水多四郎
寛政九年被仰付	六十俵	井上孫太夫

右御大工頭御充行等之儀、寛政十年清水治左衛門御加增願之節、御作事奉行より書出候趣也。

寛政十一年

正月朔日。前田治脩柳營に上りて新正を賀す。

〔政隣記〕

正月朔日六時頃御供揃、御直垂に而同半時頃奥之口より御出御登城、年頭御禮等御例之通被仰上、九時前表御式臺より御歸殿。都而年頭御作法共御前例之通。村井又兵衛始御禮被爲請、七半時頃迄に夫々相濟候事。

同日より三日迄御年賀之御客衆へ、御例之通二汁五菜之御料理出。

二月四日。徳川家齊、前田治脩に鶴を贈る。

〔政隣記〕

二月四日、御使番上使坂本小太夫殿を以、御鷹之鶴御拜領。御作法前々之通に付略記。

二月十二日。能登奥郡の十一ケ所に酒小賣を許可す。

〔折戸村源助品々留帳〕

一、御城下續に罷在候者之内、煮賣を初、樽酒抔取寄商候よしに而、百姓召仕下人共、食事にかこつけ酒等呑、費に候樣子に而、風俗惡敷御郡方困窮可仕、御城下續に而は右樣商以來指止候樣、寛政十年御郡所より被仰渡候に付、酒小賣場相極申度旨賴小紙左に記。

覺

一、劔地村　道下村　門前村　高屋村

寺家村　松波村　眞脇村　宇出津新町
波並村　鵜川村　甲　村
〆
右先達而村々に而請酒屋煮賣等之儀に付、委細御紙面を以被仰渡之趣奉得其意、夫々急度申渡候。就夫右紛地村等十一ヶ村之儀、宿次并獵業等之場所に御座候處、酒造仕者も無御座候間、右ヶ所之方酒小賣爲致候樣仕度奉存候。尤右ヶ所之外は堅爲指止可申候。且又在來之祭禮或ニ市日等に煮賣仕候所も御座候へ共、都而煮賣之儀は向來堅指止可申与奉存候。右之趣私共儀小紙を以奉伺候、以上。
未　二　月　奥郡十村連名
神保縫殿右衛門樣
高田彌左衛門樣
表書十一ヶ村酒小賣之儀承屆候。此外酒小賣所相立候儀は尤爲指止可申候、以上。
未二月十二日　神保縫殿右衛門
高田彌左衛門
〔同井舊記〕

覺

釼埴村　道下村　門前村　高屋村
寺家村　松波村　眞脇村　宇出津新村
波並村　鵜川村　甲　村　〆十一ヶ村

右舊冬御觸渡有之候請酒屋煮賣等之儀に付、段々詮議いたし候處、御郡之內酒請賣指支申所に御座候に付、右村附之通り御願申上候所、御聞屆之旨被仰渡候。尤煮賣之儀者一躰堅御指留之旨御承知之通に御座候間、譬祭禮・市日之時節に而茂爲指止候樣御申渡可被成候、以上。

二　月

大澤村　內　記
馬場村　八左衛門
折戸村　源　介

仲間宛所

追而酒請賣煮賣之儀、猶更請紙面御取立置可被成候、以上。

三月十一日。前田齊廣金澤を發して江戸に赴く。

〔元祿寛政間手記〕

三月十一日、上下着用六つ時過金谷御殿に參上、御發駕之恐悅一統に關屋中務を以申上る。

御發駕御供ぶれ有之、坊主共一人御次につけおき、御出追付之由御近習頭に承合、其段申聞候ニ不殘御家老・若年寄も兩刀對し、御玄關に向て右手之方に段々に蹲踞。被爲召御馬御意有之与、三足進ミ、益御機嫌克御發駕被遊恐悅に奉存旨、安房守殿御請被申、各にも無事にニ重而御意。御懇之御意を蒙難有仕合奉存旨御請に被及、御廣式には恐悅某等には以紙面申上る。

〔筆のまに〳〵〕

三月十一日

一、今日筑前守様益御機嫌好金澤御發駕。御供御家老無之、御附人持成瀬監物・横濱善左衛門御供也。

但、當正月者いつもの二月の如く成氣色之處、先月者度々雪氣あり。當月に至りても猶少雪氣ありて、五日夕は地震も有之、六日雷雨、霰も降、風もあり。八日は快晴、九日より又降、昨日も少雷鳴ありて、昨夜中雪二寸餘り降、今日はさなから時雨時分之如くにて、晴雨不定、雪・霙なども降、海も鳴。

〔政隣記〕

三月廿二日夕七時過、板鼻驛より之早飛脚着、左之通申來。

筑前守様御機嫌克、今月十一日金澤御發駕之處、御道中雪降、別而關山前後積雪多、荷物人足持・乘馬者ちう／＼ねこぶ越し族に而、御通行不被爲果敢取、榊驛ニ曉天七時過御着、追分驛ニ者朝六時過御着に成候に付、同日一日御逗留。二十一日板鼻可被遊御發駕候處、御風氣に被爲在候に付、同日幷廿二日御逗留。廿三日本庄（増御泊也。）御泊。廿四日熊谷御泊。廿五日蕨御泊。廿六日御着府之段申來。夜半頃重御飛脚來着、御風氣段々御快旨申來候事。右に付御表小將山崎彌次郎へ、爲見廻早打御使被仰付、今夜發出。

但、廿五日罷歸候事。

三月廿六日。前田齊廣江戸に着す。

〔政隣記〕

三月廿六日四半時頃、筑前守様益御機嫌克御着府。御作法御先例之通。夕方御老中方御廻勤も被遊候。且御待請之御客衆、二汁五菜之御料理出。

三月廿九日。前田治脩就封の暇を受け、齊廣は出府を勞せらる。

〔政隣記〕

三月廿九日、上使御老中松平伊豆守殿を以、御國ニ之御暇被仰出、御例之通白銀御卷物御拜領、御懸之被爲蒙上意、從大納言樣も水野出羽守殿を以御卷物御拜受、被爲蒙上意、從御臺

樣に御使中山長門守殿を以御卷物御拜受。筑前守樣にも御參府に付御懇之上意有之候に付、伊豆守殿御送迎被遊候。出羽守殿・長門守殿に者、相公樣御一人御送迎被遊候。但御口中御痛に付、御相伴且御廻勤者飛驒守樣に御名代御賴被遊候事。

右に付日光御門跡・御三家へ御普爲聽御使に參上之事。

三月。江戶に赴く者に餞別し又は江戶より歸る者の土產を齎らすを禁ずる前令を嚴守せしむ。

〔政隣記〕

前々より江戶御供等に而罷越候人々に致餞別、又者罷歸候節土產物無用に可仕旨被仰出申渡有之、去々年御歸國之節――御發駕等之節、衣類見苦敷儀不被及御貪着候間、不及相改旨被仰出。――其支配にも可申渡旨可被申談候事。

未　三　月

右覺書又兵衞殿御渡之旨等、佐藤勘兵衞・野村伊兵衞より廻狀有之。前々同文段に付略記。

於金澤も四月十六日御用番長九郎左衞門殿より御觸出。

四月朔日。前田治脩柳營に上りて就封の辭見し、齊廣は出府の禮を行ふ。

〔續德川實紀〕

四月朔日、月なみ拜賀例の如し。松平筑前守齊廣參覲す。水野日向守勝起養子六左衛門勝剛初見し奉る。松平加賀守治脩就封の暇たまひ、鷹・馬を下さる。

〔政隣記〕

四月朔日、昨日依御奉書、御兩殿樣御登城。御暇之御禮・御參府之御禮被仰上、上意・御拜領物御前例之通。依而於御席御意之趣又兵衛殿御演述。畢而爲御祝詞、於竹之間御帳に附候儀も前々之通。

但、御拜領之御馬栗毛鹿毛晝過來、御鷹者夜に入來。

〔齊廣樣御傳畧等之内書拔〕

四月朔日御白書院於て御參府之御禮仰上らる。上意を蒙り玉ふ。作御太刀白銀三十枚・卷物十進上せらる。

四月四日。前田治脩の緣女正姬金澤を發して江戸に向ふ。

〔續漸得雜記〕

一、正姬樣御泊附　四月四日 津幡　高岡　岩瀬　三日市　泊　糸魚川　名立　荒井　關川　牟禮　矢代　海野 追分之事　相生宿　坂本　板鼻　倉ヶ野　熊谷　浦和　廿二日 江戸御着。

四月二十日。薩摩侯松平齊宣の依賴により能登の名所に付調査せしむ。

〔眞館留帳拔書〕

能登

たかふち山　みやざき山　すゞのみさき　なが濱の浦

にしき川　つくゑの島　つゐしま　岩瀬の渡り

右名所古跡相糺、相知候分は其所之砂石少し、亦者草木類之內何にても、名物抔与申習はし候品有之候ば、少々宛取集可被指出候事。

右松平豐後守樣より御賴に付、相しらべ委細其譯等書記可申上旨被仰出候段、織田主膳殿御申聞候條、夫々被相糺、御歸國前容子可被申聞候、以上。

四月二十日　御算用場

神保縫殿右衛門殿

高田彌左衛門殿

四月廿二日。正姬江戸に着す。

〔政隣記〕

四月廿二日、今月四日正姬樣金澤表御發輿之處、御道中御日圖之通御旅行、昨夜蕨御泊、今

朝六時御供揃に而御下邸へ御立寄、晝八時頃益御機嫌克、東御門より御本宅御廣式に御着。依之御表向當夜番人一統服紗袷・布上下着用、（昨日御横目廻状出。）且御着府之上、頭分以上於竹之間御帳に付、恐悅申上候事。

但、飛驒守様爲御待請御出有之、出雲守様ゟ者御待請御斷に付、御着府之上爲御祝詞御出之事。

四月廿四日、藩侯一族の順位を定む。

〔政隣記〕

四月廿四日左之通御用所より用談有之。

正姫様御婚禮御整之上、御順之儀左之通。

相公様　正姫様　壽光院様　筑前守様与申御順に候事。

付札、御横目ゟ

正姫様御婚禮御整之上者、御前様与奉稱筈に候條、御家中之人々一統承知候様相觸可被申候事。

四月廿八日。前田治脩、正姫と婚儀を擧ぐ。

江戸に於いてなり

〔政隣記〕

四月廿七日、左之通又兵衞殿被仰聞候段御横目廻状出。

付札、御横目ゟ

御婚禮相濟候爲恐悅、御歩並以上之人々、頭・支配人御小屋ゟ、廿八日・廿九日之内罷出候樣可被申談候事。

〔三壺御譜〕

四月廿八日御婚姻御内祝無御滯御整被成候。正姫樣御婚禮御整候上、御前樣と奉稱。御年三十六歲。福武公御留。今日御婚姻御整に付、先達て御示合之通、出雲守樣・飛驒守樣御見廻懸之趣にて御出。飛驒守樣にはは御居間書院にて御盃事有之、御料理等被進。出雲守樣には御小書院にて御對顏、御盃事有之。御盃事之内寶生大夫罷出小謠有之。御料理等段々相濟、御兩方樣共七時御披被成候。其外前田信濃守殿・前田安房守殿御出、御料理等出、諸事御作法書之通さ有之。

〔政隣記〕

御婚禮御當日、出雲守樣等御見廻懸之趣に而、御出被成候迄に而、押立候御客さ無之、萬端御省略に付、御給事相勤候人々を初、都而着服者不被下候事。

別紙覺書、横山藏人殿御渡及演述候樣御申聞之旨、佐藤勘兵衛より廻狀有之候事。

御婚禮御當日着服

一、年寄中・御家老中無地熨斗目・同上下。

一、頭分以上無地熨斗目・同布上下、且上下は無地小紋交。平士等者無地のしめ・腰明熨斗目・無地小紋上下入交着用。上下は返小紋除之。

一、御歩組服紗小袖・布上下、返小紋除之。

以上

右於御横目所披見申談有之、寫記之。

四月廿九日。徳川家齊等、前田治脩の成婚を祝して物を贈る。

〔三守御譜〕

四月廿九日、上使御廣式番之頭原田半兵衛を以て三種二荷、從西丸同筑山文左衛門を以て二種一荷、御簾中よりも清水新右衛門を以て二種一荷御拜領御拜受物被成。御使九つ半時頃三人一集に御越。公御痛積に付、御名代出雲守君御式臺等へ御出會を初御勤、筑前守様にも御出ある。如例同日御廣式御前様へ、從公方様原田半兵衛を以て二種一荷、御臺様より清水新右衛門を以二種一荷を賜り、御表相濟、直に御越。上意之趣土肥庄兵衛奉、御局梅﨑罷出御請申述る。

同日老中へ為御禮御廻、御名代出雲守様御勤。尤御用番へ御届もあり。但老中方水野出羽守まで御廻勤。若年寄中へは御使者勤も無之とあり。

五月朔日。前田治脩名代として富山侯前田利謙に柳營に上り婚儀の終れ

るを謝せしむ。

〔三守御譜〕

二月廿二日。此度御婚禮御整、御禮御暇後に相成候に付、御名代を以て御禮被仰上候儀に候哉、且上使等之趣、近藤吉左衞門殿へ罷越及御内談候樣被仰出、則吉左衞門へ罷越御内談之上、同廿四日松平伊豆守殿内玄關へ罷越、右御名代之儀迄御内意御伺有之所、御禮之儀御暇後に相成候はゞ、御名代を以被仰上度旨御達被成候樣に御挨拶有之。

四月廿三日。御婚禮御禮御名代を以被仰上度御願書御草案一通、御婚姻御整之上上使等之御先例書一通、御名代之儀伺書一通、右伊豆守殿御勝手へ持參、御内談之御使相勤候處、右は夫々御用番へ被御内談可然旨御挨拶に付、同日御用番安藤對馬守殿御勝手へ、御内談之御使相勤候處、同廿四日に、御婚禮御禮御願書御草案之通にて宜御座候。且御名代之儀は、御一類中を以御禮可被仰上候。上使等之御先例書は請取置申候旨、御挨拶有之候。猶又申述に、右名代を以御禮申上候御禮、并先例之通右に付御使被成下候へば、御同席樣へ自身可被致廻勤候、若自然差懸當病にて難相勤節は、名代を以御禮可申上候。右名代も筑前守へ申談候はゞ如何可有御座哉之旨も、役人菊池平兵衞へ懸合相伺候處、翌廿五日若御當病にて御廻勤難被成節、御名代之儀もやはり御一類中樣へ被仰談御宜旨、御挨拶有之とて御留にあり。

〔三守御譜〕

四月廿九日公暨御前様より、公方様初御献上物御伺書、并御先例書共、夫々御用番へ御指出。

同日夕右に付御付札物御渡。

相公様より公方様へ巻物二十、大納言様へ白銀十枚、御臺様へ同五枚。右之通可有献上候。

御前様より公方様へ巻物五・二種一荷、御臺様へ巻物三・一種一荷。右之通可被差上候。

大納言様へは不及差上物候ゝ御留也。

〔三守御譜〕

五月朔日御婚姻之御禮被仰付候間、爲御名代御一類中之内御一人、五時御登城可被成旨、昨廿九日御用番より老中連名之奉書到來。則今朔日爲御名代、出雲守利謙君御登城被成候處、御黒書院御書請中に付、御白書院月次御禮相濟候上、於御座間御名代御婚姻之御禮無御滞被仰上、無程退出。夫より老中方水野出羽守御廻勤被成。且前に御香煎之御禮被仰上時分、御香煎上意有之候へ共、此度者御名代に付御香煎等無之。

御自身様御登城に候へば、西丸へも御登城之筈に候へ共、今日は御名代に付、前々之通西丸へ、出雲守様御登城無之候。

前に記通、兩丸へ御献上物聞番御使、御前様よりも御献上物御附井上太郎兵衛相勤ゝ御留に

あり。

〔政隣記〕

五月朔日頭分已上に、一昨日御拜領之御酒・御肴等三種共頂戴被仰付。

但於長園爐裏之間、年頭御具足鏡餅御雑煮頂戴之節之通に候事。

五月四日。前田治脩初めてその夫人を表居間に招請す。

〔政隣記〕

五月四日、御表居間に御婚禮後初而壽光院様・御前様・筑前守様・松壽院様御招請、御前御相伴に而御料理等御饗應、於御敷舞臺御能左之通被仰付、御歩並以上當番幷無息之人々（父兄等御同件在府之分也、）見物被仰付。

加茂　寶生彌三郎　　忠則　波吉甚次郎　　望月　寶生播五郎

安宅　寶生大夫　　一角仙人　寶生彌三郎　　祝言 岩船　松林小三郎

三本柱　脇本勝三郎　　釣狐　大藏彌右衛門　　墨塗　倉谷八三郎

梟山伏　脇本藤三郎　　縄なひ　大藏彌右衛門

右御四時始り、夜四時前相濟。今日御表向者常服、御近邊等者布上下之事。

五月七日。前田治脩歸封の途に上る。

〔政隣記〕

五月七日四時之御供揃に而、九半時頃大御門より益御機嫌克被遊御發駕。其節舟之間に而篠崎玄順御通り懸り之御目見、奏者相勤、御勝手通り御先に走抜、幕番所前へ出蹲踞。尤與力兩人受取爲相詰、御跡御行列通り候而御門大扉爲打候事。

同日出雲守様等御見立之御客衆へ御料理出。

〔御歸國御道中日記〕

七日	江戸	蕨御中休	浦和御泊	五里廿八町
八日	浦和	鴻巣御中休	熊谷御泊	十里十二町
九日	熊谷	落合新町御中休	板鼻御泊	十二里七町
十日	板鼻	坂本御中休	追分御泊	十里七町
十一日	追分	海野御中休	榊御泊	十一里十八町
十二日	榊	丹波島御中休	牟禮御泊	十里十八町
十三日	牟禮	關川御中休	高田御泊	十二里十六町
十四日	高田	名立御中休	糸魚川御泊	十二里十二町
十五日	糸魚川	青海御中休	泊御泊	六里卅五町

十六日　泊　　　　三日市御中休　魚津御泊　六里十九町
十七日　魚　津　　東岩瀬御中休　高岡御泊　十一里廿八町
十八日　高　岡　　今石動御中休　津幡御泊　七里十七町
十九日　津　幡　　　　　　　　　金澤御着　三里十八町

一、十五日以勝尾半左衛門被仰出候付、十八日津幡御泊被指止、高岡御泊より直に十八日御着被遊候旨、表方ゟ被仰出。

五月十一日。金澤に於いて諸士に前田治脩の成婚を告ぐ。

〔政隣記〕

五月十一日五時過可致登城旨、前々日御用番長九郎左衛門殿御廻状に付、各登城之處左之通御演述、但、頭分以上布上下着用登城也。

相公樣御婚禮前月二十八日萬端御首尾能御整被成候。此段何茂ゟ可申聞旨被仰出候事。

右に付爲御祝詞、今日・明後十三日兩日之內、年寄中等宅ゟ相廻可申旨、如例御用番被仰聞候段、御横目中談候事。

付札、御横目ゟ

今般御婚禮御首尾能相濟候爲恐悅、御歩並以上頭・支配人宅ゟ罷出可申等に候條、組・支配之

人々に可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配にも不相洩相達候樣可被申聞候。罷出候日限、御日柄外可相勤候。

右之趣夫々可被申談候事。

五月

五月十四日。大聖寺侯前田利考歸邑の途金澤に着す。

〔元藩寛政間手記〕

一、飛驒守樣五月十四日九つ半時過金屋九郎兵衛方に御着。八つ打上下着用御旅宿に參上、上近江町木戸爲明、御旅宿上り口近く迄乘詰る。御旅宿に上りはそ袴着用、三人出向入る。一段高き所に上り、其所たまり也。刀持參也。以前は刀家來に爲持候由也。取次之人に生駒源五兵衛殿得御意度候條、其段御達被成樣致度之旨申述る。暫くありて生駒源五兵衛罷出る。紋はきり也。益御機嫌克御旅行被爲成、目出度御儀奉存候。今日當所御止宿に付御容躰伺之爲參上仕候。宜被仰上候樣致度旨相述る。可申上旨申、暫くありて奥御用人高岡丹藏罷出、御逢被成候間御通り被成候樣申述。罷通る所二間程有之、御座所之次に生駒扣へ居、生駒御前に誘引、扇は次之間に置也。帶刀にて御前に罷出御禮申上。近く寄候樣御意立候而、御側近く罷出候處、土佐守殿初御無事にて珍重之旨御意。御懇之蒙仰忝仕合に奉存候旨申上る。

被罷歸候はゞ土佐守殿ゟ宜旨御意に付、御意之趣罷歸土佐守ゟ可申聞旨御答申上退出。追付退出する也。其段土州公へ御意之趣申上る。御懇之仰に付、生駒源五兵衛ゟ土州公より御禮紙面御指出し也。

五月十八日。前田治脩金澤に着す。

〔政隣記〕

今度御歸國十八日御着城。但十八日津幡御泊、十九日御着之御積りに候處、俄に高岡より御歸城与被仰出、右之通之旨、今日御飛脚着相知れ候事。

〔元祿寛政間手記〕

一、相公樣五月七日江戸御發駕、十八日津幡御止宿之所、直に金城ゟ七ッ時過御着城。朝より雨に而候處、御着之砌は晴申候。御駕に被爲召候也。年寄中山城・某橋爪ゟ罷出、御駕見え候与平伏。年寄中等前にて御駕とまり、御戸表に爲引、三足進み出候与、宜時節氣色も晴てと御意。益御機嫌克御着城被遊恐悅に奉存旨、筆頭より申上る。何も無事にてと御意。御意を蒙り難有仕合に奉存旨筆頭隅州被申上。去々年之時は本列之由之所、此度は九郎左衞門・山城・某と役列也。去々年之僉議不行屆事也。御城代は御式臺也。夫より月番大數殿席へ出、山城・某罷出、御着城之恐悅申上る。年寄中等不殘、御近習頭横山引馬を以て御着城之恐悅

某は前田内匠助
表は表小將なるべし

被申上、山城・某引馬を以て檜垣之間之御縁がわにて恐悦申上る。暫くありて御前へ被爲召段同人を以て被仰出。年寄中より若年寄・隱居大音南郊迄筋かひ御廊下へ參り、帶刀取、御居間書院江年寄中一切、山城・某一切、御家老・若年寄一切、大音は別に一人被出。相公様御居間書院上之間之御敷居ぎわ之疊に御着座、山城・某御敷居之外に御禮申上。近く寄候様御意、二之間之内江御左之方江つき罷出。今日は宜時節、天氣も晴上りさ御意。山城御請、益御機嫌克御着城被遊恐悦に奉存旨申上る。各にも堅固に与御意。御懇之御意を蒙難有仕合に奉存旨、山城御請申上る所、土佐守も隨分無事にかと御意に付、御意之趣難有仕合に奉存旨御請申上退出。七半時過歸宅也。御つきがへし之御禮は、深美主計助也。是は七つ半時御前江被爲召候由。年寄中は筋かひ御廊下のついたて之所に被居候由。御家老は御居間書院御縁がわ後にして、御前江向て伺公之由。若年寄は同御縁がわ御廊下より出候向ひの方に伺公之由。此時は御裝束御上下に改る由。此方抔之時は御旅裝束也。某抔出候時は若年寄之伺公之所、御近習頭兩人ゐる也。御當日は兩御寺御代番石野主殿助也。十八日四つ時前より罷出候也。

五月廿六日。金澤に强震あり。

〔政隣記〕

今年五月廿六日申三刻頃、加州金澤强地震有之。續而弱地震三度有之。御城内石垣等初所々損じ、御殿者御別條無之。御城下武士町等町家損所多有之。二之御丸晝番組頭高田新左衞門美稱（御小將頭二百五十石）泊番宮井典膳直據（御馬廻頭六百石）茂新左衞門与爲交代罷出有之に付、兩人共御次へ參、格別之强地震に付、當番御近習頭有澤采女右衞門有貞（物頭並二百石）まで奉伺御機嫌之處、何之御障茂不被爲在旨申聞。然處人持組幷諸頭追々登城、何茂御近習頭を以奉伺御機嫌。依之御馬廻頭兼御倹約奉行領千三百石江守平馬値房より御月番江申達候者、御表向相勤候者共は御月番より被仰渡も無之候處、進而奉伺御機嫌候儀如何敷奉存候得共、人持中等追々登城御近習頭を以奉伺御機嫌候間、同席共にも同樣に仕候。此段御達申置候段申述。依而宮井・高田も一統之通重而御次へ出、御近習頭を以奉伺御機嫌候旨申演。

一、御城代領一萬八千五百石前田大炊孝友（今月御月番且御城代も御用番也。）即刻登城、直に御次江被出。夫より御席江被參候上、御大小將横目當番堀左兵衞秀親（四百五十石）を被呼、御本丸等損所見分可致旨被仰聞。泊番御横目追付可罷出時刻、其上宮井・高田兩人罷在候に付、左兵衞儀も、一所に見分に罷出。尤御横目所明候趣等大炊殿よりも被申上趣取計、宮井より采女右衞門を以達御聽。御大小將横目四百五十石坂井甚右衞門直諟無程泊番に出、御横目所久敷者明不申。尤地震に付差續追々御横目中登城有之。且又定番御馬廻御番頭四百五十石吉田八郎太夫兼忠茂、大炊殿

跡より見分に罷越。

一、御城代一萬七千石奥村河内守尙寛、乍病中押而登城。其外御年寄中等追々登城、暮過各退出。御用番大炊殿には夜五半時頃退出。

一、前記之通人持組等以下役儀御免等之頭分も罷出奉伺御機嫌候段、於御次御近習頭を以申上候事。

一、江守平馬等より外御用も無之哉之旨、御年寄衆等御退出に付御用番へ御尋申候處、一統相待罷在候樣被仰聞候に付、各在合之分相待有之候得共、宅々門前鬮等及大破候人々も有之儀に付、夫々縮方指圖等も仕度段及御示談候處、門前等及大破候人々者可罷歸候。併御呼出之儀も可有之候間、其心得に而可罷在旨被仰聞候に付、大破之人々迄罷歸候。其後何等之御用も無之、夜五時前にも到候に付、御樣子承度段執筆役組外小竹直右衛門を以御尋申候處、先御用も無之旨に付當番之外一統致退出候。

一、同夜半頃迄に七度震申候得共、強き地震に而は無之候事。

一、同夜御次邊御仕廻無之、翌朝迄直々詰切之事。

一、同夜六時過火事沙汰有之、大浦邊在火与申事に而暫有之鎭候。但右火事は黑津船神主家等地震に而震り潰し、火事に相成候事也。其節之委曲末に記之。

根生は根布

一、右强震後御使番二百三十石渡瀨七郎太夫政勝を、小立野邊幷三社邊爲見分被差遣。但七郎太夫野袴・布羽織着用罷越。
一、二十七日曉八時過少々、七時過二度、朝六半時過二度、晝之内も少々宛三度震。同日曇蒸暑、晝後少々風立。
一、昨二十六日も曇蒸暑之事。
一、二十七日宮腰に御使番二百石堀平馬善勝爲見分被遣候處、潰れ家二十軒計、大損家百軒計有之段、其上粟ヶ崎黑津船へ、御使番五百石津田權五郎居方爲見分被遣候處、粟ヶ崎に潰れ家十二軒計有之、黑津船に者砂沈み難罷越、根生迄罷越承合候處、黑津船御宮坂下神主等之家潰れ、砂山も潟へつき出し候由。同所御宮も潰れ候由云々。
一、二十八日曉八時過、朝五時前少々宛地震。晝八時過微雨、無程霽。
一、同日晝宮坂へ渡瀨七郎太夫、粟ヶ崎邊に堀平馬再爲見分被遣。附、今日雨晴候後大暑に相成。
一、同日從大聖寺飛驒守樣御家老山崎權丞を以、强地震に付爲御見廻御登城被成度思召候。先以御使者被仰上候旨に候處、御登城御斷被仰進。
一、時鐘所甚右衛門坂高也。此度地震に而石垣等及大破候に付、今二十八日より鶴之丸に有之鐘を時鐘

に被仰付、暮六時より撞之。依而鐘撞足輕詰所出來迄、當分三の御丸御馬廻組番所次之間に相詰候。晝二人夜三人、小者一人宛相詰候事。

一、二十九日曉七半時過少々一度震候事。

一、同月二十四日日色出入共如朱、雲色も久敷赤く、大風にても有らんと評區々。二十五日・二十六日も同樣。二十六日晝曇、西眞風に而常に無之けしからぬ空也。其頃燕子巣立之折なるに、燕共子を喰へて何地不知飛去行しと云々。

又三郎船とて二千五百石積の船、宮腰浦へ先日以來參り居候處、水主・梶取等二十五日之氣色を見て、是只事ならずと、不取敢逗留中之指引方をもそこ〳〵にして、早速帆を上て乘歸候事。

一、今年より七十三ヶ年以前强地震有之。其節は能州震强し。駄荷馬地面の割れ目に入、不得動程之爲躰に候由。鳥屋吉左衛門（關助馬場町居住小鳥商賣人、今年九十七歲。）申聞候事。

一、金澤町奉行七百石香林坊橋上川緣居住富永右近右衛門助有（前鬼之末孫也と云々。）屋敷者、古き普請に而損所多、園之土塀なども古く損じ有之候處、右地震之節は一向損所無之、無難至極なる事於金澤只此一家而已也。于時此月二十五日廻國之旅僧來り申は、於旅中異僧より傳附之由に而「害平睥夕恃」如斯札を一枚持參。是を何卒早く屆候樣被賴候由申聞指置歸候旨也。此札

之守護ゆゑか、右近右衛門屋敷に限り、家は勿論塀壁に至迄少しの損じも無之候。右異僧は先祖之前鬼歟与云々。

一、能州輪嶋産之由に而、乞食白子与云者金澤に在之候處、同月二十五日に、明二十六日は強地震可有之と申候處、果而符合。又六月十一日には火災可有之与申ゆゑ、金澤中嚴重に致用意候故歟無別條候。右白子を盜賊改方役所に而相糺候處、九歳之時より江戸に在之、易學致稽古に付、右之變相考候段申聞候事。

一、御持弓頭兼御異風裁許三百石彥三五番町窪田左平秀政、右地震之夜家內何も夜半迄庭に居候處、虛空を大きなる鳥飛行、羽を廣め候所者十間計と見え、形ちは靑鷺の如く、毛色は夜陰之事ゆゑ不相分、至て靜成羽づかひにて候旨。其後日は失念、同人庭に而晝過之事なるに、大なる蜂飛行、眞鴨程之大さにて有之候旨。又其後日失念、庭に而耳有之蛇石垣ゟ入候。長さ二尺計之小蛇にて、耳は餘程長みも有之と見受候由。六月十八日御持方頭寄合宿御持弓頭兼御近習頭百八十石不破五郎兵衛光保宅にて左平話、各承之候旨之事。

一、御塀石垣七歩之損じ与穴生方より言上。但辰巳之方は損じ薄く候由之事。

一、河北郡第一損じ、黑津舟神主幷せがれ・娘・家來一人砂山之崩れに壓れ絶命。右神主齋藤近江居間に父隱居と致物語有之、妻は臺子之側に嫡子十二男七歲女子六歲罷居候處、砂山崩れ人々

外へ出、近江も出候得共、子供に就不出、重而家内に入候處にて砂之下に相成候。其人々は近江幷嫡子・娘・家來男女五人也。妻は庭へ出候處、砂岩に乘ながら潮上へ數町出候處、引波にて又陸に打戻し候ゆゑ助命、隱居幷嫡子幷妻、且又砂山高に遊び居候女子五歳助命。右嫡子之乳母當時外に居候處、其日參り有之、三歳之子を抱き出むとして砂山の下に成候得共、大指物の間に挾まれ候ゆゑ壓れず。併潰れ候家の上へ砂高く懸り、中々難出候處、遙か向に少々明りするを目當として、潰れ家の木竹疊等之間々を潜り、つひに外へ出助命。其後右潰れ家より出火之處、上に砂山覆ひ候故消す事不能。然處御先代樣之御判物等有之に付、嫡子者潰家之隅之方可有之与、存當り之方より潜り入て御判物等取出之。少々燒焦候得共形有之、誠に是は奇妙与云々。

一、宮坂獵師家八軒有之處、六軒砂石之下に成、五人卽死。妻子之死骸深く埋れ取出得不申由之事。

但、右生殘候者共は、翌二十七日朝手操網之漁りに出て、其日の飢を營む產業ながら哀れ成事ども与云々。

一、小立野がけ片原町家過半下に倒れ落、或は大に傾き、依之當分每日三百人餘之三度宛賄、町會所より近邊於寺院等拵之被下之。中にも鹽屋三右衞門土藏者谷へ落候て、名物珍器微塵

に相成。其外町方土藏無難なるは無之、或は倒れ或者開き、又は曲り、近江町魚店穴藏も多分崩れ、折節用事有之入居候者は皆々即死。

一、武士屋敷等寺社家抔も右同斷。損所多、土藏も皆々右同斷。

一、二十六日以後、毎日晝夜二・三度宛、犀川上之方に當り山鳴有之、又海も鳴候与云々。

一、黒津船前大崎邊潟中に、百七十間に五十間計之嶋出來。此外にも右樣之嶋二ヶ所右續之潟に出來。是は砂出を水中へ突出し候ゆゑ也。都而右邊之濱すいりしで歩行危く、砂中へ股迄落入處多し。

一、前記い如く二十六日强地震後、小地震度々晝夜共有之。此次洪水之沙汰、御儒者新井升平新井白蛾嗣息易學に通す。出水与考之、今來月於無之者八・九月之內与云々。

一、同月二十六日强地震以前に、黒津船向海に黒色長さ數十丈見え、其內ゟ何やらん空へ登る躰也。天氣宜く龍卷にゟ非すと各見居たる處、右之黒色形空へ上るこ等敷地震に及ぶ与云々。

一、加州にては諸家壁の不切所には一軒も無之、尤境塀の不倒所も無之。然るに前記に委記する如く、富永右近右衞門屋敷迄無別條。

一、右地震上には小松邊迄大抵同樣、御城は少々之損じ之由也。京都ゟ之町飛脚之者、江州木

の本与長濱之間に而震に合ふ。少々之地震に候旨也。江戸ゟ之町飛脚之者ニ、越後雅樂驛こ外波驛之間而合ふ處、是又少々之地震与云々。

一、連日星川織淵之高崩れ落、此響に而彼筋川縁・堀縁ニ地面に破れ多し、歩行心配与云々。

一、六月朔日出鴫、二日は曇り細雨。

一、都而川縁住居ハ洪水之手當、其外雜説共區々に而人心不穩。

一、怪我人潰れ家ニ、家來末々迄可罷出旨御觸有之。

一、日雇賃幷繩・蔣等之價俄に引上候に付、其族買人より可書出旨、急度町奉行・御郡奉行へ被仰渡有之。

一、星川邊町人岡屋茂兵衞と申者、五月二十六日藥師村本興寺日蓮宗ゟ參詣、歸路往還大樋町端より一町計之所に而地震に合ひ、倒れ候處暫起上り不得。田毎之水東西ゟ五・七尺計程宛傾く内に、田水板の如く成て空に三・四尺計上り、並松五・六尺計震れ候を見受候旨。漸無難に歸宅せしむ与云々。

一、石燈籠・的場或ニ築山などに有之分は、竿石之儘に而六尺計飛上り、落る時四方へ飛倒れ候由。尤所々によりて差別有之、大同小異也。

一、地面割れ候所ゟ、其後之雨に而口廣く成、四寸・五寸程宛も明き有之。御城内に而は坂下

御門内より、石川御門前迄之地面に數ヶ所割れ出來、其外所々同樣。
一、強地震之節不崩土塀等、六月朔日・二日迄之連日之震に追々倒れ、途中往來甚危く、人々心配歩行之爲躰に候事。
一、御城損じ候御樣子承り、町人共より爲冥加日雇指上度願ひ、或は亭主・せがれ抔出度願も有之、六月二日迄に三千人餘も出候旨。其願書之内三百人木倉屋長右衛門、百人宮竹屋伊右衛門、百人堂後屋三郎右衛門、夫々應分限段々有之。

御城内外損所大概

一、尾坂口御石垣崩れ、御櫓下大石太皷塀共落、大手之通りも崩れ落。
一、御作事所・越後屋敷御圍不殘倒れ。
一、河北・石川兩御門石垣、橋爪・五十間御長屋臺石垣崩れ者無之候得ども、石孕み出或に割れ、又は欠落候也。
一、松坂之御居間先き御馬場ひゞき強く、松坂は落懸り、同所御土藏右之方は傾かれ、下通り道筋中の如く割れ、其外御土藏共多分損ず。
一、御城中地面所々ひゞり出來。
一、橋爪御門之外地割れ、升形之内石垣大に孕み出、御門潜り之邊石垣孕み出、切合せの兩

角矢け、御玄關前腰懸之邊も石垣大に孕み出。

一、石川頼當之外より地割れ、長き番所際迄二筋、左堀之方者少し地面下り、右之方御堀際、蓮池之押廻しより半分餘二間餘り欠け候而、御堀へ落、やゝっい半分計は其儘有之。右之邊地面不殘ひゞり、或は地面落入候處も有之。蓮池御門より紺屋坂番所前迄之土塀不殘倒れ、蓮池前も割れ落入所も有之。御堀之高土塀大方崩れ、中程二ヶ所石垣共崩れ候。柵御門之方蓮池腰塀も、新敷所者殘り、其外者皆々倒れ、松坂者高石垣崩れ、下通り候事危く、左之方御堀際は割れ候而落入候樣に相成。

一、新丸御土藏別而大に損す。

一、學校御園不殘倒れ。

一、堂形御園も多分倒れ。

右地震之節、大山も崩るが如く鳴動し、樹木は幣を振が如く、家は阿方此方へ傾き、屋根石は一尺計も飛揚り、地面は大波の如く、此間之刻限は至而暫時也。たばこ三ぷく計呑候間と云々。震中者砂煙りにて四方難見方、家之内の塵芥飛亂し、震後むさき事足之踏處も無之爲躰与云々。

一、御家老役一萬四千石居邸高岡町今枝内記易直下邸長町に居候家來息男子一人、人持組四千石居邸木之新保三田村内匠定保下邸白髯前に居候家來之娘二人、淺野町之家之娘一人・下

女一人、小立野に一人、震之刻塀等に壓れ死す。其外半死等之者夥數有之。

但、近江町之分前記に有。

一、野田山御廟損、別而高德院樣御廟崩れ多く、御手洗石・御燈籠倒れ、其外野田一山之墳墓・石塔多分倒れ、中にも甚きは折れ候。但、越前石者折れ、戸室石者不折候事。

一、寺院寺町筋者損所少く、門前之見分左而已目立候事無之候。墓所者大方倒れ或者折れ候事等如野田山。卯辰筋は損所多く、墓所等之大破寺町筋より大に强し。或者石塔谷に落、寺庵等被損過分也。

一、必死を逃れ候者其數難算、土塀之下より掘出され助命之者等夥數有之。御馬廻組四百石八坂下居邸鷹栖左門嫡倅吉娘も、守女共土塀下より穿り出し助命。

一、大小之怪我八難枚擧。

一、小立野欠原町邊谷へ落候家數二十軒計、小立野大乘寺坂高にも六軒、其外新坂・嫁坂等にも有之。然處地震よりは崩れ之間は有之候哉、皆々逃出、人損じ僕一人、馬坂は追而崩れ家二軒也。百々女木橋落、退路無之。

右家崩れ落候者共三百十九人也。於慶恩寺等に町會所より賄也。

一、當座之御用金歟、町家より銀五十貫目御借上有之。

一、御城中損所御聞、まづ當分囲垣或は松板並べ打にて出來。

一、右強地震同刻、越中富山御米藏燒失。

一、右強震越中川上今石動邊者嚴く、津幡・竹之橋も同斷。

一、能登は高松邊より奥、左のみ嚴敷者震ら不申。

一、上口者松任邊迄は嚴く、濱手震後鹽干有之、二三日にて如常。

一、大聖寺者不嚴震之由。

一、幼年御年寄役列三萬石居邸材木町横山山城隆盛邸内、其外淺之川筋・田井筋・小立野筋、輕御城内石川御門外邊、強地震之刻地割り強く、ふか／＼と割れ目二・三度も開きては合ひ致候事、足輕番所其外も所之者等見受、往來人もよく／＼見請候。田井筋・鶴間谷など者、別而三尺餘も地割れ、其中より水吹出し候所を見受候者共多く有之。其内吹水一丈餘も空へ上り候所も有之候由之事。

一、三社筋等家纔柱倒れ候所々に有之。

一、御馬廻組加州御郡奉行五百石、居邸は瓢簞町堀端樹喜左衛門家は大損じ居住難成。依之家内何も類門杉江長八郎宅へ引移介同居。右家者當分明け置。其外修理不加しては當冬住居危き家共者、所々に多く有之。惣躰家損之強弱甚有之、隣家者大破此方は左程に不損と言類

ひ夥し。土藏・土塀之損じは大抵一統なれ共、是又甚强弱あり。町中土藏平均八歩通り之損じにて、一圓手入に不及与申土藏は、武家・町家等に至迄一圓無之。就中四面土等震ひ落し、一向用事に難立土藏に數多有之。

一、枯木橋高尾張町入口右之方、新町ゟ之小路惣構川緣之家共、多分惣川之方へ傾く。別而同所錢商賣人小拂屋小右衛門家座敷幷土藏共惣川へ崩れ込。右之外惣而惣川等之高或者坂之高に有之家共者、多分傾き或者崩れ落。

一、尾坂之下大家者、長屋等之損別而甚く候事。

一、淺野川橋場町錢商賣人羽歩屋伊右衛門（借家也、家主は荒木屋八左衛門といふ。）土藏後之惣川へ崩れ落、此並ひ家多く破損。

一、新町福井土佐旅屋等續之後地石垣崩れ、地面も欠け落、母衣町・主計町之町家等へ落重り、家共者悉く大破に及候得共、怪我人は無之。

一、尾張町・今町等之町家土藏多分壁割れ落、或者ゆがみ、戸前開閉難成分多し。

一、前記にも有如く、近江町魚肆之穴藏多分崩れ、隣家之穴藏と一つに成候處も有之。家共天秤釣に致置候所も又多し。然るに井戸者一圓崩れ不申、方圓之違故歟与云々。其外所々にさ井戸之崩れは至而少き由也。

一、全躰淺野川より北、犀川より南之方は、損じ薄く候事。

一、強地震後所々井戸水三尺計も増、翌日より如元に減少。且川水悉く二三日も渇る。是山崩れ故と云々。

一、小立野は材木町高之方續は損じ薄く候事。

一、大樋は地面之割れ目より焔出候所有之由之事。

一、小松より上、越中筋も強地震とはいへども、金澤之震に競べ候ては半にも無之由之事。

一、第一落手震強し。宮腰道之大石邊に休居たりし者之話に、大石地中へ埋入候様に見え、並松は倒れ候様に見え候由云々。宮腰町家潰れ家夥敷、粟ヶ崎宮之左右崩れ、其下に有之百姓家不殘押倒し、併死人者無之。

一、強震暫前、宮之腰等之海波立、けしからぬ事三度有之。無程震之節、數多之鰹類諸魚共水面へ浮出候由也。

一、粟ヶ崎筋砂地八角に割れ、其割れ口より青水吹出候處有之。其中には四・五間も續て割れ候處有之。其底にも又割目より水見得候事。

銀六十五貫目　人夫六萬五千人代　新川郡より

同三十五貫目　同三萬五千人代　礪波郡・射水郡より

右者御城損所等爲御用、人夫に可罷出候處、遠所且農業に付、代銀を以上納相願御聞届之事。但一人に付一匁宛之圖り也。

御屆書左之通。

今二十六日申刻國許大地震に而、金澤城中幷櫓者無別條候得共、所々園等損所有之、其外城下侍屋敷・町家等も破損所多、怪我人等も有之躰に御座候。委細之儀者未相知不申候間、追而御屆可仕候。先右之趣御屆申達候、以上。

五月二十六日　　　　　　　　　　御　　名

右は六月中旬當日之日付に而御屆有之。追而左之通八月中旬頃委曲之御屆書被出之。

加州金澤城中を初地震に而損所等之覺

一、本丸之内石垣孕所　　　　七ヶ所
一、二之丸之内石垣孕所　　　六ヶ所
一、同　　　石垣崩所　　　　四ヶ所
一、三之丸内石垣孕所　　　　七ヶ所
一、同　　　石垣口開所　　　一ヶ所
一、大手口石垣崩所　　　　　一ヶ所

一、玉泉院丸之内石垣孕所　　二ヶ所

右之外惣圍土塀大手崩れ損申候。

一、四千百六十九軒　　城下損家數

内　二千三百五十七軒　　寺幷歩足輕・小者暨家來召仕之者

　　二百六十軒　　寺社

　　千五百五十二軒　　町家

一、二十六軒　　同潰家數

内　一軒　　社家

　　二十五軒　　町家

一、九百九十二　　同損土藏數

内　三つ　　潰土藏

一、千九百六十七軒　　加州能美郡・石川郡・河北郡損家等數

内　千三軒　　損家

　　九百六十四軒　　潰家

一、八つ　　石川郡・河北郡之内損土藏

内 一つ　　潰土藏
一、十五人　　死人
内 六人女
一、十二人　　怪我人
内 五人女
一、牛馬別條無御座候。
右當五月二十六日國許大地震に付、先達而金澤城中并櫓は無別條候得共園等損所有之、其外城下侍屋敷を初寺社損所等有之候段御屆御達申候處、其後も少々宛地震有之。元來初發之强地震に城中石垣⑩なとも候躰に而、追々損所出來、且又城下侍屋敷を初損所等如此御座候。右之外家來之者等居屋敷・園土塀大半崩申候、以上。
未八月　　御名

〔續漸得雜記〕
寛政十一年五月二十日申の刻、古來稀成大地震に而、前代未聞之事に候。第一御城所々大損、其外辰巳之御用水元より御城迄不殘打潰し、武士家幷土塀は大方打倒し、處々死人・怪我人有之候。町家本町通り家無相違土藏は一統割、よわき土藏は委く破れ申候。都而欠原前後に

二十日は廿六日の誤

宮行は宮に行き候

有之處ニハ大半家損申候。卯辰山寺々大損じ、石塔等不殘震倒し、其外小家潰居住無之者には、卯辰寺町・小立野に而、男一人に五合女一人に三合充、當座寺々において毎日役人立□被下之候。最初は大勢に而役人手にも相兼、段々御詮議之處、其後者次第に人少に相成由也。此震加州に限り候事之由。餘國者上越前・下越中は少々成由也。第一發し口黑津舟神主居住よりに而、近邊村方共家十軒計三町程内海に震出し、死人神主共七人之由。嫡子は宮におこないに罷越居申内に而、宮行事もなく難に逢不申逃れ由也。其節金澤大地三寸・五寸程宛割れ、誠に冷まじき事也。依而早速武家・町共火之用心晝夜廻り、張番時々刻々相廻り、折節所々において火附・賊人等さわぎ、彌嚴敷七月頃迄町中自身番等相止不申候。先年大燒之振之通り、町中より御城へ毎日々々石土除に人歩罷出、遠處町方よりは人歩銀を以上る。其當日より五月・六月へ懸け、通例ならば大地震共言べき程之地震、晝夜とも震、其年中井戸抔追々崩也。併其年豐作に而甚下直、御家中難儀に付、百石に十五石宛之除知三之一五石宛一作被返下、代銀望之人々者、ならし直段に石に付二匁宛之增を以御渡。是は七月後少々米直段上り候に付而也。扨又其節繩・こも・簀・日用賃殊之外高直に付、是又段々御僉議有之由候へ共、本之如くには成不申候。

春日野晴嵐

地震よりさきにくづるゝ引山は袋の神のあらし吹くかも

是は小立野末に袋村あり。其村に一字の宮あり、春日神主持分也。今年三十三年目に而開帳にて、金澤中一統に色々拵、夥敷事なり。神輿之御出之節引山いたし候處、小立野より堂形前まで引來る處、彼所に而餘り群集に而迚も春日迄は引かたしとて、其處に止め申候由其事を申由。此神如何成事にや、先年も開帳之時不時に雪降申とかや。今度御出一・三日立と地震に而、中々宮參りする者もなし。其後いつの間にか御歸輿也。誰知者なし。

大橋夕照

大變な事と日々夕間暮入日も家をかたむきにけり

礪の落雁

世なほしと妻や子供を引つれて家居もともに落る雁金

宮坂秋月

あきもせぬ此世をさりし神主の湖水に沈むうんの月影

是は神主其所八町四方計知行所之内に而、其村方はおろし渡し高利を得る故、神主勝手宜家作に取懸り、五月二十日棟揚祝之由。神行とも子供に任置由。其節人口區々に而沙汰不

宜也。

武士町暮雪

白壁の土塀も崩れて道もなし時ならねども雪かとぞみる

浦方歸帆

津波じやと舟拵へて沖の方しづか成のに碇おろして

長谷寺晩鐘

一ごうに家も土藏もそんじぬる跡に修覆に入相の鐘

愛宕下の夜雨

ぬれ事を嫌はぬ身にもふる雨を嫌ふは山の崩れやこせん

〔郡方舊記〕

一、寛政十一未年五月二十四日日輪朱のごとく赤く、同二十五日朝の内も同事。同二十六日申の刻時分大地震に付、御城中御園御石垣等大損、幷御家中土塀等大破。河北郡宮坂村家立皆潰、暫右潰家より出火、神主家内六・七人相果。且亦此村前の潟に大きなる島出來。別而金澤甚く、御城下近村右に準、御郡方も大抵強く候得共、人家等に異變無之。前代未聞之大地震に御座候。但翰快五月在府、同二十五日早朝金澤出立、堀川郡端へ出候處、朝日朱のごと

く赤く、人足共ニ評判いたし、二十五日歸宅。右日輪赤き事噺候得者、二十四日は終日赤きよしに候。

〔救荒便覽〕

寛政十一年五月二十四日、加賀の國に夜明らかなる事滿月の如し。二十六日地大に震ふ。海潮涌上り、城崩れ、民屋も多く壞れ、人畜類死傷多し。其近きあたりも災及びしときく。

〔日用雜記〕

寛政十一年五月廿六日

一、今日夕七時頃大地震有之候。其跡に通例之強地震幾度もゆり申候。二・三日ニ折々地震有之、深ミ井わつぶれを落し申候樣成音にてひゞき申候。是は六・七日茂止ミ不申候。右大地震に而御城追手先き御櫓臺石垣・堀なども崩申候。御本丸御櫓臺茂崩れ申候。其外御城中所々損申樣子、惣躰石垣皆ゆるぎ申由。ひし櫓茂下之臺ゆるぎ、御櫓も傾申候由。右地震ニ而、金澤中土塀之分は大方に崩れ申候。家も所々損申候。小立野かいなどは、家かへし潰申候分餘程有之候。土地も所々破申候。田地などは破れ、水を吹出し、泥砂を吹出申所も有之。人損も間々有之候。黑津舟御宮坂は潟わつき出し、家も共に潟に折込、助かり候人も有之候得共、大方は溺死いたし申候由。あらまし如此。猶委曲之儀は、追而書記可申

候。前代未聞之大變に而御座候。右地震前三・四日は、朝日以外あかく地に映じ申候處、紅に而染たる樣に御座候。地震後は左樣之儀無之候。右金澤迄之樣子。能州・越中・小松邊は通例强き地震之由。

〔元祿寛政間手記〕

一、五月廿六日七つ時過大地震に付、卽刻歩にて甚右衞門坂通り登城。御近習頭關澤安左衞門を以御機嫌伺、御障不被爲在旨同人を以て被仰出、恐悦奉存旨御請申上。年寄中初何茂登城、暫く退出見合候樣にと申儀にて、六つ時過退出候而も可宜旨村井申聞、退出する。御城石垣等損所數ヶ所也。七つ時過故羽織袴也。篠井文左衞門宅より罷出、早速罷出可然旨申聞、追付登城之處何茂大方登城也。加樣之大變之節は、檜垣之間之御杉戸明居候得ば桐之御間迄直に罷越、御近習頭を以て御機嫌伺候而も宜由。某は少し程有て出候故、檜垣之間之御縁がわにて申上る也。某より跡に出候衆は席にて被申上、某も年寄中席見習之所に着座する。

五月廿八日。震災に乘じ諸物品を高價に賣捌くことを禁ず。

〔加州郡方舊記〕

付札、御算用場奉行に

今般地震に付、諸色直段高直に商賣不仕、且諸物運送不指支樣、夫々御郡等に可被申談候

事。

五　月

右之通可申談旨、御用番大炊殿被仰渡候に付、寫相達候條可被得其意候。

右地震に付、御家中を初家圍等及大破候に付、俄に竹木・繩・蓆・葭簀等指支、入用を見懸右商賣之者高利を貪候段及承候。非常之砌者、前直段よりも利を劣候程にも在之度所、却而急難を見懸直段引揚候等に而者有之間敷候に付、其段當町奉行ゟ申達候條、各支配之儀者品物賣出方に候間、右之趣嚴重可被申渡候、以上。

五月二十八日　　御算用場

栂　喜左衛門殿

馬場孫三殿

今般地震に付、諸色直段高直に商賣不仕、皆諸物運送不指支樣、御郡方幷松任町方・地方ゟ可申渡旨、御算用場より之紙面相越之候條、得其意夫々可申渡候、以上。

栂　喜左衛門

加州三郡十村中

松任町方・地方役人中

追而割附を以急速相廻し、落着より可相返候、以上。

六月三日。金澤に於いて地震以後特に火防を嚴にすべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

六月三日、火之元之儀前々被仰出、一統申渡置候間、油斷有之間敷儀に候。今般地震に付而、御家中之人々居屋敷初圍等損所多、假圍等に而締方行屆兼候場も有之躰。且又末々に至候而は、家居難相成、致明家候分も有之旨被聞召候間、此節火之元之儀、猶更嚴重相心得候樣、一統可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配ゟも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月三日　奥村左京

右之通御用番左京殿より御觸有之候段、安房守殿より御廻文有之旨、代判由路忠左衛門より先達而申來候事。

六月三日。珠洲郡折戸村に三子を生みし者あるを以て前例を調査して上申す。

〔國事雜鈔〕

寛政六年五月七日

一、鹿嶋郡末坂村百姓太兵衞妻腹に、前月二十八日男子三人致出生候旨屆。

同年八月六日

一、三子致出生、御扶持方被下候に付割符之儀、出生之日より被下候与、御算用場〻被仰渡候日より被下候与、兩例區々に相成罷候に付、先々より月番〻相達候日より割符相渡候樣申渡。

同七年八月二十九日

一、鹿島郡高畠村百姓儀兵衞之妻腹に、當十四日より同十六日迄〻三子出生仕候處、兩人は相果候付御扶持方不被下候事。

寛政元年六月十日

一、鹿島郡盤若村百姓勘平之妻腹に、男子三人致出生候而、其内一人死去仕候處、御扶持方被下候事。

安永九年九月三日

一、射水郡水戸田村頭振源三郎之妻腹に三子致出生候に付、一人扶持宛被下候段申渡。

寛政四年閏二月二十四日

一、礪波郡石堤村頭振次郎助之妻腹に、男子一人・女子兩人致出生候に付、十五歳迄一人扶持宛被下候段申渡。

寛政十一年

一、珠洲郡折戸村百姓久兵衛弟三丞之妻腹に、當三月二日三子出生之處、內兩人追々病死仕候旨、御郡奉行書附出候。依而先例相しらべ候處、兩人病死一人相殘候ものへは御扶持不被下候間、今般も被下間敷儀と奉存旨、同月晦日御算用場奉行紙面等出候に付、被下間敷儀と僉議仕候段致押札、六月三日入御覽。

六月四日。金澤强震の報江戸に達す。

〔政隣記〕

六月四日頃、前月廿六日夕七半時頃金澤强地震之由相知る。

六月七日。頭分以上御席へ出、前月廿六日金澤表强地震有之候處、相公樣益御機嫌克被爲在候恐悅、翁吏御客琳奉伺候段、前田織江殿へ迄申演。右僉議之趣有之及延引候得共、何も去四日相伺候趣。右强地震に付從筑前守樣、相公へ御機嫌御伺之御使、御附御步頭井上勘右衛門へ一昨日被仰渡、明朝發足、道中指急之圖りに而八日振り旅行之筈。且壽光院樣初より御

見廻之御使被進候儀、御指留申來候に付、右勘右衛門ゟ御一傳に而相濟候事。

六月六日。前田治脩、領國の地震を幕府に屆出づ。

〔筆のまに〳〵〕

六月廿四日

一、前月廿六日之地震に付御屆之儀、江戸へ申遣、江戸にても尙更しらべ候處、的當無之。享保十四年能州珠洲郡・鳳至郡地震之節御屆有之。寶暦九年御城御類燒之砌、天明九年御領國洪水之砌、先御屆有之、重而委細御屆有之候付、御屆書下物聞番恒川七兵衛、近藤吉左衛門殿へ持參、及御內談候上、今月六日御用番松平伊豆守樣へ御屆有之候。其御屆左之通、今日遂披見

此の屆書は五月廿六日附のものにて同日の條に出せり

六月廿八日。御扶持人・十村等を訊問する爲盜賊改方に召喚することなかるべきを告ぐ。

〔岡部舊記〕

其方中都て不埒等之趣有之節、改方ゟ呼出穿鑿有之樣、中興成來候に付、難指出旨達て相願候得共、御聞屆難被成旨、去辰年被仰出候得共、今般思召有之、十村共右役所に呼出し不申

両役所は改作所及び御郡所

等之旨ニ依而締方之儀共、両役所において猶更厳重に相心得可申候。尤事分明之儀は、格別之旨被仰出候ニ誠に以於拙者共難有儀に候。尤人々油断無之儀に候得ども、斯被仰出候上之儀、役向僉議方第一、立毛損毛見圖り方等を初、萬端無泥相勤可申候。且又尤身持慎方等厳重相心得可申候。胸風説たりとも拙者共聞及候儀は猶以厳重相糺、不埒之趣有之候得ば厳敷相咎候條、是等之趣平十村中にも可申聞置候事。

未六月

〔杉木氏御用方雑録〕

昨廿八日御領國請合御扶持人御改作所に御召、別紙御覺書御渡、猶更御口達を以被仰渡候旨、御扶持人・十村等不埒之疑有之節、改方ハ呼出穿鑿在之様、近年被仰渡候に付、御指出難被成段達而御願立御座候得ども、御聞届難被成旨四年以前被仰出置候得ども、其後段々被仰上候御様子に而、今般思召有之、十村等盗賊改方御役所に呼出不申筈之旨、御覺書之通被仰出候。一旦被仰出候儀御顧返之儀は、御席たりとも不容易儀に候處、ケ様に被仰出候儀難有儀に候間、是以後役向無泥相心得、行狀慎方等之儀猶々厳重に相守候様被仰渡、御請合無之御面々幷十村中等に可申談旨、具々被仰渡候間、早速御順達可被成候、以上。

未六月廿九日　内島孫作

仲間充所

六月。石川・河北等の郡民震後の役に供する爲人夫を上らんことを請ふ。

〔加州郡方舊記〕

付札、御算用場奉行江

今般地震に而御城御園相損候に付、礪波・射水兩御郡村々之者共、暨御扶持人・十村等より、爲冥加人夫三萬五千人・代銀三十五貫目指上度旨之事。

一、石川・河北兩御郡村々之者共、人夫御用之節爲冥加罷出度旨相願候に付、耕作方指障不申樣、遂詮議指出申度旨之事。

一、河北郡高松驛之者共より、人足百人、壹人に付壹匁宛人夫銀指上度旨之事。

右之趣夫々願出候に付、御郡奉行等より指出候紙面、以添紙面被出之、相達御聽に候處、奇特之至に被思召候。右代銀夫々被取立、御普請奉行・御作事奉行江割符可被相渡候。人夫之儀ハ右奉行より御郡奉行江可相達候間、夫次第指出候樣、御郡奉行・改作奉行江可被申談置候事。

十一年未六月

覺

一、五千五百人　　石川郡・河北郡兩御郡より指上申人歩高

内

千六百人　　河北郡當り

三千九百人　　石川郡當り

右當五月廿六日夕七時過之大地震に而、御城中御閣等以之外及破損申に付、爲御冥加石川・河北兩郡より人歩五千五百人指上御用立申度段、兩御奉行ぇ小紙を以御伺被成候處、御達御聽に御座候處、奇特に御思召被爲遊候段、御書立を以被仰渡御座候。依而未六月廿日右之通組割符相極候事。

七月二日。金澤に又強震あり。

〔政隣記〕

七月二日金澤強地震二度、翌三日も一度有之。最初之地震者餘程強、人々竹藪等ぇ逃入、御近習向者伺御機嫌罷出候程之由。尤去月二十六日に競ぺ候而者微少与云々。

去月は五月

七月九日。前田齊廣、治脩夫人の子養する所となることを告ぐ。

〔御年表〕

同十一年七月七日筑前守様御儀、此度御前樣御子成御定被遊候旨被仰出。

〔横山氏日記〕
七月九日　曇、四時過少々雨、晝より天氣吉
筑前守樣御儀、此度御前樣之御子成に御定被成候。各爲承知被仰聞候。御家老・若年寄に茂可被申聞旨被仰出候事。

七　月

七月廿二日。諸郡神事祭禮等に際し、芝居見世物を催すことを禁ずる幕令を傳ふ。

〔觸　留〕
在々におゐて神事祭禮之節、或は作物虫送り・風祭なとゝ名付、芝居見せ物同樣之事を催し、衣裳・道具等をも拵、見物人を集め、金錢費し候儀有之由に付、從公儀相渡候御書附一結一通寫相越之候條、被得其意、寺社門前地之者共へ可被申觸候、以上。

己未七月二十二日　　　　長　大隅守
　　　　　　　　　　　　奥村河內守
前田修理殿
前田內藏太殿

能州四郡十村中

七月。諸士困窮するを以て役銀・學校銀以外當月の上納を免除す。

〔政隣記〕

定番頭に

當時調達方別而不通用に而、御家中之人々難澁躰被聞召候。依之役銀曁學校銀之外當月上納銀之分、格別之趣を以御用捨被成候。不指支人々者指上候儀勝手次第候。且又町方指引之儀は、不筋之族無之樣可相心得候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々にも可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配にも相達候樣可被申談候事。

右之通一統可被申談候事。

未七月

右御用番被仰聞候旨、例之通定番頭廻狀出。

七月。石川郡野田山に於ける前田利家以下の廟所地震に破壞せるを以て災前の狀を徴す。

〔袖裏雜記〕

寛政十一年五月廿六日金澤大地震之節、野田高徳院樣御廟所御靈堂等損候付、桃雲寺へ以前之樣子寺有之候處、書付出之。其略。

右御靈堂前戸之兩脇表に

爲桃雲淨見大居士者也

本造立施主篠原出羽守

内者容殿

當寺開山象山和尚者、大納言樣御引導師、則御逝去以後唯今之屋敷に草庵を結び、致隱居罷在候處、慶長五年之春利長樣御建立被爲成、御城中御書院……を被遣、當寺佛殿相建候。右執筆は象山直書に見候。元和元年三月寺中燒失、委き筆記燒失相知不申候由。

芳春院樣御廟所御靈堂

前戸之兩脇不動尊・地藏尊

勢至菩薩

御五輪　芳春院殿華巖宗富大姉

觀音菩薩

當寺二代泰由和尚者、芳香院御取立之僧に而、慶長十四年芳春院樣御壽影御出來、御在世之内當寺へ被爲懸置、御菩提所に御定被爲成、御逝去後御遺骸も當寺へ被爲入、御葬送御引導師泰由へ被仰付。右は泰由執筆と見え候へども、舊記燒失之事同前。

瑞龍院樣廟所御靈堂

前戸之兩脇不動・毘沙門天

外角柱爲瑞龍院殿贈權大納言聖山英賢大居士者也

外角柱于時慶長十九甲寅季黄梅念日

年號

御五輪　奉爲贈權大納言聖山英賢大居士

月　日

右書付當寺三代關室和尚執筆と見候。惣じて當寺儀、古代は高徳院樣御塔婆御點眼且御茶湯等も、三十三年忌迄當寺に而被仰付候。孤月院樣も當寺地内に御納、御塚等支配仕、御七年忌迄は御法事等致執行候。小松若子樣と申も當寺へ御納り、御法事并御塚支配等致來候儀、委く筆記等相殘罷在申候。然者古代より御廟所靈堂并山内之儀は、御菩提所之儀候へば、當寺より裁許致來候趣に候。玉泉院樣御靈所御靈堂之委敷儀知れ不申旨、寛政十一年七月桃雲寺

書付寺社奉行出候。

八月六日。年寄中席に於いて蝶鮫を觀覽せしむ。

〔横山氏日記〕

八月六日　曇

一、今般御歸國之節、御道中於魚津御覽被遊候、新川郡濱經田村に而捕上候蝶鮫干立、此表へ到來に付、今日年寄中等相屆候人々見物被仰付候段、勝尾半左衛門申聞候旨、執筆竹中伊兵衛を以被申聞候に付、年寄中席に而何茂致見物候事。

但、御禮之儀月番引受被申上候事。

八月六日。大小將横目坂井小平その家に侵入したる賊を刺殺す。

〔政隣記〕

八月六日曉坂井小平（筑前守樣附御大小將横目。在金澤居宅宗叔町。）居宅に、賊躰忍入候樣子に付、起出候處、脇指一刀帶し候者迯出候に付、小平壹人に而難召捕候處、帶し有之脇指に而突留置、檢使乞書附差出候處、同日夕令絶命候に付、重而書付出候處、同夜公事場檢使相濟。死體者賊躰に付公事場へ引揚有之。

但、右賊躰之者は、當年二月迄小平方に召仕候小者次助与申者、當時は大隅守殿御家來召

仕候小者に付、御同人よりも檢使乞有之。

八月廿二日、御馬廻頭江守平馬の家來五人同時に逃亡す。

〔政隣記〕

八月廿二日於金澤、江守平馬（御馬廻頭兼御倹約奉行新知千三百石。）家來、給人三人・足輕壹人・小者馬捕壹人、都合五人一集に令出奔、且平馬印章盗出押之、銀三貫目出入之町人より證文を以借受取逃。且又自分々々之由緒帳幷請合證文をも取逃致候事。

八月廿八日。金澤に地震あり。

〔政隣記〕

八月二十八日金澤、暮頃地震、所によりて強し。

九月十日。家中の諸士に捕鳥の方法に關して禁止の條項を示す。

〔政隣記〕

御家中之面々、諸殺生御免場之内に而も、網懸・もたい八寸以上之串指候儀、且三里四方天網張小鳥捕候儀御停止に候所、御免場之内に而者不苦樣に末々心得違之者有之躰に而、猥に相聞候に付、以來右躰之儀無之樣、天明五年・寛政元年にも一統相觸候得共、今以心得違之者も

有之。別而天網張候儀、御郡方之者与申談網場拵置候者も有之躰相聞、甚猥之樣子に候。依之以後右躰之殺生人見受候者嚴重に召捕候樣、御郡方之者へ申渡候條、心得違之族無之樣、御家來中之面々等家來末々迄申付置候樣、一統御申觸可被成候事。

未九月

別紙若年寄中紙面之通可得其意旨等、御用番前田大炊殿より今月十日御觸出有之。

九月十七日。金谷御殿に於いて帶佩を演ぜしめ年寄以下に觀覽を許す。

〔横山氏日記〕

九月十五日　今曉雨天、五時過より天氣吉

一、明十六日金谷御庭、たいはい御近邊之人々ゟ被仰付候間、望候人々見物被仰付候旨被仰出候。聞隨・南郊へも可申談旨、月番演述。聞隨等へ主附内記より以紙面申遣候事。

九月十六日　朝之内雨天、四半時頃天氣吉

一、今日たいはい雨天に付御延引、明日被仰付候段被仰出候事。

九月十七日　快晴

一、八半時たいはい見物人相廻り候間、罷越候而も宜段、玉川七兵衛申聞候に付、年寄中等何茂追付退出、松坂通鼠多門向二枚開より金谷御庭へ入、見物所ゟ罷越候處、追付初り、七

半時頃相濟、直に退出之事。

一、今日にいにい、寺社奉行・公事場奉行・御算用場奉行・諸頭・御馬奉行等、會所奉行等、其外御武具奉行等茂見物被仰付候。御次に而申渡有之候由。兩席執筆等ミ不殘見物被仰付候。見物所御大小將横目指引之事。

九月二十日。石川・河北二郡にて鳥構を行ふ者の山林を荒廢せしむることを禁ず。

〔政隣記〕

石川・河北兩御郡山々、御家中鳥構場之内に松枝等下し、或は生松之皮を挑ぎ、根に火を燒、損木等多出來、彼是山々荒申に付、寛政五年・同八年御屆申上候通り御座候。然處御家中家來末々之者共心得違有之、今以山々所々に右樣之儀多有之。其上是迄構場に而無之場所に新たに札を入、立枝杯を伐荒候ヶ所等有之旨等、山廻り之者共及斷申に付、札之儀者見付次第爲取除申儀に御座候。將又御林之内成長盛中之松之眞杯打、構場之樣に仕なし候ヶ所も有之、甚猥之趣共有之、御締方行屆兼申候間、以來心得違無之樣、御家中家來末々之者共迄、嚴重被仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

未九月二十日　　　　　　　　　　馬場孫三

栂 喜左衛門

前田大炊様

十月四日。先の震災により諸士難澁するを以て本年借知の一部を返附すべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

十月四日、金澤二之御丸に人持・頭分筆頭一人宛御呼出。各四時過致登城候處、於檜垣之御間四五人宛に、左之御書立御用番安房守殿御渡被成候事。

御家中一統難澁之處、當夏地震に付人々居宅圍廻りも損所多樣子被聞召、彌增可致難儀儀に付、何卒格別御救をも被仰付度思召候に付、早速御詮議をも被仰付候得共、累年御勝手御難澁之處、近年打續過分之御物入有之、別而御逼迫至極に而被成方も無之候。去々年も御家中難澁に付、增御借知之分一作被返下、小身等之人々に者、御貸銀茂被仰付候事故、當年者誠に非常之物入も有之、其上近年ゟ者米價も下直に候得ば、御借知も全被返下、御救をも被仰付度儀に候得共、御手繰甚六ヶ敷、中々其所に者至不申、御心外に思召候。乍然誠精御僉議之上、增御借知之分今年一作一統被返下、三百石以下之人々に者、增御借知共都而十石宛被返下候條、猶更遂勘辨取續可申候事。

今般增御借知等一作可被返下旨被仰出之趣、別紙を以申渡候通に候。御勝手振者、去寅年已來申渡同樣之內、近年別而不時御物入も有之、中々御借知難被返下候得共、今年非常之物入も有之儀、其上頭々より段々願之趣も有之に付、別紙之通被返下候。右之趣に候間、其儘指上度人々者勝手次第に候。此段も達御聽申聞候事。

別紙兩通之趣被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。且組等之內裁許有之人々は、其支配一へも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

十　月　　本多安房守

付札、御横目に

今日申聞候被仰出之趣に付、布上下に改、爲御禮人持・頭分二・三日中に御用番宅へ相勤可申候。幼少・病氣・在江戶等之人々に者、同役又者筆頭代判人より可有傳達候。右人々御禮名代人御用番宅へ相勤可申事。

一、組・支配之人々御禮者、其頭等宅へ相勤、頭・支配人より御用番に以紙面可申聞候事。

一、與力に者其寄親より可申渡候。御禮も寄親迄罷出可申事。

但、自分御禮に相勤候節、與力之儀も一集に可申述候事。

右之通夫々可被申談候事。

十月四日

付札、定番頭へ

今般一作被返下候増御借知等、御米を以被返下候而者、賣捌出來兼可申躰に付、此節之直段を以代銀に而、御調達次第來月中に可相渡候。尤御米を以請取申度人々は、勝手次第に候條、納吏直に御算用場懸合可申候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配へも相達候樣可被申渡候事。

右之通り一統可被申談候事。

未十月

右定番頭へ御用番安房守殿御渡之旨、例之通廻狀有之。

十月九日。前田治脩老臣等の借知返附を辭したるを嘉す。

〔筆のまに〳〵〕

一、五月之地震に付、御家中增御借知等被返下候へども、年寄中・御家老中は其儘上度旨申上候處、左之通今日御用番より紙面到來。

今般增御借知等一作被返下候へども、是迄之通被指上度旨達御聽候處、御喜悅被思召、當年者地震に付團廻り等損所、暨家中手當も有之候へ共、各より申上候儀に付、乍御心外被任其旨、此段可申達由被仰出候、以上。

十月九日　本多安房守

奧村河內守樣

十月廿四日。年寄・家老等に蓮池亭にて紅葉を觀ることを許す。

〔横山氏日記〕

十月廿四日　天氣吉

一、年寄中山城・內匠助、御家老中・若年寄、何茂八時退出より直に蓮池へ罷越、先御亭へ罷出。夫より玉川七兵衛誘引、御庭之內見物いたし、相濟、御亭へ罷越候處、以勝尾半左衛門、緩与見物可仕旨、且被召上候御菓子之御殘御有合に付被下候段御意有之。御餠菓子・御薄茶頂戴之、給事坊主。

但、御庭見物之内刀は御亭に指置候事。

御餠菓子　やうかん　白葛卷　紅薄皮餠

御猪口に砂糖

御煮染　焼魚　椎茸　花卵　焼豆腐　そら清瓜

〔元祿寛政間手記抄〕

一、寛政十一年十月廿三日、明日天氣次第蓮池之紅葉望に候はゞ見物被仰付旨、以主稅被仰出候段月番より紙面到來。

一、二十四日九つ半打登城、天氣快晴石川に家來廻す。暫くありて八つ打、年寄中・御家老等先へ蓮池に被參、此方家來石川に廻し置也。是等は、只今退出直に蓮池へ參り候、各々も御同道いたすべく哉とか挨拶あるべき所、一向左樣之御儀なし。跡より山城・某同道にて、石川より暫々之間故歩行にて參り、白鳥堀の向ひ蓮池御門と云歟、其所より入ると三十人頭兩人出ゐる。次の御門にて三十人草履持參り、はきかへ、三十人頭先立、上の御亭一統列座故其所に上り候と、主稅申候は、御間の内等とくと御見物被遊候樣に本存候旨被申。夫より年寄中一所に上の御亭の御間之内拜見、二疊の違ひ向ぎりあり。上の間八疊、次の間六疊か、此所に年寄中・御家老向ひ合せ列座也。其次の間三疊、其列座の所に刀置候而御路地見物する也。上の御亭の下、石川の方へおり口、ひよどり越と申候由。夫よりおり候と、内橋の御亭、御馬場八・九十間にもある也。御馬見八疊歟六疊歟。其次の間へ行所橋にて、下は水なり。其橋わたり、次の間是亦六疊歟。舟の御亭、是は板にて、一間半に二間ばかり也。瀧見の御亭、是は學校の方歟。此所別てせつ景なり、見渡せば瀧見ゆる。御

さい〳〵へんは再々返觴

たいはいは帶佩

先達とは寛政四年十二月廿一日にてその文は同日の條に擧げたり

縁先に、つぼく茶うす形の御手水鉢に、人形琴を枕にてねむりたる形をほり上にして、程乗の作の由。其人形ははくがさやらと云人の由。此所四間程あり。凡て御亭四ヶ所也。御庭の景躰いはんかたなき見事なる事也。

紅葉は餘程落葉に而左程には無之也。御泉水の樣子瀧も四五ヶ所あり。一度に而は中々不被覺也。御庭見物相濟、上の御亭にて前の通り列座、暫くありて御近習頭玉川七兵衞（是は初中御路地見物の時つきあるゝ也）罷出、只今勝尾半左衞門罷出御意相述候由申候而、暫くありて半左衞門罷出、御庭ゆるりと見物仕候樣に思召、折節召上りもの御菓子の御殘御座候間被下候段被仰出候由相述る。一統平伏、安房守殿御請被申上。暫くありて坊主共給仕にて御菓子出る。羊かん・葛卷――三色也。一統頂戴也。替り重組違ひ、さい〳〵へんにて相濟。右相濟、薄茶出る。夫にて相濟、當座の御禮玉川七兵衞に一統相述ぶ。夫より退出也。御禮の儀は分て登城にも不及、月番引請に而翌日申上候由に而、たいはい見物の時之通り也。御菓子頂戴之節、さいへんより皆紙に包袖に入候也。是はあるまじき事也。頂戴物の事なればたべ可申所、一統右之通り故此方もつゝむ也。見苦敷一統之被致方也。

〔蓮池庭の圖〕

先達而蓮池の御庭拜見仰付られしゆゑ、年を經て忘れん事を恐れ、其粗を此表と裏に圖し、

或はしるし置し也。然るにことし初冬廿四日年寄中等・若老まで、かさねて此瓊庭拜見せよと仰ふるが故、金城退去より各罷出拜見す。此日甚之勝日にして、四林葉をならさず、時候にはいとかなる斜景也。故に一入逍遙こゝかしこ緩々拜見して、先年しるし置候所、覺え違ひしと思ふところは、此度筆を加へ、亦名狀の不足所も共に增補せしとかや。

寛政十一己未仲冬日　　政本追加之

政本は本多氏

十月廿九日、諸士に返戻すべき借知米は代銀を以て之を支拂ふべきことを告ぐ。

〔政隣記〕

今般被返下候御借知米、右被仰渡候節之直段を以代銀に而可相渡旨、御用番より被仰渡候に付、當月初於當場御郡方貯用米買上候直段平均相極、先達而一統申談候得共、頃日町方賣買米直段引立候樣子に付、遂詮議、御用番へ相達、右申談候直段之上、加州米一石に付二匁宛、能・越米一石に付二匁宛增直段を以可相渡候條、人々受取切手に加場印、來月六日より偶日毎に米銀共可相渡候條、印形之紙面を以受取人可有御指出候。尤同役中可有傳達候、以上。

十月廿九日　　御算用場

右先達而一統申談之趣、前洩に付左に記す。

今般被返下候增御借知代銀渡極直段

一石に付

一、四十六匁一分　　堂形藏米

但、百石以下并御扶持方被下候人々。

同　斷

一、四十一匁七分　　本吉藏米

但、御切米被下候人々。

同　斷

一、三十六匁八分七厘　越中平均直段

同　斷

一、三十七匁二分　　能州平均直段

右之通に候事。

十月、震後の窮乏を救ふ爲足輕以下に借銀を許す。

〔政隣記〕

覺

一、足輕之分都而一人　　二十目宛

一、坊　主　　二十目宛

一、小　者　　十匁宛

右御貸付方之儀、委細御算用場奉行ゟ申渡候條、直に承合可申候事。

付札、定番頭ゟ

御家中一統難澁之處、當夏地震に付人々居宅圍廻り等損所多樣子被聞召、彌增可爲難澁儀に付、御借知等今年一作被返下候儀一統申達候通付、足輕等ゟは別紙割方之通御貸渡被成候事。

右之通被得其意、組・支配有之人々ゟ、夫々可被申談候事。

未十月

十一月六日、前田治脩江戸聖堂の消防を命ぜらる。

〔御年譜〕

一、十一月六日御月番安藤對馬守殿ゟ恒川七兵衛御呼出、左之通御書付御渡。

御名

此度聖堂御普請被仰付、御場所も廣御補理有之候。其方居屋敷最寄之方にも候得者、以來右

今年は寛政十年

御名は松平加賀守

場火消手當可有候段可相達旨被仰出候。最寄之火消之儀、兼々手配之程格別に有之由相聞候。御沙汰にもおよび候儀に候間、最寄火消之心得を以、在府・在國共其手當有之候樣可被申付候。尤聖像除之儀者、是迄被仰付置候通に而、火防之儀者不仕筈に候間、可被得其意候。

一、亜而十一月十二日安藤對馬守殿に右同人御渡。

御　　名

今般被御付聖堂火消之儀者、其節林大學頭幷御目附罷出候間、右而々指圖を請相勤候樣、家來共に可被申付候。

〔政隣記〕

今年江戸聖堂御修覆之名目を以御建直。依之聖堂邊より昌平橋之手前、追々御普請小屋出來、夥敷御造營之處、翌寛政十一年十月追々出來。同十一月六日夜御用番御老中安藤對馬守殿御宅に聞番御呼出に付、則恒川七兵衞罷出候處、聖堂御普請出來に付、右邊出火之節火消之儀、此方樣に御賴之旨被仰渡。依之防方等之儀御國表に伺等有之。

〔政隣記〕

十二月十日、前記十一月日六に有之通に付、神田筋町中に、從公儀左之通被仰渡有之。

御名居屋敷最前火消之心得を以、在府・在國共聖堂火消之手當申付候樣、此度被仰渡、板倉主

水佑儀に向後防人足不及指出に、聖像遷座、大成殿御額持退之儀相心得候筈に候。若出火之節、町火消人足共混雜無之樣、組合限り人足幷月行事共〻兼而可申聞置旨、名主共より可申通候。

未十一月

十一月。一類附帳に記載せられざる者を養子とする場合に付内規を定む。

〔政隣記〕

於金澤御馬廻頭中示談之上、左之紙面御用番小寺武兵衞より覺書に認、御年寄衆に及御内談置候處、左之通御月番長甲斐守殿御付札を以、紙面之通可相心得旨被仰渡。

本文之通に可被相心得候事。

いとこ違、或又いとこ、又は養父實方之筋目之者拵有之候得共、其者存念に不相叶候得者養子に不相願、筋目無之者を相願申儀も可有之候。併帳外之者に候得者、私共穿鑿行屆不申儀も可有御座候。然所若右いとこ違等之者不相願、他人を相願、末期に至彼是申分致出來候而者心外之儀に御座候。尤隨分相糺可申候得共、全行屆申儀も難計奉存候。其上右等之者、存念に不相叶者相願不申とて存寄申出候而者、申分相立候樣に罷成申候而者、假令人品不宜者に候共、人品不宜養中立致儀絕候儀難仕、無是非養子に仕候樣之儀も可有之。左候而者心外

家にも相障申様之儀も可致出來哉に候得者、此處に至り候而者不容易儀に御座候間、帳外之者は右様之族有之候共、養父之存寄次第に相成候様に仕度奉存候。依之御内談申上候事。

十一月

本文之通に可被相心得候。

十二月十日、一季居の奉公人に主人より送状を與ふるを禁止す。

〔政隣記〕

付札、定番頭へ

御當地に家持罷在候者、不届有之、於公事場禁牢申付候者に、生所御郡地にて、村方者御當地へ稼に罷出候躰に申延置、人別帳にも離れ不申者有之。不埒至極に付、其様子遂吟味候處、右之通村方は稼に出候趣に申罷出、於御當地奉公に在附候上、家を求候趣主人へ相達、送り状を申受候故家求候儀相成、其上に而奉公指止め、一度送り状有之に付宅を替候儀等不指支、折々は在所へも罷越候故、村方百姓人別帳にも離れ不申譯に候。右之通に而者御縮方相立不申候間、都而一季居奉公人請人を以召置候者、送狀指出申間敷候。且又一季居奉公人奉公を止め、侍方長屋等に罷在稼致し候儀、從前々相成不申儀に候條、猶更自今右躰之者へ長屋貸申間敷候。町方等に家持罷在候者、及難澁家賣拂、長屋を借り候者は是迄罷在候。居町役

人之送狀に、外請人を取長屋貸可申候。其者長屋を爲明、外へ罷越候節者、先送狀に添書を以相返可申候。將又當時長屋貸置候者有之候ば、御郡方百姓等之稼に出居申者に而無之哉相糺、無心許者には請人へ申渡爲相返可申候。

一、町方幷寺社門前其外町續之御郡地に罷在候者、下人を召仕候共、一季居之者ゟ借宅等之送狀指出間敷候。年久敷召仕、畢竟家を求候者には、其者之生所を糺、家相求御當地に居住不指支哉、出生所之役人手前承糺候上、送狀指出可申事。

右之通公事場奉行申聞、承屆候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配にも申渡候樣可申渡候事。

右之趣一統可被申談候事。

未十二月

右今十日安房守殿より御廻狀到來之由申來。

十二月廿二日。德川家齊及び夫人、前田治脩等に歳暮の祝儀を贈る。

〔政隣記〕

十二月廿二日歳暮爲御祝詞、從御臺樣、御使御廣式番之頭石尾喜左衛門殿を以、白銀十枚・干鯛一箱・御目錄御拜受、御名代若殿樣。從公方樣・御臺樣御前樣へ、上使鈴木左門殿御廣式番之頭を

以、綃紗紅白二十卷・白銀十枚・干鯛一箱御拜領。壽光院樣へも上使御廣式番之頭長谷川藤太郎殿を以、御同樣三種御拜領。都而前々御例之通御作法に而被爲濟候事。

十二月晦日、富山侯前田利謙の上屋敷馬飼料所より出火す。

是月は大嘗なり

〔政隣記〕

十二月晦日曉七時頃、下谷茅町出火与近板打、無程池之端与見直し、觸掛子木到來。各御殿ゝ出候處、暫有之鎮鐘打候に付退散。于時右火事所は出雲守樣御上邸之内御馬飼料所より出火、三間四方計燃立候處、御手勢、暨此方樣御人數一番火消杉山新平・二番山口左次馬罷越防留。右に付出雲守樣御指扣御伺書御指出。此方樣よりも御同樣之御伺書出候處、不被及其儀に旨、卽刻御用番御老中御指圖有之。依之御門方等何之相替儀も無之候。

但、御松飾は晝頃迄見合有之迄に而相濟候事。

〔筆のまに〱〕

一、當二日江戸發足早飛脚步、昨十日到着。來狀之内、舊臘晦日曉七時前出雲守樣御屋敷内より出火、無程火鎮り候。右に付出雲守樣より御屆等、且又聞番より伺之趣左之通。

當二月は寛政十二年正月

今曉七時前、私居屋敷之内東之方長屋續馬建際、從物置出火仕、一間四方程燒拔候之處、早速鎮火仕、類燒無御座候。此段御屆申上候、以上。

十二月晦日　　松平出雲守

先刻御屆申上候、私居屋敷内長屋續馬建際物置より出火仕、不調法之至奉存候。依之差扣奉伺候、以上。

十二月晦日　　松平出雲守

右不及御差扣段、早速御差圖有之。

加賀守本郷上屋敷之内、同姓出雲守居屋敷内末之方長屋續、馬建際物置より今曉致出火、屋敷之外類燒無御座候。依而加賀守指扣申に而可有御座哉奉伺候、以上。

松平加賀守内

十二月晦日　　恒川七兵衛

十二月。江戸詰の諸士困窮するを以て金子を貸附すべきを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、水野次郎太夫に

當春以來、此表米價を初諸物高直に而詰人難澁に付、御救方之儀願之趣有之、其時々金澤表へ申遣候處、一統難澁之段無據儀には候得共、御勝手向連々御難澁之上、別而今年不時御物入多、就中當夏依地震莫大之御物入、其上御家中之人々御救方に被仰付、彼是彌増之御逼迫

一人扶持とあるは江戸詰の扶持方なり

に付、此表御仕送方も指支、追々御調達を以漸御間を合せ候御手繰故、詰人御救等者難被及御沙汰旨申來、則其段委曲先達而申達候通に候。然所何も取續難相成、勤仕にも指支可申体之由に而、重而段々願之趣議無據相聞え候得共、最早御國表へ往返之日間も無之、一圓手段無之候。併一統指支も無據事に付、打寄詮議之上、此表切之取計に而、御調達を以乍少分、當八月中迄に此表へ參着之人々は者、一人扶持に金二歩宛、九月以後着之人々には一人扶持に付金一歩宛之圖りを以、御貸渡之儀承屆候條、右之趣を以何分相辨可申候。返上之儀、來三月御扶持方代相渡候上、取立候筈に候。

右之通被得其意、組・支配之人々は可被申渡候。且又諸頭中へ演述、組等之人々にも申聞候樣可被申談候事。

未十二月

右次郎太夫より廻狀之事。

十二月。堀勇閑長壽を以て前田治脩より小袖を與へらる。

〔漸得雜記〕

一、淺野町入口堀兵馬祖父堀勇閑と申候。寛政十一年九十九歲に成しが、同年十二月下旬之頃相公樣より御小袖拜領被仰付、幷御詠歌被遊被下之候事。

老の坂こえいこすなよ百歳の杖を便りに春をまつべし

十二月。石川・河北二郡に於いて震災に罹りたるものに貸米を許す。

〔加州郡方舊記〕

覺

一、四百二十六石　　御貸米

右石川郡・河北郡村々等、當五月廿六日地震之節潰家等之者共へ御貸米。

一、八石四斗　　被下米

右河北郡淺野村領等に罷在候皮多并藤内ども、當五月廿六日地震之節潰家等之者どもへ被下米。

右之通承屆候事

未十二月

覺

一、本潰家者一軒に三斗宛之事。

一、損じ家等之儀者、先達而調理出し之家數に、平均を以割符可申渡事。

一、町續者一軒に平均二斗宛之事。

但本讀家者三斗宛之事。

右地震御貸米割符如此可申渡候。尤十五ヶ年賦返上之事。

申正月十九日　　石川・河北寄會所

寛政十二年

正月朔日。前田齊廣江戸に於いて年頭の賀を受く。

〔政隣記〕

元日五半時御供揃に而、筑前守樣御館に御出、四時過於御居間書院二之間に、前田織江年頭御禮被爲請、同四之間に而人持・諸頭幷御附半士一統御禮被爲請。且右之節御用に而相殘候人々、二番座に被爲請候事。

但、頭分已上者右御禮相濟御席へ出、織江殿へ年頭御祝詞申述退出之事。

一、出雲守樣御出、於御小書院御對顏、御盃事有之。尤御料理出、其外御客衆御料理出候儀等前々之通。

正月二日。前田齊廣登營して年頭を賀す。

〔政隣記〕

正月二日、筑前守樣御登城、年頭御禮被仰上。

二月十日。江戸に勤務する者の衣服等に關する前令を嚴守せしむ。

〔坂井舊記〕

江戸表御式臺を初御表向、都而綿衣等麁服可致着用候。御見廻懸り之御客等者、御給事たり共綿衣等御貪着無之候間、勝手次第着用。御内輪相勤候人々者尤麁服可致着用候事。

一、江戸詰中於御貸長屋無益之參會無用之事。

一、餞別幷土産物堅無用之旨前々被仰出候得共、違失之人々茂有之躰に付、自今以後相互に堅差止可申旨、近年被仰出候通、尚又嚴重相守可申候事。

一、足輕以下者御門外たり共綿衣着用、刀・脇指拵金銀相用申儀は可爲無用候事。

一、御家中家來・若黨等衣類不相應之族無之樣、主人々々より嚴重可申付候事。

右之大綱前々被仰出候得共、當時萬端嚴敷御省略中に候間、尚更急度相心得候樣可申渡旨被仰出候條、被得其意、組・支配之人々に可被申渡候事。

今日可致登城旨、昨日奥村左京殿より依御紙面致登城候所、別紙覺書を以被仰渡候に付、寫相廻申候。御順達可被返下候、以上。

二月十日　　　青地七左衛門

同　役　中

二月、百姓の切高・取高・買入高等のことに關して令す。）

〔御高御仕法記〕

高方之儀に付、元祿年中以來凶年等に依而不得止事取扱之儀、時々申渡候趣多端に而、いつとなく規矩を失ひ、一郡之内にも組々切高取捌等區々に相成、其虚に乘じ奸僞之者共不埒之切高致約諾、積米等を貪取及爭論、裁許御扶持人於手前に詮議致落着兼、訴出申族近年度々有之。其時々村々遂詮議候處、元來規矩を失ひ取扱致混雜より事起り申儀故、裁判も致兼候程之儀有之。加之右之外持高人別之儀に付而も、甚等閑不埒之族在之躰、畢竟裁許之人々不穿鑿之至に候。高方之儀は改作之根元、諸郡共取扱迄も可爲一樣事に候。依而今般詮議之趣委曲申達候條、一統嚴重に相心得、已後取扱之儀者勿論、是迄不穿鑿之趣早速夫々相糺可申聞候。

一、百姓不覺悟に而年貢難爲仕、皆濟相濟出道無之、持高難致耕作者、村肝煎等吟味之上切高爲相願可申候。百姓手前よわく候共、其處ゟ至不申者、切高願承屆申間敷候事。

但、切高取捌之儀、高切人農暮村肝煎ゟ、御收納不足有之出道無之に付致切高度旨願出候者、五ヶ村役人立會、切高精誠相減候樣遂詮議、切高不致而難叶分者、成丈其村ゟ讓渡候

様可致詮議。乍去其村に取人無之歟、餘村望人与禮米格別相違在之候者、他村望人ゟ相渡可申。禮米之儀切高證文に書載、村役人幷五ヶ村役人奥書を加、高切人幷請取人相同、裁許十村ゟ相願、其節十村手前において重々遂詮議、彌御收納不足相違無之儀に候者、承届可申。右之通十村承届候上、禮米爲相渡可申候。右之振に相違之分には、都而下切高之趣に而、及申分に候ども、禮米指出候者可爲損分候。尤高取揚可申候事。

附り、右之通取捌相濟候上、翌春品々帳致付札、拙者ども印章請置可申候。自然無據子細在之及延引候分には、其段書附を以申断受指圖置可申事。

一、他組より掛作百姓切高相願候砌者、其組裁許十村より、御年貢則米に而切高相願候段、指紙面を取請、前段之通取捌可申事。

一、寺社方幷町居住之者子弟等、入百姓相願、是迄取高いたし候者、右名目而已に而作小屋を建、不致手作、皆下し作に致置候者多有之由に候。元祿年中右之者共入百姓に相成候者、取高之儀承届可申旨申渡置候處、右之名目而已に致し置候儀、第一其許之十村甚等閑之儀不届之至に候。右之者共來春迄に、最初入百姓相願候村々ゟ引越、作小屋を掛可致手作候。外掛作高在之候共、最前入百姓に相成候村一ヶ所致出作候得者、其餘者唯今迄之通ゟ手作下し作任勝手に可申候。此段嚴重可申渡候。尤高かさ持候者、應其高に馬致所持、馬數相増候様

可申渡候。是等之趣難相成者共者、當暮不殘高讓替可申候。自然村に寄、切高望人無之候者、縮高に申付置、詮議之上夫々作配可申付候。

但、右名百姓之分組切相しらへ、當三月中書出置可申候。來春まて等閑に致置候分ハ、高取揚可申候。勿論是以後入百姓相願候者、入念に相糺、人柄も見屆候上承屆相願可申事。

一、右之通名而已之百姓下し作之儀、村方に高番代与申者を立、右番代ゟ高相渡置、夫より小作ゟ又下しいたし候躰に相聞候。依之畢竟小作共之衰微に相成候。此根元町居住之者等高持候故、前段之通り作小屋を懸候上は、一圓高番代相立申儀仕間敷、作餘り候分幷掛作共小作ゟ直に下し付可申候。若小作共年貢相滯候歟、餘米引等不埒申出候者、其段裁許ゟ相屆候樣可申渡置候。先年も申渡候通、小作年貢相滯候者、其身幷妻子共爲致奉公、給米幷家道具賣立候而、親作ゟ者年貢爲相濟可申候。此儀御郡に寄等閑に取扱候故、下し方不致出來候條、嚴重に相心得可申候事。

一、百姓病死跡年貢明き有之、親類幷村役人立會切高相願候者、當納之儀者格別之趣に候間、承屆可申事。

一、頭振病死後男子持不申、養子もいたさす、後家入百姓之名を出致取高、或は高持百姓に而も、男子持不申、女子何人も有之內、後々入聟を取爲致別家申覺悟に而、別名に而致取高

候趣在之躰に候。都而名与高与離候分、前ヶ條之通可申渡候。

一、百姓子弟等名前に而致取高、親与同居罷在候者、成長之後別家爲致可申候。若別家不致内致病死候はゞ、名跡人相立爲致別家、跡目之願出可申候。無據趣有之、親元ゟ寄高に仕度旨相願候者、重々詮議之上、品により格別に可承屆候。

一、百姓幼少に而後見中、切高之儀承屆申間敷候事。

一、寺社方之分、先年より寺號等に而高持居申分、切出申儀者不指支、寺號等に而取高之儀堅承屆申間敷事。

舊所本の儘

一、質入高之儀御停止之事に候。借銀方慥所に書入申樣之儀有之樣に相聞え候。自然右躰之儀在之候者、高取揚急度咎可申付候。

一、皆切高之儀、懸作幷新開之外、先規之通も承屆申間敷事。

一、百姓二・三男ゟ高分之儀、一圓不相成格に候得ども、五十石より以上持高有之百姓、致分高殘も高五十石より內に不相成分者、承屆可申旨元祿年中申渡候通に候。且又奧郡之儀者、山方に而大高持稀に付、五十石より內に而も格別に可承屆之旨、先年申渡置候。外御郡も奧郡に準候山方小高所之儀者、品により詮議之上承屆候儀も可有之候。尤死後遺言等に依而高分之儀、一圓相願申間敷事。

一、入百姓願出之候共、其村人多に而高不足に候者、爲相願申間敷、尤承屆申間敷候。此等之儀重々裁許手前に而遂詮議、相願可申事。

一、十村新田裁許・山廻り致取高候儀不指支旨、元祿年中申渡置候通に候。乍去御扶持人外十村之儀は、致取高候節內證可申聞候。切高之儀も同斷之事。

右之條々無違失嚴重に遂詮議可申候。中古以來相混じ申儀も有之、年若之人々等ヶ條之中難致會得儀も可有之、一郡切御扶持人申談、區々相成不申樣相心得可申候。尤村役人等心得違無之樣急度可申渡候。是以後不穿鑿に寄り等閑不埒等之族有之候者、急度相咎可申候、以上。

寛政十二年二月

林　彌四郎
山岸七郎兵衞
小谷左平太
江上清左衞門
木梨左兵衞
毛利與兵衞
前田源六郎
在大坂　青木彌次右衞門

同　斷　中村宅左衛門

御算用場

諸郡御扶持人・平十村中

右改作奉行中帳面之通り急度可相心得者也。

本年九月四日參照

三月五日。御馬廻頭今井甚兵衛の家放火せらる。

〔政隣記〕

三月五日、御馬廻頭今井甚兵衛金澤古寺町居宅土藏より、曉八時燃出、土藏並同玄關燒失。本家等者無別條。

但、後口町家土藏之玄關計類燒之事。

三月十七日。前田治脩明年を以て家を世嗣齊廣に讓らんとすることを告げ、御馬廻組頭等之を諫止す。

〔密事留〕

一、寛政十二年三月十六日御用番長九郎左衛門殿より御紙面に而、明十七日被仰談候儀有之間、罷出候樣にと有之。翌十七日二御丸に罷出候處、定番頭・御馬廻頭・御小將頭、御別席に

筑前守齊廣の襲統は明後年にあり

而ニ役宛被呼立、左之御書立相渡也。

相公様御儀御家督御相續之砌より、御固辭被遊候得共、段々泰雲院様之依仰不被得止事、御續統に被爲立候。右に付御家督之砌より、拙者共迄御内意被仰出之趣有之、泰雲院様御逝去之砌拙者共よりも申上候品有之、觀樹院様其頃御幼少故、先御政務御取捌被遊、觀樹院様御成長に付、來年御家督御讓可被遊御内定に候所、觀樹院様御逝去。其後も右御内定無御相違旨被仰出候へ共、拙者ども存寄之趣再往申上、先御延引之所、來年には御隱居、筑前守様へ御家督御讓可被遊御内定に候。此段潛に可申聞旨被仰出候事。

〔密事留〕

一、來年御前様御隱居可被遊思召に御内定被爲在候に付、私共へも御内意之趣先達而被仰渡、奉承知候得共、當惑至極仕罷在候。御書立之趣に而は、兼而之御趣意之程乍恐御尤に被存候へ共、是は御前御自分のみ之御儀与被存候。御家之儀は公儀にも格別重き御取扱之儀。今暫御猶豫被爲在候へば、御前例に而は御位階も御進被遊候御儀。則御家之御規模無此上御儀に被存候所、引かへ如此之思召立、彼是一統殘念至極可奉存儀、可申上様も無御座、當惑至極仕罷在候。一つは當時御勝手向甚御逼迫至極に而、御家中之難澁も御救難被成程之御儀。是又一統御氣之毒に奉存罷在候所、右思召立に而は、打續彼是過分に御入用之儀。然

は御若年之若殿樣ゟ、御勝手向彌以御指支に相成候のみか、莫大之御借銀御讓被遊候御儀ニ、誠に不御本意御儀に被存候。別而御家中難澁之儀は御國政にも拘ゟ申儀。彌增之御逼迫に相成候而ハ、御救之道も絶候樣に相成、是又被對若殿樣暨御家ゟ、甚以不御本意御儀。第一御家之御爲思召不被爲附樣に奉存候。各樣にも是迄御色々被仰上之儀、御手段を取盡候旨被仰聞候へ共、遠慮仕候處、不肖之私共に候へ共、當時重職を被仰付置候所、存寄も不申上、各樣ゟ御任申置候儀には、却而不本意儀に被存候。近頃憚多奉恐入候へ共、右之趣御達申候間、何分御內意之趣今暫被爲思召留候樣、幾重にも奉願候故、被達御聽被下候樣仕度被存候 依而此故御達申上候事。

申 三 月　　　　御馬廻頭

三月十九日、大聖寺侯前田利考參覲の途金澤城に登る。

〔筆のまに〳〵〕

三月十九日

一、飛驒守樣昨日大聖寺御發駕に而松任御泊、今日金澤御止宿。

右之段先達而御家老中より案內紙面到來。いつもは其後御登城候事申來候へども、此度何之儀も不申來。相公樣御痛邪に而御發駕御延引之儀者、先達而御家老中へ御用番より申遣

し候上之處如何と僉議之上、御登城之上御對顔も不被遊儀に候はゞ、御登城御斷之儀可申遣哉と伺、伺之通被仰出候付、一昨日書立早飛脚を以、御用番より其段申遣、いづれにも御登城之心得に御臺所奉行等へ申達候處、右飛脚昨夜歸着、返書に御登城可被成旨申來、其段御用番より各へ廻狀到來。

一、右に付今日四時頃各登城、服紗小袖・布上下着用。

四月朔日。日蝕なるを以てその終りたる後出仕せしむ。

〔政隣記〕

付札、御横目に

來月朔日辰刻より日蝕に而、九分に候間、出仕之面々蝕終り次第四時過相揃可申事。

右之趣被得其意、出仕之面々へ夫々可被申談候事。

三　月

別紙之通夫々可申談旨、御用番河内守殿被仰聞候條、御承知被成、御同役御傳達可被成候、以上。

三月廿三日　　　御　横　目

御先手物頭衆中

右者廿八日告來。

四月朔日辰刻より九分之蝕、前月廿八日觸狀寫互見。

〔政隣記〕

一、今日暦に日蝕九分と有之に付、伺之上、蝕濟次第四時過出仕之儀、前月御横目へ覺書を以申渡、御奏者番よりも覺書渡候。

〔筆のまに〳〵〕

一、暦に辰二刻よりかけはじめ、同八刻甚敷、巳五刻終るとあり。今日五半過より蝕見え、四時過甚敷、四半頃におはり候也。

一、今日登城之上、御居間書院に寫影鏡有之候。年寄中等望候はゞ見候樣主税を以被仰出。年寄中山城・内匠助、御家老中・若年寄中何も罷出致見物候事。但此鏡は日食を見る鏡なり。

四月朔日、今枝内記の家來藤村八太夫傍輩を殺害して逃走自害す。

〔政隣記〕

四月朔日夜、今枝内記殿家來藤村八太夫（年廿八歳）与申者、傍輩志田三郎左衛門を刺殺逃去に付、人相書を以、右躰之者於有之者其所に召捕置、早速公事場奉行へ及斷候樣、組・支配・家來末々迄可申渡旨等、今月八日御用番安房守殿より御觸出之所、右八太夫儀於卯辰山藪之内に自

書相果有之に付、右八太夫不及相尋候段、同月十九日御横目廻状出。

四月十七日、金谷御殿の庭前に草鹿を行ふ。

〔年いろに〳〵〕

四月十七日

一、今日金谷御庭において、草鹿被仰付候付、年寄中・御家老中・若年寄中望次第見物被仰付候旨、昨日以織田主税被仰出候付、今日八半時頃、河内守・安房守・大炊・左京・山城・内匠助・津田玄蕃・横山藏人・前田圖書・織田主税・前田大學、二御丸より金谷御庭へ、鼠多御門橋之向之小口より罷出、御見物所次之間に罷出。

四月二十日、前田治脩、徳川家光の百五十回忌なるを以て今枝内記をして日光山に代拜せしむ。

〔政隣記〕

二月十五日於金澤、左之通被仰付。

御家老役　今枝内記

日光山大猷院様御靈前へ御代拜御使被仰付。

附、四月三日金澤發足、右相濟直に出府、前田織江と交代。

〔政隣記〕

三月朔日、左之通被仰付候段前田織江殿御申渡。

聞番物頭並　　菊池九右衞門

日光山大猷院樣御靈前江御代拜御使、今枝内記へ就被仰付候、指副被仰付。

右相濟、直に金澤江可罷歸候。

〔政隣記〕

四月十三日、菊池九右衞門今曉江戸發、明後十五日日光山へ到着、廿五日迄罷在、夫より直に金澤へ罷歸候筈。右に付此間御内々金小判百兩、石野主殿助奉書を以被下之、并七十兩御定之御貸渡、外に百五十兩御貸渡、都合三百二十兩也。且又一昨十一日直に御國へ之御暇被下候段、前田織江殿猶更御申渡。但九右衞門今日より精進廿六日、倉ヶ野驛に而精進解き候筈之事。

附、今日より右倉ヶ野迄召連候供廻、同所より相減、常旅行之供廻に而金澤へ歸候筈之事。

〔政隣記〕

四月廿日、御家老役今枝内記殿今月三日金澤發足、同十六日日光山へ參着、今日御代拜首尾

能相濟、且先例之通日光貴饗應之儀申込有之候處、翌廿一日辰五刻より於法門院者次第左之通。

御名代　今枝内記

副使　菊池九右衛門

内記家來　藤澤助三

同斷醫師　木村嘉大

此兩人敷居を隔着座

床つき

土器　冷酒　取積　かや　くり　こんぶ

本膳

盛分　ろくしやう大根　岩茸　松葉のり　せんくわ　うこぎ　汁　白みそ　鶴な　はつ茸　白玉とうふ

香物　なら漬　こく漬　めし

二の膳

平　よせどうふ　葛あん　わさび　猪口　梅ひしほ　かたこ　汁　青のり　とろゝ

三の膳

小茶碗　梅干　酒鉄　壺　みそ　午ぼう　汁　すまし　しめぢ　白髪こんぶ

笋羹　しいたけ 湯葉　竹の子 長鹿尾菜　大和茸　　　臺引　揚くわゐ はせくわひ

一、一旦器の納る頃宿坊法門院出座、續て院代兩觀坊幷一院之僧徒列座す。于時次之間より法螺二口、山も突貫く高聲に吹立て、褊袗・踏込・頭巾・鈴懸・小手・臑當したる背高き骨組太きともおそろしげなる大山伏、耳盥の如き金鉢に見上る計白飯を嶽形に盛りたるを臺にすゑ、箸一膳・五器の蓋一つ取添て、いつきノ\と携へ出、片膝折て御名代の前に指置。扨盛たる飯の頂きを少し箸挾み、持たる五器の蓋に受させて退たり。

但、此山伏霜月より山中に入、赤裸にて晝夜山をかけり谷を廻り、或は斷食し或は瀧壺に夜を明し、雪に閉られ氷に臥し、翌年三月迄人界に不出、一山第一の荒行を行ひ得て、一之坊主と呼ばるゝ強膽不敵の者也。

次に右山伏、長一尺四・五寸廻り一尺計の丸木の棒二本左右に脇挾み、疊を蹴立出立て、白飯臺に寄て、右二本の棒の木口とノ\つき合せ、膝元に揃へ置、片膝立て身をそむけ、肩を片方張立て、兩の腕を組、眼を怒らし、齒をむき出し、山谷も震ふ如き大音聲、嘲付ばかりにのゝしりわめきて曰。

これや、抑此白飯と言つぱ當山の古實、かけまくも東照大權現より下し置るゝ萬代不易之重禮也。今般御名代として登山し、全く無障相勤たる之段、於其許滿足たるべき所也。依之忝

くも從東照宮被下候條、愼て頂戴仕に於ては、武運長久息災延命皆令滿足疑なし。早くもするする〳〵と取上て、一杯二杯に非ず、七十五杯一粒も不殘くらひをらう〳〵と責、終つて引退く。

次に以前に增りたる荒山伏、件の通り白飯を持出、副使九右衞門之前に指置、飯を箸に挾み蓋に請させて退出す。扨丸棒二本脇挾み出る、容躰等都而前の如し。

こりや、口達御名代の一ヶ條を省く、其外前の如し。

次に藤澤助三、次に木村嘉大、次第前の如し。

右四人共相濟、臺の物を持出、一種宛手摑みにして、各白飯臺に盛添、扨又罵つて曰。

こりや此品々は當山の名產、中禪寺の木辛皮、蓼の海の蓼、寂光の生ま大根、御前栽の唐がらし、品々珍味を取揃へ、爲御料理と被下候條、不殘取上てくらはう、取上て食ひをらうとわめき付て引退く。

次に右山伏共、面々の前にせまり付、今般忝も從東照宮の御饗應、かゝる仕合に逢奉る冥加至極も無之儀、不取上事不罷成と罵つて、右の金鉢を取持て面々の手に持たせ、難有儀だ〳〵食らへ〳〵と責はたりて引退く。

次に又立出て、御名代を始面々にせまり寄り、頭が高い〳〵とわめきつくに依て、各左右之

手を疊にすり付ながら、成たけ頭をも疊にすり付る時、荒薦の廻り七・八寸になひたる大縄に、鉢卷如きを輪に結び成したるを、面々の頭上に覆ぶせ、

これ毘沙門の金甲だ、愼で是を戴くべし。是をかぶり戴くに於ては、七難即滅壽命長久、福祿增長天人和合、諸願成就如意滿足、武運開運都而闕る所なき物也。敬み愼て是を戴くべしと罵りわめきける音、高山の崩るゝ如きに恐れて、各冷汗五躰に流れ怖れ入て居たりけり。

次に又次之間より戸襖を打敲き、疊を踏轟して法螺を吹立、鯨波の聲を上げ、堂塔迦藍鳴動して、長四・五尺廻り二・三尺計なる捻棒、長二・三尺計の煙管、其ふとさ廻り二尺餘り、雁首は一升ますを丸めし如く、吸口右に應じ斗升の如きたばこ胴亂提げ、天狗面覆りて大勢の山伏一同にいさばら出、足ぶみ鳴らし、ねぢ棒璧きせる抔にて疊をうち敲き、足にて膳部を散亂し、今や魔界に墜落せしかと思はるゝ虎狼の如き觸をむき出し、火炎の如き息を吹出し、只口々に食らへ／＼と罵る音、天地に響き、半時計座中震動して引入たり。

一、最前より貴ぶり之手ひどき事、其次第種々樣々ありて肝魂を消す如く也。古昔柔弱之生質なる者絶命に及び候由。中頃より神勅度々有て、聖惠仁愛の御代おのづから中和之氣に移り、此一風土の强ら相和らぎ、今程にては古實の形ちの計なりといへども、猶すさまじき事共

也。抑此禮といへるは、上は勅使・宮御門跡・將軍家・諸大名重務大役之祝儀たる時是を行ふ。一山の古實大禮第一の御馳走なり。

次に法門院出、挨拶して退出せしむ。院代僧徒も退出す。次に左之通出。

酒引盃　重　積　輪唐からし　氷とうふ　すまし吸　物　てうろぎ　つくばれ　じゆんさい

湯畢て膳部引入る。

口　取　枝柿くり　こうたけ　濃　茶　干菓子　一器宛

煎じ茶

右あらまし如此与云々。

四月二十日。徳川家光の百五十回忌法會を神護寺に行ふ。

〔政隣記〕

四月廿日、金澤於神護寺も、右御法事御執行有之。御執行中御寺近邊之外鳴物不及遠慮儀等、都而前々公儀御法事之節之通に付記畧す。

四月廿一日。前田齊廣東叡山に參詣す。

〔政隣記〕

四月廿日大猷院樣百五十回御忌に付上野御成。御作法前々之通。筑前守樣御豫參可被遊候處、就御風氣に御斷之段昨日被仰出。

廿一日右御法事相濟候に付、今朝筑前守樣御登城。且昨日御參詣不被遊候に付、廿二日五時過御供揃に而上野御參詣。

四月廿五日。前田治脩金澤を發して參覲の途に就く。

〔政隣記〕

四月廿五日、去十一日被仰出候通、今日益御機嫌克金澤御發駕。

〔御年譜〕

四月廿五日金澤御發駕、閏四月七日御着府。御供御年寄中奥村左京・今枝內記代横山又五郎。

〔筆のまに〳〵〕

四月廿五日

一、今日四時之御供揃に付、各布上下着用、四時前登城。御供奥村左京ゟ、同刻頃少し遲き方に罷出。

但、惠廸齋・土佐守・大炊・不破彥三・西尾隼人、痛等に而登城無之。

一、四時過河内守・安房守・九郎左衛門・又兵衛・左京一緒に御居間へ被爲召、御用之儀に付御意有之。河内守は御城方御用御座候旨御意に而居殘、御意有之。退去。

一、九時過御居間書院に御出。御出前御近習頭より爲知に付、御廊下各寄り居申候也。河内守より又兵衛迄四人御前へ被召、今日は天氣も宜と御意。御意之通天氣も宜御座候。益御機嫌能御發駕可被遊与奉恐悦之旨、河内守御請申上候處、御留守中御政事方等無油斷可相心得旨御意。奉畏旨申上候處、各無事にと御意。御懇之御意之趣難有仕合奉存旨申上候處、大炊へも宜と御意。奉畏旨申上退去。其頃山城・内匠助被召御意有之。内匠助へは、土佐守へも宜と御意。其頃御家老・若年寄一所に被召。

但、織田主税は御近邊之節にて、又別段に被召候由也。年寄中等不被召以前、壽光院様御附使者被召候也。

一、一先席へ参り、追付御發駕之御樣子承合候而、虎之間之方へ可罷越、御廊下口迄各罷越。左京者柳之御間上之間之御緣頰に、上之間之方を後にして着座之儀前々之通也。

但、惠延齋罷出候へば階下迄出候筈に候へども、足痛に付朔望出仕之節罷出候所迄出候樣被仰出之趣有之處、今日は足痛不出來登城無之。

一、九半時前御發駕。各階下御左之方へ出る。御家老中等は御右之方、山城等は橋爪へ罷

出。階下に而近く御寄被遊、今日は天氣も宜き御意。御機嫌能御發駕被遊奉恐悦旨、河内守より御請申上候處、隨分無事に御意有之。平伏仕。但此御意はきと拜聽不仕故、御請は不得申上候。

御泊付左之通。

金澤。津幡御中休。廿五日今石動御泊。廿六日高岡御泊。東岩瀨御中休。廿七日魚津御泊。舟見御中休。廿八日泊御泊。青海御中休。廿九日糸魚川御泊。名立御中休。晦日高田御泊。關川御中休。朔日牟禮御泊。丹波島御中休。二日榊御泊。海野御中休。三日追分御泊。坂本御中休。四日板鼻御泊。落合新町御中休。五日熊谷御泊。鴻巣御中休。六日浦和御泊。蕨御中休。江戸。

一、御發駕後、席において御用番へ恐悦申述事、前々之通也。

閏四月七日。前田治脩江戸に着す。

〔政隣記〕

閏四月七日九時過益御機嫌克御着府。御作法都而前々之通に而、御表へ御出、御老中方御廻勤も被遊候事。

〔三壺御譜〕

三月中御參府可被遊所、御持病之御疝積氣等にて暫御延引、閏四月七日江戸御着。

閏四月十一日。德川家齊使を遣はして前田治脩の參覲を勞し、且つ齊廣に歸國の暇を賜ふ。

〔三壽御譜〕

相公樣より依御願、閏四月十一日上使松平伊豆守を以て御暇被仰出。此時治脩公には上使も同人也。

閏四月十五日。前田齊廣登營して歸國の辭見す。

〔續德川實紀〕

閏四月十五日、月次の賀例の如し。松平筑前守齊廣就封のいとま給ひ、御鷹・馬を下さる。

〔三壽御譜〕

閏四月十五日御禮御登城被遊、治脩公も御登城被遊なり。

治脩公も御登城とあるは誤なり

閏四月廿一日。前田齊廣江戶を發して歸國の途に就く。

〔齊廣樣御傳畧等之內書拔〕

閏四月廿一日御發駕御暇之節御先格之通なり。同日江戶表御發駕、五月六日金澤に御着なり。

この豫定は矢代川滿水によつて二日遲延せり

〔筆のまに〳〵〕

閏四月廿九日、筑前守樣、當廿一日午中刻過益御機嫌能江戶御發駕被遊候旨、同日發足中飛脚步今日晝到着、左京等より申越。御供者前田織江也。

御泊所左之通。

廿一日	蕨　御中休	浦和御泊
廿二日	鴻巢御中休	熊谷御泊
廿三日	落合御中休	板鼻御泊
廿四日	坂本御中休	追分御泊
廿五日	海野御中休	榊　御　泊
廿六日	丹波島御中休	牟禮御泊
廿七日	關山御中休	高田御泊
廿八日	名立御中休	糸魚川御泊
廿九日	外波御中休	泊　御　泊
朔　日	浦山御中休	魚津御泊
二　日	東岩瀨御中休	高岡御泊

廿二日出發とするものは非なり、金龍公記史料もこの說を襲ぐ

三　日　今石動御中休　津幡御泊
四　日　金　澤

〔三守御譜〕
閏四月十一日、公御願によつて筑前守樣へ御暇之上使有之。同廿二日江戸御發駕被遊、五月六日御歸着、金谷御殿に被成御座。

五月朔日。前田治脩江戸着後初めて柳營に上る。

〔政隣記〕
五月十五日月次出仕四時頃相濟。其節左之通御用番又兵衞殿御演述。
相公樣御痛積等御快被成御座、去朔日御參府後初而御登城被遊候所、就右御懇之被爲蒙上意、難有被思召候旨、拙者共迄被仰下候事。

五月朔日。金澤於いて前田治脩出府以後の事情を告ぐ。

〔政隣記〕
五月朔日、月次出仕、四時頃御年寄衆等謁。其節左之通御用番村井又兵衞殿御演述。畢而退出。
相公樣益御機嫌克前月七日御着府、同十一日上使松平伊豆守殿を以被爲蒙上意、將又同十五

日御參勤之御禮可被仰上旨、前日御老中方より御奉書致到來候得共、御風氣、且御持病之御疝積氣に被爲在候に付、御登城御斷、御參勤に付而之御獻上物、御使者を以被指上候處、御用番戸田釆女正殿御受取、御披露可被成旨被仰聞、西丸にも御獻上相濟申候。且又奥村左京・前田織江獻上物、同日兩御丸に持參、御納戸に相納候旨、從左京等申來候。此段爲承知申達候事。

五月六日。前田齊廣江戸より金澤に歸る。

〔政隣記〕

五月六日九時前、筑前守樣益御機嫌克御着。永原久兵衛御目見等御例之通相濟、八時前發足。附六月廿三日歸。

（永原久兵衛は歸國御禮の使者なり）

〔筆のまに〳〵〕

一、矢代川等滿水にて、筑前守樣二日之御逗留に相成、六半時頃津幡御發駕、今六日四半時頃金谷御殿御着。御供御家老前田織江。

但、御泊所替る儀無之。

一、今日六時御供揃に而、四時前後に金澤着之筈之處、御道中より申來候付諸役人六半時揃、年寄中五時頃より段々金谷に罷出。

當月は五月

一、御着之時分、年寄中等御式臺之外二枚開之方罷出儀、御沙汰書之通也。何も罷出居候處に而御馬御留め、河内守より益御機嫌能御着被遊奉恐悦旨申上候處、各無事ニ御意に付、蒙御意難有仕合奉存旨御請申上。

一、溜に被罷越候上、以藤田求馬恐悦申上。其後桐之御間において、御旅裝束之儘年寄中、山城・内匠助、御家老・若年寄、三切に御前へ被召、御意有之。

一、御着以前御禮之御使永原久兵衛に御間爲見置候。御上下に被召替候後、久兵衛御前へ被召、御用番又兵衛誘引、遠路大儀ニ御意有之。御請御取合例之通。

但、年寄中出合候人々奥之口に伺公。去年は御家老・若年寄も伺公有之候へども、其主意不相立候故、示談之上今日より伺公相止。土佐守・惠廸齋・彦三・隼人・閑随・南郊痛等に而不罷出。

五月八日、金澤城大手の石垣を修理するを以て今日より尾坂門の通行を禁ず。

〔政隣記〕

付札、御横目江

大手御石垣御普請就被仰付候、當月八日より尾坂御門往來指留候條、此段夫々可被申談候事。

不湖とは湖潟の周邊に於ける瀦水の地

右御城代前田大炊殿被仰聞候旨等、御横目廻狀出。

五月十九日。算用場奉行、先に幕府より川筋新開の件に關し命ありたるを以て領內の事情を調査上申す。

〔改作所公邊觸〕

川筋之儀、連々押埋、水行悪敷相成候間、川通附寄洲等新開之儀に付公儀御觸之趣、御領分に而者如何可有御座哉僉議仕御達可申旨承知仕候。加州・越中川々之儀、多分水源より海口迄御領之內相通申儀に御座候間、御本文之通相心得新開申付候節、水行之所得与僉議仕可申付儀与奉存候。出雲守様・飛驒守様御領より流通之川も御座候得共、御間柄之儀に御座候間、兼而御双方被仰合置、御一領同様之御扱に相成候はゞ可然儀与奉存候。其外川々之分も、新開願出候時分私共於役所相糺、御觸之趣へ相違不仕様取捌可申儀与奉存候。且又能州に者御預所等有之儀に御座候間、川筋新開等願出候はゞ、御本文幷但書之趣相違不仕様僉議可仕儀と奉存候。尤無斷新開仕儀者無御座候間、私共役所切に而下々ゟ申渡候に者およひ申間敷と奉存候。且又今般御觸之儀趣意、第一川筋水引之儀に御座候得者、潟廻り不湖抔新開に被仰付候儀は不差支儀と奉存候。葭・眞菰生立候場所苅拂、此上附洲に不相成様に与御座候。御領國川々者都而荒川に而、右様之場所無御座、潟續には眞菰等生候所も御座候得共、岸深に

御座候間、附洲に可相成處當時無御座候。

一、御觸但書之內、古田畑・川欠等に相成候分、起歸場所有之候者、御勘定所江御達有之、御指圖等可有御座与之儀者、惣而川筋入合領之儀与奉存候。則一流水源より海口迄一領分に籠候川筋附洲之儀ハ、本文之趣に准し可相心得与御書記御座候。

此本文之趣与申ハ、今般御觸出之御本文、川筋連々押埋、水行惡敷与有之御本文之儀与奉存候間、其趣を以相捌可申儀与奉存候、以上。

申五月　　　　　　　　林彌四郎等九人

御算用場

諸國川筋連々押埋、水行惡敷相成候間、川通附寄洲等之儀に付、從公儀渡候御書附寫御渡、猶更改作奉行手前僉議仕候處、別紙之通に申聞候。且又享保幷安永年中にも、新田畑開發之儀に付、從公儀被仰出之趣有之旨に付相しらへ申候所、享保年中之儀者御算用場にも見當り不申候。安永六年之儀者、御書附寫に御添紙面を以御郡奉行等江も可申聞置、御預地方之儀も可得其意旨被仰渡、夫々申談置候。則御渡之御書附寫、幷改作奉行紙面、曁安永六年御渡之御書附寫共御達申候、以上。

五月十九日

村井又兵衛樣

五月廿八日。諸郡村々に命じ、百姓二十年以上同一の田畑を耕作したるときは割替を行はしむ。

〔眞館留帳拔書〕

諸郡村々之内、數十年相立候へども田地割不仕村々も有之躰に候。田畑共五年・十年之内にに地味甲乙致出來候得ども、每度田地割爲致候而は、耕作出情致候百姓所詮も無之譯ゆゑ、變地等無之村方二十ヶ年之内に而者不承屆候段、先達而申渡置候。然處數十年相立候而も田地割無之村方も在之、田畑共坪持之貌に相成居候村方有之躰。第一田地損德有之儀は、改作之趣意致相違候儀に候條、已來二十ヶ年相濟候上は追々田地割いたし候樣、組下村々へ不相渡樣可申渡置候、以上。

五月廿八日　改作奉行

諸郡

右之通に御紙面出申に付寫仕相廻申候、以上。

番代　與四兵衛

仲間宛所

六月十三日。犀川・淺野川に塵芥を棄つることを禁ず。

〔御觸留〕

犀川・淺野川々除ゟ塵芥等捨置申間敷旨等之儀に付、別紙御普請奉行出候に付、寫相越之候條、被得其意、組・支配之人々ゟ嚴重可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配ゟ茂相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候、以上。

右之趣可被得其意候、以上。

六月十三日　　長　九郎左衞門

犀川・淺野川々除ゟ塵芥等捨置御普請之節取除候に付、不時人足茂相懸、其上竹籠等之上殺生人等致往來、籠石等に相障、別而夏中水游人多、御普請所踏荒し甚御不益相成候付、川廻之者烈敷相廻候得共、人少に而御締方行屆不申候付、所々一統被仰ゟ御座候へ共、心得違之者も有之躰に相聞候間、猥成儀無之樣、一統嚴重之仰渡御座候樣仕度奉存候、以上。

五月晦日　　津田善助

有賀淸右衞門

富田左門

村井又兵衞樣

六月十三日。家中の諸士困窮するを以て役銀・出銀以外の上納を免除し、諸借銀を永年賦とすべきことを令す。

〔政隣記〕

覺

一、會所銀

一、產物銀

但、右二口利足銀迄上納、元銀惣而御用捨之事。

一、諸方御土藏上納を初、今年分上納御用捨之事。

一、當三月上納相濟候分者、來年御用捨之事。

以上

御家中之人々勝手困窮之躰兼而被聞召候。當時御借知・御借米ニ被仰付置候事故、被返下御救ニ被仰付度候得共、御上にも御勝手御難澁之上、近年打續不時御物入も多、御逼迫至極故、被仰付方無之候に付、乍御心外不被及御沙汰候。乍然今年に至別而指支之躰に付、依之役・出銀之外、當年分上納之內、別紙書立之通御用捨被成候。且又天明五年諸借銀等永年賦被仰渡候以後、諸借銀之分相對永年賦可申談候。尤無據譯合有之、永年賦難申談分、暨相應に返濟

ニ可相成人々者、品能可及示談候。然上者尚更取續方之儀專要に相心得候樣、可申渡旨被仰出候事。

右之通被得其意、組・支配之人々ゟ可被申談候。組等之內裁許有之面々は、其支配ゟも相達候樣被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

六月十三日　　長　九郎左衛門

右安房守殿ゟ翌十四日御副廻狀を以、今十五日到來之事。

〔政隣記〕

六月十六日左之二通安房守殿ゟ以御廻文到來。

定番頭ゟ

諸役銀相對永年賦之儀、先達而一統被仰渡通に候。依之年賦之儀示談相極次第、銀高に應藏緬、急速頭・支配人ゟ取立、町會所へ可差出候。是迄之藏緬者、夫々相返候樣町奉行へ申渡候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々者、其支配へも相達候樣可被申渡候事。

右之通一統可被申談候事。

庚申六月

別紙之通定番頭へ申渡候に付、爲御承知指進申候。御組にも御觸可被成候。尤頭分以上者、蔵締町會所に直に指出候筈に御座候、以上。

六月十五日　　長九郎左衞門

本多安房守樣

六月十五日、先に幕府領より加賀藩領に編入したる千路村等八ケ村を定免收納とすべきことを命ず。

〔岡部舊記〕

庚申六月七日不時御場有之、御改作所に戸出村又右衞門・内島村孫作・馬場村八左衞門御呼出、御用番江上清左衞門殿より被仰渡候は、口郡千路村等八ケ村去年立毛爲見分同役罷出候節、其方中にも見分方申渡、尤定免御法之樣にも可相成旨其節申談候所、二・三年も作躰之樣子見分可然之旨申聞、尤之儀に候。併御替地に被仰付候而、餘程年數も相立申に付、於役所段々詮義之上御達申上、定免に可被仰付儀致治定候に付、右村々役人等呼に指遣候。依而右御用其方中指加候村方に申渡候節之覺書、口郡御扶持人に相渡候條披見可有之。尚又追々可

不均しは宜らしに、豫習の義

申談候。先不申渡内は秘申儀故、今日不時に申談候。心付候品は可申上旨被仰渡。其次林彌四郎殿よりも右之趣一通被仰渡候事。

一、同九日夜・同十一日、口郡番代能登屋與四兵衛方に而自他御扶持人六人寄會、夫々詮議之上存付之程、前段に記置候覺書を以、同十二日御役所仕廻に御用番江上殿に上る。同十四日御場仕廻、六人之御扶持人御呼出、右覺書之趣夫々御碎御申聞。二所宮村・上棚村之儀も、最前御圖之通定免之儀は唯今申渡、御收納は去年免に可被仰付旨被仰談候事。

一、座列之儀見請置可申旨被仰談、御改作御奉行中・他郡自郡御扶持人共物書所等に罷出、座列之次第不均し有之候事。

一、同十五日御算用場席無目敷居之際に、御用番神保殿・江上殿、其後に御一統御列座、物書所に戸出初他郡自郡御扶持人、其向相談横目下行所無目敷居之際に、千路村・中山村・安津見村・佛木村・安部屋村・町村六ヶ村肝煎・組合頭百姓兩人充御呼出、江上殿より其村々御替地に被仰付、御收納方は先年之引付を以被仰付置候所、今般拙者共詮議之上御達申上、定免改作地へ被仰付候間、當暮より假村御印之通納所可仕旨被仰渡。其次神保殿より、改作方只今申渡通、然ば御國法之趣嚴重に相守、御縮方之筋春秋申渡候故、改而不申渡旨御申渡。村御印自郡御扶持人に御渡に付、一村毎村御印爲讀聞御受申上、假御請書印形自他御扶持人見屆

上る。其次二所宮村・上棚村、堀松村平藏組二所宮村・上棚村与一集に御呼出、右之趣御申渡、分郷に付今般兩村打込、尤當稻苅跡より地割致平均に可仕、御納所方は當年は双方共去年免之通收納可仕旨等被仰渡、是又御請書千路村等六ヶ村之趣に有之候事。

一、自他御扶持六人立會、今日申渡候趣村方に會得爲致候樣被仰渡、則同日能登屋與四兵衛方に役人中等呼出、夫々申談、右役人中等致歸村候事。

一、町村新開高十五石、安津見村領新開高二石七斗九升、御圖免に被仰付、則新開御證文相渡候事。

〔岡部舊記〕

私共村方天明六年御替地已來、前々よりの引付を以、去未年迄御成箇被仰付置候處、段々御詮議之上、先年堀松村平藏組に越石高之分、當申年より御打込、村方一卦に被成置、御國格定免御改作地に被爲仰付、役人共幷百姓惣代御召出、假村御印御渡被爲成、委細御口達被仰渡之趣一統奉承知候。然上は御改作御法之通急度相守、衣食住を始少茂奢る儀不仕、見物・慰・物參等無益之費無御座樣心立無怠、萬事正路に仕、同苗和順を以、田畑蒔植・修理已下共時に不相後樣無油斷相勵、御年貢米歩入方は不及申上、諸御納所如御定無滯相勤可申候。自然徒なるもの在之、耕作不情仕候か、御法度に違背たる儀等仕候はゞ、早速御裁許迄斷出可

申候。
右之趣人々憧に承知仕候。少も相違之儀御座候はゞ、如何樣之越度にも可被仰付候。爲其連印御請狀上之申候、以上。

寛政十二年庚申六月

羽咋郡町村
肝煎
組合頭連判
惣百姓

御改作御奉行所

私共村方、天明六年御替地以來、前々之引付を以去未年迄御成箇被仰付置候所、段々御詮議之上、當申年より御國格定免御改作地に被爲仰付、役人共幷百姓惣代御召出、假村御印御渡被爲成、委細御口達を以、是迄春秋御廻之節御讀聞御頭書御法度之趣、尙更嚴重に相心得候樣被仰渡奉畏、妻子・下人に至迄平常念頃に申含置、少茂無相違失念度相守可申候。爲其連印御請上之申候、以上。

寛政十二年庚申六月

羽咋郡町村
肝煎

組合頭連判
惣百姓

能州御郡御奉行所

右之通八ヶ村共同樣。

六月十六日。諸士の借銀を永年賦辨償とするを以て藏縮取立の件に關して告ぐ。

〔政隣記〕

六月十六日、定番頭に

諸借銀相對永年賦之儀、先達而一統被仰渡候通に候。依之年賦之儀示談相極次第、銀高に應藏縮、急速頭・支配人ゟ取立、町會所へ可差出候。是迄之藏縮は夫々相返候樣、町奉行へ申渡候事。

右之趣被得其意、組・支配之人々へ可被申渡候。組等之內裁許有之面々は、其支配へも相達候樣可被申渡候事。

右之通一統可被申談候事。

庚申六月

別紙之通定番頭へ申渡候に付、爲御承知指進申候。御組にも御觸可被成候。尤頭分以上は、

藏縮町會所ゟ直に指出候答に御座候、以上。

六月十五日　　　　長　九郎左衞門

本多安房守樣

六月二十日。德川吉宗の五十回忌法會を神護寺に行ふ。

〔御觸留〕

有德院樣五十回御忌御法事、來月廿日於神護寺御執行有之候事。

一、御法事中御作事御普請方、其外三之御丸御射手・御異風稽古、幷諸組弓・鐵炮稽古之儀茂、

相止候に不及候事。

但、神護寺に程近き所稽古場有之候はゞ、指扣可申候事。

一、御家中普請・鳴物者不及遠慮候。能・囃子、押立候振廻等之儀者、御法事中自分に遠慮可

仕事。

但、能・囃子之儀茂、役者等稽古仕分者不苦候。乍然神護寺近所に罷在候者遠慮可仕候事。

右之趣被得其意、組・支配有之面々ゟ可被申談候。且又組等之內裁許有之面々者、其支配にも相達、尤同役中可傳達有之候樣、夫々可被申談候、以上。

兩寺は天德院と寶圓寺

五月十五日

御横目中　　　村井又兵衞

〔筆のまに〳〵〕

六月十九日

一、明二十日有德院樣五十回御忌に付、今日各御城に而上下着用、神護寺へ爲惣見分甚右衞門坂より罷越、御法事奉行又兵衞者出席無之。四半時過宅より直に罷越。

六月二十日

一、河内守儀、朝詰に付六半一分程前出宅、多賀帶刀前に而半之鐘承、神護寺へ罷越。

一、今日朝詰は、河内守・内匠助・津田玄蕃・前田圖書・横山又五郎・織田主稅也。御奉行時刻遲り、右六人罷出候後罷出。四時より之詰者、安房守・山城・横山藏人・前田織江也。土佐守等者痛積等に而不相詰、織江元來朝詰之當り之處、筑前守樣御參詣之節階下へ罷出、御用有之に付又五郎に振替、右之通也。

一、辰之刻之御法事五時前に初り、巳之刻之法事四前に濟。右御法事中、晝詰之人々いまだ一人も不罷出候故、朝詰之者御詰也。詰所は三間四方也。横疊に並居候事兩寺と同趣也。今日筑前守樣御參詣之節、階下階へ向左之方又兵衞・織江罷在、其向に栢樹院罷在筈なり。御

少高は小高なるべし

戻り之時分栢樹院へ御意候者、織江御取合之筈也。御法事奉行へも御意有之筈也。

一、御施物被下方も兩御寺と同趣也。但御施物被下候と申振也。兩寺にては被遣と申也。御意之節御取合も、忝御意難有仕合奉存旨申上也。兩御寺は忝被存、如來寺は忝被奉存と申上候也。

六月。先に高方の事に關し諮問せられたるを以て十村等その協議による結果を上申す。

[御高御仕法記]

諸郡高方之儀に付、數年來相混じ申事共有之、先達而御書立を以御紏之儀被仰渡、御郡切段々相窺、重而御覺書を以被仰渡、諸郡御扶持人立會相談之趣、御內分奉申上帳。

一、寺庵幷町人等支配違之者、是迄持來候高之分者、格別詮議之上高株相立、根帳等に得与委細相記置可申、少高之分入百姓株難相立候分者、爲切可申候事。

此御ヶ條、作小屋に指出候者を、村方に而本人之趣を以取扱、尤其者不埒有之候而も、別冊之高夫成に被仰付置、本人より別人取替指出候樣被仰付候樣相成候而者、是以後本人高方へ付候御用にも、御役所幷私共支配を離れ候樣相成、不了簡之者は勝手次第を申立、時々本人与作小屋に指出置候者与、申分多相成可申与奉存候。

一、持方有之村ゟ罷出出作仕候者に者、町人たりとも切高相渡候様先年被仰渡、其村ゟ引越不申者は極而切高相渡申間敷儀与相聞候得とも、數十年來持來り候高、今更押而高相離候様に取扱申儀難儀之趣に奉存、且町人高假令村々懸作高等取放候而も、諸郡町御支配高多、乃至今石動・氷見・城端・高岡・松任・宮腰・本吉・湊・安宅・小松等も御座候而、町人持高一向無之事にはは相成不申候。御本則之通り、在々作小屋を相建出作仕候はゝ、御法も相立可申候。尤凶年之年柄も、作人丈夫に相成、明高も可少、寺庵高持之儀も、先年在々に罷在、一向坊主出作仕候分者切高相渡候様被仰渡、當時多分出作仕候。若出作不仕寺庵有之候はゝ、致出作候様申渡、町支配に有之寺庵者、同事に作小屋爲致可申候。

一、向後切高有之砌、成限御郡方之者共ゟ爲主附、寺庵・町人等ゟ相渡不申様に申渡、若難澁村或は不作等に而高相運不申様之儀者、其節に至り相伺候はゝ、御縮高或は町人等ゟ品により打附高等に可被仰付哉に奉存候。

一、先達而礪波・射水より、町人等持高三十石以下之分者、小高之儀に候間、作小屋を指止、手寄之所に而出作仕候様可被仰渡哉与御伺申上候得とも此分一圓に作小屋爲致候様申渡候はゝ、小高之分は自然与讓高に可仕与奉存候。

一、諸郡共小松町分同様に取扱、乃至難澁村等家絶同事之所々、品により町分之者に而も村

方ゟ引附、村役人に申渡候位に仕候得者、御締方相立、不作法之儀御座有間敷奉存候。寺庵抔之内に者作馬を持、作人数召抱、出作仕候者も有之、町人之内にも、被仰渡以前作小屋を建締方宜敷被仰付候はゞ、風儀も相亂申間敷、屎物仕入等も行屆、都而難澁村抔作人丈夫に相成可申与奉存候。兎角御本文通り、人々出作仕候様に被仰付候はゞ、是迄之費相改可申与奉存候。

一、無高所之分、御覺書之通被仰付可然奉存候。

一、切出し殘り高、古格之通被仰付可然奉存候。

一、頭振・縣作村ゟ罷越申儀、指支申儀無御座、可宜与奉存候。

一、下百姓名前出申儀、上百姓之内是迄多分不承趣に御座候得ども、元來上百姓之持高を離申物に候間、御覺書之通下百姓名を爲出可然奉存候。

一、穢多・藤内等高、村々ゟ申渡、取人相極、禮銀爲相渡、讓高に申渡、若彼是も法外之儀申立候はゞ、品により御取揚高に被仰付可然奉存候。

一、御預地ゟ入組候高之儀は、最前口郡より御達申上候通り取計可申与奉存候。

一、小松町高、諸郡之内取扱似寄候分有之候。元來御締方宜敷様に奉存候。是迄之通被仰付置可然奉存候。尤御郡ゟ相障申儀無御座候。魚津町高・田地方兩様高之分は、沼保村幸右衛

門組八十一ヶ村之内に而、田地方者小松同事、幸右衞門方に而外組方村々同樣に取扱申候。町高ニ申分ニ則屋鋪高に而御座候得共、當時作物少々有之、田地方同事に御座候間、田地方一樣に相成候樣被仰付可被下候。委細新川郡より別紙相記上げ申候。

一、富山御領より之者、射水郡に而持高有之人々、作小屋相建候はゞ、前段當御領町方同樣に御取扱可被仰付哉。是迄御領分町方之者より者、却而御國法・御改作之御法急度相守、指支不申候。是も小高之分は相讓り申事に相成候得者、人數も少相成可申与奉存候。

一、寺庵高之儀者、外寺庵持高之通り、何右衞門与與俗稱に相改可申儀に奉存候。

一、與郡村々に而百姓持高之內、寺庵・神主名前相顯不申、內分取高仕居申者御座候間、今度相改百姓名を出し、御高爲致作配度奉存候。

右高方之儀に付、重而御覺書を以被仰渡、私共立會段々相談仕、委細一書に相調、御內分奉窺候、以上。

申六月

戸出村　又右衞門

內嶋村孫　作

田井村次郎吉

御所村長次郎

鵜川村　喜三兵衞
加納村　權　六
新堀村　牛三郎
馬場村　八左衞門
田井村　三右衞門
本江村　惣　助
波佐谷村　文兵衞
宮丸村　次左衞門
酒見村　八三郎
南森下村　金右衞門
鰀目村　五兵衞
福富村　六郎右衞門
杉瀨村　少左衞門

御改作御奉行所

七月朔日。諸郡の高方に關し調査すべき事項を通牒す。

少高に小高

〔加州郡方舊記〕

高方御仕法に付村々相調理申ヶ條

一、村々百姓中之内持高、一門或者村方内へ下し作に致し候。金澤・宮腰・松任・本吉其外遠所へ一季居奉公、且又借宅人に罷越居申者共、人別持高名前爲書出可申候事。

一、村において百姓中持高之内、是迄預り高与唱來申分者、本作より御田地下し置候儀に而、請作与申者に候間、若し御收納米延々に相心得候族之者有之候はゞ、手先へ相斷可申候事。

一、少高に相成、作りたり不申に付、一門等へ指預け、其身外村へ奉公に罷出候者、右高預り候者之名前に而、品々帳に書上り居申候。此分切高之趣にいたし、指預候者名前に仕、當年附札いたし可申候間、夫々調理候事。

付り、村方へ戻り候而開作いたし候者之名前、本人名前に而品々帳に附札いたし候間、是又相調理置可申事。

一、村惣高之内飛地在之分、惣百姓持分に候得共、品々帳面に者肝煎名前持高之内へ結び込有之所に、此分切高之趣に而當年附札可致儀に候間、相調理申候事。

一、親類之内家貢拂同居いたし罷在候者之切高、家主持高に結び込、品々帳面に書上置申分も有之候。是又相調理置可申候事。

一、當春入百姓被仰付候村々之內、田地割仕申に付、人々端高讓り合、石詰に仕候分も相調理可申候事。

一、百姓跡目立之儀、夫々御願申上御聞屆を請申筈之處、中古其儀無之、下たに而跡目立いたし置候分、未だ二十歲に滿不申、後見之間之人々、相調理出し可申事。

附り、以來百姓跡目立之儀者、實弟たりとも跡高相續いたし候者等之儀、跡目立願指出し可申事。

一、出奔人跡高等年久敷御縮り高に相成居申分、他村に而人柄相撰爲主附申度分、相調理申事。

附り、隣村手遠成村、或者格別之趣有之分者、詮議之上其村へ主附人相立儀も有之候事。

一、切高等都而高取遣仕儀者、裁許之十村迄可申斷事。

右之通夫々御調理被成、當月十日迄に孫作方まで御出し可被成候、以上。

申七月朔日　石川寄會所

同　御仲間中樣

七月九日。前田齊廣の在國中は家族疱瘡患者を有する者の登城を停止せしむ。

〔御觸留〕

筑前守様疱瘡不被爲濟候に付、御同所様御國に被爲入候節者、御家中面々家内疱瘡病人有之候者、三番湯懸迄、金谷幷二之御丸ゟ罷出候儀遠慮可仕候。且又御番人等者、御目通ゟ罷出候儀相扣可申旨、一統申渡置候通に候。併若火事之節者非常之儀に付、都而御貪着無之候事。右之通被得其意、組・支配之人々ゟ可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配にも相達候様被申聞、尤同役中可有傳達候事。

右之趣可被得其意候、以上。

七月九日　　前田大炊

八月。高方の取捌に關し改作奉行より更に委細を十村等に通牒す。

〔加藤氏日記〕

高方仕法書追加

高方之儀に付僉議之趣、御算用場にも相達、御場印之帳面先達而相渡、一統承知之通に候。然所右帳面之内會得違可有之哉与存候ヶ條等も有之候に付、猶亦委細之儀申渡候。

一、是以後御收納未進之百姓、何分遂僉議候而も出道無之切高いたし候節、成丈其村へ讓渡可申。乍去其村々取人無之歟、餘村人与禮米格別差に在之候者、他村望人へ相渡可申与申渡置

候得共、此儀裁許等手前に而深く可有穿鑿事候。是迄諸部之内致切高候節、他村望人与馴合、奸曲之仕形有之躰間およひ候儀有之候。自然右躰之趣に而他村へ相渡候而者、甚不穿鑿之至に候。何れにも其村高取遣禮米近例之振に而、其村望人有之、他村之者不相應之禮米を以相望候共、其儀に取用ひ不申、同村之者へ相渡可申候。且又人多之村へ入百姓願有之候共、不承知儀に候得共、此儀も實に無據趣に候哉綿密に遂僉議可申候。是等之ヶ條は容易之穿鑿に而は難相分事に候。且前條切高其村々望人無之、他村へ相讓不申而不叶節は、廻候御扶持人立會、嚴重遂詮議可申候。

一、町居住之高持、せがれ兄弟等無之に付、一門之内身近もの養子相願、作小屋を懸致手作候間、其者へ讓高相願度、勿論合力銀受取不申儀に而、其村強而望申者無之、村中納得に而相願候者承届可申候。若右之内作小屋を懸候儀を厭ひ、暨其村へ高讓候儀を嫌ひ候而、他人を養子之形に仕成、讓高之儀相願申儀に候得者、村方納得之上に候共不承届筈に候條、右願人有之候ば得与相糺可申聞候。勿論聊之續を以養子願之儀は、工みの形に似寄紛敷候間、承届不申事。

一、先達而懸作高者皆切高可承届旨申渡置候得共、新開高之内本高に應じ所持之分、幷新開迄所持之百姓は、皆切高承届候而は百姓相減候形に候間、皆切高難承届候條、無據切高いた

し候共、名高相減殘爲願可申候。本高に付不申新開高百姓所持之分は、皆切高承屆可申候。
且又新開高作人抔与申名目に而、十村帳に者一名出置、下に而切高いたし、作人相應之分も
有之候樣相聞え候。是等之儀も入念相糺、不埒之趣有之候者今般相改可名出候。尤品々帳に
も、付札印章受置可申候。

一、是迄切高之儀不願出、下百姓与申名目に而高致作配候者有之躰。此儀不埒之至に付、遂
僉議候上高可取揚儀に候得ども、數年作配いたし來候者も可有之に付、格別之趣を以不及其
沙汰候條、今般縮寄に相糺、百姓爲致名出可申候。右之内無據致讓高候者は上百姓へ相讓可
申候。乍去上百姓望不申歟、或禮米引下げ請取可申与歟申樣成儀有之候にて、是亦廻り口御
扶持人立會遂僉議可申候。

一、町居住之高持之儀、最初入百姓相願置候村へ、作小屋を懸候樣申渡置候得共、右之内懸
作高致所持候者は、孰れ成共百姓不足之村方へ作小屋爲懸可申候。乍去懸作村之内にどもが
ましき儀等有之に付、其村に作小屋懸致手作度旨相願候者、廻り口御扶持人立會僉議之上、
無相違候にて其通承屆可申候。

一、村惣高之内飛地有之分、品々帳之表肝煎或は長百姓等一人之致名出置候者有之躰に候。
元來惣地与申儀有之、相似寄申儀に而紛敷儀有之申分之場に候間、右樣之儀有之候者相改、

郡而高名相違無之樣綿密に相糺可申候。是以後別名高に付申分出來候者、高取揚可申候。

一、是以後切高之節僉議方之儀、先達而申渡候通に而、此末町居住之者へ爲致取高不申筈に候。此處自然心得違之人々可有之哉与爲念申渡候。且又高取遣仕埒、一事たりとも先達而申渡候趣に致相違候分は、顯次第高取揚候條、此儀も猶更心得違無之樣、度々百姓共へ可申聞置候。

右之趣一統無違失相心得可申候。是以後高方に付不埒之取捌於有之は、裁許も可爲不念、品に寄相咎申儀可有之候。諸郡共請書判形候而可指出候、以上。

寛政十二年八月　改作奉行

諸郡御扶持人・十村中

九月四日。金澤野町郊端に於いて礫刑を行ふ。

〔政隣記〕

八月廿九日、來月四日於上口磔被仰付者有之候に付、爲檢使可罷越、見屆候刻限之儀は、公事場奉行可承合旨、今日御用番安房守殿より自分・山路忠左衞門に、連名以御紙面被仰渡。

〔政隣記〕

九月四日、前月廿九日記之通に付、昨三日公事場奉行御用番横山大膳方へ以紙面刻限承合、

五時頃公事場へ自分・山路罷越候處、暫有之、左之書付大膳被渡候に付、受取、上口野町々端へ罷越、御刑法者召出、名前承之、追付磔申付、見屆直に公事場に出、左之書付大膳に相達罷歸候事。

覺

於上口磔　泉野希翁院門前茶屋喜兵衛方借家浪人　平崎久右衛門

右之通今日被仰付候條、各爲檢使罷越可被申付候、以上。

寛政十二年九月四日　横山大膳 印

原　九左衛門 印

小幡式部 印

就外御用不在合　前田內藏太

津田權平殿

山路忠左衛門殿

覺

於上口磔　泉野希翁院門前茶屋喜兵衛方借家浪人　平崎久右衛門

右之通今日就被仰付候、私共罷越申付候、以上。

寛政十二年九月四日

津田權平 判

山路忠左衛門 判

前田內藏太殿

小幡式部殿

横山大膳殿

原九左衛門殿

右久右衛門儀、五・六ヶ年以前迄今井甚兵衛方に召仕候處、去年三月五日夜甚兵衛宅へ忍入、土藏に有之品々盗取、其上に而火を附立退候罪に而、右之通磔に仰付。

九月十七日。御扶持人十村にして追込の刑に處せらるゝことあるも尚扶持を給すべきことを定む。

御扶持人十村は十村の扶持高を有するものにて御扶持人十村と平十村を連續して呼ぶ場合と異なり

〔河合録〕

十村等御扶持人追込中御扶持高不取揚事

一、諸郡御扶持人十村等不埒等有之、追込申付候節、御扶持高者不取揚儀改作所舊格に候。然所寛政元年御算用場に而此儀詮議有之、改作方に而者不取揚儀舊格之旨相達候へども、御算用場に而ハ可取揚筋之旨、夫々御年寄中へ御達に相成候處、以來追込中御扶持高可取揚旨

當八月は寛政十二年

被仰渡置候處、同五年改作奉行より御算用場に相達候趣も有之、右奉行中より猶又左之通御達に相成、以來舊格之通追込中御扶持高不取揚儀に相成候事。

寛政元年巡見上使御用之儀に付、能州羽咋郡御扶持人十村酒見村孫平等兩人不屆之儀有之、追込被仰付候。仍而御扶持高御取揚之儀に付詮議之趣、其節別紙寫之通御達申置候。然處當八月新川郡御扶持人十村天正寺村十次郎儀、不屆之趣有之、追込申付、尤御扶持高幷代官取揚置候へ共、從御先代無之儀に而、御意味も今更難相知儀に御座候間、以前之通追込申付候節、御扶持高御取揚無之樣仕度旨等、改作奉行段々申聞候趣有之候に付、猶更打返遂詮議候所、先役之者より御達申候儀、道理に相叶候儀にも可有御座候へども、右御扶持人等之儀は、敢而御家中之人々等御家人之格にも相當申間敷哉。其上御郡方に能道理に相叶候儀に而も、新規成儀は兎角相泥み候に付、大抵の儀は在來之通りに仕置申候。右追込中御扶持高御取揚之儀は尤之取捌に候へ共、外御扶持方之者与違、村高之内反別地方にて被下候物に付、乃至一ヶ月・二ヶ月或は半年も追込に相成候內、御扶持高日割抔混雜成儀御座候。ヶ樣に煩敷儀は別而如何に候間、理方に不相當共、前々之通追込中御扶持高御取揚に申渡候儀は以來指止と存候。先達而先役之者より以來之儀も御達申置候事に付、重而私共詮議之趣御達申候。猶更御指圖御座候樣仕度被存候。尤今度追込申付候右十次郎追込中、御扶持高取揚之儀申渡置

候へ共、此度御達申候通御聞届に御座候はゞ、十次郎儀指寄候上、日割を以不及返上段申渡度可存候、以上。

九月十七日　　笠間九兵衛

本多玄蕃助様

御付札、本文之趣承届候條、追込中御扶持高可被相渡候事。

九月廿六日。金澤城尾坂門の通行を許す。

〔政隣記〕

尾坂御門往來、九月廿六日より不指支旨、廿三日御横目廻状出。

十月。家中の士自家飯米を賣拂ひたる差紙面を知行所の百姓に與へて現物を交附せしむることを禁ず。

本年五月八日參照

〔政隣記〕

付札、定番頭に

御家中之人々より知行所百姓に、飯米之内相拂候旨差紙面相渡、右差紙面を以米持運候儀茂有之躰に候。右樣之儀者不相成御定に候得者、一圓有之間敷儀に候得共、自然心得違之者も有

諸向より取受候屎物代米とは百姓が肥料として糞屎を汲み取りたるに米穀を仕拂ふものをいふ

之哉に相聞え候。以來者村役人印形之物、並十村指紙面持參之者外者、指留候筈に候條、御家中之人々其旨相心得可申候。且又石川・河北兩御郡百姓共、諸向より取受候屎物代米、近年御收納相濟不申内相渡候振に相成、人々持運候得共、皆濟已前に者右代米たり共相渡候儀者不相成儀に付、今般村々百姓共江嚴重申渡、皆濟已前に者一圓爲相渡不申筈に候。仍而受取方より及催促申分可有之哉に候間、御家中末々之者幷町家之者等一統、其段相心得候樣可申渡候。近年新米縮方紛敷儀有之に付、御算用場奉行幷改作奉行より申聞候趣有之、右之通申渡候條、被得其意、組・支配之人々江可被申渡候。組等之内裁許有之面々者、其支配江も相達候樣可被申聞候事。

右之趣一統可被申談候事。

申十月

右安房守殿より御廻狀出。

十一月朔日。古着及び襤褸營業者に御郡所より鑑札を與へらるゝことゝなりたるを告ぐ。

〔加藤氏日記〕

組々に而古手幷につぎ商内候者、御郡所より札御渡可被成旨。尤向後札所持不仕者には爲商

不申御詮議に候間、當時商內候者名所書上候樣被仰渡候間、當月廿日迄に拙者共方迄御申越可被成候、以上。

申十一月朔日　　鵜川村　喜三兵衞

仲 間 宛 所

十一月三日。金澤城外紺屋坂門の通行を許し坂下門の通行を禁止することを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、御横目へ

紺屋坂上腰懸御門致出來候に付、當月十一日より紺屋坂御門往來不指支候事。

一、石川御門外水御門就被仰付候、當月十一日より坂下御門往來指留候事。

但、蓮池上之御屋敷并堂形御馬場等へ罷出候人には、右往來不指支候事。

右之趣夫々可被申談候事。

十一月三日

十一月十一日。前田治脩の子利命金澤に生る。

〔政隣記〕

今般二御丸於御廣式若子樣御誕生、御名裕次郎殿与被稱、殿付に唱候樣被仰出候事。

十二月廿八日

右今日御用番長甲斐守殿より定番頭に御渡、夫より夫々傳達之事。

〔續漸得雜記〕

一、裕次郎樣寛政十二年十一月十一日御誕生、御產母は御馬乘役武村故十左衞門娘、武村大五郎伯母也。御中﨟役相勤居被申候よし。御乳は定番御番頭岩田內藏助(千石)妻女上之候事。

十一月廿八日。持筒頭伊藤津兵衞切手を僞造せしを以て御預に處せらる。

〔御預人之記〕

伊藤津兵衞、四百石御持筒頭五十三歲。似せ切手により、寛政十二年十一月廿八日菊池大學武昭(三千二百石、內五百石與力知)に御預。享和元年五月十八日入牢、同二年五月五日牢死。

十二月十六日。金澤城坂下門の通行を許すことを告ぐ。

〔政隣記〕

付札、御横目に

石川御門外水御門致出來候に付、當月廿二日より坂下御門往來不指支候事。

右之趣夫々可被申談候事。

十二月十六日

右御城代大炊殿被仰聞候旨御横目廻狀出。

十二月廿八日。金澤に於いて諸士に、長九郎左衞門を叙爵せしめたることを告ぐ。

〔政隣記〕

十二月廿八日、歳末爲御祝詞例月出仕之人々登城。（御留守年例之通五時より。）御帳に付相罷在候處、九時頃柳之御間列居申談有之候上、御年寄衆等御列座、左之通安房守殿（諸大夫一件に付而之御用番之安房守殿御懸り也。）演述。畢而左之通恐悅勤之覺書、於横廊下披見申談有之、退出之事。

但、右御弘以前、歳末に付而之御觸有之、一先御引。重而御列座有之、御弘有之。

去十五日御老中方依御奉書、翌十六日御登城可被遊候處、御痛積氣に付御名代飛驒守様御登城被成候處、於御白書院御老中方御列座、御願之通御家來諸大夫被仰付旨、御用番戶田采女殿被仰述、誠以難有御仕合被思召候。依之長九郎左衞門儀甲斐守与御改被成候。此段何茂に可申聞旨御意に候。諸大夫代御願之通被仰出候爲御祝詞、安房守宅に今日可罷越候。幼少・病氣等に而今日登城無之人々は、向寄より傳達、爲御祝詞安房守宅に以使者申越候様可被申

談候事。

一、安房守外年寄中・御家老中𛀁は、正月二日より十五日迄之内勝手次第可罷越事。

十二月廿九日。諸士の屋敷周圍に於ける積雪を除き往來を便にすべきを命ず。

〔政隣記〕

付札、御横目𛀁

此間之雪に而往來之人々指支申躰に候間、屋敷廻り雪早速除之、致道廣、往來支不申樣可被相心得候。且又來年頭之儀者、二月𛀁懸け相勤可然事。

右之趣被得其意、組・支配之人々𛀁申渡候樣夫々可被申談候事。

申十二月

右之趣御横目廻状廿九日出候事。

十二月。石川郡の十村等村名の沿革に付上申す。

〔三百二條舊記〕

田中村三右衞門組　竹松村

但先年者武松村与相調申候處、元和二年之比より竹松村与替り申様に承り傳申候段、先年之書上扣に御座候。村御印者竹松村与御座候。

同　人　組　倉　部　村

但寛文十年より天和四年迄椋部村与相調申候處、貞享元年より寛文十年以前之通倉部村与相調候様被仰渡候。村御印には椋部村与御座候。

同　人　組　五　歩　市　村

但先年者五分市村・五部市村与相調申候得共、延寶五年之頃より五歩市村与書上申候。村御印に者五部一村と御座候。

同　人　組　福　増　村

但村御印にハ上福増村与御座候所、何年より福増村と相改候哉相知不申候。

福留村六郎右衛門組　笠　間　村

但村御印見徳寺村と御座候所、何年より笠間村と相改候哉相知不申候。

相合谷村五郎左衛門組　三　屋　村

但村御印三ツ屋村与御座候處、如何之譯に御座候哉、先年より三屋村与相成申候。

同　人　組　上　野　新　村

但村御印上野村与御座候處、延寶六年より上野新村与相調候樣に被仰出候段被仰渡候。

同人組　山崎領

但村御印山崎領村与御座候處、如何之譯に御座候哉、先年山崎領与相調來申候。

同人組　涌波新村

但村御印涌波村与御座候處、延寶三年より涌波新村与相調候樣被仰渡候。

同人組　鶯ヶ原村

但村御印上鶯ヶ原村与御座候處、延寶三年より鶯ヶ原村与相調候樣被仰渡候。

同人組　西蚊爪村

但先年者西加賀爪村与相調候所、元祿十五年御繪圖御覽被成候砌御改、西蚊爪村与相調候樣被仰渡候。

白山村太兵衛組　三宮村

但村御印にはミいゝ宮村与御座候處、如何之譯に御座候哉三宮村与相調來申候。

同人組　市原村

但村御印者市ノ原村与御座候所、如何之譯に御座候哉市原村与相調來申候。

鶴來村吉藏組　鶴來村

但先年者劒村与相調申候所、天和・貞享之頃五・六ヶ年之間度々火事有之、不吉之由に而其時分御支配被成中村刑部殿、鶴來村与被書改候處、延寶二年劒村与御改被成候。其後元祿十五年御繪圖御上被成候砌御改、鶴來村与相調候樣被仰渡候。

淵上村源五郎組　粟崎村

但村御印に橋粟ヶ崎村与御座候所、元祿十五年御繪圖御上被成候砌御改、粟崎村与相改候樣被仰渡候。

同人組　三社村

但村御印河原三社村与御座候處、何年より三社村与相改候哉相知不申候。

同人組　北篠塚村

但村御印北篠塚村与御座候處、何年より北篠塚村与相改候哉相知不申候。

同人組　南篠塚村

但村御印南篠塚村与御座候處、何年より南篠塚村与相改候哉相知不申候。

同人組　大友御供田村

但村御印戸水極田村与御座候處、何年より大友御供田村与相成候哉相知不申候。

野々市村孫之丞組　太平寺村

但先年者大平寺村与相調候處、元祿十五年御繪圖御上被成候砌御改、太平寺村与相調候樣に被仰渡候。

同人組　田中村

但村御印田中兩村与御座候處、何年より田中村与相改候哉相知不申候。

同人組　三小牛村

但村御印三子牛村与御座候處、何年より三小牛村与相改候哉相知不申候。

同人組　野々市村

但村御印布市村与御座候處、何年より野々市村与相改候哉相知不申候。

高尾村六兵衞先組　部入道村

但村御印豐入道村与御座候處、何年より部入道村与相改候哉相知不申候。

同人先組　井口村

但村御印井ノ口村与御座候處、何年より井口村与相改候哉相知不申候。

同人先組　倉嶽村

但村御印倉ヶ嶽村与御座候處、何年より倉嶽村与相改候哉相知不申候。

同人先組　吉田漆島村

但先年者吉田村・漆島村与二ケ村に御座候處、何年より吉田漆島村与一集に被仰村候哉相知不申候。村御印にハ吉田漆島村与御座候而、今以二垣内に相成、御田地相分り居申候。

同人先組　三十苅村

但先年者額三十苅村与相調候處、何年より三十苅村与相改候哉相知不申候。村御印に者三十苅村与御座候。

同人先組　行町村

但先年者走町村与相調候所、何年より行町村相改候哉相知不申候。村御印者行町村与御座候。

同人組　矢比島村

但先年者彌五郎島村与相調候處、何年より矢比島村与相改候哉相知不申候。村御印に者矢比島村与御座候。

同人先組　月橋村

但先年者槻橋村与相調候所、何年より月橋村与相改候哉相知不申候。村御印に月橋村与御座候。

押野村次郎右衛門先組　御經塚村

但明暦三年より尾經塚村与相調候様被仰渡候處、延寶二年より已前之通り御經塚村与相調可

申旨被仰渡候。

同人先組　玉　鉾　村

但先年者玉戈村与相調候所、貞享元年より玉鉾村与相調候樣被仰渡候。

右石川郡之内村名文字相替り候分相しらべ書上申候。此外文字幷唱相替り申村方舊記等見當不申候、以上。

寛政十二年十二月

內島村　孫　作

田井村　次　郎　吉

田中村　三右衞門

福留村　六郎右衞門

御改作御奉行所

是歳。能登の字付御林を廢し一村一ヶ所の鎌留御林を設く。

〔郡方舊記〕

一、能州四郡字付御林之內、一村に一ヶ所充鎌留御林山に被立置、其餘者百姓稼山に被仰付可被下、爲其加物成五百石に當る手上高可仕旨、寛政十二年奥・口御扶持人連名小紙を以御改作所へ相願候所、享和元年御聞濟在之。依而物成五百石之內二百七十五石口郡、二百二十

五石與郡と致割符、同二年より御收納方相勤。但し右之御仕法に付、一村に一ヶ所之御林山之分、先規より之通宇出津山奉行御支配五木・七木御帳付木之分、猶更相改、帳面に仕立御郡所へ指出、御郡所御手合に相成、且又百姓稼山之儀代取申節、其組之十村へ相願代渡申節十村より極印入、右御林山之外村方貯用林一二ヶ所宛相立置申候。右御仕法取捌方右一件袋入に在之事。

附錄年表

寛政元年　己酉　皇紀二四四九

正月
○朔日前田治脩病むを以て登營賀正を廢す。(一)
○七日德川家齊、前田治脩に放鷹によりて獲たる雁を贈る。(一)
○七日江戸の町人萬屋理兵衛、前田治脩の登城途上に訴狀を呈せんとす。(二)
○十一日前田治脩諸士の年頭拜賀を受く。(三)
○十四日前田治脩、水戸藩中屋敷の火災に出馬す。(三)
○十五日大聖寺侯前田利考幼年なるを以て名代を登營せしめ家督相續を謝す。(四)
○十八日大聖寺侯前田利考本鄕邸を訪ふ。(四)
○能美郡に蝗、群を爲して山を出づ。(五)

二月
○三日江戸に於いて改元の事を告げらる。(六)
○六日德川家齊、前田治脩に鶴を贈る。(六)
○十日去年寺島右衛門を毆打死に至らしめし石川郡粟ヶ崎の百姓を吟味し[illegible]に處す。(七)
○十六日前田治脩、壽光院夫人等を招請し能を催す。(九)
○廿三日盜賊改方奉行四民の風俗取締の手續に關して稟議す。(九)
○十村等定免開及び毛附高に關する諮問に答申す。(一三)

三月
○朔日前田治脩、先に德川家齊より贈られたる鶴等を調理饗應す。(一四)
○四日金澤城中に於いて火氣に注意すべきことを令す。(一五)
○七日秋田侯佐竹義和本鄕邸を訪ふ。(一六)
○七日前田治脩先に重敎の女藤姫を子養せんと請ひたるを許さる。(一六)
○十三日前田治脩就封の暇を受く。(一七)
○十五日服飾玩具等の華美を禁ずる幕令を頒たる。(一七)
○廿一日金澤に於いて、先に前田治脩が藤姫を養女とする許可を得たるを告ぐ。(一九)
○廿二日會津侯保科容頌の孫金之助本鄕邸を訪ふ。(二〇)
○廿七日廣島侯淺野重晟父子本鄕邸を訪ふ。(二〇)

五石奥郡ニ致割符、同二年より御收納方相勤。但し右之御仕法に付、一村に一ヶ所之御林山之分、先規より之通宇出津山奉行御支配五木・七木御帳付木之分、猶更相改、帳面に仕立御郡所へ指出、御郡所御手合に相成、且又百姓稼山之儀伐取申節、其組之十村へ相願伐渡申節十村より極印入、右御林山之外村方貯用林一二ヶ所充相立置申候。右御仕法取捌方右一件袋入に在之事。

附録年表

寛政元年　己酉　皇紀二四四九

正月　○朔日前田治脩病むを以て登營賀正を廢す。(一)
○七日德川家齊、前田治脩に放鷹によりて獲たる雁を贈る。(一)
○七日江戸の町人萬屋理兵衛、前田治脩の登城途上に訴狀を呈せんとす。(二)
○十一日前田治脩諸士の年頭拜賀を受く。(三)
○十四日前田治脩、水戸藩中屋敷の火災に出馬す。(三)
○十五日大聖寺侯前田利考幼年なるを以て名代を登營せしめ家督相續を謝す。(四)
○十八日大聖寺侯前田利考本鄉邸を訪ふ。(四)
○能美郡に蝗、群を爲して山を出づ。(五)

二月　○三日江戸に於いて改元の事を告げらる。(六)
○六日德川家齊、前田治脩に鶴を贈る。(六)
○十日去年沖辰右衛門を毆打死に至らしめし石川郡粟ヶ崎の村民を吟味し牢舍等に處す。(六)
○十六日前田治脩、壽光院夫人等を招請し能を催す。(九)
○廿三日盜賊改方奉行四民の風俗取締の手續に關して稟議す。(九)
○十村等定免開及び毛附高に關する諮問に答申す。(一三)

三月　○朔日前田治脩、先に德川家齊より贈られたる鶴等を調理饗應す。(一四)
○四日金澤城中に於いて火氣に注意すべきことを令す。(一五)
○七日秋田侯佐竹義和本鄉邸を訪ふ。(一六)
○七日前田治脩先に重敎の女藤姫を子養せんと請ひたるを許さる。(一六)
○十三日前田治脩就封の暇を受く。(一七)
○十五日服飾玩具等の華美を禁ずる幕令を頒たる。(一七)
○廿一日金澤に於いて先に前田治脩が藤姫を養女とする許可を得たるを告ぐ。(一九)
○廿二日會津侯保科容頌の孫金之助本鄉邸を訪ふ。(二〇)
○廿七日廣島侯淺野重晟父子本鄉邸を訪ふ。(二一)

四月

〇十一日宗門改帳提出の期限を恪守し、且つその記載を嚴密にすべきことを告ぐ。(二二)

〇十五日前田治脩御禮に上り就封の辭見す。(二三)

〇十六日前田治脩江戸を發し歸國の途に上る。(二三)

〇十七日巡見上使筧紫從太郎等金澤に着す。(二八)

〇廿四日早打使人に貸渡したる金子の返濟方法を改む。(二八)

〇廿五日犀川橋より上流に於ける漁撈を禁止す。(二九)

〇廿七日金澤淺野穢多町に火を失す。(二九)

〇廿九日前田治脩金澤城に着す。(二九)

五月

〇十六日前田齊廣等石川郡宮腰及び粟ケ崎に遊ぶ。(三〇)

〇廿九日前田治脩寶圓寺及び天德院等に參詣す。(三一)

〇廿九日金澤安江木町に火災あり。(三一)

六月

〇朔日前田治脩金澤郊外大豆田口に放鷹を行ふ。(三一)

〇二日前田治脩石川郡粟ケ崎に放鷹を行ふ。(三二)

〇四日前田治脩金澤小立野口に放鷹す。(三二)

〇五日前田治脩金澤城三ノ丸稽古場に於いて射手の士の技を觀る。(三二)

〇六日前田治脩犀川に至りて鱒を漁す。(三二)

〇七日前田治脩金澤七ツ屋口に放鷹す。(三三)

〇七日本郷邸内なる前田齊敬の居館上棟式を行ひ、之を新御居宅と稱せしむ。(三三)

〇十日前田治脩金澤城三ノ丸に於いて異風組の士の射撃を觀る。(三三)

〇十二日前田治脩如來寺及び寶圓寺等に參詣す。(三四)

〇十三日前田治脩金澤七ツ屋口に放鷹す。(三四)

〇二十日金澤に於いて本郷邸内なる前田齊敬の居館を新御居宅を稱すべきことを告ぐ。(三四)

〇廿一日前田治脩石川郡宮腰に放鷹す。(三四)

〇廿五日前田治脩石川郡宮腰に放鷹す。(三五)

〇廿八日前田治脩の養女、高松侯の世子松平賴儀と緣組することを許さる。(三五)

〇晦日江戸小石川の火災に加賀御抱の鳶之者死傷す。(三五)

閏六月

〇前田治脩放鷹の際といへども百姓の農業に從ふべきことを諭す。(三六)

〇五日犀川・淺野川の水漲溢す。(三七)

〇七日淺野川・犀川又暴溢し犀川大橋流失す。(三八)

〇八日前田治脩の養女藤姫の緣組許可せられたりとの報金澤に達す。(三九)

〇八日御射手板倉善助等弓料を給せらる。(四〇)

七月

○十九日辰巳用水の取締に關して令す。(四一)
○廿七日前田治脩金澤の郊外大豆田口等に放鷹す。(四二)
○九日江戸に於いて先に火災の際消防に盡力せる諸士に賞賜す。(四三)
○十八日諸士の公然ならざる緣組願の件に關して令す。(四四)
○廿六日前田治脩金澤郊外大豆田口に放鷹す。(四四)
○廿九日參覲の際供奉したる諸士の通馬增賃銀返納方を命す。(四五)
○前田治脩、老臣等の諫言を上らんことを求む。(四五)

八月

○四日前田治脩金澤郊外大豆田口に放鷹す。(四六)
○廿三日金澤野町にて與力松宮作助の弟小太郎、他人の爲に傷けらる。(四六)
○廿五日能州郡奉行奧村左太夫等、巡見使に對する處置を誤るを以て指扣を命ぜらる。(四六)

九月

○四日金澤小立野上野出町に火災あり。(四七)
○六日前田齊廣等金澤觀音院に詣づ。(四八)
○七日町奉行松尾縫殿逼塞を命ぜらる。(四八)
○十七日本年より諸士知行米の內借知としたる額の三分一を減ずべきことを告ぐ。(四八)
○十九日紫野芳春院則道和尚、入寺御禮の爲金澤城に上る。(五〇)
○廿二日前田治脩、年寄加判たる者の勤務に關して諭す。(五一)
○廿四日平岡次郎市先に城內の作法を誤りたるを以て指扣を命ぜらる。(五二)
○廿五日借知三分一減額に付その實行手續等を令す。(五三)
○詰米檢査又は淺物取調の爲御算用者及び郡方足輕の出張することを廢止す。(五四)
○郡方に於いて御鷹役・御餌指等不正の行爲ある時は之を申告すべきことを命す。(五六)

十月

○七日岡田太郎右衞門等に儉約方主付を命ず。(五七)
○廿二日金澤に於いて諸士に前田齊敬の來春出府を許されることを告ぐ。(五八)
○廿四日金澤城尾坂口門前に上書を遺棄せしものあり。(五八)
○諸郡若年の十村等にその事務に精通すべきことを告ぐ。(五九)
○御扶持人十村選定の手續に關して御算用奉行より稟議す。(五九)

十一月

○四日前田治脩、四民の風俗を正す爲に老臣及び執筆の行狀を愼むべきことを諭す。(六三)
○廿九日運方足輕小島新左衞門等賊を捕へんとして傷けらる。(六五)

○犀川大橋の架設に從事する外作事奉行、頭巾を被りたることを取調べらる。(六八)

十二月　○七日四民の風俗に關して令す。(六八)

○九日諸役人侍帶具履の擧動あることを戒む。(七二)

○廿八日賭博及び之に類する遊戲の制禁を令す。(七二)

○廿八日諸役人等の近習御用横濱善左衞門に對し公務を内談することを戒む。(七三)

○廿八日近親間に於いては服忌の關係なきものといへども互に緣組をなすことを禁ず。(七四)

○諸郡寺社の濫に屋敷替を出願するを禁ず。(七五)

寛政二年　庚戌　皇紀二四五〇

正月　○朔日前田治脩金澤城に於いて年頭の賀を受く。(七六)

○二日前田治脩年頭の賀を受け、同夜病むを以て松囃子の式に謠當を廢す。(七七)

○四日前田治脩病むを以て年頭の賀を受けざるも、弓初・打初・乘馬初の儀を行はしむ。(七七)

○五日前田治脩の疱瘡に罹れることを發表す。(七八)

○十六日前田治脩の疱瘡癒えたるを以て酒湯に浴す。(八〇)

○十七日徳川家齊が前田治脩の病狀を問はしめたる奉書金澤に着す。(八三)

○十八日頭分以上の士登城して、前田治脩の疱瘡癒えたることを祝す。(八三)

○二十日人持組三田村内匠の家來川村嘉兵衞殺さる。(八四)

○廿五日徳川家齊使を遣はして前田治脩の疱瘡平癒を祝せしむ。(八四)

○廿六日家中に疱瘡患者ある者の登城に關して告ぐ。(八五)

○百姓の自ら役儀を望み町人等に奔走を請託することを禁ず。(八五)

二月　○四日大女院崩御の報金澤に達す。(八六)

○十一日前田治脩諸士に、徳川家齊より先に病狀見舞の爲に物を贈られたることを告ぐ。(八六)

○十七日前田治脩、大聖寺侯前田利考の病を問ふ爲使者を江戸に發せしむ。(八七)

○十八日馬廻組篠井次郎左衞門等出合宿に參會したるを以て處罰せらる。(八八)

○廿二日前田治脩、使を遣はして先に徳川家齊の病を問ひたるを謝せしむ。(九一)

○廿六日前田治脩、當分諸士より借知を繼續するを以て益儉約を旨とすべきことを告ぐ。(九一)

○儉約奉行にその事務の遂行に關して告ぐ。(九二)

○使者として江戸に赴く者の、間番足輕に金品を贈

三月

〇…與することを禁ず。(九四)

〇高價の雛人形を販賣することを禁ず。(九五)

〇朔日變死人等の檢使として出張する與力に饗應することを禁ず。(九六)

〇二日郡方に出張する諸役人の行爲を戒む。(九六)

〇七日金澤城二ノ丸殿中に於いて自害する者あり。(九七)

〇十五日米價の下落に伴ひ諸物價を低廉にすべき幕令を傳ふ。(九八)

〇十五日自今三ヶ年間の儉約を命ず。(一〇〇)

〇二十日前田治脩、庶民に分限を守らしむると共に祭禮等の慰安を與ふべきことを諭す。(一〇一)

〇廿二日能美郡赤瀬村に火災あり。(一〇一)

〇廿五日郡方の者の身分不相應なる着服を用ふるを禁ず。(一〇二)

〇廿八日奧村主水の配流を免ず。(一〇二)

〇米穀と均衡を得しむる爲諸物價を低下する方法を講ぜしむ。(一〇三)

四月

〇四日物價高直なるを以て諸士に銀子貸附を許すことを令す。(一〇四)

〇四日魚鳥及び野菜の賣買に就いて令す。(一〇六)

〇八日諸奉行出勤の時刻を規定に從ひて勵行すべきことを命ず。(一〇七)

〇十日家中の人々賣女躰の者を妾とすることの禁止に關して議す。(一〇八)

〇十五日年寄中等去年藩の免除したる借知三分の一を納れて差出したるを以て之を別立貯蓄せしむ。(一〇八)

〇二十日鑑箭を廢す。(一〇九)

〇廿一日前田治脩、參覲を延期すべきことを告ぐ。(一〇九)

〇廿一日諸役所の冗員を淘汰すべきことを命ず。(一一〇)

〇廿三日津田平十郎銀子を盜み出奔す。(一一一)

〇廿四日諸士の中知行を召放されたるものゝ住所に付き令す。(一一二)

〇廿六日御馬廻頭等儉約の勵行に就いて覺書を作製す。(一一三)

〇廿六日諸士より謝恩の爲にする獻上物及び禮錢に就いて令す。(一一四)

〇物價騰貴するを以て諸士に當分貸付銀を許す。(一一五)

〇年寄中等省略方に關する內規を作る。(一一六)

〇盜賊改方の足輕にして手疵を受け盜賊を取逃したるものは檢使を受くべきことを告ぐ。(一一七)

五月

〇朔日平士の頭分を命ぜられ又は頭分轉役の際祝宴

を盛にするを戒む。(一二八)
○二日前田治脩石川郡粟ヶ崎附近に放鷹す。(一二九)
○十九日江戸詰人に規定の外扶持方代を增給することなかるべきを告ぐ。(一二九)
○十九日前田治脩、年寄中の從者の擧動に就いて注意を促す。(一三〇)
○百姓等の賣物を運搬する際途上にて町人の押買するものを戒む。(一三一)

六月

○三日金澤大衆免に火災あり。(一三二)
○四日金澤泉町福正寺屋仁太郎孝行を以て賞せらる。(一三三)
○十一日大組頭久世平助流刑を命ぜらる。(一二八)
○廿七日婚姻以後に於いて聟養子の死亡したる場合には再び聟養子緣組を出願し得ざることを命す。(一二九)
○晦日前田治脩、戰功ある先祖を有し現に亡家せる者を錄上せしむ。(一三〇)

七月

○朔日前田治脩參覲出發の期を來月朔日と定む。(一三〇)
○三日非人小屋の制を改良する爲永原大學にその主任を命す。(一三一)
○三日前田治脩命じて諸士の善行あるものを上申せしむ。(一三三)
○四日前田齊敬江戸に出府すべき期を定む。(一三四)
○六日前田治脩、皇子降誕を奉賀する爲使者を發せしむ。(一三四)
○八日前田治脩命じて諸場諸役所の法規を集錄し上らしむ。(一三四)
○九日盜賊改方奉行、彫工澤阜忠平の行狀を密偵上申す。(一三五)
○十八日脇田哲兀郎、青木左仲滅知逼塞を命ぜらる。(一三六)
○廿一日前田治脩犀川々上に漁撈す。(一三七)
○廿二日江戸詰の諸士の服裝等を簡易にすべきことを諭す。(一三七)
○廿七日前田治脩家老等にその上申の事理明白なるべきことを諭す。(一三八)
○廿七日高崎平左衞門等、去々年九月沖辰右衞門の死去したる際調査粗漏なるを以て譴責せらる。(一三八)
○能美郡に於ける藩有林の養殖方法を定む。(一四〇)
○町・在の奉行に庶民中善行ある者を上申すべきことを命ず。(一四一)

八月

○朔日前田治脩風俗の肅正を愼らざるべきことを家老等に諭す。(一四二)
○朔日前田治脩金澤を發して參覲の途に上る。(一四三)
○十二日金澤に强震あり。(一四三)

○十三日前田治脩江戸に着す。（一四四）
○十六日前田齊敬江戸に向ひ金澤を發す。（一四四）
○廿六日前田齊敬の金澤を發したる報江戸に達す。（一四四）
○村方の者窃盜に係りたる時、從來盜賊改方に屆出たるを改め十村に屆出づべきことゝす。（一四五）

九月

○朔日御作事所の規程を改正す。（一四六）
○朔日前田治脩登營して參覲の禮を行ふ。（一五三）
○三日前田齊敬の緣組を許可せらる。（一五三）
○四日前田齊廣等石川郡宮腰・粟ケ崎に行歩す。（一五三）
○六日前田齊敬江戸に着す。（一五四）
○十五日金澤に於いて諸士に前田治脩參覲後の動靜と、前田齊敬の緣組を許されたることを告ぐ。（一五五）
○廿九日江戸に於いて前田治脩及び齊敬を兩殿樣と稱すべきことを命ず。（一五六）

十一月

○朔日前田齊敬古例によりてその名を改む。（一五六）
○七日中石川の鷹場に於ける眞菰苅取の禁を勵行せしむ。（一五七）
○十五日前田齊敬初めて德川家齊に謁す。（一五七）
○諸役人用談の爲、年寄中席執筆の私宅を訪ふを禁す。（一六〇）

十二月

○朔日本鄕邸內貸小屋の厩より出火す。（一六一）
○朔日加藤牛右衛門、質銀の嫌疑を以て親族預を命ぜらる。（一六三）
○二日前田治脩、齊敬と共に盛岡侯邸に赴き琉球人の行列を見る。（一六三）
○六日能美郡粟生渡船の船賃に關して答申す。（一六四）
○廿一日永原大學等來年三月以降一ケ年間に於ける藩の財政豫算を上申す。（一六五）
○廿五日賭の諸勝負に關する制禁を勵行せしむ。（一七四）

寛政三年　辛亥　皇紀二四五一

正月

○朔日馬廻組頭列伊崎所左衛門登城の禮を缺き自分差扣を行ふ。（一七五）
○八日前田治脩、前大聖寺侯前田利精に密使を派遣す。（一七五）
○十七日光格天皇の新內裏遷幸を祝する爲前田治脩使者として前田式部を出發せしむ。（一七五）
○十九日前田齊敬禮服着用の習禮を行ふ。（一七六）
○廿三日德川家齊、前田治脩に鶴を贈る。（一七六）
○廿七日前田治脩盜賊改方奉行に命じ賭碁を行ふものを調査せしむ。（一七七）
○前田治脩、家老及び若年寄に公用文書の起草はこれを自らすべきことを諭す。（一七九）
○村肝煎推薦の方法に關し諸郡に意見を徵す。（一七九）

二月

○能登口郡極貧五十九ヶ村の仕立を命じたるを以て勧農の法を諭す。(一八〇)
○朔日諸士の先祖由緒附帳を来四月中に提出すべきことを命ず。(一八四)
○十日前田治脩系圖帳を幕府に上る。(一八五)
○十一日前田齊敬柳營に登り元服して佐渡守と稱す。(一八五)
○十六日朝鮮人參栽培及び販賣を自由にする幕令を領内に傳ふ。(一八八)
○十九日金澤に於いて諸士に前田齊敬敍任のことを告ぐ。(一九〇)
○二十日前田齊敬と同字の實名を改むべきことを命す。(一九二)
○二十日浪人木村新助町人を毆打して禁牢に處せらる。(一九二)
○廿四日神護寺に於いて德川家基の第十三回忌法會を營む。(一九二)
○廿四日前田治脩上野寛永寺に豫參を行ふ。(一九二)
○廿五日當春歸國供人の手當として金銀を給與すべきことを告ぐ。(一九三)
○廿五日江戸より歸國する者の土産物を齎し及び客を招きて酒宴を催すを禁す。(一九四)
○廿七日去年以來前田治脩・齊敬に隨從出府し勤務に出精したる者に物を與ふ。(一九五)
○廿九日年寄衆御用番支配頭分奧村彌次右衛門の女、裁許人濱口庄右衛門と情死す。(一九七)
○家中の人々男子を擧げたる時は速に頭・支配人に屆出づべきことを令す。(一九八)
○諸部御扶持人以下及びその子弟の金澤に滯留中、不相應の參會或は不謹愼の行爲あるを戒む。(一九九)

三月

○十三日前田齊敬の任官等を祝する爲頭分以上の士をして金銀を上らしむ。(二〇〇)
○十三日前田治脩就國の暇を受く。(二〇一)
○十五日前田治脩柳營に上り德川家齊に辭見す。(二〇一)
○十七日石川郡粟ヶ崎の豪商木屋藤右衛門出牢を命ぜらる。(二〇二)
○十八日前田治脩江戸を發す。(二〇二)
○廿三日前田利和の三十三回忌を天德院に行ふ。(二〇三)
○廿七日岡田太郎左衛門、前田齊敬の任官せられたる口宣を得て金澤に歸着す。(二〇三)
○廿九日諸士の奉公人に請人を立てしむる法規を嚴守すべきを命す。(二〇四)
○小作人の惡習癖を改めしむべきことを命ず。(二〇五)

四月

○二日前田治脩金澤に歸着す。(二〇七)

○三日前田治脩寶圓寺・天德院等に詣づ。(二〇九)
○七日公事場及び盜賊改方に於いて處分する犯罪の區別に關して上申す。(二一〇)
○十五日前田治脩石川郡粟ヶ崎に放鷹す。(二一〇)
○二十日前田治脩圍碁を職業とするものに就きて調査せしむ。(二一一)
○廿一日道中筋にて身分を僞り代錢宿料等を支拂はざる者を捕ふべき幕令を傳ふ。(二一二)
○廿四日主人の爲に代牢を請ひたる金澤片町藤屋嘉兵衞の下人長兵衞を賞す。(二一四)
○廿六日前田治脩、出牢したる石川郡粟ヶ崎村藤右衞門に當分調達銀等を命ぜざるべきことを告ぐ。(二一五)

五月

○廿七日前田治脩、齊廣と共に金澤大豆田筋に放鷹を行ふ。(二二六)
○百姓等が藩侯に對する請願の事を御鷹方取次の者に依賴する者あるを戒む。(二二六)
○朔日前田治脩金谷門通過の際番士等蹲踞の禮を失す。(二二七)
○同日犀川・淺野川に毒荏を投じ及び蛇籠を踏荒すことを禁ず。(二二七)
○六日火矢方小川七太夫自刎して死す。(二二八)
○十七日馬廻頭岡田三郎右衞門先に口宣を持參して歸城の際、坂下門の大扉を開かしめたるを以て指扣を命ぜらる。(二二九)
○二十日京都の儒者新井白蛾を召抱へんとするを以てその內意を探らしむ。(二三〇)
○廿一日前大聖寺侯前田利精金澤の居宅を發して歸邑す。(二三二)
○廿四日金澤城石川・河北南門外に於ける下馬下乘の件に關し令す。(二三三)
○金澤所々に盜賊橫行す。(二三三)

六月

○朔日前田治脩、齊廣と共に金澤郊外大豆田筋に放鷹を行ふ。(二三四)
○十二日犀川・淺野川の水暴溢す。(二三四)
○十五日浪人及び乞食鉢の者の取締方を令す。(二三四)
○廿三日前田治脩學校を興さんとする意あることを告ぐ。(二三八)
○廿四日大聖寺侯前田利考幕府より甲州普請の助役を命ぜらる。(二三八)
○廿五日前田治脩、諸士の中文武の藝能に師範たる者を上申せしむ。(二三九)
○廿七日諸士の困窮する者に町會所の調達銀借用を許すことを示達す。(二三二)
○廿九日前田治脩人持組の士の乘馬を觀る。(二三四)

○廿九日本郷邸の火消役等、水戸邸の消防に従ふ。(二三四)

○能美郡千代村の百姓權兵衛孝行を以て賞せらる。(二三五)

○村御印及び御算用場印の文書を燒失し又は紛失したる場合の處置を定む。(二三七)

七月

○二日役掛りの諸士にして十ヶ年以上皆勤の者の書上を命ず。(二三八)

○三日本家より配知を受けたる末家の者が、更めて本家の養子となる場合に給する祿高に就いて示達す。(二三八)

○十日前田治脩、射手の的弓を觀る。(二三九)

○十九日稻花の候なるを以て石川・河北兩郡に放鷹を禁止することを告ぐ。(二三九)

○下旬加入銀と稱する調達銀を諸士に貸附するの方法行はる。(二四〇)

○廿八日鳳至郡大谷村の則定惣左衞門、平松時章より懷紙を贈らる。(二四一)

○公事場奉行等從來に於ける刑罰適用の慣例を上申す。(二四二)

八月

○朔日前田齊敬初めて八朔に登營す。(二四七)

○五日前田治脩、家老等にして公用なき時は速に退廳し得べきこと告ぐ。(二四七)

○六日年寄等の放鷹を行はんとする時は定刻に拘らず城中より退下することを許す。(二四八)

○二十日越中に暴風あり。(二四九)

○廿二日前田治脩、盜賊改方奉行高畠五郎兵衞をして新井白蛾の人物を密偵すべきことを諭す。(二四九)

○廿一日此日以後御步石倉市郎左衞門が小者を殺害したる件に關し取調を行ふ。(二五一)

○廿六日前田治脩、齊廣と共に石川郡宮腰に放鷹す。(二五五)

○廿九日作事奉行矢部友左衞門學校造營普請方主附を命ぜらる。(二五五)

○晦日諸士の中、文武藝能の師範に就き從學する者を錄上せしむ。(二五六)

○前田治脩、將に學校を興さんとするを以てその位置の調査を新井白蛾に命ず。(二五七)

九月

○朔日新井白蛾初めて前田治脩に謁す。(二五七)

○四日江戸深川に於ける加賀藩の米倉波潮の害を受く。(二五八)

○八日郡奉行水原丘左衞門等非人頭の所屬に關する意見を上申す。(二五八)

○八日前田治脩、長谷川準左衞門をして經書を講ぜしむ。(二六三)

○九日石川郡鶴來村附近に降雹あり。(二六四)

○十日前田治脩使を遣はして前大聖寺侯前田利精の病を問はしむ。(二六四)

○十一日初めて學校惣奉行を命ず。(二六七)

○十六日前田治脩再び使を遣はして前大聖寺侯前田利精の危篤を問はしむ。(二六八)

○十七日前田治脩、高島五郎兵衞が新井白蛾の人物に關し知り得たる點を上申せしむ。(二六九)

○十七日前大聖寺侯前田利精卒去の報金澤に達す。(二七〇)

○十八日小將頭等集會の際に於ける酒食を省略す。(二七二)

○廿六日足輕小頭中村小兵衞大石寺派の宗義を信仰するを以て禁牢に處せらる。(二七三)

○土師清吉、筆道傳來の次第を答申す。(二七四)

十月

○朔日前田治脩、新井升平をして經書を講釋せしむ。(二七五)

○二日前田齊敬、諸士の官位昇進を賀する爲物を獻りたるを謝す。(二七五)

○三日金澤に於いて前田齊敬の初めて徳川家齊に謁したる次第を披露す。(二七六)

○五日學校主付新井白蛾老年なるを以て子升平をしてその事務を輔佐せしむ。(二七六)

○十二日前田治脩、再び高島五郎兵衞に新井白蛾の人物に關する意見を徵す。(二七七)

○十五日前田治脩不破和平をして書經を講ぜしむ。(二七八)

○十八日江戸に於いて御手木足輕等互に殺傷す。(二七八)

○十八日前田治脩慰能を行はしむ。(二七九)

○十九日定番馬廻組齋藤兵三郎蹤跡を失す。(二七九)

○廿二日前田治脩、石野主殿助等をして曾て學ぶ所の帶佩を練習せしめ之を觀る。(二八〇)

○廿三日新井升平月次講釋として中庸を講ず。(二八〇)

○廿四日前田治脩、高島五郎兵衞に白蛾召抱に關する老臣等の批評を探索せしむ。(二八一)

○廿五日學校造營に付年寄本多安房守に土地の寄附を命ず。(二八二)

○廿五日忠義孝心等により曾て賞賜せられ現に生存する者を錄上せしむ。(二八二)

○廿六日前田治脩、齊廣と共に石川郡粟ヶ崎等に放鷹す。(二八三)

○廿六日道中筋往來の者にして先觸を出さゞる時は傳馬・人足を提供せざるべきことを告ぐ。(二八三)

○廿七日年寄等に蓮池庭の觀覽を許し且つその馬場にて乘馬を行はしむ。(二八五)

○晦日金澤城白鳥堀の老松風雨の爲に顚覆す。(二八五)

○老臣本多安房守聖堂建設の爲貢銀上納を命ぜらる。(二八六)
○金澤の商人山科屋庄九郎の僕八兵衛篤行を以て賞せらる。(二八六)

十一月　○五日前田治脩近臣をして堂形馬場に騎射を行はしむ。(二八七)
○廿六日小松御城附足輕池田市右衞門孝行を以て賞せらる。(二八七)

十二月　○廿一日徳川家斉夫人歳末祝儀として物を贈る。(二八九)
○廿五日金澤野田寺町實成寺燒失す。(二九〇)
○晦日諸頭の動向に關する條目を調査提出すべきことを命ず。(二九〇)
○武器調達の費用として本年以後別立米を支出せしむ。(二九一)

寛政四年　壬子　皇紀二四五二

正月　○朔日前田治脩金澤に於いて年頭の拜禮を受く。(二九一)
○二日例により松囃子を行ふ。(二九二)
○二日前田斉敬使者を柳營に上りて太刀馬代を獻らしむ。(二九四)
○三日前田治脩天德院及び寶圓寺に詣づ。(二九四)
○四日打初・射初・乘馬初の儀を行ふ。(二九五)
○十二日前田治脩如來寺及び寶圓寺に參詣す。(二九六)
○十二日金澤城に追儺の規式を行ふ。(二九七)
○十六日當春參覲道中の役人を命ず。(二九七)
○十七日前田治脩金澤城内東照宮及び神護寺に參詣す。(二九九)
○十九日具足の鏡餅直を行ふ。(二九九)
○十九日前田治脩、醫業を爲す者に治療を親切にすべきことを告ぐ。(三〇〇)
○前田治脩、自今春夏の候に死刑の執行を廢すべきことを告ぐ。(三〇〇)
○御目見以上の士にして十ヶ年以上皆勤の者を毎歳正月上申すべきことを命ず。(三〇一)

二月　○朔日新井白蛾、學校の學頭を命ぜらる。(三〇二)
○二日學校の建築成る。(三〇二)
○六日前田治脩、斉廣と共に金澤郊外大豆田口に放鷹す。(三〇三)
○八日佐藤園兵衛、武學校方御用を命ぜらる。(三〇三)
○十三日前田治脩金澤郊外大樋口に放鷹す。(三〇四)
○十五日前田治脩金澤野町郊端に放鷹す。(三〇四)
○十六日能美郡大長野村等に於いて捕鳥を禁ずるの令を解除す。(三〇四)
○十六日聖堂造營せらるべきを以て、諸士に川村を寄進すべきことを諭す。(三〇五)

○十六日石川郡宮腰町奉行、海運の貨物を大野・粟ヶ崎に着津せしむることなかるべきを求む。(三〇六)
○十七日聖堂造營の係員を命ず。(三〇八)
○廿一日前田治脩金澤城內を巡視す。(三〇八)
○廿四日聖堂造營の手斧初を行ふ。(三〇九)
○廿六日前田治脩金澤大樋口に放鷹す。(三〇九)
○十村・新田裁許等が役儀誓詞の際に於ける御算用場內着席の位置を定む。(三一〇)

閏二月

○二日千川孤源太の小者誤つて金澤城內の堀に墮つ。(三一〇)
○六日諸士以下に學校に就學すべきことを諭す。(三一一)
○十五日前田治脩金澤郊外野町口に放鷹す。(三一四)
○十八日町・在の者就學するもその本業を怠せにすべからざるを諭す。(三一四)
○二十日百姓にして死亡するも自今郡奉行に屆出を要せざることを告ぐ。(三一五)
○廿一日前田治脩年寄以下をして蓮池亭を觀覽せしむ。(三一六)
○廿五日學頭新井白蛾、平士以上の待遇を求めて拒絕せらる。(三一七)
○江戶に勤務する諸士の衣服・宴會等を節約すべきことを命ず。(三一八)

○村肝煎の選任を嚴にすべきことを告ぐ。(三一九)
○學校開始の際の作法を定む。(三二一)

三月

○朔日金澤犀川々上に火災あり。(三二六)
○二日初めて學校を開き、前田治脩之に臨む。(三二六)
○六日前田治脩金澤を發して參覲の途に上る。(三二七)
○六日大小將組池田左平等男色の事によりて指扣を命ぜらる。(三二八)
○十三日江戶勤務の諸士に扶持方を增貸す。(三二九)
○十八日前田治脩江戶に着す。(三二九)
○廿八日德川家齊使を遣はして前田治脩の參覲を勞す。(三三〇)

四月

○朔日前田治脩柳營に上りて德川家齊に謁す。(三三〇)
○廿一日奧村十郎左衞門、藩侯行列の指揮を誤るを以て指扣を命ぜらる。(三三〇)
○廿五日前田齊敬歸國の許可を受く。(三三三)
○聖堂造營の計畫を變したるを以て本多安房守に貸銀上納の必要なきことを告ぐ。(三三四)

五月

○七日前田齊敬江戶を發して歸國の途に就く。(三三四)
○十六日馬廻組熊谷勘助の子小太郎誤りて人を殺害す。(三三五)
○十七日大阪の加賀藩邸類燒の難に罹る。(三三六)
○十九日前田齊敬金澤に歸着す。(三三七)
○廿一日聖堂造營を中止したるを以て木材の寄附を

要せざることを諸士に告ぐ。(三三七)
〇町方の組合頭たる者の心得を諭す。(三三八)

六月
〇四日前田土佐守の揮毫せる武學校の額面下書を提出す。(三四〇)
〇十二日寶圓寺に於いて前田重教の第七回忌法會を執行す。(三四一)
〇十四日來月二日より學校の授業を開始することを告ぐ。(三四一)
〇學校に揭示すべき定書成る。(三四六)
〇學校に學舍を置きたるを以て寄宿志願者を募集す。(三四九)

七月
〇二日町・在の者疾病の際は醫師の治療を受くべきことを告ぐ。(三五〇)
〇十九日前田治脩登營して德川家齊の公子竹千代誕生の七夜を祝す。(三五二)
〇廿一日前田治脩、德川家齊よりその子竹千代の誕生に關する祝儀を受く。(三五三)
〇廿二日江戸に大火災ありて本鄉邸附近に及ぶを以て前田治脩出馬す。(三五四)
〇廿五日越中五ヶ山の流人小野木左門脫走せるを以て足輕を派して之を搜索せしむ。(三五六)

八月
〇六日德川家齊の子竹千代の名に觸るゝものを改めしむ。(三五七)
〇十一日能登に歸花の咲くことを上申す。(三五七)
〇十八日前田治脩登營して德川竹千代誕生の祝賀能を觀る。(三五八)
〇武學校の稽古場に濫に立入るべからざることを告ぐ。(三五八)

九月
〇九日助教大島忠藏を新番御步並とすることを許さる。(三五九)
〇十三日學校の寄宿舍に入舍志願の者を重ねて募集す。(三六一)
〇廿一日京都の醫荻野元凱前田齊敬の病を診したるを以て能を觀覽せしむ。(三六二)
〇廿二日京都の醫師荻野元凱に三十人扶持を給す。(三六四)

十月
〇六日大島忠藏・木下槌五郎二人儒者に列せらる。(三六五)
〇郡奉行等、石川郡大野・粟ヶ崎へ入津の件に關し、宮腰の主張に抗議す。(三六五)
〇駒見分の件に關し郡奉行より上申す。(三六九)

十一月
〇朔日前田治脩登營して初めて德川竹千代に謁す。(三七二)
〇十八日江戸詰の諸士に扶持方を增貸す。(三七二)
〇十九日前田治脩、德川竹千代の色直祝儀を受く。(三七三)

○二十日江戸邸の消防器具に初めて龍吐水を採用す。(三七四)
○廿一日三ヶ年節約の期滿ちたるも更に三ヶ年を延ぶべきことを令す。(三七四)
○廿九日藩侯の行列外に長柄傘を準備持參せしむることを定む。(三七五)
○御算用者和田耕藏關流算法の皆傳を受く。(三七九)

十二月

○十五日前田治脩參議を拜任す。(三七九)
○十七日前田治脩轉任の奉書を京都に持參する使者を岩田是五郎に命ず。(三八〇)
○二十日前田治脩參議に昇任したるを以て諸士の緩怠の擧動あるべからざることを諭す。(三八二)
○廿三日前田治脩柳營に登りて陞任を謝す。(三八三)
○廿七日前田治脩年頭登營の際に於ける返盃の習禮を行ふ。(三八四)
○廿九日町方に於いて大纖等を販賣することを禁す。(三八五)

寛政五年　癸丑　皇紀二四五三

正月

○朔日前田治脩柳營に登り年頭を祝す。(三八六)
○二日金澤に於いて頭分以上に前田治脩の參議に昇任せしことを告ぐ。(三八七)
○三日前田治脩東叡山及び廣德寺に詣づ。(三八八)
○四日前田治脩增上寺に詣づ。(三八九)
○五日前田治脩使を日光に遣はして參議拜任を謝せしむ。(三八九)
○十四日右筆土師清太夫等書式を誤るを以て自分指扣を行ふ。(三九〇)
○十八日前田治脩平尾邸に至りて狩獵を試む。(三九〇)
○廿一日前田治脩が參議拜任の口宣受領の爲の使者竹田掃部金澤を發す。(三九一)
○廿四日前田治脩增上寺に詣づ。(三九一)
○廿七日金澤近傍の町藏給人米を用米として引取らんとするものはその所要額を正月中に申渡し置くべきことを命す。(三九二)

二月

○二日德川家齊、前田治脩に鶴を贈る。(三九二)
○六日佐久間輿左衞門の若黨小者等博奕の嫌疑を以て吟味せらる。(三九三)
○十一日前田治脩平尾邸に狩獵を試む。(三九四)
○十三日前田治脩再び平尾邸に狩獵を試む。(三九四)
○十六日前田治脩、重教夫人等を招請し、大聖寺侯前田利考亦之に臨む。(三九五)
○二十日百姓の變死したるものゝ跡目に關する取扱方を令す。(三九五)
○廿一日前田治脩初めて德川家齊の直判内書を受く。(三九六)
○廿二日藩侯に供奉して歸國するものゝ土産物を齎

三月

すことを禁ず。(三九七)

○廿四日岩田是五郎、前田治脩昇任の口宣を齎して江戸に歸る。(三九八)

○六日前田重敎夫人鳥取侯の金杉邸に赴く。(四〇一)

○七日前田齊敬金澤を發して江戸に向ふ。(四〇一)

○十三日前田治脩、徳川竹千代髮置の祝儀を受く。(四〇二)

○十五日大聖寺侯前田利考、前田治脩を本郷邸に訪ふ。(四〇三)

○十八日藩侯に供奉して歸國するものに扶持方を増貸す。(四〇五)

○十九日前田齊敬江戸に着す。(四〇五)

○二十日前田治脩湯島の聖堂に詣づ。(四〇六)

○廿一日前田治脩東叡山及び增上寺に詣づ。(四〇八)

○廿八日馬廻組馬場孫三の嫡子藤左衛門金澤より出奔す。(四〇八)

○廿八日前田治脩就國の暇を受く。(四〇九)

○河北郡大根布村の位置を轉ぜんことを出願し、尋いで之を許さる。(四一〇)

四月

○朔日前田治脩柳營に登りて就封の辭見す。(四一三)

○四日前田治脩江戸を發し歸國の途に上る。(四一四)

○六日小松定番馬廻島卷内藏太、その裁許人を手討とし次いで自殺す。(四一六)

○八日前田齊敬東叡山及び傳通院に詣づ。(四一六)

○十六日前田治脩金澤に歸城す。(四一六)

○二十日前田齊敬東叡山に詣づ。(四一七)

○廿二日前田齊敬增上寺に詣づ。(四一七)

○廿四日御馬廻組有澤數馬蟄居を命ぜられ、家傳の軍書は之を押收せらる。(四一七)

○廿五日大聖寺侯前田利考歸邑の暇を給はりたるを以て本郷邸を訪ふ。(四一八)

○廿六日前田治脩石川郡粟ケ崎に放鷹す。(四一九)

○廿七日前田重敎夫人兩國筋に船遊を行ふ。(四一九)

○廿八日大聖寺侯前田利考將に歸邑せんとするを以て本郷邸を訪ふ。(四一九)

○晦日前田齊敬增上寺に詣づ。(四二〇)

五月

○七日本日以後前田治脩屢〻學校に臨む。(四二一)

○七日前田吉德の女穠姫江戸品川筋に行歩を行ふ。(四二一)

○八日前田齊敬東叡山に詣で、押足輕林唯右衛門等尾張侯の從者と衝突す。(四二二)

○九日馬場藤左衛門越前に於いて捕縛せらる。(四二三)

○十日馬場孫三江戸より歸國を命ぜらる。(四二三)

○十一日大聖寺侯前田利考歸邑の途金澤城に登る。(四二四)

六月

○七日馬場藤左衛門禁牢に處せらる。(四二四)

○十七日江戸邸內なる諸士の貸小屋に自ら窓を穿つことを禁ず。(四二五)
○十八日大小將組池田左平男色のことによりて遠島を命ぜらる。(四二六)
○廿三日馬場藤左衛門の姉聟坂井權九郎及び平田磯次郎指扣を命ぜらる。(四二八)
○廿五日徳川竹千代の卒去を告げらる。(四二九)
○晦日徳川竹千代卒去の報金澤に達す。(四三〇)
○御扶持人等、甲子の制に關する諮問に答ふ。(四三一)

七月 ○二日例によりて傳通院・廣徳寺等に施餓鬼料を寄進す。(四三二)
○四日羽咋郡生神村の肝煎等耕作に出精するを以て賞賜せらる。(四三二)
○五日鳴物遠慮の際に於ける虫送太鼓の處置に關し郡奉行の意見を徴す。(四三三)
○六日前田治脩、增上寺へ徳川竹千代の法會に對する香奠を贈る。(四三四)
○十二日抹野元凱の高弟矢野幸助、前田齊敬を診せん爲め本郷邸に着す。(四三五)
○學校構內に天神社を造營するを以てその神職を命す。(四三五)

八月 ○三日前田重教の生母實成院の三十三回忌を實成寺に行ふ。(四三六)
○十三日江戸詰の諸士にして困窮の者に扶持方を繰上げ貸與すべきことを告ぐ。(四三七)
○廿四日御算用場奉行等、小頭の職務に關する心得を示す。(四三九)
○廿五日先に入牢を命ぜられたる馬場藤左衛門の姉聟坂井權九郎等の指扣を免除す。(四五〇)
○變死人の檢使として出張する與力を饗應することの禁令を嚴守せしむ。(四五一)
○鹿島郡武部村の彌左衛門、野毛及び無地の意義に關して諮問に應ふ。(四五二)
○投網を以てする漁獵を禁止する區域を告ぐ。(四五二)

九月 ○十五日前田齊敬登營して徳川家慶の世嗣となりたることを告げらる。(四五三)
○十七日前田治脩、酒井忠以と交誼を復舊したることを告ぐ。(四五四)
○廿一日前田治脩、石川郡宮腰に赴き火矢の技を見る。(四五四)
○廿六日前田治脩金澤郊外大豆田口に漁獵す。(四五七)
○廿七日江戸にて新番組渡邊治左衛門に命じ、小笠原平兵衛に就いて禮法を學ばしむ。(四五七)
○廿八日前田齊敬登營して徳川家慶の世嗣となりたることを祝す。(四五八)
○藤內頭と非人頭との爭議に關し郡奉行等その意見

を上申す。(四五九)

○助教新井升平の學校に於ける勤務を緩くし、自己の學問を勵むべきことを命ず。(四六二)

十月

○四日前田治脩金澤郊外大豆田口に漁獵を行ふ。(四六三)

○七日本郷邸御廣式に於いて前田重教の女穎姫の爲に女芝居を行はしむ。(四六三)

○十四日與力植村内藏太、人持組伴多宮に御預に處せらる。(四六三)

○廿一日前田齊敬平尾邸に赴き鳥構を行ふ。(四六五)

○廿五日富山侯前田利謙の江戸上邸燒失す。(四六五)

○金澤の商人泉屋又右衛門の女太與孝行を以て賞せらる。(四七〇)

○御扶持人十村の追込に處せられたる際、御扶持高の處分に關して定む。(四七一)

十一月

○二日與力植松内藏太先に大津太右衛門を殺害したるを以て切腹を命ぜらる。(四七二)

○四日前田齊敬、德川家齊の放鷹によりて獲たる雁を贈らる。(四七八)

○十一日前田治脩幕府に呈する書の字句を誤るを以て指扣伺の使者を江戸に發せしむ。(四七九)

○十八日幕府に提出すべき書札の執筆を誤りたる士師清太夫等處罰せらる。(四八一)

○十九日前田治脩指扣の伺書を幕府に提出す。(四八三)

○二十日幕府前田治脩の指扣を要せざることを令す。(四八五)

十二月

○十二日德川家慶の通稱に觸るゝ人名を改むべきことを令す。(四八七)

○十二日前田治脩に婚約したる俊姫の名を正姫と改む。(四八七)

○十三日長谷川準左衛門明倫堂都講を命ぜらる。(四八八)

○廿一日德川家齊夫人歲暮の祝儀を前田治脩に贈る。(四八九)

○廿八日前田齊敬前髮を除く。(四八九)

○廿八日吏に三ケ年間の省略を命ず。(四九〇)

○十村及び手代・番代等、御算用者の私宅に至りて公用を議することを禁ず。(四九一)

是歲

○能美郡澤村金山の發掘を停止す。(四九二)

寛政六年　甲寅　皇紀二四五四

正月

○朔日前田治脩金澤城に於いて年頭の禮を受く。(四九三)

○朔日江戸に於いて太刀獻上の使者を柳營に上らしむ。(四九三)

○二日前田齊敬登營して年頭の拜賀を行ふ。(四九四)

○三日前田齊敬東叡山に詣づ。(四九四)

○四日遊行上人滯錫中その使僧が登城年頭を祝する例を止め、年寄中御用番の宅に於いてせしむ。(四九五)
○五日前田齊敬增上寺に詣づ。(四九五)
○十五日前田治脩使を江戸に派して當年頭前田齊敬に時服を賜はりたるを謝せしむ。(四九六)
○廿九日前田治脩の養女藤姫病を以て出府の期を延ぶ。(四九六)
○廿九日前田治脩儉約の爲に鷹の飼養を廢し馬匹の數を減ぜしむ。(四九七)
○廿九日藩の財政困難なるを以て收入と均衡を得しむる爲年寄等勝手方御用を勤務す。(四九八)
○初めて扶持を與へられ又は加增せられたる十村は、發令の日によりて支給すべきことを定む。(四九九)

二月

○七日江戸詰人に扶持方增借を出願することなかるべきを告ぐ。(五〇〇)
○十三日今年より諸士の知行借上の增率すべきことを命ず。(五〇二)
○十五日算學者本保十太夫歿す。(五〇三)
○十八日江戸詰の者の服裝・參會等に關する前令を嚴守すべきことを告ぐ。(五〇四)
○十九日藩侯に供奉して出府する者の會所銀借用額を努めて減少すべきを命ず。(五〇五)
○二十日廻來の遊行上人金澤より出發す。(五〇六)
○廿七日火の元の要心を嚴にすべきことを諭す。(五〇七)
○諸士に財政整理に關して意見あるものは之を上申すべきことを命ず。(五〇八)
○欠落人ある時はその請人等必ず法によりて行衞を探索すべきことを告ぐ。(五〇九)
○猪を捕獲したる者は四季共に褒美米を與ふべきことを告ぐ。(五一二)
○儉約實行の爲單に流例による金銀の支給を廢すべきことを告ぐ。(五一三)
○藩の財政困難なるを以て江戸・京・大阪の詰人交替を秋季に延期することを告ぐ。(五一三)
○町奉行等金澤町中に對して儉約の旨趣を述べ、妄に消極に陷ることなかるべきを諭す。(五一四)
○諸郡町村に財政困難の情を告げ、專ら儉約の勵行を命ず。(五一七)
○高澤平次右衞門政務の改革に關する意見書を上る。(五一九)

三月

○朔日德川家齊の前田治脩に贈れる鶴金澤に着す。(五二一)
○五日金澤城二ノ丸御進物所の金銀盜難に罹る。(五二二)
○七日前田治脩病によつて出府の期を延ぶ。(五二四)
○九日御郡方に於ける荷物改所を廢止す。(五二五)

○十二日道中供奉の士の行裝を簡素にすべきことを令す。(五二五)

○十四日人持組及び頭分の士を城中に集め儉約實行に關する條項を示す。(五二六)

○十九日御勝手方の省略に關し町人の守るべき心得を令す。(五三三)

○廿三日江戸詰人の扶持代及び從者の人數を減すべきことを告ぐ。(五三四)

○廿五日江戸詰の諸士に町人等より借銀をなすを戒む。(五三九)

○學校に於いて使用する四書五經の訓点を一定すべきことを命ず。(五三九)

○公事場より檢使を發する場合と所檢使にて檢分する場合との區別を定む。(五四〇)

四月

○五日天德院に於いて前田光高の百五十回忌法會を執行す。(五四一)

○十一日先に幕府領より加賀藩領に轉じたる能登の諸村に本年以降定免法を施行すべきことを定む。(五四一)

○十三日金澤元如來寺町嬬よし、小松大文字町宇都宮正安娘すゑ二人篤行を以て賞せらる。(五四二)

○廿七日前田治脩金澤を發して參覲の途に上る。(五四三)

○領内の川除普請を當分十村等の引受となさしむ。(五四四)

○郡方百姓に關する制令にして近時輕忽に附せらるゝものを列擧し之を嚴守せしむ。(五四五)

五月

○九日前田治脩江戸に着す。(五五一)

○十三日德川家齊使を遣はして前田治脩の參覲を勞す。(五五二)

○十四日火災の際無用の者の現場に群集するを禁す。(五五三)

○十五日前田治脩登營し參覲の禮を行ふ。(五五三)

○十六日省略方御用別役所を開始す。(五五四)

○江戸に於ける諸士の扶持方を減ず。(五五四)

六月

○六日他國居住の者に給する合力米等十分の一を減ず。(五五五)

○十二日寶圓寺に於いて前田吉德の五十回忌法會を營む。(五五六)

○十三日前田修理の家來增田助左衞門・酒井貞助二人鬪爭して相殺傷す。(五五六)

○十九日大聖寺侯前田利考參覲の途金澤城に登る。(五五六)

○前田重教夫人の知行米を減額すべきことを定む。(五五八)

○石川郡の十村、倉谷四ヶ村の沿革を郡奉行に上申

す。(五六〇)

七月 ○十二日江戸に於ける富山侯及び大聖寺侯邸、並に旋風の害を受く。(五六一)
○十五日右筆不破半六の養子茂一郎亂心して組外堀才之助を傷く。(五六二)
○十七日 諸士に命じ絹・紬以上の 衣類を着用することを禁ず。(五六三)
○十八日成田勘左衞門公金を私せしを以て牢揚屋に錮せらる。(五六四)
○廿四日旱魃に付妄に水を消費すること勿らしむ。(五六五)

八月 ○朔日二條治孝の使者 金子を 借らんが爲 金澤に來り、尋いで江戸に赴く。(五六六)
○二日前田治脩の養女藤姫江戸に發輿の期を定む。(五六七)
○十四日浪人吉村猪之丞等河北郡淺野村穢多の家に集り酒宴を催すを以て禁牢に處せらる。(五六八)
○十七日博奕・賭の諸勝負を禁ずるの幕令を領内に布く。(五六八)
○廿七日金澤城尾坂門の石垣を修築する以て通行を禁ず。(五七〇)

九月 ○四日前田治脩の養女藤姫金澤を發して 江戸に向ふ。(五七〇)
○六日前富山侯前田利與卒するの報金澤に達す。(五七一)
○廿六日高松侯松平賴儀の使者來りて藤姫入輿の期を告ぐ。(五七二)
○廿七日前田齊敬、徳川家慶の 紅葉山參詣に 豫參す。(五七二)

十月 ○八日御歩谷口彌八郎、地中を穿ちて赤梅檀を得。(五七三)

十一月 ○朔日藤姫、松平賴儀より結納を受く。(五七三)
○十九日藤姫高松侯松平賴儀に嫁す。(五七四)
○廿二日高松侯松平賴儀本鄕邸に智入の儀を行ふ。(五七四)
○廿九日前田宗辰夫人梅園院の五十回忌法會を江戸廣德寺に執行す。(五七七)

閏十一月 ○朔日前田齊敬、治脩に代り登營して藤姫の成婚を謝す。(五七七)
○七日金澤に於いて諸士に藤姫の婚禮終れることを告ぐ。(五七八)

十二月 ○朔日曆書に日蝕あることを記すといへども金澤に於いて之を見ず。(五七九)
○七日二條治孝の使者金澤に來り緣組を求む。(五七九)
○九日嫁娶に際しその家に石を投ずるを禁ず。(五八〇)
○十一日徳川家齊夫人歲暮祝儀を前田治脩に贈る。

(五八一)

○廿八日道路の雪を除きて交通を便にすべきを諭す。(五八二)

○九十歳の者に扶持を與ふる際その子孫をして請書を提出せしむべきを命ず。(五八二)

是歳

○無住の寺院は之を庵寺たらしむべきことを命す。(五八三)

○從來一ヶ月兩度に上納すべき年貢米の歩入を晦日一次とすることに改む。(五八四)

寛政七年　乙卯　皇紀二四五五

正月

○朔日前田治脩登營して年頭の儀を行ふ。(五八五)

○二日前田齊敬登營して拜賀す。(五八六)

○三日前田治脩東叡山に詣づ。(五八六)

○廿一日德川家齊、前田治脩に鶴を贈る。(五八六)

○晦日他國詰人の歸國せんとするものは、扶持方代の過不足を出發以前その所に於いて精算すべきを命す。(五八六)

二月

○十三日江戸詰の者に餞別し又は歸國の際土産物を齎すを禁ずる前令を嚴守せしむ。(五八七)

○廿四日金澤神護寺に於いて德川家基十七回忌の法會を執行す。(五八八)

○廿四日前田治脩、德川家齊の東叡山參詣に豫參することを辭す。(五八八)

○能登の各浦に於いて濡米に潤役を徵することを許す。(五八九)

三月

○六日金澤城尾坂門側の石垣修築成るを以て、本日より通行を許す。(五九〇)

○九日江戸詰の者に扶持代を增貸すべきを告ぐ。(五九一)

○十一日盛岡侯南部信敬本鄕邸を訪ふ。(五九一)

○十三日前田治脩就封の暇を受く。(五九二)

○十三日御先手物頭上月數馬、二條家に使者として金澤を發す。(五九二)

○十五日前田治脩就封の辭見す。(五九三)

○十七日二條治孝の使者西村東市正金澤より歸る。(五九三)

○十九日前田治脩江戸を發し歸國の途に上る。(五九三)

○往還道路筋に百姓の家屋を建築する手續を命す。(五九四)

○闕所等を命ぜられたる百姓の農道具は跡高作配の者に交附すべきことを定む。(五九五)

四月

○朔日前田治脩金澤城に歸着す。(五九五)

○六日能登奧郡の獵師等に、收入の一部を蓄積することを郡奉行より命す。(五九六)

○十五日二條治孝の使者西村東市正等再び金澤に來る。(五九九)

五月 ○九日大聖寺侯前田利考歸邑の途金澤城に登る。（六〇〇）
○十一日前田齊敬登營して大坂落城の記念祝賀能を觀る。（六〇三）

六月 ○十五日前田重教夫人淺草より兩國橋に舟遊す。（六〇四）
○十九日前田齊敬平尾邸に赴く。（六〇四）
○二十日前田齊敬上野の德川吉宗廟に參詣す。（六〇四）
○廿七日前田齊敬江戸に卒す。（六〇五）
○前田齊敬行狀（六〇六）
○廿八日德川家齊、使者を以て前田齊敬の病を問はしむ。（六一七）
○晦日齊敬の喪を發す。（六一七）

七月 ○朔日前田齊敬罹病の報金澤に達す。（六一七）
○二日前田齊敬の病急なるの報金澤に達す。（六二〇）
○四日前田齊敬の危篤の報金澤に達す。（六二一）
○四日德川家齊使者を派して前田齊敬の卒去を弔せしむ。（六二四）
○五日前田治脩、齊敬の葬儀を歴世藩侯に准じて執行せんとすることを告ぐ。（六二四）
○七日前田齊敬卒去の報金澤に達す。（六二五）
○七日江戸に於いて前田齊敬の法號を假に曹溪院と稱す。（六二六）
○八日前田齊敬卒せしを以て普請・鳴物以下遠慮の日數を定む。（六二七）
○九日加賀三郡の郡奉行等、前田齊敬の忌中なるに拘らず稻蟲驅除の爲に太鼓を打たしめんことを請ふ。（六二八）
○十日前田齊敬の法諡を觀樹院と稱す。（六二九）
○十四日盂蘭盆中の展墓を停止し、且つ藩侯の忌中は近習諸士に月代を剃らざらしむ。（六二九）
○廿二日前田齊敬の靈柩着後、天德院に於ける諸士の服裝を定む。（六三一）
○廿六日前田齊敬の廟所豫定地の見分を行ふ。（六三二）
○算用場奉行藩の財政補塡の方法に關し稟議す。（六三三）

八月 ○七日前田齊敬の靈柩江戸を發す。（六三七）
○十四日昨今兩日江戸廣德寺に於いて前田齊敬の中陰法會を執行す。（六三九）
○十四日鹿島郡高畠村百姓儀兵衛の妻三子を生む。（六四〇）
○廿二日前田齊敬の靈柩金澤天德院に着す。（六四〇）
○廿五日前田齊敬の葬儀を天德院に行ふ。（六四二）
○廿八日今日より三日間、天德院に於いて前田齊敬の中陰法會を執行す。（六四三）
○前田齊敬の葬馬飼育の希望者を加州三郡の百姓に

薨る。（六四四）

九月

○七日藩内に大赦を行ふ。（六四五）

○十三日前田齊敬の廟所を見分す。（六四七）

○十三日天徳院の出家二十餘人施物の分配に不心服の爲退去す。（六四七）

○廿二日前田齊廣に對し紀州侯德川治貞より緣組を求められたるを謝絶することに決す。（六四八）

○廿九日先に前田齊敬卒去の報を齎したる早打使者山崎彌次郎にその旅行遲着の狀を上申せしむ。（六五〇）

○藩の非人小屋に窮民を收容する手續を改む。（六五二）

十月

○二日小松詰馬廻の士中に學問流行するを以てその講師たる者の件を議す。（六五五）

○五日能美郡上吉谷村肝煎八右衛門、同村百姓淸八後家いう二人篤行を以て賞せらる。（六五六）

○六日前田治脩その子齊廣の今年十六歲となれることを幕府に上申す。（六五七）

十一月

○三日出羽の儒原敗造をして大學を明倫堂に講ぜしむ。（六五八）

○九日前田齊廣をして廣式より表住居に轉ぜしむ。（六五八）

○十二日前田宗辰の五十回忌法會を天德院に執行す。（六五八）

○十四日非人小屋に再收容する窮民の手續に關し通牒す。（六五九）

○廿七日前田齊廣未だ痘を憂へざるを以て、家族に該病者を有する者の登城を遠慮せしむ。（六六一）

○廿九日鶴見平八・林慶助二人明倫堂助教を命ぜらる。（六六一）

十二月

○十一日自今金谷御殿を金谷御屋敷と稱せしむ。（六六二）

○十三日金澤町奉行等、家柄町人越前屋次郎左衛門の御目見を許さるべき特權を回復せんことを稟請す。（六六三）

○廿六日前田齊廣金谷御屋敷に移る。（六六四）

○廿八日助教新井升平講釋を辭したるを以て差扣を命ぜらる。（六六五）

是歲

○鳳至郡宇出津野役銀上納增額を請うて許さる。（六六六）

○能美郡小松の鶴島屋七兵衛の女余所、金平屋佐平の女曾與、町人牛兵衛並に篤行を以て賞せらる。（六六七）

○能美郡三坂の農與三左衛門孝行を以て賞せらる。（六六八）

寛政八年　丙辰　皇紀二四五六

正月

○朔日前田治脩金澤城に年頭の禮を受く。（六六九）

○三日前田齊廣の病水痘と決す。（六七〇）

○十日前田齊廣の水痘癒ゆ。（六七一）

二月

○廿六日防火に就いて注意を促す。（六七二）

○四日この日以後前田治脩諸所に放鷹す。（六七二）

○十一日前田治脩遊獵して河北郡橫枕村に鶴を獲。（六七三）

○廿二日窮民の一たび非人小屋に收容せられたるものに證票を與ふることを定む。（六七四）

○廿六日物頭並土肥庄兵衞虛事を傳ふるを以て指扣を命ぜらる。（六七六）

三月

○六日前田齊廣、額直・袖留の儀を行ふ。（六七七）

○九日前田治脩、齊廣と共に石川郡粟ケ崎に遠乘を行ふ。（六七八）

○十一日前田治脩參覲延期を請ふ爲飛脚を發す。（六七八）

○廿三日大聖寺侯前田利考參覲の途金澤城に登る。（六七九）

○廿四日末期養子として年長又は遠緣の者を選定出願せざるべきを諭す。（六七九）

○廿八日前田治脩、齊廣を伴ひて石川郡宮腰に遠乘を行ふ。（六八一）

○廿八日馬廻組遠藤次左衞門の娘若黨の爲に誘拐せらる。（六八一）

○惡酒改良の方法を傳授すと稱する者若し入國せば之を捕縛すべきことを諭す。（六八二）

○勝手方役所を廢し改作奉行の兼職に復したるを以て十村等に配下村々の監督を怠らざるべきことを諭す。（六八三）

四月

○二日藩侯放鷹の際若年寄の供奉する件に關し先例を調査す。（六八五）

○二日幕府加賀藩に熊膽を献納すべきことを命ず。（六八六）

○三日十ケ年皆勤の諸士に賞詞を傳ふ。（六八七）

○四日前田治脩、齊廣を養嗣子たらしむるも簡易に待遇すべきことを命ず。（六八七）

○六日前田治脩金澤を發して參覲の途に就く。（六八八）

○六日大聖寺町に火災あり。（六九〇）

○八日諸橋權進等、前田齊廣の仕舞稽古御用を命ぜらる。（六九〇）

○廿五日前田治脩、紀伊侯德川治貞がその女聟姬と前田齊廣との緣組を承諾したることを告ぐ。（六九〇）

○公事場に於ける規程その外後例となるべき諸事を記錄して上申す。（六九一）

五月

○朔日前田治脩登營して參覲の禮を行ふ。（六九二）

○八日本月朔日前田治脩登營して參覲の禮を行ひたりとの報金澤に達す。（六九二）

○八日妾の死後妾腹に出生したる男兒、亡妾の養子

たり得るや否やの伺に關して指令す。(六九三)
○十日漁業を奨勵して漁網等の數を減少せざらしむべきことを諭す。(六九四)
○十五日前田治脩の江戸に着したることを諸士に告ぐ。(六九五)

六月 ○三日小松城代等龍手土蔵の修理成れることを報す。(六九六)
○七日犀川・淺野川の川除に塵芥を捨つべからざる等のことを諭す。(六九七)
○廿一日鷹司政熙、荻野元凱を介して更に前田齊廣のと緣組を求めしむ。(六九八)
○廿二日前田齊廣に對し鷹司政熙より申込みたる緣談謝絶を議す。(六九九)
○廿九日大德院に於いて前田齊敬の一周忌法會を執行す。(七〇〇)

七月 ○廿一日大小將高田牛之助詐僞取財の嫌疑を得たるも自ら取調を請はざりしを以て逼塞を命ぜらる。(七〇一)
○廿八日河原山關所備付の鐵炮破損せるを以て交換を請求す。(七〇一)

八月 ○十五日金澤に於いて前田齊廣の緣談を變更したることを告ぐ。(七〇二)

九月 ○二日前田治脩の養女藤姫歿す。(七〇三)

○七日前田治脩の養女藤姫重病の報金澤に至る。(七〇三)
○八日前田治脩の養女藤姫逝去の報金澤に達す。(七〇四)
○十九日前田治脩幕府に齊廣を養嗣子たらしめんとの願書を提出す。(七〇五)
○廿四日幕府前田齊廣の出府を命す。(七〇七)
○廿八日前田齊廣、尾張侯德川宗睦の養女琴姫と緣組を約す。(七〇七)
○廿八日御馬廻組村上定之助先に喧嘩の際その處置緩漫なりしを以て遠慮を命ぜらる。(七〇八)
○御部方に於いて老牛馬を買集め上方に賣却するを禁す。(七一一)

十月 ○七日金澤附近の山林を盜伐し又は損傷すべからざることを告ぐ。(七一二)
○十六日前田治脩の使者金澤に着して齊廣の速に出府すべきことを告ぐ。(七一三)
○廿六日前田齊廣江戸に向ひて金澤を發す。(七一四)
○石川郡宮腰の中山主計、漁業税に關する慣習を上申す。(七一四)

十一月 ○朔日前田齊廣を呼ぶに樣付を以てせしむ。(七一五)
○朔日前田齊廣松平氏を冒す。(七一六)
○九日諸士に下街道を經て江戸に至る途中に於ける

人馬供給の狀を上申せしむ。(七一六)
○十一日前田齊廣江戸に着す。(七一七)
○十一日本鄕邸內前田齊廣の居る所を北御居宅と稱せしむ。(七一八)
○十四日前田治脩、齊廣を養子とすることを許さる。(七一八)
○十八日前田齊廣の江戸に着したる報金澤に達す。(七一九)
○十八日明年年頭に於いて諸士の獻上すべき太刀代及び馬代銀の認方を告ぐ。(七一九)
○廿一日金澤に於いて前田齊廣の松平氏を冒すことの許可を得たる旨を告ぐ。(七二〇)
○廿三日德川家齊使を遣はして前田治脩が齊廣を養子としたることを祝す。(七二二)
○廿五日前田治脩及び齊廣、物を德川家齊に獻じて恩を謝す。(七二三)
○廿八日金澤に於いて諸士に前田治脩が齊廣を養子としたることを告ぐ。(七二三)
○廿九日幕府、前田齊廣が尾張侯德川宗睦の養女琴姫と婚を約することを許す。(七二四)
○羽咋郡今濱村の八左衛門、革多の旅宿を營むことを許さる。(七二五)

十二月 ○四日前田齊廣、名を又左衛門利厚と稱す。(七二六)
○七日金澤に於いて德川家齊が前田齊廣に祝儀に物を賜はりたること等を告ぐ。(七二七)
○十一日金澤に於いて前田齊廣の緣組を許されたることを告ぐ。(七二八)
○十五日金澤に於いて前田齊廣の改名したることを告ぐ。(七二八)
○十五日前田齊廣柳營に上り初めて德川家齊に謁す。(七二九)
○廿五日儉約實行の期本年を以て終るべきも尙當分舊の如く心得べきことを告ぐ。(七三〇)
○廿九日金澤に於いて前田齊廣が初めて德川家齊に拜謁したることを告ぐ。(七三一)
○晦日前田齊廣の生母を貞琳院殿と稱すべきことを命す。(七三二)

寛政九年　丁巳　皇紀二四五七

正月 ○二十日金澤の町奉行醫師須貝玄徹の僕久七の篤行を賞す。(七三三)
○晦日金谷御屋敷を改めて金谷御殿と稱せしむ。(七三六)

二月 ○九日前田齊廣柳營に登り、正四位下左近衛權少將筑前守に任ぜられ、前名利厚を改む。(七三六)
○十九日金澤に於いて先に前田齊廣の柳營に登りて權少將に任ぜられたることを告ぐ。(七三九)

〇二十日諸士に前田齊廣と同名又は同訓の名を改むべきことを命ず。(七四〇)

〇廿二日金澤に於いて前田治脩の養女藤姬の忌日を改めたることを告ぐ。(七四一)

〇廿三日前田齊廣佳節及び月次に登營することを許さる。(七四一)

〇廿八日前田齊廣初めて月次登營を行ひ、且つ前髮を除去するの儀を行ふ。(七四二)

〇廿八日前田齊廣任官せしを以て口宣受領の使者及び日光東照宮の代拜を命ず。(七四二)

三月

〇三日前田齊廣初めて佳節の登營を行ふ。(七四二)

〇四日前田治脩・齊廣登營して、德川家慶元服の祝賀能を觀る。(七四三)

〇四日金澤城橋爪門外の橋梁を修繕するを以てその通行を禁ず。(七四三)

〇四日村井又兵衛長穉の諱は前田齊廣と一字同訓なるも之を避けざるべきことの許容を求む。(七四四)

〇八日前田齊廣任官せしを以て諸士に祝儀を獻るべきを命ず。(七四四)

〇廿一日前田治脩就封の暇を受く。(七四六)

〇廿八日先に領内の川除普請を十村に委任したるを改めて藩の直營とす。(七四六)

四月

〇朔日前田治脩登營して就國の辭見す。(七四八)

〇朔日例に依て今明日觀音院の神事能を行ふ。(七四八)

〇四日前田治脩江戸を發し就封の途に上る。(七四九)

〇十四日儒者石黒源五郎、前田齊廣の師範たるを以て知行を加增せらる。(七五一)

〇十五日前田治脩金澤城に歸着す。(七五二)

五月

〇朔日前田治脩石川郡粟ヶ崎村に放鷹す。(七五二)

〇二日大聖寺侯前田利考歸邑の途金澤城に登る。(七五三)

〇廿八日讃岐の儒溪世尊明倫堂に於いて大學を講す。(七五三)

〇前田齊廣の通名筑前守と類似の名稱は之を改むるを要せざることを告ぐ。(七五四)

六月

〇十四日前田治脩文武學校に臨む。(七五五)

〇十五日前田治脩本日以後經武館に於いて重臣等に武技を講ぜしむ。(七五六)

〇十五日陪臣の經武館に出席することを許さる。(七五七)

〇十八日町奉行の職權を以て孝子を賞するが爲永年に亙る褒美の賜與を禁ず。(七五七)

〇廿九日天德院に於いて前田齊敬の三回忌法會を執行す。(七五八)

〇前田治脩、金澤の醫師須貝玄徹の義僕久七の篤行を賞す。(七五九)

七月 〇諸寺庵の法に違ふ者あるを戒む。(七五九)
〇十三日前田治脩暑氣甚しきを以て老臣に熟瓜を饗す。(七六〇)
〇廿六日金澤城内時鐘の鑄造成る。(七六一)
〇京都紫野芳春院の位牌殿を再建せしむ。(七六二)

閏七月 〇八日尾張侯徳川宗睦その女前田齊廣に嫁せしむべき時期を照會せるを以て之が回答に關し議す。(七六三)
〇二十日越前の鍼醫市橋帶刀に金澤より立退を命す。(七六五)

八月 〇十三日能美郡今江潟・木場潟等に於いて諸士の漁撈を行ふことを禁す。(七六六)
〇十四日能美郡別宮口留御用進士權兵衞、郡内御林の沿革に就きて上申す。(七六七)
〇十四日前田治脩經武館へ臨み老臣以下の乘馬を觀る。(七七一)
〇十九日前田治脩小松城を巡見せんとすることを告ぐ。(七七二)
〇廿五日寶生大夫、前田齊廣の師範御用を勤むるを以て合力扶持を給せらる。(七七三)

九月 〇十六日十村に與ふる扶持高の土地選定に關する規程を定む。(七七三)
〇十八日前田治脩小松に赴き次いで城内及び附近を巡見す。(七七五)
〇廿一日前田治脩金澤城に還る。(七七七)
〇廿二日能登口郡に猪狩の便を得しむるが爲山林の下苅を命す。(七七七)
〇廿九日時鐘を撞き誤りたる足輕指扣を命ぜらる。(七七八)

十月 〇廿八日諸士困窮するを以て、役・出銀以外上納の期を緩くすることを告ぐ。(七七八)

十一月 〇二日御扶持人十村・十村等の序列を改定す。(七七九)
〇廿三日本多悠々齋の喪を發す。(七八〇)
〇無人島に漂流したる鳳至郡鹿磯村市之丞等金澤に歸着す。(七八二)

十二月 〇三日藩侯の鷹場に入りて捕鳥するものあるを戒む。(七九四)
〇八日來年頭の儀式は寛政六年省略を行ひたる以前の法に據るべきことを告ぐ。(七九四)
〇十六日本年に限り増借知の分を諸士より徴收せざるべきことを告ぐ。(七九五)
〇十七日諸士に貸銀を許すことを告ぐ。(七九八)
〇諸士の諸方御土藏に返上すべき借銀年賦を當年限り容赦することを告ぐ。(八〇〇)
〇一季居奉公人の欠落したる時に其の主人より公事場に申告すべきことを命ず。(八〇一)

寛政十年　戊午　皇紀二四五八

正月 ○朔日前田治脩金澤城に於いて年頭の賀を受く。(八〇二)
○二日前田齊廣、年頭祝賀の爲初めて登營す。(八〇三)
○十六日城門の鎖鑰破損したる場合の取扱に就いて令す。(八〇三)
○廿四日徳川家齊の前田治脩に贈りたる鶴金澤に達す。(八〇四)
○前田治脩羽咋郡大島村に漂着せる蠵龜を見る。(八〇四)
○百姓の切高・讓高等に關する特殊の場合の取扱方を改作奉行より指令す。(八〇五)

二月 ○朔日今日より三日まで前田利家の二百回忌を寶圓寺に執行す。(八〇八)
○十日前田利家の二百回忌法會を終りたるを以て赦を行ふ。(八一〇)
○十三日前田綱紀の子雅十郎の百回忌法會を金澤寶圓寺に營む。(八一一)
○廿一日能登總持寺に安置する前田利家の木像の修理を命ず。(八一一)
○廿八日本多安房守敍爵を謝する爲江戸に向ひて金澤を發す。(八一三)
○廿九日珠洲郡法住寺の住僧年頭御禮の際不敬の行爲ありたるを以て押隱居を命ぜらる。(八一三)

三月 ○七日前田治脩先に徳川家齊より贈られたる鶴を調理して老臣に頒つ。(八一四)
○八日前田治脩十三日を以て參覲發途の期と定め、次いで之を延ぶ。(八一四)
○十一日東西本願寺の使者金澤城に登りて、前田治脩の厚誼に對し謝す。(八一五)
○廿三日大聖寺侯前田利考參覲の途金澤城に登る。(八一七)
○諸郡御扶持人及び十村等にその管轄の巡視を懈ることなかるべきを告ぐ。(八一八)
○大聖寺藩の照會に應じ、加賀藩の士が大聖寺關所を通過する際の作法を告ぐ。(八二〇)

四月 ○四日前田治脩金澤を發して江戸に赴く。(八二一)
○廿二日前田治脩江戸に着す。(八二一)

五月 ○十一日前田齊廣歸國の暇を受く。(八二二)
○十五日金澤に於いて諸士に前田治脩の着府を告ぐ。(八二四)
○十九日前田齊廣江戸を發し歸國の途に上る。(八二五)
○廿二日前田吉德の子利寶の三十三回忌法會を寶圓寺に營む。(八二五)
○廿三日前田吉德の女鍋姫江戸に歿す。(八二六)
○廿三日金澤に於いて高田藩の士一時踪跡を失す。(八二六)

六月
〇廿五日前田吉德の女暢姫の喪を發す。(八二七)
〇朔日前田齊廣金澤に着し金谷御殿に入る。(八二八)
〇六日德川家齊、本書を以て前田齊廣に暢姫の逝去を弔す。(八二九)
〇十二日昨今兩日寶圓寺に於いて前田重教の十三回忌法會を執行す。(八二九)

七月
〇七日前田治脩出府の後初めて柳營に上る。(八二九)
〇十一日前田吉德の女暢姫の忌辰を改めたることを告ぐ。(八三〇)
〇十三日現時通用せざる古銀を交換すべき幕令を傳ふ。(八三一)
〇廿五日波吉三藏殺せられ、その下婢等冤罪により拷問を受く。(八三二)
〇廿八日本鄕邸内の貸小屋に落雷す。(八三三)

八月
〇十五日前田治脩と婚約せる大聖寺侯前田利道の女正姫の呼稱を改む。(八三四)
〇廿一日前田治脩、尾張侯德川宗睦の邸に臨む。(八三五)
〇廿五日石川・河北兩郡の用水等に釣魚を試むるもの丶作物を害することを禁ず。(八三五)

九月
〇八日德川家治の十三回忌法會を神護寺に執行す。(八三六)
〇十五日二ノ丸御殿に於ける講書は四書のみに限ることゝす。(八三六)
〇廿三日犀川に於いて漁撈する者は川師より見合札を受くべきことを告ぐ。(八三七)
〇廿八日尾張侯德川宗睦本鄕邸に臨む。(八三八)
〇廿八日前田治脩來春歸封の期を延べんことを幕府に請ふ。(八四七)
〇子なくして死したる百姓跡式の件に關して告ぐ。(八四八)

十月
〇六日前田治脩、水戸侯德川治保の邸に臨む。(八五〇)
〇十三日前田治脩、尾張侯德川宗睦の江戸外山邸を訪ふ。(八五〇)
〇廿八日出雲國大社勸化銀を上納すべきことを告ぐ。(八五〇)

十一月
〇四日德川家齊自ら放鷹して獲たる鴨を前田治脩に贈る。(八五一)
〇廿一日水戸侯德川治保、前田治脩に鹽鮭を贈る。(八五一)
〇廿六日石川郡八田村領海にて坊主鰐を獵す。(八五二)
〇廿八日百姓の緣組する手續に就いて令す。(八五三)

十二月
〇朔日切支丹類族の死亡を幕府に屆出づ。(八五四)
〇四日本鄕邸の長屋に於いて大小將春日斧人の若黨主人の金品を盜み尋いで死刑に處せらる。(八五五)
〇廿一日德川家齊夫人歲暮の祝儀を前田治脩に贈

る。(八五六)

〇廿二日前田重教の夫人等徳川家齊より黄金の祝儀を受く。(八五六)

〇廿七日江戸の詰人難澁するを以て金子を貸與すべきことを告ぐ。(八五六)

〇廿八日嵯峨法輪寺の勸化銀割當額を通牒す。(八五七)

〇煮賣・請酒を營業とすることを禁す。(八五八)

是歳　〇作事奉行等藩の御大工頭の手當に就いて商議す。(八五九)

寛政十一年　己未　皇紀二四五九

正月　〇朔日前田治脩柳營に上りて新正を賀す。(八六一)

二月　〇四日徳川家齊、前田治脩に鶴を贈る。(八六二)

〇十二日能登奥郡の十一ヶ所に酒小賣を許可す。(八六二)

三月　〇十一日前田齊廣金澤を發して江戸に赴く。(八六四)

〇廿六日前田齊廣江戸に着す。(八六六)

〇廿九日前田治脩就封の暇を受け、齊廣は出府を勞せらる。(八六六)

〇江戸に赴く者に餞別し又は江戸より歸る者の土產を齎らすを禁する所の前令を嚴守せしむ。(八六七)

四月　〇朔日前田治脩柳營に上りて就封の辭見し、齊廣は出府の禮を行ふ。(八六七)

〇四日前田治脩の養女正姫金澤を發して江戸に向ふ。(八六八)

〇二十日薩摩侯松平齊宣の依賴により能登の名所に付調査せしむ。(八六九)

〇廿二日正姫江戸に着す。(八六九)

〇廿四日藩侯一族の順位を定む。(八七〇)

〇廿八日前田治脩、正姫と婚儀を擧ぐ。(八七〇)

〇廿九日徳川家齊等、前田治脩の成婚を祝して物を贈る。(八七二)

五月　〇朔日前田治脩名代として富山侯前田利謙に柳營に上り婚儀の終れるを謝せしむ。(八七三)

〇四日前田治脩初めてその夫人を表居間に招請す。(八七五)

〇七日前田治脩歸封の途に上る。(八七五)

〇十一日金澤に於いて諸士に前田治脩の成婚を告ぐ。(八七七)

〇十四日大聖寺侯前田利考歸邑の途金澤に着す。(八七八)

〇十八日前田治脩金澤に着す。(八七九)

〇廿六日金澤に強震あり。(八八〇)

〇廿八日震災に乘じ諸物品を高價に賣捌くことを禁す。(九〇二)

六月　〇三日金澤に於いて地震以後特に火防を嚴にすべきことを告ぐ。(九〇四)

○三日珠洲郡折戸村に三子を生みし者あるを以て前例を調査して上申す。(九〇四)
○四日金澤強震の報江戸に達す。(九〇六)
○六日前田治脩、領國の地震を幕府に届出づ。(九〇七)
○廿八日御扶持人・十村等を訊問する爲盗賊改方に召喚することなかるべきを告ぐ。(九〇七)
○石川・河北等の郡民震後の役に供する爲人夫を上らんことを請ふ。(九〇九)

七月

○二日金澤に又強震あり。(九一〇)
○九日前田斉廣、治脩夫人の子養する所となることを告ぐ。(九一〇)
○廿二日諸郡神事祭禮等に際し、芝居見世物を催すことを禁ずる幕令を傳ふ。(九一一)
○能登の郡民震後の用に供する爲人夫賃銀を上らんことを請ふ。(九一三)
○諸士困窮するを以て役銀・學校銀以外當月の上納を免除す。(九一四)
○石川郡野田山に於ける前田利家以下の廟所地震に破壊せるを以て災前の狀を復す。(九一四)

八月

○六日年寄中席に於いて蝶鮫を觀覽せしむ。(九一七)
○六日大小將横目坂井小平その家に侵入したる賊を刺殺す。(九一七)
○廿二日御馬廻頭江守平馬の家來五人同時に逃亡す。(九一八)
○廿八日金澤に地震あり。(九一八)

九月

○十日家中の諸士に捕鳥の方法に關して禁止の條項を示す。(九一八)
○十七日金谷御殿に於いて帶佩を演ぜしめ年寄以下に觀覽を許す。(九一九)
○二十日石川・河北二郡にて鳥構を行ふ者の山林を荒廢せしむることを禁ず。(九二〇)

十月

○四日先の震災により諸士難澁するを以て本年借知の一部を返附すべきことを告ぐ。(九二一)
○九日前田治脩老臣等の借知返附を辭したるを嘉す。(九二三)
○廿四日年寄・家老等の蓮池亭にて紅葉を觀ることを許す。(九二四)
○廿九日諸士に返戻すべき借知米は代銀を以て之を支拂ふべきことを告ぐ。(九二七)

十一月

○震後の窮乏を救ふ爲足輕以下に借銀を許す。(九二八)
○六日前田治脩江戸聖堂の消防を命ぜらる。(九二九)
○一類附帳に記載せられざる者を養子とする場合に付内規を定む。(九三一)

十二月

○十日一季居の奉公人に主人より送狀を與ふるを禁止す。(九三二)
○廿二日德川家齊及び夫人、前田治脩等に歳暮の祝

儀を請ふ。（九三三）
○晦日富山侯前田利謙の上屋敷馬飼料所より出火す。（九三四）
○江戸詰の諸士困窮するを以て金子を貸附すべきを告ぐ。（九三五）
○魁勇閑長壽を以て前田治脩より小袖を與へらる。（九三六）
○石川・河北二郡に於いて、震災に罹りたるものに貸米を許す。（九三七）

寛政十二年　庚申　皇紀二四六〇

正月
○朔日前田齊廣江戸に於いて年頭の賀を受く。（九三八）
○二日前田齊廣登營して年頭を賀す。（九三八）

二月
○十日江戸に勤務する者の衣服等に關する前令を嚴守せしむ。（九三九）
○百姓の切高・取高・質入高等のことに關して令す。（九四〇）

三月
○五日御馬廻頭今井甚兵衞の家放火せらる。（九四五）
○十七日前田治脩明年を以て家を世嗣齊廣に讓らんとすることを告げ、御馬廻頭等之を諫止す。（九四五）
○十九日大聖寺侯前田利考參覲の途金澤城に登る。（九四七）

四月
○卅日日蝕なるを以てその終りたる後出仕せしむ。（九四八）
○卅日今枝内記の家來藤村八太夫傍輩を殺害して逃走自害す。（九四九）
○十七日金谷御殿の庭前に草廐を行ふ。（九五〇）
○二十日前田治脩、德川家光の百五十回忌なるを以て今枝内記をして日光山に代拜せしむ。（九五〇）
○二十日德川家光の百五十回忌法會を神護寺に行ふ。（九五六）
○廿一日前田齊廣東叡山に參詣す。（九五六）
○廿五日前田治脩金澤を發して參覲の途に就く。（九五七）

閏四月
○七日前田治脩江戸に着す。（九五九）
○十一日德川家齊使を遣はして前田治脩の參覲を勞し、且つ齊廣に歸國の暇を賜ふ。（九六〇）
○十五日前田齊廣登營して歸國の辭見す。（九六〇）
○廿一日前田齊廣江戸を發して歸國の途に就く。（九六〇）

五月
○朔日前田治脩江戸着後初めて柳營に上る。（九六二）
○朔日金澤に於いて前田治脩出府以後の事情を告ぐ。（九六二）
○六日前田齊廣江戸より金澤に歸る。（九六三）
○八日金澤城大手の石垣を修理するを以て今日より尾坂門の通行を禁ず。（九六四）
○十九日算用場奉行、先に幕府より川筋新開の件に

關し命ありたるを以て領内の事情を調査上申す。(九六五)
○廿八日諸郡村々に命じ、百姓二十年以上同一の田畑を耕作したるときは割替を行はしむ。(九六七)

六月 ○十三日犀川・淺野川に塵芥を棄つることを禁ず。(九六八)
○十三日家中の諸士困窮するを以て役銀・出銀以外の上納を免除し、諸借銀を永年賦とすべきことを令す。(九六九)
○十五日先に幕府領より加賀藩領に編入したる千路村等八ヶ村を定免收納とすべきことを命ず。(九七二)
○十六日諸士の借銀を永年賦辨償とするを以て藏縮取立の件に關して告ぐ。(九七五)
○二十日德川吉宗の五十回忌法會を神護寺に行ふ。(九七六)
○先に高方の事に關し諮問せられたるを以て十村等その協議による結果を上申す。(九七八)

七月 ○朔日諸郡の高方に關し調査すべき事項を通牒す。(九八二)
○九日前田斉廣の在國中は家族に疱瘡患者を有する者の登城を停止せしむ。(九八四)

八月 ○高方の取捌に關し改作奉行より更に委細を十村等に通牒す。(九八五)

九月 ○四日金澤野町郊端に於いて磔刑を行ふ。(九八八)
○十七日御扶持人十村にして追込の刑に處せらるゝことあるも尚扶持を給すべきことを定む。(九九〇)
○廿六日金澤城尾坂門の通行を許す。(九九二)

十月 ○家中の士自家飯米を賣拂ひたる差紙面を知行所の百姓に與へて現物を交附せしむることを禁ず。(九九二)

十一月 ○朔日古着及び襤褸營業者に御郡所より鑑札を與へらるゝことゝなりたるを告ぐ。(九九三)
○三日金澤城外紺屋坂門の通行を許し坂下門の通行を禁止することを告ぐ。(九九四)
○十一日前田治脩の子利命金澤に生る。(九九四)
○廿八日持筒頭伊藤津兵衛切手を僞造せしを以て御預に處せらる。(九九五)

十二月 ○十六日金澤城坂下門の通行を許すことを告ぐ。(九九五)
○廿八日金澤に於いて諸士に、長九郎左衛門を叙爵せしめたることを告ぐ。(九九六)
○廿九日諸士の屋敷周圍に於ける積雪を除き往來を便にすべきを命ず。(九九七)

是歳 ○石川郡の十村等村名の沿革に付上申す。(九九七)
○能登の字付御林を廢し一村一ヶ所の鎌留御林を設く。(一〇〇三)

就業

侯爵前田家囑託　日置　謙

昭和十一年十二月廿五日印刷
昭和十一年十二月三十日發行

（非賣品）

東京市目黑區駒場町八百六十一番地
著作者　侯爵前田家編輯部

東京市淀橋區東大久保町二丁目三百十七番地
發行者　石黑文吉

石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二
印刷者　高橋覺吉

石川縣金澤市高岡町九十番地ノ二
印刷所　明治印刷株式會社




EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03018 0566